不思議界記伝☆mao～デルクラル物語～

かばない１７

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議界記伝☆ｍａｏ～デルクラル物語～

【Ｎコード】
Ｎ７０３９Ｔ

【作者名】
かばない１７

【あらすじ】
１９６１年末　ローマ系アメリカ人　セルメダス・カイザーク１７世が
「ちょっと、アンデスに行く」と言ったきり行方を断った・・・
そして３週間後、古文書のような物を持ってアンデスの奥地で発見されました。
そしてそこに書かれてあったのは　マヤともギリシアとも違う神と妖精の国の物語であったと言う。
これはカイザークの孫、Ｓ・アニータが『デルクラル物語』として

まとめた（解読）物です。
かつてアイドルとして活躍していた少女たちが
廃校となった母校に集まるのですが　何者かの声に呼ばれ
ただ一つ残った古い体育館の中へ、そこはデルクラルと呼ばれた
神と妖精の国であった。
やがて彼女たちを，ガロスと言う魔人が襲うのですが
その時少女たちは思い出す、自分たちはこの世界で生まれてきたこと
未来の地球に脱出したこと
戦いは遠い過去ではなく今始まるのだということを
第一部『？ｅｎｕｓ伝説となった少女たち～』以後は
　不思議界を中心とした物語を取り上げています。

第一部『『？ｅｎｕｓ伝説となった少女たち～』（前書き）

さあ、不思議の旅へ出発だ！

ｋａｂａｎａｉ

第一部『『？ｅｎｕｓ伝説となった少女たち～』』

プロローグ

朝早く一人の少女が秋葉原の郊外にある
ＡＫＢ学園を目指して歩いていた。
「ねえ巧、あれって確か？ｅｎｕｓにいた
美奈じゃない」
「馬鹿だな真理、？ｅｎｕｓはもうとっくに解散したって話だぜ、
見間違いだろ」
携帯を操作しながら忙しく返事をする彼に
「そっそうかなあ」
と、恋人の真里は頭を捻るのだった。

（１）？ｅｎｕｓ誕生

「何で私、こんな所に来たんだろう」って呟いていた。
わたし高熊美奈は造船業で財を成した高熊財閥の一人娘として何不
自由なく育てられた
成績だって都内では１，２を争うＡＫＢ
学園にトップの成績で入ったし、仲良しの友達を集めて秋葉原少女
隊なんてグループを作って歌手の真似事なんかもしてみた。
１３歳の頃両親を拝み倒して受けたオーディションに受かったとき
なんか、もうめゃくちゃうれしかったんだ・・でもある日父親の用
事で役場に行ったとき、職員達の会話から偶然知ってしまった　私
が本当の子供じゃーないって事を、そりゃー確かに小さい頃の記憶
なんて無かったのだけどそれでも自分が誰かなんて考えた事なんて
一度も無かった　一体私ってどうして生まれてきたんだろうって
そんな事を考えていたとき
「そっか、学校もう無くなっちゃったんだね」とおかっぱ頭をした
少女がそう言って親しげに私に近づいてきた。

グループでキーボードを担当していた親友の霧島優子だった
「優子、なつかしいなあ　あの時以来だね」
と私たちは互いに照れ笑いをしたのだった。
実は優子とはグループ解散後なんとなく
距離を置くようになっていたのだ。
そこに「あんたらも無事生きていたようね」
と、エレキギター担当だった、ツッパリ少女叶麗菜も姿を現した。
「麗菜あんた今まで何処行ってたんだよ」と
私は解散以後、行方不明だった麗菜を心配した。「麗菜は、ごめん　ごめん　少し考える所があってさ」と答えたのだけど、何故か詳しい事情は話してくれなかった　でも噂によると最後まで喧嘩していた父が病気で亡くなったのが原因らしかった、影でこっそりと？ｅｎｕｓを応援してくれていたらしい。
「よっ、みんな久し振りじゃん」といつの間にかベース担当だった結城友美も話しに加わっていた。
私たち４人はたった一つだけ残った古い体育館の前に集まっていた。
「でもみんなどうしてここへ」と私が尋ねるとみんな何かに呼ばれた気がして、ここへ来たのだと言う
「後の３人は今頃どうしているのかな」
と優子が言ったので、私は「敦子も恵も峰ちゃんもみんなきっと何処かで元気にしているさ」と適当に答えたのだった。
思えば私たちは６年前にアイドルオーディションに申し込み最終審査まで残った間柄だった。
しかし結局北海道から応募した阿倍湖夏が合格し、他の７人は落選したのだった。
でもみんな１３歳と言う同年齢と言うこともあってだんだん意気投合していった
落選組７人で？ｅｎｕｓと言うバンドを立ち上げ、ある者は詩を書きまたあるものは曲を作った　インディーズからのスタートだったのだけど最初はなかなか売れなかった　でも自分たちの可能性を信

じて誰よりも練習を続けプロモーション活動だって自分たちで積極的に始めた　誰一人歌手になることを信じて疑わなかったからだ。
そういった努力が実り始め、翌年メジャーデビューを果たすと先にデビューした阿倍湖夏を隅に追いやり新人賞の候補に上るまでになった　そんな時あの事件が起こった
敦子というメンバーの一人がシンナー遊びを先生から注意されたのだ、その事件をきっかけにメンバー内でいじめが横行し始めわずかデビュー3ヶ月で？ｅｎｕｓは解散に追い込まれていったのだった。

（2）呼ぶ声

体育館の中には『ゴーッ』と言う風が吹き抜けていた。
「美奈、なんか聞こえない」
と敏感な麗菜が何かを感じ取った
「別に、友美には聞こえなかったよ」
「いや、優子にも聞こえたよ」
「でもー、今は誰もいない筈じゃーないの」
そのとき『ザザーッ』『ザザーッ』
と何かが流れる音がはっきり聞こえてきたので私たち4人は「きゃー」と悲鳴を上げたのだった。
「じゃー皆で行って見れば」
と麗菜が言い出したので、皆はしかたなく
崩れかけた　体育館の中に入っていった、体育館の中はまるで異世界のようであり
砂漠に覆われた廃墟の村には『？ｅｎｕｓ』
と書かれた看板が落ちていた。
見たところこの村には誰も住んでいないようだったので　私たちは村を捜索して歩くことにした、しばらくすると壊れた家の前に座ったままでいるレーオンと言う老婆を発見した　私は「あのう、ここは何処ですか」と尋ねた　頭を三つ編みにしたおばあさんのレーオンは「ここはのう、デルクラルの中心じゃった　鷹菜村じゃよ」と答えてくれた「たっ鷹菜村、どっかで聞いたような」

そう呟きながら通り過ぎようとした私たちを
再び呼び止めたレーオンさんは
「あのう、お嬢さん方そんな変な括弧しておるから気づかなんだが昔どこかであったこと無いかい」と聞いてきたので私たちが「知らない」と答えるとレーオンさんは素っ気無く
「そうか」と言い　また座り込んでしまった。
しかし村を歩いているうちに私たちも段々と思い出してきたのだった。
友美が「ここ知っている、いつも夢に出てくる光景にそっくり」と切り出すと他の3人も
急に何かが弾けたように「エッ」と互いの顔と顔を見合わせたのだった。
それもその筈、全員が夢で見た風景と同じだったからだった「不思議だねぇ、でもこんなことってあるのだろうか」と私たちが考えていた時、向こうからピラニアの形態をした怪物たちが現れ『ガッガー』と吠え、私に襲い掛かってきたのだ　私は思わず「きゃあー」と悲鳴を上げた　そのとき「ミナさん危ない」って一匹のケモノ（獣馬）が私の前に現れた　そして私を突き飛ばし、代わりに重症を負ったのだった。
「・・あんたは・まさか・トマレ」
その瞬間私は遠い記憶を思い出していた
ここは神話以前に存在した理想郷デルクラルだと言う事、無数の怪物たちによって廃墟になったのだという事、そして自分たちはそこから未来の地球に逃れてきた戦士の子なのだという事を・・
（3）世界の始まり
その昔宇宙には何も無かった、ただ百空の闇が辺りを包んでいたのだった
ある時異世界より3面の顔と6枚の翼を持った創生の神オルディナスが次元の扉を裂いて現れ宇宙に星の種をばら撒いたと言う
そしてその一つが菜ノ国（デルクラル）となったのだった。

その楽園には妖精人の実が生っていてそこからラマォスとアダムスと言う双子の妖精人が生まれた　だが世界にはまだ何もなかったので兄のラマォスは「女神よどうか光をください」と天に願った。すると太陽霊神ラードが現れ日の恵みを与えた　次にラマォスは「大地をください」と願った、すると今度は大地と作物の精霊ラホメル・モァーラが現れ大地を切り開いたのだった　最後にラマォスは「水をください」と叫んだ　雷と共に天から水竜ジル・ドーラが舞い降り　海と川と沼地などを作っていった
ラマォスは割れんばかりの声で「ありがとう」と女神に感謝の意を伝えたのだった。
彼は兄弟で力をあわせ村作りをはじめようとしたのだが、アダムスは優秀な兄に嫉妬し手がつけられなくなっていった、そこでオルディナスはそれぞれ2人の骨格からイブナ、オシナと言う女性を作り、それを伴侶として与えた
「お前たちはこれから力を合わせ国を繁栄させなさい　そしてこれからは人間の営みによって多くの子孫を築くのですよ」と語った
大喜びした2人は村作りに励むようになった。
イブナとオシナはそれぞれ3組の男女を産みそれらと力をあわせて鷹菜と言う村が出来上がったのだった。　その後妖精人たちは神々の守護の元、国は発展していったのだが
そんな彼らに女神は数々の試練を与えたのだった、1つ目の試練はアールマン・ゼィヨと言う巨人に首都鷹菜村を襲わせた、2つ目の試練はそれによって起こったダムの決壊であった　だが妖精人たちはラマォ兄弟の指導の下、見事に数々の困難に立ち向かっていった
　女神は力を合わせれば何でも成し遂げられる事を教えたのである
　こうして菜ノ国の王に選ばれたラマォスは周辺に作った鷲菜（わしな）、来瑠菜（くるな）芦津菜（あしつな）の3つの国とそれぞれ平和条約を結んだ
神殿らしき物も盛んに作られるようになっていった。
しかし菜ノ国が出来て数十年がたった辺りから人々の心に少しずつ変化が起こった

従順だった民たちの心を慢心が少しずつ支配していったのだという、その頃天にある神々の国アトラントでも反乱が起こったと言う　銀の翼を持った天使長シスフィーナはオルディーナスの支配する天の半分を支配しようと妖精や一部の精霊神たちを唆し反乱を企てたのだった、しかしオルディーナスの繰り出した聖剣セールゲーアによって胴体を貫かれたシスフィーナはオルディナスの手によって天から投げ落とされた　その時美しかった翼は自らの罪によって重くなり、あっという間に成層圏を落下していった　あるとき薬草を摘みに森へ入ったイブナは不気味な蛇ザザーラの誘惑に嵌まりあろう事か禁断の木の実を食べてしまった　それを夫アダムスにも与えたらしい、その結果2人は欲望の虜になり最後にはピラニアの形態をした　ガロスと言う怪物になったのだった、そして村人達を次々に食べつくしかつての美しい楽園は失われていったのだ、人々はこの邪悪な蛇を天を負われたシスフィーナではないかと噂するようになった。

（4）7つの星の誕生

ラマォスはオシナの娘ユアンとの間に3人の子を儲けた、賢いが乱暴な長男ワシダカ、美しいが冷静さに欠ける長女カナダカ　そして腕力が強くて人望もある末っ子のクマタカでした、この3人が二十歳の時　後継者問題が起こった　鷹菜の決まりでは家督を継ぐのはいかなる場合でも長男であり　それは鷹菜以外の国でも同じであった　しかしラマォ王は「他の国はともかく　この鷹菜国はデルクラルの中心なのだそれゆえそこを収める王は決して年齢とか序列で決めてはならぬ　たとえ女性であっても適任者なら王になれる事にする」と宣言したのだった　無論　王のこの意見には多数の反対者がいた　そこで王は住民たちによる投票によって次の王を決める事にしたのだった、これが現在も行われている選挙の原型である。
その日から各支持者たちは住民たちにあの手この手で多数派工作に躍起だったが住民の
ほとんどは賢く人望もあるクマタカを推した

のだった。
「この投票は無効だ」と叫ぶ者まで現れた
そして二七歳の時ようやくその騒動は収まりめでたく王となったクマタカは目の前の障害を取り除かなければならなかった　それは父の代から増え続けていた魔人ガロスたちだった「このままではこの国は魔物の国になってしまう」クマタカはこの危機的な状況を予言の神ジブラ・ナイスに救いを求めた
ジブラ・ナイスは『デルクラルに危機が訪れる時、彼の地から7つの星が誕生する、男子ならエンドラ　女子ならばヴィーナスと呼ばれる戦士になるだろう、その者達が無事に成長することが出来ればこのデルクラルの大地は蘇るであろう」と言う神託を下した
次の年デルクラル全土には体の何処かに星型の紋章を持つ7人の少女たちが生まれた
中でもクマタカは娘のミナを龍族のリーダーとして厳しく鍛えていたのだった。
5歳になったミナは毎日のように父クマタカに剣術など武術全般を習っていた。
「ミナどうした、かかってこんか　おまえはやがて龍族の長になるのだ　そんな事では
わしの後を継げんぞ」と鋭い目で娘を睨む
クマタカにミナは倒されても　倒されても、何度でも果敢に父親に向かっていったのだった　周辺の村にはいつも『カキーン・カキーン』と、鋭い剣の音が響いていたと言う。（5）少女と獣馬
ある日の事夕食を済ませたミナはこっそり鷹菜の村を抜け出した
「父上ったら朝から晩まで修行　修行ってもう嫌になっちゃうよ、たまには気分転換もしたいのよね」と抜け出したまでは良かったが村から一歩も出た事がないミナは、紫苑の森近くをうろついているうちに完全に迷子になってしまった　「ねえ　ここ何処、道わからなくなっちゃったよーう」とミナはその場に座り込んだのだった、そのとき道の向こう側から体の3倍程もある大きな荷物を乗せた中

くらいのトロ（獣馬）を連れた3つも頭があるラルマハ族のおじいさんが現れた　このデルクラルの国ではトロと言う猪とヤギの愛の子のような獣馬を家畜として飼育していた。
「何だもうへたばったのか、役立たずは要らねえだ」とおじいさんは怒鳴り、何度も鞭で打った挙句トロをその場に残して立ち去ってしまったのだった。
「まあ　こんなに荷物を乗せなくてもいいのに」と、トロに駆け寄ったミナは鞭で打たれた傷に薬草を塗ってあげた　獣馬は「ありがとう、おいらこんなに親切にされたのは初めてだモー」とお礼を言った
「私ミナ、ところであんた　鷹菜村までの帰り道分かる」と尋ねると「わかるって、誰にものを言っているモー、おいらに分からない道は無いモー　それにおいらにはトマレと言う、立派な名があるんだモー」と獣馬は抗議したのだった。
「じゃートマレ、私の事もこれからはミナって呼ぶんだよ」
ミナはトマレの背中に乗り鷹菜村まで送ってもらったのだった。
それからトマレは同じ年に生まれた7人の少女たちの人気者になっていった
少女たちは修行がない日は、鷹菜の丘をトマレと駆け回って遊んだ
「ほらトマレ、こっち　こっち」とマレイ・ボールと言うフリスビーのような遊び道具を持って挑発するレイナ
「ほーら、今度はこっちだよ」とレイナからボールを受け取ったおかっぱ頭のユウコがウインクする　「よっし、今度こそボールは頂くモーよ」と夢中でボールを追いかけるトマレ　その日の昼食は丘でミナの母マロンナさんと手伝いに来ていたレーオンと言う少女が作った　ゲッタコ料理（海豚ダコを蒸した菜ノ国の一般的な料理）を草原に座ってみんなで食べた。
「美味しいねトマレ、私たちずっと友達でいようね」と言うとユウコ達も「そうだね」

と頷いていた　「私たちいつまでも親友だよ約束したよ」　みんなでそう確認しあったのだった。
　「これから何しようか」
「ミナ少しは自分で考えな」
「私はレイナみたくめったに休みはないので、考えない事にしているの」と中々行き先が決まらなかった
「ではこの先にあるギリーラの丘を見に行ったらどうですか」と手伝いに来ていたレーオンが口を挟んだ。
「ギリーラの丘って、それ何処にあるの」
とユウコが質問したら　トマレが「道案内ならおいらに任せるモー」と力強く言ったので　私たち7人はみんなでギリーラの丘に行く事にしたのだった。
（6）風の島のノリル
ここで少し整理しておくと、妖精人達は成人
（男女15）すれば背中から折りたたみ式の翼が生え　地上なら自由に飛ぶことが出来るのだが　ミナたちはまだ子供なのでギリーラの丘までは全員で歩いて行ったのだった。
「ふう、まだ着かないのレイナ疲れたよ」
「もうすぐだモー」
そのとき輝く丘が頭上に見えてきたので　私は「あっあれじゃない」と指を刺した
「そうあれがギリーラの丘だモー」
私たちは一目散に丘に駆け登った
その瞬間眩いばかりの光が『ピッカー』と7色に輝き交互に差し込んだ　「わあ綺麗、とっても感動的だわ」とユウコが両手を広げて伸びをした　私もトマレも、他のみんなもこれには大満足だった。
「さて遅くなるといけないからそろそろ帰ろうか」と私が歩き始めたとき、何かが足に
『ゴツン』と当たった　何事かと足元を見ると「痛ってえなあ、いきなり何すんだ」

と声が聞こえたのでそこに目をやると小さなウサギが寝ていたのだった。
「何よこれ」と驚いた私に向かってそのウサギは『おいらは風の島から来たノリル』だとと名乗った。
「どうしてここへ」と尋ねると　ノリルは
少し目を閉じ「空(くう)が目覚めた」と言うのだった。
私たちはみんなで丘にある洞穴に腰掛、ノリルの話を聞くことにした、ノリルは風の島で起こった出来事とその後の冒険談を語ってくれた。
○風の島＝シー・ラビット
「おいらが生まれた風の島は自然と豊かさに
育まれた美しい所だったんだ、島はラビットストーンと言う霊石が採れ　住民のほとんどは漁や狩を生業としていた　ある日おいらと父さんのパパリルは病気のヤゴンさんに新鮮なトロンチ（魚面貝）を食べさせようと遠くの海まで漁に出んだけど、突然空が『パチパチ』したと思ったら何も無いところが穴が開くのを見たんだ　もちろん最初は小さな点だったのでみんなは気にせず漁をしていたんだけど、その穴はだんだん大きくなっていってとうとう風の島事呑み込みやがった、おいらは父さんが作ってくれた　気球、アッカンベ猫を操り何とか脱出したんだけどさ」
「ふーん、不思議な話だけど、メグたちには関係なさそうね」
「そう思うのは話の続きを聞いてからだろ」
「えっ、まだあるモーか」
「当たり前だ、これからが本番さ」とノリルは『ニヤッ』と笑い、また話し始めた。
○巨人の国ガリバレル
「それからは旅芸人として生計を立てていたおいらがアッカンベ猫とやってきたのは見るからにでっけぇ人間たちが住んでいるガリバレルだった、魔犬シルクヴェル（暗黒神ダーク・ナモの番犬）を信仰する彼らは小人族を食料にしてやがったんだ、おいらも何度とな

く危険にさらされたけどアムールと言う美しい巨人の一人がおいらの芸を気に入ってくれて、芸人として　雇ってくれたんだ　でもそんなガリバレルにも空は現れやがった　ある日首都ガリバードで興行をしてたおいらは黒い穴に『ゴー』と飲み込まれる町や巨人達を見たんだ、まあおいらはアムールさんがアッカンベ猫事遠くへ　ぶん投げてくれたおかげで助かったのだけどさ」

ノリルの話を聞いたみんなは「何か怖い」と強気のレイナまでが震えていたのだった。

「ではノリル最後の冒険と行きましょう」

と大げさに挨拶すると、ノリルは3つ目の話を始めたのだった。

○恐竜の国ザウン・パポ

「おいらが3つ目に立ち寄った国はザウン・パポと言う恐竜の国だったんだ」

「へー恐竜ってホッテンロッド（巨神族）のようなもの」と、トモミの質問にノリルは笑って「ホッテンロッドは知らないけど、多分違うと思う」と答え　また話の続きをはじめたのだった。

「そこにはデングル・ワンコと言う人間たちが住んでいたんだけど彼らの知能は大変低く

よそ者のおいらはたちまち捕らえられてしまったんだ「それは大変だモー」

「彼らはベロンちょ　と言う樹木の皮で作った丈夫な縄でおいらを縛り、丸焼きにしようとしやがった、さすがのおいらもこれまでかと諦めかけていたときマポンと言う恐竜がおいらを助けてくれたんだ　デングル・ワンコ達も石斧や電気槍などで応戦したんだけど、さすがに巨大な恐竜には歯が立たなかった」

「よかったじゃない、でも何で助けてくれたのかミーたんはさっぱり分かんないよ」

「それは恐竜のほうが彼らデングル・ワンコ達よりも知能が高かっ

たからさ、それに彼らは何かと集団で恐竜狩りをしていて敵対していたって事情もあったんだ、とにかくおいらはマポン（女性らしい）にザウン・パポを案内してもらったんだ　ザウン・パポは首都シーラ・ポリスを中心に発展した海洋惑星だったんだ
おいらは毎日マポンとザウルの森を駆け回って遊んでいた、ところがここにもいつの間にか空（くう）が発生していたんだ、一点から発展した空は首都シーラ・ポリスをはじめザウン・パポ全体を飲み込んでいったんだ
何故おいらが助かったのかは覚えてはいないだけど「アンタニガシテアゲル」と言うマポンの声が記憶の中に残っているんだ」
ノリルの不思議な体験を聞いたみんなは黙っていたのだけど、ユウコが「これってガロスとは関係ないよねぇ」とポツリと呟いた
「さあ関係あるのか　ないのかおいらにも分からない、ただ言えるのはいつかここにも
空は現れるってことだけさ」とノリルは答えるのだった　全員絶句していたけど私だけは知っていたんだ　あれはいつだったか父と訪ねたジブラ・ナイスの神託所にあった預言書それには『闇より現れし物、全ての不思議世界を飲み込もうとする　それに立ち向かえるのは龍の血を継ぐ双子のみ』と書かれてあった
（私たち7人の中には双子は一組もいないだとすれば誰かが結婚して双子を生むって事?その2人が空（くう）と戦うって事なんだろうか、それはいつなんだろう）と考えていたとき「どうしたおねえちゃん、そう深刻にならなくてもやつが現れるのはおそらく数百年先さ」とノリルは笑うと再びアッカンベ猫に乗りこんだ
「もっ　もう行っちゃうの、せっかく友達になったのに」とユウコは残念そうだったが
ノリルは「おいらはいろんな世界が見たいのさ、いつかまた会えるときが来るだろ　それまでまたなぁ」と手を振るとのリルは旅立っ

ていったのだった、私たちみんなは彼の話が嘘である事を祈っていたのだった。

（7）未来への脱出

だがガロスとの戦いは年々激化していた

彼らはデルクラルの首都である鷹菜国に総攻撃を仕掛けてきたのだ

妖精人達は勇敢に戦ったのだが　無限とも思えるガロス軍の力の前に苦戦を強いられたのであった。

その夜四つ目族の長老ヨーバ（妖婆）の館に集まったクマタカと妻のマロンナをはじめとする龍族の勇士たちは朝まで対策を話し合ったのだった。

そして次の朝ミナ達7人の子供たちを鷹菜の砦に集めたクマタカはこう切り出した

「ガロスたちの動きが予想以上に早い、おまえたちが成長するまでこの国はもたないかもしれない」

「そこで村中の皆で話し合った結果あなた達を未来の地球に送ることにしました」

とクマタカの妻マロンナが話を引き継いだ

龍族には全員が力を合わせれば一度だけ時間を超えることが出来る、次元転移の術が伝わっていた　それを未来を受け継ぐ子供たちのために使おうと言うのである。

「そんなの嫌だよ、ミナたちも戦うよ」

「そうだよユウコ達だって戦えるよ」

「おいらだって、戦うモー」

「その意気込みは立派だがお前達はまだ6歳にも満たぬ、戦士として成長するにはまだまだ時間がかかる」

「ゆえにあなた達は未来の地球でそれぞれの心を成長させなさい、こっちでの記憶は失われるでしょう　でもいつか心に誰かの呼ぶ声が聞こえた気がしたなら　迷わず行動に移しなさい、そのときこそ

あなた達の止まった時間が再び動き出すのです、その時までミナあなたがみんなを導くのですよ良いですね」

「でも私、逃げ出すの嫌だな」
「いいえ逃げるのではありません、力を蓄えるための旅立ちだと思いなさい」
「はい、母上」
「きっと帰ってくるんだモー、それまでいつまでも待っているモー」
「トマレそれまであんたも生きているんだよ
約束したよ」
「分かったモー」
私はしばしトマレと抱き合っていた、他の皆もトマレとの再会を心に誓っていたのだった。
「では行ってこい我が娘達よ、そしていつの日か戻ってくるが良い
　このデルクラル
いや惑星ＭＡＯを救うために」
父クマタカは力強くそう言って私たちを送り出した。
一族のみんなは輪になってわたしたちを囲むと心を一つにして「偉大なる我ら龍族の神
ジル・ドーラよこの子らを遥かなる未来へ送りたまえ～デルクラル～エンドラル～オッペケペーデルクラル～エンドラル～オッペケペーデルクラル～エンドラル～オッペケペー」と３回呪文を唱えたすると空間が開き
私たち７人を未来の地球へと誘ったのだった
「逃げるんじゃないからね、いつか帰ってくるんだから」
私たちは自分自身にそう言い聞かせていた。
（８）それぞれの時間
１９９６年東京　春
全国的に地震や津波といった災害が相次いだ
この年、関東地区の各地で異様な衣装を身に纏った少女たちが発見させた　私を含めなぜか全員名前以外は記憶を無くしているようだった。皆はそれぞれがそれぞれの夢を追いかけ成長していったのだった・・・やがて一つになる為にね。

千葉の森の中で発見させた私は国風園と言う
孤児院に入れられたのだった、国風園は
代議士だった国風東によって１９６１年に浦安に作られた小規模な
施設だった。
中にはお下げが似合う真奈美ちゃん、少しやんちゃなタケルくん、
おとなしいケントくん
そして太っちょの安丸くんとおかっぱ頭をした優子ちゃんの５人が
いた。
「今日は皆さんにお友達の紹介をします」
と、東の孫国風まゆみ先生が子供たちにそう言ったので　私は自己
紹介をはじめた
「えー、はじめまして私の名は美奈といいます、どうしてここにい
るのか分からないけど仲良くしてください」とお辞儀をした、する
と他の子供たちからは『パチパチパチパチ』と拍手が起こったのだ
った。
長い髪をかき上げながらまゆみ先生は「それじゃあ美奈ちゃんは優
子ちゃんの隣に座ってね」と言ったので私はおかっぱ風のその子の
隣の席に座ったのだった。
しばらくしてその子が「あなたも記憶がないんだ」と耳元で囁いた
　「えー彼方もなの」
と私が聞き返すと、その子は笑って
「えへっ、私優子これから仲良くしようね」
とウインクしたのだけどその仕草がなんとなく懐かしく思えたの
私たちはいつか人々を感動させられる歌手になりたいと言う同じ夢
を語り合った
子供を事故で亡くした高熊家に養女（戸籍上は実子）として引き取
られたのはこの少し後の事だった。
それはある晴れた日、ここへ来て三ヶ月になろうとしているときだ
った
私と優子はケントくんと秘密の隠れ家でお城ごっこ（王様と召使）

をして遊んでいた時、見るからに高そうな白い車が園の前に止まった　中からは優しそうな紳士と少し疲れた感じの女性が出てきて園長のまゆみ先生と事務の牧原先生とが紳士たちを向かえたのだった、４人は何やら話し込んでいるみたいだったがここからでは遠くてよく見えなかった

「何　話しているんだろうね」と私が言ったら普段はおとなしいケント王子が「近くでこっそり聞いちゃえばいいんだ」と手招きしたので私たちは草むらに隠れてまゆみ先生たちの話を聞いていた。

「私は父から受け継いだ造船業をさらに発展させようと躍起になっていました、まあ傍目から見れば家庭を顧みない父親に移っていたかもしれませんが　それで娘の美奈代は妻任せにしていました　そんなことから妻への感謝を兼ねて娘と３人で九州のほうに家族旅行に行くことにしたのです。」

と、紳士は重い口を開いた

「３歳になる美奈代は大変喜んでくれたのですが、阿蘇算近くで買い物をしていたとき

妻がちょっと目を離した隙に車に引かれて亡くなってしまったのです　それ以来妻は病人のようになってしまいました　私自身も仕事に身が入らず悩んでいたところ　先日山井と言う部下がこの施設で美奈代にそっくりな子を見かけたと言うので仕事そっちのけで駆けつけたという訳です」

と、涙ながらに語った。

「なるほど話はよく分かりました、牧原　例のモノをとまゆみ先生は美奈の写真を持ってこさせた　それを手にした女性は「ほんと美奈代にそっくり」と涙ぐんでいた

「これは美奈ちゃんにとっても、いい事かもしれません、前向きに検討しましょう」

と　まゆみ先生は語ったのだった　そのとき

「やだい、せっかく美奈ちゃんと友達になったのに」

とタケルくんが部屋に飛び込んできた

「そうだよ、美奈ちゃんを連れていかないで」と安丸、真奈美、の2人も現れた　まゆみ先生は落ち着いた声で「そんなこと言っちゃーいけないわ、みんなだってお父さんとお母さんが欲しいでしょう　大切な仲間にこんな素敵な両親が出来るんだから歓迎してあげなくちゃあ」と諭した
みんなを代表してタケルくんが「分かっているよ、僕たちただうらやましかっただけだよ」と答え先生にしがみついて泣いていたのだった。
私は「ありがとうタケルくん、真奈美ちゃん安丸くんと心の中で感謝していたのだった。

（9）海の思い出

その年の夏　私たちは牧原先生が運転するマイクロバスで神奈川県に向かった。
「ほら優子ちゃん見て、カモメの大群が飛んでいるよ」と私は車の中から指をさした
「ほんとだいっぱいいるね」と優子もはしゃいでいた。
「皆さん目的地に着いたらみんなで海の家を作ります」とまゆみ先生が言うとみんなはいつもなら「ちっ、またか」と悪態をつくのだが今回は「任しとけ」って、張り切っていた。国風園では毎年の恒例行事らしいのだが、
今回は私と優子の最初で最後の参加になりそうだった　それと言うのもあの後優子が音楽家の一族　霧島家に貰われることが決まったからだった、タケルくんやケントくんたちは「ぜったい最高の思いで作ろうな」って誓っていた。
海岸に来ると私たちは地元のおじいさんの指示で海の家の準備をはじめた、昔はこの辺りは観光客で溢れていたのだけど、ここ5～6年は不況の影響で毎年減り続けていたのだった。
「おまえら今年もまた来たのか、せっかくだからビールくれや」とサングラスをしたそっち風な兄さんがやってきた
「あのぉ、まだ準備中なんですが」

とまゆみ先生が言うと　そのチンピラは
「そこにあるじゃねーか」と怒鳴った
私は「これはまだ冷えてないんだよ、それでもよかったらあげるけど」と言ったら
「ばかにするない、温いビールが飲めるか」
とそいつは襲い掛かってきた、そのとき私は
とっさに大の大人を投げ飛ばしていたのだった「こっ、このガキー舐めやがってぇ」
と向かってきたそいつの足を優子が払ったので　男は地面に『ドシーン』と顔から倒れたのだった　まゆみ先生やケントくんたちは「すっ、凄い」と驚いていたのけど　私と優子は「偶々だよ」と自分たちで驚いていた。
お昼はみんなで新鮮な魚類などでおなかを満たした　そのとき　でっかい貝料理を食べていた優子が突然「これゲッタコに似ている」と言ったので私も「ほんとだふるさとの味にそっくり」と言ったらみんなが「ゲッタコ？
何だよそれ、まゆみ先生しってる」
「いや聞いたこと無いけど、２人は知っているの」と聞いてきたので私たちは「いやっ、
口から勝手に出ただけ」と言ったらみんなは
頭を捻っていたのだった。
「ねえ、この向こうの岩場におかしな洞穴があるんだけど行ってみないか」とタケルくんが誘ったので私は「先生たちが心配するよ」と拒否した　でもタケルくんが「近くだからすぐ帰れるよ」と言うので私たちは先生たちに黙って沖へ出た　一時間ほどボートを漕ぐと目的地の岩場に着いた　しっかりとボートを縄で括りつけるとタケルくんが「ほらあの穴だよ」と言ったので　私たちは洞穴を探検して歩いた「なんか怖い」と一番強そうな安丸くんが震えていたので　私は「先生が心配するから帰らない」と言ったのだった
「帰るってたってどっちだっけ」とタケルくんが辺りを見回した「

おいおい、案内人が迷っちゃあ仕方ないだろ」と、珍しく無口なケント王子が突っ込んだタケルくんは「こっちでいいんだったよな」と立ち止まった　するといつもは冷静な真奈美ちゃんが「うえーん帰りたいよう」と泣き出したのだった
そのとき洞穴全体が7色に輝いた
私は「ここは　たしか　どっかで」
と考えながら「こっちよ」とみんなを誘導していた　何とか迷路を抜け出した私たちが
『ほっと』ため息をついたのもつかの間
今度は安丸くんが「おーい、ボートがないよー」と喚いていた　潮はだんだん満ちてきて私たちは全員で抱き合って振るえていたのだった。
そのころ先生は私たちのいないのに気づいて地元の人みんなで探してくれていた
「私たち助かるんだろうか」そう考えていた私の心に「ミナあなたがみんなを導くのですよ」と言う声が繰り返し聞こえてきた
「助け呼んでくる」そう言って私は海に向かった　後ろからは「無茶だやめとけよ」と誰かの声がしていたようだけど私はかまわず飛び込んだ「助けるからね、みんな今助けるからね」でも思ったより海は荒くとても5歳の
女の子が何とかできる筈も無かった
「ギョエーこんなにあるの」
行くときは夢中で距離のことなど考えなかったが目の前には壮大な海が広がっていた
そのとき大きな波が起こり私を襲った
みんなはそれを祈るような気持ちで見守っていた　そのときモーターボートを操りイケメンの青年が現れた　ボートの中には私と同じくらいの少女いた　その子は「さっ、あんたこっちにつかまりな」とは私に手を伸ばした　その手をとった瞬間何かが頭の中を駆け抜けたのだった　結局私たちは叶家所有のボートに助けられたのだっ

た　先生やみんなは青年と少女にお礼を言った　その少女は「まったくミナはドジなんだから」と抱きしめてくれた　「じゃーまたねレイナ」と私は別れの抱擁をしたのだった　「ところでタケルくん、沖に出たいっていったの　どうせあんたでしょう」とまゆみ先生が尋ねるとタケルくんは「だって思い出作りたかったから」と言いかけて『あーあ』とでっかい声を上げた　まゆみ先生が「どうしたのよ、突然大声なんか上げて」と言ったら「ねえ、まゆみ先生、さっきの美奈たちの会話少しおかしくない」と質問したので「そう言えば、何でお互い名前知ってたのかな」と考え込んでいた。
その晩は盛大なキャンプ・ファイヤーで盛り上がった、タケルくんは「ドジったけど、素敵な思い出が出来た」とだけ言って涙ぐんでいた　真奈美ちゃんや殆ど目立たない安丸くんやケント王子も涙で前が見えない状態だった　私と優子は「別れじゃないよ、またいつか会えるよ」と大声でさけんでいたのだった。
別れの朝タケルたちは「美奈、幸せになれよ、俺お前のこと忘れないからなぁ」と梅の木に登って見送ってくれた　3日後に国風園を離れる優子もウインクで見送ってくれたのだった。
私は窓から体を出し梅ノ木に向かって
「さようならタケルくん、真奈美ちゃん
安丸くん、ケント王子そして優子　いつかまた会おうねぇ」と叫んでいたのだった。

？　？　？

「優ちゃん早く行こうよ」と桜台にある霧島家の玄関の前で私は親友の優子を呼んだ
「待ってよう美奈」と言って急いで玄関から飛び出してくる優子
小学部に進学した私たちはＡＫＢ学園で再び隣同士になったのだった、同じ6歳という事もあって、今ではかけがえの無い親友になっていた。
学校の無い日曜日の今日は私たちが大好きなキナコ娘。たちのコンサートが桜台公園で行われるのだ、私たちは満員の広場の一番前の

席で応援した　会場は『ワーワー』と言う
熱気に包まれていたしばらくして『オオー』っと言う歓声が聞こえたので振り返ると
客席の後ろ側の席から7人組のユニット
キナコ娘。たちが現れたのだった。
メインボーカルのナナが「みんなー今日は私たちのコンサートに来てくれてありがとう、
まずはデビュー曲『星は輝く』を聴いてください」と挨拶した、後ろからは『ナナー、愛しているぜー』と男性ファンからの黄色い声援が飛んでいたのだった。
会場には宇宙をイメージしたプラネタリウムが３Ｄ映像で現れ、軽快な音楽が流れ始めた
歌『星は輝く』
星は輝く、愛は瞬く　幾つもの出会いと別れ繰り返しながら、貴方の胸でそっと呟く
私たち2人まるで天使のようだね
この世界に生まれて来た事を　後悔していない　そう僕らはすべて望んで生まれてきたのさ　辛いときでも楽しいときでも僕らは頑張ってきた　諦められない夢と言うゴールが待っていたから　宇宙には素晴らしい物がたくさんあるはずさ　僕らはそこを目指してただボールをけり続けるだけさ　君を失ったとき初めて絶望と言う意味を知った　そう深い　深い　深い　深い悲しみが　心を蝕んでいたでも心には素晴らしい君の思い出がある
星は輝く、愛は瞬く　幾つもの出会いと別れ繰り返しながら、心の中で信じ続ける
いつか遠い世界で　また巡り会えたらいいね
「いい曲ねえ」と、あちこちで大声援が巻き起こり私たちも惜しみない拍手を送ったのだった　そのとき歌がこんなにも人の心を惹きつけることを改めて悟った
いつか私たちもステージに立とうねって誓い合ったのも丁度この頃

の事だった。
□　戻る
（１０）少女たちの戦い
○砂漠世界ＭＡＯ
「トマレ、しっかりしてよやっと会えたんじゃない　美奈を待っていてくれたんでしょ」
「そうだよ　また麗菜たちとボール遊びするんだから、こんな所で寝ている場合じゃないぜ」と麗菜は大声で励ました。
「・そっ　そうだね　またみんなで遊ぼうモー、でもおいら何だか少しだけ眠くなっちゃった　ミナさんお帰りモー、おいらずっと・待ってた・・」
そう言ってトマレは息絶えたのだった
「駄目だ　死ぬなぁ、トマレ」
「キサマタチハ　マダ　イキノコッテイタノカ　たった４人で我々に勝つつもりか」
と恐ろしい形相で４人を囲む怪物たち
「いやっ、４人じゃないよ　私たちもいる」
と何処からか声がしたので振り返ると、？ｅｎｕｓの他の３人が現れたのだった。
「恵？」と私は言った
「敦ちゃんもいるよ」と友美
「峰ちゃん元気だった」と麗菜
そう私たちは思い出していた自分達がかつて？ｅｎｕｓと呼ばれた戦士の子なのだと言う事を　ここは神が最初に作り上げた楽園デルクラルだという事を　そして戦いは遠い過去ではなく今始まるのだということを
「おまえたちを呼びよせたのは私だ、今こそ戦うのだ？ｅｎｕｓの戦士たちよ」と天空から龍の声が響いた
「思い出した、みーちゃんたち戦士だったんだね」と峰ちゃんが笑った

『ガガーォ』と吠え荒野に勢ぞろいする怪物ガロスたち、そのとき
私たちはそれぞれ心の中でトマレの遠吠えを聞いていた。
「どうしてここに」と尋ねた優子に
「思い出したんだ、メグ達は戦うために生まれてきたんだって事を」
「誰にでも忘れられない時間があるように
敦子たちの止まっていた時間が、動き出すときが来たんだよ」と澄
んだ目でそう答えたのだった
『ガオー』と唸り突進しようとする怪物たちに「そうだよ、今こそ
戦うときだよ」
と私は全面対決を宣言した。
7人の少女たちはそれぞれ白鳥や鷹など動物のポーズを取っていた、
そして叫んだ
「変身」と　風が起こり天空からは紫の龍が
舞い降り何処からかロックのリズムが流れた
そして光の中から龍の鎧を纏った　私たち
？ｅｎｕｓの戦士が現れたのだった
私の「ゴー」と言う号令を合図に私たち7人の戦いが始まったのだ
自分たちの過去を抜け出すための戦いが・・
♪【銀の翼のノリル】
『真実を見つめながら僕らは生まれてきた
この世界という衣を纏って
いつかは大人になり　歩き出す時が来る
その日が訪れると誰もが信じていた
だけど世の中は災いと欲望ばかり
穢れ亡き者達は、どこへ消えてしまったので
しょう　ノリル　その翼を銀色に染め
全ての者たちを　導いてほしい　たとえその
翼が黒く染まることがあっても、いつかは世
界を救うことが出来るはずさ
2番

何もかも忘れたくて逃げ出したこともある
自分と言う存在を否定して
白い鎖でしっかり結ばれていた
絆って言うやつを、まだ信じていた
人の愛情に染まった天使たち
地球と言う　この星にその答えがあるという
ノリルその翼を銀色に染め、次なる世界
へ羽ばたいてほしい　君がこの世界に安らぎを求めるなら、この無
限世界は一つの楽園となる
セリフ『今この星は危機を迎えています
人は人を襲い、裏切り　環境は破壊され続けています　それらを救
うのは政治家でもなければもちろん科学者でもありません
それは穢れのない心だけです
誰もが信じあい　許しあい　譲り合うことによってのみ、この世界
を再生出来のではないでしょうか
その為に何が出来るのか
私たちは今試させているのです』
ノリル人は誰も弱虫なんだよ、でも何かと　戦いながら　みんな必
死で生きてる　アーノリルその翼を銀色に染め全ての者たちを導い
てほしい　たとえつかの間でも
時を越えることが出来たなら全ての世界は一つに（融合）なるだろ
う』
集団で攻撃を仕掛けてくる青いガロスたちにユウコのミスト・ブー
メランが次々に炸裂する、トモミはメイ・ビーナと言う電磁鞭で戦
っていた　レイナは龍馬マイ・ロビンを操りガロスたちをかく乱し
ていたのだった、メグとミーちゃんはガロスの配下のムデ人間達に
苦戦していた　だが影のような物が2人を手助けしていたのだった。
「あれは・・トマレちゃん?」
「何バカ　言ってんだよ、いくよ　ダブルハイドラー」と熱線を浴
びせる恵とみるく

『ギャーア』とムカデの焼ける音
『てやーあ』とアツコの封陣拳がイブナの額を捕らえていた　『ウオーォ』と緑の血を流し『ヴォノレー』と荒れ狂うイブナ
一方私は父クマタカから授かった聖剣セルゲイアでリーダーのアダムスと戦っていたのだけど奴が体内から噴出す暗黒ガスに苦戦していたのだった。
「ワッハッハッハッハ、お前如きまだまだワシの敵ではないわ」と勝ち誇るアダムスくっ　悔しいけど今の私では手も足も出ない」と、崖に追い詰められた私は悔し涙をしていた。（負けられない、みんなをこの世界を守るだ）後のない私はそれでも諦めていなかったその時「ミナ　負けちゃあだめだモー、ミナならきっと倒せる、いやっ　そいつはミナにしか倒せないモー　おいらがそのチャンス与えるモー」と言う声が聞こえた、見れば影のような物がガロスの肩に咬みついてた「今だモー、おいら事奴を倒すモー」
「だってそれじゃーあんただって」
「ミナ、おいらは実体じゃないモー」
「ようしそういう事なら」ミナは目を閉じ剣を構え叫んだ「オルディナス・エンドラル＝ラ・マォダー」その瞬間剣は赤く輝いた
「唸れ、セール・ゲーイ　アー」
『ピッカー』「放せ、ハナ・セ・・」
『ウギャー』
絶叫と共にアダムスは溶けていった、他のガロスたちもセルゲイアの光を浴びて消えていったのだった。
「すっ　凄い、これがセルゲイアの剣の力な

のか」と　呟いた私に「違うミナおまえの力だ、剣は仲間を守りたいというおまえの心
に反応したに過ぎない、おまえがみんなを守ったのだ」と龍の声が聞こえてきた、そ
の時　私たち7人は過去を乗り越えた事を悟っていたのだった。
〔エピローグ〕歌は伝説を越えて
ガロス達を倒した私は、天に向かって声を限りに叫んだ。
「勝ったよ　私たち、トマレー見てくれているよねぇ」その瞳は涙で霞んでいた、他の少女たちも全員トマレを思い出して泣いていたのだった。
『龍の子？ｅｎｕｓの戦士たちよ　よく聞くがよい、おまえたちの活躍によって確かにこ
の世界は救われた　魔人どもに荒らされたこの村も、やがては元通りになるだろう
だがおまえたちは旅立たねばならぬ」とジルドーラは語った。
私は「どうしてですか」と尋ねた
すると「いま世界は急激に破滅に向かっている、それはおまえたち人間が引き起こ
した、環境破壊や慢性的な飢餓が、至る所で拡大しているせいでもある」と龍は告
げた　そのとき私たちの脳裏には　増え続けるゴミ原油の垂れ流しによって死滅す
るや魚たち　飢えに苦しむ子供たち、災害によって家を失った人間たちのイメージ
が々に浮かんできた　「それを救うのは穢れのない心を持った者達だけだ、おまえ
たはもう一つの世界地球を救うために　これからも戦い続けるのだ？ｅｎｕｓの戦士たちよ」龍はそう告げた　その瞬間私たちは何故か大
粒の涙を流して泣いていたのだった。

「さあ再び時を超えるのだ、すべての世界を破滅から救うために」
そう言うと龍はどこかへ飛び去っていった。
みんなは最後に「トマレー、また会おうね」
と叫んでいた、トマレが何処かで見ている気
がしたからだった。
そして私たちは再び時間を超え　もう一つの地球に帰っていった、
全ての世界を歌と言う武器で救うために　もう一度みんなのアイド
ルになるために
・・はるか上空からは不気味なドクロが地上を見下ろしていた。
「見事だ？ｅｎｕｓの戦士たちよ、だが我らは人間達の欲望がある
限り滅びることはない　次なる戦いを楽しみにしておるぞ
フッハッハッハッハッハッハ」
～そして少女たちの歌は時空を超え伝説になった～　　ＥＮＤ

第一部『『？ｅｎｕｓ伝説となった少女たち～』（後書き）

いつか不思議界の物語を　映画に出来ればと思う。

ｋａｂａｎａｉ

2　世界の始まり（前書き）

体育館の中は異世界に通じていて、そこは怪物たちが支配する世界であった。

2　世界の始まり

（2）呼ぶ声

体育館の中には『ゴーッ』と言う風が吹き抜けていた。

「美奈、なんか聞こえない」

と敏感な麗菜が何かを感じ取った

「別に、友美には聞こえなかったよ」

「いや、優子にも聞こえたよ」

「でもー、今は誰もいない筈じゃーないの」

そのとき『ザザーッ』『ザザーッ』

と何かが流れる音がはっきり聞こえてきたので私たち4人は「きゃー」と悲鳴を上げたのだった。

「じゃー皆で行って見れば」

と麗菜が言い出したので、皆はしかたなく

崩れかけた　体育館の中に入っていった、体育館の中はまるで異世界のようであり

砂漠に覆われた廃墟の村には『？ｅｎｕｓ』

と書かれた看板が落ちていた。

見たところこの村には誰も住んでいないようだったので　私たちは村を捜索して歩くことにした、しばらくすると壊れた家の前に座ったままでいるレーオンと言う老婆を発見した　私は「あのう、ここは何処ですか」と尋ねた　頭を三つ編みにしたおばあさんのレーオンは「ここはのう、デルクラルの中心じゃった　鷹菜村じゃよ」と答えてくれた「たっ鷹菜村、どっかで聞いたような」

そう呟きながら通り過ぎようとした私たちを

再び呼び止めたレーオンさんは

「あのう、お嬢さん方そんな変な括弧しておるから気づかなんだが昔どこかであったこと無いかい」と聞いてきたので私たちが「知らない」と答えるとレーオンさんは素っ気無く

「そうか」と言い　また座り込んでしまった。
しかし村を歩いているうちに私たちも段々と思い出してきたのだった。
友美が「ここ知っている、いつも夢に出てくる光景にそっくり」と切り出すと他の3人も
急に何かが弾けたように「エッ」と互いの顔と顔を見合わせたのだった。
それもその筈、全員が夢で見た風景と同じだったからだった「不思議だねぇ、でもこんなことってあるのだろうか」と私たちが考えていた時、向こうからピラニアの形態をした怪物たちが現れ『ガッガー』と吠え、私に襲い掛かってきたのだ　私は思わず「きゃあー」と悲鳴を上げた　そのとき「ミナさん危ない」って一匹のケモノ（獣馬）が私の前に現れた　そして私を突き飛ばし、代わりに重症を負ったのだった。
「・・あんたは・まさか・トマレ」
その瞬間私は遠い記憶を思い出していた
ここは神話以前に存在した理想郷デルクラルだと言う事、無数の怪物たちによって廃墟になったのだという事、そして自分たちはそこから未来の地球に逃れてきた戦士の子なのだという事を・・
（3）世界の始まり
その昔宇宙には何も無かった、ただ百空の闇が辺りを包んでいたのだった
ある時異世界より3面の顔と6枚の翼を持った創生の神オルディナスが次元の扉を裂いて現れ宇宙に星の種をばら撒いたと言う
そしてその一つが菜ノ国（デルクラル）となったのだった。
その楽園には妖精人の実が生っていてそこからラマォスとアダムスと言う双子の妖精人が生まれた　だが世界にはまだ何もなかったので兄のラマォスは「女神よどうか光をください」と天に願った。
すると太陽霊神ラードが現れ日の恵みを与えた　次にラマォスは「大地をください」と願った、すると今度は大地と作物の精霊ラホメ

ル・モァーラが現れ大地を切り開いたのだった　最後にラマォスは「水をください」と叫んだ　雷と共に天から水竜ジル・ドーラが舞い降り　海と川と沼地などを作っていった
ラマォスは割れんばかりの声で「ありがとう」と女神に感謝の意を伝えたのだった。
彼は兄弟で力をあわせ村作りをはじめようとしたのだが、アダムスは優秀な兄に嫉妬し手がつけられなくなっていった、そこでオルディナスはそれぞれ2人の骨格からイブナ、オシナと言う女性を作り、それを伴侶として与えた
「お前たちはこれから力を合わせ国を繁栄させなさい　そしてこれからは人間の営みによって多くの子孫を築くのですよ」と語った
大喜びした2人は村作りに励むようになった。
イブナとオシナはそれぞれ3組の男女を産みそれらと力をあわせて鷹菜と言う村が出来上がったのだった。　その後妖精人たちは神々の守護の元、国は発展していったのだが
そんな彼らに女神は数々の試練を与えたのだった、1つ目の試練はアールマン・ゼィヨと言う巨人に首都鷹菜村を襲わせた、2つ目の試練はそれによって起こったダムの決壊であった　だが妖精人たちはラマォ兄弟の指導の下、見事に数々の困難に立ち向かっていった
　女神は力を合わせれば何でも成し遂げられる事を教えたのである
　こうして菜ノ国の王に選ばれたラマォスは周辺に作った鷲菜(わしな)、来瑠菜(くるな)芦津菜(あしつな)の3つの国とそれぞれ平和条約を結んだ
神殿らしき物も盛んに作られるようになっていった。
しかし菜ノ国が出来て数十年がたった辺りから人々の心に少しずつ変化が起こった
従順だった民たちの心を慢心が少しずつ支配していったのだという、その頃天にある神々の国アトラントでも反乱が起こったと言う　銀の翼を持った天使長シスフィーナはオルディーナスの支配する天の半分を支配しようと妖精や一部の精霊神たちを唆し反乱を企てたのだった、しかしオルディーナスの繰り出した聖剣セールゲーアによ

って胴体を貫かれたシスフィーナはオルディナスの手によって天から投げ落とされた　その時美しかった翼は自らの罪によって重くなり、あっという間に成層圏を落下していった　あるとき薬草を摘みに森へ入ったイブナは不気味な蛇ザザーラの誘惑に嵌まりあろう事か禁断の木の実を食べてしまった　それを夫アダムスにも与えたらしい、その結果2人は欲望の虜になり最後にはピラニアの形態をした　ガロスと言う怪物になったのだった、そして村人達を次々に食べつくしかつての美しい楽園は失われていったのだ、人々はこの邪悪な蛇を天を負われたシスフィーナではないかと噂するようになった。

2　世界の始まり（後書き）

シスフィーナはオルデイナスの分身または兄弟と云われている。

3　未来？への脱出！（前書き）

予言どうりに生まれた7人の少女たちは
時間を超え未来の地球（もうひとつの世界）へ

3　未来？への脱出！

（4）7つの星の誕生

ラマォスはオシナの娘ユアンとの間に3人の子を儲けた、賢いが乱暴な長男ワシダカ、美しいが冷静さに欠ける長女カナダカ　そして腕力が強くて人望もある末っ子のクマタカでした、この3人が二十歳の時　後継者問題が起こった　鷹菜の決まりでは家督を継ぐのはいかなる場合でも長男であり　それは鷹菜以外の国でも同じであった　しかしラマォ王は「他の国はともかく　この鷹菜国はデルクラルの中心なのだそれゆえそこを収める王は決して年齢とか序列で決めてはならぬ　たとえ女性であっても適任者なら王になれる事にする」と宣言したのだった　無論　王のこの意見には多数の反対者がいた　そこで王は住民たちによる投票によって次の王を決める事にしたのだった、これが現在も行われている選挙の原型である。

その日から各支持者たちは住民たちにあの手この手で多数派工作に躍起だったが住民の

ほとんどは賢く人望もあるクマタカを推したのだった。

「この投票は無効だ」と叫ぶ者まで現れた

そして二七歳の時ようやくその騒動は収まりめでたく王となったクマタカは目の前の障害を取り除かなければならなかった　それは父の代から増え続けていた魔人ガロスたちだった「このままではこの国は魔物の国になってしまう」クマタカはこの危機的な状況を予言の神ジブラ・ナイスに救いを求めた

ジブラ・ナイスは『デルクラルに危機が訪れる時、彼の地から7つの星が誕生する、男子ならエンドラ　女子ならばヴィーナスと呼ばれる戦士になるだろう、その者達が無事に成長することが出来ればこのデルクラルの大地は蘇るであろう」と言う神託を下した

次の年デルクラル全土には体の何処かに星型の紋章を持つ7人の少

女たちが生まれた
中でもクマタカは娘のミナを龍族のリーダーとして厳しく鍛えていたのだった。
5歳になったミナは毎日のように父クマタカに剣術など武術全般を習っていた。
「ミナどうした、かかってこんか　おまえはやがて龍族の長になるのだ　そんな事では
わしの後を継げんぞ」と鋭い目で娘を睨むクマタカにミナは倒されても　倒されても、何度でも果敢に父親に向かっていったのだった　周辺の村にはいつも『カキーン・カキーン』と、鋭い剣の音が響いていたと言う。（5）少女と獣馬
ある日の事夕食を済ませたミナはこっそり鷹菜の村を抜け出した
「父上ったら朝から晩まで修行　修行ってもう嫌になっちゃうよ、たまには気分転換もしたいのよね」と抜け出したまでは良かったが村から一歩も出た事がないミナは、紫苑の森近くをうろついているうちに完全に迷子になってしまった　「ねえ　ここ何処、道わからなくなっちゃったよーう」とミナはその場に座り込んだのだった、そのとき道の向こう側から体の3倍程もある大きな荷物を乗せた中くらいのトロ（獣馬）を連れた3つも頭があるラルマハ族のおじいさんが現れた　このデルクラルの国ではトロと言う猪とヤギの愛の子のような獣馬を家畜として飼育していた。
「何だもうへたばったのか、役立たずは要らねえだ」とおじいさんは怒鳴り、何度も鞭で打った挙句トロをその場に残して立ち去ってしまったのだった。
「まあ　こんなに荷物を乗せなくてもいいのに」と、トロに駆け寄ったミナは鞭で打たれた傷に薬草を塗ってあげた　獣馬は「ありがとう、おいらこんなに親切にされたのは初めてだモー」とお礼を言った
「私ミナ、ところであんた　鷹菜村までの帰り道分かる」と尋ねると「わかるって、誰にものを言っているモー、おいらに分からない

道は無いモー　それにおいらにはトマレと言う、立派な名があるんだモー」と獣馬は抗議したのだった。
「じゃートマレ、私の事もこれからはミナって呼ぶんだよ」
ミナはトマレの背中に乗り鷹菜村まで送ってもらったのだった。
それからトマレは同じ年に生まれた7人の少女たちの人気者になっていった
少女たちは修行がない日は、鷹菜の丘をトマレと駆け回って遊んだ
「ほらトマレ、こっち　こっち」とマレイ・ボールと言うフリスビーのような遊び道具を持って挑発するレイナ
「ほーら、今度はこっちだよ」とレイナからボールを受け取ったおかっぱ頭のユウコがウインクする　「よっし、今度こそボールは頂くモーよ」と夢中でボールを追いかけるトマレ　その日の昼食は丘でミナの母マロンナさんと手伝いに来ていたレーオンと言う少女が作った　ゲッタコ料理（海豚ダコを蒸した菜ノ国の一般的な料理）を草原に座ってみんなで食べた。
「美味しいねトマレ、私たちずっと友達でいようね」と言うとユウコ達も「そうだね」
と頷いていた　「私たちいつまでも親友だよ約束したよ」　みんなでそう確認しあったのだった。
　「これから何しようか」
「ミナ少しは自分で考えな」
「私はレイナみたくめったに休みはないので、考えない事にしているの」と中々行き先が決まらなかった
「ではこの先にあるギリーラの丘を見に行ったらどうですか」と手伝いに来ていたレーオンが口を挟んだ。
「ギリーラの丘って、それ何処にあるの」
とユウコが質問したら　トマレが「道案内ならおいらに任せるモー」と力強く言ったので　私たち7人はみんなでギリーラの丘に行く事にしたのだった。

（6）風の島のノリル
ここで少し整理しておくと、妖精人達は成人（男女15）すれば背中から折りたたみ式の翼が生え　地上なら自由に飛ぶことが出来るのだが　ミナたちはまだ子供なのでギリーラの丘までは全員で歩いて行ったのだった。
「ふう、まだ着かないのレイナ疲れたよ」
「もうすぐだモー」
そのとき輝く丘が頭上に見えてきたので　私は「あっあれじゃない」と指を刺した
「そうあれがギリーラの丘だモー」
私たちは一目散に丘に駆け登った
その瞬間眩いばかりの光が『ピッカー』と7色に輝き交互に差し込んだ　「わあ綺麗、とっても感動的だわ」とユウコが両手を広げて伸びをした　私もトマレも、他のみんなもこれには大満足だった。
「さて遅くなるといけないからそろそろ帰ろうか」と私が歩き始めたとき、何かが足に
『ゴツン』と当たった　何事かと足元を見ると「痛ってえなあ、いきなり何すんだ」
と声が聞こえたのでそこに目をやると小さなウサギが寝ていたのだった。
「何よこれ」と驚いた私に向かってそのウサギは『おいらは風の島から来たノリル』だとと名乗った。
「どうしてここへ」と尋ねると　ノリルは少し目を閉じ「空（くう）が目覚めた」と言うのだった。
私たちはみんなで丘にある洞穴に腰掛、ノリルの話を聞くことにした、ノリルは風の島で起こった出来事とその後の冒険談を語ってくれた。
○風の島＝シー・ラビット
「おいらが生まれた風の島は自然と豊かさに
育まれた美しい所だったんだ、島はラビットストーンと言う霊石が

採れ　住民のほとんどは漁や狩を生業としていた　ある日おいらと父さんのパパリルは病気のヤゴンさんに新鮮なトロンチ（魚面貝）を食べさせようと遠くの海まで漁に出んだけど、突然空が『パチパチ』したと思ったら何も無いところが穴が開くのを見たんだ　もちろん最初は小さな点だったのでみんなは気にせず漁をしていたんだけど、その穴はだんだん大きくなっていってとうとう風の島事呑み込みやがった、おいらは父さんが作ってくれた　気球、アッカンベ猫を操り何とか脱出したんだけどさ」

「ふーん、不思議な話だけど、メグたちには関係なさそうね」

「そう思うのは話の続きを聞いてからだろ」

「えっ、まだあるモーか」

「当たり前だ、これからが本番さ」とノリルは『ニヤッ』と笑い、また話し始めた。

○巨人の国ガリバレル

「それからは旅芸人として生計を立てていたおいらがアッカンベ猫とやってきたのは見るからにでっけぇ人間たちが住んでいるガリバレルだった、魔犬シルクヴェル（暗黒神ダーク・ナモの番犬）を信仰する彼らは小人族を食料にしてやがったんだ、おいらも何度となく危険にさらされたけどアムールと言う美しい巨人の一人がおいらの芸を気に入ってくれて、芸人として　雇ってくれたんだ　でもそんなガリバレルにも空は現れやがった　ある日首都ガリバードで興行をしてたおいらは黒い穴に『ゴー』と飲み込まれる町や巨人達を見たんだ、まあおいらはアムールさんがアッカンベ猫事遠くへ　ぶん投げてくれたおかげで助かったのだけどさ」

ノリルの話を聞いたみんなは「何か怖い」と強気のレイナまでが震えていたのだった。

「ではノリル最後の冒険と行きましょう」

と大げさに挨拶すると、ノリルは3つ目の話を始めたのだった。

○恐竜の国ザウン・パポ

「おいらが3つ目に立ち寄った国はザウン・パポと言う恐竜の国だったんだ」
「へー恐竜ってホッテンロッド（巨神族）のようなもの」と、トモミの質問にノリルは笑って「ホッテンロッドは知らないけど、多分違うと思う」と答え　また話の続きをはじめたのだった。
「そこにはデングル・ワンコと言う人間たちが住んでいたんだけど彼らの知能は大変低く
よそ者のおいらはたちまち捕らえられてしまったんだ「それは大変だモー」
「彼らはベロンちょ　と言う樹木の皮で作った丈夫な縄でおいらを縛り、丸焼きにしようとしやがった、さすがのおいらもこれまでかと諦めかけていたときマポンと言う恐竜がおいらを助けてくれたんだ　デングル・ワンコ達も石斧や電気槍などで応戦したんだけど、さすがに巨大な恐竜には歯が立たなかった」
「よかったじゃない、でも何で助けてくれたのかミーたんはさっぱり分かんないよ」
「それは恐竜のほうが彼らデングル・ワンコ達よりも知能が高かったからさ、それに彼らは何かと集団で恐竜狩りをしていて敵対していたって事情もあったんだ、とにかくおいらはマポン（女性らしい）にザウン・パポを案内してもらったんだ　ザウン・パポは首都シーラ・ポリスを中心に発展した海洋惑星だったんだ
おいらは毎日マポンとザウルの森を駆け回って遊んでいた、ところがここにもいつの間にか空（くう）が発生していたんだ、一点から発展した空は首都シーラ・ポリスをはじめザウン・パポ全体を飲み込んでいったんだ
何故おいらが助かったのかは覚えてはいないだけど「アンタニガシテアゲル」と言うマポンの声が記憶の中に残っているんだ」
ノリルの不思議な体験を聞いたみんなは黙っていたのだけど、ユウ

コが「これってガロス
とは関係ないよねぇ」とポツリと呟いた
「さあ関係あるのか　ないのかおいらにも分からない、ただ言えるのはいつかここにも
空は現れるってことだけさ」とノリルは答えるのだった　全員絶句していたけど私だけは知っていたんだ　あれはいつだったか父と訪ねたジブラ・ナイスの神託所にあった預言書それには『闇より現れし物、全ての不思議世界を飲み込もうとする　それに立ち向かえるのは龍の血を継ぐ双子のみ』と書かれてあった
（私たち7人の中には双子は一組もいないだとすれば誰かが結婚して双子を生むって事?その2人が空と戦うって事なんだろうか、それはいつなんだろう）と考えていたとき「どうしたおねえちゃん、そう深刻にならなくてもやつが現れるのはおそらく数百年先さ」とノリルは笑うと再びアッカンベ猫に乗りこんだ
「もっ　もう行っちゃうの、せっかく友達になったのに」とユウコは残念そうだったが
ノリルは「おいらはいろんな世界が見たいのさ、いつかまた会えるときが来るだろ　それまでまたなぁ」と手を振るとのリルは旅立っていったのだった、私たちみんなは彼の話が嘘である事を祈っていたのだった。
（7）未来への脱出
だがガロスとの戦いは年々激化していた
彼らはデルクラルの首都である鷹菜国に総攻撃を仕掛けてきたのだ
　妖精人達は勇敢に戦ったのだが　無限とも思えるガロス軍の力の前に苦戦を強いられたのであった。
その夜四つ目族の長老ヨーバ（妖婆）の館に集まったクマタカと妻のマロンナをはじめとする龍族の勇士たちは朝まで対策を話し合ったのだった。
そして次の朝ミナ達7人の子供たちを鷹菜の砦に集めたクマタカはこう切り出した

「ガロスたちの動きが予想以上に早い、おまえたちが成長するまでこの国はもたないかもしれない」
「そこで村中の皆で話し合った結果あなた達を未来の地球に送ることにしました」
とクマタカの妻マロンナが話を引き継いだ
龍族には全員が力を合わせれば一度だけ時間を超えることが出来る、次元転移の術が伝わっていた　それを未来を受け継ぐ子供たちのために使おうと言うのである。
「そんなの嫌だよ、ミナたちも戦うよ」
「そうだよユウコ達だって戦えるよ」
「おいらだって、戦うモー」
「その意気込みは立派だがお前達はまだ６歳にも満たぬ、戦士として成長するにはまだまだ時間がかかる」
「ゆえにあなた達は未来の地球でそれぞれの心を成長させなさい、こっちでの記憶は失われるでしょう　でもいつか心に誰かの呼ぶ声が聞こえた気がしたなら　迷わず行動に移しなさい、そのときこそあなた達の止まった時間が再び動き出すのです、その時までミナあなたがみんなを導くのですよ良いですね」
「でも私、逃げ出すの嫌だな」
「いいえ逃げるのではありません、力を蓄えるための旅立ちだと思いなさい」
「はい、母上」
「きっと帰ってくるんだモー、それまでいつまでも待っているモー」
「トマレそれまであんたも生きているんだよ
約束したよ」
「分かったモー」
私はしばしトマレと抱き合っていた、他の皆もトマレとの再会を心に誓っていたのだった。
「では行ってこい我が娘達よ、そしていつの日か戻ってくるが良い
このデルクラル

いや惑星ＭＡＯを救うために」
父クマタカは力強くそう言って私たちを送り出した。
一族のみんなは輪になってわたしたちを囲むと心を一つにして「偉大なる我ら龍族の神
ジル・ドーラよこの子らを遥かなる未来へ送りたまえ～デルクラル～エンドラル～オッペケペーデルクラル～エンドラル～オッペケペーデルクラル～エンドラル～オッペケペー」と3回呪文を唱えた
すると空間が開き
私たち7人を未来の地球へと誘ったのだった
「逃げるんじゃないからね、いつか帰ってくるんだから」
私たちは自分自身にそう言い聞かせていた。

4　海の思い出！（前書き）

地球に逃れた子供たちは、それぞれの運命を送る
～やがて　一つになるために～

4　海の思い出！

（8）それぞれの時間
１９９６年東京　春
全国的に地震や津波といった災害が相次いだ
この年、関東地区の各地で異様な衣装を身に纏った少女たちが発見させた　私を含めなぜか全員名前以外は記憶を無くしているようだった。皆はそれぞれがそれぞれの夢を追いかけ成長していったのだった・・・やがて一つになる為にね。
千葉の森の中で発見させた私は国風園と言う
孤児院に入れられたのだった、国風園は
代議士だった国風東によって１９６１年に浦安に作られた小規模な施設だった。
中にはお下げが似合う真奈美ちゃん、少しやんちゃなタケルくん、おとなしいケントくん
そして太っちょの安丸くんとおかっぱ頭をした優子ちゃんの５人がいた。
「今日は皆さんにお友達の紹介をします」
と、東の孫国風まゆみ先生が子供たちにそう言ったので　私は自己紹介をはじめた
「えー、はじめまして私の名は美奈といいます、どうしてここにいるのか分からないけど仲良くしてください」とお辞儀をした、すると他の子供たちからは『パチパチパチパチ』と拍手が起こったのだった。
長い髪をかき上げながらまゆみ先生は「それじゃあ美奈ちゃんは優子ちゃんの隣に座ってね」と言ったので私はおかっぱ風のその子の隣の席に座ったのだった。
しばらくしてその子が「あなたも記憶がないんだ」と耳元で囁いた
「えー彼方もなの」

と私が聞き返すと、その子は笑って
「えへっ、私優子これから仲良くしようね」
とウインクしたのだけどその仕草がなんとなく懐かしく思えたの
私たちはいつか人々を感動させられる歌手になりたいと言う同じ夢
を語り合った
子供を事故で亡くした高熊家に養女（戸籍上は実子）として引き取
られたのはこの少し後の事だった。
それはある晴れた日、ここへ来て三ヶ月になろうとしているときだ
った
私と優子はケントくんと秘密の隠れ家でお城ごっこ（王様と召使）
をして遊んでいた時、見るからに高そうな白い車が園の前に止まっ
た　中からは優しそうな紳士と少し疲れた感じの女性が出てきて園
長のまゆみ先生と事務の牧原先生とが紳士たちを向かえたのだった、
４人は何やら話し込んでいるみたいだったがここからでは遠くてよ
く見えなかった
「何　話しているんだろうね」と私が言ったら普段はおとなしいケ
ント王子が「近くでこっそり聞いちゃえばいいんだ」と手招きした
ので私たちは草むらに隠れてまゆみ先生たちの話を聞いていた。
「私は父から受け継いだ造船業をさらに発展させようと躍起になっ
ていました、まあ傍目から見れば家庭を顧みない父親に移っていた
かもしれませんが　それで娘の美奈代は妻任せにしていました　そ
んなことから妻への感謝を兼ねて娘と３人で九州のほうに家族旅行
に行くことにしたのです。」
と、紳士は重い口を開いた
「３歳になる美奈代は大変喜んでくれたのですが、阿蘇算近くで買
い物をしていたとき
妻がちょっと目を離した隙に車に引かれて亡くなってしまったので
す　それ以来妻は病人のようになってしまいました　私自身も仕事
に身が入らず悩んでいたところ　先日山井と言う部下がこの施設で
美奈代にそっくりな子を見かけたと言うので仕事そっちのけで

駆けつけたという訳です」
と、涙ながらに語った。
「なるほど話はよく分かりました、牧原　例のモノをとまゆみ先生は美奈の写真を持ってこさせた　それを手にした女性は「ほんと美奈代にそっくり」と涙ぐんでいた
「これは美奈ちゃんにとっても、いい事かもしれません、前向きに検討しましょう」
と　まゆみ先生は語ったのだった　そのとき
「やだい、せっかく美奈ちゃんと友達になったのに」
とタケルくんが部屋に飛び込んできた
「そうだよ、美奈ちゃんを連れていかないで」と安丸、真奈美、の2人も現れた　まゆみ先生は落ち着いた声で「そんなこと言っちゃーいけないわ、みんなだってお父さんとお母さんが欲しいでしょう　大切な仲間にこんな素敵な両親が出来るんだから歓迎してあげなくちゃあ」と諭した
みんなを代表してタケルくんが「分かっているよ、僕たちただうらやましかっただけだよ」と答え先生にしがみついて泣いていたのだった。
私は「ありがとうタケルくん、真奈美ちゃん安丸くんと心の中で感謝していたのだった。
（9）海の思い出
その年の夏　私たちは牧原先生が運転するマイクロバスで神奈川県に向かった。
「ほら優子ちゃん見て、カモメの大群が飛んでいるよ」と私は車の中から指をさした
「ほんとだいっぱいいるね」と優子もはしゃいでいた。
「皆さん目的地に着いたらみんなで海の家を作ります」とまゆみ先生が言うとみんなはいつもなら「ちっ、またか」と悪態をつくのだが今回は「任しとけ」って、張り切っていた。国風園では毎年の恒例行事らしいのだが、

今回は私と優子の最初で最後の参加になりそうだった　それと言うのもあの後優子が音楽家の一族　霧島家に貰われることが決まったからだった、タケルくんやケントくんたちは「ぜったい最高の思いで作ろうな」って誓っていた。
海岸に来ると私たちは地元のおじいさんの指示で海の家の準備をはじめた、昔はこの辺りは観光客で溢れていたのだけど、ここ5～6年は不況の影響で毎年減り続けていたのだった。
「おまえら今年もまた来たのか、せっかくだからビールくれや」とサングラスをしたそっち風な兄さんがやってきた
「あのぉ、まだ準備中なんですが」
とまゆみ先生が言うと　そのチンピラは
「そこにあるじゃねーか」と怒鳴った
私は「これはまだ冷えてないんだよ、それでもよかったらあげるけど」と言ったら
「ばかにするない、温いビールが飲めるか」
とそいつは襲い掛かってきた、そのとき私はとっさに大の大人を投げ飛ばしていたのだった「こっ、このガキー舐めやがってぇ」
と向かってきたそいつの足を優子が払ったので　男は地面に『ドシーン』と顔から倒れたのだった　まゆみ先生やケントくんたちは「すっ、凄い」と驚いていたのけど　私と優子は「偶々だよ」と自分たちで驚いていた。
お昼はみんなで新鮮な魚類などでおなかを満たした　そのとき　でっかい貝料理を食べていた優子が突然「これゲッタコに似ている」と言ったので私も「ほんとだふるさとの味にそっくり」と言ったらみんなが「ゲッタコ？
何だよそれ、まゆみ先生しってる」
「いや聞いたこと無いけど、2人は知っているの」と聞いてきたので私たちは「いやっ、
口から勝手に出ただけ」と言ったらみんなは

頭を捻っていたのだった。
「ねえ、この向こうの岩場におかしな洞穴があるんだけど行ってみないか」とタケルくんが誘ったので私は「先生たちが心配するよ」と拒否した　でもタケルくんが「近くだからすぐ帰れるよ」と言うので私たちは先生たちに黙って沖へ出た　一時間ほどボートを漕ぐと目的地の岩場に着いた　しっかりとボートを縄で括りつけるとタケルくんが「ほらあの穴だよ」と言ったので　私たちは洞穴を探検して歩いた「なんか怖い」と一番強そうな安丸くんが震えていたので　私は「先生が心配するから帰らない」と言ったのだった
「帰るってたってどっちだっけ」とタケルくんが辺りを見回した「おいおい、案内人が迷っちゃあ仕方ないだろ」と、珍しく無口なケント王子が突っ込んだタケルくんは「こっちでいいんだったよな」と立ち止まった　するといつもは冷静な真奈美ちゃんが「うえーん帰りたいよう」と泣き出したのだった
そのとき洞穴全体が7色に輝いた
私は「ここは　たしか　どっかで」
と考えながら「こっちよ」とみんなを誘導していた　何とか迷路を抜け出した私たちが
『ほっと』ため息をついたのもつかの間
今度は安丸くんが「おーい、ボートがないよー」と喚いていた　潮はだんだん満ちてきて私たちは全員で抱き合って振るえていたのだった。
そのころ先生は私たちのいないのに気づいて地元の人みんなで探してくれていた
「私たち助かるんだろうか」そう考えていた私の心に「ミナあなたがみんなを導くのですよ」と言う声が繰り返し聞こえてきた
「助け呼んでくる」そう言って私は海に向かった　後ろからは「無茶だやめとけよ」と誰かの声がしていたようだけど私はかまわず飛び込んだ「助けるからね、みんな今助けるからね」でも思ったより海は荒くとても5歳の

女の子が何とかできる筈も無かった
「ギョエーこんなにあるの」
行くときは夢中で距離のことなど考えなかったが目の前には壮大な海が広がっていた
そのとき大きな波が起こり私を襲った
みんなはそれを祈るような気持ちで見守っていた　そのときモーターボートを操りイケメンの青年が現れた　ボートの中には私と同じくらいの少女いた　その子は「さっ、あんたこっちにつかまりな」とは私に手を伸ばした　その手をとった瞬間何かが頭の中を駆け抜けたのだった　結局私たちは叶家所有のボートに助けられたのだった　先生やみんなは青年と少女にお礼を言った　その少女は「まったくミナはドジなんだから」と抱きしめてくれた　「じゃーまたねレイナ」と私は別れの抱擁をしたのだった　「ところでタケルくん、沖に出たいっていったの　どうせあんたでしょう」とまゆみ先生が尋ねるとタケルくんは「だって思い出作りたかったから」と言いかけて『あーあ』とでっかい声を上げた　まゆみ先生が「どうしたのよ、突然大声なんか上げて」と言ったら「ねえ、まゆみ先生、さっきの美奈たちの会話少しおかしくない」と質問したので「そう言えば、何でお互い名前知ってたのかな」と考え込んでいた。
その晩は盛大なキャンプ・ファイヤーで盛り上がった、タケルくんは「ドジったけど、素敵な思い出が出来た」とだけ言って涙ぐんでいた　真奈美ちゃんや殆ど目立たない安丸くんやケント王子も涙で前が見えない状態だった　私と優子は「別れじゃないよ、またいつか会えるよ」と大声でさけんでいたのだった。
別れの朝タケルたちは「美奈、幸せになれよ、俺お前のこと忘れないからなぁ」と梅の木に登って見送ってくれた　3日後に国風園を離れる優子もウインクで見送ってくれたのだった。
私は窓から体を出し梅ノ木に向かって
「さようならタケルくん、真奈美ちゃん
安丸くん、ケント王子そして優子　いつかまた会おうねぇ」と叫ん

でいたのだった。

5　歌は伝説を超えて！（前書き）

ケントたちと別れた少女たちはやがて、歌手と言う１つの夢で結ばれていった

そしてついに最後の戦いが・・・

5　歌は伝説を超えて！

「優ちゃん早く行こうよ」と桜台にある霧島家の玄関の前で私は親友の優子を呼んだ
「待ってよう美奈」と言って急いで玄関から飛び出してくる優子
小学部に進学した私たちはＡＫＢ学園で再び隣同士になったのだった、同じ6歳という事もあって、今ではかけがえの無い親友になっていた。
学校の無い日曜日の今日は私たちが大好きなキナコ娘。たちのコンサートが桜台公園で行われるのだ、私たちは満員の広場の一番前の席で応援した　会場は『ワーワー』と言う
熱気に包まれていたしばらくして『オオー』っと言う歓声が聞こえたので振り返ると
客席の後ろ側の席から7人組のユニット
キナコ娘。たちが現れたのだった。
メインボーカルのナナが「みんなー今日は私たちのコンサートに来てくれてありがとう、
まずはデビュー曲『星は輝く』を聴いてください」と挨拶した、後ろからは『ナナー、愛しているぜー』と男性ファンからの黄色い声援が飛んでいたのだった。
会場には宇宙をイメージしたプラネタリウムが３Ｄ映像で現れ、軽快な音楽が流れ始めた
歌『星は輝く』
星は輝く、愛は瞬く　幾つもの出会いと別れ繰り返しながら、貴方の胸でそっと呟く
私たち2人まるで天使のようだね
この世界に生まれて来た事を　後悔していない　そう僕らはすべて望んで生まれてきたのさ　辛いときでも楽しいときでも僕らは頑張ってきた　諦められない夢と言うゴールが待っていたから　宇宙に

は素晴らしい物がたくさんあるはずさ　僕らはそこを目指してただボールをけり続けるだけさ　君を失ったとき初めて絶望と言う意味を知った　そう深い　深い　深い　深い悲しみが　心を蝕んでいたでも心には素晴らしい君の思い出がある
星は輝く、愛は瞬く　幾つもの出会いと別れ繰り返しながら、心の中で信じ続ける
いつか遠い世界で　また巡り会えたらいいね
「いい曲ねえ」と、あちこちで大声援が巻き起こり私たちも惜しみない拍手を送ったのだった　そのとき歌がこんなにも人の心を惹きつけることを改めて悟った
いつか私たちもステージに立とうねって誓い合ったのも丁度この頃の事だった。
□　戻る

（１０）少女たちの戦い

○砂漠世界ＭＡＯ

「トマレ、しっかりしてよやっと会えたんじゃない　美奈を待っていてくれたんでしょ」

「そうだよ　また麗菜たちとボール遊びするんだから、こんな所で寝ている場合じゃないぜ」と麗菜は大声で励ました。

「・そっ　そうだね　またみんなで遊ぼうモー、でもおいら何だか少しだけ眠くなっちゃった　ミナさんお帰りモー、おいらずっと・待ってた・・」

そう言ってトマレは息絶えたのだった

「駄目だ　死ぬなぁ、トマレ」

「キサマタチハ　マダ　イキノコッテイタノカ　たった４人で我々に勝つつもりか」

と恐ろしい形相で４人を囲む怪物たち

「いやっ、４人じゃないよ　私たちもいる」

と何処からか声がしたので振り返ると、？ｅｎｕｓの他の３人が現れたのだった。

「恵？」と私は言った
「敦ちゃんもいるよ」と友美
「峰ちゃん元気だった」と麗菜
そう私たちは思い出していた自分達がかつて
？ｅｎｕｓと呼ばれた戦士の子なのだと言う事を　ここは神が最初に作り上げた楽園デルクラルだという事を　そして戦いは遠い過去ではなく今始まるのだということを
「おまえたちを呼びよせたのは私だ、今こそ戦うのだ？ｅｎｕｓの戦士たちよ」と天空から龍の声が響いた
「思い出した、みーちゃんたち戦士だったんだね」と峰ちゃんが笑った
『ガガーォ』と吠え荒野に勢ぞろいする怪物ガロスたち、そのとき私たちはそれぞれ心の中でトマレの遠吠えを聞いていた。
「どうしてここに」と尋ねた優子に
「思い出したんだ、メグ達は戦うために生まれてきたんだって事を」
「誰にでも忘れられない時間があるように
敦子たちの止まっていた時間が、動き出すときが来たんだよ」と澄んだ目でそう答えたのだった
『ガオー』と唸り突進しようとする怪物たちに「そうだよ、今こそ戦うときだよ」
と私は全面対決を宣言した。
7人の少女たちはそれぞれ白鳥や鷹など動物のポーズを取っていた、そして叫んだ
「変身」と　風が起こり天空からは紫の龍が舞い降り何処からかロックのリズムが流れた
そして光の中から龍の鎧を纏った　私たち
？ｅｎｕｓの戦士が現れたのだった
私の「ゴー」と言う号令を合図に私たち7人の戦いが始まったのだ
自分たちの過去を抜け出すための戦いが・・
♪【銀の翼のノリル】

『真実を見つめながら僕らは生まれてきた
この世界という衣を纏って
いつかは大人になり　歩き出す時が来る
その日が訪れると誰もが信じていた
だけど世の中は災いと欲望ばかり
穢れ亡き者達は、どこへ消えてしまったので
しょう　ノリル　その翼を銀色に染め
全ての者たちを　導いてほしい　たとえその
翼が黒く染まることがあっても、いつかは世
界を救うことが出来るはずさ
2番
何もかも忘れたくて逃げ出したこともある
自分と言う存在を否定して
白い鎖でしっかり結ばれていた
絆って言うやつを、まだ信じていた
人の愛情に染まった天使たち
地球と言う　この星にその答えがあるという
ノリルその翼を銀色に染め、次なる世界
へ羽ばたいてほしい　君がこの世界に安らぎを求めるなら、この無
限世界は一つの楽園となる
セリフ『今この星は危機を迎えています
人は人を襲い、裏切り　環境は破壊され続けています　それらを救
うのは政治家でもなければもちろん科学者でもありません
それは穢れのない心だけです
誰もが信じあい　許しあい　譲り合うことによってのみ、この世界
を再生出来のではないでしょうか
その為に何が出来るのか
私たちは今試させているのです』
ノリル人は誰も弱虫なんだよ、でも何かと　戦いながら　みんな必
死で生きてる　アーノリルその翼を銀色に染め全ての者たちを導い

てほしい　たとえつかの間でも
時を越えることが出来たなら全ての世界は一つに（融合）なるだろう』
集団で攻撃を仕掛けてくる青いガロスたちにユウコのミスト・ブーメランが次々に炸裂する、トモミはメイ・ビーナと言う電磁鞭で戦っていた　レイナは龍馬マイ・ロビンを操りガロスたちをかく乱していたのだった、メグとミーちゃんはガロスの配下のムデ人間達に苦戦していた　だが影のような物が2人を手助けしていたのだった。
「あれは・・トマレちゃん?」
「何バカ　言ってんだよ、いくよ　ダブルハイドラー」と熱線を浴びせる恵とみるく
『ギャーア』とムカデの焼ける音
『てやーあ』とアツコの封陣拳がイブナの額を捕らえていた　『ウオーォ』と緑の血を流し『ヴォノレー』と荒れ狂うイブナ
一方私は父クマタカから授かった聖剣セルゲイアでリーダーのアダムスと戦っていたのだけど奴が体内から噴出す暗黒ガスに苦戦していたのだった。
「ワッハッハッハッハッハ、お前如きまだまだワシの敵ではないわ」と勝ち誇るアダム
スくっ　悔しいけど今の私では手も足も出ない」と、崖に追い詰められた私は悔し涙
をしていた。（負けられない、みんなをこの世界を守るだ）
後のない私はそれでも諦めていなかったその時「ミナ　負けちゃあだめだモー、ミナ
ならきっと倒せる、いやっ　そいつはミナにしか倒せないモー　おいらがそのチャン
ス与えるモー」と言う声が聞こえた、見れば影のような物がガロスの肩に咬みつい
てた「今だモー、おいら事奴を倒すモー」
「だってそれじゃーあんただって」

「ミナ、おいらは実体じゃないモー」
「ようしそういう事なら」ミナは目を閉じ
剣を構え叫んだ「オルディナス・エンドラル
＝ラ・マォダー」その瞬間剣は赤く輝いた
「唸れ、セール・ゲーイ　アー」
『ピッカー』「放せ、ハナ・セ・・」
『ウギャー』
絶叫と共にアダムスは溶けていった、他のガロスたちもセルゲイアの光を浴びて消
えていったのだった。
「すっ　凄い、これがセルゲイアの剣の力なのか」と　呟いた私に「違うミナおまえの力だ、剣は仲間を守りたいというおまえの心
に反応したに過ぎない、おまえがみんなを守ったのだ」と龍の声が聞こえてきた、そ
の時　私たち7人は過去を乗り越えた事を悟っていたのだった。
〔エピローグ〕歌は伝説を越えて
ガロス達を倒した私は、天に向かって声を限りに叫んだ。
「勝ったよ　私たち、トマレー見てくれているよねぇ」その瞳は涙で霞んでいた、他の少女たちも全員トマレを思い出して泣いていたのだった。
『龍の子？ｅｎｕｓの戦士たちよ　よく聞くがよい、おまえたちの活躍によって確かにこ
の世界は救われた　魔人どもに荒らされたこの村も、やがては元通りになるだろう
だがおまえたちは旅立たねばならぬ」とジルドーラは語った。
私は「どうしてですか」と尋ねた
すると「いま世界は急激に破滅に向かっている、それはおまえたち人間が引き起こ
した、環境破壊や慢性的な飢餓が、至る所で拡大しているせいでも

ある」と龍は告
げた　そのとき私たちの脳裏には　増え続けるゴミ原油の垂れ流し
によって死滅す
るや魚たち　飢えに苦しむ子供たち、災害によって家を失った人間
たちのイメージ
が々に浮かんできた　「それを救うのは穢れのない心を持った者達
だけだ、おまえ
たはもう一つの世界地球を救うために　これからも戦い続けるのだ
？ｅｎｕｓの戦士たちよ」龍はそう告げた　その瞬間私たちは何故
か大
粒の涙を流して泣いていたのだった。
「さあ再び時を超えるのだ、すべての世界を破滅から救うために」
そう言うと龍はどこかへ飛び去っていった。
みんなは最後に「トマレー、また会おうね」
と叫んでいた、トマレが何処かで見ている気
がしたからだった。
そして私たちは再び時間を超え　もう一つの地球に帰っていった、
全ての世界を歌と言う武器で救うために　もう一度みんなのアイド
ルになるために
・・はるか上空からは不気味なドクロが地上を見下ろしていた。
「見事だ？ｅｎｕｓの戦士たちよ、だが我らは人間達の欲望がある
限り滅びることはない　次なる戦いを楽しみにしておるぞ
フッハッハッハッハッハッハ」
～そして少女たちの歌は時空を超え伝説になった～　　ＥＮＤ

第二部『エンドラの妖精』（前書き）

第二部はデルクラル以後のエンドラを中心とした不意議界の物語です。

第二部『エンドラの妖精』

1話『妖精村の人々』

ここは私たち人間界のすぐ隣にある不思議界そこには3千歳を超えるヨーバと言う4つ目族のおばあさんが赤レンガのお家に住んでいました、おばあさんは子供たちに昔話をするのが大好きでした。「おばあちゃん、今日も何か話してよ」と、アルルと言う少年にねだられ、おばあさんは話しはじめたのでした「はるか昔　この宇宙には何も無かった　ただ果てしない百空とカオスのみが辺りを包んでおった、あるとき3面の顔に6枚の翼を持った
　創世の神オルディナスが次元の扉を裂いて現れ宇宙に星の種を撒いたという
そして生まれたのがこの不思議界なんじゃ」
『ふーん』と感心する子供たち
いつしか鷹を連れた少年やデルモ・グリスと言うクモとトンボを混合したような
奇妙な生き物を連れたホッテンロッドと言う巨人までがおばあさんの話を聞き入っていました。
「だがその頃はデルクラルと呼ばれていて
そこには妖精やお前たち人間たちの祖先の
妖精人たちが住んでおったじゃがあるとき彼らは滅んでしもうたんじゃ、人も文明もな」
「ねえ、どうしてなの」
と茶色の髪をしたローザと言う戦士族の女の子が理由を尋ねた
でも、ヨーバはそれには何故か答えなかった
「そして何も無くなった世界を再生するため
オルディナスは自らの細胞から7人の
御使い（天使＝妖精神）たちを生み出した
そして彼らに後を任せ消え去ったと言う

彼らはまずトウモロコシと水を捏ね合わせて
人間や多くの妖精たちを作った
次に西にミレーネ　南にエルフ、北にルイクス
東にライオマ等の国を作りその中心に
このエンドラを作ったのじゃおしまい」
「もう終わりなの　おばあちゃん、もっと話してよ」
「よしよし　この次にはフレーロの冒険の話を聞かせてやるで
今夜のところは帰った帰ったぁ」
とヨーバは家に入ったので　子供たちも
仕方なく家に帰ったのだった。

2話『少女と砂虫』（前書き）

不思議谷（聖地）を除く砂漠の国エルフにある
ぞゾゾナ村の物語、もうひとつのアラビアンナイトです

2話『少女と砂虫』

エルフの砂漠地帯ゾゾナ村にマリリと言う少女が住んでいました
マリリはいつも砂漠の中央に住んでいるデルモ・グリスと言うムカデの身体に
トンボの羽を持つ大きな砂漠虫と遊んでいました、しかし村の人たちはその異様な姿を毛嫌いし誰も近づきませんでしたし母親のユウウも「そんなものと遊んではいけません」
と叱るのですがマリリは言う事をききません　その為マリリはとうとう
家の奥にある洞窟に閉じ込められてしまいました。
「もう遊ばないからここから出してぇ」
マリリは泣きつかれていつの間にか眠ってしまいました　そんなときゾゾナの村では
大変なことが起こっていた、ターバンを巻いた不気味な男たちが村を荒らしに現れたのです
でも王国の警備隊が駆けつけたときには既に立ち去っていたのだった
　それが最近エルフ一帯に出没する怪賊マリチェンと９１人の盗賊団でありました。
このゾゾナ一帯を治めているのはゲジゲジとトカゲの砂漠虫ゲジゲジ男爵でした
でもその醜い姿と陰険な言葉づかいに住人たちからはとてもきらわれていました
男爵は蜥蜴を模した椅子に腰掛けてゲジゲジスープを飲んでは臭い息を吐きながら
部下のパレクスに「何い、また逃げられたゲジスか
いったい何回取り逃がしたら気がすむゲジか」と怒鳴っていました
パレクスが言い訳しようとすると「言い訳は聞かないゲジよ、今度取り逃がしたら首ゲジよ」

と言い渡した　パレクスは「はっ　必ず」と言ったまま宮殿を出て行きました
しばらくして男爵は「仕方ないここは一つ彼女に頼むゲジか」と奥に待たせてある者と何やら相談をしていました。
翌日洞窟から出したもらったマリリは母親のユウウから「さあ出立するからお前も早くおし」と言われた　マリリが聞き返すと
ユウウは「仕方ないんだよ、盗賊団は何故かこの村を襲ってくるんだだから　村長さんと話した結果みんなでこの村を出ることにしたんだよ」
と説明してくれた　「嫌だァもっと砂虫さんと遊びたいのに」とダダをこねるマリリに
「もう決めたことなんだよ」とユウウは悲しそうに語った

?本当の美しさとは？（前書き）

女神が降臨し、人々に本当の美しさを教えます。

?本当の美しさとは?

その晩こっそり村を出たマリリは「砂虫さんいつも遊んでくれてありがとう、これお礼だよ」
と言って砂丘の中央にブレスレットを置いた
するとそれを遠くで見ていた盗賊団が
「あれだ別の世界に行けるというブレスレット、やはりこの村にあったのか」」
と叫び９１人の仲間たちと共に怪馬に乗ってやってきました
　マリリはすっかり盗賊団に囲まれてしまいました　同時に村を出ようとした
他の人々もあっという間にマリテェン一味に掴まってしまった。
怪賊マリテェンはブレスレッドを手にすると「これさえあれば村人共たちに用はない
洞窟に連れ帰り仲間ともども皆殺しにスルのダ」と言って砂漠を立ち去ろうとしました
そのとき中央から「ソレハボクノダ」と言ってデルモ・グリスが出現したマリリは
「あっ砂虫さんダ」と言い喜びました、、でも盗賊団は「ギェー砂虫だ」
と叫び槍で攻撃を始めました。
「バミョーン」と砂虫が吠えるとあちこちからたくさんの仲間達が一世に現れ
盗賊団を囲みましたマリテェンは部下たちに「何をしている　やっつけてしまえ」
と指示しましたが全員逃げ出してしまったのでした、マリテェンは仕方なく
「チッ臆病者どもメ　まあこのブレスレットが手に入っただけもヨシとするか」

と言いたち去ろうとしたところに蛇の顔をした老婆が現れブレスレットを奪い取ると
「おまえの役割はここまでじゃ」と言い剣でマリテェンの腹を射ぬくと
「フフフこれさえあれば」と言って消えていきました、マリテェンは「オノレー騙したな」
と呟き絶命したのであった。まもなくしてパレクス等警備隊が隠れ家から村人達を助けてゾゾナ村にやってきました、こうして盗賊事件はあっけなく終ったのでした。
それからしばらくしてから村人達はすっかり砂虫と仲良くなりました
母親のユウウは「私が間違っていたヨ何事も見かけだけでは分からないものだね」
と言うとマリリは笑って「うんそうだね」と答えたのでした。
その晩いつもの砂丘でマリリは砂虫さんに「ゴメンネせっかくのブレスレッド取られちゃった」と謝ると「言いダヨこちらこそお礼を言わせてほしいダヨ」と答えた
マリリが「なんで」と尋ねたらデルモ・グルスは「嫌われ者だったおらたちを村人達は今では
こうして必要としてくれている、皆マリリのおかげダありがとう」
と答えたのだった。
ある朝ゾゾナ村に眩い光が差し村人達は全員何事かと外に出た、砂虫達もぞろぞろと
砂の中から現れ皆一世に光の方向を見上げた時無数の輝きを放ちながら
女神オルディナが現れた村人達は一世にひれ伏したが砂虫達は感激し「オカアサマ」と喜んだ
女神は村人たちに向って「ゾゾナの人たち良く聞くがよい、この子等は私とゲジゲジ男爵との
間に生まれた3百匹の子供達である」と告げると村人達は「ゲジゲジ男爵あの陰険で汚らわしいやつ」と言っただが女神は「愚か者ど

もまだ分からぬか人は見かけや姿ではない
人には誰でもよい部分と悪いと部分があるはずじゃ、ゲジゲジはあれで本当は気の優しい男ヨフフフ」と笑い
「世の中には表も裏もある表面だけを見ぬようにしなさい」と諭すと女神は去っていきました
マリリは「女神様、また来てね」と言って手を振ると砂虫達も「カアサママッテルゾ」と言って全員で女神を見送っていたのでありました。
なお　この物語が元になって後にアラビアンナイトが生まれたらしい。

3話『勇者フデーロの冒険』（前書き）

平穏な不思議界であったが、太陽神が作物の女神の娘を誘拐するという事件が起きます。

3話『勇者フデーロの冒険』

（1）少女ロズマリナ

日の国太陽神殿アラーマーにはラード神が住んでいました、彼は朝になると空飛ぶイルカに引かせた車を操り東の空から昇り　夜は西のほうへ消えていくと言う毎日を日課にしていたのだった。

あるときラードは所要のためルイクスの町を訪れた時ミレーネにも足を延ばした、ミレーネは不思議界の西に面しており大地と作物の精霊ラホメル・モァーラが娘のロズマリナと2人で暮らしていました　「ミレ（ロズマリナの愛称）もうすぐ作物祭なので飾りに使うアウトビ（ヒヤシンスのような）の花をつんできておくれ」

「分かったは母さん、泉のほとりに咲いているあのきれいな花ね」

そう言うとロズマリナは侍女のモルナと一緒に出かけて行った　彼女は泉の近くに着くとモルナを待たせて近くの川で水浴びを始めました、でもたまたまそこを通りかかったラードがその姿を目撃していたのだった。

（2）　ラホメル・モァーラの嘆き

ラホメル・モァーラは娘ロズマリナの帰りが馬鹿に遅いことを心配していた所「姫様がさらわれたらしい」と言う噂があちこちで聞こえてきた　最初は「間違いかもしてない」と思い　しばらく待ってみたのだが何の連絡も無かったので　まずます不安をつのらせていたところに侍女のモルナが「大変です姫様が太陽神に攫われました」と大慌てで飛び込んできた　その報を聞いた瞬間モァーラは嘆き悲しみ　神殿の奥に閉じこもってしまった

それ以来不思議界全ての作物が枯れ果ててしまったのだった。

ラードがモァーラの娘を連れ去って以来　人々はたいへん困っていた。と言うのも種をまいても眼が出ず全く収穫に成らなかったから

である。当時ミレーネの国の長をしていたカルトジは、方々の国へ伝令を出し皆をミレーネの神殿に集めた　そして「誰か太陽の国へ行って、ロズマリナ様を救い出す者はいないか?」と勇者を募ったところ、エルフの国のフデーロと言う少年が「私が参りましょう」と進み出たのだった。

?不思議谷の勇者（前書き）

モァーラの娘　ロズ・マリナの救出に向かう　フデーロの前に妙なカエル?が現れる

?不思議谷の勇者

（3）不思議谷の勇者

カルトジは「日の国は空にあるのだぞ、いったいどうやって行くつもりだ?たとえ君が妖精でも宇宙までは飛べぬのだぞ」と告げた、しかし少年は「私には友達のモーモ（不思議谷に住む大鷹）が居るのでこれに乗れば天にだってあっという間です」と答えたのだった。

カルトジは「日の国にはそれで行けても、周りは１００万度もあるのだぞ、たちどころに溶けてしまうぞ」と言った。これにはさすがに少年も困ったのだった。その言葉を神殿の奥で聞いていたラホメルモァーラは「もしあなたが娘を救い出してくださるのなら、太陽の国に行く時に使う日除けクリームをあげましょうと言って、また泣き崩れたのだった。カルトジは「少年よ、お前に任せよう見事姫を救い出してくるが良い」と言った。フデーロは「それで日の国にはいつ出発すれば良いでしょう」と尋ねたところカルトジは「準備があるだろうから一週間後に出発するが良かろう」と答えたのでフデーロは早速、日の国へ行く準備を始めたのである。太陽宮殿アラーマの地下の牢獄に一人の美少女（ロズマリナ）が囚われていた、目の前には王冠を被ったハゲタカの様な老人が居た　太陽霊神ラードであった。

ラードは「姫よ、そろそろ泣くのは止めて、わしの妻になると誓ってくれぬか」と尋ねた。　すると少女は「それは死んでもお断りします。それより私をお母様の所へ返しください」と泣くのだった。ラードは仕方なく「ではもう少し牢獄にいて貰わなければなるまい」と言うと門番の霊下達に「よく見張っていろ」と言って何処かへ行ってしまった。フデーロは次の朝さっそく　森の精霊王キリルの指示でロズマリナ救出に必要な物を得るためにレゼーネの沼地に向っていた「ラードの配下ギリモナイを倒すには神龍ジルドーラが持つセルゲイアの剣が必要じゃ、だが気をつけろ　剣は誰でも扱える物ではない」っておじいちゃんは言ってたけど、じゃーどうすればい

いんだろう」と考えながら歩いていると向うから「待ってくだされ勇者フデーロ様と
お見受けしました」とカエルが現れて通せんぼをしたフデーロは「何だ　おまえは？」と言うと「やっしはエンバスの森から来たカエル童子と言うケチなやろうでヤンス」と答えたのでフデーロは「カエルが何の用かは知らんが先急ぐんでじゃまするなよ」と言い先を急いだ、カエルも「そんなーツレナイでヤンス」と言いながら少年の後を追って行った
フデーロはミレーネから５０キロも離れた龍のすむ沼に行くため、ケンタウロス一族から茶色い馬を借りた　後ろをついてきていたカエル童子が「何も馬を借りなくても飛んで行けば良いヤンス　のに」と不満を言っていたがフデーロは「だってこっちの方がカッコ良いモンね」と言ったので仕方なく馬の後を追った、２人がエンドラの国の入口辺りまで来ると何処からか美しい歌声が聞こえてきたフデーロは「なんだっこっこの音楽は」と言って耳をふさぎましたが唄は頭の中に聞こえていたのです　フデーロは「だっだめだ、抵抗できない」と頭を抱えながら霧の中に誘われて行った、その中には赤い髪をした魔女ザザーラが胴体から大きな口を『グァァー』と開けて待ち構えていたのです「だめだ飲み込まれる」フデーロがそう思った時　龍の沼の奥にある剣が青い輝きを放ちました　その瞬間目を覚ました龍が「これはもしかして」と呟いた　と同時に魔女『うギャー』と悲鳴を上げて青い光に包まれ解けて言ったのでした。
再び姿を現したカエル童子が「いやー見事でヤンした』と言ってどこからか出て来たのでフデーロは「ちっ調子の良いやつ」と言って先を急いだのだった。

？　龍の王国（前書き）

神龍・ジルドーラはかつて栄えた王国のことを語った
そして少年が選ばれし者だと語った。

？　龍の王国

（４）石になった人間
エンドラの沼地には紫色の龍が住んでいました、この龍は多くの人達から神の化身
と崇められていましたが　その額に輝く宝珠を手に入れればあらゆる願いが
叶うと言う噂がどこからともなく広まっていたので、なんとか宝珠を手に入れようと
企む邪な人間達に狙われていたのであった　今日も龍の宝珠を奪おうと人間達が
沼地に軍勢でやってきました，軍勢の指導者マバルド王は「それー龍を倒し宝珠を持ってきた者には
望みどうりの恩賞を取らすぞ」と言ったので民達は皆一世に『ワァー』っと龍に向って行きました
もっとも人々は皆　宝珠を自分の物にするつもりでしたけど、ところが軍勢は何故か石になってしまいました
沼地で寝ていた龍は「フーゥどいつもこいつも愚かモノどもめ」とため息をついた
それを隠れて見ていたカエル童子は「もっもうやめて帰ろうでヤンス」
と泣きながら言いましたがフデーロは「だから怖ければ帰って良いって」と言い龍の前に進み出ました
龍は「ホーゥ」と感心していました
（５）セルゲイアの伝説
「おまえはわしが何者か分かっておるのか」
と言う龍の問いかけにフデーロは「ジルドーラ様だろ」と答えたので龍は少年に「おまえはわしが怖くないのか?」と尋ねた
するとフデーロは「ぜんぜん、だって良い神なんだろ?」と聞いて

きたので龍は「どうかなそれはおまえしだいじゃ」と答えた
「えっ俺しだいってどう言う意味」と少年が聞き返したので龍は「この沼の周りを見てごらん皆石化してオルじゃろう、彼等がそうなったのはわしの力ではなく皆その心の奥底に潜む邪念によって自ら石化したのじゃ、おまえさんは違うようじゃがノ」と答えた、フデーロは「あのー実はおじいちゃんからギリモナイを倒すためにはセル何とかって言う剣が
必要でそれでおいらここへ」と言いかけた時
龍は「心清き少年よ皆まで言わずともおまえがここに来た理由は分かっておる、それにおまえは覚えてはおらぬだろうがわしと会うのは初めてではない」と言うとある昔話を始めた
（6）龍の王国
「その昔この山の遥か向こうにドラの王国があった人々は我等神々を敬い王国は長く栄えただが長い年月で人々は彼等妖精人に匹敵する力を持ったそういった者達の邪悪な力を栄養にしてガウトは育っていった　その闇の力によって彼の王国は滅んで行ったのじゃ
未来を占う2つの存在を標してな」
龍の話を聞いていたフデーロはなんだか良く分からなかったが、龍は続けて「その一人がフデーロおまえなのだ　やがてこの世界に大きな戦が起こるラードなど比べ者にならないくらいの、その時おまえともう一人は戦わねばならぬ」と告げた
フデーロは「何故俺が」と質問すると「それがおまえ達の宿命だからだ」と龍は答えた
「あのーその戦いは避ける事は出来ませんか」とフデーロは龍に問いただしたが龍は何も答えず
「これは彼の王国に伝わるセルゲイアの剣じゃ、赤と青の遂になっておるその一つは
おまえが使うと良い」と続けた「この剣俺、扱えるかな」とフデーロが質問すると
龍は「この剣はおまえ達が生まれる前から持ち主が定められておる」

と語った　でもフデーロは龍から受け取った青いセルゲイアの剣を翳しながら、もうひとり、義兄弟の事を考えていた〔本当にそんな戦いが起こるのだろうか・・ラマォダ今どうしてるのだろうか〕

「どうした少年よ、何を悩んでおる、考えるよりまず行動じゃ　ロズマリナを救出に向うがよいワッハッハ」と笑い龍は沼の中に消えて行きました

？　太陽神殿での戦い！（前書き）

様々な障害を乗り越え、ついにフデーロは太陽神殿に到着する。

？　太陽神殿での戦い！

（7）待ち構えた敵

エルフの国は　人間界との国境にあった。沼からかえったフデーロは翌日　友達の鷹を呼ぶため不思議谷へ向った、そして大きな声で「モーモ」と呼んだ　すると大きな鷹が「ヤッホー」っと言って舞い降りたのである。フデーロはモーモに向って「太陽の国へ」と叫ぶとモーモは「お任せあれ」と言って少年を乗せて天高く舞い上がって行った

モーモは精霊の翼で一気に成層圏を抜けようとしただがその向こうに沢山の群れがあった

フデーロは「なんだあいつら」と呟くとモーモが「ヤバイな、エンリル（天牛）たちだな

群れをなしていやがる」と答え臨戦態勢に入った　リーダー格の黒いエンリルに乗った人物は「我が名は魔導師ユダ、ギリモナイとの解約上遺恨は無いのだがおまえ達の命を貰う」と語った　フデーロは「取れるもんなら取ってみろ」と言って背中から妖精の翼を出すと龍に貰ったセルゲイアの剣を振りかざしエンリルたちに向って行ったユダが「おまえは飛べるのか」と聞いたのでフデーロは

「ああ、少しだけなら」と答えた

だがエンリル達は何百匹といてモーモも

「おいフデーロよ、いくらおいら達でもこの数じゃーとても」とお手上げ状態だった

一方の天牛たちに囲まれたフデーロも「そんなこと言ったってこっちだって」と返した、絶体絶命のその時不思議谷辺りから光の礫がエンリルめがけて次々と放たれた　その光景を見たモーモが「ありがたいお師匠様だ」と微笑んだ　光の礫にエンリルたちは次々と後退して行った、魔導師は「おのれーアルモア余計な事を」と叫ぶと

「フデーロとやらいつの日かまた会おうぞ」
と捨て台詞を残して去って行ったのでフデーロは「ヘン、おととい
きやがれってんだ」と返した　南の方から現れた妖精神アルモアは
天を指し「モーモよこの指が示すところに太陽神殿アラーマがある、
ロズマリナ姫の救出を急ぎなさい」と言ったのでモーモは「ありが
と、お師匠様」と言いフデーロと共にアラーマに向った。

（８）霊下長ギリモナィ

ラードの神殿には王を守る１０万もの霊下達がいてその隊長が蝮の
化身ギリモナィである。フデーロはすでに神殿の近くまで来ていた
のだが、１０万もの兵をどうしたものかと?思案していた。するとそ
こに神龍ジルドーラが現れて「時間の粉を渡し忘れてな、神殿に入
ると撒くと良い」と言って粉を渡した。フデーロは「この粉を撒く
とどうなるのですか?」
と尋ねたところ龍は「時間が止まるのだ、ただし１０分だけなので
気をつけて使え」と告げると氷河の方に下っていった。　フデーロ
は神殿のそばまで来ると「不思議谷の者フデーロ、ロズマリナ様を
貰い受けに来た」と叫んだ。城は大騒ぎとなり　たちどころに霊下
達がウジャウジャと出現したのだった。フデーロはタイミングを計
って神龍から貰った種を撒いた、すると霊下達の動きが一世に止ま
ったのだ　フデーロは「モーモ、今の内に一気に住ませようぜ!」
と言うとモーモは「オー」と答え霊下たちをかき分け神殿内に攻め
入った。地下の牢にはロズマリナが囚われていた、粉の力により宮
殿内の時間が凍結していたので門番から鍵を盗みロズマリナを救出
するのは簡単だったのである　こうして姫を大鷹に乗せ共に脱出し
ようとしたときだった、一人の男が行く手を阻んだ霊下長ギリモナ
ィだった、フデーロは「何故?まだ時間は充分あるはずなのに」と
叫んだ　するとギリモナィは「俺も時間を操れるものでね、わるい
な　すでにラードは氷河に閉じ込めてある　この神殿はもはや俺様
の物さフハハハハ」と笑った。

？　ハッピーエンドの結末！（前書き）

最後はやはり、ギリシア神話的な結末で

？　ハッピーエンドの結末！

（９）勝負の行方は

ギリモナィはミレーネ国一の剣士であると亡くなったおじいさんから聞いた事があった、しかしフデーロは怯まず「勝負だ！ギリモナィ」と叫び神龍に貰った青いセルゲイアの剣を振りかざし、ギリモナィに向って行ったのである。ギリモナィは「よかろう、それほど消滅したいのならかかって来るがいい」と言うと強魔の剣で迎え撃ったと言う。戦いは熾烈を極めた、フデーロは「はたしてやつに勝てるだろうか」と考えながら戦っていたので段々に追い詰められて行ったのだった　もう後が無いと思われた時何処からともなく「迷いは禁物でヤンス」と言う声と一緒に　矢が飛んできてギリモナィに突き刺さった。ギリモナィは思わず「ウオァー」と叫びを上げた、カエル童子は「今でヤンス」と叫んだその声に押され青きセルゲイアの剣を一気に胴につき立てたギリモナイは「小僧その位でわしに勝ったと思うな」と睨んだがフデーロは「ウナレーセールーゲイ・アー」と叫んだ

その瞬間剣が蒼く輝きその力がギリモナイの自由を奪って行った、「おのれー」ギリモナィは怒りの形相で振り向くと、そこにはカエル童子に抱えられた太陽霊神ラードが居たのである。

（１０）結末

ギリモナィは「どっ！どうしてお前がここに？」と尋ねた、するとラードは「わしも危ない所を神龍に助けられてナ、それにオマエの野心は初めからわかっておったわ」と笑った。ギリモナィは「オノレーカエル、はっ図ったなー」と言う雄叫びを上げそのまま絶命した。

ラード神は「すまなかった少年よ、ロズマリナは連れて帰れば良い」と言うと神殿は霧に包まれて跡形もなく消え去ったのであった。

気が付くと少年はミレーネの荒野にロズマリナと共に倒れていた。

「フゥっ終ったな」とフデーロはため息をつき隣で眠っているロズマリナを見て一言
「やっぱり可愛いな」と言った　すると「ホホーおまえはこんなのがタイプだったのか？」とモーモがあおった、でもその時ロズマリナが「わたしが可愛いってそれはあ・り・がと」と言ってキバをむき出し襲いかかってきた、フデーロは「その声は、ユダかっ？」と絶叫したモーモは「気をつけろ　この子は何かに操られているぜ」と説明し何とかフデーロの首を押さえつけた手を解こうとしたしかしフデーロは「しっかりするんだお嬢さん」と言って強引にくちづけをした、モーモは「こらフデーロこの非常時に何を」と牽制したが
ロズマリナはだんだん正気を取り戻し「勇者様、もう大丈夫でございます」と顔を赤らめてそう告げた　フデーロも照れ臭そうに「よっよかった」と微笑んだのでモーモは「ヨッヤルネぇ」とからかったのだった。
後ろで「チッいま一息のところだったヤンスに」と言う声がしたのだが、それには誰も気がつかないみたいだった。
（１１１）エピローグ
こうしてフデーロの活躍によって不思議界には平和が戻ったのでありました
この結末をたいへん喜んだ母ラホメルモァーラは勇者フデーロとロズマリナの２人を結婚させ宮殿内に住まわせ仲良く暮らしたのである　それ以後ミレーネには毎年、豊富な作物が実り国はますます栄えたという。

？　ハッピーエンドの結末！（後書き）

モァーラには後3人の娘がいるのですが～後に登場します。

4話　『魔空戦争』（前書き）

軍神ラウドネスが精霊の一部を唆し、魔空戦争を起こしてしまいます。

4話　『魔空戦争』

【ラウドネスの反乱】

（1）王宮にて

不思議界の東に位置するライオマの国にラマォダと言う娘が住んでおりラウドネス神に使えていた。

かつて戦士だったと言う彼女の身分は決して高くは無かったがある時、王宮でラウドネス神の子を身ごもったのだった。彼女はやがては生まれてくる我が子の将来を思い、喜びに胸を高鳴らせていました「ねえラヴィーナわたしもうすぐ母親になるの、でもこのことを閣下は喜んでくださるでしょうか」とラマォダは侍女のラヴィーナに不安を打ち明けた

ラヴィーナは「心配入りませんわ、私がラマォダ様の侍女になって早10年その間2人の仲むつまじい姿を見て来た私が言うんですもの、閣下は必ず赤子の誕生を喜んでくださいますって」と答えたのだった　そんな時、ラウドネス神が他の神々に対して反乱を起こしたとの報が神殿内に駆け巡った、そしてそれは不思議界全体をまきこむ魔空戦争に発展して行くのであった。

（2）ガロスト一族

ラウドネス神は一週間ほど前にガロスト族（先住民族）の反乱を抑えるためにロザン地帯（荒野）に向ったのだった、暁の獅子と恐れられた軍神ラウドネスは武力で先住民達を支配していたのである、ラマォダがこの国に来るずっと前のことだったと言う、だが本当の目的はガロストと手を結ぶことだったのである。

「やつ等の抵抗もだんだんと険しくなってきましたな」とダイゾネスは兄のラウドネスに言うと「フン、あやつ等は取るにたらん、しかし今回は戦いに来たのではない、同盟のために来たのだ」と告げた　その言葉を聞いたダイゾネスは「ではいよいよ実行なさるのですね」と語りニヤリと笑った　ラウドネスは

「さようまもなく戦いの時が来る、ガロスト山で宴の準備に取りかかれ」とダイゾネスに命じた。
その晩ラウドネスはガロストの長ザザメラ（大蠍♀）をはじめとするガロスト族を招いての停戦の宴が模様されたザザメラは当初
「ラウドネスよ停戦はよもや偽りではあるまいな」と疑っていたがラウドネスは
「無論偽りではない、それどころかこれから我のすることに力を貸してもらいたい」とぶどう酒をのみながら言ったのでザザメラは「それはいったいどのような？」と質問すると「なーにもう直ぐ分かるそして我等は全宇宙の明主となるのだフッハッハッハ」と笑うだけだった
ガロスト族との宴は朝まで続いたがラウドネスとザザメラの2人はいつの間にか抜け出し
寝室にいた、「なるほど全宇宙を我が手にそれは面白い」とラウドネスに抱かれながらザザメラは頷いた　そして「ラウドネス様今後我等一族は彼方様に従います」と答えた
そして3日後急遽帰国したラウドネスは精霊達をライオマの王宮に集めると「我はこれより星王の名において、全宇宙を制圧する、我につくもよしオシメにつくもよし　心して返答いたせ」と宣言したその結果、カワモス、リブエラ、ダイゾネスの3人の妖精神と一部の精霊達は反乱軍につきヤナホイ、アルモアの兄弟と残りの精霊達がオシメの側についたのだった、
ラマォダよ、おまえはどちらにつく」とラウドネスは大声でラマォダを呼んだ、しかしラマォダは王宮にはいなかったのであった
（3）ラマォダの迷い
ラマォダはライオマ王宮のはずれにある魔空間に閉じこもっていた
「龍よそこにいるなら答えてほしい　ラウドネスさまは全ての星を一つ力で粛清しようとしている、それが真の平和に繋がると信じていったい私はどうすればよいのですか」と問いかけた

龍は「ラマォダよおまえは戦士なのだ、戦士ならば自分のなすべき事をなせ」と答えた
だがラマォダは「それは昔のこと今はただの巫女にすぎません」と答えると龍は「いやおまえは今も戦士だ、戦士として戦え」とラマォダを叱咤した　しかしそれでもラマォダは
「私にラウドネスさまと戦えと、出来ません
それだけは出来ないのです」と答えた
龍は「ならばこの戦いは永遠に終ることは無い、それでもよいのか？」と問いただした
でもラマォダは「分かりません、私には何が悪くてなにが正しいか分かりません」と言ったきり言葉をきった、その後ラマォダは行方を絶ったのでした。
そして龍の予言どおり長い戦いが始まろうとしていたのです。

（4）ギガンデス

ラウドネスはかつてのギガンデス（巨人族）の子孫であった　ゆえに彼はまず地下のダルダロスに幽閉されていた巨人達を解放し、自由に活動できるように妖精の玉を与えたのである
ダルダロスに幽閉されていたイリアズ（分神）は「目覚めよギガンデス、今こそラウドネス様のためにその力を発揮するのだ」と
叫び閉じ込められていた幾千もの巨人達を解放した、巨人たちは一世に「グアー」と鋭い雄たけびを放った　そして彼等に天上界を襲わせたのである、かつてオリンポスをも震撼させたと言うギガンデスの巨人たちはその無限の力を自在に操り　天空都市アトラントを目指し飛んで行ったのであった。

4話　『魔空戦争』（後書き）

ラゥドとはデルクラル後で太陽のこと

？　アトラント（前書き）

神々の城　アトラントを巨人が襲う。

？　アトラント

（5）陥落したアトラント

話は少し戻る、天空都市アトラントは見た所　札幌位の広さだが城全体が異空間にあるため、中は無限の広さを持つ最高神オシメの住居である。そこには百人の召使（小妖精）と五十人の女官（中妖精）そして二百万の軍隊（精霊達）が控えていた。精霊の玉を動力としていて一見、　空に浮かんだ西洋風のお城のように見えるのだが内部はかなりの攻撃に備えているようだ・またあらゆる時空間を飛ぶことが出来るのである、しかしオシメの元にはまだラウドネスの反乱の知らせが届いていなかった。また今宵は不思議界の生誕祭であり、場内は警戒を解いていて誰でも自由に進入することが出来たのであった。

オシメはその頃「今宵は年に一度の生誕祭、今回はどの衣装にしようかな」と自分の部屋で生誕祭の支度をしているときに事件は起こった　巨人達が空を飛びアトラントに押し寄せたのである　その数と圧倒的な力の前にアトラントで暮らす妖精達はパニックに陥った

（6）犯された女神

オシメは祭りの衣装に着替えようとした時だった、たくさんの巨人達が現れ部屋に雪崩れ込んできたのだ。

「こっこれは何事です」と言いながら

さしものオシメもどうする事も出来ず　隙をついて脱出する機会を窺がっていましたが、ちょっと油断した一瞬に「アレー」っと巨人の一人に犯されてしまった

『グァー、グァーン』っとものすごい勢いで女神を犯す巨人にオシメはとたじたじだった

その時鷹のモーモが「女神様なーに欲情してんダヨ」と飛んで来たオシメは「イヤーなモーモね」と答えたがモーモは「つべこべ言わ

ず今の内に脱出しろよな」と言ったのでオシメはモーモが巨人の気を引いてる内に神殿を脱した（この時生まれたのが後に金星の王となるヂーナであったと言う）のだった、そして女神が脱出したと同時にアトラントは全エネルギーを停止した為その中にいた巨人達は閉じ込められてしまいました。

（7）ラウドネスとイリアズの攻防

前線基地・第六殿にて

最初ラウドネスはアトラントの陥落をたいへん喜んだ、しかしオシメが脱出したと分かると大変失望したのである。

ラウドネスは参謀のイリアズに「ばか者、みすみすオシメに逃げられおって何たる失態」と怒ったのである。」イリアズが「でもアトラント城を手に入れたではありませんか?」と言うと　ラウドネスは「城のシステムは女神が居なければ全て停止するのだ」と答えた

　しかしイリアズも引かずに「それでは城の妖精達を全て人質にすれば、いくらオシメとは言え我々に手が出せないのでは?」と答えると　ラウドネスは「たわけー、アトラントで暮らすものは皆オシメに命を捧げておるわ、それと言うのも創造の神であるオシメは彼等を生き返らせることも可能だからだ」と言い放った。ラウドネスはしばし考えるとイリアズに向って「正規軍に伝令を出せ!天の川で待つと」と命じた。

？　アトラント（後書き）

アトラントは　ギリシア神話のオリンポス　北欧神話のアース・カルド　をモデルにしました。

？　惹かれあう魂（前書き）

魔空戦争下デ有りながらも、ラウドネスと　ラマォダの魂は
なおも　惹かれあっていたのだった。

？　惹かれあう魂

そして次ぎの朝ラウドネスの「我が手に全宇宙を」
と言う号令で一瞬にして起こったと言う
オシメを隊長とする正規軍5千万とラウドネス率いる反乱軍7千万
は、ミルキーウェイ、天の川を挟んで激突した。
だがその戦いはどちらも決定的な打撃を得られぬまま膠着状態が続
きなかなか戦争は終わる事は無かったのである。
（8）地上の人々
たとえば地球上では各地で戦争が起こっても
皆他人事ととらえている
だが不思議界に至っては他人事と決め込む訳にはいかなかった、そ
れと言うのも
幾つもの星を生み出し　そこに生きる
生命体達に主権を与えたオルディナスであったが
この妖精の国デリ・フーバ（不思議界）だけは女神の管理下にあっ
たのだ
ゆえに不思議界に住む住人達にとっては
オーナーが代わるかもしれない大問題であり
事の成り行きを見守っていたのであった
（9）戦いの終わり
戦いは一身一体であったがザザメラ一族に伝わる特殊な猛毒に
犯された神々が次々と後退し、遂には
女神もその毒に体の自由を奪われていった
囚われたオルディナスはダイロクテンの最下層にある氷河地獄に幽
閉された
そこに閉じ込められた者は皆十字架に括られ口に入れられた管を通
って精霊エネルギーが次々と吸い取られ寒さと恐怖にのた打ち回る
のである

ただお尻の管から注がれる液体のみが拷問に必要な最低限の命を与えていた。
そしてラウドネス軍は長い戦いの休息を兼ねた祝勝の宴を桶狭間星で行っていた。
「諸君長きによる戦いご苦労であった
対に我等は目的の第一歩を記したのだ、今宵は存分に騒ぐが良かろう」と告げ
『ラマォダよ、おまえは一帯何処で何をしているのだ』
と呟いた、その時反乱軍に向って一人の少女が龍に乗って舞い下りたかと思うと、勝利に浮かれるラウドネス軍に向って斬りかかったのである。それは事件以後行方不明となっていたラマォダだった。
「きっキサマは」と参謀のイリアズが呆気にとられている時には既に赤きセルゲイアの剣がイリアズをつらぬいていた。
ラウドネスは「おつおまえはラマォダ
おまえはこの私を愛してくれていたのではなかったのか?」と叫んだ。だが戦士であるラマォダは「私は精霊天使、自由を守る者・・宇宙の大義のためラウドネス様、あなたを封印します・・　私の命と一緒に」涙でそう答えたのである。
（１０）惹かれあう魂
ラウドネスは「だれも手出しはするな、これは我とラマォダの勝負だ」と叫ぶとスサノオ
の剣を構えたラマォダは「ラウドネス・・さま」と良い赤いセルゲイアの剣を構えた
２人は互いに見つめあった、やがてラマォダ
がセルゲイアを輝かせラウドネスに突進した
ラウドネスはそれをあっさり腹に受け止めた
ラマォダは「ラウドネスさま何故?」と質問するとラウドネスは「わたしはおまえと戦うつもりは無い、だからこれでよいのだ」と答えると剣ごとラマォダを『グッ』と引き寄せた、そのときアルモアの手によって助け出されたオルディナスが「同士ラマォダ、今封印

の鍵を開きました」と答えた　ラマォダは
ありがとう、オルディナス」と笑って答えた
ラマォダは愛する者と共にいることを願ったのだ、ラウドネスは「
ふふふーラマォダよ、これで勝ったつもりか？私はいつか蘇る　その
の時産まれてくるおまえの子は、父である私と戦うことになるのだ
ぞ、それでもよいのか」と問うとラマォダは「それがその子の運命
ならば」と応えた
『～ラマォダ～』『～ラウドネスさま～』　2人は互いに抱き合い
悪人達を幽閉している冥王星の重力に引きこまれていった
頭を失った反乱軍はことごとく敗退しギガンデスの巨人達もまた、
イリアズと共に、再びダルダロスに戻された　またリブエラ等
反乱軍に加わった者達は全ての妖力を奪われ異世界に追放された、
こうして長かった魔空戦争はここに終わりを告げたのである。なお
アトラント城には巨人の一人が残されオシメ神に仕え、後に　最初
の夫に成ったと言う。

5話『少女と龍』（前書き）

～不思議界が乱れし時、彼の地より双子の救世主が誕生する
そのもの全ての者たちを幸福に導く、エンドラの妖精なり～

ダムゥの予言書

5話『少女と龍』

（1）双子の誕生

長かった魔空戦争が終わった翌年
エンドラの国にあるイチゴの森は双子の誕生で沸きかえっていた。
ラマォダは生まれたばかりの赤子を妖精神ヤナホイに預けていたのだ
しかし生まれた子は不思議界ではたいへん珍しい紫の瞳をした女の
双子だったのである。
ある日乳母の精霊の二イガスがおつかいの帰りにルァナン山（ルイ
クスとの国境近くにある山）を飛んでいた時だった
突然の突風でバランスを崩し、双子の一人を落っことしてしまっ
たのだ
慌てた二イガスはすぐに村の皆を集め探したが
何故か赤子は見つかる事は無かったのである。

2

それから何年もたちマォと名づけられた双子の一人は妖精齢で3歳
になっていた。
マォは親友のなりナ（黒猫の妖精）と一緒にヤナホイの使いでヴィ
ーナスの丘にある泉水で痛風に良く効くと言うアルーラの聖水を酌
んだ帰り道いつものように沼に住む仲良しの龍と会話を楽しんでい
たのだった　龍はこの世界に戦争が起こるずっと昔から住んでいて
まだ幼かったマォが神龍の事を
「りゅうりゅう」と呼んで以来の付き合いであった。
「マォおまえの母はかつてこのエンドラの国一の戦士だったのじゃ、
おまえも
その血を受け継いでおる」と龍の話はいつも小さいマォには良く分
からなかったが
それでもマォはりゅうりゅうのことが大好きなのであった。
「マォ、もうこんな時間なりナ」

っとなりナが言ったのでマォは「そんじゃーりゅうりゅう　そろそろかえんないと
ヤナホイ達が心配するので今日は帰るわ、また明日来るわね」
そう言うとなりナと共に来た道を引き返して行った
龍は「帰るのなら送って行くから待っておいで」と答えると2人を捕まえ背中に乗せると
イチゴの森を目指して飛んでいったのであった　マォは龍の背の上で「ねえりゅうりゅう、わたしなれるのかなあ、お母さんのような強い戦士」にと言った龍は
「ああ　なれるとも　だってここはマォの不思議世界なのじゃからな」と言って龍は笑ったのでした、しかしやがてこの子が成長し、不思議界を救う事になるのはまだずっと先のことでありました

5話『少女と龍』（後書き）

黒猫の妖精ナリなは、かつての勇者の生まれ変わりです

6話　『かぐや姫伝説』？（前書き）

魔空戦争の時に生まれた　オルディナスの子、月の女神ヂーナを巡る竹取物語

6話　『かぐや姫伝説』？

『かぐや姫伝説！』

（1）雲から落ちたヂーナ

ある晴れた日狩と月の女神ヂーナはアトラント城を抜け出し雲の乗り物に乗ってお散歩を楽しんでいました。　そして私達の世界と境があると言われている不思議谷近くを通った時でした、突然雷鳴が轟きヂーナを直撃したのです「キャー」と悲鳴を上げたヂーナはそのまま下界に落ちて言ったのでした。

○平安時代の日本

雲から落ちたヂーナは竹薮で倒れていました　しかしヂーナは何故か周りを茫然と見つめていたのです「おーイタタ、でもここは何処ヨそれに私は誰？」

これはたいへんですヂーナは雲から落ちたひょうしに、頭を岩にぶつけたようで記憶が亡くなっていたのです　それに次元の穴に偶然落ちたみたいでここはどうやら私達の世界（と言っても平安時代みたいですが）のようなのです。ヂーナは「誰でもいいから返事してヨ、何でこんなところにいるのよ」と叫んだ時でした「誰かいるのか？」と言って向こうの林の方からおじいさんが通りかかりました。

おじいさんは竹薮で倒れている彼女を見つけると「いったいこない所で何してなさる」と尋ねたところヂーナは自分が記憶を失った事などをおじいさんに告げるとじいさんは「それはお困りジャロ」、今夜のとこは家さ泊まるがええ」と言い、おじいさんは自分の家にヂーナを連れて帰ったのでした。

（2）老人の家

「フロ吉帰ったのか？」じいさんが家の戸を開けた時そう言って白髪頭のおばあさんが中からでて来ておじいさんを迎えました　ところがおじいさんが若い娘を抱えていたのでおばあさんは「フロ吉その娘さんはイッタイドウシタだ、まさか誘拐」と言いかけたのでお

じいさんはあわてて「違うチガウ向こうの竹薮で倒れていたダヨどうも頭さぶつけた拍子に記憶をうしなったみたいだ」と答えたらおばあさんは「娘さんさぞたいへんだったの、でももう心配することないで、家に何日でも居るがええ」とヂーナをやさしく迎えました。

（3）3つの宝物

ヂーナは記憶が戻るまでおじいさん達の家で暮らす事になりました

ヂーナは竹薮に倒れていた事から竹姫と名付けられました　竹姫はおじいさんおばあさんの手伝いを良くしましたまた女神のような美しさはたちまち評判となりその噂は都にも達し、その結果「ぜひ、竹姫を妻に」と言う3人の役人が都からフロ吉の家へやってきたのです　まずカエル大納言が

「ぜひ我が妻に」と言えばギリモナ中納言、ボボナ少納言も「どうか我がきさきにと言うのです。おじいさんは「竹姫やどうしたらいい」と聞いたら竹姫は3人にそれぞれに月の水、金星の破片、龍の玉などを持ってきたものに嫁入りすると宣言したのでした（でもおそらく無理でしょうね？）

？　異次元から来たものたち（前書き）

異次元から来た　モチ博士の野望とは？

？　異次元から来たものたち

（４）都の鬼

大臣達はそれぞれが先に宝を見つけようと最善を尽くしたのですが誰も宝を見つけられませんでした（そりゃそうでしょう）さてそのころ京の都では２つの頭を持った３匹の黒鬼たちが出没して都の人々を連れ去ると言う事件が起こっていました。竹姫はおじいさん、おばあさんに「都に鬼が出るそうですが本当のことですか？」と尋ねたところ

２人は「残念ながらほんとうなのじゃ、何人もの男女が鬼共に誘拐されたと言うで」と涙ながらに語った　すると竹姫は「おじいさんおばあさん、私はいまから京に上り鬼退治をしようと思うのですが」といったので

２人は仰天したのですが　この子はきっと何かの使いに違いないと考え

「それなら都に行くより山の向こうにある獄ヶ城に行くほうが早い、なんでも鬼達はそこから来る言うで」と言いました

翌日おばあさんは「これを食いながら行くと良い」と言って饅頭を４つ渡しました竹姫は「それじゃーおじいさんおばあさん、行って来ます」と手を振ると２人は「気をつけておいき」と竹姫の姿が見えなくなるまで見送ったのでした。

（５）３匹のとも

竹姫が獄ヶ城目指して歩いていると一匹の猿が「おいらが獄ヶ島までお供するからその饅頭をおくれ」と言いました

竹姫は「勇敢な猿さんね」と言い饅頭をあげました、続いてやってきた犬とトナカイもそれぞれお饅頭をもらい家来にして貰いました。

４人？は海のそばまで来ると「この向こうがわれわれガ目指す獄ヶ島だと思われます」と言うと「私が様子を見てまいりましょう」と言ってトナカイが空を跳んで様子を見に行きました、しばらくして

帰ってきたトナカイが「どうやら間違いありません」と言ったので４人は漁師に船を貸してもらい
獄ヶ城に出発したのです。
その様子を獄ヶ城から見ていた鬼達は「よし迎え撃つ準備をしろ」と言ったのですが鬼達の主は何故か「いや手出しはするナ受け入れてやれ」と言ったのでした。

（６）モチ博士の陰謀

○獄ヶ城
京の都から数千キロの所にある獄ヶ城は鬼達の住みかでした、そこにはこの世界（人間の）者とはとても思えない鬼達がたくさん住んでいました。
その中には、手術台があって鬼達は攫ってきた者たち台に縛りつけると　老人の「では始めるぞ」と言う指示に従っていました
その奇妙な老人こそ異次元惑星サタルードから来たジジババ・モチ博士（６１）だったのです、モチ博士は「これで双頭鬼達もかなりの数になった、わしの目的はやつ等を使いこの地球の歴史を変えさせて、他の世界をも自在に操ることじゃ」と言い
『わっはっはー』と笑ったそばにいた鬼女も
「ハハー」と頷いていた。
竹姫は獄ヶ城に付いた辺りから異常を感じとっていましたそれは記憶を失っても感じるものでした「おかしい、さっきから一匹の鬼にも出会わないなんて」と竹姫がつぶやくと猿が「なーにきっと皆ネてるヤンスヨ」と言うのですが竹姫は「いやこれは私達をと言うより私をおびき寄せるためにじゃーなくてお猿さん達」と言ったのです「猿は「いったいイツからキズいてやがった」と聞き返すと「・・最初からヨ猿さん」と竹姫答え「まず私が動物の言葉がわかるのを誰も不審に思わないし、それにトナカイはこの世界では空飛ばないのじゃあなくて」と答えたら犬と猿が「やっやっぱし」と答えたのでした。
「それよりさっきから隠れてないで出てくれば鬼さん達」と竹姫が

言うと双頭の鬼がワンサカと出てきましたがその中の一人を見た時竹姫に異変が現れたのです。

「良く知った人物で申し訳ない」と言う声と共に出現したのは彼等鬼達のボス鬼女リブエラでした。

？　リブエラの復讐（前書き）

ヂーナの　ギガンデスの力が覚醒する。

？　リブエラの復讐

（7）彼等の正体

その時竹姫の頭の中を何かが駆け巡っていました、思わず「あっ頭がいたい、割れるように」と蹲った竹姫ですがすぐに冷静さをとり戻し「今わたしは全てを思い出しました私の名はヂーナそしてあなた方は察するに異次元から来た鬼って所ね、そうでしょう?リブエラさん」とボスである鬼女に問いかけました鬼女は「フフフフフハハハハハハその通りヂーナ姫お久しぶりまさかこんなところでオシメ神の復讐が果たせるなんて願っても見なかったわ」と言いましたヂーナは「あなたはたしか妖力を奪われ追放されたって聞いたけど」といったらリブエラは「私が飛ばされた次元がたまたま以前に妖力の一部を隠した場所だったのサ　ラッキー、そこでその次元に幽閉されていた3匹の鬼達をこの世界に連れて来たってわけ?話し長くなっちゃったけどそろそろおしまいにしない、鬼共かかれー」とリブエラは号令するのですが鬼達はうんともすんとも言いませんリブエラは「どうした返事くらいしろ」と言って周りを良く見ると皆寝ているではありませんか　リブエラは「そんな何時の間に?」と言うとヂーナは指をならし「リブエラさんあなたちょっとしゃべりすぎよ、みなさんかなりお疲れだったみたいね」と言ったのですヂーナは続けて「さてトあなたの残りの妖力とやらではたして私に勝てるかしら?」と凄むとリブエラは微笑し「さすがやるわね、ではこの者達のお相手はいかがかしら?」と言う声と同時にモチ博士と双頭鬼達が現れた博士は「言っておくが娘さんこの者達は皆都の人間達じゃ、それじゃー攻撃は出来まい」と説明したヂーナは「困った、一帯どうすれば良いの」と呟いた

リブエラは「どうやら形勢逆転のようね」

と言って双頭鬼たちに「ゴー」と号令をかけた、手出しすることが出来ないヂーナはたちまち鬼たちに方位され　とうとうつかまって

しまいました。

（8）ギーナの覚醒

捕らえたギーナは手術室に括られ双頭鬼に改造されることになった、モチ博士は「フフフおまえを仲間に加えてしまえば不思議の国やアトラントを手に入れたのも同然」と語った　ギーナは「そうかおまえ等の野望はやはり」と言って意識を失ったリブエラは「お姫サマ次に目覚めたときは我が配下になっていよう」と笑い「おまえを最高の刺客としてアトラントに送ってやる」と続けた。

モチ博士の「そろそろ始めるぞ」と言う号令共にギーナの手術はスタートした

でもその時1羽の鷹が飛び込んで来て

『キエー』と鳴いたすると博士や鬼達は『ウウーッ』と苦しみはじめた、同時に

大地から『ゴゴゴゴゴゴ』と言う振動が聞こえてきた「この音は何だ」とリブエラが呟いたとき島全体が大きく『ザザッ』と揺れた、それはギガンデスの血を引くギーナの力が一つ覚醒した事による現象だったのであった

「モーモは「ギーナさん、起きてヨ寝ている場合じゃないよ」と叫んで台の上から救出すると目を覚ましたギーナは「よっおはよう」と言って手術部屋まるごと　テレポートした

その瞬間に獄ヶ城は大爆発を起こして消え去ったのである。

一方獄ヶ城から大分離れた所にある小島では

村人が釣りをしていたところへ手術部屋が突然現れたので「なっ、ナンダー?」と仰天したのであった、その中からは「こんな物があったなんて」と人間の姿をした鷹のモーモとギーナが宝を持って現れたのでした。

難を逃れたリブエラは

「オノレーヨウリョクさえ奪われていなければ」とつぶやきまた別の時代に逃げて行きました。

？　信長登場？（前書き）

マォ登場！

？　信長登場？

（9）月からの使者

さておじいさんとおばあさんの家では村人たちが鬼を成敗し宝を持って帰ってきた竹姫に大喜びです　でもおばあさん達は「わしらは宝なんぞどうでも良いのじゃ、おまえが無事に帰って来てくれれば何もいらん」そう言うと竹姫は「おじいさん、おばあさんと言って抱き会いましたでも　竹姫は鬼退治から帰った１０日後おじいさんとおばあさんに「実は私は月の世界から来たのでございます今宵月より迎えが来るのでございます」と言ったら2人は少し驚いたようだったが、おじいさんは「いつかこんな日が来ると思っとった　最初竹姫を発見した時「この子は月の化身に違いない」と思えてのと、おじいさんがいえば　おばあさんも「この日のために着物こしらえたでの向こうさ（月）帰ったら着ておくれ」と言ったのです。

3人は泣きながらしばらく抱きあっていました。

しかしかつて姫に求婚した大臣達は

「姫を帰してなるものか」といっておじいさんの家に軍勢で待ち構えていたのです。やがて夜になり満月が顔を出しました竹姫（ヂーナは）もう一度おじいさんおばあさんにお別れを言いましたその時

満月の中から地上に向って降り立ったのはなんと巨大な龍と少女でした少女は「ハーイヂーナさん迎えに来たヨ」と言うとその服の間から「おいらも一緒なりナ」と黒ねこの妖精なりナも顔を出しました、ところが軍勢はと言えば何故か停止しているのです　しかしおじいさんとおばあさんの2人は別でした。

マォはヂーナを龍に乗せると「月を目指して出発ヨ行けりゅうりゅう」というと龍も「ＯＫマォフリオトされないようにナ」と言って月に飛び立ったのでした　それを軍勢はただ見送るしかなかったのでした。ヂーナは帰る途中「あたし今度生まれてくるときは2人の子として生まれてきたい」と何度も心の中でつぶやいていたのでし

た。
その遥か上空、怪円盤の中からはモチ博士の怪円盤が
「失敗だ、この次ぎこそは必ず」と言う声が響いていた。
（１０）リブエラの最後
○ある武将の屋敷
さてリブエラは獄ヶ城から命からがら逃げ出したところはまた別の時代のようでした。リブエラは「ここは江戸時代か　いやもっと昔のようだ、マアなんでも良いコンナ時代に私に敵う者等いるはずが」とつぶやいているところに「何者じゃ先ほどから我が寝室で騒いでおるやつは」と一人の若き武将が目をさましましたリブエラは「きさまは何者かしらんがこの時代に来た私の最初の生贄となるのだ」と言い強烈な精神波をぶつけましたが男には何の異常もありませんでしたのでリブエラは「ばかなこの時代に私の精神波を撥ね返すやつが」と言っている間に武将はリブエラを一刀両断に切り捨てました。リブエラは「ウァー」と悲鳴を上げた後薄れゆく意識の中で「まるでラウドネスさまのようなあの眼差し　やつは・・」とつぶやきかけて息絶えたのでした隣の寝室に居た小姓が「若さまどうかなさいましたか?」と尋ねましたが武将は「乱丸か?いやなんでもないただの準備運動じゃ」と言って豪快に笑ったのです、
そして乱丸に「敵は桶狭間ダ、今から出陣する皆にそう伝えよ」と命した。
　彼こそ後に天下に号令をかける事になる織田信長その人だったのです。
（１１）竹姫からの手紙
さてギーナが月に帰ってはや数ヶ月がたちましたおじいさんは「あの子はやはりこの都を救いに子供がないわし等の元へ舞い下りた女神だったのじゃ」と言うとおばあさんも「ほんにの」と頷くのでしたそれからまた数ヶ月が過ぎこちらの世界ではもうすぐ冬になろうとしていましたおばあさんは「出来るならもう一度竹姫に会いたい」とつぶやき空を見あげていたところ空からコウノトリ（実はモーモ）

が舞い下りて赤子と手紙を渡して天に帰って行きました　その手紙には「おじいさんおばあさんお元気ですか今日は先日私がまた地上に降りた時の話をしますね　偶然ある村を通りかかったら赤ん坊が泣いているではありませんか?どうやら捨て子のようでしたのでモシよろしければお2人にこの子を育てていただけないでしょうか?と思い手紙と共にそちらの世界に送りますので、宜しくお願いします。それとわたし短い間でしたけど2人の娘でいられて幸せでした。またいつか大きくなったその子の様子を見にうかがいたいと思います。」　2人の娘竹姫より

と書いていました、おじいさんとおばあさんは手紙がぼろぼろになるまでなんども読み返しました。

そして都の人たちはオルディナスの再生の力で全員元に戻ったと言うことです。

7話　『菊姫の大冒険』（前書き）

前回と違って、今回は　ジャックと豆の木がモチーフです。

7話　『菊姫の大冒険』

（１２）月から来た赤子

昔々平安時代の日本におじいさんとおばあさんが住んでいました。２人はとても仲良しだったのですが何故か子供に恵まれませんでした、２人はもう年なので何処かから養子を貰おうと考えていた矢先にある日おじいさんが竹薮で女の子（ﾁｰﾅ）を連れて来たのでした。２人は大喜びでしたがその子はなんと月のお姫さまであり　やがて故郷に帰って行ってしまいました。おじいさんとおばあさんはまたさびしくなったのですが、ある満月の晩に　月からの使者が赤ん坊を運んできました。２人はその子を菊姫と名づけ可愛がりました。

菊姫は２人の愛情を受けやさしい女の子に育ちました。おじいさんおばあさんもかわいい

菊姫のために毎日働いていたのですが、菊姫が５歳の時マロンおばあさんが重い病にかかってしまったのです　医者の診たてでは「これは今、都で流行している【何ダこりゃ病】に違いない」と言うのです。おじいさんと菊姫は困ってしまいましたが妙案は見つからなかったのです

（１３）夢のお告げ

その晩菊姫はなかなか眠れませんでしたがある時気がつくと枕元に変な老婆がたっているではありませんか、菊姫は驚きましたがその老婆は「なーに驚く事はない、わしは天の使いジャで」と言ったのです。菊姫は「もしかしてお姉たんの？」と尋ねると老婆は「その通りじゃ、今からわしの言う事を良く聞くが良い」と言ったので菊姫は「うんわかった」と答えました。老婆は続けて「そなたのおばあさんの病を治すには西の天の鬼御殿にある無限草が必要じゃ、おまえさんがいると言うなら取ってきてやるがどうじゃ」と言ったところ菊姫は「いいえ自分で取ってくる」と言ったので老婆は「そう

言うと思うとったで、ではあした朝、目を覚ますとこの豆を庭に撒くと良いぞ」と言って豆を渡しました「この豆はなんなの」と菊姫は尋ねましたが老婆はいつの間にか居なくなっていました。

（１４）菊姫と豆の木

翌朝菊姫は夢の老婆に貰った豆を庭に撒きました、するとみるみるうちに豆は大きくなってあっというまに豆の木は天までとどいたのです。菊姫は「おじいさんじゃー行って来るね」と言うと豆の木をするすると登って行きましたおじいさんは「気いつけて行けよ」と見送ったのでした。菊姫が豆の木を上り始めてもう１時間近くがたちました「そろそろ着かないかな、もう疲れたよ」と菊姫が困っていると向こうから鷹のモーモが「なーんだ、もう疲れたのか？意外とだらしネエナ」と言ったので菊姫は「いまのは嘘だもん、まだ全然へいきだもん」と言い返しましたのでモーモは「後少しだから頑張れよ」と励ますと遠くへ飛んで行き、もう見えなくなってしまいました。

菊姫が豆の木を上り始めて3時間が経過しました　すると目の前には大きな御殿が見えてきました菊姫は「なるほどこれが西鬼殿ね、この中におばあさんの薬があるのね」と言うと雲の上に降り、中に入ろうとしましたが

そのとき中から赤と青の鬼が小さな女の子を抱えて出てきました。

「この子の上半身は美味しそうだナ兄弟」と赤鬼が言えば「ではおいらは下半身を貰うぞ」と青鬼が言うのです　菊姫は何とかしてその女の子を助けようと鬼の前に進み出て「子供を食べてはイケないのよ、こっちに渡しなさいよ」と行ったのですしかし赤鬼は「なんだいこの子は？」

と言い「知るかヨ、一緒に食っちまえばいいさ」と青鬼が言ったので菊姫は青ざめてしまいました。

？　菊姫！！（前書き）

菊姫と鬼の兄弟との戦い？？

？　菊姫！！

（１５）菊姫の勇気

菊姫はバラの鎖で縛られ西鬼殿の中に閉じ込められていましたもう一人の女の子は同じく縛られ隣で泣いていました、やさしい菊姫は「泣かなくても大丈夫わたしが助けてあげるから」といって慰めていました。しばらくすると鬼の兄弟が帰ってきました「そろそろ腹が減ったのでもうこいつら食って言い？」と弟の赤鬼が言えば「よしっ、では食っちまおう」と兄の青鬼がゴーサインを出しました。２人の女の子は震え上がりましたが鬼達は「騒ぐと面倒だ、眠らせよう」と言って両目から衝撃波を２人に向って放ちました　２人は「キャー」と悲鳴を上げたのですが菊姫がしっかりと女の子をガードしていたのです。でも何故か？衝撃波は菊姫の前で弾かれたのでした

○おじいさんの家

菊姫がそんな目にあっているとは知らないおじいさんは家でマロンおばあさんを看病していました、おばあさんは「菊は大丈夫じゃろうか？」とおじいさんに尋ねたところ、フロきちおじいさんは「なーにあの子は生まれたときから守り神がついているで、心配することねえ　それよりユックリ休むといい」と答えたのでおばあさんは安心して眠ったのでした。おじいさんがそう言ったのは窓を叩くいつぞやの鷹（モーモ）を見たからでした。

○西鬼殿

衝撃波を弾かれた２匹の鬼は仰天し、声を揃えて「いったいおまいたちやー何モンだ」と叫びましたでも菊姫は「あたいあたいはただの女の子ダヨ」と言うのですが鬼の兄弟は「嘘だーただの女の子が俺達の衝撃波を返せるものか？」と言ったところに雲に乗ってある老婆が現れました菊姫は「あっ夢のおばあさんだ」と言ったので鬼達はその方向を見ると「ララヴィラヴィ（霊仙人の妻）さん」と叫

びました。「おまえたちはまた地獄を抜け出しこんなところで悪さをしとったのか?」と怒りをあらわにしたところ鬼の兄弟はシュンとしてしまいました、でもラヲヴィラヴィは続けて「おまえたちが食らおうとしたのはいったい誰なのか知って居るのか?」といいました。弟の赤鬼は「もしかして妖精の一族かなにかでは?」と言ったところラヲヴィラヴィは「いいや妖精ではない」と言ったので兄の青鬼は「ばかものただの妖精がおいら達の必殺技をはじく訳がなかろう、きっと妖精神が力を貸しているに違いない」と訂正したところラヲヴィラヴィは「いいやこの子に力を貸しとるのは妖精神でも精霊神でもない、さらに上の御方じゃ」と言ったので鬼の兄弟は一世に「ヒエー」と仰天してしまいました。なぜなら精霊神以上の存在と言えば1つしか無かったからでした。

（16）ヂーナ現れる

「妖精神よりも精霊神よりも上と言うことはもしかしてこのお嬢ちゃんはオシメ神さまに縁ある訳・・無いよな」と兄の青鬼が言ったところラヲヴィラヴィが追い討ちをかけるように「そのとおりこの子はオシメさまの娘なのじゃ」と言ったので鬼の兄弟は共に真っ青になり「あわわわわわわ」と震えていましたがそのうち弟の赤鬼が「でも兄貴、たしか娘は12くらいだと聞いたがこの子はどう見ても5つか6つくらいだろ?」といったので兄の青鬼も「そうだおかしいな?」と考え込みました。そのとき「とうぜんよだって妹だもん」とラヲヴィラヴィの後ろから声がしました菊姫が「竹姉ちゃん」と言ったので鬼達は老婆の方に目を向けたところそこには月の女神ヂーナが立っていました。「たしかあなた達妹を食うとかなんとか言って無かったかしら?」とヂーナが言うと2匹の鬼は青ざめ「ひぇーお許しを」と言って逃げて行きました後ろからラヲヴィラヴィが「こりゃー今度悪さをしたらはりつけじゃでーわかったかー」と怒鳴りつけました。ヂーナは「菊、送ってあげるからしっかり掴まっているのよ」と言うと菊姫は「うんおねえたん」と言うと菊姫を雲の乗り物にのせ、下界へ送って行きま

した。ヂーナは「ララヴィさん、色々アリガトネ、モーモにもよろしく言っといてね」と言うと菊姫も「さよならおばあさん」と手を振りました遠くでモーモが「やれやれまったく無茶な子だナ」と呟いていました。

？　さようなら人間界（前書き）

病気のおばあさんに、２人のかぐや姫が現れた。

？　さようなら人間界

（１７）おばあさんへのプレゼント
おじいさんの家では菊姫の帰りをいまかいまかとまっていました、例によってモーモから知らせがあったからでした。
しばらくして菊姫が「ただいま」と言ったのでおじいさんは入り口を開けるとそこに菊姫と竹姫（ヂーナ）が立っていました。ヂーナが「今帰りました　おひさしぶりです、おとうさん　おかあさん」と言ったのでおじいさんは大喜び」です　横になっていたおばあさんも突然起き上がり「その声はまさか竹姫、会えたまたあえたで」と大粒の涙を流しました。菊姫は「はいこれが御殿から持ってきた薬よ」と言ったのですがおばあさんは「おまえたち２人が何よりの薬ジャで」と言って慶びました。その晩は３人で一緒に寝ました
菊姫は「おとうたん、お母たんとそしてお姉たん」と言って大はしゃぎなのでした。

（１８）さようならまた会う日まで
早いもので豆の木の事件からはや一ヶ月が過ぎようとしていました、おじいさんやおばあさんそれからかわいい菊姫はあれからどうなったかと言うと、働くには高齢である両親のためにヂーナはアトラントの一部にフロ吉おじいさんとマロンおばあさんそして妹の菊姫達を住まわせル事にしたのです、３人はオシメ神の血縁としてアトラント中でたいへん有名になり住民からも愛されました、ヂーナも可能な限り一緒に暮らしました。
そして竹姫と菊姫の２人の物語はかぐや姫の伝説になったと言うことです。

8話　『アトラントを襲った魔人』（前書き）

その後の菊姫のお話

8話　『アトラントを襲った魔人』

（1）ミュージカル宇宙の誕生

アトラントのはずれにあるミナリ村7番地区に菊姫達が住んでいましたその裏の小さな畑にはフロ吉おじいさんとマロンおばあさんがニルナイ（甘酸っぱい果実）の種を植えていました「フロ吉よ、そろそろ昼じゃが、休まんかい」と言うと「あっそうか？もうそんな時間かのう」とフロ吉は答えクワを置きました丁度そこへ「おとうさん　おかあさん」と言って遠くから菊姫が弁当を持って駆けてきましたマロンお母さんは「菊やもう会議は終ったんかいのオ？」と尋ねたところ「うん2時間ほど前に終ったので急いで帰って弁当作っていたの」と答えました

実は菊姫はアトラント運営委員会のミナリ地区代表でした、3人が仲良く並んで弁当を食べているとき上空から広告が舞い下りてきました3人は上を見上げると見知らぬ飛行船が軽快な音楽を鳴らしながら通り過ぎる所でした「またサーカスでもあるんじゃロ」とマロンお母さんは広告を拾い上げました

そこには『ジジババ一座新演目ミュージカル宇宙の誕生、アトラント広場にて本日より2週間入料無料』と描いてありました　菊姫は飛びあがって「ミュージカルなんて私始めてよ、竹ねえたんも誘って皆で見に行こうヨ」と喜んでいたのでフロ吉お父さんは「しかたがないのぉ、では3日後皆で行くとするか」と告げたので

「わーい、なに着ていこうかなぁ」と今から楽しみにしていたのでした。

？　ミュージカル（前書き）

デルクラル神話に基づくミュージカル、だがそれは　何者かの陰謀であった。

？　ミュージカル

（2）お出かけの日
ミナリ村の家
「菊―まだなの、はやくしなさい」とギーナは菊姫を急かしましたしばらくして扉を開けて「お姉たん、この服でいいかな？」と言って菊姫が出てきましたので「もうそれでいいじゃロ　にあう、にあう」とフロ吉お父さんがため息混じりに言いました　それもそのはず菊姫のお気に入りは菊をあしらった同じ着物なのですが色は何色もありその時の気分で代えるのだと言う　ギーナはお父さんを菊姫はお母さんをそれぞれ雲の乗り物に乗せ
「出発進行」と叫び家を後にした。
「わぉー何度乗ってもコレ、気持ちいいんだ」と菊姫が言い　2人は気分良く飛んでいましたがそこへ鷹のモーモが飛んできました「モーモちゃんあなたもミュージカル」と菊姫が聞くと「何をのんきな　こっちは今から地上に用があるの、まったく神さまは人使いじゃない鷹使いが荒いよ、まったく」と文句を言いながら飛び去って行きました
ギーナは「仕事ナンダ、おかわいそうに」ペロッと　下を出し「じゃーせいぜい頑張ってね」とモーモを追い越して行きました、モーモは「くそー後で覚えていろよな」と叫んでいましたがギーナ達は気にせず突っ切って行きました。
（3）アトラント広場
「ギーナ達が広場に着いたとき丁度幕が開く所でした「フー何とか間にあったわ」とギーナが言うとマロン母さんが「菊これからはしたくは急ぐんじゃゾ」とたしなめ　菊は「あーい」と気のぬけたへンジをしました　やがて舞台に雲のような物が現れ『その昔宇宙には何も無く万物のカオスのみが漂っていました』と言うナレーションが入りました

そして空間が裂け女神に扮したナルミナと言う団員が光を放ちながら現れ種を撒く仕草をしました　するとその種がプラネタリウムのように光り輝きました『やがて何も無い空間が二つに開き創造の女神オシメが現れ、宇宙に星の種を撒きました　そして不思議界を初めとする多くの星達が生まれたのです』とナレーションは続きますそして場面は軍神ラウドネスが一部の精霊達を率いての魔空戦争へと換わりました

「私は精霊天使自由を守る者、全ては宇宙の大儀のために」と言うナルミナのセリフに

観客達は皆「ブラボー」と、拍手喝采

菊姫達も「もうサイコー」と大満足のようで　どうやら興行は大成功でありました。

でもその時上空から「フフフフ諸君

我がミュージカルいかがだったかな?』と言う声が響いてきました

皆一世に頭上を見上げるとそこには1つ目の円盤が地上をうかがっていたのです。

（4）ジジババ博士の陰謀

円盤は「私は異次元惑星サタルードからきたモノだこれより全宇宙征服作戦を実行に移す

まず手始めにこのアトラント貰う事にした」

と言い1つ目から怪光線を放った　その光線から機械魔神が出現した、円盤は「ゆけ生物機神ロバQよ、おもいっきり暴れるのだ」と命じた、観客はパニックになり首都アトラーンは大騒ぎとなったがまもなくヂーナの連絡で現れた警備艦ウーランぱっぱーが市民を安全地域に誘導したのだった　ヂーナは「いくよパルパネラー」と言う呪文と共に体を巨大化させました、菊姫が「おねえたんカッコイイ」と叫んだ、円盤は「おまえかギガンデスの血を受け継いだ娘と言うのは」と聞くと

「その通りよ1つ目さん」と言った円盤は

「ロバQよおまえの力を見せるのだ」と命ずるとヂーナに向って言

ったギーナは「月光の剣」と叫び剣を出現された「かくごー」と言って剣をロバQに突き刺したが魔神は難なく弾くとたくさんの触手をギーナに絡ませた
ギーナはたまらず『バッタッ』と倒れこんだ
「その調子だやれー」と円盤の声援が響いた
魔神はギーナに機械性器を注入しようとしていたギーナは「あれー」と抵抗したが魔神は
性行為を始めた　思わず円盤が「ばか者一帯おまえはなにをやっておるのだ」と叱咤したが魔神は「この雌気にいった」と答え続きをはじめたギーナはとろーんとした目で「やっやばあい、感じてきたゾ」と呟いた　菊姫達は「おっおねえたん?」と口をぽかーんとあけていた

？　愉快な仲間（前書き）

ロバQ登場

？　愉快な仲間

（５）謎の魔神

性行為が終わり元の大きさに戻ったヂーナは菊姫と共に魔神ロバＱに乗り込み「よっーし、ロバちゃん戦闘開始」と円盤に向っていった円盤は「ふっふっふ、いでよ最終兵器、と叫び女神そっくりのロボットを呼び出した

「見たかこれがわしが女神の細胞から作ったバイオ魔神デス・オルディナスじゃ」

と紹介すると魔神は「オルィナスでおまほな、よろしくなあ」と言い

自分のお尻を『パンパン』と叩き「ミサイル発射しちゃおかな」と言うとお尻のカバーがはずれ中からミサイルが『ズブリッ』っと言う音と共に発射されたヂーナは「ロバちゃんよけなさい」と命じたが連発するミサイルの何発め、かが命中し、ロバＱは『ドシーン』と倒れた。

デス・オルディナスは「続いて催眠光線発射するぞー」と言い胸から催眠音波を『チュッバー』と浴びせた「なかなかやるじゃない」とヂーナ言いデス魔神にアッパーを浴びせました今度はデス魔神が『バッター』と倒れこんだ上空から円盤が「何をしている、あれを使え」と指示をしたのでデス魔神は「オムツブーメラン」とロバＱ達を牽制すると

「最終兵器お見舞いしちゃうぞー」と言うと

腰と尻を振りながら「ほれっ、ほれっ」と踊りロバＱに迫った

彼方から円盤が「はっはっは、この攻撃はあらゆる生物の脳波を狂わせるのだ

逆らうことは出来ぬ」と勝利宣言をした

（６）ヂーナの反撃

だがロバＱの中にいたヂーナ達はへいきのようだった　円盤は「な

んでだ」と尋ねると
ロバQは「僕ちゃんの内部はどんな攻撃も受け付けないの、それに僕は生き物チガウ」
と言うと腰フリ攻撃を仕掛けるデス魔神を
『ガツン』としばいた、哀れデス魔神は大またを『ガバッ』と開いたまま大の字になって
倒れこみ　お尻からバイオ燃料を撒き散らしながら溶けて（消えて）いったのだった
ヂーナは「ロバちゃんぶっ飛ばしてあげなさい」と叫んだ
円盤は「なにー嘘だろくるなーくるでなーいこないで」と懇願しただが魔神は「ハーイヂーナちゃん」と答え　円盤にアッパーカットを浴びせた円盤は「アレー」と言ったきり彼方へきえて行き見えなくなった　菊姫とヂーナは「ばかやろーもう2度とくるなー」と言って笑った、魔神ロバQも「「ワッハッハっハー」と豪快に笑っていた、かくしてアトラントにまた一人愉快な仲間が増えたようである。

9話　『アスタヴィス祭』（前書き）

マォの初恋はフデーロの子、不思議谷のナーゼだった。

9話　『アスタヴィス祭』

『アスタヴィス祭』
（1）秘密のプレゼント
今日12月14日は不思議界では好きな人にプレゼントを贈るアスタヴィス祭なのです
マォはこの日を大変心待ちしていましたが
幼なじみのナーゼに送るプレゼントを決めかねていたのでした。
マォはエンドラの森の大きな樹木に宿る精霊キリルに「ねえおじいちゃんナーゼは何をプレゼントされたら喜ぶと思う？」と相談するとキリルは「マォはその子がよほど好きなんだね」と言ったので「うん大好き」と素直に答えました
「ナーゼは何が好きかのー」
「旅よ、だってしょっちゅういろんな所に出かけているんだもん、だからそういった物を考えているんだけど」
「じゃあおじいちゃんが飛びっきりのプレゼントを用意してあげるから待っておいで」と言うと　キリルはルイズ（東風）に「わるいが例の物を取って来ておくれ」と頼むと「ハイ承知しましたキリル様」とルイズが答え
飛んで行ったので「わあーおじいちゃんてすごいんだ」とマォは感心していた、程なくしてルイズがある物を持って帰ってきて
「ハイ、頼まれた物をもってきました」と告げ　袋に入った物をわたすと東の方へ帰って行きました。
キリルは袋を受け取ると「ご苦労さん母上によろしくな」と見送ったのでした。
「それ、ナーニ？」
「それは開けた時のお楽しみじゃよ」と言って、その袋をマォに手渡しました。

（2）舞踏会での出来事

アスタヴィス祭は元々砂漠と海の神マイトが娘アスタヴィスの洗礼（5歳）を記念して制定した物なのですが、いつの頃からか女性が好きな男性に贈り物をする日に代わって行ったようなのです。

エルフの国の中心にあるデルマイト宮殿ではアスタヴィス祭のメインイベントの舞踏会が開かれていて、人間や妖精動物霊など様々な人たちがプレゼントと共に愛を告白していました　マォは西洋風な衣装を着て　タクシードに身を包んだなりナと共に出席していたのですがなりナはお目当ての白猫を見つけるとさっさと行ってしまいましたのでマォは一人で大勢の中からナーゼを探していた、すると後ろから「お嬢さん僕と踊っていただけませんか?」とターバンに銀のめがねでカムフラージュした青年が近寄ってきました

「悪いけど私、探している人がいるの　ごめんね」とマォはそう言い走り去ろうとしましたが青年は「待って僕ダヨ　マォちゃん」と言ってめがねを外しました　マォは「まあナーゼ彼方だったの?分からなかったわ　だっていつもと雰囲気が違うんだもん」と笑って答えた　二人はアモール・ドレナ（音楽と舞踊の神）が作曲した『マルチバナ＝告白』と言う曲にあわせてデルド『エルフ風の踊り』を踊ることにしました　マォは「私このダンスは良く知らないの」と言いましたがナーゼが「僕が教えてあげるよ」と言ってリードしたので周りの観客達はこの美女とハンサム青年に注目していました

なりナも「ホーマォは　なかなかやるなりナ、おいらもがんばるなりナ」と言って白猫のミルルと踊ったのですがなかなかうまく踊れず散々な結果でありましたが「あなたって超ドジね」と言ったミルルもどうやら　なりナを気に入ったようでありました

？　キルルの贈り物（前書き）

森の精霊キルルが　ナーゼにに送ったのは　かつてエリカ・フローネス
（ラマォダの母）に送った歌でした。

？　キルルの贈り物

（3）贈り物の中身は？

ダンスの合間にマォは宮殿の外にナーゼを誘いましたそして「これっ私の気持ち、受け取ってください」と言って例の袋を渡しましたその袋の中には夢空界や幻想界など様々な世界へ行けるパスポートとキリルが作曲した

『純愛』の詩が入っていた「ワオー、これはすごいヤありがとう、それにこの曲はたしか

父さん（フデーロ）が母さん（ロズマリナ）に贈った曲だ　そうか！キリルさんが作ったのか　いったい誰のために作ったんだろ？」

とナーゼはお礼を言ったそして「僕は近く修行のために不思議界を離れるけどいつか一人前になった時、自分でもそう思えた時　その時は必ずマォをむかえに行くヨ　待っていてほしい」と続けた

その時　鷹のモーモが飛んで来て「よっお二人さん頑張ってるかい」と言って冷やかしに来たのでナーゼが「ばかっ、こなくていいって言っただろう」と怒鳴ったので「こりゃまた失礼しました」と言って飛び去ったので

マォは顔を赤くしながら「・うん」と答えるのがやっとだった

そのとき黄金の階段から7色の衣装に身を包んだ美少女が降りて来て「不思議の国の皆さん遠い所をようこそおいでくださいました、今日は年に一度のアスタヴィス祭ですので最後まで楽しんでください」と虹の女神アスタヴィス姫が挨拶すると会場は最高潮に包まれた、こうしてにぎやかな夜はいつまでも続いていました。

（4）ナーゼからの手紙

ナーゼが旅立ってまもなく不思議界は雪で覆われたのでした「ねえりゅうりゅう何故エンドラの国には桃色の雪が降るの？何故いろんな色があるの！」とマォの素朴な質問に龍は

「それはじゃなアトラントの北の雪御殿に「スノオ神と言う雪の精霊が住んでおっての彼が年に一度　雪を降らせるのじゃ、そして色はな元々着いてはいなかった、だがエリカ（当時のエンドラの王）が桃色が好きなので決められタのじゃ、他は知らんが多分皆同じような理由じゃろうな」と説明したところマォは「わー、良かっただってピンク色はマォが一番好きな色だから2番目は黒よ　でもこんな偶然ってあるの？と質問すると龍は笑って「そうじゃな、そう言うこともあるかもしれん？」と言って笑った　マォは「何でそんなにおかしいのよ」と　抗議したが龍は何故か答えなかったのです。

「時にマォいつもの相棒は」と龍の質問に

「なりナは今日はミルル（白猫の妖精）とデートなの、朝から張り切っちゃってさホントバカみたい」とマォが答えると「マォも誰かさん（ナーゼ）の話をすると同じようになるじゃロ」と龍はそう言うと「わっはっはー」と笑ったのでした　マォは「そっそうかもね」と言って2人して大笑いした。

2週間後モーモによって手紙が届けられたのだが　その手紙には「大好きなマォ、僕は今夢空界にあるゼロの谷にいる　現実には産まれることのなかった魂がここでは次々と生まれくる、そういった生命に触れる事も大きな成長に繋がると信じている　そういえばマォのいるエンドラの国ではもう時期ラヴィーナの季節（果実祭）だね、今年は僕は出席できないけどゴメンネ、その代わりに機織の妖精マルが聖なる糸で編んだと言う黒い水玉模様の服と

帽子を贈ります　きっと似合うと思うよ

ではまたお便りします　愛する君へ

不思議谷のナーゼより

と書いていました、マォは毎日読みふけっていたのであった。

（5）不穏な出来事

その後ナーゼからの手紙はしばらく続いていましたが4通目に来た手紙には

「親愛なるマォへ、ゼロの谷で大変なことが起こったのでそっち（不思議界に）へ帰るのはまだまだ先になりそうだ　でもまもなくモーモがこちらに来てくれるので心配は入らないよ
ただ予定より長くなりそうだけど、必ず帰るから待っていてね
　ナーゼより
と　あわただしく書いていた　マォはナーゼから送られた水玉模様の服と黒い帽子を来て「ナーゼに何事も無いように、無事でいますように」と祈っていたのでした。

１０話『星になった猫』（前書き）

昔、エンドラの国にドラの王国が栄えていた頃のお話です。

１０話『星になった猫』

（１）暗黒星ガウト

その年デルクラル全土は濃い霧に包まれていた

この怪奇現象に不審を抱いたドラの国のエリカ王はジブラナイスの信託を仰いだのだった

ジブラナイスはエリカ王に向って「黄金に輝く星がこのデリ・フーバに迫っておる

だがこの星もまた霧に包まれそれ以上はわしにも見えぬ」と言う信託を下した

それを聞いたエリカ王は早速ドラ神殿にたちかえり

家臣の中でもっとも信頼している軍士キリュウに

「ただちに何人かの部下を選び、暗黒星へ向いなさい」と調査を命じた、だがキリュウは

「今周辺では不穏な空気（各地の宗教戦争）が漂ってるときであり、軍を動かす訳には」

と答えたそのとき後ろにいた者が「偵察ならあっしの得意とする所でヤス」

と願い出たのは数年前キリュウがルァナン山の怪賊たちから助けた通称はぐれ猫キャット・ピーグルだったのであった。キリュウは「そうかおまえがいたんだったな、よし偵察にはおまえが行け」

と命じたがエリカ王は「それで何人で行くのです」と聞いたところピーグルは「皆でぞろぞろというのは嫌いでヤス隠密行動はあっし一人で充分でヤス」と答えたので

リカ王はこのはぐれ猫に任せる事にした。

キリュウが「モーモ」と言って手をたたくと

鷹の精霊が舞い下りピーグルを掴むと大空高く舞い上がっていったのでありました。

○亜空間

妖精の国デリ・フーバは太陽（ラード）の強い光が直接妖精人たちに当たらないように
赤、青、紫、黄、黒の5色の輪で取り囲まれていた　モーモは精霊の翼で
それら成層圏を次々と突破し何度も空間移動（テレポート）を繰り返しながら
暗黒星ガウトを目指したのであった。
（2）星獣伝説
そのすこし前天の国アトラントでもオルディナ（オシメ）は星座の女神アミューマィに
ガウト星について調べさせていました、「どうですガウト星についてなにかわかりましたか？」
と女神がアミューマィに尋ねたところアミューマィは顔を曇らせ
「それがガウトは数万年に1度出現する不吉な星でありその星が通りすぎた後
周辺の星全てが消滅すると云われるのでございます」と答えた、女神は「モーモヨ出ておいで」
とやさしく呼ぶと「なんかようか」ととぼけた口調で使い鳥モーモが飛んできて
女神の肩に止まった　女神は「どうやら地上でもガウト星探査にのり出す模様、そこでおまえは
妖精人たちに手を貸しなさい」と命ずるとモーモは「おいらには手は無いんだけどナ」
とボヤキながら地上に降りていきました。
（3）唄う星娘たち
マルガリ～ネの星にて
ガウト星を追うモーモ等は一旦マルガリーネ（唄娘）達の星で休息をとる事にした
2人はミルラの泉水で腰をおろし食事を取っていると何処からか美しい歌声♪が聞こえてきた
♪〔ＭＡＯの世界＝ほし〕

哀しい時はこの星に来て思い出の唄、口ずさむの
楽しいときは彼方と出会った日々を懐かしく想いだすの
＊イルギアの花畑で出会ったこと忘れません
よい戦士になれよと言ってくれた事今も忘れない・の
ここはＭＡＯの星、偽りや裏切りが集う世界（ばしょ）
＊ここはＭＡＯの星屑、ちりばめた世界（ばしょ）なの？
遥か昔、遠い世界で二人出会っていた気がする
　時間の闇を切り裂いて再び彼方と巡り会いたい
ここはＭＡＯ夢、いつまでも消えない大切な
世界（ばしょ）
彼方追いかけて走る
遠い日の幻影（きおく）
ここは願いが叶うと言う、ＭＡＯの不思議世界な・の

詩〔ＫＡＢＡＮＡＩ〕

?ランダリマ星?（前書き）

かつて宇宙の一角にあった　ランダリマ星に起こった悲劇とは
宇宙からのメッセージ『メッセージ・フロム　スペース』の要素を
いれて見ました。

?ランダリマ星?

「そろそろ行くデヤス」ピーグルはそう言い
モーモと共に七姉妹たちの唄に見送られマルガリ～ネの星を後にしたのだった。

（４）超空間

何度もテレポートを繰り返すうちにモーモ達は超空間で過去や未来の残像を見るのだった
その中の一つに今にも巨大な穴に飲み込まれようとしている飛行船（ノアーマ）の姿があったモーモは
「ヤッヤバイゼ、この空域は」と言うと「まさか飲まれるなんて事は無いでヤスね」
とピーグルが尋ねたがモーモは「今話しかけるなよ　フルパワーだぜ」と叫び何とかこの時空を脱したのであった
次の空間では紫の瞳をした少女がラウドネスと戦う残像もありモーモは「マォ」と呟いたがピーグルは
「マォ?誰でヤスか?」と聞いたがモーモはそれには答えずに
超空間を突き抜けて行ったのであった。

（５）宇宙サーカス団

長い超空間の旅を得てモーモとキャット・ピーグルの２人はやっと正常空間に出た。
そこでは西銀河一帯を巡業しているサーカス団パンフォースト一座の鯨飛行船
夢ちゃん号に行き当たった、花形の宇宙象パフォーはすれ違ったモーモたちに芸を披露したのでモーモ等はしばらく夢ちゃん号の周りを巡回していたのだった　ワニの座長パンフォーストが「やあー諸君、よい旅を」と言ったのでピーグルも「そちらこそ気をつけるデヤス」と手を振り、先を急いだ
飛行船の中ではたくさんの子供達がいつまでも手を振っていた。

（6）ヤモナの森

数々の冒険を得て2人はついに未知の星ガウトに到着した、「何故こんな所に降りるデヤスか?」とピーグルが聞くと「あんたはバカかよ、侵入者がどうどうと都市の中心に下りる訳に行かないだろ?もっとも一面森ばかり　みたいだけどさ」とモーモは答えたのでピーグルは「なるほど」と同意したのだった。

2人が星の中心を目指して歩いていると

遠くから「たすけてー」と言う声が聞こえてきた2人はその方向に向って森を進んだところ今度はドンドコドンドコと言うタイコの音と共に不気味な声が聞こえてきたのである

「あれは」と呟き飛び出そうとしたピーグルをモーモは引きとめ「待ちナヨ相方さん、もうしばらく様子を見ようぜ」と促したのでピーグルはモーモと共に巨葉の間から様子を窺がうことにした

（7）明主の正体

二人が見たのは卍型の棒にくくり付けられた女性がたくさんの黄金の人間たちに囲まれてる風景だったのである、「これはどうやら生贄でヤスな」とピーグルが言うと「シっ、声が高い」とモーモが答えた。

「アブクゼルカブクゼル明主ヨお望みどおりジルブライの王女をお連れした」と蛇の顔をした魔女が祈りを捧げると

「ダマレ化物、これがお連れした?と言うのかさらってきた　の間違いでしょ」と王女が問いかけると「フフフフ・・サスガはジルブライ星の王女ダケのことはあるな」と星全体からぶきみな声が聞こえてきたのだ、「なんだ、この声は」とピーグルがモーモに質問すると

「おれも知らん」とあっさり答えた。

「おおー明主さま遂に我が声が届きましたか」と魔女は叫んだ、だが王女は「ダマレ明主　いや雷獣神ガウトヨ、我が母なるジルブライを壊したばかりではなく全ての星を滅ぼそうと言うのか」と明主に凄んだが「全ての星はワシの餌になるためにのみ存在するのだ、

生き延びるは降伏した者のみフフフフハハハハハハ」と明主は答えた。

「雷獣神？何者でヤス」と再びピーグルはモーモに聞いたが

「だから俺も知らないってイッテルだろ」と答えた時モーモとピーグルに

オルディナ（オシメ）からテレパシー通話が入った「どうやら予想以上の敵があらわれた様ですね」と女神は答え「原初の宇宙には母なるカオスが漂っていたことはおまえも知っていますね」と問うと「はい」とモーモはいつにもなく丁寧に答えた女神は続けて「空白の宇宙に手を加えたのは私ですがカオスそのモノは初めから存在していたのです、そしてその中から生まれたのがガウトなのです」と語った「するってぇと　やつは原初の怪物って言うやつでヤスか？」とピーグルが質問すると「そのとおりです、アミューマィのしらべによればやつは数万年前　黄金の星ランダリマに寄生し黄金人等を支配した後あらゆる星を漂流し破壊のかぎりを尽くしてきたのです」と女神は答えた「ランダリマ星？」と2人が問うと女神は「あの星の本当の名です」と答えたピーグルは「こりゃーとんでもない野郎が現れたモンでヤスな」と昂奮しついつい大声になったモーモが「ばか声が高いよ」と注意したが時すでに遅く周りは黄金人に囲まれていた蛇の顔をした魔女が「べつに驚かんでも良い会話は全部聞こえておったわ、だがガウト星はテレパシーが通じたくらいではその正確な位置までは分からぬワ」と答え黄金人たちに2人を捕らえさせ「どうやら生贄は後2人追加のようじゃナヒッヒッヒッ」と笑ったのである。

ドウシマシタモーモ、ヘンジヲシナイ・・・

？　救出会議（前書き）

多少の電波位では正確な位置が割り出せない？
ガウト星とは（・・？

？　救出会議

（８）難航する救出会議

その頃ドラの国ではピーグル等の通信が途絶えたことに気づき、親衛隊長のキリュウを中心に各地から約３０人の王やら軍長等が集まり２人の救出会議がおこなわれていた

まず議長である国王エリカが「それではこれからガウト星攻略作戦を進めようと思うのですが皆の率直の意見が聞きたい」と返答を促したが誰もこれと言った意見は出ませんでしたので王女はキリュウに「そなたの意見を述べよ」と言った、

だがキリュウも「述べよと言われても我等は誰もガウト星の正確な位置など掴んでいないのですゾ」と真剣な面持で答えた　王女は「もうよろしいでは救出には私一人が参ります」と怒鳴った、だがキリュウは「王ヨ誰も行かぬとは申しておりませんただ位置がわからぬことには当てもなく広大な宇宙を漂うだけですゾ」と諭し、王も納得したのだった。

そのころアトラントでもオルディナが宮殿にジジゼラヴィと２人してなにやら思案していた「モーモと通信した大体の距離は分かりますだが星には霞みのようなモノがかかり、１千光年以内はどうしても見通せないのです　それを一つ一つ探すとなると膨大な時間を要します」と女神が切り出すと「それに数万年前やつに敗れたあなたはアトラントの全エネルギーを使い我等も回復には数百年もかかったのでしたな」とジジゼラヴィも苦々しく語ったやはりこちらも結論には至らなかったのである。

（９）十字架の３人

そのころガウト星では卍の十字架に架けられた３人が会話をしていた「なんとかしてここを抜け出せないでヤスか」とピーグルが聞いたがモーモが「ダメダオイラの精霊パワーもてんで役に立たない、お手上げだぜ」と言っただがレリュフ・ブライ王女は「なにヨ大の

男が情けない、必ず脱出のチャンスはあります　それが故郷を奪われた私の最後の意地です」と語ると「強いでヤスね」とピーグルが言ったらブライ王女は「ピーグルさんずっと気になっていたんですが、その首に架かっているペンダントは？」と尋ねた　するとモーモが「おまえにそんな子がいたとはねフフフ」とからかった　でもピーグルは「ソンナンじゃー無いでヤス、これは昔ある少女に貰った大切な物デヤス、そうだあのときも確か同じようなことがアッタデヤスな」と答え遠い目をしたのだった

？　ピーグルの思い出（前書き）

精霊キャット・ピーグルの思い出の少女とは果たして！

？　ピーグルの思い出

（１０）思い出の少女（回想）

ピーグルは昔ルイズ地方にあるゴゴン山脈を旅していた時　怪物に追われた一人の少女と出合った、その少女はもう一つの世界から偶然こちらの世界へ落ちて来たのだと言う　ピーグルはエフの国にあるナヤオヤ湖が向こうの世界（地球）と繋がっていることを知り、様々な冒険の末向こうの世界の入り口まで送って行ってやったのだった。

○ナオオヤ湖

ピーグルは少女を笹の船に乗せ「この川を下ればもう一つの世界に行けるデヤス、気をつけて帰るデヤスヨ」と言うと少女は「ピーグルいままで色々ありがとね、怖い思いもいっぱいしたけどそれも言い思い出だね」と語った「別れは言わないデヤスきっとまた会えると信じてヤスから」と再びピーグルは言うと少女は「このペンダント、宝物だけどピーグルにあげる」と言った

「そんな大切な物いいデヤスか?」とピーグルが聞くと少女は「良いもん、もう一度生きてお母さんに会うと言う夢かなっちゃったから」と答えた

「大切にするデヤス」とピーグルが礼を言うと少女は最後に「絶対もう一度会おうね約束だよ」と言って手を振ると川を下って行ったのだった　ピーグルはそれを涙で見送っていた。

（１１）ペンダントの魔神

「思い出話もそれ位にしなされ、そろそろ時間じゃヒッヒッヒ」と魔女は笑い「ブライ王女ヨおまえが体内もつ銀の扇を捧げればガウト神の力は完全に復活するのだ」と語り「残念だがまもなく時間ダ処刑用意」と続けた。モーモは「くそー死んでたまるかよ」と言いピーグルは「もう一度成長したあの子に会いたかったデヤスな」と語りペンダント投げた　するとそのペンダントの中から煙と共に魔

神が「ハーイ、なんか御用ダスか」と言って現れたのだ、モーモは「そんなん　持ってるなら　なんで初めから使わん」と怒鳴ったがピーグルは「いまに分かるデヤス」と答え「3人の銀縄を解いてほしいでヤス」と頼むと魔神は「ワカッタダス」と答え3人を十字架から解放すると「これで3つの願いは全て叶えたダス」と言って消えたのであったモーモは「これで終わり?」と訊ねるとピーグルは「昔手に入れた魔神デヤス　願いが一つ残ってたでヤスが、いつかあの子に会おうと取っておいたでヤス」と答えたモーモは「それは悪かったな」と言うと「何イッテルデヤス、命があればこんな物なくてもいつか会えるデヤス」と言いきった。だが黄金人は見かけ以上に強く3人は滝まで追いつめられていった魔女は「やれやれまったく懲りない連中じゃナ明主様に逆らっても無駄だといておるのに」と答えた。そのときかすかな霧が流れてきた、モーモは「これは次元流（風）だ、ほら超空間で見ただろう」と語ったらピーグルも「あの過去や未来から流れてきたってやつデヤスか」と同意した。

？　ピーグルの思い出（後書き）

精霊キャット・ピーグルが出会った少女こそ
不思議界記伝を翻訳した　ジャーナリスト　如月重太郎の娘
の真由香ことゆっかさん（後の主人公マオンの母）です

？　救世主伝説！（前書き）

ランダリマ星に伝わる救世主伝説！！

（１２）未来から来た戦士？

別の時間から流れてきた霧がガウス星全体を包んだかと思うと３匹の鬼と共にそれを追って戦士が舞い下りた、戦士は瞬時に３匹の鬼を赤きセルゲイアの剣で切断したのだった、そして鷹にかけより「あらモーモじゃない懐かしわね　こんなところでイッタイ何シテルのサ」と尋ねた　モーモは「詳しい話は後、それよりこいつらやっつけてくれ頼むよ」と言ったら戦士は「ＯＫお安い御用よ」と語ると剣を翳し黄金人たちに向って行った魔女は「これは面白いことに」と呟き消え去った、ブライ王女は「魔女ザザーラが引いた、このモノはイッタイ」と答えた、戦士は「ウナレセルゲイア」と叫ぶと黄金人達はその光で一瞬意識を失ったそしてしばらくするとその一人がムックリ立ち上がり逃げようとした４人を「お待ちください、私は黄金人の王女ミドナ、我等の呪いを解いてくれたお方はどなたですか」と尋ねた　すると先ほどの戦士が紫の髪を靡かせ「それはわたしです、名はラマォダと申します」と告げた、するとミドナは「お待ちしておりました、救世主様」と言ったので４人は目を丸くしたのであった。

（１３）救世主伝説

ミドナは３人をムサの地下洞窟に案内した、やがて向こうから黄金人等を従えて長老ムウランが現れたムウランは「安心なされここにいる者は皆洗脳されてはおらん」と語った

モーモは「あんた等はなぜラマォダの事を救世主と呼んだのか説明しろよ」と切り出した

ムウランは「それを説明するためにここへ来ていただいたのですじゃ」と語った、ミドナは「そこから先は私が説明します」と答え話しを続けた「私達黄金人は祖先らが荒廃させたこのランダリマ星に黄金文明を築きましたそして自然とも調和しながら数千年間は平和

に暮らしていたのです、でもある時暗黒の宇宙から雷獣神ガウトが現れ故郷ランダリマを死の星に変えて行ったのです　戦いを知らない私達はことごとく雷獣神に敗れ去り一部の者とこの地下に逃れ再起を窺がって　いたのですが、あるとき私は同士たちと地上の様子を探っていたさいに洗脳（呪い）を受け、その後は皆さんご存知のとおりです」と語った「ちょっと待つデヤス、何処にも救世主は出てこないヤスよ」とピーグルが聞くとムウランが「そうあせりなさんな、まだ先がありますじゃ」と答えたミドナは続けて「私達はこの危機を回避するため王家の古い記録を調べましたそしてある記日を発見したのです「その記日とは」とブライ王女が尋ねたらミドナは「遠い未来王国に危機が迫るとき紫の髪の少女が舞い下り・と言うものです」と語った、するとブライ王女が「それだけ、その続きは」と尋ねたがミドナは「あとの文面は霞んでいて解読出来ませんでした、でもいつ餌にされるとも分からない状況の私達にとってはそれが唯一最後の希望でした」と語った。
それを聞いたラマォダは「私がどれだけあなた方の力になれるか分からないけど光栄に思います」と言ったその言葉を受けムウランは「いや、隠しめさるナあの剣、あの戦いを見た時このお方こそ伝説の救世主に違いないとわれ等は感じたのじゃ」と輝く目でそう言ったのだった。

？　盟主の正体（前書き）

盟主の間で　戦士ラマォダとの会見が行われた

？　盟主の正体

（１４）魔女の呼びかけ

その時洞窟の外からは魔女が「侵入者に告ぐ明主さまがラマォダなる者との会見をご所望じゃ、速やかに出るがよい、もし応じなければ直ちに総攻撃に移る」と呼びかけてきたピーグルは「ああ言っているデヤスが、どうしヤス」と言えばブライ王女は「罠に決まっている、やめたほうがよいわ」と止めただがラマォダは「いや行こう　せっかく会いたがっているんだしそれにガウトとやらにも会って見たいしね」と答えたミドナも「私もやめたほうが懸命だと思います」と意見を言うと

ラマォダは「なーに罠なら罠でかまわないわ

それで死ぬようならわたしは救世主じゃないって事ね、とにかくまかせて」とウインクした。モーモは困って「どうする長老さん」と意見を急かした　長老ムウランは「ラマォダ殿わしにはどうしてもあなたが救世主としか思えないのじゃ、わし等のために行ってくださるか？」頼むと　ラマォダは「承知しました、モーモ皆を頼むわね」と言い洞窟を出て行った「ラマォダさんきっと帰ってくるデヤスよ」とピーグルは叫ぶと皆も後姿を見送るのだった。

（１５）雷獣神との会見

ラマォダは魔女にガウト星の中心にある黄金宮殿の明主の間に案内された、その向こうには４面の顔をした牛の像があった「良く来られたラマォダヨおまえが来るのをわしはずっと待っておった」と牛の像は語ったラマォダは「なにィ、どういう事だ」と問いただした像は「この世界にカオスが漂っていた事はおまえも知っておろう」と語ったらラマォダは「それは聞いた」と答えた　像は話を続け「カオスはオシメ（女神の総称）が宇宙を構成するのに重要な要素となったが同時にこのワシも生み出す事にもなったと言う訳だ」と語った　だがラマォダは「言っている意味がわからんその話とこの私

が何の関係があるというのだ」と問いただした「フハハハは、話は最後まで聞くものだ」と像は答え話しを続けた「宇宙を漂流し続け幾千もの星を食い尽くしたワシはある時片腕がほしくなったそして自らの細胞を使い生み出した暗黒の戦士それがミラルォダなのだ」と語ったらラマォダは「ガウトよ、何が言いたい？まさか」と質問すると像は「ハッハッハそのまさかナノダヨミラルォダの生まれ変わりそれがおまえナノダフハハハハハ」と語ったのである
ラマォダは「ウッうそだー」と叫んだ

（16）ラマォダの決断

「嘘ではない、ミダルォダはデルクラル付近で行方をたったのダその姿その声おまえがミダ
ォダの生まれ変わりに違いない」と像は語ったラマォダは「わたしは認めない我が一族の祖先がおまえ等とは？」と言い放った
しかし像は「信じぬならそれでもよい、どのみち貴様の精神はワシが貰いうける」と語ると強力な精神波がラマォダを直撃したラマォダは思わず「ウワァーアァー」と叫んだ
魔女ザザーラは「明主さまはラマォダの精神を食おうとしておられる　しかし、やつの精神は食い尽くせる物ではないたとえガウトとイエドモナ」と呟き別次元へと消え去った。
その頃ムサの地下洞窟では大振動が各地で観測されたミドナは「なにこの揺れは」と言いブライ王女も「ここでは良く地震があるのですか」と尋ねると、長老のムウランは「いやわしが生きてる間でこんなことは初めてじゃ」と語った　モーモは「こんなときに相方は何処いったんだか？」と呟き「ラマォダは大丈夫だろうか」と語った。

？　盟主の正体（後書き）

ここら辺は　ＲＸの最終回を入れてみました。

？　ラマォダの怒り（前書き）

ガウトは　自然の共鳴に触れる

？　ラマォダの怒り

（１７）予言～アトラントにて
その振動は数千光年離れたアトラントでも観測された「女神さま惑星ＲＸ０３３ＣＺより巨大な振動波が出ております」と星座の女神アミューマィがオルディナ（オシメ）に伝えただが女神は「分かっています雷獣神が同士ラマォダの怒りに触れようとしています、まもなくガウトは消滅します　もう間に合いません」と告げたのであった。
ガウト星ではラマォダが雷獣神に精精神をすい続けられていた「ウワァーアァー」
牛の像は「ハッハッハッハッまもなく貴様はワシの元に帰るノダ」と笑った、そのとき誰かがラマォダを突き飛ばし雷獣から開放したキャット・ピーグルだった「ウオォーでヤス」と言う悲鳴と共に精神波を食らったピーグルは意識を失った、ラマォダは「タァー」と言って像に火炎輪を投げつけた像は砕けちり精神波が『ピタッ』と止まった
ラマォダはピーグルに駆け寄り「何故こんなことをした」と聞いたらピーグルは途切れ途切れに「アンタさんが　あっしの知っている子に似ているからデヤス、本当に無事でよかったデヤスね、これでもう思い残すことは無いでヤス」と答えて眠った。
ピーグルはその時薄れゆく意識の中で不思議な夢を見ていたのであった。
（１８）不思議な夢～幻想
そこは何も無い空間でただ青空だけが無限に続いていた、そこを黒猫がある少女を追いかけていた「ちょっと待つなりナ、少し速いなりナ」と猫が言うとその少女は「ダーメ、アンタが遅いんじゃない」と言って少女はまた走り始めた黒猫は「もう走れないなりナ、マォはすばやいなりナ」と言うところで夢は終った

「マォ」とピーグルは口から洩らした
ラマォダは「エッマォ」と聞き返した時　ピーグルの意識が戻った
ラマォダは「しっかりしていつか本当のあの子に会うんでしょ」と
言うと「そっ、そうでヤ　したね・もう・・一度・・」と言ったき
りピーグルはそのまま息を引き取った、そのとき救援に来たモーモ
等が見た光景ははぐれ猫キャット・ピーグルの誇らしげな死に顔だ
ったのである。

（19）自然の共鳴

ラマォダは「モーモ皆を連れて直ぐにこの星を脱出して」と指示し
た　モーモは「脱出と言ってもおいら一人の力では」と嘆くとラマ
ォダは「救援を呼んであるの」と語ったそのとき夢ちゃん号に乗っ
てパンフォーストが「やあ皆さん　お困りのようで」と現れた
モーモは「全員この船に乗れ、直ぐに脱出するぜ」と語り出発を急
かした。
ラマォダは「ガウト許さないよ」と言ったときラマォダの背中から
白黒2枚の翼が現れたガウト神は「貴様ではこのワシにかなわぬと
いったのがまだ分からんと見える」と語り巨大な精神波をぶつけた
だが　精神波はラマォダに当たることはなかったのである　ガウト
神は「貴様はイッタイ何者なのだ」と語った、するとラマォダは「
私は精霊天使ラマォダ同士オルディナの命により暗黒の破壊者ガウ
トを葬る」と告げた　その時強大なエネルギーがラマォダを包んだ
のであった　それは自然の破壊に対する共鳴だったガウト神は「ナ
ニイワシのエネルギーが吸われ・て・いる」と叫んだ、ラマォダは
そういった全ての力をセルゲイアに集めた。

？　ラマォダの怒り（後書き）

ドラゴン・ボールも入ってます。

？　別れ！（前書き）

ガウトを巡る物語もついに終わりを迎え、悲しい別れが待っていた

？　別れ！

（２０）ガウト消滅

その頃黄金宮殿の外では脱出の準備を急いでいた船長のパンフォーストが「くまさんは楫を北北東に取れ、うさちゃんは出発後、直ぐワープ体制に移れ」と的確な指示を出していました、モーモは「ラマォダは大丈夫かな」と心配だったがムウランは「なーにあのお方なら心配無いじゃろ」言ったので皆は少し安心したのだった。パンフォースト船長が「夢ちゃん号出発進行」と叫び出発した船は直ぐにワープにはいったのであった。

ラマォダは「ファイナル・セイバー」と叫び

全てのエネルギーを星の中心に放った雷神獣はたまらず「ヤッヤ・メ・ロヤメテ・クレ・」と叫び雷獣はガウト星と共に消え去ったその衝撃は数光年先にも届いたのだった

自らをバリアで包んだラマォダは「雷獣神ガウトヨ、大自然を破壊しつくした報いを受けたのだ、もう2度と現れることはないだろう」と語った。

（２１）母なる星をもとめて

ガウト星から寸でのところで脱出した夢ちゃん号は燃料補給のため一旦金星に立ち寄った、そして一同はヴィーナスタウンのホテルのロビーでブライ王女が「残念ですがモーモさんとはここでお別れです」と語ったモーモは「なぜドラの国ではせっかく歓迎の準備が整っているのに」と話すとミドナは「せっかくの好意ですが私達は一刻も早く母なる星をもとめて出立したいのです」と言うのだったでもモーモは「それだったらデルクラルで暮らせば、歓迎するぜ」と返すと長老のムウランが「ご好意は感謝しますがわしらはわし等の土地を見つけたいのでス」と語ったのでモーモは仕方なくここで別れることにした最後にブライ王女は「忘れませんあなた方のこと特にピーグルさんの事は」と言うと、みな一世にシュンとしたのだっ

た、だが座長のパンフォーストさんが「さあ元気ダスです、新しい門出に涙は似合わぬじゃロウ」と冗談交じりに言ったのでロビー内は笑いに包まれたのだった。
宇宙像のパフォーが元気良く「パオー」と鳴いたのを合図に座長のパンフォーストは「それでは出発進行じゃロウ」と大声で叫び金星を後にしたそれをモーモはいつまでも見送っていた

（２２）勇者の埋葬

事件が終わった翌年ドラの国（後のエンドラ）では勇者を弔う　埋葬の議がドラ神殿の広場でおこなわれたのだった、エリカ国王は皆に向って「これより勇者キャット・ピーグルの埋葬の議を執り行う」と宣言した
師匠のキリュウは「良いやつじゃっタ本当に言いやつ　じゃった」と涙ながらに語った
モーモは「さよなら相方さん、あんたとの旅最高ダッタゼ忘れないよ」と語り預かった（拾った）ペンダントを墓に掲げた、そのペンダントの裏には〔キサラギマユカ〕と記されてあった。
そして最後に国王が「あなたはこのデリ・フーバのみならず全ての宇宙をその大きな勇気で救ってくださいました２度と不幸な争いが起こらぬことを願い、ここに準天使ローサ（精騎士）キャット・ピーグルの称号を贈る」と宣言すると　周りから拍手が巻き起こったのだった。

？　勇者の星（前書き）

不思議界と宇宙を救った黒猫は
宇宙を見守る　星になりました。

？　勇者の星

（２３）天からの迎え
ピーグルの遺体はきまりどおり広場で燃やされ観衆は英雄の死を見送った
その時　空から天使が舞い降りピーグルの魂を抱え天上界に連れて舞い上がった
　その天使を見たモーモは「あっラマォダ」と呟いた天使は
「この者は勇敢なる勇者ゆえアミューマィ　がぜひ星座に加えたいと、だから私がその案内役としてまいりました」と語った　彼女はエリカ王だけを見つめていた
エリカもまた天使を不思議な感覚で見つめていた。
魂となったピーグルを抱えたラマォダは「さようなら、おかあさんまたいつか」
と呟き天に昇っていったのであった。
その時エリカ王女は初めて自分の中に生命が宿っていることを感じた
そしてお腹に手をあて「ら・ま・お・だ」と呟いた。
（２４）キャット・ピーグルの星
以後不思議界では毎年冬になると南の方に
猫の目の如く蒼く輝く星が目撃されるようになった
人々はこの星をキャット・ピーグルの星と呼び
苦しい時や　挫けそうな時　見上げ
自身の勇気の糧にするのだと言う。

？　勇者の星（後書き）

勇者ヘラクレスの話をヒントにしています。

11話『大洪水』（前書き）

前回の続きの話
森の精霊キルルとエリカ王女の純愛物語

11話『大洪水』

プロローグ
そのころ宇宙ではある脅威が
かつてガウト星があったと言う付近で空間がゆがみ星々が消滅すると言う怪現象が起こっていた。
そして静けさを破って不気味な声が聞こえてきたのだった
・・フハハハハハハハ
・さすがは戦士ラマォダ・・しかしワシの最後の・・プレゼントをありがたく受け取るがよい
フハハハハハハと笑うとその声は緑色の液体となって地上（ナスビ国）に降り注いだのだ
それがナスビ国滅亡の予兆だと気づく者は誰一人いなかったのである。

（1）王の妊娠
その年４百年ぶりに遊星アロロが地球をかすめて行った人々は
「これは不吉な」とあちこちで噂しましたそしてまもなく事件は起ったのです。
ラーク王が亡くなり正式に三世を継いだエリカ王（２０）が体調を崩し倒れた
と言うのです　キリュウ等家臣たちはさっそく医師に病状を調べさせた所、医師団は
「王は妊娠しておられる」と答えたのでしたがキリュウは
「はて？妊娠と言われても心当たりが」と言いかけてはたとあることに行き当たりました

（2）エンドラの森で（7歳の時）
王女エリカは幼くして実質的に王でしたその指示も子供とは思えぬほど的確であったのです
しかしある時　勉強や武芸などの習い事の毎日に嫌気がさし神殿

を抜け出しました
　でも神殿の近くから一歩も出た事が無い王女は森で迷子になってしまいました
「ここは何処なのぉ道わかんなくなっちゃった」と途方に暮れていると
近くから美しい音色が聞こえてきました　王女はその方向に行って見ると
木の上で　コオロギのような少年が竪琴を奏でていました。
王女は「あなたはそこで何をしているの」
と尋ねました、少年は「僕は西の国から来たキリルと言う森の精さ
　大好きな竪琴を奏でていたところさ」と答えた王女は「良い音色ね」
と言いキリルに神殿まで送って貰ったのですが　それからも時々森を訪れるようになり
　いつの間にか愛を育むようになったのです。

11話『大洪水』（後書き）

遊星アロロとは　数百年に一度地球（不思議界）を巡る星で
その年にはいつも　悪いことが起こるので
人々は『災いの星』と呼んで恐れていた。

？　滅亡の始まり（前書き）

幸せの絶頂にいたエリカでしたが、それは長く続きませんでした。

？　滅亡の始まり

（3）不幸のはじまり

エリカ王の妊娠は瞬く間にドラの国中に広がり国民達はもうお祭り騒ぎでありました

でも生まれて間もない頃家臣等が目を放した隙にいたずら猿のキッキーポコが赤ん坊を攫って行ってしまったのです、キリュウは「なんとしても見つけるのだ」と言い国中を隈なく探したのですがみつけることはできませんでした、でも不幸はそれだけではありませんでした

子を産んでまもなくエリカ王が体調を崩しそのまま亡くなってしまったのです

大好きなキリルの竪琴に見送られて・・・

キリルは王女の死を悲しみそのまま何処かへ行ってしまいました。

（4）アモスィ

さていたずら猿のキッキーポコは赤子を抱えて木から木へ飛び移る瞬間に赤子を林の中に落っことしてしまいましたでもキッキーポコはそれにキズキません、その時丁度そこを通りかかった牧場神ダムゥの娘アモスィは林の中で泣いている赤ん坊を見つけると「こんなところに赤ん坊が、とりあえずキリュウ様の子と一緒のベット（ゆりかご）に寝かせましょう」と言って森の家に連れて帰ったのでした。

赤ん坊の行方もさることながら摂政のキリュウには心配事が後二つありました

１つは最近ドラの国以外で宗教対立が激化していること、そしてもう１つは謎の伝染病でした。

それは妖精人の夫婦が謎の死を迎えたのをきっかけに同じ事が各地

で起こったと言います
　その原因を調べに向かった部下達も、彼等と同じような死に方をしたので、キリュウは
部下たちに「直ちに村を封鎖しろ」と指示を出しましたが事態は深刻でこの現象は既に
ナスビ国全体に拡大しつつあったのです。

（5）緊急会議

　キリュウはドラ神殿の一室で緊急会議を開きました彼はまず医師団に報告を求めました
医師団長のミクルが「それがこの謎の病原体は人から人村から村へと感染すると言う物でして
我等も見たことはなくまったくお手上げ状態なのです」
と語った、そのとき何人かの家臣がバタバタと倒れていきましたのでキリュウは皆に「直ぐにここから退去せよ」と命じたのでした。

？　森の精霊アムスィ（前書き）

生きるも死ぬも　民とともにありたいという、アムスィの願い

？　森の精霊アムスィ

（6）アトラントにて
天の国でもこの謎の病原菌について会議が開かれていましたしかしアトラントの
頭脳を持ってしても解読出来ない未知のウィルスであった女神オルディナは
「このままではナスビ国が死滅するのは時間の問題、ならば方法は一つしかありません」
と語ったその肩には、先ほどの猿、キッキーポコを乗せていた。
ジジゼラヴィは「ではあれを実行するのですね」と哀しげに語った女神は
「モーモ、ジルドーラに連絡してください、頼みましたよ」と指示すると
「チェやぁな役目ダナ」と言い地上に降りていきました。
（7）未来への希望
病原体はナスビ国全体に蔓延しとうとうキリュウや家臣団も次々に倒れていきました
そのころエンドラの森ではアモスィが天に住んでいる父ダムゥに語りかけていました
「親愛なるお父様お助けクダサイ突然の疫病にいまや地上に住む精霊達さえも
感染し死を迎えようとしております」と願ったしかしダムゥは
「愛しき娘ヨ良く聞くがよい今ファンシーゾーンで起こっていることは残念ながら
誰にも止めることは出来ぬノじゃ既にモァーラも娘たちと共に天に帰っておる、おまえも
天に来てこの父と暮らすがよい」と語ったしかしアムスィは
「私はこの森で生まれ育ちました運命は民たちと共にありたいとオ

ルディナさまにお伝えください」
と語ったそして「ただこの子たちだけはお願いします」と天に差し出した
そこには2人の子が仲良く籠の中で眠っていたダムゥは
「承知したこの子等のことは任せるがよい」と言って受け取ると一時娘を見た後
「さらばダ娘よ」と言いダムゥの声は去っていった。

フデーロとラマォダ

？　森の精霊アムスィ（後書き）

牧場神ダムゥの娘アムスィは、阿鼻国（異国）との戦いでに負傷した軍師キリュウを介抱した際、子（フデーロ）を宿した。

？　終わりと始まりの物語（前書き）

旧デルクラルの滅亡と、再生のドラマです

？　終わりと始まりの物語

（８）妖精人たちの滅亡
～まもなくしてそれは起こった～
ラホメルモァーラが去った大地は徐々に腐り始め、５つの輪が外された地上は
太陽神ラードの光を直にうけ干上がりそして神龍ジルドーラの「バォー」と言ういな鳴きを
合図に四方の海から一世に津波が『全てを洗い流す』かのように押し寄せた
天からは流星雨が降りそそぎ環境を一変させたのである
その現象が何十年も続きやがて不思議界には誰一人いなくなったのであった
ナスビ国を洪水によって滅ぼしたオルディナ
は自らの細胞を分裂されヤナホイ、アルモア、ナムジィ、ラウドネス、
リブエラ、カワモス、ダイゾネス等、７人の御使い（妖精神）達を作り
　彼等に後を任せ何処かへ消え去ったと言います。
（９）妖精達の誕生
まず妖精神達は新たな人間を作らなければならなかった、そこで彼等は
ナスビの種とトウモロコシとをすりつぶし、水を加え捏ね合わせて
妖精や動物そして
他の人間（黒い種族）達を作ったのだった。
　次に彼等は四方にエルフ、ライオマ、ミレーネ、ルイクス等４つの国を作り
その中心にエンドラの国を作ったのであった。
　こうして不思議界は新たに蘇った、しかし女神は旧デルクラルから

数種類の動植物とサマリア（クマタカの末裔）夫婦　等をｄｅ　ｎ（デ）
ｏａ（ノア）
と言う方舟に載せ助けたと言う
「何故　俺たちだけたすかったんだ」と言うサマリアに
「あなたか　わが友　ラマオスの子孫だからですと　天空から女神の声が
聞こえた　そして「この子たちを頼みましたよ」と告げたのだった
　妻のサリスが「あっこんなところに赤子が」と叫んだので
サマリアは足元をみるとそこには　ゆりかごの中で眠っている
フデーロと　ラマォダがいたのであった。

？　終わりと始まりの物語（後書き）

聖書とマヤやアステカの神話（人間を作ったとか）を題材にしました。

12話『四つの風と月の兎の話』（前書き）

風と月の兎の由来です（；一_一）

12話『四つの風と月の兎の話』

（1）四姉妹たち（ドラの神殿にて）
大地の女神ラホメルモァーラには４人の娘達（風の精霊）がいました
賢い長女のルイズかんしゃく持ちの次女ライマ、とても頑固な三女のエフ
そしておしゃれで優しい末っ子のミレ（ロズマリナ）の４姉妹でした。
　モァーラは姉妹にそれぞれ土地を分け与えたのですがその領地をめぐって兄弟げんかが起こったのです、長女ルイズは「私は東が言いワ」と言い東の地方を貰ったのですが
　次女の　ライマと三女のエフも「私たちも東がいいわ」と言い出す始末です
でも末っ子のミレ（ロズマリナ）は「私は別に何処でもいいわ」と言った途端
かんじゃく持ちのライマが「あんたはいつもそうやって良い子ちゃんぶるのよね」
と言い他の三人も「そうよ、そうよ」と同調するのであった。
そこで　四姉妹は母　モァーラと散々話し合ったのですがなかなか結論が出ません
仕方なく　四人は母に一任する事にしました、その結果　長女ルイズが北
次女ライマが東　三女のエフが南そして末っ子のミレが西の地方を貰う事になりました
しかしやさしいミレ（ロズマリナ）は母と暮らしたいと願い出たので彼女はミレの国に母
ラホメルモァーラを呼び寄せ、一緒に暮らしたのでした。
　以来ナスビ国には四方から風が吹くようになった。
（2）

昔オルス（月）にはデルルンダボウと言う
２つ首があるウサギが住んでいました、寿命は3千年もあったのですが
他にはだれも住んでいなかったのでデルルンダボウは
何時も一人ぼっちでした。
そこでデルルンダボウはある朝オルスに
「お願いだ女神さま、おらはいっつも1人で
退屈だ　仲間を作ってくんろ」と願った
オルスはその願いを聞き入れ
マルルンダボウと言う伴侶を与えた
デルルンダボウは大いに喜び
オルスのために　アッチラ、コッチラ
と言う月団子を備えたのだと言う
これが現在も続く、月見の始まりだと言います　今もお月様を見上げると
デルルンダボウとマルルンダボウの夫婦が仲良く
餅（団子）をついている影が写ると言う事です。

12話『四つの風と月の兎の話』（後書き）

後に誕生する月の女神はヂーナになりますが
月そのものは　オルス（デルクラル語）と言います。

13話『ゴルゴーンの伝承』（前書き）

かつての金星を襲った物
それはアトランティスをも　海に沈めた
伝説の怪物だった。

13話『ゴルゴーンの伝承』

ペルーにあった　ナミダラ寺院には
冒険家カイザークの孫　セルメダス・アニータの予言集が残されている
それによると　かつて金星には文明があり
頭に輪と尻尾をつけたエルク人達が暮らしていたと言う
彼らはゼロストと言う指導者によって支配され黄金文明を築いたのだという
町は全部で二六の地区に分かれていて、それぞれ
A、K、Bなどの名で呼ばれていたらしい
また　彼らは『サプライズ』『メイビー』『ディーバ』等の言語を使い分けていたようだ
だがエルク暦一七年　宇宙のかなたより
九つの顔にそれぞれ牛の顔をつけ背中には　巨大な翼を付けたゴルドーンと言う巨魔が首都エルクルを襲った
ゼロストはゴールデン・ホッパーと言う
2千の騎士団を従え戦ったが　巨魔には勝つことは出来ず
金星文明はかつてのアトランティス同様　滅亡の道を歩んだのだった。
しかし、アニータは著書では
「1千年の時を得て巨大なる龍は再び　銀河系に訪れる」と書き加えている
ただ残念なことに、寺院が地震で消失したため
詳細は不明だが、人類には勝目が無いのだと　死の寸前に伝えていたと言う
果たしてその時　人類は　世界はいったい??

13話『ゴルゴーンの伝承』（後書き）

巨魔ゴルゴーンは、日本神話のヤマタノオロチと
我が四国（宇和島）に伝わる、牛鬼伝説を加え　それに
キングギドラのイメージを導入して誕生しました。
なお、チリ系アメリカ人である　アニータは後に　ゴルゴンを
ユダと言う名で記している。

１４話【理想郷・ヴィラヴィアン】（前書き）

かつて異世界にヴィラィアンと言う都があったと言う
これは、デルクラル神話の元となった
物語です。

１４話【理想郷・ヴィラヴィアン】

（１）楽園

遥かなる大昔、異世界にヴィラヴィアンと言う都があった
そこには5百人の裸の男女が住んでおり彼等は夢界人と呼ばれていた
霞元（モモル）玉と言う不老の薬草を食べ自然と共に生き正に理想郷であったらしい
夢霊宮と言う御殿に住む彼等の王はララマォと言う聡明な仙人でありました。

ララマォには3人の娘がいたのですが、そのうち長女のブタレス（１２）は
たいへん醜かった為父はその醜さを呪い蔵に閉じ込めました
でもそれを気の毒に思った妹のオルデとダーナはこっそりと食事を運んでいました
ある時「少しだけ外が見たい」と言う姉の言葉を聞き入れブタレスの縄をといてやりました。

でもその夜ブタレスは、神が「決して立ち入ってはいけない」と禁止した
禁断の園で欲望の実を望むままに食べ続け醜い黒豚の怪物なって都で大暴れしたのです
その結果都は荒れ人々の間にも欲望が蔓延し　美しかった楽園は、失われて行ったのだと言う。

（２）欲望の実

知らせを受けた父ララマォは激怒し
この事を大聖神　セスフィーヌに考えを仰いだ、セスフィーヌは
「ブタレスの犯した罪は妹のオルデとダーナも同罪である」と裁定を下し
3人を一つに結合し罪の重さの糧として蜥蜴の尾と蝙蝠の羽をつけヴィラィアン（異世界）より追放したのだった。

「ブタレスヨ、おまえはせっかくの楽園を滅ぼしました
その罪を背負い生涯宇宙を漂いなさい」セスフィーヌはそう告げ消え去ったと言う。
ブタレスは宇宙を数千年漂った後にその罪を許され
新しい世界を作るためセスフィーヌより創造の力を与えられたと云われている。

〔サモア・モヤン族の神話〕（最古の部族）

１４話【理想郷・ヴィラヴィアン】（後書き）

セスフィーヌより創造の力を与えられた　３面神こそ
オシメ＝総称
（右面は知性を司るオルディナス、左面が邪悪を司る　ダーク・ナモ
正面が真・まことを司るブタレァ）だと言われています。

15話『使い鳥の伝説！』（前書き）

伝令　モーモにまつわるお話です。

15話『使い鳥の伝説！』

（1）ハローラン（雲上界）
デルクラルと宇宙の狭間には　ハローランと呼ばれる天女達の世界があった
そこには、色とりどりの翼を持った　破露母（はろも）と言う天女たちがおり
彼女たちのリーダーは　アネ～ゴと言って、最年長であり　派手な感じであった
彼女らはいつも煌びやかな衣装を着て『ウォウォーウォーウォー』と踊っていたと言います　天使長ローザによって管理されたその世界は
平和そのものだったのですが唯一つ問題があったのです
それは黒い小さな翼を持ったノリルと言う
臆病な妖精の子が　華やかな翼を持った者達のイジメにあっていました
（もちろんローザの目の及ばぬところで）
でもノリル少年は
「僕もいつか、皆の役に立ちたい」
と考えていたのでした。

（2）ガラゴラ童子
ある時ノリルは怪我をして飛べなくなった鷹を見つけて
「これはいけない、手当てしてあげないと」少年はその鷹をモモと名づけて可愛がった
でもそんな時　魔幻界からゲノム大王が
七つの首に牛の顔、わしの翼を持った怪物
ガラゴラ童子と魔女　女滋茄（メディナ）を従えて現れ　ハローランを襲った
戦いを知らない天女達はたちまちパニックになり逃げ惑うばかりでしたが

ローザはただ一人、怪物達に向っていった
蜘蛛の顔に蛇の髪と胴体を持ったメディナは
その口から毒液をローザに浴びせましたが
月光の盾でそれをかわしたローザは
セルゲアの剣で魔女を切り裂いた
しかしガラゴラ童子はかつて金星を滅亡された怪物であり　その力は無限大だった
そのためローザは苦戦を強いられた。

（3）少年の勇気

このままではハローランは滅びてしまう
誰もがそう思った時、青い鷹を肩に乗せた
一人の少年が木の影から飛び出して
「そんな事しちゃーダメダよ」と言った
「ちっこいの　このゲノム様に意見するとはいい度胸だ、ご褒美にその命をもらうぞ」
と言い　そのムカデの口から火炎竜を少年に吐きかけた
たちまち少年の体は『ジュー』と言う音を立てて溶けはじめた
だがその瞬間
ノリルの黒い翼が誰よりも美しく光り輝いたのです
その光を浴びたゲノムと怪物は泡となって消えていった
ノリルは「僕やっと人の役に立てた、この世界を守れたよ」と呟くと笑顔で死んでいきました。
そのとき初めて人々は　姿形ではなく大切なのはそれを持った人の心なのだと悟ったのだった。
ローザはこの勇敢な少年の勇気を認め
天上界（アトラントに送った）そして友達の鷹を人間と神とを繋ぐ伝令神として復活されたのである。

15話『使い鳥の伝説！』（後書き）

ハローランを襲った　ガラゴラ童子は　西洋ではゴルゴーン欧米ではユダと言う名で記されている。

16話『ナオオヤ湖の恐竜』寓話（前書き）

優しい恐竜の寓話です

16話『ナオオヤ湖の恐竜』寓話

昔　エルフには、機織りの神オルデナが　海の糸と　大地の糸を
紡いで作った
と言う　ナオオヤと言う　湖があり
そこには、アーモットと言うとても優しい恐竜が住んでいました。
でもその頃はまだ　国境はなく　ダルゲと言う銀の一族とダルトと
言う
銅の一族とが覇権を駆けて争っていたので、国は大いに乱れ切って
いたのです
ある朝　ダルゲの指導者　ムーニー・トンが大軍勢を従えて　ダル
ドの砦に
最後の戦いを仕掛けてきました　ダルドの指導者の　パンパー・ヤン
も　同じく大軍勢を従えてこれを迎え撃ちました
戦いは数十年も続き　子供たちは相次ぐ戦にもはや諦めかけていま
した
その時突然　湖が光り、ナオオヤ湖からアーモットが顔を出し
２つの種族の間に割って入りましたので、哀れ恐竜は　両者の矢を
受け死んでしまった
それを見たケイナと言う少女が「もう争いは止めようよ」と叫んだ
その瞬間　人々は初めて自分たちが間違っていたことを悟り、後悔
したのだった
「恐竜さん、ごめんね」ケイナの涙が祈りとなって
機織りの神オルデナが舞い降り　恐竜に　大きな桃色のマフラーを
かけてあげた、すると　どうでしょう　恐竜はたちまち生き返った
以後　人々は争うことをやめ、恐竜と仲良く暮らしましたとさ。

１６話『ナオオヤ湖の恐竜』寓話（後書き）

海の糸と　大地の糸を　紡いで作った　見たいな話を
寓話といて書きたかったのです。

17話『ダンテの不思議な旅』（前書き）

とてもユニークな　ダンテの神曲　の始まりです

17話『ダンテの不思議な旅』

プロローグ

ユリウス暦1300年当時のイタリアは
教皇派（グエルフ）と皇帝派（ギベッリーニ）と言う
2つの宗教の対立によって激化していました。
白党に属していた　革命家ダンテはその戦いに敗れ暗い森に逃げ込んだのだった。
彼は闇と絶望の中でかつての恋人を思った
その時眩い光と共に美しい女性の顔が天空に現れたのである。
「ダンテ、ダンテですね」
「あんたはベアトリーチェ　か」
「いえっ　私は　オルディナス　神々の王です」
「その王が俺にどんな用があると言うんだ」
「ダンテ　あなたは　亡くなった恋人の元へ行こうとしていますねでもその前にお願いがあるのです」と女神は語った
「敗北した自分に、女神様がどんなようがあると言うんだ?」
「あなたはこれから案内人と共に　地獄をさまようのです」
「えっ、地獄」
女神の言葉に戸惑うダンテだったが
その瞬間　森全体が歪み始めたのである
「なっ、なんだこれは　どうした事だ」
『ウワーアッ』
そしてダンテは、何者かの声に誘われるままに異次元空間を抜けたのだった。

17話『ダンテの不思議な旅』（後書き）

なお、この作品とダンテの神曲との　因果関係は不明である。

?.旅の仲間（前書き）

渡し守りのアルバイトをしてるミーナ登場

?旅の仲間

そこは
金閣寺をバージョンアップしたような建物があり近くには川が流れていた
ダンテは「ここは一体、どこなんだ」
とたずねたすると遠くで　渡し守らしい少女が
「ここはサンズス河だよ、俗に言う　三途の川さ」と言って近づいてきた
「君は」とダンテが問うと
「私？　名前はミーナ　アルバイトだけど　女神様の命令であんたに地獄を案内してやれって命じられたってわけ、これでも学生（不思議学専攻）なもんで　用事早く済ませたいから　乗んな」と気さくに答えた
その近くにはアルマジロとハリネズミに蝙蝠の羽ををくっ付けたような奇妙な生き物がいた
『コロリン・ボー（人間だ、珍しいねミーナ』
「あっ、これは友達の　チンコロリよろしくね」
『コロ・コロ・ポー（よろしくなり）』
挨拶をすませると舟番頭の赤鬼　ペコットに切符（のようなもの）をみせ、　サンズス河を下って行ったのだった。
◇第一の門
門の前にはボボナンと言うヤギの化け物がいて亡者の口の中に管を差し込み罪を査定する　体が白と光れば善人、黄色なら中悪で彼等は第2の門に送られジジゼラヴィー（霊仙人）の元に送られ魂の導きを受けると言う
だが黒色と出たら最下層に送られると言う

?想い出の館（前書き）

想い出の館
それは～懐かしい思い出が蘇っては消えてゆく
ラムール達の店～

?想い出の館

第一層の中には　想い出の館と言う
ラ・ムール（悪戯の精）たちのお店があって　そこでは緑色のカクテルが
出されるのだが、それを飲んだ者達は大切な想いでを一つ
思い出しては忘れて行き、最後には思い出が全部無くなるのだと言う
店に立ち寄ったミーナは一つ目の店主に何やら注文をしていた
「おじさん」
「ダンテだ」
「じゃあダンテさんも何か飲むならおごるよ」
と冗談交じりにミーナが言うと

ダンテは体を震わせ
「けっ、結構　残念ながらおなかは満腹なんだ」
と言って冷や汗をかいていた
店を出る時店主が「じゃあ、ヤナホイ様によろしくな」
と言ってあいさつしたのだった。
2人と一匹は　「それじゃー出発」『コロコロ・リンナ』
と思い出の館を後にした
「よーう　ミーナ　今日はアルバイト　休みじゃなかったっけ？」
と　一匹の鷹が飛んできて親しげに声をかけてきた　だがミーナは
「やあ　モーモさん　今日は別ようで」
と会釈し　第一の門を後にした。
しかし岩の向こうでは
「フフフフフ、予定通り　彼らをC地点で襲撃するのだ」
と誰かの声が響いていた。

？　亡者となった魔女（前書き）

亡者の川を渡るときは　気をつけよう（（＋＿＋））

？　亡者となった魔女

ミーナたちは第１の門の中央にある
亡者の河停留所前で２人のおかしな
（一人は頭がロケットのように尖がった
トンガ族、もう一人は目が１０８もある
煩悩族）人たちが乗り込んだ
「じゃー出発するぜ」と言ってミーナは船を
こぎ始めた　しばらくこいでいると河の中から
『～助けてくれ－え、助けてくれ～』
と言う不気味な声が聞こえてきた、
そして船にしがみつき『ユッサユッサ』
と揺らし始めた　「うわー落ちる」
ダンテの叫び声に「しっかりしがみついとる事じゃ」と冷静な煩悩族
「その通りだぜダンテさん、ここで落ちれば
亡者となって一生無限地獄をさまようことになるよ」とミーナが説
明すると
「それは御免だ」と言ってダンテは
必死でしがみついていたのだった
空からはナマクビ（死面鳥）
も大群で襲ってきて　ミーナの胸や尻などに
纏わりつき舐め始めた
「いいかげんにしろよ、お前ら変態か」
とミーナは叫んだ　でも船はますます
『ザザーン・ドドド』と揺れた
「だめだ、このままでは転覆する」
チンコロ・ポー（ミーナ、笛を吹くなり）
チンコロリがそう言うとミーナは
「そっそうだった」と言って

ミーナは、たて笛を吹き始めた
「ワン・ツー・スリー・フォー♪』
♪♪♪♪♪♪
するとナマクビ～達が次々と墜落し始めた
それらを岩陰から指揮していた魔女ヨ－ライも
「なんだ、この不快な音楽は・・・こっこりゃたまらん」
と耳を押さえて逃げる途中、足を踏み外し　あわれ亡者の河に
『ドッボーン』
と落っこちてしまった　亡者の河はたとえ
何者であっても　その物を支配する
「たっ、助けてくれ～」魔女は叫んだが
その声はやがて聞こえなくなった
今後彼女の魂は一生亡者達に弄ばれる
のである（同情するぜ）
こうして危機を脱した一同であったが
こちらは「なんて素敵な音楽なんだ」
と停留所で乗り込んだ2人がノリノリで呟いた
ダンテ達の脳裏には真っ白な鳥が見えていた
「なんて心地よいんだ　、素晴らしいミュージックが
頭の中にガンガン溢れてくるぜ」
と、ダンテは聖戦続きだった今までの自分を振り返り
「こんな気分になれるって、俺はまだツイテいるかな」
と幸せ気分に浸るのだった
ミーナは「Ｉｌｏｖｅ～♪」と踊りながら
（あっちゃんがメッチャ可愛いんだよね）と呟き
「これは『音激波』と言ってこの音波を
受けたものの心が霞んでいると不快に聞こえ
逆にその物の心が清らか（空＝そら）ならば
心地よく（真っ白い鳥が舞う）聞こえるんだ」と説明してくれた
トンガと煩悩の2人はここで下して

ダンテとミーナは引き続き旅を続けたのだった。
～その後ろでは無数の亡者達がヨ―ライに
纏わりつき精気を吸いつくしていた
あるものは魔女の両足を抱え下半身に　同化
させていた『バコッ、バコッ、バコッ、』
ヒィーヒ―ィー～たすけて～
あ・あっ、亡者様あああああ
・・・もっと　ください～お・ね・が・い～
と言う魔女の色っぽい声が一面に漂っていた

？　亡者となった魔女（後書き）

地獄でも、あの曲が流行っているらしい？？

?怪しげの森（恥獄）（前書き）

~そこは巨乳の巨人たちと　堕落した女神たちが罰を受ける所。

?怪しげの森（恥獄）

第2層の途中の森でそれぞれ地獄釜と言う
重い球体を担いだ色っぽい女性の巨人たちを見た
「あれは」と質問したダンテに　ミーナは「あれは先史以前に天空を襲った
麗鬼神（通称レディーキガンデス）さと教えてくれた。
彼女らは地獄釜と言う重い　重い球体を生涯　担ぐと言う罰を言いわたされた
しかし前からはコッコ・サント―と言う死血面鳥が目玉が突っつき
後ろからは　イカサン・タコサンと言う１５本も足がある生き物が胸を揉み
口とお尻に性器を注入すると言う　そして極めつけは　サンタンと言う出歯亀が
タイミングを見て
「しょう言うこと、ホンマヤ」等笑わせるので　巨人達はとても力が入れる事は出来ないのだ　見ている間にも　何人かの巨人が
『ブル・ブル　ブル』とイッタかと思うと『ゥギャー』とたちどころに釜が
体を押しつぶしてしまった、そしてそれが永久に繰り返されるのだ
（こっ、怖い（　＾＾）　―旦~ ~）
その隣では魔空戦争で　魔王に味方した女神たちが力を封印され
　裸の体に『私はバカです』
と言う刺青を入れられ　ドクトリンと言う生き物に　腹下しを飲まされては排泄し
それを罪が軽い人間達が介抱すると言う罰を受けていた
女神たちは一生オムツをあてがわれると言う屈辱をうけ　プライドが高い女神たちは

恥ずかしさのあまり舌を噛んで自殺するのだと言う　でもこれも
リセットされ
永久にくりかえるのだ（なんて恐ろしいんだ）
ミーナ達は
〜ぁああ〜あああああ〜
〜恥ずかしいよ〜恥ずかしいよ〜
と言う女神たちの声を聞きながら　怪しげの森をあとにしたのだっ
た。

?怪しげの森（恥獄）（後書き）

森にある泉は女神たちの〇拙〇だと言う（ウゲッ（（＋―＋））

?金銭地獄（前書き）

地獄ホテルでの話です。

?金銭地獄

♪『ガンガン溢れるミュージック♪ヘビィー・ローテーション
（ちょっと違うような～まっ、いいか地獄だから』
と歌いながらミーナ達がやってきたのは
地獄ホテル前だった　ミーナは
「今日はこのホテルに泊まって　明日トライ
アスロンをやるから　ダンテさん　あんたも一つ出てみるかい」と
笑った。
◇第２の門（欲望の峠）
その晩一向は（もっとも昼も夜も見分けはつきませんが）
地獄ＨＯＴＥＬ塩魔・えんま）に泊まった
「良い心地だ、まさか地獄で温泉に入れるとは　神曲の作者にドヤ
サレルなこりゃー」
と言い　ダンテが獄門風呂の窓から下をのぞくと
亡者たちが霊泉の屋でジジゼラヴィーと言う霊仙人に魂の導きを受
けていた
では黄（イエロー）と裁定された者達は何処に言ったかと言うと屋の後ろにある
霊鬼山で鬼達の監視の元トライアスロンの様な物がおこなわれるの
だそうだ
亡者達は美女４８組（艶鬼）たちの握手券がついた　金塊を目指し
て数々の罠を掻い潜り
頂上を目指すのだが、もし途中で棄権した者はたちどころに霊鳥た
ちに目玉を突っつかれる
そして霊鳥達が食い終えるとスタート地点に
リセットされるのだ、ゲームオーバーした者も同様に　運良く山の
頂上に行きつけた者達は
拷問鬼（４８組の今年のトップ）に　金塊とあっちゃんの写真（な
んで、地獄でそんなものあるんだ）

を手渡され「おめでとう」と言われた瞬間に、オンロロダラーと言う顔いっぱいに
大きな目と口を持つ鬼っ子に体ごと食い尽くされる彼等も　同様にリセットされ
それが何処までも繰り返されるらしい（なっ、なんて過酷なんだ）
ダンテは体を『ブルブル』震わせていた　その時首が七つ目が３つある妖怪
那通魅（なつみ）　が「おじさん、背中流していいべか」
と入ってきたので　ダンテは
『ギャーア』と裸のまま逃げ出したのだった
その晩は　コケっコと言う、宴会鬼の物真似芸と死無羅と言う蜘蛛の怪人の
「こ・こ・は・・地獄の２ッチョメ、２ッチョメ・２ッチョメと言う腹芸
そして地獄三郎なる炎火・火手（えんかかしゅ）の歌などを楽しんだのだった。
「長崎から飛行機に乗って～地獄に着いた（つまり、墜落したのね・・やな歌！）
ミーナ達は支配人をしている　アノヨ・イッペーと言う　孤鬼に
「お世話になりました」と挨拶して、ＨＯＴＥＬを後にした
「またお越しください・・（・・？」と言う声に見送られて
第３の門をくぐるとき　遠くで
～もっと金がほしい～金がほしいぞ～
～おれはあっちゃんのあくしゅでいいぞ
～たかみな、可愛いぞ～
～と言う亡者たちの叫び声が聞こえるのだった。

？　狂える魔女（前書き）

ミーナ、チンコロリ　ダンテの　奇妙な旅も
終点を迎えようとしていた　ただ一つ　魔王（杉田かおるじゃあないよ）
が眠る　最下層　地獄門（瑚・℃ー ｕｔｅＳ）を除いては

？　狂える魔女

◇第３の門（地獄釜）
地獄港に着いた私達は、ＡＫ（あまりにも）（怖い）Ｔ（所）
４８番工場を見学していた、地獄で最も優れたこの４８番工場は
地獄に落ちた者たちの『シゴキ・エナジー』で起動していると言う。
ここでは様々な色の鬼達が亡者（魂）をベルトコンベアーに乗せ
別の鬼達が大きなタライで団子のように捏ねそれをまたコンベアーで送り
さらに別の鬼が霊棒を挿しこみ再びタライに乗せる、そしてポログロ・トッパーと言う
バッタと耳ズクの相の子の様な怪物がそれをペロペロキャンディのようにしゃぶるのだ
怪物がしゃぶり終えると直ぐ復元されそれが永遠に繰り返させるのである。
工場周囲には混合流と言う小さな川が流れていてコッチン・ポーと言う薄茶色の
バナナみたいな班長の鬼が「気を付けてくださいポー、この池で落っこちたら
亡者の魂と混じってしまいますんで、ポー」　と覗き込んでいる私達に注意を促した
　そう　言ってるそばから何人かの鬼達が足を滑らせては　亡者と化していた
ダンテは「ヒエー」と女性のような悲鳴をあげていたが　チンコロリとミーナは
ただ　笑っているだけだった。
そして第三層には性欲の塔と言うのがあり
その中には魔女ザザーラが色魔となって住みついていて亡者や鬼達をその色気で誘い

生命力を吸い取っているのだと言う。
『魔女ザザーラは元々、セル・フローディアと言う土星のような輪を持った惑星に住む
王女（巨乳神）だったのだがその星を襲った　巨魔ゴルゴーンの吐き出した光線を受けて
赤毛に蛇の顔をもった怪物になった、他の住人達も皆巨乳獣となってザザーラに使えるようになった　そして彼等に刃向かった者達は皆地獄の生き人形と化すのだポー』と、ポーさんは説明してくれた。
そして昼食の蝙蝠焼きをいただいた後、いよいよ旅も終点を迎えようとしていた
「さあ、この先はいよいよ最下層　獄界さ、俺の案内もここまでだ後は1人でいきな」とミーナは突然　ダンテに口づけをしたのであった
ダンテは『ポッ』っと顔を赤くしたがミーナは「ばーか、ここでの挨拶だよ（そうなの？）　じゃあな」と言って笑うだけだった　「マッスグポー（まっすぐ行くなり）と言うと2人は駆けて行った、でも途中でミーナは振り返り手を挙げると「1番　ミーナ・アリステア、歌いますおじさん聞いてね♪」と歌いだした。
『1．23．4I　want　you！　I　need　you！
I　love　you！頭の中，ガンガン鳴ってるMUSIC
ヘビーローテーション
ポップコーンが　弾けるように好きという文字が躍る　顔や声を想うだけで　居ても立ってもいられない，こんな気持ちになれるって
僕はついているね　I　want　you！　I　need　you！　I　love　you！
君に会えて　ドンドン近づくその距離に　MAX　ハイテンション
I　want　you！　I　need　you！　I　love　you！ハートの奥

ジャンジャン溢れる愛しさは　ヘビーローテーション♪
コロコロ～・チンコロリ（ヘビーローテーション♪）
と、歌い終えると「じゃーな」と　手を振って駆けて行った
コロロコ・リン「またあえるといいなりね」
とコロリは呟いたが、ミーナは何故か答えなかった
ダンテはミーナが用意してくれたオ―バ・オーバーを着て獄界にある
地獄門を目指したのだった。
「この先は　そいつを着ないと神様だって凍えちゃうんだぜ！」
と笑うミーナの事を思い出しながら

？　狂える魔女（後書き）

氷河に封じられた悪しき魔王が　語ったのは【地獄の魔獣アモン】の裏切りと、その後に起こった　神話大戦！の物語だった。

～いよいよ次回からは　神話大戦編です～。

?地獄門（前書き）

地獄門に向かうダンテに　最後の難関
死亡の橋が待ち受けていた。

?地獄門

地獄門の入り口には死亡の橋と言う　いや～な名の橋がかかっていて、その手前の
土の中には無数の人間（男性）が埋まっていた　ダンテは
「これは知っているぞ　やつらを踏んで通るんだな」と呟いていると
「違うよ、それは生前痴漢だった亡者達が
埋まってるの」と　この前の鷹が飛んできて教えてくれた。
「なんでこんなところに埋められているんだ」と問うと　モーモは
「この辺は仔鬼の娘がよく通るんもんで
多分、誰かが教えたんだろう、いいから
踏んづけて渡りな」と言うとまた何処かへ飛んで行ってしまった
ダンテは亡者の顔を
『バシバシッ』と踏んづけて渡った。
しかしダンテは
「・・これが死亡の橋かっ」と　ため息をついていた　それもそのはず　橋は細長い丸太が2～3キロにわたって渡されているのだ
もし足を滑らせれば下の池に落ちるのだ現に何人もの者達が
橋から落ちて　氷の海（（一見普通の海）で『コチン・コチン』に凍っていた
ダンテは（勇気が試されているんだ、魔王に会うには勇気が必要って事か）と考え、思い切って渡った　しかし丸太は『クルクル』回り　寒さで手が思うように動かず『ウワ―』
と落っこちてしまった、さすがのダンテも「もうだめか」と思われた時　ガリュウオンと言う
　蝙蝠の翼をもった怪物がダンテを救った　ガリュウオンは
「魔王様が呼んでおられる、お前は守られているのだ」と語った
ダンテは緊張を解すため、ガリュウオンの背中の上でミーナに教わった歌を口ずさんだ

「ポーニーテール♪」　するとガリュウオン
は『その曲いい歌だな』と言ったのでダンテは「こいつは良い奴なんだな」
と心の中で思った　その背中には【たかみな】のステッカーが貼ってあった
（だから、何でそんなもんあるんだよ？）
橋を渡り終えると地獄門が自動的に開いた
そして中からは「ダンテよ、お前を待っておった」と言う　凄まじい声が響いてきたのだった。

?地獄門（後書き）

魔王シスフィーナは、いろんな世界から呼び寄せた
『魔神５つ星』によって、反乱を起こそうと企てた
しかし　５つ星の中で最強の戦士　魔獣アモンが
裏切ったと言う

?.魔王と魔神五つ星（前書き）

天空基地・関ヶ城（ナーヤ５６）に集結した悪魔&堕天使軍
それを迎え撃つ　オルディナス率いる正規軍
魔王によって今、神話大戦の事実が語られる。

?魔王と魔神五つ星

オーバーオーバーを着ていても、凄まじいばかりの冷気が体の中に
『ゴ―ゴ―』と入って来る
「ここれはたまらん、このコートがなきゃー死ぬなこりゃー」と地
獄門を進むダンテが
目にしたのは氷河に閉じ込められた魔王の姿だった
「これがかつての大天使シスフィレの姿なのか?」と驚きを隠せな
かったダンテに
魔王は「確かにわしは彼ら（神）に対し反乱を起こした、だがそれ
は勝算があっての事だったのだ」
と唸るように呟いたのだった　その瞬間ダンテの脳裏に魔王のテレ
パシーが映像として伝わってきた
　そこには五人の凄まじき魔神が魔王の背後に控えていた
「わしはアトラントを攻略するためあらゆる世界から戦士を呼び寄
せたのだ
異次元都市クライズの魔女【マリン・バロス】　暗黒界デルドの指
導者【ザ・シャドー】
未確認惑星ダクバァの使者　【ザ・バルバゼ】　サターン星の怪物
【イカデ・コーラ】
そして　地獄の魔獣【アモン】の五人だ　わしは　この魔神５つ星
によってアトラント
（天上界）を制圧しやがては全宇宙をも支配出来ると信じておった
だが五つ星の中から裏切り者が出た」
「裏切り者」そう聞き返したダンテに
魔王は閉じていた目を開き唸るように叫んだ
「アモンアローは怪音波♪　アモンイヤ―は猫の耳♪　アモンウイ
ングで空を飛び♪
アモンビームは雷光線　と　あらゆる悪魔の力を持った魔獣アモンが

わしを裏切りオルディナス側に計画を教えたのだ
無論わしは報復として　当時交際中だった鳥夢須（ドリム族）のミキティーを暗殺し
数名の配下を死角としてをやつに送った、だがやつは
【裏切り者の名を受けて全てを捨てて】わしには向かった
やむなくわしは残りの四人を中心に戦争を起こしたのじゃ」
魔王の話を聞いたダンテが映像として見たのは関ヶ城に集結した
オルディナスをはじめとする正規軍と
シスフィ―ナ率いる魔王軍との戦いであった。

?.魔王と魔神五つ星（後書き）

デビルマンとの関係は不明です。

?旅の終わり（前書き）

遠い過去で行われた光と闇の戦いに【ＡＫＢ】もかかわっていたのだ・・タハハ

？旅の終わり

？旅の終わり
この世界が出来たばかりの遥かなる昔、そこには永劫の闇と光があった
闇は光を倒そうと魔神５つ星を中心に　関ヶ城に陣を構えた　それに対して光は
天空橋アカンベ城にて迎え撃った　兵力は５千万対５千万、まさに互角の戦いだった
　だが長い膠着状態にピリオドを打ったのはオルディナス軍に味方していた
サナダ十一勇士たちの魔王軍への裏切りであったこれによってオルディナスの軍は
総崩れとなった　アモンは４つ星を道づれに戦死、オルディナスを除く神々は
【カード】に封印され　それを未来で神埼しろうと言うオタクが持つ大量の握手券（ＡＫＢの）と交換した（もっとも何枚かのカードは手元に残したらしい）
そして総大将オルディナスを石工で固めたシスフィ―ナはそれを眺め祝杯を挙げていた
そのときオルディナスの全身から無数の霧が噴出しそれが
魔王を包んだのである「なんだこれは」魔王は叫んだが
霧の中から本物のオルディナスが
現れセルゲイアの剣でその体を貫いた
魔王は「フッ・ハフハハハハハハ」と笑い地上に落下していった
そして落ちたところが地獄になったのである
「はっ、今のは」
ダンテが見たのはここまでだった。
「そしてわしはここに閉じ込められたと言う訳じゃ」そう言って魔

王は再び目を閉じた
しかしダンテは知っていた千年後魔王は恐るべき力を持って復活し
再び大群を率いて
反乱をおこす事をせっかくオルディナスが回収(カードから)した神々を再び
カードに封印し過去で握手券と交換（あんた（正規軍の神）達は一
体何なの）
オルディナスを豚小屋に閉じ込め【パンゲア】と言う国を築く事を
しかし皮肉にもオルディナスとシスフィーナの子である
精霊騎士ラーマオンによって魔王は永劫の死を迎えるのである
「ダンテこれであなたの地獄での旅も終りです、さあ魔王の体をよ
じ登りなさい
そうすれば来た道を戻ることなく出口に出られます」と言う女神の
声が聞こえた
ダンテは言われた通り魔王の体をよじ登り、口の中へ？入って行っ
た？？
そこは　最初の森への出口～【肛門】だったのである（；一_一）。

?.旅の終わり（後書き）

最初の時間に帰ってきたダンテを待っていたのは
彼の心の中にあった少女だった。

?I　さようならまたね（前書き）

ダンテとミーナの別れです

?I　さようならまたね

魔王の肛門を出たダンテは元の時間に戻ってきた
だがその体は魔王の汚物で汚れていたのだった。
「くっくさっ、こりゃたまらん」
ダンテは素っ裸になり近くの川で体を洗った
右目を洗った時に【ツクヨミツクヨミ】と鳴く鳥が現れた
鼻を洗った時には【スサノオ・スサノオ】と鳴く九官鳥が生まれた
ダンテは「はっはっは、こいつは愉快だ、清々しいぜ戦争の日々が
嘘みたいに思える
こんな気分になれるって俺はやはりツイテいるかな」と言ってダン
テは豪快に笑った
その時「ダンテあなたの心の中にいる
女性を連れてきました」と女神が現れた
その隣にいたのは　美しい天使だった
「ミーナ、お前は本当にミーナなのか」
と問うダンテに、オルディナスは
「この子は私が【ポニーの丘】で、アリステア王との間に産まれた
子
天使見習いのミーナです」と説明した
『エへっ』と笑うミーナの肩には「コロコロ・ぽっぽ「また逢えた
なり」
と、チンコロリがとまっていた。
「おじさん、私頑張ってお母さんのように
立派な天使になるから　おじさんに会えたのは【夢なのかもしれな
い】
だけど最高の夢だったよ　いつかまた何処かの世界で逢えるといい
ね」
と手を振った　目には熱いものが光っていた

その時ミーナは（もしかしたら好きだったかも？知れない）
と心の中で繰り返していた。
「ミーナ、立派な天使になれ」
ダンテもそう言って、何時までも手を振っていたのだったのだった。

～完～

【いつもの道を　走る自転車　立ちこぎの汗が揺れる　９月のそよ風
休みの間　会えずに居たら　君の事が気になってきたんだ
ただの友達と　思っていたのに　今すぐにでも　君に君に　会いたい
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅすきなのかもしれない
青い空には雲はひとつもない
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅすきなのかもしれない
それが恋だとわかっているけど　言い訳Ｍａｙｂｅ

愛しくて　切なくて　どうにもできなくて
愛しくて　切なくて　僕は苦しい　好きだ　好きだ　好きだ
君の事が　Ａｈ　本当は好きだ
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅ　そんな勇気はない
Ｐｒｏｂａｂｌｙに近い　もっと確かなもの
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅそんな勇気はない
ずっとこのまま片思いでいい　言い訳Ｍａｙｂｅ】

?I　さようならまたね（後書き）

最後は古事記とキャンディキャンディをちょこっと入れてみました。

18話『アリスの大冒険』（前書き）

話題の映画「もしドラ」撮影ちゅうの峰岸アリス（みるく）の物語の始まりです

18話『アリスの大冒険』

（1）ウサギを追って
峰岸アリス（役名）は西映プロダクションがある　渦正の丘に腰をおろして昼食を食べていました
　それと言うのも今【もし不思議の国のアリスがドラッカーを読んだら】
と言う映画を撮影中だったからだ。
「今日の弁当はアリスの大好物だったらいいなあ」と弁当を開けたアリスはビックリ
「ま～た梅干し弁当だぁ、うちの事務所ケチってんなあ」と文句を言いつつお弁当を
食べようとしたところに顔が2つ目が3つもある蒼いウサギが「おくれる、遅れる」
と現れた　「あれっ、こんなキャラ映画に居たっけ?」とアリスが考えていると
ポーチの横に置いてある【カチューシャ】のCDを見て
「これだ、探していた者は」とCDを手にすると何処かへ駆けて行った
「・・そりゃーよかったね、探し物が見つかって」そう言ったアリスでしたが
よくよく考えて「ちょっと待って、それみーたんのCDだよ、どこ持って行くんだよォ」
と、アリスも変なウサギの後を追っかけて行ったのだった。
　しばらくしてやってきた敦子が
「みーちゃんそろそろ昼休み終わりだよ」と言いながら辺りを『キョロキョロ』
して「あれぇ、何処居ちゃったんだろ
（フケルんなら誘ってくれりゃーいいのに）と呟いたのだった。

18話『アリスの大冒険』（後書き）

今回は不思議の国のアリスです

？お菓子の家の魔女（前書き）

お菓子の家の魔女【ゲメ子】が登場

?お菓子の家の魔女

突然現れた奇妙なウサギを追ってアリスがやってきたのは　何処かの森の中でした
「渦正の近くにこんな森、あったけ？」
と首をかしげながらアリスが歩いていると
突然地面が抜けてアリスは穴に真っ逆さまに落ちて行った
【アレー、何よこれ～何処まで落ちるんだよ】
穴は何処までも続いていてようやく終点についた
『ドーン』
「て×５　思い切り腰打っちゃったよ」
とアリスが立ち上がり周囲をみるとやはり
森だった、「おかしいな、今のは夢だったのかな」
と考えてえいると甘酸っぱい香りのする家の前にあの変なウサギが腰をかけていた
「あ～あ、いたー、みーちゃんのＣＤ返しなさいよぉ」とウサギに迫った
しかしウサギは「あっ、いかん　パーティに遅れる？」と言ってまた駆けて行ったのだった。
「しかし、この何とも言えない香りは間違いなくお菓子　入っちゃおうかな」
と入りかけたアリスでしたが
「いやっ、駄目だ駄目だ、甘いもの食べすぎると太っちゃうし　総選挙で負けちゃうし」
と引き返そうとした　すると鼻が曲がった【ゲメ子】と言うおばあさんが
「そこのお嬢さん、新しいお菓子作りを手伝ってくださらぬか」と誘ったっので　アリスは「これはなんだか【ネモオス】の匂いがするぞ」

と考え直し家の中へ入って行った
2人はしばらくお菓子作りをしていましたがおばあさんは「
わしゃーちょっと孫のヘンデスとグレート魔神を探してくるで」
と言って【ウインク】をして
『ウオゥ・ウオゥ・ウオゥ・ウオゥ♪』と歌いながら出て行った
（その瞬間　森中が、オエーェッ）と唸ったのは気のせいかな?
なので仕方なくアリスは一人でお菓子を作っていたのだった。

?お菓子の家の魔女（後書き）

ネ　申すの企画じゃー無いですよ　峰岸さん?

?アリスとドーナツ（前書き）

ドーナツの正体は　分かるよね？

?アリスとドーナツ

その頃ゲメ子は森の奥深くで、赤青黄色の河童の妖怪ヘンデスと全身岩石魔で出来ている
グレート魔神の3人が話していました
「何者かがこの『知らぬが森』に入ってきおった、どうやら人間らしい」とゲメ子は語った
「そいつは良い早速、このヘンデスがいただこう」
「兄ぃ、この大魔神にも食わせてくんろ」
「そう思っておまえ達を探しに来たんじゃ
食糧庫に閉じ込めてある　あの王子と一緒になあっはっはっは」と3人話していたのだった
その後ろには　ナントモ・カントモと言う　まるで知恵の輪のように複雑な形をした木がありそこには『出目キン』と言う目が2～３０ｃｍも目が飛び出たフクロウがとまっていた
一方アリスは　他に材料はないかと食糧庫を探していたところ
大きな冷蔵庫の中から「～たすけて～」と言う声が聞こえてきた
でも、小さい声だったので「気のせいかなあ」
と　通り過ぎようとしたら「・・おいっ通り過ぎんなよな」と
今度は大きな声が聞こえたのでアリスは中を開けた、するとそこには童話のピーターパンのような緑の服と帽子話かぶった少年が凍りかけていた
　アリスは急いで冷蔵庫の中から出してあげたすると　少年は
「ふーう助かったもう少しで　完全に凍るとこだったぜ」と汗を拭きながら
（氷かけていたんでは？）
「あなたは」と尋ねたアリスに少年は
「おいらはモ・・（辺りを見回し）いや　ドーナツ　そう

ドーナツって言うんだと答えたのだった

?アリスの思いつき（前書き）

この世界は【ゲメ子のおかしな世界】と言って
ゲメ子と怪物兄弟以外はすべて【食われて】居なくなったらしい
アリスによって解放されたこの世界は
今後どうなるんだろう？

?アリスの思いつき

アリスは「ドーナツは何であんなとこ【閉じこもって」いたのと聞いた　すると
「ばっばかいえっ、誰が好き好んで冷蔵庫（と言うより冷凍庫）に入るんだよ
出たくても出られなかったの」と怒鳴った、でもアリスも負けずに
「でもすぐ開いたよ」と返したのだった
「そんなはずは　あれだけガンガンやってもビクともしなくて困っていたのに」
と身振り手振りで状況を説明した」
アリスは冷蔵庫を簡単に開け「ほら開くでしょ」と言ったら
ドーナツは「ホントだおかしいな」と驚いていた
でもドーナツは納得いかないみたいだったので、アリスは「なら試してみるから見てて」
と言って冷蔵庫に入った　「ドーナツ　構わないから思いっきり閉めて」と言ったので
ドーナツはドアを思いっきり閉めた　中ではアリスが「よおし見てらっしゃい」
と言うとドアを思いっきり叩いた　しかし　ドアはびくともしなかった
「おっ、おっかしいなあ、さっきは確かに」
と言ってアリスは『ドン・ドン・ドン』と渾身の力で叩いた」しかし今度もドアは『ピクリ』
とも動かなかった　そうこうしている内に猛烈な冷気が襲ってきた
　アリスは
たまらず「ドーナツゥ、開けてよ」と少し情けない声を出した
するとドアは簡単に開いてドーナツが『ニヤニヤ』笑って「だから言っただろう」

と自慢げにドーナツは言ったが、今度はアリスが
「？どういうこと」と納得がいかなかった」
「なるほどそう言う仕掛けだったのか、そう言えばそんなのがあるって聞いた気が」
と一人で納得しているドーナツにいらついたアリスが
「ねえドーナツ、一人で納得してないでみーたんにも分るように教えてよう」
と尋ねた「ごめん、ごめん　今話するから」とドーナツは前置きして
「実はこの冷蔵庫は【中からは大砲でもビクともしないんだけど、外からは簡単に開く】らしいんだ
もちろん　魔女が考えてやったのか　偶然そうなったのかは分んないけどさ」と説明した
「・なーんだ、」そうだたんだ」とアリスは直ぐに納得したのだった
「しかし早くしないと魔女が戻ってくるぜ、どうする　確かオリジナルの話では
魔女をカマドに放り込むんだっけ」とドーナツが言ったら
「それチルチル・ミチルじゃー無かったっけ」とアリスが答えたのでドーナツは「そんなん　この際どっちでもいいんだよ」とため息をついた
「そう言われても　ここにあるのはお菓子の材料とトリモチだけだし」と言った後
「そうだいい事思いついちゃった、やったね」とアリスは一人で納得し
「魔女攻略作戦を実行するから、ドーナツも手伝って」とVサインを出した
その日の夜、魔女ゲメ子と怪物兄弟は帰ってきました　すると
薄暗い家の中から一層おいしそうな香おりが漂ってきました　グレート魔神が
「これは美味しそうだなあ」と言ったら魔女と河童も「美味しそう

だなあ」と答え
中へ入って行きました　でも中は何だか何時もより【ベトベト】して
いるのでゲメ子は
「ベトベトしているなあ」と言ったら兄弟達も「ベトベトしている
なあ」と返した
　そして中の方まで来ると3人の足が何故か【ピタッと】止まった
魔女は
「動けないなあ」と言うと兄弟達も「動けないなあ」と言うのだっ
た　実は部屋には
一面にトリモチが「ベタベタ」塗りまくられていたのでした
　魔女たちが動けなくなったのを確認すると　アリスたちは
　マッチで（今時？）火を付けたのでお菓子の家はたちまちこんが
りと焼けたのだった。
「やっ、やりおったなあ」とゲメ子が振り上げた右手はこんがりと
美味しそうだったので
グレート魔神は思わず『ガブッ』と噛みついた　するとそれを見て
いた河童のヘンデスも
「あっ、ずるい兄貴俺もいただこう」とゲメ子の胸を千切って口に
入れた
ゲメ子は「おまえ達なにするんじゃー、私の胸は裕ちゃんや矢口に
だって
食わせた事ないんじゃぞ（そりゃないでしょ）と言って兄弟達の両
腕を千切って食べ始めた
そうして魔女一家は自滅していった、アリスとドーナツは　「やっ
たね」
と勝利の雄たけびを上げたのだった。
魔女が死んだのを喜び　森中が歌っていたのだった
♪♪昨日ゲメ子に会いました、星のきれいな夜でした♪♪

?アリスの思いつき（後書き）

ゴキブリのＣＭ、入れてみました。

?おもちゃの国（前書き）

一見　希望と夢が溢れる　おもちゃの国　でもそこは魔道士・ゼペットに魔法をかけられた世界であった。

?おもちゃの国

アリス達の活躍で魔女たちは滅んだ、すると『知らぬが森開放』と言う声が
森中に響き渡った　そしたらまた地面が『ドドッ』と抜けた
「おわ―アリス、何なんだこれは」
「まっまただ、知らないけど誰かがみーたん達にいろんな世界を見せようとしているみた～い」
『キャー』
アリス達は何処までも　何処までも落ちて行った、そして何処かの町に
『ドシーン』と落っこちたの
「痛ってえなあ」と腰をさするドーナツの頭上から　アリスも『ドオーン』と落ちてきたので二人は互いにぶつかりあった
『ウワ―』『てて・・』
「それにしてもドーナツ、今度は何処なの」
「俺が知るかよ、それよりそろそろ下りてくんない重いんだよ」
「しっ、失礼ね　みーちゃんそんなに重くないよ（総選挙負けちゃうし）それよりその手
みーたんの胸から退けてよ」と言ってドーナツの上から下りた
ドーナツはな「あっ、ワリィー」と手を話し
「さてと　まずはこの世界の事、調べないとさ」と言った
「そうだねえ」と同意し　アリスも頷き歩こうとしたら　その右足が何かにぶつかり
『ボーン』と向こうの壁にぶつかったのだった
「アリス?今何か飛んだか」
「そう言えば何かにぶつかった様な」
2人は　音がした方向を良く見た　そしたら壁の下に置いてあった

ゴミ箱中から
おもちゃのような人間が顔を出し
「痛い、何すんや、歯が折れてもうたわ、何　折れてへんて」とノリでツッコンダ後
自分の出っ張った歯を確かめ「ほんまや」と言って何事もなかったように通り過ぎていったのだった
「ここってもしかしてみーたんが好きな　トイスト（―リー）の世界なんじゃー」とワクワクしていると
「いや　どうやら違うらしいぜ」とドーナツが否定するのでアリスも　周りを見まわた
そこに「火事だ　火事だー」とサイレンを鳴らしておもちゃの消防車が走って行くのが見えた
車も通行人達も皆、おもちゃサイズのようだった
「どうやらおもちゃの国みたいだね」とドーナツが呟いた時
「いいえ違います、ドーナツさん　ここは　チルド・タウンですじゃ」
と　おもちゃの兵隊たちがずらりとアリスたちを取り囲んだ
沢山の兵士たちの中でヒゲを直角に伸ばした、その名も【髭モンジャ】と言う隊長さんは
「事情を説明するので王国に来るですじゃ」と凄んだ？
「どうするアリス、このけし粒みたいなやつら蹴散らしちゃおうか」
「いや　一応理由を聞こうよ」
と言う事で2人はブリキの兵士達に引率？され　中国風の建物の中に入った
　するとそこで待っていたのはル・リカと言う文字どうりリカちゃん人形の王女だったのである。

？おもちゃの国（後書き）

世界中の人間たちをおもちゃに変えると言う魔道士・ゼペットとはいったい何者なのか？

?チルド・タウンの悲劇（前書き）

ルリカ・チャミー7世の誕生日に起こった出来事とは?

?チルド・タウンの悲劇

中国風な建物の中はフランス風?な作りになっていて、そこはまるでリカちゃんハウスのようだった　アリス達は　梨華ちゃんの間に通された　ピンクの衣装を着たルリカは
「パッピー♪ようこそ我がチルド・タウンへ」と挨拶した後、少し顔を曇らせ声を搾り出すように
「しかし今この国はたいへんなことになっているのです、憎っくきゼペットによって
私たちはおもちゃの体に変えられ不自由な暮らしを強いられています」と語ったのだった。
「ふーん、昔からおもちゃだった訳じゃないんだ」
「ゼペットって、何だ」
「あらドーナツ　知らないの」
「アリスは知っているのか」
「当たり前じゃない、ゼペットって言ったら、童話のピノキオでしょみーたんだってそれくらいは知っているよ　確かクジラと旅したんでしょ（ちがうぞ）」
アリス達の会話を聞いていたルリカは
「あのォ」と口を挿むと話を続けた
「私が言っているのは童話の話ではありません、ゼペットは全ての生き物をおもちゃに
変えるステッキを持った　恐るべき魔道士なのです」
回送
チルド・タウンは中国とフランスの文化を融合させた国であり
住民たちは　皆、チーク・ダンスで生計を立てていたて
カレーヨウカンを試食にしていて
一年は２００の内１７０日は休日だった（そんなんで　生活成り立つのか（＋＿＋））

今から３０年前住民たちはルリカ・チャミー7世の誕生日を祝い
チャミー宮殿の前のブリキの広場で【チルド・サンバ】（ラップを取り入れたダンス）
を歌い踊っていた　所　突然空からラッコの引くソリに乗って、黒服のサンタクロースの括弧をした
オヤジが現れ　ドール・ステックを振りかざし、国中の人や動物を人形に変えたのだと言う
～戻る～
「いきなり小さくなった私たちは不自由な暮らしを余儀なくされました
しかし最近は徐々にその事が薄れつつあるみたいなんです」
ルリカ王女の話を聞いたアリス達は　「それはお気の毒に」という意外はなかった
でも王女は「そこで本題に写ります　あなた方に来てもらったのは
　毎年
麗月（あした）の日に着替えの服やハウス等を持ってやって来る
魔道士を退治していただきたいのです
私たちはこの体ゆえあなた達にお願いしたいのです」と語った
「やっ、やっぱりそう来たか」
「そりゃーなんとかしてあげたいのは山々だけどさぁ
それじゃーみーちゃん達が人形になっちゃうよォ」
「そのとおりだぜ」
と　アリスとドーナツが困っていると
【スベリ】と言う九官鳥のおもちゃの鳥が飛んできて王女の肩に止まり
『ダイジョウブ・ダイジョウブ』とさえずった
そのとたん　ルリカはニコッと笑い「杖を取り上げれば良いんです、ゼペットは
杖を取り上げられたら魔法は使えません」と言うのだった

?チルド・タウンの悲劇（後書き）

王国には　それぞれ　２４色のおもちゃの兵隊がいて
それぞれ　ドリム隊　と牛娘本隊とに分かれているという。

?.魔道士をメチャクチャ酔わせよう作戦（前夜）（前書き）

チャーミー宮殿では魔道士攻略作戦が開かれていた。

?魔道士をメチャクチャ酔わせよう作戦（前夜）

アリスたちはチャーミー宮殿で魔道士攻略を話し合っていた
まず、アリスが「魔道士が酒好きなら　なんかの神話みたいに
瓶にお酒を入れて酔わすって言うのはどう」
「古事記か、なんか　2番煎じだし」
「いやっ、乞食じゃなくてみーたんが言っているのは」
「ばーか、その乞食じゃーねーよ　まったくあったま　悪いな、ま
あクイズ番組みてて
そうじゃないかなとは思っていたけどさあ（見てるんだ?）
「あっ、みーたんのこと　バカと言った」
「うっせえなあ、バカだから　バカと言ったんだ　わりーか」
「アーン　また　ばかと言ったー」
この【バカと言ったら、バカと答える】みたいな争いを
ルリカ王女はただ笑って（と言うかあきれて）見ていただけだったが
「あのォ、お二方、時間がないので　内喧嘩は後でやってくださいじゃじゃ」
そう言って　アリスたちの子供じみた言い争いに
ストップをかけたのは、おもちゃの兵隊の隊長　髭モンジャさんだったの
私たちは「しー（すい）ません」と喧嘩を一旦中断して会議を続けた
その結果　大歓迎会を開き　ゼペットを滅茶苦茶いい気分にさせて
とことん酔わせよう
ッてこになった（もちろんしびれ薬入りのね）
「そして　酔いつぶれたところを　隠れていたみーたんが　ステッキ取り上げるのね」
「そのとおりさ、ここは失敗しないよう入念に打ち合わせしないとな　でないと

こっちがおもちゃにされちまうし」
そこへリビア王室の料理人たちが　たくさんのごちそうを運んできた
それは【モラン・プル】（パイを中心としたケーキや【スクラ・ブル】（文字通り
玉子と焼き肉を混合させたようなもの）【モッちー】
（歌手じゃなくて、餅入りのトマトジュース（・・？）　等
５０以上の種類もの豪華な食事がズラリと運ばれてきた
もちろんそれは豪華ではあったのだけど・・・
「ちっちぇーなあ」
「なんせあのサイズだもんね　でもこの数じゃー太っちゃうかも
総選挙まけちゃうし」（それ　ばっか）
こうして魔道士　攻略作戦は　明日の本番に向けて
綿密にシュミュ・レーションが行われていたのだった。

～その頃ゼペットはピノキオ星にある　ロリコン・ルームの硝子ケースの中に入った
コレクション（おもちゃになった人形たち）を眺めていた
「間もなくこの夢世界の住人は　全てわしの物になる
～フハハハハハ・アハッハッハッハッ～」

?.魔道士をメチャクチャ酔わせよう作戦（前夜）（後書き）

魔道士ゼペットの正体は　そして夢世界とは？

?魔道士をメチャクチャ酔わせよう作戦（後）（前書き）

ゼペットの正体と伝説の少女の復活です。

?魔道士をメチャクチャ酔わせよう作戦（後）

ナナカマド星の住人をおもちゃに変えた魔道士ゼペットは
ラッコのソリに乗って　沢山のプレゼント（着替えの服など）と共に
ついにチルド星にやってきました　何時もそれなりの歓迎会がある
のですが、今年は
いつもより少し様子が違っていました　何が違ってたかと言うと
あちこちの建物に
『魔道士様大歓迎』と言う垂れ幕がかかっていて，町はおもちゃの
兵隊や鼓笛隊などの
パレードに包まれていたからです。
ゼペットは「今回は歓迎が一段と派手だな」と首をかしげましたが
彼が気を良くしたのは言うまでもありません
チャーミー王宮には黒の絨毯が敷かれルリカ王女が「ようこそ王国
３千年祭へ」
と言って梨華ちゃんの部屋に通させました
そこではゼンマイ仕掛けの鯛やヒラメの舞い踊りや王女自らの歌に
よる歓迎

「そーう、ギュッとしてぇ　抱しめてよーお」♪
そして豪華な料理のオンパレードと　これにはさしものゼペットも
すっかり安心し
月麗酒と言うお酒を『グビグビッ』と飲み干してしまいました。
歓迎会は夜中まで続きましたが魔道士はすっかり酔い潰れて眠って
しまった
奥のカーテンの隙間からそれをじっと見ていたドーナツはアリスに
「よし今だ」と合図しました　その合図を待っていたアリスはゼペ
ットが腰かけている
椅子の後ろ側からこっそり出てきて忍び足で駆けよると

ステッキを持ったままで眠っているゼペットの手を解こうとしました
「うーん、なかなか解けないなあ」　それをドーナツや王女たちは
じっと見守っていました
　その時魔道士が『ピクッ』って動いたのでアリスは生きた心地が
しませんでしたが
彼は　寝返りをうっただけだったので皆は『ポッ』ため息をついた
のだった
そしてようやくステッキを握っていた手もほどけたので
アリスは（やった―）と心の中でガッツポーズをして、ドーナツの
呼ぶ方へ行こうとしました
ところが何故か前に進めません　「あれっ、おかしいな歩けないぞ」
とアリスが魔道士をみると
彼の左手がアリスの手を掴んでいました　「お嬢さん、わしの杖を
何処持って行くきかな」
「ああのお、クリーニングでも・・・しちゃおうかなあって・・アハハ」
「悪いが、その気遣いは無用」

「きっ効いてない（薬が）とドーナツが呟きましたが
ゼペットはアリスにステッキを向けました
『ババババ―』　「キャー」
「えーい奥の手だ」とドーナツが叫ぶと桃色の鷹がゼペットに飛び
かかり、アリスは危機一髪
難を逃れました　「リルカ王女この隙に逃げてください」と言った
　ドーナツでしたが
彼もゼペットの【おもちゃ化光線】を交わすのが精いっぱいでした
でも鷹の正体を現したドーナツとゼペットの攻防戦の煽りを受けて
遂にアリスも人形にされてしまったのです
どす黒い大ムササビに変化したゼペットは人形と化した
アリスを右手に掴むと飛んで行ってしまった

「あっアリスゥ」と叫んでドーナツもそのあとを追って行きました
「アリスを握ったゼペットは「オノレぃルリカ王女よ　この報復はチルド星の消滅で償ってもらう」
と叫んでいた　アリスは「こらゼペット、もう少し手を緩めなさいよ痛いよ、ねえ聞いてんのかよ
このばかちんが―」と叫んだ時、少しだけゆるんだので上半身を拳か出した
その時アリスは無意識にカメハメ波のようなポーズをとっていたのだった。

・・この位置からだったらみーたん撃てるよ?・・撃つって・・何を撃つんだっけ?・・

?魔道士をメチャクチャ酔わせよう作戦（後）（後書き）

アリスこと峰岸みるくは伝説の？ｅｎｕｓの戦士
そして、ハイドラ（火炎龍）を操る少女だった？

?アリスの目覚め（前書き）

アリスの記憶の奥底にあるもの
それは　デルクラルでの戦いの記憶であった。

?アリスの目覚め

・・撃つって・・何を撃つんだっけ・・

アリスは失われた記憶をたどるように目を閉じた
その時　峰岸みるくの記憶の中にある光景が次々と浮かんできた
それは６人の者たちと共に　無数の怪物と戦う光景だった

・・・思い出したんだ・・私たちは戦うため・・に生まれてきたんだって事を・・

・・誰にだって忘れられない時間があるように・・たちの止まっていた時間が動き出す
ときがきたんだよ・・・

「むすめ、それは何のおまじないだ」

（アリス、目を開ける）
「・・思い出した・・みーたんは　みーたんは（エコーがかかる）戦士だったんだ―ァ」

額からは龍の紋章とバッタのような触覚が出現する（黄色いスカーフが風になびいていた
「こっこれはデルクラル人の証し、するとこの娘は（ゼペット　にやりと笑う）
フッハッハッハッハこれはまた願ってもない拾いものをした
何だその眼は　よもやこのわしに勝てると思っているわけではあるまい
あいにく　この姿となったわしにてるのは火龍くらいのものだから

なハッハッハッハ」
とゼペットは笑ったのだった
それを受けたアリスが『ニヤッ』と微笑みを返えした
（私たち、おわかれするんですねーェ）♪
「じゃーこんなのはいかがぁ」
『ハイドラー（火龍）』
交差したアリスの両手からドラゴンが炎となってゼペットを襲った
アリス事、峰岸みるくは火龍（ハイドラ）を操る戦士だった。

?敵なの?味方なの（・・？（前書き）

戦いを終えたアリスとドーナツの前に
あの変なウサギが現れた。

?敵なの?味方なの（・・?

「何ぃ、火龍だと?」
魔道士は苦し紛れに　ステッキを振り回したので
町やビル（大きいものがけっこうある）がおもちゃ光線の乱射を受けて
りかちゃんハウスのようになっていった
しかし　ハイドラはゼペットに纏わりつき、とうとう全身を焼き尽くした
「バッバカなー、こんな小娘にぃーこのゼペット様がやられるとはァ」
遂に魔道士は燃え尽き握っていた手を離した
「アレー」と　たちまち落下するアリス、そこへ鷹の正体を現したドーナツが
　やってきて　アリスを背中に受け止めた
「オー・ノー・レー」
『ドカーン』『ドドドド』
大爆発が起こり　「やったね」
それを地上で見つめる2人
そのとき爆発の中から小さな（光）ムササビが飛んで行った
「あ、あれは?」
その時空間の一部が歪んだ、そして時空間から姿を現したのは
アリスをこの世界に招いた　あの兎だった
兎は「逃がさないよゼペット」
と言って　小ムササビを封印のかごに入れたのだった
ゼペットはていこうしたものの　もやはなす術が無かった
「俺はあいつを追って俺もこの空間に紛れ込んだんだ」
とドーナツは叫んだ
アリスは「あなたは何（・・?」

と質問した　妙なウサギは
「僕は　蒼ウサギの、リピー　魔道師・ヨーゼフの
一番弟子さ」と名乗ったのだった。

?敵なの?味方なの（・・？（後書き）

蒼ウサギ　の、りぴーとは?

??気の毒なカメ・オン達（前書き）

ゼペットこと変形生物カメ・オン（カメレオンとスカンクの融合体）が　語ったのは　一族の悲劇だった。

??気の毒なカメ・オン達

『魔道師・ヨーゼプ』
アリスとドーナツは同時に叫んだ
「そいつは何者なんだ」と問うドーナツに
リピは「夢世界の番人じゃよ」と答えた
「夢世界って、みーたんたちが見るあの夢？」
「・・少し違う普通　お前たち人間（厳密にいえば、2人とも人間じゃないん
だけど　まいっか）が言う夢とは不安や心配とかを補うために脳が見せる
言わばドラマのような物なんじゃ、この世界はそんな夢空間と繋がってはいるものの
昔から異次元に存在する世界なんじゃよ」
「ふーん、そうなんだ」
「で、そのムササビは一体　何なんだよ」
「ムササビじゃなくて　カメ・オンと言うんじゃよ」
「かっ　カメオン？」
「カメレオン・アーミなら　みーたんカラオケで歌ったことあるよ」
（ウインクだっけ（違うぞ）
「そのカメ・オンが何であんなことしたんだよ」
「そいつは本人に聞いてみなされ」
リピに急かされて　カメ・オンは渋々重い口を開いた
「昔わしらの種族はこの夢世界全体に息衝いておったわしらは草原を駆けまわり、自由に暮らしていたんだだが　ある日人間どもがわしらカメ・オンを狩り始めたわしらの発っするガスが　有害だと言う理由だけでじゃ
妻も仲間も多くは人間たちに殺され　仲間も散り散りになった
だからわしはヨーゼフの神殿に侵入し　奴が昼寝しているすきに（

昼寝かよ）
杖を奪って人間どもをおもちゃに変えてやったんだ」
「それは、お気の毒ね」とアリス
「お気の毒だと、気の毒で住むかァ
【ダチのユミ】　なんか一家全員惨殺されたんだぞ」
とカメ・オンは壺の中で吐き捨てるように言った
「そのことには《同情する》が（同情するなら　金をくれー　なつかし）
だからと言ってこの夢世界を荒らして良いって理由にはならん、だからわしはカメ・オンの
天敵の火龍を操る者を探しておったんじゃ　この世界では龍は滅んで等しいからな」
「リピさん　そのカメ・オンをこれからどうするんですか」
「2度と悪さしないって約束したら、どこかカメ・オンが
住めそうな適当な場所に放してやるじゃで、おっほっほっほ」
そう言って　ウサギ　の　リピは上空へ去って行ったのだった。

??? 夢の終わり（前書き）

アリスとドーナツの物語も終わりを遂に迎えた

??　夢の終わり

「さあ、帰ろうか」とドーナツは言った
「うん」とうなずくアリス
チャーミー宮殿では元の姿に戻った王女たちによる　『魔道士追放大歓迎会』が待っていた
「今度は本当のパーティーにありつけそうだな」
「そうよね　この前はみーたん　隠れて見ていただけだし
「あなた方のおかげで私たちは皆　こうやって本物の体を取り戻すことが出来ました
今日は大いに楽しんでいってください」
と挨拶した　そして　これでもか　これでもかと言う位豪華料理のオンパレードだった
「こりゃーすげーヤ」とドーナツははしゃいでいたけど
「・・こっこんなに食べたら　みーたん太っちゃうよ
総選挙だって負けちゃうし（そればっか）とため息を尽きつつ
「こらー美味しい、ジャンジャン運んできて」
「あれお前太るからいやなんじゃあ」
「いいの　いいの　少々太っても、みーたん可愛いから他で補えばよいのよ・・アハハ」
『マダゲルド』と言う豚と牛とが合体したような料理をほうばるアリスなのだった
そのとき
『チルド・タウン開放』と言う声が聞こえ辺りが揺らぎ始めた　「まただ、こんなときに」
・・・

「ドーナツってみーたん　まだ何か食べたいの」
「いやっ、おかしいな　夢でも見たのかな」
敦ちゃんとそんなやり取りをしている時
「おーい、そこの2人　いつまで休憩してる　お前らやる気あんのか」
と怒鳴られた。
「ほら監督さんが起こっているから　行こう」
「うん」
私たちは手をつないで駆けて行ったのだった
その時上空を桃色の鷹が飛んでったので、アリスは思わず「ドーナツ」っと」
手をふったのだった。

芝生の上には忘れ物のポーチと『カチューシャ』のCDが置かれてあった

皆さんは夢だと思っていたことが現実だったり、逆にてっきり現実だと思ったことが
夢だって経験無いでしょうか・・・これはそんな物語です

『カチューシャ　外しながら　君がふいに振り返って　風の中で微笑むだけで
なぜか何も言えなくなるよ　こんな想っているのに…
カチューシャ　外しながら長い髪をほどくように　いつのまにか大人になって
僕の手には届かないくらい　もっと　好きになるよ
Everyday,　Everyday,　Everydayカチューシャガール』

??? 夢の終わり（後書き）

次は　人魚姫をモチーフにしたものです。

１９話『人魚姫伝説！』（前書き）

マォが住むデルフ村から　０，１キロほど離れたところにある
ドーラの泉　そこには　人間となった『人魚』の伝説があった

19話『人魚姫伝説！』

マォは　エンドラの泉で、ナーゼから送られてきた詩集の本を読みふけっていました。
「またその本を読んでるなりナ、毎日x2良く飽きないなりナ」
と　黒猫のなりナは　そう言っていつもからかうのですが
マォは気にせずに続きを読んだ。
「あっ、また無視するなりナ」
そんな2人の他愛もないやり取りをいつも見守っているのが
この泉に住む、紫色の龍でした　この龍はこの世界が誕生した頃から存在し
人々に『神龍』と慕われていました　もっともマォは　《りゅうりゅう》　と
読んでいるのですが。
「お2人さん、そろそろ食事にしたらどうだ、今日はマォが好きな《デンバ・ボンバコ・水流母》（エンドラ風のすし）用意してあるんじゃが」
「ワーイ　ヤッタネ、だからりゅうりゅうて大好き」
と龍に抱きついたのだった。
「うん、美味しい　デルフ村（マォの住む所）のより　こっちのが数倍美味しいや」
「そうかにゃあ、マォが食いしん坊だけなんじゃあない　なりナ」
「あんたねえ、そういうこと　言う訳」
「まあまあ、お2人さん、喧嘩はそのくらいにして　このドーラの泉にまつわる
話を聞きたくないかい」
「マォ聞きたい」
「なりナも聞いてやっても、いいなり」
マォとなりナがいつもの口げんかを始めたので、龍神はこの泉に伝

わる
人魚伝説を話し始めたのでした。
「これはまだ　不思議界がもう一つの世界と繋がっていた
頃の話なのじゃが・・・
～～～

１９話『人魚姫伝説！』（後書き）

人魚のマユナは人間になるために、魔女ザルーシャの元を尋ねる

？マユナの恋（前書き）

マリンパレス　それは創世の神オルディナスが海神マイトに分け与えた
島大陸の底にある　海の生き物たちの楽園であった。

？マユナの恋

その昔、太平洋の深海にはマリン・パレスと言う海底王国があった
海と砂漠の神マイトが作り上げたその王国には人魚族も住んでいて
彼女らは毎年フェスティバル（総選挙による投票）によって
1位に選ばれた者は1年間マリンパレスに住む全ての生き物たちの
尊敬を得るのだと言う
「人魚族のことは嫌いにならないでくださいってか、やっぱァッ優
勝するには
あー言う技も身につけねーとな、それにしても今年も39位だぜ
なんか俺って　いつも中途半端なんだよな」
とレターナが大きくため息をついていた
「・・・・・・」
「て・ねえ聞いているのマユナぁ、マユナったらぁ」
しかし親友のマユナは　さっきからうすら笑いばかり浮かべていた
「モーう、返事位しなよ　マユナ・ユーラ　アンソニー」
と　レターナはフルネームを叫んだ
「うるさいなあ、そんな大声出さなくてもちゃんと聞こえてるよ」
と言ってまた　うすら笑いを始めたのだった
「気色悪ーゥ、ひょっとしてこの前コクショナ先生の使いで
西の海へ行ったときに何かあったん（・・？ちゃう」
「やっぱー分かっちゃった」
「あたりまえじゃねえか、これでも親友だぜ（あんたの態度見てり
ゃー誰だって分んだよ）
《実はマユナは先週　コクショナ先生の使いで母　トラブグに
『オリブラス』（ワカメで作った毛糸）で編んだセーターを届ける
ため
西の海へ行かせたらしい、その帰り（夜）岩の上で髪をといていると
遠くで人影（男性）が見えたのだと言う、それ以来　仕事にも身が

入らないありさまらしい》
「ははーん、マユナ　あんたズバリその男性に恋したね」
レターナの鋭い指摘に、
「そっ　そんなことないよ」
と否定しつつ　顔を『ポッ』赤くするマユナであった。

？マユナの恋（後書き）

人魚と人間との恋は厳禁　だが　マユナは
その禁を犯す。
なお　先生のフルネームは
コクシャナ・キッス　バレンタインである。

?洞窟の魔女（前書き）

海岸で見かけた　王子らしき人に　会いたい
マユナ達は　魔女ザルーニャの洞窟に向います。

?洞窟の魔女

「その人に会いたいんだろ」
「・・うん出来れば、でもどうすればいいんだろ」
「これはブンヤ（新聞記者です）の山里に聞いた話なんだけどさ
この向こうにあたいらが学んだビーナス学園があるじゃん」
「うんあるね」
「その裏の洞窟に、ザルーニャと言うそれはそれは恐ろしい
魔女が住んでいるらしいんだ」
「え～魔女ぉ」
「なんでもその魔女が　最近　変身薬を手に入れたらしいんだ」
「変身薬？」
「マユナはその人に会いたいんだろ、でもあたいら人魚は
人前に姿を見せられないんだ　知ってるだろ、だから
いっそのこと人間になって会うのさ　すんだらまた戻っちゃえば良
いんだし
そしたら　こっちの秘密もばれないで済むって訳さ」
「そんな　簡単に行くかなぁ」
「当たって砕けろだ、レターナ家は皆　そうしてきたぜ！」
《と　言うことでレターナと　マユナは魔女に会うために
かつての学園裏にある、洞窟に向かったのでした》
○魔女の洞窟
「ヒっヒッヒッヒ　これが北のアンゴラ（軟体族）から大金を出して
手に入れた変身薬じゃヒッヒッヒ」
「でもばあちゃん　薬一つしかないよ」
「良いんだよセイナ」
と言ってザルーニャはため息をつき
「あいつらときたらわしが欲しいと言えば　足元見おって　これ一つ
買うのが、わしにゃーせいいっぱいだったんじゃ」

貧乏魔女はそう言って愚痴言っていたのだった
「大丈夫よおばあちゃん、今にセイナがフェス（総選挙）で優勝して？1になって見せるから」
洞窟ではそんな会話をしていたのだった。

？洞窟の魔女（後書き）

怖いと言う噂の　魔女　でも本当は？

?.魔女の館（前書き）

魔女の館を訪れた2人の運命は」

?魔女の館

学園裏の洞窟に着いたレターナとマユナは中に入ろうと声をかけた
「あのう、たのもーお　たのもーお」
「それじゃー道場破りだよレターナ」
と突っ込んで
「あのう、誰かいませんかあ」
と言った　だけど声が小さかったので　レターナが
「誰かいるんなら、出てこいや〜〜あ」
と大声でいったら　髪が蛇だらけの不気味なおばあさんが
「なんかようかのぉ」
と言って　いきなり『ヌッ』と現れたもんだから
私とレターナは『ギャー』
と悲鳴を上げたのだった
ザルーニャの洞窟の前景は大きなエビになっていて
中は薄暗く、変な水晶玉や呪いの本　それにヂーズ（海蝙蝠）等がいた
おばあさんは
「お嬢さん方わざわざこんなところに何しに来たんじゃ」
と尋ねたので　私とレターナは変身薬の事を切り出そうとした
そこに「ばあちゃん誰か来たん」と私たちと同い年くらいの子が
3つ首があるコブラを肩に巻いて出てきたので　思わずマユナはレターナに
『ヒエーェ』と　抱きついたのだッた。
その子は
『会いたかった〜会いたかった〜会いたかった〜、君に〜』
と歌いマユナとレターナにウインクしたのだった・

?変身薬（前書き）

怖いと噂された魔女は　意外と親切だった?

?変身薬

「おまえは確か、フェスに出てた奴」
「あの何んとか注射ッて歌った人だよね」
（カシューシャだよ）とセイナが突っ込む
「あの歌とっても良かったんだよね
マユナは絶対1位だと思ったんだけどな」
「あら、わかる」
歌を褒められたセイナは気分を良くした
「はは～ん、孫をおだててこの薬を貰おうって魂胆だろうが　生憎そうはいかん
これは高かったんじゃ」
『マユナはそんなつもりじゃー、ホントに上手かったからそういただけだよ』
「そうだよ　ばあちゃん、その薬この子に挙げたら」
と、セイナも2人に味方したのだった
「セイナ　お前までこの子たちに味方するのか、しかしわしゃあこれを手に入れるのにどれだけの手間を・・」
「る　せいなあ、さっきから長々と　要するに何かと引き換えなら良いんだろが」
とお言うレターナの言葉を受けたセイナが
「ばあちゃん私の夢　しっているよねえ　後少しだけ胸が大きかったらイケルと思うんだ
　そこでマユナさんの胸（巨乳）とその薬と交換なんてのはどう」
と提案した
「マユナの胸と」
「良いんじゃねーか、こんな物でよかったらいくらでももってけよ」
「あのねレターナ」

「あの王子とやらに会いたいんだろ」
「うん、会いたい」
「じゃー決まったぜ、交渉成立と行こうじゃねーか」
とザルーニャを除く3人は盛り上がった
「そう勝手に決められても～エーィ、仕方ないのォ泣く子と孫には敵わなわんわ」
「じゃーいいんだな　この薬貰っても」
「やるんじゃあ無い、あくまで交換じゃ」
《と言う事でマユナは胸と交換に薬を貰ったのだった》
「ありがとうザルーニャさん、セイナさん」
「もう行くのかい、うっかり昼食余分に作ってしもうたので処分してくれるとありがたいんじゃがのォ」
「ばあちゃんの『ジブダラ焼き』（岩蝙蝠の料理）は美味しいんだから食べていきなよ」
と言う訳で　2人は昼飯をいただいた後、魔女の館に住み込みで働く事になった
レターナを残して、タコのネコ吉に途中の海まで送って行ってもらったのでした。

?変身薬（後書き）

人魚族の仕事は全国の海にお届け物をする『海の宅配便』です
ザルーニャは　魔法薬とか薬草などの買い付けなどの使いに
レターナを専属で雇ったのだ。

?王子の船出（前書き）

イギリスにある小国　ランス共和国のジョン王子は
スイスと条約を結ぶため　航海に出た

?王子の船出

《その頃地上では、イギリスにある　ランス国の王子
ジョン・テリュースが、隣国である、スイス　クラーラ国と協定を
結ぶため
航海船『エル・オルディナス号』に乗り込んでいた》

「それでは王子、くれぐれもお気つけくださいませ」
「そう心配なさらなくとも　僕は大丈夫ですよ、ロッテン・マーヤ
さん」
「そう申されても　坊ちゃまにもしもの事がございましたら、先代
の王様に
なんてお詫びすれば良いか」
「じゃーロッテン・マーヤさんも一緒に行くかい」
「そうしたいのは山々何でございますが、私は船が大の苦手でして・
・・」
「だったら大人しく僕の帰りを待ってなさい、それにぼく留守中
黒いネズミが
出ないとも限らんからな（王位を狙う反王子派たち）
「そこまで言われるのなら、仕方ございません、くれぐれもお気を
つけませ」
と　名残惜しそうに船を降りた
「じゃーテリュース、私にもにお土産忘れないでね」
と、王位を狙う親戚の　アルバラド大臣の娘　アニータが腰をくね
らせた」
その　セクシーさに思わず『ドキッ』とするジョン王子
「うーいかんいかん、前もその手で『大金を貢いだ挙句』
うっかり王位まで、渡しそうになったんだった」
（・・・大丈夫かこの王子）

『ポーポーポー』
出発の汽笛が鳴り、王子以下　使節団２０数名だけを残して後は船から降りのだった。

『１．２・３．４　？　ＷＡＮＴ　ＹＯＵ！　Ｉ　ＮＥＥＤ　ＹＯＵ！・・』
（あれっ　この頃この曲あったっけ　まいっか）

港では鼓笛隊による、見送りの音楽が何時までも鳴り響いていた

?王子の船出（後書き）

雲ひとつない青空、でもそれは嵐の前の静けさであった。

?ジョン王子（前書き）

今はしっかり者?（かもしれない）ジョン王子の過去

?ジョン王子

「うーん、今日も快晴、この分じゃー交渉も上手くまとまりそうだ」
と　オルディナス号の上で大きく伸びをするジョン王子でしたが
ここまで来るのには、いろいろと問題があったのだった
それと言うのも先代のハンス王が油売りだったアルバラドにたぶらかされ
妹アルマを妻にめとり　親戚にしたばかりか　いっかいの商人を摂政権　国王補佐にまでしてしまったからでした　ハンスは間もなく病気となり（毒を盛られたという噂も）おまけに王子までもアルバラドの娘　のア二―タの色香に惑わされ　国家予算の半分を継ぎ込んだ挙句　国王の座をあっさりア二―タに譲ろうとしたので
　王室は一時期大いに荒れたのだった。（この親子は〇カでは？）
その状況を見かねた側近が　3年前　結婚を機に王室を離れていた執事官ロッテン・マ―ヤを呼び戻したおかげで　なんとか　アルバラド大臣の野望は阻止できたのだった
その後もロッテン・マ―ヤの口うるさい教育のおかげで　どうにかこうにかこうにか
やってこれたと言う訳である（ヤレヤレ）
「王子、そろそろ食事の準備が整いましたので　中にお入りください」と側近のパレルが
促したので「そうか　じゃー今行くよ」と言って何気なく空を見い挙げたのだった
その時『ポツリ・ポツリ』と滴がジョン王子の肩に落ちたので
「おやっ、雨でも降るのかな」と呟いた
パレルは「なーに、にわか雨でしょう？」と答え　共に船内へ入ったのだった。

?ジョン王子（後書き）

ちなみに　アルバラド大臣　とアニータは国の3分の1を所有しているらしい。

？　アニータの野望と嵐（前書き）

妖艶な悪女　アニータ・アルバラドの野望が発覚！

？　ア二―タの野望と嵐

《その頃宮殿では大臣のアルバラドが王の玉座に座っていた》
「フフッフッフ、あの馬鹿王子がいない間に
わしは　王の支持派を取り込んでおくとするか、この王国を我がものとするためにな」
「あーら、お父様のものじゃなくて、私のものでしょ」
と膝に乗った裸のア二―タが父である大臣に抱かれていた」
「そっ　そうだったなぁあああ・・イー（ショッカーかよ）
こんな気分になれるってわしはツイテおるぞぉおぉ・・・いく・・
ア二―タ・・さ・・まぁ・」
と昇天いたのだった
ア二―タ―は唾を『ペッ』と吐くと
「フンッ、汚らわしい　我が父親ながら　このエロじじいが、この私が王になれば
お前もアルマ（妹）も何処かの小島にでも追放してあげるわ　間もなくパレクスから
報告が入る（そのために奴を借金漬けにしたのだからな）
　アッハッ・ハ・ッ・ハッ・ハッ・ハッ・ハッ」
その時『コンコン』とノックが聞こえた
ア二―タは「誰じゃ」と言って着替えようとしましたが、ロッテン・マ―ヤは勝手に部屋に入ってきた
「あーらア二―タさん　大臣と何を話していたかは存じませんが
今時き（秋）
そんな括弧で居ると風邪をひいて死んじゃいますよ、そしたらせっかく
『この国を乗っ取る』野望も台無しになっちゃいますよ、オホホホホホ」と言って部屋を出て行った。
「・くぅううう、オノレロッテンマ―ヤ」

（再びドアが開く）「私とした事が、お帽子を忘れるところだったわ
（帰り際　背中越しに）アニータさん　そんなに怒ると血圧が上がって死んじゃいますよ
あっと　それからここら辺は最近　女の狐が出るのでお気をつけ遊ばせませホッホッホ」
と、挑発して　出て行ったのだった。
その晩ア二―タが猛烈に悔しがったのは言うまでもありません
《一方マユナは南に向かうと言うタコのネコ吉と別れ地上に上がったのだった》
すると辺りは薄暗くなり天雲が空を覆った、そして雷鳴が『ゴロゴロゴロ』と鳴り始めた
「何よこれ」
『ウワァー』
とさしもの人魚も津波に押し流されていった
その頃オルディナス号でも船長のパンちょが
「舵が効かないでパンちょ、みんななんとか持ちこたえるでパンちょ」と指示を出していた
「『きゃー』『ァ――ァ』
「持ちこたえろと言われても、この嵐じゃー」
そこにパレルが「君たち王子を見かけなかったか」とやってきた
「さあ、来てませんけど居ないんでパンちょ　これは困ったでパンちょ
半分は船を　残り半分は　王子を探すパンちょ」
と　大急ぎで船員たちに告げた
「よろしく頼みましたよ」とパレクスは船員にお礼を述べたのだが・
・
その顔は何故か笑っていたのでした。

？　アニータの野望と嵐（後書き）

人間になったマユナは　ある屋敷に下働きとして入るのだった。

?.運命の出会い（前書き）

マユナとジョン王子の出会いです。

?運命の出会い

○回想
《嵐の雰囲気になっていたので、側近たちはジョン王子を船内に避難させていました》
そこに
「ジョン王子大変です、誰かが海に落ちた模様です」
と側近のパレルが慌てて飛んできた
「なんだと・どの辺だ、パレル案内しろ」
と　ジョン王子は　家臣たちが止めるのも聞かず船外へ出た
「どの辺だパレル」
「アノ辺りです」
パレルが指さしたあたりの海を覗き込むように見るジョン王子
その後ろから迫るパレルの手」
『ドボーン』『ウワ―ァ』
だがその声は雷鳴にかき消され船内には聞こえなかったのである。

戻る
《そのころア二―タは上等のワインを飲んでいた、そこへ眩いばかりの天使が現れた》
「おっ、お前はなんだいきなり入ってきて」
「私はオルディナス、神々の王です　今すぐ邪まな野望はお捨てなさい
　でないと　恐ろしい事になりますよ」
「フン、神だか何だか知らんがお前ごとき
ババァには　用はねえんだ　すっ込んでな、それとも『ヒーヒー』言わせてやろうか」
「そうですか、なら仕方ありません好きになさい　ですが今後どうなってもそれは

あなた自身の責任ですよ　いいですね　警告しましたよ」
そう言って女神は消えて行った。
《船内では、行方不明の王子を探していたのですが　嵐はますます
強くなり船は
右に左に大きく揺れ、空からは落雷が轟いていた》
『ドシーン』『バリバリバリ』（船体が破ける音）
「いかん、このままでは船が持たないでパンちょ」
『ザバーン』
大きな波が襲い、たちまち船は大破　人びとは
『ドドっ』っと　海に流された
『うわー、落ちる』

「みんなあ、何かに掴まるでパンちょ」

《そのころマユナは　高く伸びた木の枝に必死で掴まっていた
その時　丸太にしがみつき流される　ジョン王子を発見したのだった
「あっ　あの人は　助けなきゃあ」
マユナは勇気を振り絞り近くの岸辺（と言っても、１キロ位）まで
一生懸命に泳いだ
　コクショナ先生の人命救助の授業を思い浮かべながら・・
そして　どれだけ経ったのか、ようやく岸にたどり着いた頃には
あれ程の嵐が、嘘のように収まりかけていた
王子を岸に下ろしたマユナは、魔女に貰った変身薬を飲んだ
「ううーん」
気がついた王子が薄目を開けた時　マユナはまだ変身の途中であった
そして胸が少し小さい、キュートな女の子に変身したのでした。
「王子、目を覚まして」
マユナは王子をさすった、その時　人の気配がしたのでマユナは習慣で思わず隠れた

「王子　こんな所に、よくぞ無事でいたでパンちょ」
と、生き残った4～5人の乗組員たちだった
みんなは、王子の無事を喜んだ、でもただ一人
パレクス・パレルだけは
（ちっ、生きていたのか、運がいい奴め）と呟いていたのだった。

?運命の出会い（後書き）

マユナは　意地悪3姉妹の家で働くことになった
やがて　王室では新しい国王の発表を兼ねた　舞踏会が
開かれる。

？　舞踏会（前書き）

舞踏会とアニータの野望とは　一体？

？　舞踏会

《あの事件の翌日、マユナはジェノバの港町で自分を雇ってくれる所を探して歩いていた》

「あのすみません、海の方から来た者ですが、この辺りで人を雇ってくださる所は無いでしょうか？」

と尋ねた、すると　向こうから５０位のおばさんがやってきて

「むすめさんこの辺では見かけぬようじゃが、働きたいんなら　この先のジュオン

家が募集しとるで行ってみる、いやあそこはやめといた方が・・」

だがマユナは　話の途中でもう居なくなっていました。

大きな屋敷の門の前まで来たマユナは呼び鈴を『チリン・チリン・チリン』と鳴らした

すると　赤い髪を筆のように立てたガンコ（よっすぃじゃ無いよ）と言う人が出てきて

「おまえはだれじゃね」と厳つい顔で尋ねた、マユナは

「私は海の中から来たマユナと申す者ですが、仕事が無いのでここで雇ってください」

と言って頭のティアラを見せた

　ガンコおばさんは「何だねそれは」と質問した　「あらっ知らないの

これは人魚の国　じゃなかった私がいた国では身分証明書になっているの」とマユナは明るくそう答えた

ガンコおばさんは（人魚だとか海の中から来たとか　こりゃまた分らんことを）

と呟いた後手を『パンパンパン』と３回叩き、３人の娘　サギ　ウメ　クリを呼んだ

中からは「おばさまなんかご用」と少し太り気味の３姉妹が出てきました。

ガンコおばさんは「こりゃおまえたち、今日からこの子を雇うことにしたので　よーく、しごいてやってくれ　名前はぁ　そうさなあ、『トンデレラ』で良いな　頭がブッ飛んでいるようなのでヒッヒッヒッ」と笑い屋敷の奥へ帰って行きました。

《その頃お城では　反対派の意見を押し切った　ジョン王子が新しい国王の発表を兼ねた
舞踏会の準備にテンヤワンヤだった》

○ア二―タの部屋

「ア二―タよ、良いのか　こんな所でのんびりしていても」と聞いたのは
アルバラドの妹のアルマでした　ア二―タは　アルマのお尻を『ポンポン』と叩くと
「その心配は無用よおばさま」と答え（あしたの舞踏会が楽しみだわホッホッホっホッホ）
と『ニヤリ』と笑った。

《そして舞踏会翌日》

ガンコおばさんは3人の娘と共に派手な衣装を着て馬車に乗って出かけたのだった
しかし　トンデレラはもちろん留守番であった
「やっぱりかあ、まあ　期待して無かったけどね
と、トンデレラ事マユナはこれまでの事を想い出していました。

○回想

「いいことトンデレラ、晩までに家じゅうを『ピカピカ』にしといて頂戴」と姉のサギ
「トンデレラ、ここから３０キロ離れた町にお気に入りのバックがあるから
キッチリ３０分以内に買ってきて頂戴」と二女のウメ
「トンデレラ、あなたの仕事は気に入らないから　今夜の食事は無いわよおっほっほ」

と　毎日　こう言ったありさまであった
戻る
マユナは庭掃除をしながら空を見上げ
「あーあ私何のために人間になったのだろう」
と呟いた、その時『黒い服に長い鼻をしたおばあさん』が　ラッコが引くソリに乗って
西の空から　やってきた、軽快な音楽を周りに響かせながら・・
・・ジャンジャン溢れる愛しさは・・　ヘビーローテーション♪
・・・（これってまさか？）

？　舞踏会（後書き）

奇妙な魔法使いが現れ、トンデレラ（マユナ）に　ラッキョの馬車をプレゼントしてくれました。
この魔法使いって・・・まさか・・あの人っては（・・？

??　舞踏会2（前書き）

舞踏会に行きたいと願う　トンデレラ（マユナ）の前にラッコのソリに乗った　大魔法使い（自称）が現れた。

??　舞踏会2

「あっ、あれはなんだろ」
舞踏会に行きたいと願い、上空を見上げた時　マユナの目に映ったのは
ラッコのソリを操りこちらへ向かって下りてくるおばあさんの姿でした。
「あなたは誰ですか？」
「オホン　わしはミィじゃなかった　ローテ、そう大魔法使いローテじゃ」
「ローテ？聞いたことないなあ」
「ザル―ニャさんの使い見たいなもんじゃ」
「なあ―んだ、だったら初めからそう言ってくれれば良いのに　で何しに来たの」
「トンデレラお前は舞踏会に行きたいんじゃろう、その為に手を貸そうと思ってきたんじゃよ」
「でも私、こんな古い服しかないし　それに　招待券だって無いよ」
「その心配は無用、いや無用じゃ」
『リフラル・フロ―レ』
《ロ―テが魔法の杖を振るとあーら不思議　目の前に『ドーン』とラッキョの馬車があらわれ
トンデレラのボロッちぃ服が、豪華な衣装に変わったのだった》、
「すっゴ―ぃ　おばあさん、こんな魔法　人魚の国でも見たことないわ」
「気に入ったかい、この馬車でお城に行くと良い」
マユナはラッキョの馬車に乗り込み出発しようとした
「まったまった、お城には入場券が無いと入れないよ（とアチコチを探して）
あったこれだ　これだ、はいチケット」とマユナに渡した

「あくしゅけん、王子様と握手するの？」
「いやっ、間違えた　それは握手券だった　わりぃワリィ　本物はこっちだった」
「ＡＫＢチケットって何＞」
「また間違えた、ちょっと待ってな」
と言って魔法使いは　ナンデモ・バックを探し始めた
〈これはあっちゃんの写真集だし　こっちはカチューシャのＣＤ
これはどうだ　違った　ネモオスのＤＶＤだった〉
３０分後
あった　あった、これだこれだ　ハイ入場券」
「・・・あ・・・ありがと・・」
《シッチャカ・メッチャカでしたが、どうにかこうにか役目を果たせた魔法使いでした》
「それからザル―ニャさんから伝言がある、明日の１２時に変身が解けるので
それまでに城を出るようにってさ」
「うん分った　おばあさんのふりした魔法使いさん　いろいろありがとう」
マユナは馬車の窓から顔を出しそう言った
魔法使いは「では気をつけて行きなよ」と馬車を見送ったのであった。
「ふーう、やっぱりばれてたか―」
「当たり前だろ、そんな喋り方じゃー」と桃色の鷹が飛んできてそう囁いた
「モーモやっぱり来たか　どうせ母さんでしょ」
「違うよ　チンコロ（リ）頼まれて様子を見に来たんだけど
正解だったぜ、こんなんで一人前の天使になれるのかよ　まったく」
「なる　ダンテと約束したんだ、立派な天使になるって？」
「だったら、もっと修行しないとな」
「そ　だね　宜しくモーモ先生」

「ちっ、調子がいいんだから」
《鷹と本当の姿に戻った　天使見習いミーナは　そう言って共に飛び去って行きました》
（・・・グッズ、忘れてるんですけど・・）
○上空
「あーアしまったぁ、ヘビロテ教えるの忘れてた」
「それは良いって」
「良くないよ、あの曲で王子さまの心を『グイグイ』とだねぇ・・・」

??　舞踏会2（後書き）

舞踏会のメイン・イベント　銅像の除幕式が
そこにはアニータの罠が
そして彼女の意外な最後？

??? 舞踏会3（前書き）

アニータの野望の　結末です。

??　舞踏会3

《マユナは30分遅れでお城に到着した
馬車から下り城の中へ入ろうとしたら、お猿さんのような顔をした
門番に呼び止められたのだった》
「あの中へ入りたいんですけど」
「では　招待券か何かをお見せください」
「そう来ると思った（と言ってポッケを探ると）
「ハイチケット」と　差し出した
「よし　通って良いって、これはストローやねん」
と関西人のノリで突っ込んだ
「え、ストロー　ホンまや（さんまさんか）
でも何でこんなもんが束になっちゃってるわけ　あれっ　なんかメモが巻いてあるぞ
何々、マックであっちゃんが使ったストローを勝手に拝借だって
（するな　ん　なもん?）
「あったあった、こっちだこっちだ」
「ふむ、間違いないおます」
と　何とか　城の中に入るのに成功したのだった。
《中では招待客が　勇者のテーマーに合わせ　ダンスを踊っていた
「あの私と踊っていただけますか」と、ウリ
「誰があたいと踊る気にならない」とサギ
「誰でも　良いから踊ってよう」と　クリ
しかし誰も　相手をしてくれないので3人は不貞腐れていました
一方　王子の殺害に失敗したパレルは何故かアニータをさがしていたのだった
「アニータ様、アニータ様　一体どこに行かれたんだろう（・・?」
ちょうどそこに　7色の美しいドレスを着たマユナが現れた
すると　たちまち大歓声が起こった

『おおー』『ブラボー』『素晴らしい』
それを見たジョン王子は「お嬢さん、僕と踊っていただけますか？」
とマユナの前に進み出た
「はい、私でよければ」
そして　音楽に合わせて踊ったのだった
・・飛・べ・な・い・ゆで玉子♪（たまごかよ）
「クゥ～～ゥ、トンデレラめ、覚えてらっしゃい」
と　悔しがる　ガンコと3姉妹たち
そしてどれ位たったか、舞踏会も残す銅像のテープカットのみとなっていた
「それではこの僕、　テリュース17世が新しい国王として
初代王　ハンス一世像の　テープカットを務めさせていただきます
「よし　いよいよだな」
とパレルは『二ヤッ』と笑った
「では　3・2．1　カット」そして周りの幕が上がった
「・・・こっ、この銅像はなんだか　アニータに似てる・・まさかね」
《実は　幕が開くと同時に石工が噴出する仕掛けだったのだ、アニータは　昨夜
そのことを確認に行ったのであった。
○昨夜
「ふふふ、このテープを切ると幕が上がり　王子　めがけて石工液が噴出し　哀れ王子は石工人形になあると言う寸法さ
ふっふっふ・・でも　不発だったら困るので一度　試してみよう」
そう言ってテープを切った
するとアニータ目がけて石工液が飛んできた
『ブシューゥ・ドドド』
「うーん、完璧だ　抜かりはない　抜かりはないが・・・うっ・う・ご・け・ん」
と　そのまま石工になってしまったと言う訳である

（あんた　ばかでしょ？）

そんなこんなで時計は１１時５０分を指していたのだった。

??? 舞踏会3（後書き）

慌てて城を抜け出したマユナは　大切なティアラを落としてしまう
人魚族のティアラには　『ファイアーウォール』が組み込まれていて
持ち主以外は拒絶『持ち主、チガーウ』するのであった
ジョン王子は国中から持ち主を探し始めた。

？？持ち主探し（前書き）

ガンコ３姉妹の結末です。

??持ち主探し

《マユナはジョン王子と時間が過ぎるのを忘れて踊っていた》
「お嬢さん　いやトンデレラと言ったかい
君は見れば見るほど　僕の心を掻き立てる
一体何処から来たんだい　もっと君の事を
聞かせてくれないかい」
「それはちょと　それに王子様、私そろそろ行かなくちゃー」
《その時ジョン王子はマユナに不意に口づけをしました、たちまちマユナは顔を赤らめ
「私行かなきゃー」と王子を突き放し　急いで階段を駆け下りていった
　でもあまり慌てていたせいか大事なティアラを落とした事に　きずきませんでした》
「トンデレラの奴め、帰ったらたっぷりお仕置きをしなくては」
とガンコばあさんが嫌みたっぷりに言い放った。
～飛・ん・で・る・ドテかぼちゃ～♪（かぼちゃかい）
城には相変わらず変な音楽が流れていた
「待ってくれ　トンデレラ」
そう言って　後を追ったジョン王子は　階段の中央で輝いているティアラを拾ったのだった。
○翌日
さて正式に国王となったジョンが最初に行ったのは国の立て直しでゃなく
ティアラの持ち主探しでありました
その為に家臣たちは国中の娘たちを城に集め審査させたのだった
でも他でもない　ティアラ自身が『これは違う、これも　持ち主ではなーい』
と拒絶するので　どうしようもありません。

しかし「これは確かにあたしが落とした物」
と強引に太い頭に飾ろうとしたサギはティアラによって首ごと切断
されてしまいました
「ぎゃー」
「だからこれは私のだって」
と今度は太い腰に付けようとした　クリは腰から真っ二つに・・
「やったーやっぱこれ、あたしんだ」と残ったウメが足に括ろうと
したところ
『お前もチガーウ』とティアラの　ファイアーウォールによって
両足を『ズバッ』と切られたしまった。
そのオゾマシイ光景を見たガンコは
「おおっ、私の可愛い娘たちよ　何でこんなことになってしもうた
んじゃヨヨヨ・・」
と泣き崩れたのだった。

？？持ち主探し（後書き）

本当は怖い昔話をアレンジしてみました。

??? 注目の判決（前書き）

悪事を働いたアニバラド兄弟やパレルの裁判です。

??　注目の判決

《ジョン王子は国中はおろか他国にまで広げてティアラの持ち主を探しましたが
　見つかりませんでした、しかし　王となったジョンにはやることが沢山あったので
持ち主探しは一旦中止することにしたのです》
「では、判決を言い渡す　摂政アルバラド及びその妹アルマはジョン王暗殺を企てたばかりではなく　長年の公金横領もロッテンマーヤの調べによりすでに発覚しておる　したがって兄弟共々　性転換手術の末（何で？）国外追放
側近のパレルも同じく有罪　〇玉を『会いたかった』のリズムに合わせて
百叩きの上、無期限の流刑（島流し）を言い渡す　以上」
（こっ、怖い（・・？）
と　裁判官　ククール（ロッテンマーヤの弟）による判決が言い渡されると
3人は「シュン」と肩を落とした。
パレルは　〇玉を打たれる度に　審査官が　数を数えると言う仕組みなのだが
５０を過ぎると　ククールが「今何時だね」と聞き　聞かれた審査官が
懐中時計を見て「あっ　１２時だ」と答え
「それでは続ける・１３・１４」と数え直すのである（時そば　かよ?）
「なお、首謀者アニータをランス国よリ永久追放とする」
と　言う判決には賛否両論　であったのだが、何せ本人が行方不明（生死不明）ともなれば、これもやむ終えなかった

「トンデレラよ、お前は一体どこに消えたのだ」
王宮のテラスで　ジョン国王は　そう呟くと　星に祈った
すると　奇妙な生き物を抱いた天使が現れ　「もうすぐ会えるよ」
『チチン・コロロ・ポー（そう、そう）と言った
同時に聞き覚えが無い音楽が（航海のとき聞いたんでは？）
空から響いてきた
・・ジャンジャン溢れる愛しさはヘビーローテーション♪♪・・
「清々しい曲だ　こんな気分になれるって　僕は付いているぞ」
ジョンは空に向かって　そう叫んだのだった
《その頃　人魚の国に帰ろうとしたマユナは、途中の海で
大切なティアラが無い事にようや気がついたのだった
「しまった、ティアラどっかに落としたらしい
あれが無いとマリンパレスに　入れないのよね」
マユナは　仕方なくUターンした
（ポッケにあっちゃんの　使ったストローの束があるんだけど
代わりに　これじゃ駄目かなあ（ダメでしょ？）
と　呟きながら

??　注目の判決（後書き）

人魚マユナと　ジョン王子の恋の行方は　？

???　ハッピーエンドな結末（前書き）

マユナの恋の奇跡です。

??　ハッピーエンドな結末

《マユナは途中の海でお使いの途中のレターナに出会いました》
「あれっ、マユナじゃないの　やっぱ帰ってたんだ」
「うん、だけど大事なティアラ落としちゃったみたいなんだ」
「それは大変じゃない　あたいも探してあげるから一緒に探そう」
《レターナとマユナは海岸を中心に探したのですが、なかなか見つかりません》
「ふうっ、疲れたマユナぁちょっと休もう
私たちが浜辺を探すのって大変なんだよね
（足が無いので）
「そうだよね」
2人は最初の浜辺に腰掛けていろいろ話し合っていた、これまでの事
そしてこれからの事も、レターナは「そうか」と頷いた後
「ふーん、いろいろあったんだね　でも　これだけは覚えていて
この先マユナに　どんな事が起こっても
私だけは味方だからね」と強く答えたのだった
《一方王子は夕方　こっそり王宮を抜け出して
誰かに助けられたあの海岸にやってきたのだった》
「確かあの辺りだったかな?僕が倒れていたのは」
ジョン王はそう呟くと　岩場を歩き始めた
大きな岩を登ろうとした時　王宮にがざってあるはずのティアラが
『ポト』っと落ちた
「何でこれが　こんな所に?」
そう言ってティアラを拾った時、大きな岩に腰をかけている人魚を
発見したのだった
ジョンは
「なんて素敵な光景なんだ、こんな瞬間に出会えるとは　やはり僕

はツイテルな」
と思わず声を上げた　その時その人魚がこちらを振り向いた
「・・君は・あの時の・？」
「王子様？」
王子はその人魚にティアラを付けてあげた
「ほら君にピッタリだ、やはり君はあの時の女の子だね」
「・・うん」
マユナと王子（王ですが）は互いに唇を合わせた　その瞬間奇跡が
起こった
マユナが鰭が消えて人間に変わったのである
「こっ、これは一体どう言う事？」
「ザルーニャさんから言付けがある
人魚は変身薬によって人間になれる
しかし　その物に愛され　その証を得たものは　その場限りでは無
いってさ」
「ん～、つまり永久に人間に生まれ変わるって事か」
王子の質問にレターナは笑顔で頷いた
「レターナ私　人間になっちゃって
そしたらもう　みんなにレターナにも
会えないって事」
「みんなはともかく、俺は時々マユナを
見に来るぜ　親友だからな」
マユナの質問に　レターナはそう答えたのだった　上空からは
チンコロ・リを抱えたミーナが
「やれやれ、どうにか上手く収まったぜ」
と笑い姿を消した
♪こんな気分になれるって、僕はツイテいるねぇ♪
と　ＭＤをジャンジャン♪響かせながら
（言いにくいけど　あんた、オタクなんでは？）

??? ハッピーエンドな結末（後書き）

王女となった人魚はランス王家を盛り上げていったらしい
しかし、龍は何故か　最後まで話さなかった。

エピローグ　人魚伝説のその後（前書き）

最初に戻ります

エピローグ　人魚伝説のその後

○エンドラの泉
「こうして人間となったマユナは王妃として
王国が繁栄する力となった　そしてこのことがキッカケで」
世界中に人魚姫伝説が伝わったんじゃよ」
マォとなりナは　『ドク・トル・ケ』（ドクトルG？）
（泉に辺に生えている　レンゲに似た植物）の葉で入れたお茶を
飲みながら龍の話を静かに聞いていた。
「わあーぁ、なんて素敵なのマォも人魚姫になりたい」
「マォは人魚姫って感じじゃない　なるよね？ジルドーラさま」
「ナリな、あんたは何時も　そう言う事言うんだから」
「うふふ、マォは人魚じゃなくて　戦士になるんじゃあ無かったか
のォ　母親のように」
「そっ、そうだったかな、なりナ」
「おいらも　そんなこと聞いた覚えがある　なりナ
「なら、マォ戦士でも良いや　そしていつかマォも愛する人と」
《その脳裏に　ナーゼが浮かんだのは　言うまでもありません》
そのマォの表情が可笑しくて
龍とナリなは『ははははは』と笑った
それにつられて、マォも『あっはっはっは』っと笑ったのだった。
《しかし　小国であるランス王国は次の次の世代に
『赤い靴を履いてた女の子』が率いる『ヤマンバァ軍団』によって
征服（統合）
される運命にあるのですが、龍はその事をマォには話さなかったの
です》

エピローグ　人魚伝説のその後（後書き）

ヤマンバァ軍団も　やがて隣国　スイスのクララ帝国によって征服され
指導者である『赤い靴　履いてた女の子』は帝国に捕えられ
『いじんさんに連れられ』何処かへ『行っちゃった』らしい
と　最後はこんなオチでどうでしょう？

20話『スーザン湖の伝説』（前書き）

砂漠の国　エルフにある唯一の湖にまつわる伝説です。

20話『スーザン湖の伝説』

（1）スーザン王

エルフの国のはずれに砂漠の王国アエトンレイがありそこに、スーザン・ポパと言う
王が住んでいました。彼はアエトン宮殿でいつも家臣達に「自分の娘のヘロエはとても美しい」
と自慢していたのですが　ある日友人のヅイヴ大臣と酒を酌み交わしながら
「いくら美しいと言ってもアスタヴィス様（海神の娘）にはかなうまい」と大臣が言ったところ
スーザン・ポパ王は上機嫌で「いやったとえ海神の娘だろうが
我が娘ヘロエの美しさに敵う者ではないハッハッハッハ」と笑ったのである。
この砂漠の町を守護していたのは神龍が砂漠の精霊アズに産ませた
海と砂漠の神マイトでした。マイト神は「たかだが人間の分際で神よりも美しいとはけしからん
思い知られてやる」と怒りをあらわにしたのですが　娘アスタヴィスは
「お父様良いではありませんか、そう人間の言う事にいちいち腹を立てなくても」
と収めようとした　しかしマイト神は「いやっそれでは他の者にしめしがつかん」と言うのでした。
アエトンレイの中心から約一・二キロの所に砂漠地帯では珍しい小さな湖
があり、そこにポパ王と娘ヘロエが催眠術で呼び出されたのです。
2人は目を覚ますと「これはいったいどうしたことか？真夜中にこんな場所に」
とポパ王が言うとヘロエも「ホント不思議だわ」と呆然としていた

ところ湖の中から大きなタコに乗った
派手な金髪の仙人が『ポイ・ポイ・ポイ・ポ・ポイ・ポイ・ポイ・ピ』と踊りながら現れたのである。
（2）ど派手仙人現る！
仙人は「王よ、おまえは自分の娘が神より美しいと言ったそうだが
それはほんとうか？」
と尋ねたところポパ王は「本当さ　たとえ何者であろうと我が娘が一番にきまっとる」と答えたのである
次に仙人はヘロエに「娘　おまえの考えは」と聞いたところヘロエは「そんなのどうでもいいじゃない、まあ神より美しいのは本当だけどホホホホホ」とわらったのです。
すると仙人の顔がみるみる変化しはじめました。そしてその顔の中からマイト神が現れたのです。
2人は仰天しその場にへたりこみました。マイト神が「ポパ、おまえの自慢の娘とやらは
いったい何処にいると言うのだ？」と聞いたので　不思議に思い「さっきからここに？」
と隣を見たところ何故かヘロエは居なくなっていたのでした。そのとき
「ここに居るじゃないの？」とヘロエの声がしたのでポパ王は振り向いたところ
やはり誰も居なかったのです？「もーさっきからここに居るって言っているじゃーないの」
と相変らず娘の声はするのですが姿は何故か？みえないのです。
ポハ王は必死で娘を探していたとき「お父さん」と言う声と共に一匹のムカデが飛びかかりました。
仰天した王は「ウワッムカデだ？気持ち悪い」と言ってその場で踏み潰したのです。
すると先ほどからその光景を見ていたマイト神は
ニヤリと笑い「ポパおまえが今踏み潰したそのムカデこそおまえの

娘のヘロエなのじゃ」
と告げたのです　その言葉にポパ王は仰天しその場にうずくまってしまいました
そして「ヘロエーヘロエー」と朝までなき続けました。その様子を見ていた
マイト神は「ポパ全ておまえが悪いのだ後悔し続けるがいい」そう言うと大タコと共に
『ポイポイポイ』と踊りながら湖に消えて行きました
　ポパ王は自分のおろかさを嘆きそのまま湖に身を投げたのです
以後その湖はスーザンの海と呼ばれたと言う。
言動にはくれぐれも気をつけよう　と言うお話でした。

20話『スーザン湖の伝説』（後書き）

北の国ルイクスの王位継承者で
ルァナン山で拾われた少女ナミ『5話・少女と龍　参照』は
継母によって異世界オズナーマンとへの使いを頼まれます
しかし　それには　我が子を王位につかせようとする陰謀が・・

21話『北の魔女！』（前書き）

北の国ルイクスを狙う　魔道士ヨヨを　退治するため
ナミ（エルザ・カイザーク）は異世界　オズナーマンとへ旅立ちます

21話『北の魔女！』

（1）魔導師ヨヨ

ルイクスの国にヨヨと言う娘が住んでいたゴゴン地方ではたいへん美しいと評判だったのだが

あるとき突然行方不明となり、数年後帰ってきたときには魔道の術を身に付けていたと言う。

この地方では古くからナメクジラナと言う

（亀の頭とナメクジの体を持ち、こうもりの翼で空を飛ぶ生き物）が生息しており

ヨヨはこれらを使い人々を困らせていた。

ルイクスの王マノィには2人の子が居た一人は妻ニモエの実子だがもう一人は　ルァナン山で拾った赤ん坊（ナミ）を当時子供に恵まれなかった妻ニモエが

育てた子だったのであった　王であるマノィはナミをたいへん可愛がったが、実の子を王位に

つかせようと企む継母ニモエは王の留守中にナミ（10）をルイーズの王宮に呼び出し

「最近ヨヨと言う魔導師がナメクジラナと言う怪物を操りこのルイクスの国を

脅かしているのはあなたも知っていますね」と言ったらナミは「存じています」と答えた。

「そこであなたには時期国王として、魔導師征伐に　ここから　3千キロ向こうにある

ヨヨが住むと言う　異世界オズナーマントに旅立ってもらいます

と告げた

ナミは「承知しました」とあっさり答えると少し考え込み　部屋を出て行きました

その姿を見たニモエはこれでナミがルイクスの町には2度と帰る事

はあるまいと微笑むのでした。

（2）アルモァの化身

王宮の自分の部屋（隣にある昔、納屋だった部屋）に帰ったナミはいたって普通だったが、どうして魔女を退治したものかと考えを纏めていたのだが

なかなか良い考えは見つからなかったのであった。そんなとき

窓をたたく者がいた　勇者フデーロの友達で大きさを自在に変える　鷹のようでした

ナミは「あなたは誰？」と尋ねた

すると鷹は「私はアルモアと言うものだ」と答えたのでナミは

「アルモア、もしか彼方は、妖精神様でございますか？」と聞くと

鷹は

「そのとおりだ」と答えたのだった。

「で、妖精神様がいったい何ようで？」と再びナミが訊ねた所、鷹は

「魔女退治を命じられて困っている様子ゆえまいったのじゃ、どれ私が１つ策を授けよう」

と言って『デルマク・マハルダー』と呪文を唱えた　すると部屋全体がクルクルまわり

ナミは意識を失って倒れた　しばらくして気がついたナミは窓から外を見た

そしたら部屋全体が飛んでいるではないか「わあ、これはどう言う事」

と　ナミが行った時でした

『ガシャーン』と大きな音がして『ギャー』と言う声も聞こえてきたたので

ナミは外に出てみた　すると　家（部屋）事オズナーマントに到着していた

「凄い　もう着いちゃった、便利だけど　ちょっとつまんない」

とナミが　残念がっていると　桃色の鷹がナミの肩に止まり

「いや　ここはオズナーマントのほんの入り口さ、おいらは　モーモ

伝令神さ　それにしても　そっくりだな　でもこっちのほうが少し大人ッぽいや」
「誰が　だれと　そっくりだって？」
いや、なんでもないよ、これからよろしくって言ったのさ」とあいさつした
ナミも「こちらこそ・・」と話している内に
『ギャー』と言う声がますます大きくなってきたので、ナミとモーモは
家をよーく見まわした「あっ、こんなところに人が」
モモが　言うので　ナミも下を覗き込んだところ　老婆が家の下敷きになって
いた　そして間もなく泡となって消えていった。
「こいつは」とナミが質問すると　モーモの精神と繋がっているアルモァが
「そいつは　タラコ女と言ってヨヨの小間使いの魔女だよ」と答えた
そしてアカデミーショーのように　赤い道が現れた
「その道をまっすぐ進めば　ヨヨが支配している　カルドの都につくはずだ
幸運を祈る」と言ってアルモァの声は去って行ったのだった
頭上からは　不気味な　蒼いカラスがナミ達を見下ろしていました。

～フッフッフッフッ、オズナーマントへようこそ　エルザ・カイザークよ～
『ポイ・ポイ・ポイ・ポ・ポイ・ポイ・ポ・ピィ』
（それは、もう良いって（（＋＿＋））））

21話『北の魔女！』（後書き）

僕が大好きな　オズの魔法使いを取り入れました。

？　豚のマージ（前書き）

ウッチーの森に住む　自称変わり者
マージ・トント＝ドロリゲス
が　旅の仲間に加わる

？　豚のマージ

ナミとモーモが赤い道の上を歩いていると　向こうのほうから
「おーい、助けてくんろ」と言う声が聞けてきましった
見ると豚の人間が狼の追われているではありませんか　モーモは
人間（少年）に変身していたモーモは『これでも喰らいな」
と　小石を頭にぶつけたので、その狼は『コケコッコー？』と大慌
てで
逃げて行った（ニワトリかい（・・？）　）
「あんたどうしてあの狼に追われていたの」
「僕はマージと言って　この向こうにある　ウッチーの森に住んで
たんだども
ある日腹をすかしたディゲル（狼と蝙蝠のハーフ）がやってきて
のさ　そして　あっと言う間に　僕を除く全員やつの餌食になった
と　こう言う訳なんだ」と　マージは　少し早口で説明した
「なるほどね」事情を聞いたモーモは頷いた
でもナミは「おかしいじゃない　何故あなただけっ助かったの？」
と指摘し　モーモも「そういやぁ　そうだよな」と質問した
「ウッチーの村はいつも平和で　皆は一般的な　藁や木の家で暮ら
していたんだ
でもディゲルの鋭い爪は藁や木を切り裂き　ディゲルにはつうよう
しなかったんだ
僕は変わり者だったおかげで　人とは違うブリキの家（ブリキかい
？）
に住んでいたおかげで　奴の爪もキバも　丈夫な　ブリキには通用
セずに済んだんだ」
マージは汗を拭きながらそう話した
「なるほど　話は分かったけど　だったら何で　家から出たんだよ」
「そうよね　ずっと閉じこもっていれば　良かったのに　ナミだっ

たら
読書とかして　閉じこもってるけどね」
「僕も　そう思って　家にずっと隠れていたの　でもさすがに　2週間ともなれば
さすがに食糧がなくなって　ぼくはお腹がへって　へって　仕方なく仕入れに出た所を・・」
「追いかけられたって訳ね」とナミとモーモは同時に答えた
「それで　これからどうするの」
「ナミさん　だったっけ　あなたたちは　何処へ？」
（俺もいるぞ、と言うモーモの声は無視）
「私たちは　これから　南の方に行くの、　銅の橋を渡った所にある高い塔に住む　魔道士を退治しにね」
「何っ、みなみに住む　高橋だって（違うぞ？）　その魔女は　ウッチーの森を
元通りにしてくれるかなあ」
「それっ、マジ？」
「マジすか学園」
「さあな、でも　精一杯頼めば何とかしてくれるんじゃねーか」
「良いの　モーモそんなこと言って」
「ふん、さっき俺を無視した罰さ　良いじゃねーか　旅の仲間は多いほうが」
と言ってウインクしたので、3人は　先を歩き始めたのだった。

？　豚のマージ（後書き）

3人は夢の森（石ノ森なら知ってるぞー変身！）で夢の虜になってしまいます。

?夢の森の誘惑（前書き）

ナミ、マージ、モーモの3人は　ウッチーの国と由依の国との国境線にある
夢の森で　奇妙な3つ首河童によって眠りへと誘われます。

?夢の森の誘惑

（4）夢の森の誘惑
ナミ達は赤い道をまっすぐに進んでいた　すると何処からともなく
素敵な音楽が聞こえてきました。
・・リン・リン・りりん・　りん・り・りり・りりん♪（古っ？）
「あら何かしら　あの時代遅れ的な　メロディーは♪」
「ほんとだ　なんとなく懐かしさを誘う曲だ
　これは　もしドラのテーマーだね（違うぞ？）
ナミと　マージはそう言うと　赤い道を反れ　フラフラ　っと
森のほうへ行こうとした
「いっ、いかん　こいつは催眠音波だ、2人とも耳をふさげ」
大声でそう叫んだ　モーモでしたが　メロディーは耳を突き抜け
心の中に響いてくるのだった。
「だっ、駄目だ　制止できない」
3人は　自分たちの意志とは別に、音波に誘われるまま　歩いて行
った
そして夢の森の中で　音楽が止まり　意識が戻った
「ここは　何処よ」
「僕しってるじょ、ここは夢の森と言うんだじょ」
「何っ石ノ森だって、変身するのか？」
「違うじょ、ここは　ウッチーの国と隣の由依の国との
国境にある森だじょ、ぼくも来るのは初めてなのんだけどにゃ」
「物語では大抵　こう言う所で　迷うのよね」
しかし　ナミの心配に反して、森は　思ったより小さく
直ぐ向こうが見渡せるのだった
「・・・なーんでこんなとこにナミ達、呼び出された訳？」
「さあな」
『わっはっはっはっはっ』

そこに　赤・緑・黄（信号機かよ）と　３つの顔を持つ　河童が現れた
「あたいは　ヨヨ7人衆のひとり　マリン・バロスだ」
「なーにあの　変な人　マージの知り合い」
「違うじょ、あんな奴　僕も　会うの初めてだじょ」
「マリン・バロスって言うからには　やっぱり石ノ森じゃー無いの（違うって？）
しかし　マリン・バロスと名乗った河童（夢魔）は
「この森に勝手に入った者は　皆あたいの歌を聴く決まりなのさ」
と言い　歌い始めた
（あれっ、呼び寄せたんじゃー無かったっけ（・・？　）
『ルールールルルー・ラーラーラーラー♪』
「何なんだ　このガンガン響く　音楽は」
「ヘビロテってこんな感じだったっけ？」
「どうでもいいけど、頭が割れそうだじょ」
『うあああああ』
ナミ達は河童の放つ害音に頭を押さえ　遂には『バタッ』と倒れこんでしまった
マリン・バロスは　木に飛び上がり
「良い夢見ろよ　アバヨっ！（どっかで聞いたような）
と３人を見続けていたのだった。

?夢の森の誘惑（後書き）

何処かの山の中で大勢の人たちが何かを　探していた
ナミが見た、夢とは?

？　ナミと妹（前書き）

夢魔に　誘われて　ナミが見た夢は
愛に生きた戦士の夢だった。

？　ナミと妹

そこは何処かの惑星だった　大いなる善と悪が果てしない宇宙で激突していた
「ふふふーラマォダよ、これで勝ったつもりか？私はいつか蘇る
その時産まれてくるおまえの子は、父である私と戦うことになるのだぞ
それでもよいのか？」と問う軍神に　少女は「それがその子の運命ならば」と応えていた
戦士らしき女性は　愛するものと　居る　事を願ったのだ
「あれは誰？　とても懐かしい感じがするのは　どうして？」
ナミは　自分自身に問いかけた　そして　男女は互いに抱き合ったまま
巨大な天体（冥王星）の重力に引きこまれていった
『～ラマォダ～』『～ラウドネスさま～』
次にナミが見たのは　見覚えがある山で　おおぜいの人達が　何かを探す光景だった
「おかしいのう、ここら辺に落ちてから　まだ1時間と経っとらんのに見つからぬとは」
「ヨーバ様、俺たちはもう少し　向こうを探してみます」
と　言う声も聞こえてきたのだった
その光景に　ナミは何か感じるものがあったのですが、それが何なのかは
よく分からなかった
その次の光景は　お馴染みのルイーズ王宮で　父の親友であるツイヴ大臣と
誰かが話している場面でした
「あの娘さえいなければ　我が子　ノアを王位につけられるものを、いっその事

暗殺をと思い　何度か毒を仕込んだ　だが　何故だかあの娘には
効果が無いのじゃ」
そう話す女性らしき者の　顔は見えませんでしたが　ナミにはそれ
が　誰なのか
よく分かっていました
「知らなかった　かあ（継母）さんが　そんなに私を　憎んでいた
なんて・・」
ナミは　涙が止まりませんでした。
場面はいつしか　ノアが3歳の頃2人でよく遊んだ
アッカンベの森（ルイーズ王宮の後ろにある）に移っていた
「ねえ、おねえたん　これから何して遊ぼうか」
「そうね　じゃーかくれんぼでもしようか」
「わーいヤッタネ、かくれんぼだーおねえたんと　かんれんぼだ」
そう言って　幼い女の子は走り出そうとした
「ノア」
「なあにおねえたん?」
「ノアはこの国の事　好き?」
「ううん　大好きだな　かあたんも　とおたんも　フデーロ兄たんも
そして　そして　ねえたんや　国中の人たち　みんな　み〜んな大
好き」
少女は　そう言って笑った
その言葉を聞いた　ナミは
（そう　よかった　ルイーズ家を継ぐのが　ノアで）
小さくそう呟くと
「ノア、向こうのアッカンベの像のところまで　おねえちゃんと競
争だよ、いいね」
「うん、お姉たんには負けないんだから」
そう言って2人は駆けて行ったのだった。

？　ナミと妹（後書き）

伝令　モーモが見た夢はむかし　フデーロと行った
巨人の国「デス・ファィナ」での出来事だった。

?理想郷『たかみな』（前書き）

モーモは夢の中で　師匠・アルモァの使いで
親友フデーロと共に訪れた
無空海の事　を思い出していた

?理想郷『たかみな』

モーモとフデーロは　アルモァの使いで　ネギに会う為、スカイ・ブーン（雲の乗り物）
に乗って無空海（アドロス）を目指していた
「何か見えてきたぜ　フデーロ　あれじゃないか」
「うん　間違いないっだろ　あそこに突っ込むぞ」
2人は一点だけ薄れた奇妙な空間に突入した
そして　広い草原に降り立った、だがそこには人っ子一人
動物一匹居ない世界だった。
「なんだ　この世界は　まるで　完全な廃墟じゃないか　フデーロ」
「でもこの様子ではかなり高度な　科学力を持っていたようだよ」
埋もれた壁には　人間たちがＲＩＶＥＲと書かれた戦艦に乗って
巨神たちと戦う模様が一面に描かれていた。
「フデーロ　この壁画は　まるで戦争があったみたいじゃないか？」
《そのとおりだ、ここは巨神たちとの戦争によってすでに死滅した
世界なのだ」
と言う声が聞こえてきた
「あなたは誰ですか」フデーロの問いかけにその者は答えた
《私の名は　ネギ　総神（そうし）一族の末裔だ
「そっ、総神一族って」
《お前たち人間が存在する以前に栄えていた者たちだ
彼ら総神たちは自らのイマジネーションを具象化出来る力を持っていた
そしてその力を使って　理想郷『ａＮａｎ』を作りあえた
だがその世界は　互いの対立を呼び、結果として『ａＮａｎ』は滅亡した
そしてわれらは新たなる世界を求めて、母船アスダルドで旅を続けた

その内の誰かが雲の中に隠されたこの世界を発見したのじゃ
「それは凄い話ですね」
《ネギはフデーロの問いかけには答えず、話を進めた
しかしその世界はクラゲのようにまだ何もなかったのだ
そこで総神たちは『キモト・サヤの命(みこと)』と『ノブヒコヤの命』の
2人をそこに残し　他は引き続き　旅を続けることにした
キモト・サヤの命は　アンモナ（トウモロコシ）に光と水とを混ぜ合わせ
フライナと言う人間や　ゴーディラスと言う獣たちを作って行った
フライナの指導者イブナは　国をＡ　Ｋ　Ｂ　など２６の州に分け
それぞれ　総選挙によって長を定めていった
そして誕生したのが《たかみな》と言う理想郷であった》

?理想郷『たかみな』（後書き）

キモト・サヤの命（みこと）によって築かれた　理想郷　たかみな
であったが　ノブヒコヤの命は　闇の力を用いて
ローデン・ハイム（麗鬼神）達を生み出し　世界の滅亡を図る
キモト・サヤの命はそれを抑えるため　赤き魔人『ディーゲール』を
呼び出す　時空大戦！の始まりであった。

？　赤き魔神ディーゲール（前書き）

ローデン・ハイムの巨神たちによって危機に陥った
理想郷　たかみな
そして　その前に現れた赤き魔神とは？

？　赤き魔神ディーゲール

《やがて人間たちは数々の宗教を生み出していった
それがカリストによって作られた　スリーブ神話だった
それによるとこの宇宙は天の神ノーア、地の神ス・マ―ラ　海の神
ブ・ジルドの3神によって作られた巨大なクジラの上にあるのだと
言う
彼らノー・スリーブスの3神は天空に掛けられた『アッカンベ』と
言う橋を
渡った所にあるアート・ランタスに住んでいると言う
だがそれらの神話はどれも後半には　アーマンゼヨと言う巨神族と
人間たちが操る　ディバと言う鉄の船との戦いで終わっておるのじ
ゃ」
「それはどうして何ですが？」
「それは本当に起こった事だからじゃよ、フデーロ」
「本当に起こっただって？」
フデーロとモーモは同時に声を上げた
だが　ネギは動じず　再び話し始めた。
「キモト・サヤの命によって、たかみなは　繁栄していった
しかしある時　ノブヒコヤの命はツクトミ（闇の月。暗黒神）に心
を奪われ
闇獣（ガーロス・ピラニアに似た怪物）を生み出し、『たかみな』
を死の世界に
変えようとしたのだ　やむなくキモト・サヤの命は『サナギの剣』
（さなぎかい？）
でその精器を切り落とした　そのとき　ノブヒコヤの精子がス・マ
―ラ（大地）
に染み込みローデン・ハイム（麗鬼神）の巨神達が生まれて行った
ス・マ―ラ（大地）の子でもあるローデン・ハイムたちは　その巨

大な胸と
無限の力によって世界に邪悪を撒き散らし　理想郷たかみなを　暗黒の星に変えていった
困った　キモト・サヤの命は総神の長　始(し)に判断を委ねた
彼は「創造は　破壊からしか生まれない」とたかみなの崩壊を提言した
そしてその精神から　赤き魔神『ディゲール』を誕生させたのだった。

？　赤き魔神ディーゲール（後書き）

フデーロ達が見たのは
ローデン・ハイムの巨神たちが、赤き魔神ディーゲールと戦う
時空大戦！のイメージだった。

?闇の力（前書き）

巨神たちを倒すためディケールは　１０人の戦士達を呼び寄せた。

?闇の力

《それは最初(モーム)Mの州に住む巫女、夏美が
ローデンハイム・の巨神たちに操られた人間たちが
光りの鳥や鉄の船を操って
赤き魔神ディゲールと戦うと言う予知夢から始まった。
やがてその夢は現実になり　各地に巨神たちが出現する
彼らは　光の鳥　メイヴィール　鉄の船ディーバーを操り巨神たちに戦いを挑んだ
しかし巨神たちは　邪悪の炎を吐きだし人間たちを　邪悪に変えていった
このままでは『たかみな』が滅びてしまう　総神の長(し)始はその精神から
赤き魔人（究極の闇）ディーゲールの封印を解いた　この世界共々
　巨神たちを
滅ぼすために・・だが無限の力を持つ彼らローデン・ハイムたちとの戦いは
数千年も続き　永久に終わる事が無いと思われた時
ディゲールの１０の玉（宝珠）が輝いた　そして
クガの世界から　ギリ　アンノの世界からアギ　ミラスの世界からリュキ
オルフィの世界からケント　ブレの世界からレード　魔化の世界からヒギ
天道の世界からヒロ　イマジの世界からタケル　紅の世界からキバる
そしてGの世界からゴロなどを　呼び集めたのだ
ディゲールは宝珠の力(マックス・ストーン)を全開にして
巨神たちに放出した　すると１１の力が１つに合わさり
それが究極の闇となって　ノブヒコヤの命とローデン・ハイムたちを
粉砕していった（同時に世界も歪み始まる?）

こうして　彼らの巨大な精神エネルギーは
デス・マー二（地獄の王）の支配する世界へ送られたと言う訳じゃ》
フデーロ達が見たのはここまでだった
「良かった　巨神　達が滅んで」
《フデーロよ　本当に　そう思うか》
「ちっ違うんですか？」
《ディゲールと彼が呼び寄せた　魔神たちは元々ショーカル・ネーバー（暗黒神）
によって作られた者たちじゃ、そのままにしておけば　ディゲールの闇の力は
全ての世界を滅ぼしてしまう　その時キモト・サヤの命は言った
「私が鍵になります、世界の崩壊を防ぐために、この世界を繋ぎとめる鍵になります」
その言葉を聞いた　総神たちは自らの命で編んだ「タケシの力」（封印玉）を彼女に与えたのじゃ》
「すると総神たちは？　キモト・サヤの命は？」
《今も柱となって　この巨神達の肉体とディゲールの邪悪な精神を繋ぎとめておる
そしてわしはそれを永久に管理してる番人と言う訳じゃよ
フデーロと言ったな　デルクに帰ったら彼（アルモア）に宜しく行っといてくれ
では、さらばじゃ勇者たち》
そう言ってネギは　去って行った　だが　モーモとフデーロは知っていた
いつか　この世界の封印が解ける日が来る事を・・・
悪魔騎士ディーゲールと１０人魔神たちが目覚めるであろう事をはたして　その時世界は・・・
「フデーロ　それはいつ頃だろう？」
「さあね、どっちにしろ　数千万年も先だろう　そう心配することはないさ（・・？」
「そう　だね　ラマォダもいるし（勝てるとは思えないけど？）

そう言って2人は再びスカイ・ブーン（雲の乗り物）に乗り『たかみな』を後にしたのだった。

～私は世界の崩壊を防ぐため　封印の鍵になります～

♪【見上げる星　それぞれの歴史が輝いて、星座のよう　線で結ぶ瞬間
　始まるＬｅｇｅｎｄ　オーロラ　揺らめく時空超えて　飛び込む迷走するＰａｒａｌｌｅｌ　Ｗｏｒｌｄ
Ｏｎ　ｔｈｅ　ｒｏａｄ　誰も旅の途中　本当の自分自身　出会うため
　新しい夜明けへと続く　道に変わるのだろう
　目撃せよ　Ｊｏｕｒｎｅｙ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ｔｈｅ　Ｄｅｃａｄｅ】♪

?闇の力（後書き）

仔豚のマージが見た夢は　亡くなった3兄弟で食べたスカ・モーク（焼き肉風芋）を頬張る夢だった。

？　らぶたん（前書き）

マージは今は絶滅した植物　イチョウを原料とした
ムシューパイを売り歩く、らぶたん　と言うリスの少女と出会った。

？　らぶたん

「あれっ、ここは何処かにゃぼくは何してたんだっけ？」
仔豚のマージは何処かの小屋（家）で目を覚ました
「おまえは何を言ってる、だガヤ　美味しい物が
手に入ったからと言っておめえが飛びこんで来たんやない　ガヤ」
と説明する一つ上の兄　モォス
「・・そっそうだった　だんだん思い出したぞ」
マージは今朝の出来事を思い出したのだった
回想
「あーあ、何かいい事ないかにゃ」
「問えば　ナンナ」
「たとえば・・そう　たとえば　小さい頃　＊三人でよく食べた
ムシューパイ
（この地方伝統の油芋）を腹一杯食べられたら　幸せだろうにゃ」
「またそれナン、マージは何時も食い物の話になる　ナンナ」
「仕方ないだじょ、食いものは僕の唯一の趣味なんだから
でも　最近は　原料が手に入らないんだよな　これが」
と　文句を言いながら　キュウカン・モグラの　ナンナ
と一緒に　豚の小道を散歩していました　そこに
「えー、ムシューパイは要りませんか？原料１００パーセントの
美味しいムシューパイはいかがですか？」
と　頭の上のカゴに沢山のムシューパイを乗せた売り子が、向こう
からやってきました。
「なにっ、１００パーセントのムシューパイだって？」
マージ達は足を止めリスの少女に事情を尋ねた
「ムシューパイそがあるってそれは　本当」
「嘘だナン？ムシューパイの原料のイチョウはとっくに滅んだって
おいら父ちゃんに聞いてるナン」

と　2人は　リスの女の子に詰め寄った
「あたいは　らぶたんと言って　売り子をやってるんだけど」
「売り子って何　ナン」
「えーとね、大きな問屋さんから　いろいろな物を直接仕入れて売り歩くんだよ
でも　一〇〇%のムシューパイを手に入れられるのはあたいだけだよ」
　そう言ってリスのらぶたんは笑った
三人は途中の道まで一緒に歩いた
「へ〜するってえと　次のミスウッチー（各村では毎年イメージガール（村長補佐）を決める
　総選挙が開かれる）にキミも出るナンナ」
「すごいじゃないぼくたちも　応援してるので　頑張るんだジョ（あしたのジョー）
マージが買ったカゴには「一〇〇%のムシューパイを美味しく召し上がりください」
と言うメッセージカードと握手権（投票権）とが入っていたのだった。
「じゃー　ぼくの家は直ぐそこだから　残念だけどここまでだじょ」
「あたいは　この先の丘にある『優子の館』に行くので」
「じゃー　ミス・ウッチー楽しみにしてるナン」
と　言う訳でらぶたんと『猿の腰砕け（三か所に分かれた道にある岩）』でわかれたのでした。

？　らぶたん（後書き）

＊このウッチーの国は　元々は天人たちの　動物の捨て場だった
それを気のどくに思った４８天（天人達を管理する天使たち、全部で４８人いると言うが実際はそれ以上と言う噂も）の一人ウッチーが　動物たちに
言葉や人間のように手や足を自由に使えるようにした
と言う神話があるので、一匹ではなく一人、二人と数えるのです。

?オズナーマント物語（前書き）

クライアンと言う天界人達たちは　汚染物質や　ペットを下界（人間界）に棄てていた。

?オズナーマント物語

ウッチーの国が動物たちの楽園になる遥か昔、この世界の上空には
『ハーレスト』と呼ばれる
世界があって　そこにはクライアンと言う天界人たちが　住んでいました。
彼らは投票によって代表（総主＝任期１００年・延長もある）を決めていた
のだが　９９９代目の総主のレディ・ーボボの時代に革命がおこり
ハーレストを飛躍的に発展していったのだが
一つだけ問題があった、　科学の急激な発達は多くの汚染物資の増加を生んだ
そのため　彼らクライアン人達は　地上にあるオーズナと言う下界に
天界の汚染物質を棄てることにしたのだった（違法で）
「世界は我らの為にある、
地上人など　どうでもよいと言うのが　彼ら　クライアン達のいい分だった
それぱかりではない　クライアン達は飼えなくなった動物等もオズナーに棄てていった
そのため地上は天界人が棄てていった汚染物質によって　だんだん汚れていったのだった「
しかし　この違法行為の数々が　遂に大天使ローザの目に止まり
多くのクライアン達は処分された　そして　４８天（４８の天使たち）を呼び出し
「オズナーには新たな世界を作りなさい」と命じた
天使たちはオズナーの国をＡ～Ｚまでの２６の州に分け
その統治者としてドロリィーを残していった
一方、Ｕの国を任せれた天使ウッチーは　そこに捨てられていた
動物たちに人間同様　手と足を自由に使えるようにして　いろいろ

な知識も与えていった
そして『オズナー・マント』は　動物をはじめとした奇妙な生き物たちの
楽園とし生まれ変わったのであった。
なお　そのご傲慢だった　クライアン達は滅んだらしい。（やれやれ）

?オズナーマント物語（後書き）

オズナー・マントの主な国（州）
Ａーあっちゃんの国　Ｔーたかみの国　Ｓーさやかの国
Ｒーれーなの国　Ｍーみーちゃんの国など

?3兄弟（前書き）

売り子のらぶたんから買った　ムシューパイ（油芋）を
手に入れた仔豚のマージは　2人の兄弟たちと
ムシューパイをたべていた。

?3兄弟

ウッチーの国の外れには　赤・青・黄と3色の家があった
とても香りがよい黄色い藁の家に住む2つ上の兄のファニー・トント＝ドロリゲス
高級感が漂う赤い樫の木で出来た家に住む一つ上の兄　モォス・トント＝ドロリゲス
そして、丈夫な青いブリキの家に住むマージー・トント＝ドロリゲスの3兄弟であった
父親は大工をしていたらしいのだが、3人がまだ小さい時にどちらも病気で亡くなったようだ
（母はその前に亡くなっていたらしい）
その時父は遺言で「一匹の豚なら折れやすい？だが3匹なら折れる事は無いだろう（・・？　」
と言う格言を残したのだと言う、それ以来3兄弟は力を合わせて生きてきました
「おーい　モォス、良い物が手に入ったじょ」
そう言ってマージは　樫の木の家に入って行った
戻る
「おいっマージ、おめえはさっきから何考えているんだ」
「そうだった　そうだった、これを見せに来たんだ」
マージはらぶたんから買ったカゴを開けた
「こりゃーおめえ、父ちゃんと母ちゃんがまだ生きてた頃3人で食べていた
ムシューパイじゃねーか」
「ほんとだ、懐かしーいかなカナ」
と　美味しいニオイに誘われた　ファニーも飛びこんできました
3人はレゲーダー（カセット＝古っ）でウッチーの国で流行ってる
仔豚ソング

を聞きながらムシューパイを食べた
♪仔豚の歌が聞こえてくるよ　ラッタッタ・ラッタッタ　あっちゃんホイっ！♪

「モグモグモグ、これは　美味しい　でもおめえ　よく手に入ったな」
「ほんと　ほんと　原料が無くなって　等しい　かな　カナ」
「とるべつ（特別）なるーろ（ルート）で手に入れら（た）んらった（だって）
2人の質問にムシューパイを口一敗頬張りながら答えたマージでありましたが
「あれっ、兄さんたち2人とも　死んだんじゃーなかったっけ？」
「・・おいおい　おみゃーは何を言い出すがや（名古屋人か）
「そうだよ、変な事言うなかな　カナ」
「・ムツ、僕は突然　何かの義務に　目覚めたじょーォ」
～ムン・ムン・ムン～（（＋＿＋））
その時　辺り一面に不気味なニオイが漂ってきました。

?3兄弟（後書き）

マージの一撃で　夢魔の誘惑から覚めたナミたちでしたが
地雷橋と言う物騒な橋の前では『スフィン・ガス』と言う
パンダとライオンの怪物が人々に　なぞなぞを出していました。

？？夢からの目覚め（前書き）

マージの猛烈なおならのおかげで　ナミ達は
夢魔の　永遠の夢　から目覚める

??夢からの目覚め

「・ムツ、僕は突然　何かの義務に　目覚めたじょーぉ」
～ムン・ムン・ムン～（（＋＝＋））
その時　辺り一面に不気味なニオイが漂ってきました。
『ドカーン』
　その物すごい音と猛烈なにおいに、ナミとモーモは堪らず目を覚ました
「なっ　何よこの猛烈な臭いは？」
「・・くっ苦しー（（＋＝＋））こっ殺す気か）
「ごめん、兄貴達と食べたムシューパイを食べていた・・と」
なみ、モーモ、マージの3人は夢の森で目をさました
その瞬間　みんなは今までの出来事が全て夢あった事に気づいた
「しかし、物凄いおならね」
「ほんとだぜ、そんなスゲー武器持ってんなら　ディゲル（狼）に追いかけられた時、何で使わなかったんだよ」
「そうだよ、ナミには無理だけどさ」
「そう都合よく出ないの、それにこれが　武器になるの？」
そう問いかけるマージに　ナミとモーモは
「なる　なる」
と頷くのだった。
「あれっ　変なのが　倒れているじょ」
そこには　木の上で3人の様子を観ていた夢魔　マリン・バロスが
『ポイ・ポ・ポ・ピィ・ピィ・ピィッ～へろへろりん』
とおならの勢いで落下し憔悴しきっていた
「さーすが、マージのおなら　尊敬するぜ」
「そっそうかにゃー、僕は普通だと思うけどにゃ？」
と　必死で抗議するマージの姿が可笑しくて　3人は
『ハッハッハッハッハッハ』と笑ったのでした。

「じゃー　元の道に戻ろうか」
3人は再び赤い道を歩き始めた　その後ろから小さなネズミが
ナミの肩に止まった、「あんた誰?」とナミは尋ねた
その生き物は「あっしは　あっちゃんの国（A州）からやってきた
はぐれ芸人のゴンパチと言うケチな野郎でヤンすが
旅のお供に加えていただきたい、と思い　皆様の後を追ってまいり
やした」
とあいさつした
「ふーん、ネズゴンパチっねえ　いいんじゃねーか　十勇士みたい
でさ」
と言う　モーモの一言でゴンパチは旅に加わることになった
だが　地雷橋と言う　物騒な橋の前には『この橋渡るべからず』と
書かれた看板を持った
奇妙な生き物がいたのだった。（一休さんかな?＝違うぞ）

??夢からの目覚め（後書き）

なぞなぞを出し　答えられなければ　食ってしまうと言う
怪物　スフィン・ガスにナミ達は　いったいどう挑む?

??ベロンちょ（前書き）

地雷橋の手前に陣取る　ベロンちょ（通称）と呼ばれる怪物に
ナミ達は　打つ手があるのか？

??ベロンちょ

ナミ達は　麻里子の鍾乳洞に渡るため
L州とM州の国境にかかった地雷橋に来ていた。
だが　その前にはスフィンガス言う　上半身はパンダ下半身はライオンと言う
小型の牛鬼（宇和島に伝わる牛の体と鬼の顔を持った怪物）位の怪物が
『この橋渡るべからず』と言うプラカードを持って陣取っていました
「あれはー体なんかしら」
「さあ、でも真ん中渡りゃーいいんだろそのくらい知ってるぞ」
「そうよね」
そう言って　進もうとした3人を旅に加わったばかりのゴンパチが止めた
「ちょっと待つでヤンす、知らないんでヤンすか　あいつはスフィンガスと言って
旅人になぞなぞをフッかけては答えられなかったものを　胴体の大きな口でベロンちょ
と食べてしまう怪物なんでヤンす」
「そういやあぼくも　そういう噂を　どっかで聞いた気がするじょ」
ナミ達はしばらく隠れて様子を見る事にした　するとそこに　3つ目の飛脚らしき
旅人が通ろうとした
「まった、旅人よ　ここを通りたければ　俺様が出す問題を解いていけ」
「どっ　どんな問題です」
「では　問題　月　火星　水星　この3つの惑星の総質量は？」
「・・・そんなこと聞かれても俺は　科学者じゃないしぃ」
「時間切れ　ではさよなら」

『ベロンちょ』
スフィンガスは大きな口で旅人を一口に食べてしまった
それを隠れて見ていた　ナミ達は
『ヒエー』
とすっとんきょうな声をあげたのだった。

??ベロンちょ（後書き）

ランダムに出される問題を解く代表者となった
ナミは　問題の傾向を探るため　しばらく様子を
見ることにしたのだった。

??.ベロンちょと対決前半（前書き）

ナミは　スフィンガスの問題に答える代表者に選ばれた。

??ベロンちょと対決前半

ナミ達は橋の前の道でベロンちょ退治を話し合った。
「どう言う問題が出るか分からないので、ここは知識が豊富なモーモが代表で答えるって言うのはどうかしら?」
「そりゃー俺は　神様お使いで　あちこち行ってるけど所詮鷹だし、それよりマージが意外といけるんじゃねえか?」
「それマジ、僕は頭良くないし　ネズこうのほうが良いと思うけど」
「やはりそう来たでヤンすか?　そりゃーあっしたち　ネズミ族は他の皆（他の動物）とは違って勉強してるヤンすで　大抵のことにはこたえられるでやすが
　ただ　宇宙とかには余り詳しくないんでヤンすよ」
と言う事で　王室学等を学んだナミが適任だと言う事になった
でも、問題の傾向を探るため　旅人には　悪いが　しばらく様子を見ることにしたのだった。
地雷橋には　猫の行商人が荷物を担いで通りかかった
「まてまて、この橋を通るには　俺様の問題を解いてもらおう」
「どっ、どんな問題です?」
「では今から出す問題に　直ぐに答えよ　では問題
＊1イースター島の石像は　何故みんな、同じ方向を向いている」
「・・それは・・たまたまでしょう」
猫の行商人は少し考えてからそう答えた
「残念　時間切れ　ハイさようなら」
スフィンガスは胴体の大きな口で『ベロンちょ』と行商人を平らげてしまった
その次に通りかかったのは　牛の夫婦でした
「まて　そこの牛、この橋を通るには　俺様の問題を解いてもらおう」

「どっ　どんな問題でゲス」
「今から出す問題に　直ぐに答えよ　では問題　あっちゃんの家族は何人だ？」
「・・・あのう　大変申し上げにくいのですが、あなた様が言われる　あっちゃんとは
どの　あっちゃんなんで（・・？　たとえば隣にいる妻は　あつみ
と言い　娘もあきな
と言う　名前なので　それも　あっちゃんでは？」
牛はしばらく考えてそう答えたのだった
でもスフィガスは「あっちゃんといえば　あっちゃんだ　いちばん有名なのに決まっとるがや」
と答えた　牛は考えた挙句
「この世界（不思議界）で有名なあっちゃんと言えば　ひょっとしてアスタヴィス（虹の妖精）様ですか、それとも　アフロディナ（オルディナス＊2が人間に産ませた子、自由の女神？）かな」
と答えた
でもスフィンガスは「ちがーう　他の世界もを含めたあっちゃんだがや」
と怒鳴り「時間切れヤガ」と言って　牛の夫婦をベロンちょと平らげてしまった
（その問題わかるの　この世界では　多分　＊2ミーナだけだと思う？）
このやり取りを隠れて聞いていた　ナミは　何か思いつきかけたのだが
まだ　はっきりとしなかったのだった。

??ベロンちょと対決前半（後書き）

＊１　イースター島の最初の王ホツ・マツアは故郷の島が海に沈んだため
７人の王子と共に　他の国からイースター島へ流れ着いたらしい
王は
子供たちを思って　モアイの像を作らせ　沈んだ故郷の方角を向いている
＊２　神は大抵　雌雄同体（両生類）である。
＊３　普通の妖精や精霊たちは他の世界（異次元を含む）には行かない
使い鳥のモーモは別として　でも彼は芸能界にはあまり関心は無いようだ

??.ベロンちょと対決　後半（前書き）

ナミとスフィン・ガスとの対決です。

??ベロンちょと対決　後半

翌日　ナミ達は地雷橋に向った
すると「待て　この橋を通るには俺様の出す問題に答えてもらおう
と　いつものように怪物が現れたので　ナミは
「分かっているわ　私が皆を代表して答えるから」
と進み出た。
「それは良い度胸だ、では娘　問題を出す　今から言う事に　直ぐに答える事　良いな」
「分かったから、早く問題を出しなさい」
「ふふん　強気なのは今のうちだがや、では問題　俺が道を歩く時どちらの足を先に出すが　答えるがや」
「そんなの知らないわよ」
ナミはスフィン・ガスが問題を言い終わる前に　そう答えた
「おいおい、ナミ　それはねーンじゃねーか？」
と　心配したモーモでいたが
「なっ　何っ　わからんだと～ォ」
『お～おおお』
怪物はそう唸ると　溶けて行ったのだった。
「???これはどうした事だじょ」
「???ど　ゆこ　と　でヤンす」
と全員キツネにつままれた感じだったので、仕方なくナミは　説明した
「つまり　怪物は　答えはどうでもよかったんじゃーないかな？」
「??よかったの！」
「だから　難しい問題を出して　旅人が考えてる間に　食ってしまうと言う　作戦だったのよ
でも　私が　言われた通り　即答（政界は否かは別）したものだから」

「なーるほど、それで　負けたヤンすね」
「何事も考えすぐるのは　良くないって　事だよね」
「マージはんは　何も考えてないでヤンすよ」
こうしてナミの活躍で　スフィン・ガスは　消え
ナミ達は　唄舟で　アッカン瑚を渡ったのだった。
目指す　魔道士の住処までもう少しだった。

??ベロンちょと対決　後半（後書き）

『みなみ』の方角にある　アッカンベ『橋』を渡った『高』い塔の上には、ヨヨと言う魔道士が住んでいた

１００部記念『ノースリブ神話』（前書き）

１６世紀の末　インドの寺院に住む　お坊さん玄奘が語った　鷹魅那の悲劇とは？

１００部記念『ノースリブ神話』

１６世紀の末　インドの寺院に住む女性の　お坊さん　玄奘
（夏目雅子カナ？）
はある日、若い修行僧にいった。
「おまえたちの民族はかつて優れた精神を持っていた、だがいつしか傲慢になり
神々達を遠ざけていき、その為に国は滅んで行ったのだ」
と　語った　それは大いなる光をもった火の鳥と黒き翼を広げた船が巨神達と戦うイメージであったと言う。

《この宇宙は大いなる闇と静けさに包まれていた、そこにモーゼットと言う仙人が現れ３つの神を生みだした
天を司るノーア　大地を司るス・マーラ　そして海を司るブ・ジルドの３神であった
モーゼットは天海から大きなクジラを呼び寄せ　その上に地上世界を作った　ノーアは木の実をこの葉を混合し動物たちを作った
ス・マーラは大地と風とを合成し自然を作った
そして最後にブ・ジルドが土人形と飴を練り合わせてクライアン（人間）を作って行ったのだった。
こうして出来上がった地上世界は鷹魅那（たかみな）と名付けられたのだった。
彼らノー・スリーブスの神々たちはアトランタスと言う天空の城に住み
アッカンベと言う橋をかけ天空と下界とを繋いだ
最初の世代の人間達は黄色い種族と呼ばれ『アビタス』と言う若者がリーダーとなった
彼は次に生まれた黒い種族の女性イグナとの間に
沢山の子を儲け、そして彼らによって　アキハラ文明が生まれ

三華国や世那国と行った国を沢山作っていった
また彼らは高度な文明をもっていた
我々人間が存在しなかった超古代に彼らクライアンたちは
メイビィラスと言う火の鳥（戦闘機？）やディバーと言う鉄の船（宇宙船）などをすでに持っていたと言う
しかし　そんな科学の急激な発達は人々の慢心を生んで行き
最初は神々を敬っていた彼ら民族たちは次第に神を遠避けるようになっていったのだ
神々の王モーゼットは怒りノ―ア　ス・マーラ　ブ・ジルドノ3神をアトラントの中心の『呉空御殿』（ごくう）に集めたそして言った》
玄奘の話はここで終わっている、しかしのちにスリーブ神話の研究者スティブン・ウララ
氏が書いた著書『時空神話』によれば、神々が人間達に鉄槌を下す戦いが描かれている
それは三華の国の巫女なつみが友人である　世那国の王カドウヤの預言をしていた時だった
黒い衣服を着たなつみが三華の草原で
火の鳥　メイ・ヴィラスや鉄の船ディーバ等を駆使したクライアンたちが
赤き魔神ディーゲールと戦うと言う
『魔神大戦』の夢を見たことから始まる
　カドウヤ王は
「不気味な事を言う巫女め、さては世の国を乗っ取ろうとしているな」と
友人である　なつみを地下牢に幽閉した　やがて　王の精神は日に日に　異常を来していき
遂に　その精神から赤き魔神ディケールが誕生したと言う　そしてなつみの夢に通りに『魔神大戦』が起こる　のだが
ディーゲールの邪悪な精神は？の世界から仲間を呼び寄せ
その邪悪な力は空間をも歪め世界の崩壊を加速させていったと言う

しかし　スティブン・ウララ
「なつみの祈り（最後の希望）が聖なる（タケシ）力を呼び
その力がディケールの闇の力を滅ぼしたのだ」と書いた
『いつの時代も邪悪（欲望や誘惑）に打ち勝つのは希望だけである』
と書き足している。
《・・遥かなる昔、神によってその罪を許されたカドウヤは
ミカの国の王女ナツミとアキハバラの地で平和に暮らしたと言う。
》

１００部記念『ノースリブ神話』（後書き）

プラトンのアトランティス伝記　と僕が好きなディケイドと神話を合わせた　特別編です。

??塔の上のヨヨ（前書き）

アッカンベ橋を渡った　高い塔　それは
マーク天　と呼ばれる魔道士のすみかでした。

??塔の上のヨヨ

ナミ達が船で鍾乳洞を抜けるとそこはヨヨと言う　魔道士が支配するオズナーマンとの中心でした
ヨヨはアッカンベ橋を渡った　マーク―天と言う　高い塔の　上に住んでいました
「へーえ　この上に　魔道士が住んでいるのか」
と　ぶっきらぼうにモーモが言いました　しかし　塔の前には何十人もの
スイカ頭の兵士たちが並んでいます
「これは困ったじょ、どうすればいいんだろ」
その時　それを＊　ツバメともスズメとも見分けがつかない鳥が
『あっちゃん　ホー　あっちゃん　ホー　みーちゃん　チッチィ』
と囀りナミの肩に『ポトッ』と糞を落とし飛んで行った」
でもナミは「よッシャー、これで運がついたァ」（そうかにゃあ）
と言うと肩に乗せてある、ネズミをちらと見て「こそ　こそ　こそ」
っと　何やら耳打ちしました　すると　兵士たちの後ろに回ったネズこうが
スイカ頭を突っついたので、兵士たちは堪らず「たすけてくれやー」
と仕事をほっぽり出して逃げて行ってしまいました
「よし　今のうちに侵入だ　ゴー、じゃなくて　アッカンベー」
と言うモーモーの合図で全員　塔の階段を駆けあがりました
ちょうどそのころ『マーク―天』の中では　蒼いウサギ（ノリピーかな？）
を傍らに置いたヨヨが　炎象（像をネ・申すと言う器で４８時間煮込んだ酒）
を飲みながらルイクス攻略を考えていました。
「フフフ、妖精たちを殺して集めた　チ玉（妖精力）も既に＊３００？

（そんなもん、いくら集めても、大神には勝てないと思うけど？）
この力をもっと集めて不思議界全ての王となりそしてオルディナスなんか追放して
アタイガこの宇宙で1番の存在にナルノサホほほほほホ」と笑っていた。
薔薇の鎖（なつかしー）で縛られた蒼いウサギが魔道士をにらんでいた
『チンチロリン・ギッちょんちょん・アーブクたった　煮え立ったからーンからーンからーン』
と　フクロウの形をした時計が午後6時を告げていたのだった。

??塔の上のヨヨ（後書き）

＊このみなみ一体に住んでいる　鳥は　その　鳴き声から
アッチャン・ホイと言う名で呼ばれている
＊妖精や精霊たちはそれぞれ魂の中に　チ玉　と呼ばれる
成績を持っている　そもそも　その全ては大神オルディナス
が与えたものである。

???　魔道士と対決！（前書き）

マーク―天で遂にヨヨとナミの戦いが始まる。

??　魔道士と対決！

ナミ、モーモ、マージ、ネズこうの４人は遂にヨヨがいる部屋の入り口に着いた
「悪いけどあなたたちはここに待機してくれる」
皆のほうを向いてナミはきっぱりと言い放った、それは国の代表としての言葉だった
それをくみ取ったマージと　ネズこうは
「そっそうしていただければ僕も助かるじょ、魔道士っておっかなそうだし」
「さよう　でヤンす」と同意した
「でも、おいらは良いよね　ナミさん」
「もちろんだよ」
と言う訳で　ナミ一瞬だけ目を閉じ、そして扉を開けた
『バーン』
「誰だ今頃？トカゲの郵便屋でも来たか」
そのとき「ざーんねん、郵便屋さんじゃーぁなくってよヨおばさん」と鷹を連れたは少女が立っていた
「待っていたぞ・エンドラの娘よ」
「えんやらや（違うぞ？）・・・言っている意味がよく分らんけどとにかくルイーズ家の国王代理としてあなたを退治します　良いわよ　ネッ、お・ば・さ・ん」（とウインク）
「だまれーアタイはおばさんじゃ無―い」
怒った魔道士は小屋から、怪物ナメクジラナを呼んだ
『ィァ―ン・ヤア―ン』と言う　怪しげな鳴き声を放ちながら軟体系の怪物が出現
肩に乗ったモーモが「なーんだたった一体、だけかよ」と言ったら
　それに反応した
ヨヨが「ばかものォ　いつもはもっといるわい、今は食事中なんだ」

と答えた
「へーえぇ、意外とやさしいんだおばさんは？」
「だまれぃ私は　おばさんじゃなーい　それに、お前を殺すにはこの一体で十分だと思ったまでさ」
そう言うとナメクジラナの背に飛び乗り、像の鼻ような口で　ナミ達を吸いこみ始めた
「喰らえバキューム・ノース（まんまヤン）
『ゴワーン』『ゴゴゴゴ』
猛烈な吸引力でナミとモーモを飲み込もうとするナメクジラナ
「おっ　おいナミ　少しはお世辞を言ってやれよ」
「あっ　あのォ　おばさんじゃなくてお姉さん良く見ると可愛いよォ、あっちゃんみたいに・」
「フン、いまさら下手な世辞は　いらん」
「やっ　やっぱり」
『アレー』『助けてだジョー（あしたのじょー』
と扉の向こうで待機していた2人が先に吸い込まれた
ナミとモーモ（普段は少年の姿）は必至で柱にしがみついていましたが
それも限界に着かづいていた。
「ナミ　例の呪文だ」
「そうか、すっかり忘れてた」
ナミは「ヨナリナクサイチ」とアルモァに教わった呪文を叫んだ
すると　たちまちナメクジラナ事、ヨヨの体が縮みはじまたのであった。

???　魔道士と対決！（後書き）

小さくなった魔道士のその後と　ナミの物語の行方は」

??　ヨヨの追放！（前書き）

ナミの物語のフィナーレです。

??　ヨヨの追放！

「さっきからお城の中が騒がしいようだぜ兄弟」とスイカの兵士が言うと
相棒の兵士も「そう言えば、そうだなあ」と答え　他の兵士を呼びに行った
その頃部屋の中では
「おまえ、いったい何者だ」
ヨヨがそう言ったかと思うと見る見る内にその体が縮んでいった
「なんなのこれ　分かったアルモアちゃんね、でて来てよ」とヨヨが叫んだ時
雷鳴と共に白い衣服に身を纏った金髪の老紳士が現れた、妖精神アルモアである。
「我が兄じゃの不詳の弟子魔導師ヨヨよ、まったくお前は　何度懲らしめても懲りない奴じゃ
したがって　今回は異なる世界で一からやり直すが良い」
そう言って　３センチ位の大きさとなったヨヨを風に乗せて人間界に飛ばしたのであった。
魔導師は「この体だけでも元に戻してよもぉーアルモアちゃんのいじわるぅ」と言ったのが
不思議界でのヨヨの最後の言葉で　あったと言う。
　ナミは「さようならおばさん」と手を振った、その時さっきまで縛られていた
蒼いウサギが　元の人間の姿（精霊ですが）に戻っていたのだった。
「ウサギさん　あなた　人間だったの？」
「いえっ　ナミさん　私は　あなたと　同じく　精霊です、名はドロリィと言います」
とあいさつした。
「あたしが精霊なの？それは置いといて（置いとくのかい（・・？

）ドロリィって言うと
確かオズナ・ーマントの正当な支配者ね」
「そのとおりです　幼い頃私は魔道士につかまって蒼いウサギに変えられていたのです
でも　ナミさん　あなた方のおかげで無事に元に戻る事が出来ました」
「よっよかったでやんすね」
と　ナメクジラナから吐きだされたネズこうが言った」
「あのう僕、ドロリィさんに頼みがあるんだジョ」
今度は恐る恐る、マージが聞いた
「ハイハイ、これですね」と　ポッケからあっちゃんのカードをマージに渡す
「ありがとう　これ欲しかった・・・て　違うじょ、マージの村を元に戻してほしいんだジョ」
と　言って「これはこれで　貰っておこう（貰うんだ?）と懐にしまった
「冗談ですよ、それならばもう　元通りになっていますよ」
とドロリィは笑顔で答えた
「あっしも何かご褒美が」ほしいでヤンす」とドロリィの前に進み出たネズこうが懇願した
「もちろんそれも　考えています　そうですね　料理係と言うのはどうでしょう?
「それで良いでヤンす、あっしは　こう見えても料理は得意でヤンすから
と自慢した（この話は何処かで聞いたような?）
その時『ゴロ・ゴロ・ゴロ・ゴロ・ゴロ』
と　あっけぱなしのドアからカボチャが転がってきた
「これはどこから?」
「実はナミさん　ヨヨが使っていた兵士は、全部本物のカボチャだったんです」

「なーるへソ、どおりでさっき突っついた時　美味しかったヤンすよ」
それでは最後にとっておきの魔法をお目にかけましょう」
そう言ってドロリィは　赤いニンジンバトンを『ベトヨエイ・レーソ』
と振った　すると城の中が『グルグルまわり始めナミ達は意識を失った
どれ位経ったか　ナミは　自分の部屋で　気がついた　そして立ち上がって窓を見ると
部屋が再び飛んでいるではないか
「わァお、私また飛んでる?来た時とおんなじだ」
窓の外では　仔豚の3兄弟が仲良く　釣りをしました
「おーい　マージー」　ナミは声をあげました　その時上空を鷹が通り過ぎて行った
「モーモー、アルモァ様、いろいろありがとう」
木の上では魔道士から解放されたフクロウが喜びの歌を唄っていた
『ポイ・ポイ・ポイ　ポ・ポイ・ポポイ・ポイ・ポピィ♪』
「みんなあ、大好きっだよーお」
一方、ルイクスの宮殿ではあれから一週間もたつのに部屋（小屋）事居なくなったナミを心配していました、「ああーあたしは　なんて事をしたんだろう　こんなことになるのなら　初めからあの子を拾わなければ良かった」と言って　二モエは悔んでいましたノアは「なあに、姉さまの事だから　きっと帰ってくるってだって　補佐してくれるって約束だもん」
といつも母を気遣っていた
その時でした　空のほうから
「おーいノアー　母さん　父さん　」と言う声が聞こえた
「わしも年かのう、会いたい　会いたいと思ってたら　本当にナミの声が聞こえてきた　で」
と言ってマノィ王は肩を落とした　でも「おーい、こっちだこっち

だ」
とまたこ声がしたので　3人は一斉に上を見上げた
「家が、飛んでる　姉さんがいる会いたかったわ姉さん」
ノア達は姉に手を振った　ナミも　3人に手を振り返したのだった
『会いたかった・会いたかった・会いたかった・君にィー♪』
「ナミあのう　わしは今までの事は　なんて言っていいのか・・でももし許されるなら
もう一度みんなで一緒に暮らしてくれないか」と　これまでの悪行を詫びた
でもナミは「私　継母（かあさん）の事一度も恨んだ事ないよ、だって母さんは母さんだし」
その言葉を聞いたマノィ王と二モエはいつまでも泣いていたのだった。

その後王位を義理の妹に譲りナミはその補佐として王国を支えたと不思議界記は伝えています。
しかしこのナミと名のる少女こそ行方不明となった双子の一人なのでした。

??　ヨヨの追放！（後書き）

なお、小さくなったヨヨはその後　南の島でツバメの王子と仲良く暮らしたらしい（これも　どっかで聞いたな）
次はアトラントに住む菊姫の結婚物語です。

22話『菊姫の結婚式』（前書き）

菊姫の恋の物語の始まりです。

22話『菊姫の結婚式』

「きれいだな」って菊姫は呟いた　ミナリ村はもうすぐ秋を迎えます
秋と言えば　アトラントでは毎年菊月祭が行われる
菊姫は祭りに使う華傳（かでん（赤、茶色、黒、薄紫の4色の木に
生える草）草が
良く採れる　マニラ区にある　マニラ山に友達3人でやってきたのだった
そして華傳の木を見上げながら、最初のセリフと言う訳である。
「ねえ、菊ちゃん　何時までも眺めてないで、しっかり仕事しなさいよ」
と　親友のアユらが急かすので菊姫は「分かってるわよ　ちょっと見とれてただけじゃないの」
と言って『ペロ』っと舌を出し、再び華傳草を摘み始めた
その時草むらから『ギロッチョン、ギロッチョン』と鳴く
頭が四方にあるコオロギとカメの愛の子のような昆虫が飛びだしてきたので
（この生き物は　どれが本当の顔なんだろう？）
と菊姫は、小声で呟いた。
「おーいアユー、菊ちゃーん　僕はもうこーんなに　採ったぞー」
と言って　手に一杯華傳草を抱えて　ハヤタ（ウルトラマンじゃないぞ）
が掛けてきた
「ホーンとだ、ハヤたんすっごーい　菊なんかまだ少しだよ」
「あーんたは　さっきから木　見てただけじゃん」
「あーアーちゃん（あっちゃんじゃないぞ）、それ言うんだ」
「まーまー、お2人さん　今日はこの位にして　そろそろ食事にしないか？」
朝6時に家を出てから時間はもうすぐ12時になろうとしていた

「きょうは　菊が好きな　菊呉電（菊をあしらったミナリ風シュウマイ）だよ
「ゲッ、またかよ」
「良く飽きないわね、まー美味しいんだけどさァ」
3人は　デ・マニラ（デバニラ?）の草原に腰を下ろして　菊姫が作ったお弁当と
アユらが用意した龍々茶（りゅうりゅう　ちゃ）を飲んでいた
ところが　その時　V型の円盤が炎をあげて　上空から舞い降りた
「なっ　何だィ、あれは?」
「宇宙人の襲来かしらね?
と　ハヤタとナミが　話してい間にも　円盤は『アーレー』
っと　きりきり舞いしながら　向こうの湖辺りに
「バシーン・ドシーン・ドカーン」
と落ちていったのだった。

22話『菊姫の結婚式』（後書き）

菊姫は15歳になっていたのだ

?星から来た少年（前書き）

別次元にあるドント星団から　次元飛行機『カチューシ1号機』で
アトラントにやってきた　フレル・ネチルド王子
はたしてその目的とは？

?星から来た少年

菊月祭の準備のために華傳草を取りに、マニラ山にきていた、菊姫、アユら
ハヤタの3人は　空から落ちてきた　円盤と遭遇したのだった。
「どっちに落ちた?」
「あっちの森じゃー無いかな、ほら前に
菊と3人で行った」
「解った　サギリの洞窟だな」
と言ってハヤタは駆けて行ったので
アユラと菊姫も後を追った
『ゴ―』と言う音と共に円盤が回転しながら
落ちて行ったので　森の動物たちやデルモ・グリス
と言う砂虫（森に住む物もいる）
やクッタ魔と鳴く　訳の分らん生き物達まで
様子を見に出てきた
洞窟の近くには5～6メートル四方の穴が
開いていて、壊れた円盤の中から
緑の帽子を被った少年が這い出してきました
「ぺっ　ぺッ、ひどい目に会ったぜ
今日は最悪だな」
「あのう大丈夫はですか?」
「誰かに攻撃でも　されたのですか」
「あっ　いやっ、これはそのォ
途中でエンジンが焼けついちゃって
参ったぜ、整備不足かなハハハ」
そう言ってその少年は笑った
その時遅れてきた菊姫が「あなたは名前は
なんて言うの」と尋ねた

少年は「僕は「ドント星団から来た
フレルこれでも一応王子なんだぜ」
と説明した
フレルの説明によるとドント星団は別の
次元にあり、自分はそこからタカミナ博士が
開発したばかりの次元飛行機『カチューシ1号機』を無断で
拝借して（するなよ？）アトラントにやってきたらしいのです
「でもどうしてやってきたの、そんな危険を犯してまで？」
「僕はいずれ国を継がなくちゃ―いけない
その為に、広く世間を見たいのさ　と言う
訳でこの国の事教えてくれるかな」
と言う訳で菊姫たちは　不思議の森を案内する事になったのだった。

?星から来た少年（後書き）

カチューシ1号機は４８のキーを操作することによって「バッコーン・エネルギー（しょこたん?）」が起動しあらゆる時空間を超えるのである。

?天魔山での想い出前半（前書き）

菊姫とフレルの森での一日です。

?天魔山での想い出前半

〇天魔山
「・だめだ　またここへ出た?」
と　菊姫はため息をついていた
それと言うのも　菊姫は今朝　マロン母さんの使いでミナリ地区の隣にある
　テンマ地区に行ったのは良いのだけど、その帰り道いつものように天魔算に寄り道をしたのだった、　勿論菊姫にとっては遊び場の一つなので
　夕方には帰れる予定であった　しかし今日はどう言う訳か?帰れないのである
　「もーう　晩までに帰れないじゃないの」
そう弩なって菊姫は木に石を『ゴーン』と「ぶつけました、すると木の中から
「痛てて!なにすんのさ」
と言って少年が頭を押さえて飛び出してきた
　「ごめんごめん　って　あなたはフレルじゃない、こんなとこで何してるの」
「いやあ助かったぜ、この森に入ったは良いが、出口が分んなくて困ってたところさ」
「あのう　それがね　私も出口分んないの」
「だって君はここに住んでいるんだろ」
「勿論いつもなら分るの　だけど今日は分んないの　時々妖精たちが悪戯するのよね」
「ハッハッハッハ、そいつは良いや、何処の世界でもそういうのは居るんだよな」
そう言って　困っている菊姫を尻目にフレル王子は屈託ない笑顔で笑った

「しかし、参ったなこれからどうしよう」
「歩いてても疲れるだけだから、座って話そうよ」
菊姫とフレルは森の木陰に座った
「さて何を話そうか、そうだな　僕が王子だってことはこの前話したね」
「うん聞いた」
「僕の生まれたドント星団は　アナス　シール　ジル―シャの3国から成り立っていて
僕はその中心のジル―シャ国の王子なんだ
いずれ国王として国を纏めなくてはいけないんだ　だからその為にいろいろな
世界を見る旅に出たのさ　君も同じ様な者かな?」
「ううん、ここ（アトラント）はお姉ちゃんが継ぐことになってるから
あたしは　お嫁に行くんだって?」
「良かった　ならまだ間に合うかな?」
「何がよ?」
「実は　初めて君を見たときから　好きになったみたいなんだ」
「・・・・・」
「あはっ、何か答えてよ?」
「そんなこと急に言われて私、困るわ」
と答える菊姫だったが、その時頭上からミミズの親玉のような様な虫が上から
『バッ』と落っこちてきたので菊姫は思わずフレルに
『ガバッ』
と抱きついたのだった
しばらくして　どちらからともなく
「ごっごめん」
「あっ　えーと、そうだ帰り道探さなきゃ―」
と離れる2人　その顔はどちらも赤面していた。

「オッホッホッホ、お2人さん　帰り道　分らないんじゃー、教えてあげようか？」
と　いらずら妖精のミルルが小枝の上に腰を駆けて菊姫とフレルを見降ろしていた
「おまえか悪戯してたのは」
「何言ってんの　こうなったのは全部あんたのせいじゃないの」
「あら良いの、そんな態度なら道教えてあげないわよ」
「フン、結構自力で脱出して見せるぜ」
「そっそうよ、なんとかなるわよ」
そう言うと菊姫とフレルは怒って行ってしまった
「ヤレヤレ、助けてあげようと思ったんだけどな
まっいいか（あれっ！あんたのせいじゃなかたっけ？）
そう言って飛び立とうとした時、向こうから
矢が『ビュッ』と飛んできて　悪戯妖精のミルルは地面に
『ボトッ』っと、落っこちてしまったのだった。

？天魔山での想い出前半（後書き）

ミルルは悪戯が大好きなフェアリーです。
（小型妖精・よく漫画に出る羽がついた奴）

?天魔山での想い出後半（前書き）

森での話の後篇です。

?天魔山での想い出後半

菊姫とフレルはお互い迷わないように手を繋いで歩いて行きました、すると
あれ程迷った道があっけなく抜けたので2人は拍子抜けしてしまいました・
「これは一体どう言う事とだよ、こんなあっさり出られるなら最初から苦労しないッっちゅうの?」
とフレルは弩なった
「私に聞かれても分んないわよ、さっきの妖精が気が変わって魔法を解いてくれたとしか、考えられないわ」
「さっきの怠惰見りゃー、それは考えられないね?」
「だったらどうして、ひょっとしてあの妖精に何かあったのでは」
「フンッ、だったら良いきみじゃないか?ほっとこうよ」
「・・そ　だね・あーぁ、やっぱりだめだぁほっておけないよ　ねっ　引き返そうよ」
「僕は御免だね」
「じゃーここで待ってて、あたし一人で行くから」
「待てよ　何であんな生意気な奴を心配するんだ　ほっときゃー良いだろ?」
「フレルあなたはそれでも王子なの、私は人間だけど　一応この国の代表の一人なの
たとえ誰であれこの国にいる限る臣民なの、本人が認めようが認めまいがね」
そう説明すると菊姫は道を引き返して行った
フレルは
「やっぱ、こうなると思ったぜ」と言って菊姫の後を追った
最近この辺りでは他所から入ってきた怪物たち（山賊）がフェアリー狩りをしてるらしいのだ。

「イヒッヒ、ゴンタローさん　どうやら今日はこいつ一匹だけのようですよ」
と3本角の青いカマキリの化け物がミルルを
手に取って話していた。
「ちっ　ツイテねえな、だが見なよ兄弟
こいつの羽は薄紅色で珍しいぜ」
「ホントだ、こいつは高く売れるなアハッハ」
と　今度は一本角のカエルのような怪物が答えました、どうやらこの2人はフェアリーの
密売人のようでした。
「こらー怪物ぅ、離せ　離せってんだ馬鹿野郎」
「フッフッフッ、その態度　ますます気に入った　ゲンジロー、こいつを丁重にそっちの
バスケに入れておけ」
「ハイゴンタローさん」
そう言って受け取ろうとしたゲンジローのてに石つぶてが飛んできて『バシーッ』と当たった。
「いてぇ、だれだ邪魔しやがるのは」
「あたしだよ」
と、菊姫が叫んだ
フェアリー狩りはこの国では禁止されているのよ、知らないの?」
「もちろん知ってるさ、だが残念ながら俺たちはこの国の者じゃー無いんでな
　この国での決まりは通用しないのさ　悪いなおじょうちゃん　分ったらすっ込んでな」
ゲンジローに変わって兄貴風のゴンタローがそう答えた
そして二本の鎌を大きく振り上げて迫ってきた
その怪物の眼力に菊姫は身動きが出来なあった
「・・うっ、動けない・・誰か助けて・・」
菊姫は声にならない声を上げた

その時「ちょっと待ちな、昆虫さん、食ってもいいが?そいつ上手くないぞ」
と言って、フレルが現れた
「ほう、王子様が現れたと言う訳か　だが
生憎俺たちはこの国の人間じゃねえ」
「残念、僕も君たちと同じ他所者さ、でもね　何処に行っても
迷惑はかけるなって教わんなかったか?」
「あっあのォ　ゴンタロさん、一旦出直した方がいいんじゃないですか?」
「ゲンジロ―おめえは黙っていろ」
ガマガエルとフレルの睨みあいは暫く続いた
やがてゴンタローと名乗った怪物が
「おまえのその眼、覚えておこう」
と決め台詞を浴びせ、去って行ったのだった
緊張が解けた菊姫はその場に
『ヘナヘナヘナ』っと、座りこんでしまった
「おっ　おいっ、菊姫しっかりしろよ」
それをフレルは素早く抱きかかえた　2人の「時間はしばし止まっているかのようだった。
～～～

と言う声だけを残して
そして2人は手を取り暗い道を帰って行いました。

?天魔山での想い出後半（後書き）

菊姫の思いは燃え上がり、遂には結婚式が行われる事になった
そして　式では3たびあの曲が・・・ナガレル・コロリ（チンコロ・リ）

?菊姫の嫁ぐ日（1）（前書き）

菊姫の婚礼間際のお話です。

?菊姫の嫁ぐ日（1）

○ミナリ村の菊姫の家
朝8時
「おかあさーん、この柄で良い？」
「ああ、それで良い、それで良いからそろそろ出かけたらどうじゃ」
と　マロンお母さんはぐったりして
答えたのだった　それと言うのも菊姫は色違いの着ものを幾つも持っていて
その日の気分に合わせて変えるのですが　今日は何時もより年いり（長く）なのだった。
「そうよね、じゃー今日の色はこれで行こう」
（・・最初の柄じゃが？）
「んっ、母さん何か言った？」
「いっ、いや別にィ」
「ならいいわ、と言う事で言ってきまーす」
そう言って菊姫は　豚馬（とんま＝豚と天馬のハーフ）のポンチと出て行った。
「ちょい待ち、今日は早めに帰るんじゃぞ」
「分ってるって　マロンかあさん」
そして菊姫が出かけた後は、決まってぐったりするのだった。
そこへ　畑に行っていたおじいさんが帰って気っました。
「フロ吉　なんか忘れもんでもしたか」
「いや別にそうじゃないが、最近帰りが遅いので心配にいなって？」
「ホントにあの子には何時も『ハラハラ』させられるで、じゃが　最近のあの子を見ていると　わしにも心当たりがある」
そう言ってマロンお母さんは自分の胸に出を当てました」

「・・恋をしたようじゃな」
「ホンにのォ、おっと　うっかり、竹に書類送るのを忘れとったわ」
マロンは転送機でアトラントのヂ―ナの家に転送しました。
～ウィ・ウィ・ウィ・ウィ～
と　転送機から会議の書類が送られていた
「ねえ、かあたん　何か届いたド―」
とファックスを受け取ったロバ子が
そう言った、でも母ヂ―ナは父であるロバQ
（機械魔人）と『バコンバコンバコン
バコンバコンバコン』と何やら忙しそうだった
「アー―ンロバ子、そこ・置いといて
そう　ソコよ　ソコソコ　嗚呼―ンロバちゃん素敵ィ」
『ほれ、これはどうだ　ここならどうだ?』
バコンバコンバコンバコンバコンバコン」
あああああああーいい凄いよロバ様」
「・・・わたし　学校行ってくるからね・・・まいっか」
「いいイイっ、行ってらっしゃあーい」
その頃菊姫は豚馬でフレルとアトラント上空を見て回っていた
「あの尖がった塔が『オルド・タワー』と言って　建築の神
カプリが建造した物なの、
そしてあっちにある山が鬼面山よ」
「どれが?」
「あれよ」
「あれってどこだよ?」
「もうあれだってばー」
と菊姫が近づいた居た時、フレルがそのホホに『チュ』っと口づけをしました
その途端2人は互いに真っ赤になり
「きっ今日は暑いね?」
「はい、15歳です」とチグハグに会話する2人だった。

その黄面山では、ミーナとチンコロ・リが　天使予備軍１２人を集めて　猛特訓をしていた。
「あなたたちはいつか　一人前の天使になるために、この山で猛特訓した事があったね？
「ポッポ・ピーィ（無かったと思う」
と演説するミーナ
「・・それって、この前遊びに来た時の事ですか？」
「マルチ、口応えはしないの」
「はいっミーナさん」
「あの時の苦労をもう一度やろう「ポッポ・ルポ（どの時？）」
私を中心に円を描いて走れ
大車輪の訓練だ（なつかしーぞ？）
と言う訳で見習い天使たちは　仕方なく
ミーナの周りを『グルグル』っと廻った
「マルチスピードが足りないわ、ネールは呼吸が遅れてる」
「あっ、あのォミーナさん　私たち歌うだけじゃなかった？」
「その通りよ、サルマ」
「だったらこんな特訓無駄じゃあ」
そう言いながら息を『ハアハア』させていた、そのうちの一人が足を絡ませて『ドテッ』と倒れた」
「大丈夫カリナ、けがしてない？（そういえば怪我と言えばたしか？」
「そんなに心配しなくても、わたしは大丈夫ですからミーナさん」
「・・あっ、違うのタカミナの怪我のこと考えてたの（そっちかい）
いい事、歌をナメテルからそういう目に会うのよ
私たちはただ歌おうって言うんじゃなくて『ヘビロテの完コピ』やるんだから
その為の体力作りじゃないの？いい事、菊ちゃんの結婚式までには仕上げるわよ」
「ハイッ、ミーナさん」

（体力作りはこれで良しとして、フォーメーションの時には　あっちゃんでも連れてくるか？）

「ダメ・ポッポ、ダメ・ポッポ（それじゃー誘拐だよ）

？　菊姫の嫁ぐ日（2）（前書き）

いよいよ結婚式です。

？　菊姫の嫁ぐ日（２）

菊姫の嫁ぐ日（２）
○ミナリ村朝６時
菊姫は自分の部屋で姉のヂ―ナに手伝ってもらって結婚式の衣装に着替えていました。
「菊ちゃん、良く似合うよ」
「ありがとう竹姉ちゃん」
２人は姉妹となってからの日々を思い浮かべていました、その頃マロン母さんと
フロ吉お父さんは平安時代の家から持ってきた仏壇に
菊姫の結婚の報告をしていた
「小野ノ家のご先祖様、とうとう菊が嫁に行く事になりました
（菊姫の本名は小野ノ小菊と言います）
「どうかこれからもあの子を見守ってくだされ」
マロンとフロ吉もまた菊姫と出会った日の事を思い浮かべていたのでした。
○ジブラナイス寺院
フレルはミナリ区にある聖堂院で１１時から
行われる結婚式の最終的な打ち合わせをしていました。
「それでは今から式の段取りについて
説明いたしますので、質問があれば遠慮なく
なさってください」とヘラリナ（結婚の輔佐神）が広間でフレルに説明をしていました
「わかりました」
○ミナリ区菊姫の家
　平安風の衣装を着た菊姫は二人の両親にお決まりの挨拶をていた
「おとうさん、おかあさん今まで菊を育ててくれてありがとう・・

幸せになるからね・・」
その目には涙が溢れていた、マロンとフロ吉の目にも熱いモノが頬をつたっていた
菊姫は姉の方を振り帰り
「そして竹姉ちゃんこれだけは言わせてください
本当は捨て子だった私を拾ってくれてありがとう　みんな菊の家族になってくれて
ありがとう・・」それっきり言葉にならなかった
「きく・・」
ヂ―ナは菊姫と何時までも抱き合っていました、そしてまもなく１１時を迎えよるのだった。
○ジブラナイス聖堂院　内
「それではこれから小野ノ家と　チモモ家
（フレルの性は　チモモと言うらしい）の婚礼の儀を始めます」
司会のヂ―ナがそう挨拶すると
『よ～カッポン・カッポン・カッポン』
と歌舞伎の様な音楽に合わせ十二単をまとった菊姫がフレルと一緒に入口からゆっくり・ゆっくりと現れた
「ウワ―今日の菊ちゃんとっても素敵、」
「マォより似合ってると思うなりナ」
「あんたはいっつもそう言う事言うんだから」
席上にはマォやなりナそれにフレ―ロやロズマリナ夫妻も招待されていました。
「では続きましては・・」
ヂ―ナが次の段取りを進めようとした時
あちこちで『ドバーン』『ドカーン』
と言う炎が会場の入り口辺りで起こりました
「えっ、火事」
と招待客は何事かと、ザワメキはじめた
しかし炎は消え時空からカーテンが現れた

（ディケィドかな）
そしてその中から、一三の影が浮き出てきたのだった。
～いくよみんな、ワン　ツー　１・２・３・４♪～

？　菊姫の嫁ぐ日（2）（後書き）

そして式はあの曲で盛り上がるのだった。

?菊姫の嫁ぐ日（3）（前書き）

ミーナ達のライブは菊姫の心に届いた。

?菊姫の嫁ぐ日（3）

ミーナの着替えシーンが一瞬現れる（幻想）

『1．23．4　？　ＷＡＮＴ　ＹＯＵ！　Ｉ　ＮＥＥＤ　ＹＯＵ！
？　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ！頭の中，ガンガン鳴ってるｍｕｓｉｃ　へ
ビーローテーション
ポップコーンが　弾けるように好きという文字が躍る　顔や声を
想うだけで
　居ても立ってもいられない，こんな気持ちになれるって僕はつい
ているね
？　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　？　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！　？　ｌｏｖｅ
　ｙｏｕ！
君に会えて　ドンドン近づくその距離に　ＭＡＸ　ハイテンション
？　ＷＡＮＴ　ＹＯＵ！　？　ＮＥＥＤ　ＹＯＵ！　Ｉ　ＬＯＶＥ
　ＹＯＵ！ハートの奥
ジャンジャン溢れる愛しさは　ヘビーローテーション♪』

『いいぞー天使たちぃー』　『ミーナ、カッコいいぞ―』と声援が
飛ぶ
音楽が切り替わる

『カチューシャ外しながら君がふいに振り返って
風の中で微笑むだけで
なぜか何も言えなくなるよこんな　思っているのに…

カチューシャ外しながら長い髪をほどくように
いつの間にか大人になって
僕の手には届かないくらいもっと　好きになるよ…

Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ　Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ
カチューシャガール
Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ、Ｅｖｅｒｙｄａｙ』

『コロコロ～・チンコロリ』（ヘビーローテーション♪）
「みんな、サンキューあっちゃんでした（コロコロ・ポッポ＝違うよ？）
と言って再びカーテンと共に消えて行った。

『ブラボーミーナ―、他のみんなも可愛かったよぞー』
と言う声と共に
「なかなか面白かったね菊ちゃん」
「うん　ミーナちゃん　とっても上手だった」
菊姫とフレルはこの『サプライズ』には『涙』だった
招待客からは
『アンコール、アンコール♪』『アンコール、アンコール♪』と言う声援が何時までも続いていた（コンサートじゃ、無いよ）
そんなこんなで時間は間も無く午後2時になろうとしていた
「それではここで・・・」
すると今度は聖堂院の中に桃色の雪が舞い始めた
「こっ今度はなんなのよ？」
そして窓の外からは悪戯猿のキッキーポコを連れた演じのルークと
無数のデルモ・グリス（砂漠虫）を従えたホッテンロット（岩巨人）
が
『グア・グア・グア・ポイ・ポイ・ポイ・ポイ・ポピイ・アッちゃんホーイ
グア・グア・グア・ポイ・ポイ・ポイ・ポピイ・アッちゃんホーイ♪』

と良く分からない歌で婚礼を祝福してくれていたのでした

やがて　雪はプラネタルウムに変わった
「わーあ、なんてきれいなのかしら」
「ホントだねえ」
この演出には菊姫はおそか当のギ―ナでさえ驚いたのだった
そして『菊、幸せになるのですよ』
と言う　オルディナスの３Ｄ映像が現れた
「ありがとう　オルディナスお母さん」

「きっと幸せにします、約束します。」
菊姫とフレルはそう答えたのだった。
　そんなわけで　シッチャカ・メッチャカでありましたが式
何とか無事に終わったのだった。

?菊姫の嫁ぐ日（3）（後書き）

菊姫の本名は小野ノ小菊、そしてフレルの性はチモモなので「小野　チモモ・コ菊」となります
分かるかな？

？菊姫の旅立ち！（前書き）

菊姫が遂にアトラントを離れる日がやってきました。

?菊姫の旅立ち！

感動の結婚式から早一週間間、いよいよ菊姫がアトラントを離れる日が
やってきました。
○ミナリ区・太陽の丘朝7時
「菊や、向こうに着いたら連絡しておくれ」
「うん、まろんお母さん」
「フレル王子に可愛がってもらうんじゃぞ」
「わかったよ、フロ吉おとうさん」
そう言って菊姫は二人と何時までも抱き合っていた
「これ村の皆で作ったの、さみしい時は話しかけてね
そしたら答えるから」
と　アユらとハヤタは　応答機能を持った　３Ｄ写真
（ただし、科学ではなく魔法との融合）を渡した
「ありがとう、アユら　ハヤタ　他の皆にも
宜しく言っておいてね」
菊姫はアスタヴィス（虹の妖精）から送られた
虹の馬車に乗り込んだ
「じゃーそろそろ出発しようか」
「待ってフレル、まだお姉ちゃんが・・」
そこにロバＱ（巨大バージョン）に乗ってヂーナが
やってきた
「いやぁ　遅れた遅れた、これお姉ちゃんからの
プレゼント、いつも身につけておくように」
それは　ヂーナの残留思念が込められたペンダントだった
「ありがとうお姉ちゃん」
それから　お守役として彼女も参ります」
『エえええええ（@＿@）ローザ様がァ」

皆が驚くのも　当然であった、それと言うのも　ローザはミカエルと同じく
天使の長であり　とても誰かの　乳母、守役をする　存在ではないからだった
しかし妹菊姫を心配するヂーナは　彼女を守役に決めたのだった」
「いいよ、お姉ちゃんもったいないよ」
「いいえいいのです、ヂーナ様の大切な妹を守る職につけて
私としても光栄に思ってます　不安だけど　後継者も出来たしね」
と　ローザは菊姫に　そうあいさつした
「それじゃー今度こそ出発!」
　フレルが手綱を引くと、馬車は七色に輝き　大きく舞い上がった。
「菊気をつけてねー」「がんばってやるんだぞー」
ヂーナ達は　そう言って何時までも馬車を見送っていた
～さよなら　ミナリ村　さよなら　不思議の人たち～
こうして菊姫はドント星に嫁いで行ったのでありました。

なお　空位になった天使長にはミーナが就任した
ミーナはチンコロ・リを肩に乗せ、数千の天使たちが見つめる　就任式でこうあいさつした
「えー不詳　僕がローザ様の後任に選ばれたからには、一生懸命努力したいとおもいます、君ら若い天使たちのやる事は沢山あると思うたとえば『ヘビロテ』の振り付けを覚えるとか　『総選挙』も実施しようと思う
『握手権』も作って　コンサートも開きたいし?・・」
「コロリン・ポポポ（・それ全部天使の仕事じゃーないと思うポ・・」
こんなんで本当に大丈夫なんでしょうか?
いえ　きっとミーナの事だからなんとかやってくれる事でしょう?。

？菊姫の旅立ち！（後書き）

第二部　エンドラの妖精の終章
そして第三部は「みなみと優子」が戦うヒーローの登場です。

第二部　最終章『マォの旅立ち』１（前書き）

かつてノリル少年（ウサギ）が語った邪王・空（くう）
が　予想より早く　不思議界に現れた・

第二部　最終章『マォの旅立ち』1

プロローグ
ここは違う次元のとある宇宙、多くの乗客を乗せた飛行船ノアーマは処女航海の為
このスイルソ海域を順調に航行していた　しかし突如「何だ?あれは」と言う通信を残し
3万人の乗客たちと共に消息をたったと言う。後に目撃者の話によると
巨大な穴が出現しノアーマを飲み込んだのだという。
□冥王星
（1）イルギアの花を摘む少女（出会い）
不思議界（地球）から遠くはなれたところに冥王星がありました。
ダークナモ（オシメの左面の神格）が管理しているこの星の最下層には
聖王ラウドネスが封印されていたのです。
「ラマォダ、おまえはあの日の事を覚えているか?」
とラウドネスは心の中のラマォダに話しかけたところ
ラマォダは「もちろん覚えておりますわ」と答えるのだった。
ラマォダは小さいころある戦士夫婦から妖精神ヤナホイにあずけられました
そして12の時まではヤナホイと共に修行の旅をしていたといいます。
あるときヤナホイがラマォダと共に当時東の国ライオマで瞑想中だった弟
アルモアの元を訪れた時の事、ラマォダは近くの花畑でイルギア
（バラと菜の花をあわせたような花）の花を摘んでいたところ　そこを通りかかった
若き白馬の騎士(ラウドネス)が少女に向って「おまえは誰だ?この国では見かけ

ぬ顔だが？」
と騎士はたずねました　ラマォオダは「私はエンドラの国から来たラマォダと言う者でございます　今はヤナホイ様の元で戦士の修行をしているのでございます」と答えと言う。
2人おたがいに見つめあった後「良い戦士になれ」と言って騎士は立ち去ったのでしたが
これがラウドネスとラマォダの運命的な出会いであったのです
（2）惹かれあう2人（冥王星）
「ラマォダ俺はあのときこの娘こそ我が妻になるべき存在だと感じたぞ」
とラウドネスが言うとラマォダも「わたしもこの人こそ運命の人だわ？」と感じたと言う
それから2人はいつも一緒だった
ラマォダの傍らにはいつもラウドネスがいて、ラウドネスの近くにはいつもラマォダがいた
　2人は出会った時から互いに惹かれあい相思相愛であった
皮肉にも魔空戦争で戦う宿命となった2人だがなおも心は惹かれあっていたと言う。
「ラマォダもう休め、疲れたろう」とラウドネスがラォダの心に話しかけるとラマォダも
「はいそういたします」と応えるのだった。
（3）邪王の誘い
　ラマォダの心と話し自らも休もうとしていたラウドネスの心に進入してくる声があった
「・・・ラウドネスおまえはそれで満足ではあるまい」と声はそういった
しかしラウドネスは「ナニモノダ我の心に語りかけるのは？」とラウドネスは言うと
声は「・・おまえが本当に望んでいるのは全ての王になる事・違・う・か？」と言い放った

ラウドネスは再び「ダ・マレ邪神我はいまラマォダと居られて幸せなのだ
この安らぎを奪わないでくれ」と叫んだが　声は「仕方ない今日のところはおとなしく引き下がろう、だが忘れるナ　ラウドネス　おまえこそ全宇宙の王になるべき男なのダフハハハハハ」
と不気味な笑い声と共に邪王は消え去ったのだった

第二部　最終章『マォの旅立ち』１（後書き）

不思議界（デルクラル）の運命はそしてマォは救世主になれるのか？

第二部『最終章マォの旅立ち』２（前書き）

エンドラの妖精終章

第二部『最終章マォの旅立ち』2

洗礼の日（マォ5歳）

（1）マォ

魔空戦争が終わってはやくも15年がたち16歳になったマォは
エンドラの国の赤い三角帽子のお家に黒ねこの妖精なりなと2人で
住んでいました。
イチゴの森は今冬で一面銀世界（不思議界の雪は桃色）であり　皆
家で勉強をしていたのですが
マォはと言えば　今村で流行している予言集を読んでいるうちに
いつかヤナホイに連れてってもらったある礼拝堂の事を思い出して
いたのです。
妖精は5歳になると洗礼を受けるために　ジブラナイス（予言の神）
の礼拝堂に行くのが決まりであった。「マォしたくはまだなりナ、
いつも遅いなりナ」
と黒猫の妖精なりナがマォを呼んでいます。しばらくしてマォが
「よっお・ま・た・せィ」と赤い扉を開け家の中から出て来ました
黒い服と帽子に水玉模様がマォのお気に入りのスタイルでした
「まったくおまえはいつも遅いのじゃホイ」とヤナホイに注意され
るのは大体いつもの事でした。　（2）2つの予言?
あわただしい朝でしたが洗礼は無事に終わり帰り支度を始めたとき
ゲメロ司祭が
3人?を呼びとめてこう言いました「その子はやがて世界を滅ぼす
ことになる
そしてそれは全ての世界を救う事になる?」とジブラナイスの予言
を告げたのでした。
マォは「えっ世界を滅ぼし?そして救う?なにそれ」と、頭をひね
るばかりでしたが
ヤナホイにその事を尋ねると「どちらも本当なのじゃホイ」と言う

から
マォはなりなと頭をかしげるばかりでした。
～戻る１６才～
「あの予言はなんだったのだろう」とマォは珍しく真剣に考えていました。「そんなに考えても頭の悪いマォには分かんないなりナ」となりなはいつものようにからかったのですが今日は何の反応もありませんでしたので　なりなは「もーォ真剣なマォなんてつまんないなりナ」と言って何処かへ行ってしまいました。
すると突然天井から?本が現れマォの頭を直撃しました「イッターイ」マォはそう言うと本を拾い上げました　その本のタイトルはレイニーの予言集でした。
その本を開いた時マォの脳裏にイメージ（映像）次々と浮かんできたのでした。
（３）宿命の戦い（イメージ）

＊冥王星より暁の獅子ラウドレスが蘇り巨魔ゴルゴーンと妖獣達を従えて地球に接近し
から吐き出すその霧で地球が包まれ人々が石化する

＊銀色の瞳に操られた自分（マォ）が、ヂーナ達を攻撃しアトラントを焼きつくす
＊赤きセルゲイアの剣を持った2人の美少女（マォとナミ）が無限空間で激突する

＊父ラウドネスが邪王空（全てを飲み込む巨大な穴）となり全宇宙を飲み込もうとする
＊マォとナミの双子が同化し伝説の戦士ラマォダとなる

こういった場面が次々と頭の中に映像として流れ込んできたのでした。
エピローグ

未来の戦い？

「いやダヨこんなの？」全てのイメージを読み終えたマォは涙が止まりませんでした

自分がなんなのか？何をするべきかがはっきりわかったからでした

それからマォは1週間の間泣き続けました

そしてマォが出した結論は自分の運命に立ち向かうことでした

「私全ての人たちを幸せにしたいの？　それがマォの夢だからそれを実現するには

まず自分の宿命とたたかわなくっちゃいけないの　いつかマォが落ちこんでいたとき

りゅうりゅうがこう言って慰めてくれたの

「夢は諦めなければいつかきっと叶うものさ、

だってここは【マォの不思議世界】なのだからって」

「やっとそれに気付きましたね　マォ」

マォが決心した時　天空から声が聞こえてきました「オルディナススさま」とマォは言った

オルディナスは続けて「今あなたが見たのはほんの数年先の未来なのです暁の獅子が私の計算より

ずっと速く蘇ろうとしています　そしてそれを倒せるのは彼方姉妹2人（マォとナミ）

だけなのです

さあ私の手をとるのです、我が同士ラマォダの娘　ルビア・カイザーク・ラ＝マォ

今から私と共に精神修行の旅に出るのです　ジブライナイスは新たに彼方2人が

時間と空間を操る事が出来たとき　邪王は滅びラウドネスは消滅するであろうと予言したのです」

「わかりました」とマォは前を向いてそう答えたのでした。

オルディナスは「無限界ではナミが待っていますよ」と言うと

マォは一言「な・み・おねえちゃん」と、呟いたのだった。
～こうしてマォは修行の為　無限界に旅立って行きました、これからもいろいろな事件が
不思議界を襲う事でしょう　でも心配しないでください　だってマォは
『強さと優しさ』を持った『エンドラの妖精』なのだから
完

第二部『最終章マォの旅立ち』２（後書き）

第三部は　みなみと優子が宇宙人や怪獣たちと戦うヒーローの登場です。

第三部『コスプレ仮面☆ＦＩＮＲＬ・ＷＯＲＬＤ』（前書き）

『西暦２００？年、地球は異星人による侵略により危機に瀕していた。
そこで政府は地球の守護神、アース・キーパー（ＡＳＫ）を結成したのだった
この物語は『コスプレ星人』として生まれ変わった　みなみと優子の戦いを
はじめとした、勇者達の物語です。

第三部『コスプレ仮面☆ＦＩＮＲＬ・ＷＯＲＬＤ』

冒頭Ｔ
『西暦２００?年、地球は異星人たちの出現によって危機に瀕していた
そこで政府は全国の自衛隊員の中からエリートをたちを集め
官僚秘書だった、沢乃エリカを隊長として天下りさせＡＳＫアース・キーパー
を結成して地球の防衛強化を図ったのだった。
これは地球の平和のために戦う勇者たちの物語である』

１話『怪獣の出現！』
プロローグ
Ｎ「ここは宇宙の果てにある暗黒の星ゴルゴ―ラ、宇宙征服をたくらむマグロ星人は伝説の怪物ユダを復活させようとしていた」
マグロ星人「目覚めよユダ、我と共にこの宇宙を破戒するのだ」
　『ギエーェ』
と、地の底から悪魔のような唸り声が
　周囲の星々を震撼させる
　その近くをパトロールしていた宇宙監視委員のクロノスはゴルゴーラ星に降り立つ
クロノス「まてぃ　マグロ星人、お前の思い通りにはさせんぞ」
　マグロ星人、紫色の光線をクロノスに浴びせる
クロノス「うっ、うわー」
　と、苦しみ倒れるクロノス
マグロ星人「おのれークロノス　今少しの所を、こうなれば目標を地球征服に変更だ」

と、飛び去る
クロノス「まっまて、マグロ星人　いかんこのままでは地球が危ない」
それを追ってクロノスも地球へ
○地球
同・東京上級
クロノス「だめだ、私の命はもう」
重傷を負ったクロノス、東京上空で力尽き落ちる。

○東京　千代田区
同・野外ステージ
N「ここダイヤモンドホテルでは子供たちに大人気の猫耳仮面のヒーローショーが行われていた」
ステージ裏で話す会長猫田博（５９）
北斗みなみ（１９）南優子（１９）の３人
猫田　「君たちもうすぐ出番だから準備しておくように、いいね　アルバイトだからといって気を抜かないように　わかったね」
クドクドと注意する猫田にうんざりする、みなみと優子
みなみ、優子「あーい」
と、気の抜けた返事をする
みなみ「どっどうしよう優子、今頃になって緊張してきたよ」
優子　「そんなー、大体みなみがやろうと言い出したんじゃない」
みなみ「それはそうなんだけどさあ」
２人の緊張をよそに、ステージ上では司会の水木かかし（４０）とプッツンタレントの紅井小春（１８）の２人がヒーローショーを盛り上げていた
水木　「今この世界は危機を迎えています
それは我々人間たちが引き起こした環境破

壊の数々が悪の怪物たちを生み出したから
なのである」
　と、力説する水木
マサヒコ「怖いね、かあちゃん」
　と、客席からのマサヒコ（7）の問いかけに頷く母、リツ（52）
小春　「ちゃは、でも怖がる事はないのら
　宇宙の彼方黒猫星雲から、猫じゃらしのホウキに乗って猫耳仮面がやって来たからなのら」
　ちゃは語、を交え話す小春
　『へー』『すごいや』
　と、人々の声
　そこに大きな歯磨き粉の体にブラシの剣を持った、怪人ハミガキラーが客席から登場する
ハミガキラー「あはっは、俺様はチーバット帝国の怪人ハミガキラーさまだ、歯磨きをしない悪い子は食ってしまうぞ」
『ゴシ　ゴシッ、ゴシ　ゴシッ』
と歯みが鬼戦闘員員の声
『うぇーん』
怪人の迫力に泣き喚く子供たち、そこに軽快な音楽が流れてくる
水木　『さあこんな時にはみんなで猫耳仮面を呼ぼうぜ、せいのー猫耳仮面出てきてぇ」
　と客席にマイクを向け、声援を呼びかける水木
『猫耳仮面出てきてぇ』
　と叫ぶ子供たち
小春　「ちゃは、みんなまだまだ声が小さいのら　もっと元気良くいくよ
　猫耳仮面出てきてぇ」
『猫耳仮面出てきてぇ』

と3回繰り返す　水木と小春と子供達
みなみ「悪の笑いが木霊するとき正義の怒りが私を呼ぶ、平和の使者猫耳仮面1号
参上」
右の方から胸の前で十字のポーズを取って登場するみなみ
優子　「同じく・・痛ぁい」
左の方から現れた途端ステージで『すってん』と転ぶ優子、
直ぐに起き上がりみなみと同じポーズを決める
マサヒコ「お姉ちゃん、かっこわるー」
大笑いが起こる
猫田　「あちゃー、だから言わん　こっちゃない、まあそれなりに盛り上がっているようだから　まいっか」
とひとまず胸を撫で下ろす猫田
マサヒコ『母ちゃん、あれ何」
その時向こうのビルを指差すマサヒコ
見ると巨大なマグロが、周囲の建物を壊しながら迫っていた。
街中
マグロ星人「ワハッハッハッハッハ、地球人諸君に告ぐ、今日よりこの地球は
このマグロ星人がいただく」
と宣言するマグロ星人
水木　「あんな所に、マグロが」
『かっ怪獣だぁ』
猫田　「ほっ本物の怪獣が現れた」
次々にビルを破壊するマグロ星人に町は　パニックになる
N「千代田区に突如現れた怪獣、それはクロノスに追われて地球にやって来たマグロ星人だった」

猫田　「うわー」
　　マグロ星人が崩したビルの破片に当たり、猫田死す
小春　「もしもし木村マネージャー、次の仕事多分遅れると思うけど良いかなぁ、いやそうじゃなくて　本物の怪獣が現れたと言ってる　だろが　このボケナスが」
　と他人事のようにあっけらかんと携帯で話す小春
マサヒコ「おかあさん、何処いったんだよ」
　母と逃げていたマサヒコ、途中で群衆に押されて転び、母とはぐれる」
みなみ「ねえ優子、あの子助けようよ」
優子　「うん、早く助けよう」
　逃げるのは止め　マサヒコを助けようとする、みなみと優子
みなみ「大丈夫、一人で立てる」
　と優子と2人で助け起こす、みなみ
マサヒコ「当たり前だい、僕もう大人だぜ」
　少年の大人びた言葉に、唖然とするみなみと優子　一方立ち上がると
　みなみたちに手を振り一目散に駆けていくマサヒコ
みなみ、優子「じゃー気をつけて帰るんだ　よ」
　と、マサヒコを見送る、その後ろから迫る怪獣」
みなみ「さてと、私たちもそろそろ逃げようか」
優子　「そうだよ、急いで逃げなきゃー」
　と、急ぐポーズをとる優子
みなみ、優子『ウワッー』
　みなみと優子、マグロ星人の右足に押し潰される
マサヒコ「あっ、お姉ちゃん」
　振り向いた少年の絶叫

第三部『コスプレ仮面☆ＦＩＮＲＬ・ＷＯＲＬＤ』（後書き）

怪獣の足に潰された　みなみと優子は謎の空間で目覚める
『私はクロノス、ＲＺ４８星雲から来た宇宙人だ』
そして２人はコスプレを纏った正義の超人に『変身！』を遂げる。

?謎の球体（前書き）

マサヒコ少年との友情?

?謎の球体

N「ここは日本近海の何処かにあるＡＳＫつまりアースキーパーの本部である」

○　ＡＳＫ本部

『ビービービー』

と異常を知らせる、警報機が鳴る

ともみ「もしもしこちらＡＳＫ本部、・・はい分かりました　すぐに向かいます」

と連絡係の結城ともみ（１９）が応答する

ともみ「みんな大変よ、千代田区にマグロの怪獣が現れたんだって」

みんなの居る方に顔を向け、そう伝えるともみ

一文字「さっそくお呼びがかかったか」

と興奮する一文字弥樹（２１）

風見「初出動と言う訳やな、腕がなるわ」

と指を鳴らす風見吾郎（３５）

本能「それじゃー大いに活躍してやるか」

と、張り切る本能たけし（３０）

エリカ「では全員出動がんばってね」

と笑顔で送り出す、隊長沢乃エリカ（２９）

同・格納庫

５～６人の整備士たちがたくさんのメカを整備していた

本能「よっ、やまちゃん準備は出来ている」

山寺「ああバッチシだ」

と整備主任の山寺総一（４２）

N「ここにはＡＳＫのメカの全てが収納され

ているのである」
本能と一文字は1号機に　風見は2号機に乗り込む
本能　「エネルギー充電」
一文字「エネルギー充電ＯＫ」
本能　「メインエンジン始動」
一文字「メインエンジン始動ＯＫ」
本能　「ＥＲＩＫＡ一号機発進」
風見　「同じく2号機発進やでー」
　『ゴーオーオ』
　と、飛び立つ機体」
山寺　『がんばるんだぞお』
　と手を振る山寺
Ｎ「その時みなみと優子は不思議な空間に包まれていた」
○千代田区
同・球体の中
みなみ「ここは、何処」
優子　「私たち死んだんじゃー」
　そのとき縞馬の宇宙人が2人に話しかけてきた
クロノス「ここは私の魂カプセルだ」
みなみ「魂カプセル」
優子　「ところであなたは誰ですか」
クロノス「私はクロノス、ＲＺ４８星雲から来た宇宙人だ」
みなみ「えっ宇宙人ですか」
クロノス「君たち2人は今日から私の意志を継ぎ、自由のために戦うのだ　このリングを君たちに授けよう　これが輝くとき君たちは超パワーの戦士となるのだ」
　と言って消えるクロノスの魂
優子　「戦士に」

リングを指にはめる2人、そのとき　リングが『ピカピカ』っと、光る
みなみ「ひっ、光ったよ　優子」
優子「みなみぃ」
しばらく見つめ合う2人
みなみ、優子「コスプレクロス」
と互いの腕をクロスさせる
『ピッカー』
球体がシャボン玉のように弾け、光とともにウサギの戦士が現れる
同・外
マグロ星人「お前は誰だ、クロノスの仲間か」
『ありゃー何だ』『すげーぇコスプレ』
と騒ぐ人々
コスプレ仮面「何が何だか　とにかくいくわよ、必殺ドロップキック」
それをかわしたマグロ星人、冷凍光線をコスプレ仮面に浴びせる
『うわ』っと　仰け反るコスプレ仮面
マグロ星人「続いてマグロ分身の術」
あちこちに移動して、コスプレ仮面をかく乱する
コスプレ仮面「チョコマカと忙しい人ね」
マグロ星人の動きを目で追おうとする
コスプレ仮面、その背後からスリッパーホールドで攻撃するマグロ星人
コスプレ仮面「いやー苦しいよー」
ＡＳＫの戦闘機が応援に来る
本能　「何だ、あっちの変なのは」
一文字「さあ、新種の怪獣では」

風見　「あんな面白いかっこした怪獣、いてますかいな」
マグロ星人「ハッハッハッハ、どうやら邪魔が入ったようだな　勝負は預けたぞ」
　　と笑い声だけを残して消えていくマグロ星人
コスプレ仮面「きっ消えた」
　　と言ってこちらも消える
　　『彼らはなんだったんだ』
と人々
リツ　「おーいマサヒコ」
　　マサヒコを見つけ、遠くから駆けてくる母
マサヒコ「あっ、かあちゃん」
　　と、母と抱き合う
　　そこに現れるみなみと優子
みなみ「よかったね、マサヒコ君お母さんに会えて」
マサヒコ「うん」
母と手をつないで帰るマサヒコ
その後姿を見送るみなみと優子
マサヒコ「あのーお姉ちゃん達、僕と友達になってくれる」
　　振り返って2人にそう告げるマサヒコ
みなみ、優子「私たちでよければ」
　　と返事をする2人
N「ＡＳＫが現場に到着した時怪獣は既に消えており
　破壊された町並みだけを目撃したのだった。

?謎の球体（後書き）

ＡＳＫ（アース・キーパー）は全世界に支部を持つ防衛機構であり
その頂点に君臨するのが　沢乃エリカと言う謎の女性だった。

？　ＡＳＫの仲間たち（前書き）

日本の近海の何処かにあるＡＳＫ（アース・キーパー）
そこには愉快な仲間たちがいた

？　ＡＳＫの仲間たち

数日後みなみと優子は、ＡＳＫに入隊していた」

二話『牛丼消滅事件』
○ＡＳＫ本部、８時
エリカ「みんな聞いて、今日から私たちの仲間になる２人よ　覚えといてね」
　と自己紹介を促す沢乃
みなみ「皆さん初めまして私は北斗みなみと言います、趣味は駄洒落かな『布団が吹っ飛んだ』なんてえへっ、よろしくね」
風見　「こっ、こりゃまたベタな」
　と少し呆れる風見
優子　「私は南優子と言います、趣味は不思議グッス集め仲良くしてね」
本能　「ほーう、ともちんより美人だな俺は本能たけし、趣味は機械イジリだ」
一文字「俺一文字弥樹、趣味は特になしまあ頑張って行きましょう」
みなみ、優子「えっ、一文字焼き」
趣味はナンパでしょと、ともみ
　がツッコム
風見　「ワイは風見吾郎　ちゅうんや、剣道が趣味でおます、よろしゅう頼むで」
エリカ「最後に私が隊長の沢乃エリカよ
　趣味はＳＭ全般」
みなみ、優子「えーＳＭ」
　２人、冷や汗を垂らす

エリカ「とっ、とにかくみんな気さくで良い
　人達ばかりだから　適当に仲良くやろう　よ」
全員　「さんせーい」
エリカ「ほんじゃーそういう事で、ともみには基地の案内を頼むわね」
ともみ「まかしといて、2人ともこっちよ」
と整備室の方に向かう3人
同・整備室
　そこにはたくさんの整備士達が、戦闘機などのメカを修理していた
ともみ「ここはＡＳＫが使用するＥＲＩＫＡ1号機や2号機それに水陸を走れる万能車エリカ・モグランなどの兵器を修理や保全を行う所よ」
みなみ「すっ、凄い」
優子　「色んなメカがあるね」
　感想を述べる2人に、サングラスをかけた中年の男性が近づいてくる
山寺　「へーえ、これが今度入った新人さんたちだね」
ともみ「2人共、こちらがここの整備主任をしている山寺総一（４２）さんよ、まあ彼の事はあんまり覚えなくても良いけど」
　と、そっけなく言うともみ
山寺　「ともちゃん、そりゃーないよ」
　少しオーバー気味に言う山寺
ともみ「と、言うのはもちろん冗談だけどさ」
　『ホっ』っと、胸を撫で下ろす山寺
みなみ、優子「よっ、ヨロシクお願いします」
　と、お辞儀をするみなみと優子
山寺　「元気が良いねえ、若い者はやっぱ元

気がなくっちゃな　まあその内コーヒーで
も奢ってやるから」
と、言って休憩室の方に向かう山寺
ともみは2人を連れてエレベータを
降りる、そこには3つの地下空間があった。
○地下空間01訓練室
そこは怪獣の出現を想定した体験型施設だった
ともみ「この部屋は怪獣や災害など、あらゆ
る事を想定して作られた実験室なの
2人には当分ここで訓練してもらうことになるから覚悟しといてね」
みなみ「わおー、これ3D空間になっているんだ」
優子　「いろいろなパターンがあるよ」
一生懸命説明するともみの話は無視し
て、空間をチェンジして遊ぶみなみと優子
ともみ「もーう、2人とも少しは真面目にやりなさい」
みなみ、優子「はい、しー（すい）ません」

？　ＡＳＫの仲間たち（後書き）

エリア・マネージャー真理子の登場！

？　真理子（前書き）

知能指数　３００の天才コンピュータープログラマー
真理子の登場！

？　真理子

同・０２食堂
　その部屋の入口のドアには３面の顔の
　女神が描かれていて、中は１７世紀の
ヨーロッパ風な作りになっていた
ともみ「この〔アフロディナ〕は私たちＡＳＫの食堂なの
昔はこの場所に有名な喫茶店があったらしいんだけど」
　説明するともみに感心する２人
みなみ「へえ、そうなんだ」
　隅の席では見かけない、おじいさんが
　お酒を飲んでいた
ビーナ「玄四郎さま、少し飲みすぎですよ」
　とヒューマノイドのビーナが静止する
玄四郎「もっと飲ませやがれバーロ、わしはその昔７人の勇者たち
と・・・」
　と、酔い潰れる立花玄四郎（６９）
ともみ「ちっ、あのおじいさんまた来てる」
みなみ「誰あの人、ここの関係者」
ともみ「違うわよ　あの人はここが喫茶店だった頃の常連客だった
らしいんだけど
毎日この時間にここへ来ては酔っ払ってはクダを撒いて帰る厄介な
爺さんなの
昔嫌なことがあったそうなんだけど　私達には中々話してくれない
のよ」
みなみ「ふーん、いろいろ大変なんだね所で誰が食事作っているの
　誰もいない見たいだけど」
ともみ「あらっ、ビーナさんにさっき会わなかった」
みなみ「ビーナってまさかあのアンドロイド」

ともみ「そうよ、ビーナＲ４には世界中の料理のメニューがインプットされているの
だからいつも昼食が楽しみなんだ」
みなみ「・なるほど」
優子　「私、何注文しようかな」
　　と、メニューに目を通す２人
ともみ「それはまた今度ね、今は仕事中です」
みなみ「ねえ、カラオケもあるよ、何か歌う」
ともみ「はいはい、あなた達の歓迎会は後で考えるから今は仕事して頂戴」
　手を叩いて、静止するともみ
みなみ、優子「残念」
　ともみの一言に２人、あてが外れる
同・０３エリーズ
　その部屋は食料品から、電化製品までがズラッと並んでいた
優子　「わーあ、まるでコンビにみたい」
ともみ「みたいじゃなくてここはコンビニなの、図書室やゲームセンターだってあるんだから」
優子　「それは凄いな」
みなみ「でも何でこんなところにコンビニがあるんだろ」
　秋葉原風ファッションをした女性が３人に近づいてくる
その頭には甲羅が桃色の亀を乗せていた
真理子「えー、ここは政府が全国の自衛隊員の為に運営している、エリーズ０７号店だよ」
　　と説明する山口真理子（２７）
ともみ「真理子さんはこの地下エリアの
　責任者なの」
優子　「この変なおばさんが

と言って、あわてて口を押さえる優子
ともみ「えー、このお姉さんはこう見えても優秀なコンピューター
プログラマーなの
さっき二人が遊んでいた実験室やヒューマノイドも、みんな真理
子さんが作ったんだよ」
優子「へーえ、意外と頭良いんだね、この
おばさん　じゃなかったお姉さんは」
慌てて言い直すも、真理子の眉が
『ピクピク』っと　激しく反応する
真理子「2人とも私がこのエリアマネージャーのおばさんです、こ
っちがペットの
チビチビヨロシクね」
と全身を震わせながら言う真理子
『チビ～』と亀の鳴き声
みなみ、優子「しー（すい）ません」
真理子「あらっ、分かればいいのよ、それより2人ともお腹へって
ない」
みなみ「私は別に」
優子「優子は減っているよ」
みなみ「でも優子、まだ私たち仕事中だし」
と言いつつ、お腹を『グーグー』鳴ら
すみなみ
みなみ「あっ、あれ　おかしいな」
と、笑ってごまかそうとする
真理子「ふふっ、お腹は正直みたいね、二人
共ちょっと待ってて」
と笑い奥の方に入っていく、真理子
3～4分後虹色のトレイにパンを5つ　程乗せて帰ってくる
真理子「お客様お待たせしました、これが当店自慢のホンワカパン
だよ」

みなみ「真理子さんが焼いているんだ」
優子　「小さい頃パパ（養父）に連れてってもらったおばあさんのパン屋より数段美味しいや」
　と言って慌てて口を押さえる優子
みなみ「あっ、駄目だよ　優子、それ言っちゃー」
真理子「ははっ、それはもう良いよ、どうせおばさんだからそれより2人ともたくさん作ったから遠慮なく食べてねともみも食べなよ
　ただーし　無料なのは今日だけだからね」
みなみ、優子「うんおかわり」
　とパンをほおばりながら言う2人に
　笑顔になるともみと真理子
　『チビチビー』と亀も笑う

？　真理子（後書き）

その頃　牛丼屋で　新たなる事件が起ころうとしていた。

？　盲目のシンガー（前書き）

牛丼の中身がとつぜん消えると言う事件が起こる。

？　盲目のシンガー

N「それから数日後、マグロ星人が操る怪獣によって再び事件が起きようとしていた」

2

○渋谷公園通り、午後2時

同・牛丼家

　子ギャルタレントの峰岸みるく（15）が牛丼家に入る、中には5，6人の男女の客がいる

店員「いらっしゃいませ、お一人様ですか」

　と17位の女性の定員が言う

みるく「そんなの見りゃー分かるだろが、それより腹減ってるんだ　下着もらえる」

　みるくの言葉に思わず『ヨロ』っと、転びそうになる定員

定員「あのぉお客様うちは牛丼専門店ですので、洋服はございませんが」

みるく「ジョークだよ　ジョーク、最近の若い者はジョークも知らないのかよ」

　（ほんとはあんたの方が若いんだよ）

　と小声で呟く定員

みるく「さっきからずっとズッコけてないで、牛丼特盛でくれる」

　（チッお目―のせいだろが）と呟きつつ

定員　「かしこまりました得盛ですね」

　と、答える定員

男女の客「お姉さんこっちも特盛り2つお願いします」

　と男女のカップルも注文する

定員　「店長、特盛り3つ追加ね」

店長　「へイッ、得盛り3つね」

　と、五十位の店長が言う

しばらくして先ほどの定員が牛丼を運んでくる
みるく「わぉー美味しそう、さっそく頂こう」
と箸を割り、牛丼を食べようとする
みるく「こりゃ旨いっ、て・・無いじゃん」
少女が目を話した隙に中身が消える
みるく「おい、お姉さんふざけているのかよ
あたいは腹が減ってんだよ」
定員「おかしいですねえ、お客さんがもう召し上がったんじゃー無いですが」
みるく「ばかやろう、あたしはどっかの大食いタレントじゃあ無いんだ　そんなに早く飯が食えるかよ、いいから早く代り持ってこいよ」
定員「かしこまりました」
と定員、首をかしげながらも代わりの牛丼を運んでくる
○同・外
今話題の盲目のシンガー、七海（なつみ）が希望の翼を歌を弾きが立っていた。
男性「あれー、今日はお嬢さん一人かい」
と、通りすがりのおじさんがふいに声をかける
七海「はい、姉は2日前　病気で亡くなったんです」
と、七海は共に「歌手になろうね」って誓い合った双子の姉を思い出す。
男性「そうか、それは大変だったな　まぁがんばれや応援しているでな」
七海「ありがとうございます」
そう言うと七海は希望の唄を歌い始めた。
七海　♪何もかも忘れたくて飛び出した事も

ある、自分と言う存在を否定して　親や世間にも反発して生きてきた
自由ってやつに少し憧れていた　暗い瞳をして部屋に閉じこもっていた
少女の夢を見たの、それが今の私だったの・・・ノリル人は誰もみんな
弱虫なんだよ　でも何かと戦いながら必死で生きている、もし君がこの世界に
安らぎを求めるなら　君の心は　愛情で満たされるだろう♪
『パチパチパチパチ』
「いい曲だなあ」と握手喝采が起こる
同・店内
みるく「今度こそ、いただきます」
牛丼再び消える
『なっ、何だぁこりゃー』
刑事ドラマの俳優風に、大げさに驚くみるく
『マジックじゃあ、無いのか』
と、他の客達も騒ぎ始める

？　盲目のシンガー（後書き）

みーちゃん（峰岸みるく）は　こっちの世界では、過去（デルクラル）の記憶は封印されているらしい。

？　牛丼怪獣現る！（前書き）

マグロ星人は　怪獣ギュードーンを操り
全国の牛丼の消滅をたくらむ
（うムム！こりゃー大変だ？）

？　牛丼怪獣現る！

同・外
　外では青い角を持った水牛型怪獣が大暴れしていた。
ギュードーン『ギュードー』
七海　『キャー、何』
男性　「なんだありゃー」
女性　「かっつ、怪獣よ」
　『逃げろー』
　パニックする人々
○ＡＳＫ本部
　『ビビビビィー』
　と、鳴る警報機
ともみ「もしもしこちらＡＳＫ・・はい分かりました
（沢乃の方を向いて）隊長、渋谷区に怪獣が現れたそうです」
と、みんなに伝えるともみ
エリカ「・別にィとりあえず、全員出動すれば」
本能　「と、言う訳だ、行くぞみんな」
全員　「ラジャー」
同・格納庫（コックピット）
本能　「エネルギー充電」
一文字「エネルギー充電ＯＫ」
本能　「メインエンジン起動」
一文字「メインエンジン起動ＯＫ」
本能　「ＥＲＩＫＡ１号機発進」
風見　「同じく２号機発進やで」
　『ゴー』
と、飛び立つ機体
山寺　「がんばれよー」

と見送る山寺、みなみと優子は万能車
エリカ・モグランで2機の後を追う
『ブロロロロー』
マグロ星人「行けっ、水牛怪獣ギュードーンよ、町を破壊するのだ」
と、上空の円盤から指示を出すマグロ
星人
N「マグロ星人は怪獣ギュードーンを操り
全国の牛丼を消滅しようとしていた」
ギュードーンは東京スカイツリーに迫っていた
『ギャー怪獣よ』
と人々の悲鳴
マサヒコ「母ちゃん、また怪獣だってさ」
母とバーゲン・セールに来ていたマサヒコが怪獣を見つけて
言う
リツ「ラッキー、みんな居なくなったからこの隙に」
マサヒコ「でも、定員さんまで逃げちゃったよ」
リツ「お金だけ置いときゃー良いんだよ」
と答える逞しい母
ＥＲＩＫＡ1，2号機が空から攻撃を
開始する
本能「よっし、これでも喰らいやがれ」
『ビーィー』
と、光線を撃つ
ギュードーン『ギュードー』
ますます大暴れするギュードーン
一文字「だっ、だめだ　ビクともしない」
風見「本能はん、今度は同時攻撃どないや
や」
本能、一文字「ＯＫ」
『ビーィービーィー』

『ズバババーン』
と、左右からギュードーンを攻撃する
『がんばれー』
と地上から応援するマサヒコ
ギュードーンの手が機体の後部部分に
当たり、山の辺りに落下する1号機
『キュ―ン』
と、高度が下がる
本能「だめだ、一度どっかに降りて修理しないと」
風見「やりおったな、これでどうや」
『ババババババー』
と小型ミサイルを集中砲火する2号機
マグロ星人「無駄なことだ、ギュードーンはその位の攻撃ではビクともせんわ」
群集を誘導するみなみと優子
みなみ「優子、私たちも戦いに参加するわよ」
優子「まかせなさいって」
2人モグラン号に装備させているバズーカーで攻撃する
みなみ、優子「いくよ、ブレスト・バズーカ
「発射ぁ」
『ズバーン』
左目に当たりもだえるギュードーン」
ギュードーン「ギュードー」
マグロ星人「何をしている、ギュードーンよ
そんなやつらなんか踏み潰してしまえ」
と、上空から指示を出すマグロ星人
ギュードーン「ギュードー」
と、2人に迫るギュードーン
『ぐにゃ』

と、モグラン号のつぶれる音
みなみ「あーあ、やってくれちゃって」
優子「そんな事言っている場合じゃないよ
こっち来るし、どうしようみなみぃ」
みなみ「どうするって逃げるに決まっているじゃない、逃走中みたいに」
そのとき指にはめたコスプレリングが
『ピカ』っと、輝く

？　牛丼怪獣現る！（後書き）

いよいよ変身の時だ！

？コスプレの戦士？（前書き）

２人は有効に戦いを進める　でも決め技でモメテルいるうちに逆転されてしまう。

?コスプレの戦士?

～そのとき指にはめたコスプレリングが『ピカ』っと、輝く～

みなみ「これは、いくよ優子」
優子　「ＯＫ、みなみ」
みなみ、優子「コスプレクロス」
２人、両腕をクロスさせる
Ｎ「みなみと優子は両腕をクロスさせることによってコスプレパワーが全身に漲り、超戦士に合体変身（同化）するのである
　光とともにウサギの戦士が現れる
マサヒコ「母ちゃん、また現れたよ」
リツ　「そうかい、そりゃーよかったね」
　とバーゲン以外には動じない母
コスプレ仮面「天に星　心には勇気、愛の戦士参上　あなたのハートを、メロりんこしちゃうぞ」
　尻を振り、振り向きざまにピストルを
　撃つ真似をする独自のポーズを決める
○双子山
本能　「おっ、おいまた出たぜ、一体何なんだ」
一文字「さあ、どっかの山からウサギさんでも迷い込んだんじゃないですか」
　ふもとの山に降り故障箇所を修理
する本能と一文字
○渋谷
マグロ星人「出たな、ギュードーよ、クロノスの意志を継ぐ者など殺してしまえ」
　と、怪円盤から指示が飛ぶ

ギュードーン「ギュードー」
『ドドドドバーン』
　頭の蓋を開け、牛丼爆弾の雨を降らせる
コスプレ仮面「アレー」
　と、必死で避けるコスプレ仮面
マグロ星人「どうだ、もう降参かな」
　と、円盤からマグロ星人
コスプレ仮面「ご冗談を、戦いはこれからだよ」
　右腕のコス・ブレッドから鞭を出す
コスプレ仮面「メイビー・ビュート、さあ覚悟しな」
　『ギュッギュー』
　と鞭でギュードーンを縛る
コスプレ仮面「エレキ・ビュート」
　『ババババババー』
　と高圧電流を流す、コスプレ仮面
　『ギュードー』
　と、倒れるギュードーン
仮面M「留めはみなみがかっこ良く、コスプレ・アタックを決めるよ」
仮面U「いや優たんが、エンジェル・プレスで倒すよ」
仮面M「みなみが決めるよ」
仮面U「優たんだよ」
仮面M「みなみだって」
仮面U「優たんだよ」
　二人が決め技をもめている間にギュードーン、鞭を引き千切る
ギュードーン「ギュードー」
『シュバーー』
　角から牛丼光線をコスプレ仮面の口に向けて発射する
　『プクプクプク』
コスプレ仮面「ギョエー、もーうお腹パンパンだよ」

牛丼光線を受けたコスプレ仮面、ダルマのように膨れて『コロン』と倒れる
　ギュードーン　下腹部から性器を出し、コスプレ仮面に迫る
マグロ星人「やれー、一気にイテモウタレや」
　円盤内で、センスを持って声援を送る
マグロ星人
仮面U「ひえー、こんな情けないかっこで、優たんやられ（犯され）ちゃうの」
仮面M「みなみだってこんな牛丼怪獣嫌だよ
　『ピコンピコンピコン』
　と、コスプレタイマーが鳴る
N「コスプレ仮面は地球上では、４分８秒間しかいられないのである、もしタイマーが切れれば　その体は分解されるのだ
ちなみに人間大では４８分間なのである」
仮面M「やっ、やばいんじゃないこれは」
仮面U「だよね、どうしようか誰か助けてよ」
　性器を白熱させ、迫る怪獣に絶叫する２人
仮面U「どっ、どうしよう　やばいよ？」

？コスプレの戦士？（後書き）

コスプレ仮面（融合体）の時はみなみの声が基本である
みなみは鷹のエンブレム、優子は　リスのエンブレムを付け
共に黄色いマフラー（スカーフ＝赤や桃色のもある）をしている

？　スーパー念力？（前書き）

スーパー念力を使う、エリカの正体は（・・？
はたして！

？　スーパー念力？

風見　「そうはいかへんで、まだ　ワイがおるのを忘れとったな　誰だか知らへんがこの隙に逃げてくんなはれ」

『バキューン・バキューン』

と小型ミサイルを放つ風見

○ＡＳＫ本部

ともみ「風見さん、ＥＲＩＫＡネットで検索した結果　やつのウイークポイントは左肩らしいわ」

と、ともみから通信が入る

風見　「分かった、任せときなはれ」

『ズズバババーン』

とミサイルを左肩に集中する風見

ギュードーン『ギュードー』

と、唸るギュードーン

ビルの陰に潜む謎の女性、右手を肩の前に持っていき念波を送る

？「デョォー」

『ビビビビビ』

Ｎ「沢乃エリカは1分間だけ、スーパー念力が使えるのだ」

マグロ星人「何者だやつは、行けっ子マグロたちよ」

円盤から女性がいるビルに向かって

7匹の子マグロ達が降りる

子マグロ『ヒィッーヒィッー』

と、女性を取り囲む子マグロ達

エリカ「ちっ、変なのが現れた」

と、女性は腰から愛用の鞭を取り出し、子マグロたちに向かって振り下ろす

『パッチーンパッチーン』

子マグロ『ギェー』
　下半身から青い液体を垂れ流しながら
消えていく子マグロたち」
エリカ「とりゃー」
と投げを打つエリカ
エリカ「てゃー」
　と、今度は回し蹴りを決めるエリカ
子マグロ『ヒィッー』
　と青い液を垂らし全滅する子マグロ達
エリカ「おほっほっほっほっほ、女王様とおよび」
　スーパー念力を受けたコスプレ仮面
体内の毒素が消え　元に戻る
コスプレ仮面「よっしゃあ、セクシースタイル復活」
　とガッツポーズで言うコスプレ仮面
マグロ星人「しまった、形勢逆転の予感」
コスプレ仮面U「よくもやってくれたわね、優子必殺！
『チャン・タマ蹴りぃ？』
ギュードーンの下半身に見事にさく裂する
　これには堪らず『ギュードー』と飛び跳ねる怪獣
「ありゃー痛てーえぞ！」と人々
コスプレ仮面「こんどはみなみの番だよ、コスプレ・アタック」
　と　回転して頭から突っ込む
ギュードーン『ギュードー』
　とふらつく
コスプレ仮面「こう言うのはいかが？」
　『ギュっギュ』っと、太股で絞める
コスプレ仮面
　『いいぞー』
　と、人々の声
ギュードーン『ギュードー』

と性器から牛丼液を大量に放出する
ギュードーン
コスプレ仮面「今だ、メイビービーム」
『ビビビビビーィ』
交差させた両腕からCを模った光線が発射される」
ギュードーン『ギュードー』
と、大爆発する怪獣

？　スーパー念力？（後書き）

この時点ではまだ名前は確定してませんが物語（シナリオ）上はコスプレ仮面で通しています。

？　勝利のポーズ！（前書き）

コスプレ仮面の名前の由来です

？　勝利のポーズ！

マグロ星人「おのれー、覚えておれ」
と捨て台詞を残し、円盤ごと消えるマグロ星人
コスプレ仮面「それじゃー勝利のポーズ」
尻を『パンパンパン』と3回たたき
「やったね」と親指を立てるポーズに
唖然とする人たち
マサヒコ「母ちゃんあれだよ、あれ何だか分かる」
リツ　「そりゃーあんな派手な括弧しているから多分、コスプレ仮面なんじゃないの」
と、バーゲンを終えた母が呟く
マサヒコ「ふーん、コスプレ仮面かぁ　さっきのお姉ちゃんたちに似ていると思ったんだけどな」
マサヒコ、リツ「コスプレ仮面ありがとう」
と手を振る
『ピコンピコンピコン』
と、タイマーの音
コスプレ仮面「ショワッチュ」
と大空に飛び立つ
みなみ「なるほど、コスプレ仮面かぁ」
と、そこにみなみと優子の2人が現れる
マサヒコ「あっ、お姉ちゃん達」
と喜ぶマサヒコ
本能、一文字「おーい、みんなあ」
本能と一文字が駆けてくる
風見　「なんや、2人とも無事やったんかい

な」
といつもの口調で風見も話しに加わる
本能　「どうやら終わったな」
一文字「あの巨人のおかげっすね」
風見　「一体何者なんやろな」
マサヒコ「コスプレ仮面だよ、きっと正義
　の味方に決まってらい」
本能　「コスプレ仮面？」
　と聞き返す本能たち
みなみ「マサヒコ君が名づけたのよね」
優子　「良い名ね」
マサヒコ「えへっ、正式には母ちゃんだけどね」
　と、照れるマサヒコ
本能　「それにしても、隊長は最後まで現れなかったな」
風見　「まああの人は、所詮天下りやさかい」
みなみ（・いや、あのときの念力は多分）
　と『ボソっ』と呟くみなみ
一文字「みなみちゃん、どうかしたんすか」
みなみ「いやなんでもないよ、隊長は私たちの知らないところで助
けてくれていたんだよ」
優子　「きっとそうだよ」
本能　「だと良いが」
　５人、マサヒコ親子と別れＡＳＫ本部に帰って行く
Ｎ「その頃沢乃エリカは天下りで得た金を湯水のように使い
秋葉原のディスコで踊っていたのだった」
○秋葉原にあるディスコ午後６時３０
銀のラメが入った表柄の衣装に身を包
んだ女性が現れ、周囲は『おぉ』っ
と言う歓声に包まれる。
エリカ「コスプレ仮面かぁ、上手い事言うなあ、でも本当のコスプ

レ仮面は
何と言ってもこのエリカ様よね　ハッハッハッハ
と、尻を激しく振りながら歌うエリカ

？　狙われたＲＩＶＥＲ！（前書き）

１９６０年に日本政府とアメリカの政府が共同で作らせた宇宙船の機能を持たせた監視衛星ＲＩＶＥＲ！が何者かに狙われた、はたしてその目的とは？

？　狙われたＲＩＶＥＲ！

Ｎ「ここは遥かなる宇宙　アスラン１２号機は地球の移動衛星ＲＩＶＥＲに、資源物を運ぶ途中であった」
○地球付近
船員Ａ「一也（２７）ここまで来たらさすがに落ち着くなあ」
船員Ｂ「そうですね紅チーフ（４３）よかったらコーヒーでも入れましょうか」
船員Ａ「あっあぁー頼むよ」
船員Ｂ「了解」
『がサガサガサ』『ゴトゴトゴト』
船員Ｃ「んっ、沖先輩、食料庫の方で何か変な音がしますが」
船員Ｂ「ははっ、光太郎（１９）お化けでも出たかな」
と、笑い食料庫に確認に行く一也
船員Ｂ「うっ　うわー、何だこいつらは」
　食料庫に無数の子豚の大群、やがて一つの姿に合体する。
船員Ｂ「ばっ化け物ぉ、あぁー」
　豚の怪物はその船員になる
船員Ａ「一也、今の声は何だ、何があった」
船員Ｂ「ふっふっふ」
船員Ｃ『うわー先輩、何をするんです』
船員Ａ『いやっ、こいつは一也じゃない』
『ウワーァ』
『ブゥブゥブゥ』
　全員、豚と化す
Ｎ「アスラン１２号機でそんな事が起こって

いるとは知らないＲＩＶＥＲでは、科学者の敦子アンジェイラが待ちに待った一時帰国にえ　軌道の最終チェックを行っていた」

○監視衛星ＲＩＶＥＲ
同・コンピュータールーム
　白髪が混じった紳士が、衛星スクリーンで敦子に話しかけていた
真夏「敦子、そろそろ休憩にしたらどうだ」
　とチーフの真夏達也（６１）
敦子「チーフこれが終わったら休憩しますのでそう心配なさらずに」
　と、あっさりかわす敦子（１９）
真夏「それじゃーあまり無理するなよ」
敦子「分かった、分かったから邪魔しないで」
　と、少し睨む
真夏「おおっ怖い、じゃーまた来月な」
　と、少し寂しい顔をする真夏
休憩に入ろうとしたら再びスクリーンがつく」
真夏「それから言い忘れたがもうすぐ資源物資が着くはずだから、ハッチを開けておけよ」
敦子「了解しましたチーフ」
　と、おどけた口調でスクリーンのスイッチを切る
『ファンファン・ファンファン』
　と何がが、ＲＩＶＥＲに近づいた警戒音が聞こえる
敦子「おっ、もう着いたようね」
　とハッチ開ける敦子、しばらくして
船員Ｂが何かを抱えて入ってくる

敦子　「今、手が離せないのでその辺に適当に積んどいてください」
　と、船員を『チラッ』と見てそう指示を出す敦子
船員Ｂ『フッフッフッフ、今度はお前の体をもらう』
　体から船員Ｂが抜け落ち、豚の本体
　が現れる
敦子　『きゃーあ』
　敦子の悲鳴がＲＩＶＥＲ内に木霊し
　その体に入る、焼き豚星人
山里　「あのぉ、おはようございます
あっちゃん　なんか物凄い声が聞こえたけ
どゴキブリでも出たの」
　隣の部屋で仮眠をとっていた、同僚の山里良太（３６）が心
配して駆けつける
敦子（豚）「ふっふっふ、何でもない、ナンデモナインダヨ」
山里　「おっ、おまえはあっちゃんじゃないな」
豚の目が光る
山里　「うわ―ぁ」
　とそのまま気絶する山里
同・管理ルーム
　怪しい目をした敦子が、部屋に入ってくる
真夏　「敦子、さっきの悲鳴はなん・・だ」
　朱色の瞳から出る怪光線によって職員全員意識を失う
そこにスクリーン画像が入りマグロ星人からの指令が入る
マグロ星人「焼き豚星人よ、作戦は順調に進んでおるか」
敦子（豚）「はっ、マグロ様全て順調にございます」
マグロ「ふむ、ならば良い」
　通信画像が消える

？　狙われたＲＩＶＥＲ！（後書き）

ＲＩＶＥＲの基本設定には、亡くなった真理子の父（山口ひろし）がかかわっているのだ。

??豚になったエリカ（前書き）

ＲＩＶＥＲから豚化光線で人類を追い込もうとする　焼き豚星人
そして　豚になった「別にィ・・」のエリカ様は・・

??豚になったエリカ

N「その夜新宿地区で小さな地震があった」
○真夜中ある民家
『ゴゴゴゴゴゴゴ』
マサヒコ「母ちゃん起きてよ、地震だよ」
リツ　「何だいマサヒコ、まだ起きてたのかい」
とまったく、起きる気配がない
マサヒコ「そんな事言っている場合じゃーないんだよ　地震だよ、父ちゃんも起きてくれよ」
藤兵衛「何ぃ地震だって」
と、驚いて飛び起きる父藤兵衛（５８）
マサヒコ「父ちゃん、その顔なんか変だよ」
藤兵衛「何いってやがる、そう言うお前だって変だぞ」
枕元での二人の騒動で、ようやくリツも起きる
リツ　「さっきから何２人で騒いでるの」
マサヒコ「父ちゃん、母ちゃんもやっぱり変だよ」
藤兵衛「おまえ、その顔はどうしたんだ」
リツ　「何言ってんだ、あんた達２人も変な顔しているじゃないの」
３人「んっ」と互いの顔を指差す
マサヒコ「うわーぁ」
リツ　「豚だー」
藤兵衛「何だってこんな事に」
N「そんなことが起こっているとは知らない人々は、いつも通り平和な朝を迎えた」
○　翌朝
同・ＡＳＫ本部
ともみ「おはようみんなところで、昨日新宿の方で小さな地震があったらしいのだけど知ってる」

本能　「ああ、そうらしいな」
みなみ「あれっ、新宿って確か沢乃隊長の家の近くでは」
一文字「そうなんですよ、ＥＲＩいや隊長の家って広いんっすよ」
優子　「へーえ、よく知っているわね」
一文字「そりゃーこの前ＥＲＩと・・いや感ですよ、ただの感」
風見　「何や怪し、おますなあ」
そこにいつも通りにお尻を振りながら
沢乃が現れる
エリカ「あっルンルンルン・ん、みんなどうしたの　そんなに見つめられてもＥＲＩ
　はもう弥樹さまのもの」
本能　「ギョッ、やはりそう言うことか？　じゃなくって隊長顔見て顔」
　と驚く
エリカ「顔、昨夜弥樹さまと焼きそば食べた　から、青海苔でも付いてたぁ」
　と、言って腰を振りながら鏡を見る
エリカ『ぎょえー、しっ　信じられない』
　そのまま意識を失う沢乃
本能　「たっ、隊長」
一文字「エリっ、エリっ」
風見　「一体、どないなっとるんや」
　と、動揺するＡＳＫメンバーたち

　そのときスクリーンが勝手につく
敦子（豚）「ＡＳＫの諸君に告ぐ、我々は
衛星ＲＩＶＥＲを乗っ取った」
　と豚の目を光らせそう告げる敦子
ともみ「あっちゃん何言っているの、今夜こっちに着く予定じゃあ無かったの」

みなみ「・ちっ違うあの人、人間じゃない」
本能　「しかしあれはどう見ても、敦子隊員だぜ」
優子　「確かに外側はその敦子さんみたいでも中身が違うよ」
ともみ「ちょっと2人ともさっきから何言ってる訳、あっちゃんだよ　親友の私が
　見間違う訳ないじゃない」
敦子（豚）フッフッフ、娘たち良く見抜いた我々は今から、２４時間以内に人類総豚化計画を
　行う、もし回避したいならコスプレ仮面を我らに引き渡せ　そうすれば特別に
　人間の姿のまま永久奴隷で勘弁してやる　嫌なら全員皆殺しだ」
一文字「ふざけるなぁ、お前の言う事など信じられるか」
　場面ニュースに切り替わり、新宿区の人間が全員豚に変わった事を伝え、再び切り替わる

？？豚になったエリカ（後書き）

コスプレ仮面を差し出せば豚にならずに済む
そう言った人達がＡＳＫ本部周辺でデモを行うのだった。

??.長い夜（前書き）

人々の複雑な思いが交差する

??長い夜

本能　「そんなぁ」
敦子（豚）「どうだ我々が言ったことが事実だと分かっただろう、コスプレ仮面を
引き渡すかそれとも、全国民を豚にするかさあてどちらを選ぶか見ものだな、ブッブブッブッブ」
ともみ「待って、そんな事言われても私たちコスプレ仮面が何処に住んでいるか知らないし」
　通信、無常にも切れる
風見　「本能はん、ハッカー経験のあるあんさんならＲＩＶＥＲにアクセス出来るんちゃいますか」
本能　「ハッカーとは人聞きが悪いな、だが残念ながら無理だＲＩＶＥＲには特殊なファイヤーヴォールが何重にも張り巡らさせているからな」
風見　「では沢乃隊長はどうや、なんせメインプログラムを作った当人やさかい」
本能　「ばか、プログラム・コードなんかとっくに書き換えられているだろう、それに隊長は今、それどころじゃあーないだろ　ブタ化が進行しているじゃあないか」
ともみ「なら、どうすればいいんです」
本能　「・分からん　分からんが俺はこれから、村雨参謀等に緊急会議を要請してみる　みんな後を頼んだぞ、それと一文字おまえは良いから隊長に付いていてやってくれ」
一文字「嫌です、自分もみんなと一緒にいます」
本能　「今の隊長を慰められるのは、残念ながら一文字お前だけみたいだ」
風見　「そうや、ワイらの大事な隊長を頼みましたぜ　一文字焼き

はん」
一文字「はい、任せてください」
○翌朝
N「コスプレ仮面を引き渡せば豚にならずに住むそう言った噂が広まりＡＳＫ本部は朝から苦情の電話やメールの対応に追われていたのだった」
ともみ「もしもしこちらＡＳＫ本部・・
相手　「ＡＳＫは我々国民を豚にしたくなかったらさっさとコスプレ仮面を引き渡すべきだ」
風見　「もしもし電話変わったで、用はなんやねん」
相手　「時間がないんだろ、早くコスプレ女を引き渡しちまえ」
真理子「あちゃー、ＡＳＫのページ（ＰＣ）の方も苦情のメールでパンク状態だよ」
　と困惑した顔で真理子が入ってくる
ともみ「みんなあんまりだよ、今まで散々コスプレ仮面に助けてもらったくせに」
真理子「みんな本当は心の中では分かってるんじゃないかな　ただ怖いだけだと思うよ」
『チビチビ～』
　と亀も心配そうに頷く
外では市民の一部や暴走族たちが抗議を続けていた」
同・ＡＳＫ本部のある土手
青年　「おまえら、とっととコスプレ女なんか、引き渡しちまえよ」
とモヒカン頭の青年、野上タケル（１７）が喚く

少女「タケルの言うとうりよ　さっさとやりゃーいいのよ、どうせ宇宙人には勝てっこないだから」
　と、バイクに乗った赤毛の女性咲希美（１８）も罵倒する、他の人たちも
プラカードを持って同調する
同・ＡＳＫ本部
ともみ「どうしてこんなこと言われなければいけないの
　私、地球人として恥ずかしい　彼らは自分の星じゃない地球のために
一生懸命戦ってくれたのに」
と、両手で顔を覆ってなき崩れるともみ
みなみ「ともみ」
　複雑な思いで見つめるみなみと優子
○夕方
　会議を終えた本能が村雨参謀（４５）と入ってくる
風見「村雨はん、政府の考えは一体どうなっておまんのや」
村雨「残念ながら政府の決定は本部に寄せられている、電話やメールの内容と一緒だ」
真理子「つまりコスプレ仮面を引き渡せと」
風見「それはお受け出来まへんなあ、コスプレ仮面は今までワイらのために戦ってくれよった
それを引き渡せとはそないな事　ようしまへんわ」
ともみ「私も反対です、もちろん居場所は分からないけど　たとえ知っていてもみす
みす引き渡したりするもんですか」
本能「俺もそう言ってみた、だがコスプレ仮面一人と全国民とどっちが大切かと
言われたら　俺も、引き下がるしかなかった」
村雨「とにかく政府としても苦渋の決断なんだ、分かってくれ」

風見　「村雨はん、あんさんは昔　赤き魔人
と恐れられた人や　ここはワイらで決着をつけませんか」
村雨　「決着ってＲＩＶＥＲにか、その前に豚にされてしまうぞ」
風見　「・・・・・」
　　無言で答える風見、約束の時間まで5時間を切っていた
村雨　「とにかく政府の決定は絶対だ、俺はエリを見舞ってくる」
風見　「どないも出来へんのか、どないも」
　　壁を叩きながら、くやしがる風見
真理子「あれっ、そう言えばみなみちゃんと
　優子ちゃんは」
本能　「おかしいな、さっきまでそこにいた筈だけど」
同・治療室
一文字「あっ、これは村雨参謀」
村雨　「エリっ、俺はどうすればいいんだ
どうすれば」
　　治療カプセルの前でそう呟く村雨
エリカ「り・ょ・う、そんな怖い顔り・よ・
　う・らしく・ないよ・・」
　　そう言ってまた意識を失う沢乃
村雨、一文字「おいっ、エリっ、エリ」

？？人間たちの後悔　（前書き）

焼豚星人によって遂に人間たちは豚になってしまう。

??人間たちの後悔

四話『コスプレセブンの奇跡』
○　ＡＳＫ本部がある土手
みなみ「いいわね優子」
優子　「うん、覚悟は出来てるよ」
　　『ピカピカピカ』
　　と、リングが輝く
みなみ、優子「コスプレクロース」
　　『ピカッ』
　　等身大のまま、ＡＳＫ本部に向かうコスプレ仮面
○ＡＳＫ本部
　　コスプレ仮面が基地に入ってくる
村雨　「君はコスプレ仮面」
コスプレ仮面「私を引き渡してください」
村雨　「良いのか」
コスプレ仮面「はい、それで皆さんが助かるなら」
村雨　「そうか、すまん」
本能　「まてよ、参謀」
村雨　「今更止めても無駄だぞ」
本能　「違う、俺たちも行きます」
村雨　「よし、みんなで行こう」
○土手
　　コスプレ仮面を連れてＡＳＫがやってくる、その状況を見守る市民たち
本能　「聞こえるか、マグロやろう出てきやがれ、どうせ今回の首謀者もおまえだろう」
　　怪円盤が上空に姿を現す
マグロ星人「フッフッフッフ、なるほど鋭いな、ではコスプレ仮面

を置いておとなしく引き下がって貰おう、良いか変な真似はするなよ」
風見　「ふん、全員の命がかかっとるんや
そんな真似する訳ないやろ　このあほたん」
　　コスプレ仮面を残してその場を離れる
本能たち
マグロ星人「フッフッフ、では焼き豚星人よ
　地球人たちを豚に変えるのだ」
ともみ「何ですって」
真理子「約束したじゃない」
マグロ星人「約束だと知らんな、それは私の個人的な発言　約束ではない」
本能　「きさま最初から」
　　怒りをあらわにするＡＳＫメンバー達
○衛星ＲＩＶＥＲ内
敦子（豚）「ブタ化光線放射」
　　『ブブブブブブ』
Ｎ「ブタ化光線は次々に生物を豚に変えていった、人間たちはコスプレ仮面を裏切った事
を後悔しながら豚になっていったそして
一ヵ月後東京は巨大な養豚場になっていた
豚は自分たちがかつては人間だったと言う事さえ忘れていたのだった」
○秋葉原上空
マグロ星人「フフフフフフ、これで地球は
　わしの物だ、もはやメディーナ様が来るまでもないフッハッハッハッハ」
　と円盤の中で高笑いをするマグロ星人

??人間たちの後悔　（後書き）

遥か宇宙のかなたコスプレ星雲から　使者がやってくる。

??:新たなる力（前書き）

カメのミクランと共にやってきた　謎の女性によってみなみと優子は新たなる力を得るのだった。

??新たなる力

N「人間たちを豚に変えて丁度2ヶ月たったある時、宇宙の彼方から謎の光が降り注いだ
それは　平和を願うコスプレ星人たちが地球に送ったサイクロン（奇跡）の光だった
その光線を受けた人々は徐々に人間に戻っていった」

『ビビビビビィー』

○土手
みなみ「優子、私たちいつの間にか人間に戻っているブゥ」
優子　「あっ　ほんとだ、ブゥ」
その時大亀のミクランに乗って、女性が歌を唄いながら海から現れた」
セブン「遥かな、星がーふるーさとだ」
みなみ「あの、あなたは」
セブン「私の名はコスプレセブン、地球上では『大鳥麻衣』と呼ばれていました」
優子　「その麻衣さんが何の御用で」
セブン「何の用とは失礼ね、マグロ星人は強敵ですそれゆえあなた方にはそれを倒すアイテムを持ってきました」
みなみ「アイテム」
セブン「受け取りなさい」
　そう言うと2枚のカードを2人に投げるセブン、みなみは勇者を意味するルビーのカード、優子は太陽を意味するユリシーズのカードそれぞれを受け取る
セブン「そのエンドラのカードはこれまでの数倍のパワーが引き出せます」

みなみ「数倍のパワーを」
セブン「その力を使ってあなた達2人が
大好きな地球を守りなさい、分かりましたね　ではまた会う時まで」
みなみ、優子「ありがとうコスプレセブン」
　と、手を振る
セブン「すすめ銀河のあくまでもー」
　と海原に消えていくセブン
　『ピカピカ』
　とリングが光る
みなみ「ルビー変身」
優子　「ユリシーズへんしん」
　とカードを天に翳して叫ぶ
　『メモリーオン』
　システムオンが鳴る
N「みなみと優子はエンドラのカードを翳す
事によってコスプレパワーが全身に漲り
コスプレ仮面に変身するのである
ちなみに今回はタヌキのコスプレだった」
ルビー「宇宙の果てからやってきた正義の戦士ルビー」
「変幻自在に悪を切る、太陽の使者ユリシーズ」
空手のポーズを取って現れるルビーと
ユリシーズ
W仮面「我らコスプレ仮面シスターズ、あなたのハートをメロりん
こしちゃうぞ」
尻を振り振り返って撃つ真似をする
　独自のポーズが決まる
マグロ星人「フハッハッハッハ、出たなコスプレ仮面焼き豚星人よ
今一度地球人たちを豚に変えるのだ」
　円盤から指示を出すが、衛星からは
何の反応も無い

マグロ星人「どうした焼き豚星人、何かあったのか」
と円盤内で怒鳴るマグロ星人
Ｎ「その少し前サイクロンの光を浴びたＲＩＶＥＲでも異変が起こっていた」
○ＲＩＶＥＲ内
敦子（豚）「何だ、この溶けるような光は」
『ウッ、ウッ』
その体から何度もダブリ、やがて敦子の体が抜け落ちる
焼き豚星人「しっしまった、外れたか、ならば今度は死ね　娘よ」
敦子　「そうはいかなくてよ」
『ハッ、ヤァー』
とパンチを決める
『ブター』
と怯む焼き豚星人に、さらに廻し蹴りを繰り出す敦子
敦子　「死ねーブタ野郎」
焼き豚『ブター』
と吹っ飛ぶ
焼き豚「ちっ、調子に乗るな」
『シュバー』
と豚酸（すぶた）を吐く
必死でかわす敦子、コックピットの一部が『ジュワー』と溶ける
焼き豚「我らに歯向かった事を、後悔して死ぬが良い」
と敦子の首を右手で吊り上げる
敦子　「うっうっ、息が　出来・ない」
焼き豚「フッフッフッフッフ」

???新たなる力（後書き）

コスプレセブン（まいまい）によって新しい力を得たコスプレ仮面2人の新必殺技がさく裂する。

??:壮絶な戦い！（前書き）

秋葉原で大暴れする怪獣ギュ―ドンに　コスプレ仮面の必殺『会いたカッター・ブーメランがさく裂する！

??壮絶な戦い！

○秋葉原
ルビー「どうやら手違いがあったみたいね」
マグロ「ならば出でよ、ギュードーン2号」
　円盤から赤い色の光が地上に放たれる
ギュー2号『ギャーォー』
　と赤い角の2号が出現した
ユリシーズ「まずは私からいくよ、コスプレアタック」
　と、突進する
ギュー2号『ぷぷぅ』
　と後ろ向きになってガスを噴射する
　一撃で市民たちは失神
ユリシーズ「くっ、臭っ」
ルビー「何なのこのガスは」
手で口を押さえながら聞くルビー
ギュー2号「驚いたか、わしのガスはスカンクの数千倍の威力があるのだ」
　とユリシーズにまたがり再びガスを
　噴出するギュードーン2号
ギュー2号『ぷぷぅ』
ユリシーズ「ああーん、もう最低（（＋＿＋））」
ギュー2号「今度はそっちだ」
　『ぷぷぅ』
　とルビーにも噴射
ルビー「もーう、勘弁してよ　あんた何食ってんのよ?」
『ピコンピコンピコン』
　と、タイマーがなる
N「コスプレ仮面は地球上では4分8秒間し

かいられないのである、もしタイマーが切れればその体は分解されるのである」
○ＡＳＫ本部
　ＡＳＫのメンバーはブタ化の影響で動けなかったが、ただ一人動けるものがいた
ビーナ「ポイント秋葉原０１２０、目標牛丼怪獣　発射―」
○秋葉原
　『ダダーン』
と分子破壊ミサイルがギュードーン２号に向かって放たれる
ギュー２号『ギャーォー』
　ミサイルの炸裂によって苦しみだすギュードーン２号
ルビー「いまだ、ダイヤモンド・ソード」
　ヨロヨロっと立ち上がって腕のコスブレッドを剣に変えるルビー
マグロ「何をしている、牛丼分身だ」
　円盤からの光線を受けて、パワーアップするギュードーン２号
ギュー２号「影牛丼」
　『ギューギュー』
　と黒い分身たちが本体とともにルビーの周りを　ぐるぐる回る
ユリシーズ「る、ルビー」
　ガスを直接顔に受けた為、まだ回復していないユリシーズが心配する
ルビー「優子は黙って見てて」
　と目を閉じ、剣を時計回りにゆっくり回す
ルビー「本物はそこだ、必殺唐竹崩し」
　本体のお腹を『ズバッ』と切り裂く
ギュー２号『ギャー』

中から大量の牛丼液がこぼれる」
ユリシーズ「こっ、今度は私の出番だよ」
ふらつきながらも立ち上がるユリシーズ
ユリシーズ「ユリシーズの盾」
コスブレッドを小リスのエンブレムが付いた円盤状の盾に変える
ユリシーズ「必殺会いたかったぁブーメラン」
盾の周りからギザギザの刃（カッター）が飛び出し
ギュードーン2号　目掛けて投げる
『ブシュブシュブシュ』
カッターブーメランは7色に輝きギュードーン2号の両腕を切り落とす
ギュー2号「あらまっ」
ルビー「今だ、いくよユリシーズ」
ユリシーズ「うんルビー」
W仮面「ダブル・コスプレキック」
大きくジャンプし、空中でCのぽーっズを決め　怪獣めがけて落下する
ギュードーン2号「ギュードーン、バリアー」
牛丼汁の波動が怪獣を包み、コスプレ仮面に向かって放たれるルビー、ユリシーズ「てやーあ」
足が摩擦で赤く光り、光の壁を次々とぶち抜く
『バアーン、バーン、ズババババ）
大閃光が起こる
ギュー2号「ギャー、牛丼をもっと食べようね」
と空中で爆発する怪獣
マグロ「くそーマグロ変身」
と円盤から出て巨大化する
N「一方、ＲＩＶＥＲでも壮絶な戦いが続いていた」
敦子　「あっ、あっ・あっー」

と意識を失ったと見せかけて焼き豚星人に蹴りを入れる敦子
敦子　「タアーァ」
焼き豚「ブター」
と再び吹っ飛ぶ
焼き豚「おのれー味な真似を、豚矢でも喰らえ」
『ババー』
と敦子に毒矢を放つ
山里　「あっちゃん、危ない」
山里が敦子を突き飛ばし矢をお腹の中央に受ける
敦子　「良太さん」
山里　「あっちゃん、無事でよかった　僕ずっと前から　あっちゃんの事を」
敦子　「うん、わかってたよ」
山里　「あっちゃん・・」
そのまま絶命する山里、そのとき膨大な怒りが敦子の全身を覆った
敦子　「あ～んた絶対許してあげない＞、～´＜」
山里が持っていたノヴァーバズーカーを手に取る
敦子　「いくよ良太、３・２・１発射―」
焼き豚『ウヴォー』
とドア事吹っ飛ぶ
焼き豚「全国の焼き豚食品バンザーイ」
１キロ先で大爆発する

??:壮絶な戦い！（後書き）

マグロ星人の野望は失敗に終わり、地球には平和が訪れた
そして　エリカと弥樹ちゃんの恋の行方は?

???　エリカ様の恋の行方は？（前書き）

人々とコスプレ仮面の絆です

??　エリカ様の恋の行方は？

敦子　「良太さんやったよ」
　と涙し、矢を抜こうとするが矢はペンダントで止まっていて
すぐに目を覚ます山里
敦子　「り、良太さん」
　と戸惑い気味に言う敦子
山里　「あっ、あれっそうかおばあちゃんの形見のペンダントが守
ってくれたのか」
敦子　「よっ、良かった」
　と涙を拭う敦子
真夏　「とにかく終わったな」
　と真夏が現れる
山里　「真夏チーフ」
敦子　「いえまだよ」
　ＲＩＶＥＲのゼノン砲をピンポイントで地上のマグロ星人に
あわせる敦子
敦子　「いくわよ、ゼノン砲発射ぁ」
○秋葉原
マグロ「何故だ、何ゆえおまえたちは地球人を守るのだ
　人間は誰一人味方しなかったではないか」
ルビー「人は誰も弱虫なんだよ、でもほんの少しの勇気さえあれば
変われるんだって私は思うんだ」
ユリシーズ「優子も、そう信じてる」
　そのときＲＩＶＥＲからゼノン砲が放たれる
　『ババババババー』
マグロ「人間を信じているだと、ふっふ甘いなわしは人間は　しん・
じ・ぬ　ぞ・・」
　そう言い溶けていくマグロ星人

○ＲＩＶＥＲ
敦子　「やったーあ、良太さんだーい好き」
　　と、あからさまに山里に飛びつく敦子
山里　「しっ、しあわせ」
　　と照れる山里
○秋葉原
ルビー「それじゃー勝利のポーズ　いっとこか」
ユリシーズ「そうだね」
Ｎ「２人はいつものように尻を『パンパンパン』と叩いた、でもそのとき
沢山の人たちが後ろを向き『パンパンパン』と返したのだった
それは人々の何よりの感謝のしるしだった」
野上　「俺たち今まで、自分の事しか考えられなくなってたんだ
世の中は大体そんなもんだし
　それが普通だと思っていた」
希美　「でも、これからは違います　何事も誠意を持って行えば通じるって
あなたたち２人が教えてくれたから　コスプレ仮面ありがとう」
　とモヒカンの少年と赤毛の少女が人々を代表して答える
野上、希美　「コスプレ仮面ありがとう」
　『コスプレ仮面ありがとう』
　と全員の感謝の声が周囲に木霊する
Ｗ仮面「みんなー」
　その後コスプレ仮面と人々との
　『パンパン』の応酬がしばらく続いた
本能　「素晴らしい光景ですね」
村雨　「ああ、我々人間と彼ら宇宙人たちとの理屈を超えた交流が始まるかもしれん」
　『ピコンピコンピコン』
とタイマーの音

ルビー「ショワッチュ」
ユリシーズ「ショワッチュ」
　大空に飛び立つ
紅井小春「ちゃは　失敗かぁ、使えない奴」
と岩陰から見つめる小春
数日後
○ＡＳＫ本部
　本能が辺りをキョロキョロしながら部屋に入ってくる
本能　「ともちん、例の書類どこいったか知らないか　ん　他のみんなは」
ともみ「医務室よ、私もこれから行くところだけど」
本能　「むっ、医務室　そうか」
　と、医務室に向かう本能とともみ
　ドアの前には山寺、真理子、みなみそして優子の４人がいた
同・医務室
本能　「みんな様子はどうだ」
山寺　「し－今いい所だから黙って」

同・室内
　ベッドに横になった沢乃に、一文字が話しかける
一文字「ＥＲＩ」
エリカ「なあに、弥樹さま」
一文字「・俺が守ってやる、これからもどんな時でも　俺がＥＲＩを守ってやる」
エリカ「・うれしー弥樹ちゃん、その言葉　ずっと・・待ってた」
○外
山寺　「よし、ここで愛のテーマーだ」
　ＭＤをプレーヤーに入れる山寺
『ジャン・ジャ　カ・ジャーン』

と結婚式のテーマーが流れる
真理子「あっ、やまちゃんのばか　それはちょっと早いよ」
山寺　「いけない、間違えたこっちだ」
と、ＭＤを入れなおす
○室内
エリカ「この音楽は確か、ある愛の唄のテーマだわ」
一文字「エリ」
真理子「いまだ弥樹ちゃんブチュと行けもう何やってるのじれったいなあこうするんだよ、こう」
と、身振り手振りで興奮する真理子
みなみ「あのぉ、真理子さん聞こえるよ」
真理子「しー（すい）ません」
愛を育む２人、そして　それを応援する仲間達だった。

？？　エリカ様の恋の行方は？（後書き）

日本各地で物や場所が入れ替わると言う
奇妙な事件が起こる。

???『ぱぱるーん星人の挑戦』（前書き）

自称アイドルオタクの結城ともみは、仕事を脱げ出して８０年組の　アイドル同窓会を見に行った。

??『ぱぱるーん星人の挑戦』

1アイドルが変
○東京秋葉原
N「ここ、ホテル《蛇ローション》では８０年代のアイドルの同窓会が行われていた」
ともみ「さすが８０年組の同窓会となると豪華ねえ」
啓介「せっ先輩！いいんですが？仕事サボってこんなとこ来ちゃって」
ともみ「仕事～お・いいのいいの、ここんとこ事件らしい事件は起こってないから」
啓介「でっ、でも僕帰んないとおやっさん
（山寺）に怒られますかから」
ともみ「そんときゃーあたしに強引に誘われたって言わ～ァいいでしょ
　現在のアイドルブームの礎を築いたと言っても過言ではない８０年組の同窓会とあっては
アイドルオタクの私としてはやっぱ見逃せない訳よわかる？」
『せいこちゃーん』と声援を送るともみに少し呆れる整備士見習いの神（１７）
N「やがて幕が上がり左右から８０年代を代表する女性アイドルたちが登場し
辺は物凄い完成に包まれる・・・が、しばらくしてその声援が『えェ～っ』と言う驚きに変わる」
石黒あやめ「これから１９８０年組のアイドル同窓会を始めます
初日の女性編の司会は元・バーニング娘。の石黒あやめが努めますのでよろしくね」
啓介　『わっ、あやめだ、懐かしいな
河合井奈保子もいるぜ』

ともみ「ねえ、啓介　星子ちゃんってあんな巨乳だったけ、柏浜芳恵ちゃんと胸入れ替わってない」
啓介　「そー言われてみれば、でも気にしなきゃあーいいじゃないスカ」
ともみ「その言い方、弥樹ちゃんのつもり」
　それは小さな事ではあったが、アイドル研究家を時に自認するともみにとっては、納得できない出来事だった？

???『ぱぱるーん星人の挑戦』（後書き）

マサヒコが通う学校でも事件が起きていた。

??? 金髪先生登場！（前書き）

マサヒコが通う鯨学園では歴史の授業が行われていた。

??　金髪先生登場！

２教科書も変
○翌日　鯨学園３年Ｂ組
朝８時３０
Ｎ「金髪をした４０位の先生が出席をとっていた」
竹田先生「え～ではこれから出席を取ります
三原（はい）　いっつも元気があってよろし
い、近藤（はーい）　返事は短めにでは次
杉田？杉田、居ないのか」
賑やかな教室なのにすやすや寝ている
杉田を起こす美園
美園　「おいっ、魔王、魔王ってばー
いいかげんオキナヨ」
杉田、慌てて目を覚ます。
杉田　「あっ、金髪先生（ノ。Д。）おはよう（＾▽＾）ゴザイマース」
竹田　「ばかもん俺は竹田だ」
と激怒する竹田鉄児（４２）
竹田　「では次に、マサヒコ　どうした岡崎雅彦居ないのか」
先生の問いかけに全員雅彦を目で追う
後ろから扉が静かに開き、マサヒコが
ほふく前進で入ろうとするが、途中で
先生に見つかる
竹田　「おはよう雅彦君、今日も遅刻かね　今月だけでもう６回目だろう」
マサヒコ「ブブー、不正解８回目だよ」
バッカモーン、余計悪いじゃないか」
先生の一撃にシュンとするマサヒコを

席に座らせる竹田先生
○1時間目歴史
竹田　「え～、諸君らは天下統一したのは
誰だか知っているかなあ」
マサヒコ「はーい」
竹田　「では雅彦、名誉挽回してみろ」
マサヒコ「そりゃーやっぱ、今はＡＫＢクラブでしょ」
『そうだ、そうだ』
と周囲の声
竹田　「え～、皆さん静粛に」
では会話は収まらない
竹田　「ばかも～ん、黙れっちゅうのがわからんとか　このばかちんがァ」
先生の一言にクラス静まり返る
竹田　「え～話を続けます、先ほど雅彦くんが言ったのは芸能界、特にアイドル界の
事だと思います　彼女らは見事に様々なライバルたちを退けトップに立ちました
大変素晴らしい事だと先生も思いますが、今から3百年以上昔にも人々が生き残りをかけて戦った時代が有りました　はい、わかる人は手を挙げて」
杉田　「はい」
竹田　「では杉田」
杉田　「安土桃山時代ですね」
竹田　「そう、族に言う戦国時代です
マサヒコ　歴史１６頁を読んでみろ」
マサヒコ「はーい（しゃーないな）
竹田　「つべこべ言わず読みなさい」
マサヒコ「チッ、分かっているって、エ～と
終わりが見えない戦乱の時代にピリオドを打ったのは　あれ～今

川義元だって」
竹田　「こらこら、何をふざけているんだ」
　　怪訝そうに教科書を見る竹田、思わず驚く
竹田　「なっ、なんだこりゃー」
　　よくよく調べると文章が全て改変されてたのだった。
『ギャオ～』
遠くで響く怪獣の声

??　金髪先生登場！（後書き）

修学旅行で、京都プラトンへと向かう　バス
しかしそこでも奇妙な事件が・・

??　アイドルのピンチ！（前書き）

ＡＫＢクラブの高橋トマトと峰岸みるくは　バラエティー『エッサ・ホイサ』の撮影の合間を利用して近くのコンビニに買い物に出かけたのだが・・・

３地理も変？
○京都同バスの中
　４～５０名の女子高生がバスで
　京都プラトンに向かっていた。
女子高生Ａ「ねえねえ、今度のＡＫＢの曲も
　なかなか（・∀・）いい感じじゃない♪」
女子高生Ｂ「そうかなあ、私はビーズゥ意外
　興味ないけどさあ」
　修学旅行で京都に向うバスの中で、はしゃぐ女子高生たち
まるみ先生「みんなおしゃべりはそれくらいにして
もうすぐ京都プラトンに着くから降りる支度をしなさい」
　と、注意をする夏まるみ（３９）
一同　「あーい」
バスガイド「え～皆様おつかれさまでした、バスはまもなくホテル
前に到着いたします」
女子高生Ａ「わぁあ、高島マサノブいるかなぁ」
女子高生Ｂ「さゆみのばーか、それはドラマじゃーないの」
バスガイド「ＨＯＴＥＬプラトンに到着しました、では気をつけて
お降りください」
　『モ～ォ』
バスガイド「そう、牛さんも歓迎してくれていますね？？
　えっ？モ～ォ！」
　奇妙な声に振り向いたガイドと女生徒
　たちが見たのは北海道的な牛牧場であった。
女生徒Ａ「なんじゃらホイ」
女生徒Ｂ「何でこんな街中に牧場があるのよ」
女生徒Ｃ「知らないわよ」

まるみ先生「おかしいな、地図では確かホテルのはず・・ハハ
・なっ　なっち　の故郷と間違えたかなハハハ」

４悪戯天使　ぱぱるーん
○東京千代田区
人気グループＡＫＢクラブの高橋トマトと、峰岸みるくの２人は３
０パーセントを超える　人気番組
『エッサ・ホイサ』の休憩中を利用してコンビ二に　買い出しに
出かけた
トマト「みーちゃん、今日は何買うの？」
みるく「う～んとねえ、よし決めた今日はこけしだ」
トマト「こっこけし（・・？」
思わず転びそうになるトマト
コンビニは歩道橋を渡ればすぐそこだった。
日曜、それも曇り空とあって人通りは全くと言っていいほ
ど、無かった
男性Ａ「お嬢さんたち、こんな寒い日に何処行くんだい」
男性Ｂ「しばらくお兄さん達といいことしない」
サングラスの男性（Ａ）と見るからにブッチャースタイルの
男性（Ｂ）
が現れ、ものすごい力で２人を押さえつけ　下半身を出始めた
トマト、みるく「ひえーかんべんして・・・」

??　アイドルのピンチ！（後書き）

不思議な事が起こり　みーちゃんと　トマトはピンチを免れる。

??? アイドル達の反撃！（前書き）

男女の体を変える、謎の人物現る。

??　アイドル達の反撃！

その時遠くから奇妙な括弧をした少年が呪文を唱えると、屈強な男性2人
が女性に変わり代わりに、トマトとみるくの2人が筋肉隆々の男性に変わった
男性A「なんあんだ、どうなっているんだ」
男性B「とっ、とにかく今日は帰ろう、兄貴」
と青ざめる二人
しかし強姦されかけたトマトとみるくは「そうはいきません」と2人を睨む
そして、下半身を確かめて『ポッ』と赤くするトマト、みるく「せ～の、突撃」
『バコッバコッバコッ・バコッバコッバコッバコッ』
と女性となった2人を犯し始めるトマト「おらっ、おら×3」
男性A「かっ勘弁してください」
みるく「ビービー、泣いてるんじゃーねーや」
と言って　泣き叫ぶ2人にビンタを連打するみるく
『バシ・バシッ』
男性B「ふえーン・・くすん」
トマト「おらァ！ズバット　決めるぜ！」
『バコ・バコ・バコ・バコ・バコッ』
男性A「あアァ、なっなんかいい熱いものが頭にガンガン溢れてくるで」
男性B「こんな気持ちになれるって、俺たち付いているっすね、あーあああ！」
トマト「よっしゃあ、フィニュッシュだぜ」
男性A『アーア、うぉーおおお』

行為が終わった後、地面で泣きわめく元男性二人
『ヒィィィー』
と　すすり泣く
みるく「少しは女性の気持ちがわかったか」
男性A、B「わっわかりましたァ」
と涙声で言う2人
その時全員、元の体に戻っていた
気がついた男性2人は裸で子供みたいに
『ビービー』喚きながら、一目散に逃げ出していった。
みるく「いっ、今のは何だったの？」
トマト「さあね、でもいい体験が出来たからいいじゃない」
みるく「そっ、そ　だね、タハハ！！！」
訳も分からず納得するトマトとみるくだった。
ぱぱるーん「ハハハハハ、あー面白　僕ちゃんはしばらくこの世界で、遊ぶのら」

??? アイドル達の反撃！（後書き）

ＡＳＫ本部では一連の事件についての検証が行われていた。

？？？事件の検証！（前書き）

謎の事件についての会議です。

???事件の検証！

5対策会議
○ＡＳＫ本部
　ＡＳＫ本部ではここ1週間のうちに起こった
　奇妙な事件について話し合っていた。
エリカ「ではこれから最近起こっている不思議な事件について報告願います」
本能　「それじゃーまず俺から、歴史などの文献や教科書の内容があきらかに変わっているみたいなんだ？」
真理子　「具体的に言うと」
本能　「たとえば　天下をとったのが今川義元とか、聖徳太子はクレオパトラと結婚したとか、もう無茶くちゃだぜ」
一文字「こっちは女性が男性に変わったとか
　その男性が妊娠したとか　破水したとか？もう訳わかんないっすよ」
ともみ「私の方は自分で目撃した事だけど
　アイドルの部分、部分が入れ替わっているの」
真理子「どんなふうに、それ興味あるわ」
ともみ「たとえば巨乳の芳恵ちゃんがぺちゃになっていたり、かと思えば
星子ちゃんが巨乳に変わっていたりとか、　他には御能姉妹が
　合わさって首が2つあったりとか言うの見たわ！」
エリカ「ゲッ、それはちょっと気持ち悪いわね」
全員　『ほんと　ほんと』
真理子「でも私は、もっと身長がほしいな？」
みなみ「私たちは京都に　札幌の牧場があったとか」
優子　「四国に奈良の大仏が引っ越してきたとか　あと富士山が

ニューヨークに現れたって報告もあるし（・・？」
風見　「いったい世の中どないなっておりまんのや」
真理子「・・でも私は、もっと身長がほしい・・」
エリカ「これは　もう誰かの仕業としか考えられないわね」
一文字「それは何者っすか、心当たりは」
エリカ「それが・・さっぱり見当もつかないのよね」
ともみ「こっちはぱぱるーん天使をを見たって報告もあるけど？」
本能　「ぱぱるーん？」
一文字「何ですか、それ（・・？」
優子　「あれっ、知らないの　今秋葉原で人気があるアニメのキャラクターだよ」
一文字「マジッすか？」
みなみ「マジすか学園」
N「なかなか、結論は出ないのだった。」

？？？事件の検証！（後書き）

数々の事件をまき起こした、ぽぽるーん星人の目的とは
はたして？

？？？　一対一の対決！（前書き）

悪戯好きんな、ぱぱるーんの目的とは？

???　一対一の対決！

ＡＳＫ本部のスクリーンが自動的に入る。
ぱぱるーん「皆のもの　おはようなのら」
みなみ「あんたは誰」
ぱぱるーん「僕ちゃんのプレゼント気に入ってくれたみたいだね」
一同　「なっ、何」
エリカ「するとあれは全部あなたの仕業なの」
ぱぱるーん「そのとおりら」
本能　「でっ、その目的は」
優子　「ズバリ、悪戯ね　だってガキッほいもん」
『ドテっ』
スクリーンのぱぱるーん　こける
（私は背を高くしてほしい）
と真理子が呟く
ぱぱるーん　「ちがーう、いたずらではないんだ～そう悪戯ではないんだよ」
ぱぱるーん　の目が光り見覚えある人物が現れた」
エリカ「そっ、その姿は、忘れもしない～誰だっけ？」
本能　「マグロ星人だろ」
ぱぱるーん「フフフ　その通り、私はマグロ星人の従兄のぱぱるーん星人様だ」
全員「ぱぱるーん星人ですって？」
ともみ「でも何であんな子供の括弧していた　の」
ぱぱるーん「それは秋葉原で拾った雑誌を真似てみたのさ」、どうだそっくりだっただろう、
しゃべり方まで研究したかいがあったわい」
全員　「ん　な事せんでいいわ」
ぱぱるーん「とにかく我がマグロの仇を討ちたいゆえ、コスプレ仮

面に一体一の決闘を
申し込みたい　場所は最近出来た　摩耗算時間は午前2時、以上だ」
そう言い終えると映像が切れた

6真夜中の決闘
○新宿　摩耗算
午前2時
摩耗算入り口にエリカモグランが止まり、3人の女性が降り立つ
エリカ「それじゃー、みなみ、優子頼んだわよ」
そう言い笑顔で去っていく沢乃

？？？戦いの結末！（前書き）

ぱぱるーん星人とコスプレ仮面の対決です。

???戦いの結末！

みなみ「優子、久々に合体変身行くよ」
優子　「準備ＯＫ」
　　２人タイミングを計る
みなみ、優子「コスプレクーロス」
　　光と共にコスプレの戦士が現れる、ちなみに今回はフクロウのコスプレだった。
ぱぱるーん「約束通り来たなコスプレ仮面」
コスプレ仮面「そお言うあなたも１人で来た所をみると、一体一ってのも
まんざら嘘じゃなさそうね」
ぱぱるーん「当たり前だ、わしは実の所、復讐などどうでもよいのじゃ　ただマグロを
　倒したコスプレ仮面と言う輩と対決してみたかったのじゃ
その為の余興がちと、行きすぎたかのう」
コスプレ仮面「当たり前じゃー」
　　一瞬張りつめた空気になる
ぱぱるーん「それでは行くぞ」
コスプレ仮面「望むところだ」
Ｎ「コスプレ仮面とぱぱるーんの攻防はしばらく続いた」
ぱぱるーん「エレキビーム」
コスプレ仮面「メイビービーム」
　　『ビビビ』『バババ―』
　　共に相殺される
コスプレ仮面「会いたカッターブーメラン」
ぱぱるーん「ブーメラン返し」
『カーン』
　　空中ではじかれる

ぱぱるーん「なかなかやるな、ではこれはどうだ」
『シュッ、シュッ、シュ』
高速で攻撃を仕掛けるぱぱるーん星人
『バシーン』『バシーン』
超空間からの体当たりに吹っ飛ぶ
コスプレ仮面「あれー」
右腕のコスブレッドを鞭に変える
コスプレ仮面「行けぇ、蛇ィー、ローテーション」
光の鞭となってぱぱるーん星人を縛る
ぱぱるーん「おっ、オノレー　これではどうだ」
『ババババババー』
超パワー放ち、光の縄を粉砕するぱぱるーん星人
その時コスプレタイマーが点滅する
『ピコン、ピコン、ピコン』
再び静けさが漂う
ぱぱるーん「どうやらこのまま戦っていても勝負は着かないようだな」
コスプレ仮面「そうだね」
ぱぱるーん「どうやら貴様がマグロを倒したのは嘘ではなさそうだ
私は故郷に帰ることにする、次にこの星を訪れるのは多分数百年後だ
その時に決着をつける事としよう　コスプレ仮面おまえと戦えた事をわしは誇りに思うぞ」
その時まで地球を大切にしろよ！さらばだ」
『ワッハッハッハッハッハ』
と　笑い　大空に去っていくぱぱるーん
コスプレ仮面「ちょっとぉ、そんなに待ってられないっての？まいいか」
『ピコン・ピコン・ピコン・ピコン』

『ショワッチュ』
こちらも大空に消えていく
エリカ「今回もご苦労だったね、みなみ　優子」
木々の間から戦況を見つめていた沢乃
がぼそっと呟く。
N「こうしてぱぱるーん星人は去った「数百年後に来る」と言い残して
その時はたして地球は?

？？？戦いの結末！（後書き）

メフィラス星人の話を少しだけ、モチーフにしました。

？？？ヒミコ（前書き）

東京中で過去の人間たちが出現すると言う
奇妙な事件が起こる。

？？？ヒミコ

一話「時間破戒」
○　兜町
同・深夜
サラリーマンA「ちくしょう連砲部長のやろー、弱いもの虐めばっかりしやがってぇ」
サラリーマンB「まあまあ完両係長、そう興奮しないで」
N「酔っ払いのサラリーマンが深夜の町を肩を組んで歩く、良くある光景だった」
サラリーマンA「宮内君　大体　俺は前からあいつは嫌いだったんだ、バーロー」
　と、電信柱の辺りに座り込む葉山
サラリーマンB「葉山先輩、こんな所で座り込まないでくださいよ」
　と、立たそうとするが中々立たない
　困っている宮内の耳に『パカッパカッ』と、言う音が聞こえてくる
サラリーマンB「葉山先輩、なんか馬の音が聞こえるんですけどね」
サラリーマンA「馬鹿だねおまえも、どっかの競馬場から逃げ出したに決まっているだろ
『パカッパカッ』と、両手で馬が駆ける真似をする葉山、
馬に乗った武者が2人に近づいてくる
騎馬武者「済まぬが　ここはどの辺りか教えてくださらぬか、武田の残党を
追い詰めたまではよかったのだが　ちと道に迷うてしまったみたいなのじゃ」
サラリーマンA「へっ、たけらって何処のたけらだバーロー」
　と武者に叫ぶ葉山
騎馬武者「もちろん武田信玄じゃ」

サラリーマンA，B「なっ何、信玄だって」
一気に酔いがさめる葉山と宮内

？？？ヒミコ（後書き）

江戸時代から時空を超えて忍者が現れる。

？？？　時空を超えた者たち！（前書き）

関ヶ原で勝利した家康は、ハンゾウら伊賀忍者衆に命じ真田の残党狩りを命じていた。

？？？　時空を超えた者たち！

○渋谷
同・コンビニＳＥＩＫＯ内
女性定員「毎度ありがとうございましたぁ」
背中に『まゆゆ命』と書いたに中年のおじさんが買い物を済ませ出ていく
それとすれ違いざまに　今度はＡＫＢとイニシャルが入った服を着た女子高生が二人入ってくる
女性定員「いらっしゃいませ」
少女Ａ「お姉さん、私はこのメロンパン下さい」
少女Ｂ「私は肉まん二つお願いします」
定員　「はい、かしこまりました　今ならＡＫＢのステッカーか？私のカラオケ集のどちらかをプレゼントしておりますが　どちらになさいます？
少女Ａ「バキャーロー、おばさんの歌聞いてもしゃーないっちゅうの！」
女性定員「・・分かりました、ではＡＫＢのステッカーと言う事で」

と、２３歳くらいの定員は言い、ビニール袋に入れはじめた。

そこに平安風の衣装をきた女性が入ってくる
小野小町「あのぉ、少し尋ねるがここは何処で　ごじゃる」
定員　「ごじゃるって、あなたは」
小野小町「わらわは小野小町と言うものじゃがご存じないであろう」
定員　「へっ、おののぉこまちぃでございますか」
少女Ａ「プッ、小野小町だってさ　マジで言っているのかしら
　最近はここも怪獣やら小野小町やらいろいろ出るようになったもんだねぇ麻美」

少女B「でも、空飛ぶ金魚なら友達ん家いるけどさぁ」
　ファッション系の雑誌を読みながら呟く麻美
○慶長年（一六〇〇年）一〇月
同・伊賀山中
　関ヶ原で勝利した徳川家康は伊賀忍者等に、真田の残党狩りを命じていた
　伊賀軍団に森に追いつめられる7～8名の真田忍者たち
霧隠れ弥生「くっそー、これまでか」
猿飛び小鈴「ここは私たちに任せて、どうかお頭はお逃げください」
弥生「いや、そう言う訳には」
　そこにハンゾウをはじめとする伊賀軍団が現れ、必剣「十文字切り」
　で　次々と真田の残党を切り捨てて行った。
『ウワッ』『お頭あ』
　次々に倒れる同志たち
ハンゾウ「とうとう追いつめたぞ、十勇士もお前たちで最後だな」
弥生「何故だハンゾウ、我らの戦いは関ヶ原で終わっている
　今は同じ忍どうし　昔には戻れぬのか」
ハンゾウ「家康さまはおぬしらを殺せと命じられた、我らはその命に従うだけだ」
弥生「しかしハンゾウ、私たちはかつては許嫁同士のはず　昔には戻れぬのか？」
ハンゾウ「言うな弥生、我らにとっては家康様が正義なのだ
　天魔伏滅！」
弥生「ならば仕方ない、勝負だハンゾウ」
小鈴「弥生さま、他の連中はあたし達が」
弥生「任せたよ、小鈴」
『カチーン、カチーン』
N「森の中に響く剣と剣、伊賀対真田忍者の壮絶な戦いが続いていた」

その時　空に雷鳴が轟く
『ピカピカ』『ガガーン』
そして弥生の頭上に落ちる
弥生「うウワ―ァ」
小鈴「あっ　危ない弥生様」
思わず叫ぶ小鈴、しかし落雷は弥生を彼方へと消し去る
三好聖羅「あっ、小鈴さま」
小鈴　「きっ、消えちゃった」
シンゾウ「消えただと、ばかな・や・よい」
○東京秋葉原
フードのような衣装を身にまとった
怪物が、何やらトカゲ達に命じていた
タレントの紅井小春に似ていた。
ヒミコ「ラムールよ、今回はおまえに任せる
怪獣軍団とトカゲ軍団を使った分担作戦
ではいかにコスプレ仮面といえどもを敵うまいフハッハッハッハ」
と笑い、消えるヒミコ
ラムール「・・お任せを・・」
と、獅子の目を光らせる獣人ラムール
N「そんな不思議な現象が日本の各地で起こっていたのだった」

？？？　時空を超えた者たち！（後書き）

麻美とは第４部の主人公となる『マオン』の親友　の野田麻美です。

???真理子対マサヒコ1（前書き）

真理子とマサヒコの戦いです。

???真理子対マサヒコ１

翌朝
○　ＡＳＫ本部
マサヒコ「どう、美味しいだろ」
みなみ「ほんとだ、母さんが作ってくれた豆腐よりずっとおいしい」
マサヒコ「だろー」
優子　「でもマサヒコくんの家、ホントにお豆腐屋さんだったんだね
だっていっつも閉まっているから　みなみと２人して何の店かなあ
って話していたんだ」
エリカ「あらっ、２人は知らなかったの岡崎一番はかつては知る人
ぞ知る名店だったの
　いつも押すな押すなの行列が出来ていたんだよ」
マサヒコ「昔のことだよ、いまはバッタリだけどね、まあこの不況
じゃあ仕方ないよ
だからおいらが顧客拡大にやってきったって訳さ」
エリカ「この美味しさなら真理子さんもＯＫ
してくれると思うよ、じゃあ２人にはエリーズの案内　頼むわね」
みなみ、優子「まかしといて、マサヒコくんこっちよ」
　とマサヒコを案内するみなみと優子
同・地下空間０３エリーズ
　エレベーターを降りると３つの部屋があった　右の部屋が訓
練室
真ん中の部屋が食堂だった　そして左の部屋が
　家電から食料品まで何でも売っている　コンビニなっていた。
マサヒコ「わあーこいつは家の近くのスーパーより凄いや」
みなみ「でしょう、ここは何でもあるんだよ
優子なんていっつも　アンパンを大量に買いこんでいるんだよ、太
ったって知らないから」

優子　「何よみなみだって内緒で駄洒落カルタ買ってんの知ってるんだからぁ」
みなみ「それは趣味なんだから仕方ないでしょ」
優子　「でも、みなみの駄洒落じゃー笑えないし」
　2人のあまりにも他愛ない言い争いを見かねたマサヒコが、近くにあったヒョットコのお面を被って止めに入る
マサヒコ「2人ともまあまあまあ」
優子、みなみ「ぷっ、ハッハッハッハ　マサヒコくんには負けたよ」
　と、大笑いで答える2人

???真理子対マサヒコ２（前書き）

マサヒコと矢口（じゃなかった?）
真理子の戦いその２

???真理子対マサヒコ2

そこに萌えファッションをした女性が、亀を頭に乗せてやってくる
真理子「2人とも、また仕事サボってお買い物ですか」
みなみ「真理子さん相変わらず冗談きついよ」
優子　「そうだよ、今日は真理子さんにマサヒコくん紹介しに来たんだよ」
　とマサヒコを紹介する
真理子「わあ可愛い、僕　年いくつ」
マサヒコ「へん　子ども扱いするな、そんなことより税金で食っている癖に偉そうな事言いない」
真理子「こっ　こいつ、なんかムカツク＞、〜，＜」
みなみ「あのぉマサヒコくん、真理子さんは　ここだけで働いている訳ジャーないのよ」
優子　「そうだよ、これでも一流のコンピュータープロ・グラマーなんだから」
マサヒコ「ふーん」
　しばらく真理子の胸を『ジッと』見つめるマサヒ　コ
マサヒコ「プロ・グラマーと言うより、プロ・　ナインの間違いじゃないの」
・　と、断言する
真理子「・こ　こいつ、マジで絞めたろか＞、〜，＜」
みなみ「まあまあまあ」
　今度はみなみがヒョットコのお面を被って止めに入る
優子　「みなみ、それはもう良いって」
マサヒコ「ここで売っている豆腐見たけど腰がなってないね
　まあ今日から家の豆腐置いてやるから安心して良いよ」
真理子「・そっそう（；一＿一）」
　マサヒコの大人びた口調にタジタジになる3人

みなみ「じゃー交渉成立って事で2人とも良いわね」
真理子、マサヒコ「いいよ」
優子　「ところでマサヒコくん、これからどうする」
マサヒコ「お姉ちゃんたちは」
みなみ「もちろん仕事、と言いたいとこだけど今日は　事件がなくて暇なのよね」
マサヒコ「なら僕、ゲームがしたいな」
真理子「じゃあ、最新のスーパーマリモ7あるんだけど　やる」
マサヒコ「うんやりたい、僕もちょうどコンピュータープログラマーの腕前見たかったし」
真理子「どうなったって知らないよ、これでも昔は『ゲームセンター潰し』
って呼ばれていたんだから」
　と、拳を握り締めて言う真理子
優子　「真理子さん、子供相手にそんなに向きにならなくても」
　真理子たち4人は奥にあるゲームコーナーに入っていった
　数時間後真理子が肩を落としてゲームコーナーから出てくる
マサヒコ「お姉ちゃん弱いね、勝負にならなかったよ」
　プライドを傷つけられ落ち込む真理子
優子　「でも真理子さんに勝つって、マサヒコくん強いんだねぇ」
マサヒコ「そんなんじゃないよ、たまたま
マリモシリーズが得意なだけだよ　今度真理子お姉さんも攻略法教えてあげるよ」
真理子「ほんと、教えてくれる」
　握手する真理子とマサヒコ
みなみ「さすが、マサヒコくんは紳士だね」
マサヒコ「当たり前だい、『か弱い者』には気遣えっていつも母さんが言っているんだ」
真理子「・こっ　こいついちいち人のプライドを＞、〜、＜」
　全身を震わせながら呟く真理子

『チビー』っと　亀も困惑顔
みなみ「まあまあまあ」
　そこに再びヒョットコの面を被って登場するみなみ
優子、マサヒコ「だからそれはもう良いって」
『ワハッハッハッハ』
　と、笑いあう４人

????真理子対マサヒコ２（後書き）

大阪、北海道そして秋葉原の３か所に
同時に怪獣が出現する。

？？？　怪獣、あちこちに出没中？（前書き）

北海道沖で漁船が襲われた、それはかつて倒したはずのマグロ星人の仕業（・・？だった。

？？？　怪獣、あちこちに出没中？

○北海道沖
　漁師が船でマグロを取っていた
漁師　「こっこりゃー逃げるでねえべさ」
　大きなマグロが大暴れし、海に『バシャーン』っと落ちる
漁師「いっけねー、逃がしてしもうた　」
　そう言って海面を覗き込む漁師、その時中から
３０メートルはある、マグロが飛び出した
クロマグロ「グロー、グロー」
漁師　「ばっ、化け物だぁ　たすけてくんろー」
　『ウワあああああ！』
　『ピーイピーイピーイピーイ』
　と警報機がなる
○ＡＳＫ本部
ともみ「隊長、北海道地区に黒いマグロ星人が現れたようです」
エリカ「なんですって」
本能　「まだ生きていやがったか、しゃーない　パパッと片付けてくるとするか　行くぞ一文字」
一文字「しかたないっすねえ」
エリカ「あっ、２人とも油断しちゃーだめよ」
本能、一文字「了解」
　クロマグロは漁船を次々に狙っていた
クロマグロ『ギェー』
船員　「うわー」
　船ごと転覆する、そこにＡＳＫの戦闘機がやってくる
本能　「これでも喰らいやがれっ」
　『ババババババー』
　と電子シャワー（熱線）を浴びせる

クロマグロ「ガッハッハッハッハッハ」
一文字「ちっ、笑ってやがら」
○大阪ＳＫＢ地区
　５０くらいの夫婦が新喜劇を観るため川沿いを歩いていた
明石三馬「しのぶー、今日はいい天気やなぁ」
しのぶ「あんた　何言うてんの？きょうは曇りやないの」
明石「そないなこっとあるかい？」
　と　そらを『チラ』っと見て
明石「・・ほんまや、ほないこか」
　手をつなぎ歩く三馬としのぶ、その時近くで
『ギャオー・ガオー』
　と言う声が聞こえる
明石、「ウォーツ　何や、あれは」
　赤いマグロが通天閣を引き抜こうとしていた。
明石、しのぶ　『ヒエーぇ！』
　と地面にしゃがみ込む二人
周辺にいた人々も『オワッ、でっかいサンマや』
　『いや、マグロやろ』
　とノリツッコミしながら逃げだすのだった
○ＡＳＫ本部
『ピーイピーイピーイピーイ』
風見　「今度は何かいな」
ともみ「隊長、今度は赤いマグロが大阪に出現したそうです」
エリカ「何ですって」
風見　「大阪言うたらワイの出番やな、なあにきりきり舞いさしたるさかい」
　と言って出撃する風見
　そこにマサヒコを連れてみなみと優子が帰ってくる
みなみ「隊長　今立て続けの警告音は何ですか」
　と尋ねるみなみに　沢乃が説明しようとしたとき

三度警告音が『ピーイピーイピーイピーイ』と鳴るのだった。

？？？　怪獣、あちこちに出没中？（後書き）

相次ぐ怪獣の出現　その隙を突いて　ＡＳＫ本部にも魔の手が迫る。

？？？　トカゲ獣人（前書き）

秋葉原に向ったみなみと優子は　全身網タイツのような物をはいた青いトカゲたちに囲まれたるのだった。

???　トカゲ獣人

エリカ「いったい今日は立続けに・な・」
　と言いかけて洗面所に向かう沢乃
ともみ「隊長どうかしました・・ひょっとして?ひょっとしちゃったりして」
みなみ、優子「何のことよ」
ともみ「そのうち分かるわ、それより秋葉原地区に青マグロが出たんだって」
みなみ「しかたないなあ、今度は私たちがエリカモグランで行くとするか」
優子　「じゃー悪いけどマサヒコくんはともちんと留守番頼むわね」
マサヒコ「僕のことは気にしなくて良いからおねえさん達も頑張ってきてね」
みなみ「うん、じゃー行くわよ優子」
優子　「みなみぃ、そのお面は置いていけばぁ」
　洗面所に向った沢乃、何事も無かったかのように戻ってくる
エリカ「それにしても今日は何て日なのかしら」
　と外に目をやる沢乃
　そこには赤と黒のトカゲの大群がＡＳＫ本部を見張っていたのだった。
○　秋葉原
青マグロ『グアー』
　周囲に青色の光線を放つ青マグロ『シュワー』っと
　溶けていく壁やビル
「ギェーマグロの怪獣ダァ」
　運転手　『うっウワーぁ』
　逃げようとしてハンドル操作を誤り、次々に衝突する車
そこに『ブロロロロー』とみなみたちがモグラン号で駆けつける

優子「何か　凄いことになってるねーみなみぃ」
みなみ「感心してないでとっとと片付けるわよ優子」
優子　「準備ＯＫ」
みなみ、優子「ブレスト・バズーカー発射」
　『ドキューン』
　顔を狙って撃ったバズーカ弾もあまり効果は無かった
青マグロ「はっはっは、そんなもんは平気グロ」
　と、自分でお尻を『パンパン』して挑発する青マグロ
みなみ「あったま　きた　あいつ、馬鹿にしてぇ」
優子　「まあまあまあ、って逆じゃん」
　ヒョットコのお面をかぶってみなみをなだめる優子
そこに白いフードを身に纏った顔半分がトカゲの女性が現れる
優子「・・何処のこすぷれさん？」
みなみ「んな訳ないでしょ、あんたは何者」
ヒミコ「あっはっはっは、わが名はヒミコ、残念だがおまえたち２人は
　ここで死ぬ運命と決まった」
優子「卑弥呼って　あの関ヶ原の（違うぞ？）
みなみ「そんな！人の運命を勝手に決めないでよ」
ヒミコ「だが事実は否定できぬ」
　と語り無数のトカゲ怪物を放つヒミコ
トカゲ獣人『ヒューヒュー』
　と足を上げながら２人の周りを「グルグル」回るトカゲたち
優子「ラインダンスって・・この人たち何ふざけているのかな？」
みなみ「優子、マジスカ学園（ほんき）みたいだよ」
と　拳を握り閉めて構えるみなみ、しかし優子のほうは
「ウゲッ！！チモチワリー」
　と吐きまくっていた。

？？？　トカゲ獣人（後書き）

３方面に出現した怪獣　そしてＡＳＫ本部を襲う謎のトカゲたち
だがその時　竜馬が信長が歴史上の勇者たちが応援に駆け付ける。

？？？　勇者たちの集結！（前書き）

大ぴんちに陥った彼らを　西郷が、竜馬が　そして信長が救う。

???　勇者たちの集結！

○ＡＳＫ本部
ともみ「みんなあ、いまエリカネットで怪獣の急所を探っているから　それまで頑張って」
一号機「一号機了解」
２号機「同じく２号機も了解や」
同・整備室
山寺　「さて後はこいつを装着すれば新兵器
　ＥＲＩＫＡ・マックスの完成や」
　１９６０年代に流行ったようなオートバイがあり、その隣には
バルーンに猫の絵が付いた気球が置いてあった。
山寺「さてと、そろそろ一服するか」
　と　休憩室に向かいタバコを吸おうとする山寺に誰かがライターを渡す」
山寺　「おおー気が利くねえ、やっぱりこうでなくっちゃあ
・ん？みんな帰った筈だが　誰かいたっけ」
　みると
　目の前にトカゲが山寺を覗き込んでいた。
山寺　「うギャーあ」
同・ＡＳＫ本部
エリカ「今の悲鳴は山寺さん、これはやばいかも」
　そこに突然　無数のトカゲたちが侵入してくる
トカゲ獣人『ギエー・ギエー』
ともみ、マサヒコ「ひえー」
エリカ「いいこと　ともみとマサヒコくんはコンピュータールームに隠れて
　引き続き怪獣の急所を探りなさい」
ともみ「わっ　分かったわ、マサヒコくんこっちよ」

マサヒコ「待ってよ、ともみお姉ちゃん」
　コンピュータールームにバリアを張り　エリカネットとアクセスを続ける友美
愛用の鞭をしならせてトカゲたちを対峙する沢乃
　無数のトカゲが怪しい液を垂らしながら迫ってくる
エリカ「さあ、どっからでもかかってらっしゃい」
　愛用？の鞭を撓らせて構えるエリカ
　『ギエー』と集団で迫るトカゲたちに
　沢乃の鞭が『パチーン・パチーン』と炸裂する
N「そのころ各地では、怪獣とＡＳＫとの激しい戦いが繰り広げられていた」
○同時進行

○北海道沖
クロマグロ『ガー』
　マグロ火炎を吐き、石油コンビナーとに迫るクロマグロ
本能　「そうはさせるかよ、これでも喰らえ」
　『ダダダダダー』
　と小型ミサイルを放つ１号機
クロマグロ「ガッハッハッハッハッハ」
　周囲を埋め尽くす黒いトカゲたち
一文字「畜生、やっぱりだめっすか」
　そこにＡＳＫ本部から通信が入る
ともみ「本能さん、よく聞いてエリカネットで検索した結果　やつの急所は右胸よ」
本能、一文字「ＯＫ　分かったぜ」
　右胸に攻撃を集中する１号機
　『ドバーン・ドバーン』
　その時　遠くから怪獣に向かって大砲が飛んでくる
本能　「あっ、あれは」

一文字「海援隊じゃあ、ないすっか？」
坂本竜馬「おーい、勇者殿」
西郷隆盛「おいドンたちも戦いに参加するでごわす」
本能　「なら海援隊の皆さん、クロマグロの右肩に攻撃を集中して下さい」
坂本　「分かり申した」
西郷　「分かったばい」
本能、一文字「よっっし、いくぜ」
『ダダダダダー』
とミサイルを連射する1号機
『ドバーン・ドバーン』
と、海援隊の砲弾が怪獣の右肩に放たれる
そこに時空の壁から、金髪の女性が現れる（ディケィドか？）
まゆりん・モンロー「はっ、この姿は、そうか私は」
それは時空を超えた「霧隠れ弥生」の生まれ変わった姿だった
まゆりん「がんばって竜馬ちゃん、触れフレッ西郷ちゃん」
ボンボンを振りながらジャンプし、セクシードレスでトカゲに回し蹴りをする
まゆりん「おら・おら・おら・おら・おらっ！！」
『バシッ・バシッ・バシッ』
青トカゲ『ギェーエェエ』
そして手裏剣をとどめを刺す
『シュバシュバシュバッ』
下半身から怪しい液を出汁ながら溶けてゆくトカゲたち
一方本能たちは海援隊との共同作戦を強いていた
クロマグロ『ギエー、こりゃーたまらんクロー』
と、交代するクロマグロ
○大阪
N「大阪の町は、赤マグロの出現によって機能麻痺に陥っていた
赤マグロ「ギヒヒヒヒ、全部壊れろグロ」

と、電車や車などを踏むつぶす赤マグロ
風見　「このー、わての故郷になんてことするんや」
『ビビビビィー』
と熱線を発射する2号機
赤マグロ「そんなものは平気だグーロ」
風見　「ちっ、馬鹿にしくさって」
そこにともみから通信が入る
ともみ「風見さんよく聞いて、やつの急所は　尻尾の先っちょらしいわ」
風見　「尻尾って　あれかいな、ようしいくぜぇ」
そこには先が菱型になった尻尾があった
『ビビビビィー』
と尻尾の先端に攻撃を集中する2号機
『バキューンバキューン』
そのとき　たくさんの鉄砲隊が赤マグロに向かって攻撃していた」
風見　「あの黄金の甲冑は信長はん？」
信長　「勇者殿、我が軍も力を貸そう」
風見　「ほな信長はん、尻尾の先端狙って攻撃しとくんなはれ」
とマイクで指示を伝える風見
信長　「よっし、では猿　犬千代　いっせいに尻尾の先端を狙うのじゃ」
秀吉、利家「はい信長さま」
『ビビビビィー』
と熱線
『バキューンバキューン』
と武田を怖れさせた、信長軍の鉄砲隊の連続攻撃
赤マグロ「これは適わんグーロ」
と後ずさりする赤マグロ

？？？　勇者たちの集結！（後書き）

青いトカゲたちに囲まれたみなみたちを救ったのは
ジャンヌ。ダルク？だった。

?-?-?-?勇者たちの戦い2（前書き）

ジャンヌ率いる『猫十字軍』が現れる。

?????勇者たちの戦い２

○秋葉原
　みなみたちを取り囲むトカゲ獣人たち
　そこにともみから連絡が入る
ともみ「みなみちゃん聞こえる青マグロの急所は背中だよ、とにかく伝えたからね」
みなみ（分かったけどこっちはそれどころじゃなんだよ）
　と呟くみなみ、そこにヨーロッパ風美女と騎士たちが応援に現れた
ジャンヌ「我が名はジャンヌダルク、ここは　私たち猫十字軍にまかせて
　あなた達は彼方たちの使命を果たしなさい勇者殿」
みなみ、優子「はい、おまかせします」
そのとき『ピカピカ』とリングが光る
みなみ「ルビー変身」
優子　「ユリシーズへんしん」
　とカードを天に翳して叫ぶ
　『メモリーオン』
　システムオンが鳴る
N「みなみと優子はエンドラのカードを翳す事によってコスプレパワーが全身に漲り
コスプレ仮面に変身するのである
　ちなみに今回はメイドのコスプレだった」
ルビー「宇宙の果てからやってきた正義の戦士ルビー」
ユリシーズ「変幻自在に悪を切る、太陽の使者ユリシーズ」
　空手のポーズを取って現れるルビーとユリシーズ
W仮面「我らコスプレ仮面シスターズ、あなたのハートをメロりんこしちゃうぞ」

尻を振り振り返って撃つ真似をする　独自のポーズが決まる
ラムール「ついに現れたなコスプレ仮面、青マグロよ出でよ」
　青マグロ「お任せグーロ」
　と、言って現れ舌をカメレオンのように伸ばしルビーの首に絡みつかせる青マグロ
ルビー「ゲッ、くるしー」
ユリシーズ「待っててルビー、会いたカッター」
青マグロ「その手は食わぬぞ、ほれほれ」
　尻尾をユリシーズに巻きつけ、猛烈な力で締める
ユリシーズ「ししまったぁ」
　カッターブーメランをその場に落とす
ルビー「ユリシーズいま助けるからね、タカミナー」
青マグロ「マグロ電撃」
　『ビビビビビーイ』
W仮面「アレーェェェェェ」
青マグロ「続いて子マグロ攻撃」
　子マグロたちにあちこちを舐めさせる
　『ペロッペロッペロッ』
ルビー「何よ、こいつら」
ユリシーズ「ああーん、感じちゃうじゃない」
青マグロ「どうだ恐れいったかグーロ」
ユリシーズ「まっ、まだよ　こいっ　会いたかったぁブーメラン」
　カッターぁブーメランが自動で飛んできて青マグロの尻尾を切断する
青マグロ「何、そんな手があるのか」
　ジャンヌと十字軍はトカゲ軍団と戦っていた。
ジャンヌ「エリザベスの剣」
　『ズバーンザバーッ』
　っと、獣人を次々に切り裂く
トカゲ獣人『ギョエー』

溶けていくトカゲたち
w仮面「必殺、メイヴィー・シャワー」
全身から光を出し、消えていく子マグロ
青マグロ「こりゃかなわん、また合おうグーロ」
と、飛び去る
w仮面「そうは行かないわよ、ダブルメイヴィーム」
青マグロ『ウオーぉ、マグロ業バンザーイ』
空中で大爆発する

?????勇者たちの戦い２（後書き）

その頃ＡＳＫ本部は大変な事態になっていた
地下を走るチビッ子少女　真理子、それを追う銀のトカゲたち

?????　エリカ対トカゲ獣人（前書き）

ＡＳＫ本部を襲う獣人たちと一人戦うエリカ
そして地下を走るチビモニ少女、真理子を助けるのは
裕ちゃんか？それとも！！

?????　エリカ対トカゲ獣人

○地下空間０３真理子の部屋
　『カタカタカタ・コトコトコト』
真理子「よっし、これで後は確認作業だけね」
　エリカネットに最新情報をインストールしていた真理子は、作業も一段落し
デスクに置いてある　コーヒーに手を伸ばした
　『ポトッポトッ』
　その時、何かがカップの中に落ちた
真理子「雨でも漏っているのかな」
　と呟き　コーヒーを一口飲むみ、天井を見上げる真理子
天井には青いトカゲが張り付いていて、体中から黒い唾液を垂らしていた
真理子『ぎょえー、飲んじゃったよー』
　そう言うとチビチビを抱えて　一目散に外に飛び出した
同・通路
真理子「ふえーん、誰か助けてよう」
　トカゲは緑色の液体を吐きながら2人を追ってきた、真理子はそれをかわしながら
喚き捲くっていた
真理子「られか助けれヨー、おかあちゃーん」
　『ヒュー・ヒュー（華原ともみか＝古っ！』
　っと　無数のトカゲが空中からに襲い掛かり
　『ギェーェ裕ちゃんもうダメ・・・』
　と　真理子軽く失神失神
　バストから光線を放ちながらヒューマノイドがやってくる
ビーナ「真理子さま、避けてください」
　『ババババー』とキャノンー砲を放射するビーナ

真理子「びっ、ビーナ来るんだったらもっと早く来てよぉ・・漏らしちゃったよーぉ」
　とビーナの胸でだらしなく泣きじゃくる真理子
『ビチビチィー』と真理子の下半身を見つめながら鳴くチビチビーナ「すみません、あっちでも戦っていたので繰るのが遅れました」
同・ＡＳＫ
トカゲ『ギエーギエー』
　集団で迫り来る獣人たちに沢乃はスーパー念力が炸裂した
エリカ「デヤーぁ」
『ビビビビビビビ』
トカゲ『キエー』
　と苦しみだすトカゲたち、そのうちの一匹が沢乃に襲い掛かる
『バーン』
エリカ「ウワーッ』
　と壁に激突する沢乃、肩口からは真っ赤な血がにじんでいた
ともみ「たっ、隊長」
エリカ「・・ちっ、簡単にはいかないか」
　獣人たちはコンピュータールームに進入するため、何度もドアに体当たりする
『ドシーンドシーン』
マサヒコ「ともみお姉ちゃん、このバリア大丈夫なんだよね」
ともみ「たっ、多分？」
マサヒコ「多分じゃ困るんだよ（ーー　ゞ）」
エリカ「あんたたちの相手はこっちだよ」
　と、獣人たちを挑発する強気の沢乃、しかし肩口からは血が滴り落ちていたのだった。

？？？？　エリカ対トカゲ獣人（後書き）

重傷を負ったエリカを救うのは？

?????エリカ対トカゲ獣人２（前書き）

エリカのピンチに赤き魔人と呼ばれた　村雨と死んだと思われていた　山寺が現れる。

?????エリカ対トカゲ獣人2

ともみ「たっ、隊長」
トカゲ『ギエー』
　と沢乃に迫る獣人たち
「ちょっと待て」
と言う声が聞こえ『グエーッ』っと獣人が吹っ飛ぶ
ともみ『村雨参謀』
村雨　「エリ、せっかくのご馳走を独り占めなんてずるいぞ」
エリカ「なら半分あげるわ」
　と笑い、立ち上がる沢乃
村雨　「そうこなくっちゃー、」
　『ビシュビシュビシュ』
　と、参謀の手裏剣銃が炸裂する
エリカ「ヤー、トァー」
　エリカのパンチとキックが獣人どもに次々に決まる
ともみ「ふ、2人とも凄い」
　と、感心するともみ
トカゲ『ギヒヒヒヒー』
村雨　「なるほど、こいつはきりが無いなあ」
エリカ「あら、もう弱音吐いた訳」
村雨　「ご冗談でしょ」
　と背中合わせに言う村雨、迫る獣人
その時不意に入口のドアが開く
山寺　「2人とも伏せて」
　『ズバーン、ドバーン』
　と、ノヴァー・バズーカーを放つ山寺
トカゲ『ギエー』
　トカゲたちはわずかな肉片を残し、消えていった。

エリカ「さすが、やまちゃんタイムングバッチリね」
山寺「いやっ、2～3匹逃げやがった」
エリカ「まかせて」
と、山寺からノヴァー・バズーカーを
奪い取り格納庫に向かう沢乃

?????エリカ対トカゲ獣人2（後書き）

森を走る獣人、それを追う深紅のスカーフをしたエリカ

?????　ＥＲＩＫＡ・ＭＡＸ（前書き）

ＥＲＩＫＡ・ＭＡＸはエンジニアの山寺と真理子が共同開発した
戦闘用マシンで、ＭＡＸエンジンで時速３００キロ（最高時速はマッハ４８）
で走り　レーザー砲２門と装着式のキャノン・バズーカを搭載している
また　エリカの頭脳と連動しており
（他には真理子とビーナが動かせる）
自動で走行出来る、またどんな危険な道でも走れることから
別名『地獄廊下、走り隊』とも呼ばれる。

?????　ＥＲＩＫＡ・ＭＡＸ

『ブルーン・ブルーン』
エリカ「ＥＲＩＫＡ・ＭＡＸゴー」
○山道
　オートバイで獣人を追いかけ、山の中を走る沢乃　その頭上からバイクを攻撃する２体の獣人
トカゲ『ガー』
　と炎を吐く獣人
『バーン、ドカーン』
　と、オートバイの左右でする爆発音
エリカ「ＥＲＩＫＡ・ジャンプ、タァー」
　と、バイクごと体当たりする沢乃
『ギエー』と吹っ飛ぶ獣人１
『バサバサッ』
　と沢乃を抱えて飛ぶ獣人２
エリカ「ハアー」
　両足をバタつかせ落下する沢乃、地上で受身を取りノヴァー・バズーカー
　を構える
エリカ「死ね、トカゲやろう」
　沢乃を左右から攻撃する獣人２と３
『ズバーン、ドバーン』
　バズーカーが炸裂し、『ギエー』と空中で爆発する獣人２と３
それを背後に天を指すポーズを決める沢乃　赤いスカーフが風に靡く
エリカ「きっ、決まった！！」
○ＡＳＫ本部
ＥＲＩＫＡ・ＭＡＸを格納庫に戻し、メインルームに入る沢乃

エリカ「ふう、何とかかたづいたわ」
村雨　「それにしてもやまちゃん、てっきりやられちゃったかと思ったぞ」
エリカ「ほんとにね」
山寺　「いえね、今開発していた新兵器にちょうど装着型のバズーカーを取り付ける所だったもんで」
ともみ「3人ともお見事でした、でも隊長　妊娠しているんだからあんまり無理をなさらないで下さいね」
と、コンピュータールームからともみが出てきて言う
村雨　「えっ、エリ　妊娠していたの？」
驚く村雨と山寺
山寺　「それじゃあ、参謀の子で」
村雨　「あのね、エリは城北大の可愛い後輩なの　やまちゃんだって知っているだろ」
と、焦る村雨
山寺　「すると、やっぱり一文字焼くんか」
エリカ「ふふふ、ところでともみ、マサヒコくんは」
ともみ「あっち」
と、コンピュータールームの隅のほうを指差す
一同　「あらっ、可愛い」
そこには屈託のない笑顔で眠るマサヒコの姿があった
その寝顔に思わず笑顔になる3人であった。

?.?.?.?　ＥＲＩＫＡ・ＭＡＸ（後書き）

白い光に包まれたヒミコ（紅井小春?）
遂にその正体を現す。

１５０部記念『今後の出演者』番外編（前書き）

今後の出演者及び兵器をちょこっと紹介

１５０部記念『今後の出演者』番外編

?ローラ『ＡＳＫのアメリカ支部から研修でやってきた国籍不明の少女
舌を『ペロッ』と出す癖がある
?五代雄介『演習機クウガ２０００のパイロット
　クウガと同一人物かは不明?
?地獄聖子『ザザーラ星人が地球で活動する時の姿。
?シーノ・麻里子　アスガルド『海底都市　アトラアンジェの第一王女
で行方不明の双子の妹がいる
母はコスプレ星からアトランジェに嫁いだらしい。』
?阿々沢裕子『暴走族時代の真理子の先輩でチビチビの前の飼い主
?木ノ元ユキナ
裕子が総番をしていた暴走族『モーモー・ハリケーンズでカカオなちみ
アヤメと並ぶ元４天王の一人でモデルでもある少女
現在は卍党の党首として第６０代目の内閣総理大臣を務める
兵器
?ヘリカ『一人ノリの小型ヘリコプター』
?アッカンベ猫『ＡＫＢエンジンで動く気球メカ
ヒーロー
　コスプレ・マリン『正体は秘密?』

１５０部記念『今後の出演者』番外編（後書き）

以上が今後の出演者（予定）であります。

？？？？各地の戦い！（前書き）

ＡＳＫ本部が獣人に襲撃を受けている時
各地の戦いも終息に向かっていた。

?.?.?.各地の戦い！

○北海道沖
　西郷、竜馬軍とＥＲＩＫＡ1号機によるもう攻撃が続いていた
西郷「とっとと、くたばるでごわす」
『ドバーン、ズバーン』
本能「これでもか」
『ビビビビィー』
クロマグロ「もっ、もうだめだグーロ」
　『ドカーン』
　トカゲの部下と共に大爆発するクロマグロ
一文字「やったっす」
本能「もう現れんなよ」
西郷「やったぜごわす、な竜馬どん」
坂本「ああ、日本の夜明けは近いぞ」
まゆりん「竜馬ちゃん　ス・テ・キ」
　と頬に口づけををするモンロー
坂本「ほにょほにょほにょ」
　のぼせる竜馬に、爆笑する一同

○　大阪
　大阪では赤マグロと風見・信長軍による新　大阪夏の陣が行われていた。
信長「もののけよ、今こそ　《我となんじ（風見）が力持て等しく滅びを与えん事を》・・」
風見「?どっかで聞いたようなセリフやけど・・まっいいか」
『ドバーン、ズババババ』
『『ビビビビィー』
赤マグロ「もうあきまへん・・ほなさいならぁ」
『ドバーン』

と消滅する赤マグロ
風見　「やったぜ、ワイらの勝ちや」
信長　「あっはっはっはっは、見たかこの《信長の辞書に不可能は無い》わ」
乱丸　「信長様、それも誰かの言葉では」
ナポレオン「そう！私の有名な言葉ね」
信長　「そっ、そうだったかのう」
ナポレオンと肩を組んで笑う信長
○秋葉原
ラムール「おっ、おのれーコスプレ仮面」
ヒミコ「フッフッフッフッフッフ、やはりマグロでは歯が立たなかったか」
ラムール「死ね、コスプレ仮面ども」
　『ガガー』
と、電撃を浴びせるラムール　それを盾で撥ね返すユリシーズ
ラムール『ウワー』
と言って、膝をつくラムール
　そこにユリシーズのレッグ・ソバットが決まる
　『グェー』
（優子の太ももだ（＊＾―＾＊））
　一方ルビーの方は、ダイアモンド・ソードを構える
ルビー「必剣、アホウドリ？タァ」
　『ビビビィー』
と剣先から赤と緑の光線が出て、ラムールの胴を貫く
ラムール『これはっ　な・ん・だ・アラエッサッサーハーコリャコリャ』
　と、衣服を脱ぐ捨て　踊りだす
ラムール「・お尻ペンペン、お尻ペンペン・・バンザーィ」
　そのまま蒸発していった
ヒミコ「・・なんて恐ろしい技だ？」

ルビー「ヒミコっ、お前も喰らいな！必剣、アホウドリ
『ビビビィー』
ヒミコ「ヒエー」
　ラムールと同じく衣服を脱ぎして『アラエッサッサ』
　と踊り始めた
ヒミ「お尻ペンペン、お胸モミモミ（うーなんで可愛い私がこんな目に会うんだ！）
　奇妙なダンスを踊りながら少女の姿に戻って行った
ヒミコ「ハアハアハアハア・何やらすんじゃぁ・・」
ユリシーズ「その姿は・・誰だっけ？」
　ヒミコ『ドテッ』っと、コケル
ルビー「ばかっ、道重さゆみじゃーなくて　紅井小春だろが？」
ユリシーズ「そっそうでした」
小春「チッやってろ」
　その目が怪しげに光る
ルビー「おまえはいったい」
ヒミコ「ふっふっふ我が名はヒミコ、しかしてその正体は」
脱ぎ捨てた白いマントが飛んでくる（死神博士かよ？）
白いマントを翻し怪獣トカゲ・ドールの正体を見せるヒミコ
　それはドス黒い体に長い髪をした奇妙なトカゲだった。
ユリシーズ「グロィ・・歌も下手だけど姿もグロィ」
ルビー「それがあんたの正体だったのね？
トカゲ・ドール「さあてどうかな？
　『ゴルゴダス、オルメダス・イカサン　タコサン　ヨットイデ』
と呪文を唱えるとあたり一面が黒雲に覆われる

?.?.?.?各地の戦い！（後書き）

必剣、アホウドリとは　その光線を浴びた生物は
（卑弥呼は生物じゃないのか??）
死ぬまで　奇妙なダンスを踊り続けるのである

？？？？　無敵戦艦バッコン号（前書き）

コスプレ仮面のピンチに『バッコン・コーン』のあの人が
無敵戦艦　マリンダム０６と共に現れる。

?????　無敵戦艦バッコン号

ルビー「突然、何なのよ」
ユリシーズ「これじゃー前が見えないよ」
　『ビシュッビシュッ』
W仮面「きゃー」
　何かが素早く2人を体当たりし、血が流れる
トカゲ・ドール「どうだ、手も足も出まい」
ユリシーズ　「ルビー、このままじゃー二人とも裸にされちゃうよ」
ルビー「ようし、電子スコープ」
トカゲ・ドール「させるか」
　『ビシュッビシュッ』
W仮面「ウワーッ」
　高速で攻撃するトカゲ・ドールに吹っ飛ばされる2人」
　『ピコンピコンピコン』
　と、タイマーがなる
N「コスプレ仮面は地球上では4分8秒間しかいられないのである、もしタイマーが切れ
ればその体は分解されるのである」
　倒れたコスプレ仮面に迫るトカゲ・ドール、そのとき何処からか
　レーザー光線がトカゲ・ドールに向けて発射される
　『ババババー』
山本アニータ「おっほっほっほっほ、見たか我が　バッコン砲の威力は」
　西の空から戦艦に乗って十二単を纏った少女が現れる
その周りにはたくさんの女の子と　何人かのオタク達が『オタクダンス』を踊っていた
（しょこたんではないの？）

トカゲ・ドール『グワーぁ、だっだれだ』
　それが英雄山本五十六の子孫　山本アニータ（２３）とウサぴょん４７士だった。

?????　無敵戦艦バッコン号（後書き）

陸海空で活動できるマリンダム（ただ陸での戦闘は狭すぎる?）を操る山本アニーターとコスプレ仮面達の共戦がはじまる。

?????　オタク・ドラゴン現る！（前書き）

苦戦するコスプレ仮面に
　山本アニータの　オタク・パワーが
さく裂する。

?????　オタク・ドラゴン現る！

山本アニータ「それっ、もう一発放てぇ」
　『バッコーン』
　自動探査機が付いたバッコン砲を放つアニータ
トカゲ・ドール「おのれー」
　たちまち闇が晴れる
山本アニータ「いまよ、コスプレ仮面」　と、大声で叫ぶアニータ
ルビー「いくよ、ユリシーズ」
ユリシーズ「・オーケイ、ルビー」
　互いに肩を貸して立ち上がる
W仮面「スーパー・メイビーム」
　クロスさせた手から3つのCの光線が
　トカゲ・ドールに放たれる
トカゲ・ドール『ギヤーァ』
　と、はじけ飛ぶトカゲ・ドール
ユリシーズ「よくもやってくれたわね、必殺
会いたかったぁブーメラン」
『ブシュブシュブシュ』
と、両手と尻尾を切断する
トカゲ・ドール『おおーぉ』
ルビー「いまだユリシーズ」
ユリシーズ「うんルビー」
W仮面「コスプレジャンプ」
空中でCの字を描くルビーとユリシーズ
「ダブルコスプレ・スクリューキック」
　回転キックを放つ
トカゲ・ドール「オノレーぶりっコパワー」
　トカゲ・ドールの全身から光の壁がコスプレ仮面のキックを阻む

ルビー「・っ強い」
ユリシーズ「突破できない」
　一方ジャンヌ達もトカゲたちの『ナメナメ』攻撃に
タジタジだった。
アニータ「よしこうなったらあれだ、全員儀式?の準備じゃ」
「ははー、女王様」
と、ウサぴょん隊リーダーのわさみんが答える
アニータ《西から昇ったお日様が、東に沈む時　聖なる　モッコリが　顔を出す》
アニータが呪文を唱える間中、ウサぴょん隊は「ポイポイポイピィ」とよく分からない踊りを続け、男子たちは相変わらずオタクダンスを続けていた
『ウギャーオギャー』
　今度は東の空から　聖なるオタク・ドラゴンが姿を現した
アニータ「闇を切り裂く大いなる力　アニメ界の覇者オタク龍よ
我が手に宿りて　刃となせ（これもどっかで聞いたぞ?」
　アニータの両手が輝きだす、そしてその手を　頭の上でロケットのポーズをとる
アニータ「我が力、受けてみよ　バッコン・コーン」
　7色の光線となってトカゲ・ドールにさく裂する
トカゲ・ドール「うっうっ凄まじい力だァ」
アニータの援護射撃を受けたコスプレ仮面は
　トカゲ・ドールの壁を　押していく
ルビー、ユリシーズ「てやーあァ」
トカゲ・ドール「おおおおおお」
　「ドバーン・ガガーン」
トカゲ・ドール「ウォーぉ」
ジャンヌ「こちらも行くぞ　必剣影写し（あれっ、この技は超懐かしい・解かるかな?）
『ズバズバズバっ』

トカゲ獣人『ヒューヒュー』
『カチン』と剣を納めるジャンヌ、その瞬間
『バタバタバタッ』と倒れるトカゲ達
（時代劇だな？）
ウサぴょん隊「やったねェ」
全員抱擁しあうウサぴょンたち
アニータ「おっほっほっほっほっほっほ、それでは勝利のポーズじゃみんなぁ」
『バッコンコーン♪』
『バッコンコーン♪』
ウサぴょん隊やオタク達も全員　アニータと同じポーズをとる
（ほんとにしょこたんなのでは？）
ルビー「ふう！何とか、やっつけたか」
ユリシーズ「これもあの戦艦のおかげだね」
と空のほうを見る2人、そこには海上　自衛隊が誇る無敵戦艦マリン・ダム０６
その頭部で着物を羽織った山本アニータ大佐が
コスプレ仮面とジャンヌたちに向かって敬礼していた
山本アニータ「コスプレ仮面の健闘に一発」
『ズドーン』と空砲を撃ち、彼女たちは立ち去っていった

?????　オタク・ドラゴン現る！（後書き）

空や宇宙も《無限の海》と言う考えで、一応ＡＳＫ海上自衛隊のカバーの範囲内である。

？？？？　戦いの終わり（前書き）

戦いもついに終わりを迎えるが、以前紅井小春の正体は謎に包まれていた。

?????　戦いの終わり

ルビー「それじゃー勝利のポーズ　いっとこか」
ユリシーズ「そうだね」
　ルビーとユリシーズはいつもの様に
腰をかがめ尻を『パンパン』した
周りにいたジャンヌたちもつられて
『パンパン』し合うのだった
『ピコンピコンピコン』
とコスプレ・タイマーの音
ルビー「ショワッチュ」
ユリシーズ「ショワッチュ」
　大空に飛びたつ
トカゲ・ドールが爆発した辺りにヒミコが倒れていた『ヒッヒッヒッ』と体を振るわす度に
ネバネバした緑色の液体を垂れ流すヒミコは振るえるごとに紅井小春の姿に戻っていった
　そこに獅子と牛の獣人ミカルが現れる
小春「・たっ、たすけてミカル」
ミカル「失敗しましたな、ヒミコ様』
　小春「・なっ、何をするの・ミカル・・」
ミカル『何も、ただ廃品を回収せよとのマスターからのおおせつで』
　と言うと、小春のお尻を高速で激しく打ちつけた
『ペンペンペンペンペン、ペンペンペンペンペンペンペン』
小春「うえーん、うえーん、許してミ・カ・ル・・」
　そしてヒミコと名乗った者は機能を停止した。（ほんとに人形だったの？」
「ミカル、役目が終わったらすぐに帰ってきなさい」

ミカル「ハハ―あ、メディーナさま（って、あんた何しに来たん？）」

　壊れた機械人形を残して去って行くミカル」

その人形を苦々しく踏みつぶす少女

『グシャッ』

紅井小春「ふっ、不良品め＞、～，＜」

N「こうしてヒミコの時間破壊はコスプレ仮面の活躍で失敗に終わり

歴史上の勇者は元の時代へと帰っていったのだった」

?????　ファッションショー？（前書き）

事件もひと段落し、ＡＳＫ本部では何故かファッションショーが開かれていた。

?????　ファッションショー?

翌日
○ＡＳＫ本部
　　本能たちが帰ってくる
本能　「ただいまぁ」
一文字「あれっ、今日は何かあったすか」
マサヒコ「見てわかんない、ファッションショーだよ」
みなみ、優子「えっ、ファッションショー」
真理子「長らくお待たせしました、エントリーナンバー1番小野小町」
　　と秋葉原風衣装の真理子の司会で
　　十二単を着た平安風美女が現れた
山寺　「おおー、古来の日本人だな」
みなみ「あっちゃんにちょっと似てるよ」
真理子「エントリーナンバー2番クレオパトラ」
　　長い髪を特徴としたエジプト風衣装を　着こなした女性が胸を強調して現れる
　　『おおー』っと、目をむく男性たち
優子「今度はなんとなくスザンヌさんに似てるね」
真理子「そして最後はエントリーナンバー3番、楊貴妃」
中国風衣装に身を包んだ美女がお尻を『プルンプルン』させて現れた
風見『こっちも美人やな』
一文字「これはどう見ても　中森アキナッて感じっすね」
　　と、目を潤ませる一文字
ともみ「あーぁ後で隊長に言ってやろっと」
一文字「ともちん、それだけは勘弁してくだされ」
と、時代劇風に大げさに誤る一文字
真理子「後は審査室で厳粛に審査をいたします」

審査室では3人がそれぞれを自慢しあっていた
小野小町「見事な着こなしと言い、一番はこの小町じゃな」
クレオパトラ「何をおっしゃる小町さん、衣装ならやはりこのパトラのが一番じゃ」
楊貴妃「お前たち、男性どもは皆この楊貴妃の魅力にのぼせていた事をお忘れかえ」
と収集がつかなかった
みなみ「まあまあまあ」
とみなみがヒョットコのお面を被り、3人の間に割っては入る
優子「みなみ、そのお面好きだね」
と、ため息をつく優子
エリカ「ちょっと待ったぁ、ファッションショーなら誰か忘れてない」
と、SM風衣装に仮面とマントを身に纏って沢乃が腰を振りながら現れる
基地内には ダンシング・ヒーロの音楽が流れていた♪
全員「たっ、隊長」
愛用の鞭を『パチーン』と打つパフォーマンスに歴史上の三大美女たちは
小町「おおーこれは革命的じゃ」
クレオパトラ「わらわよりもグラマーじゃ」
楊貴妃「・・まっ・負・け・た」
三大歴女「ははー恐れ入りました」
と、跪く三大美女
エリカ「おほっほっほっほっほっほ、女王様とお呼び」
とますます腰を激しく振る沢乃
三大歴女「ははー女王さま」
と、崇めまくる三大美女、調子に乗って胸をめちゃくちゃ振りまくる沢乃
一文字「おおーやっぱりエリが一番っす」

と涙を流して感動する一文字と男性人たち
『チビチビー』と亀も感動する
真理子、ともみ「やれやれっ」
と、呆れるともみと真理子
みなみ、優子「あんたたちいい加減、過去に帰ったらぁ」
笑いが絶えないＡＳＫ本部だった。

?????　ファッションショー？（後書き）

今何かと話題の国会が一瞬で博多人形に
そして街も人も・・・

?.?.?.?.『博多人形の町』（前書き）

元・ヤンキーでモデルでもある　木ノ元ユキナ首相は
国会で野党　血民党から質問責めにあっていた

?????『博多人形の町』

『博多人形の町』
○永田町
同、議事堂内
N「ここ国会議事堂では、通常国会が開かれていた」
横恋慕議員「・以上で＊島田官房長官と御園(おみそ)議員との不倫問題についての質問は終わります
次に　タレント出身の＊松田議員と柏腹議員の　レズ疑惑についていくつか質問しようと思ったのですが・・
どちらも欠席の様なので　今回は省略させていただきます。
『逃げたんか―』『1億円ヌードの話もあるぞー』
と言うおじさん達のヤジ
横恋慕議員　「えー、では　続けさせていただきます
増え続ける国の借金や雇用不安についての木ノ元首相のしっかりした考えを
是非お伺いしたいのですが？」
「そうだ、そうだー」
と新人議員達からのヤジ
大沢議長　「木ノ元ユキナ内閣総理大臣」
ユキナ「あっ、はい」
と、手を挙げて大声で返事をするユキナにあちこちから笑いが起こる
ユキナ「えーと、その辺の事についてはおじさん（補佐官）たちに任せてあるので、まっ
そのうちなんとかなるっしょ」
～シーン～
しかし議員達からは何の反応もない
ユキナ「おいっ　シカトかよっ・・って、あのぉ伯方人形になっち

ゃって、るんですけど」
　議員たちはなぜか全員、博多人形になっていた
だがユキナ自身も足元から徐々に人形に代わって行った
ユキナ「ゆっ、ユキナも博多人形に？・・」

○外
2人の親子がやってくる
母「坊や、ここがあの有名な国会議事堂よ」
子供「ふーんまるで博多人形みたいだね」
母「えっ、博多人形」
　見るとそこには、大きな博多人形が立っていた。
母「あらっ、何よこれは　さっきまで確か・・」
子供「ママー、向こうに怪獣さんまで居るよ」
母「えっ　怪獣？
　『グャーア』
　と、怪獣が唸る
母、子供「きゃーあ」
石化光線を吐き、2人を人形に変える怪獣
　そして永田町一帯は博多人形に代わっていたのだった。

?????『博多人形の町』（後書き）

＊喫茶『ヘクサゴン』での密会現場と
S〇?写真ををフォーカスされた件
＊柏腹芳恵とのレズ疑惑と松田議員の1億円ヌードを
週刊嘘八百が報じた件
≪人形怪獣ハカタ―ンは日本中をランダムに博多人形に変えていく
≫

？？？？？？　ＡＫＢクラブ、存亡の危機！！（前書き）

レコード大賞３連覇のお祝いイベントの為　ＪＡＣ（ジャック）
の最新鋭の飛行機　『グランド・メイヴィー』でパリに向う
ＡＫＢクラブのメンバー達（全員だから貸切かな？）
だが　ハカターンが空から現れる！！

?????　AKBクラブ、存亡の危機!!

N「怪獣は翌日には奈良に現れ、大仏を始め数々の文化遺産を博多人形に変えていった」
少し経って、事件をキャッチしたエリカ1号機と2号機が飛んでくる
本能　「なんだこりゃー」
一文字「ゲッ、博多人形だらけっすね」
　一面博多人形と化した街並みに驚く、
本能たち
ハカターン『ギアーア』
風見　「なんか分らんけど、とりあえず攻撃や」
　『ズバズバズバーン』
　とミサイルを放つ　たけし達
「ぎっひっひっひっひっひ」
　ハブの目をした怪物と目が合う
風見　「なんやー、きしょくわるー」
　不気味な笑い声を残して消えるヘビ
姫星人
○ＡＳＫ本部
ともみ「ふーん、博多人形かぁ、なんか素敵ね」
本能　「ばっ、ばか言うなよ町全体だぜ」
風見　「そうや不謹慎やで」
ともみ「シー（すい）ません」
みなみ「でもどうやって助けりゃーいいの」
一文字「そりゃー怪獣を倒すしかないんじゃー、ないっすか」
みなみ「やっ、やっぱり」
　と、うなずくみなみたち
優子　「倒すたって怪獣は何処に出現するかわかんないんだよ」

全員ため息をつくのだった。
その頃　今話題のアイドルグループＡＫＢクラブはレコード大賞３連覇の
お祝いイベントでパリに向かう為、飛行機の中にあった。
パーサー「えー機内食を持ってきました」
長い髪のパーサー助手、春子（２４）が食事を運んでくる
ＡＫＢ「・・・・・・」
春子「お休みのようなので　またにしまーす」
と　小声で言う春子
いつもは『ワーワー・ガーガー』とはしゃぐのだが
《自分たちの人気にあやかろうとするテレビ局や、ＣＭ業界》
のおかげでほとんど寝る暇もなく働かされ
さすがの彼女たちも　少々お疲れぎみなのだった
「はっ、いも虫が飛んでる！！」っとれいにゃん
「しまった」と目を覚まし慌ててシーツを確かめて
「よかった、やってない？」っと言ってまた寝る　高橋トマト（本名みなみ）
峰岸みるく「・・おかしいな　こんなにつかれているのに　眠れない
いつもならみーちゃん　すぐ寝られるんだけどな？」
○コックピット
ルーク「パ―ロック機長、この分だと　無事に行けそうですね」
パー―ロック「スカイウォーカー副議長、まだ安心しちゃーいかん
ここではなにがあるかわからんからなあ」
『グアーグアー』
ルーク「機長！！！あの言いにくい事ですが」
パ―ロック「なんやトイレか　ええからいってきなはい！」
ルーク「いえ、そんな事やなく・・」
パ―ロック「なんや言いたい事があるんやったら、はっきり言えやっ」

ルーク　「・・それが言いにくいんですけど、博多人形が飛んでいるんですが？」
パーロック「おいおいっ、何を言い出すや思うたら、言うにこと書いて博多人形が
　飛ぶやて、そないあほなこと・」
その時　人形怪獣ハカターンが空を飛んでいた（って　飛べるの？）
パーロック「・・・ホンマヤ？」
　ハカターンはすれ違いざま　石化光線を発射したので
グランド・メイヴィーは一瞬で博多人形に代わり、急降下していったのである。

？？？？？？　ＡＫＢクラブ、存亡の危機！！（後書き）

はたして彼女たちの運命は？そしてハカターンの攻略法はあるのか！！

?.?.?.?.?.落下する博多人形（前書き）

博多人形となって落下する飛行機『グランド・メイヴィー』の運命は?

？？？？？落下する博多人形

○東京上空

突如現れた石化怪獣ハカターンによって　グランドメイヴィー号は博多人形に代わり

地上に落下していた

『ゴーーーォ！』

同・飛行機内

中の人たちも全員博多人形と化し　ジェット機の揺れで折り重なるようにして倒れてれていた

が、その山の中をかき分けて少女らしき者が這い出てきた

峰岸みるく「・・らぶたんも、もっちぃも　みんな重いよ・・

人形（せきぞう）になっちゃってるから　仕方ないけどさ」

プロモーション尾木に所属している　マルチタレントの峰岸みるく　だった

体のほこりを『パンパン』と払いながら

みるく「・・ん・・どうしてみーちゃんだけ人形にならなかったのかな？」

そう呟きながら窓を見た、すると飛行機（にんぎょう）が猛スピードで地上に落下していた

みるく「ゲゲッっ、大変だァなんとかしなきゃー」

みるくは人形の山を踏み越え（おいおい？）操縦室に向った

もちろん操縦かんが動くかどうかなんて考えてなかった

○操縦室

どうやら人間以外メカとかは無事のようだった、しかし

みるく「あのーこれ、どうやって動かせばいいのォ、こんな事秋元さんにも

教わってないしィ・・」

外では小型旅客機が飛んでいた

○外
G副操縦士「木村機長、博多人形が飛んできますが　どうしましょう」
木村「・・夏だからな、いろんなもんが飛んでるんだよ　気にせずしっかり操縦しろよ」
G「はい拓哉さん」
みるく「あのー、助けてよー　た・す・け・て～～～ェ」
と　大声で旅客機にさけんだのだが、当然その声は届かなかったのだった。

?.?.?.?.?.落下する博多人形（後書き）

落下するメイヴィー号は摩擦で赤く燃えていた
その時　「あきらめちゃーだめ」と言う声が頭の中に聞こえてきた
記憶の底にある　懐かしいその声は
かつて共に戦った仲間たちの声だった。

?????　精霊の翼？（前書き）

落下するメイヴィーナを包む力
それはデルクラルで得た、精霊の力だった。

?.?.?.?.?　精霊の翼?

その時《あきらめちゃー駄目だよ》と言う声がみるくの頭の中に聞こえてきた
○桜台鯨井大学前
高熊美奈　（１９）と霧島優子　（１９）は看護士学校に入るために受けた試験の
結果を見るために、合格番号を探していた
美奈「えーと　３１７（みいな）と・・ないなあ、優子はあった」
優子「待って　今　受験番号００９１（ぜろぜろないんわん）を探してるとこだから
会場には　合格を喜ぶ者、やら大泣きする者などいろいろいた
男性Ａ「だめだ、４回目の今年もｕ受かってないや」
男性Ｂ「何ぃ４回目　俺なんかもう１５回目だけど、未だ不合格だぜ
《いったいいくつなんだよ?》
優子「あっ、あったよ　美奈　ほらあそこ　ねえ聞いてる?」
そう言って横を見るとその眼が光り、額には鷹の紋章が浮き出ていた
優子「ねえ美奈どうしたの　私の声が聞こえない・・」
そう言う霧島優子も美奈に反応して目を光らせていた

ＡＳＫ本部では依然として対策が話し合われていた
○ＡＳＫ本部
一文字「でも　どうにかして奴の居所（かいじゅう）をキャッチしないと
ともみ「そのことで隊長と真理子さんが・・・」
突然眼が猫のように光る
本能「おいっ、ともちん　どうかしたのか　おいっ　おいっ　聞いている?」

N「敦子アンジェラと山里隊員は水星で　地質調査をするため　調査艇『ｍａｊｉｓｕｋａ』
　で、作業を進めていた」
敦子「いい　山ちゃん、今から私が言うキーワードをマジすかに打ち込んでね」
山里「オーケイ」
敦子「まずは初めのキッ・・・・・」
山里「??どうしたあっちゃん、寝ちゃったの?」
　その眼は輝いていたのだった
戻る
○メイヴィー号（にんぎょう）の中
・・・あきらめちゃー駄目だよ?あなたは私たちの同士・・・
・・・思いだして?ｅｎｕｓの力を・・・
みるく「・・美奈の優子の敦子の・・みんなの声が聞こえる」
　みるくは目を閉じ、その声に耳を肩向けた
その記憶の中には懐かしき故郷デルクラルがあった
みるく「そうか・みーちゃんは・・」
　みるくは心に浮かんだ言葉を口にした
みるく「風のように舞い　全てを司る精霊の翼、来いっ、天空風」
　その瞬間落下していたメイヴィー号（にんぎょう）の周りに空気の幕が出来
それが機体（にんぎょう）を包んだのだった

?.?.?.?.?.　精霊の翼？（後書き）

名古屋ＳＫＢ地区にハカターンが現れた
そしてＡＳＫとの戦いが始まる。

?.?.?.?.?　次元センサー（前書き）

真理子が開発した次元センサーで
怪獣を追うＡＳＫのメンバーたち

?????　次元センサー

人形化したメイヴィーナは、双子山にゆっくり着陸した
○中
みるく「なっ　なんとか着地出来たかぁ？ふーう（；一＿一）」
　そう言って　意識を失うみるく
○ＡＳＫ本部
ともみ「ハカターンが神出鬼没なのが問題なのよね」
一文字「・・・」
ともみ「なーに見てるの、もしかして隊長から私に乗り換えるとか言うんじゃー」
一文字「それいいっすねえ・・じゃなくって、ともちん　体大丈夫っすか？」
ともみ「もちろんよ、でもどうして？」
一文字「・・さっきの事覚えてないのかな（・・？」
そこに沢乃と真理子が入って来る
エリカ「誰が誰に乗り換えるって！！」
一文字「ギョエー、エリっ」
ともみ「ハハッ、隊長お元気ですか」
エリカ「ええっ　と～ってもね」
　と言ってともみをコブラツイスト（懐かしいぞ）で『グイグイ』締め上げる沢乃
ともみ「ふえーん、冗談だってーえ」
エリカ「冗談で済むかっ、二人して私をコケにしようとしてるんじゃーないでしょうね？」
ともみ「ごっ　誤解だよ　隊長ぉ」
一文字「・・申し訳ございません、大王さま」
　と　跪く一文字　《高嶋正伸かよ？》
優子　「アハハ！！」

みなみ「で　結論は出ましたか」
真理子「もちろんよ、『パチン』」
　真理子が指を鳴らすと衛星スクリーンが付く
本能　「あっ、隊長　真理子さん」
　　真理子が衛星スクリーンのスイッチが入れる
　それは何かが乱れるグラスだった
一文字「何なんすか、これは」
真理子「どうやら怪獣が現れる一瞬、磁場が乱れるようなの」
本能「そうか、それを追えば」
真理子「そう、怪獣さんに会えるって訳、次元波感知センサーを、
マシンとネットの
両方に付けておいたから頑張ってね」
と言って、ウインクする真理子、チビチビーと亀も鳴く
マサヒコ「おまたせ、きょうも新鮮な岡崎一番のお豆腐をお届けに
来ました」
　と言って　そこにマサヒコがやってくる
その時　次元センサーが『ビービービービー』っと激しく反応する
マサヒコ「なっ、何だよ　突然」
　思わず豆腐を落としそうになるマサヒコ
エリカ「早速現れたわね、全員名古屋方面に出動」
全員「ラジャー」
　格納庫に向かう五人
エリカ「マサヒコくんは私と栄にオープン
したゲームセンターにでも行く」
マサヒコ「やったっ、行く　行く」
エリカ「と言うことで、後はよろしくねともみさま」
　と　今度は丁寧にお辞儀をし、マサヒコと手をつないで
腰を振りながら出ていく沢乃エリカ
エリカ「あっ、ルンルンルン♪」
マサヒコ「じゃーともみお姉さん留守番たのんだね」

ともみ「まったく、陽気な人　まっ　何時もの事だけどさ、あ―痛っ」

と腰をさすりながら言うともみ

?????　次元センサー（後書き）

ハカターンの石化攻撃に、ルビーをかばって　ユリシーズが石化してしまう、近づくことさえ困難な敵にルビーは勝算はあるのか？

？？？？？？　コスプレ仮面絶対絶命！（前書き）

名乗りはヒーローもののお約束の筈
だがハカターンのおきて破りの攻撃に
コスプレ仮面は大ピンチを迎える。

?.?.?.?.?　コスプレ仮面絶対絶命！

○名古屋ＳＫＢ地区
　エリカ１、２号機がやって来る
ヘビ姫星人「ふっふっふっふっふ、今回は栄の町を博多人形に変えてやる」
　と、怪獣の肩で言うヘビ女
　『ギャーオー』と吠える怪獣ハカターン
そこにＡＳＫの戦闘機がやってくる
ヘビ姫星人「なにっ、今回はもう現れたのか　ではさらば」
　怪獣は突然消える！
○エリカ２号機内
風見「おっ　消えよったな《次元センサーを見ながら》
　本能はん、奴は　埼玉県に移動したようでっせ？」
同１号機
本能「よし移動！！」
　『シュシュシュシュシュシュ』とセンサーに連動して消える
○埼玉県よっしー村　中沢学園運動場
　県大会に出場するため、一人リフティングをする牛澤ひとみ（２１）
　そこに　怪獣ハカターンが現れる
イタコ先生「なんじゃあれは」
　「なにって、大きな人形じゃろが」
と頑固じいさん《よッすぃでは？》
ハカターン『ギャオー』
　石化光線を吐き　体育館を学校を博多人形に変える
ひとみ「うっそーぉ、カッケーェ！」
　と言ったまま　うっすぃも人形に代わった
ヘビ姫星人「フッフッフッフッフッフ」

そこに再びＡＳＫが現れる
ヘビ姫星人「何ぃ、もう来たのか」
本能「へへーん、こちとら手の内は　お見通しってんだ」
　『ダダダダダ―ン』と小型ミサイルを放つエリカ１号機
風見　「よっし、こっちも、負けてられへんで」
　ハカター―ンの後ろに現れた２号機が、『ズバズバズバーン』
とレーザー砲を発射する
　ヘビ姫星人「おのれぃ、これでも喰らえ
　『ギャオー』と鳴いて石化光線を浴びせる怪獣ハカター―ン
本能、風見「ありゃりゃ」
　マシンが博多人形に変わり地面に落ちる１号機と２号機
　『ドーカ―ン』
　みなみと優子がエリカもグランで到着する
みなみ「あららら」
優子　「人形になっちゃったけどうする」
みなみ「決まっているじゃない、いくわよ」
優子　「やっぱり、仕方ないわねＯＫみなみ」
　『ピカピッカ』
　コスプレリングが光る
みなみ「ルビー変身」
優子「ユリシーズへん・しん」
　みなみと優子はにコスプレエネルギーによって　無敵の超人
コスプレ仮面に変身するのである、ちなみに今回は
牛のコスプレだった
ヘビ姫星人「現れたか　変なやつら」
ルビー「どっちがじゃ、宇宙の果てからやってきた　正義の・・」
　ユリシーズ「ぁ危ない　みなみーィ」
　ハカター―ンの石化光線からルビーをかばって　ユリシーズが
石化し始める
　ルビー「ヘビさん　あーんたねー名乗りの最中に攻撃するって

おきて破りもいいとこだよ、そんなんアリッ！」
ヘビ姫「それがアリなのだ」
ルビー「うーんばかっ、お尻振り振りしたかったのにぃ？　あれ結構気持ち良いんだぞ（そうかぁ？）」
ヘビ姫「それは悪かったな　それぃ」
と　石化光線を吐きまくる怪獣、それを必死でかわすルビー
ルビー「ひぇーこれじゃー近寄れないよ
ユリシーズ「ルビー・・こ・・これ使って・・行けっブーメラン・・」
ルビーにユリシーズの盾を託し、完全に石化するユリシーズ
『ブシュブシュブシュ』
ルビー「よっしゃあ、受けっとったあ」
ブーメランを大きな盾に戻しそう叫ぶルビー
ハカターン『ガーン、ババーン』
盾で体を守りながら攻撃するルビーに
ヘビ姫星人は　何度も体当たりさせた
ルビー「これじゃー身動きが取れないじゃないの
《まるでゴルゴン退治をしたペルセウスの気分だわ》」
頭の三日月型の角で何度も頭突き攻撃
をするハカターン『ドシーン、バシーン』
ルビー「お願い盾さんがんばってーェ」
『ピコンピコンピコン』
と、タイマーが点滅する
N「コスプレ仮面は地球上では4分8秒しか活動できないのである
もし胸のコスプレタイマーが点滅し終わるとその体は分解してしまうのである」
ルビー「どっ、どうしたらいいの？」

?????　コスプレ仮面絶対絶命！（後書き）

ゴルゴン（メデューサー）退治をしたペルセウスはギリシア神話の話の一つです。

？？？？？？　コスプレ仮面絶体絶命２（前書き）

大ピンチのルビー　その時「怒ったぞー」と言う叫びと共にルビーが怒りの変身を告げる

?.?.?.?.?　コスプレ仮面絶体絶命2

ヘビ姫星人「フッハハッハッハッ、口ほどにもなかったな」
ハカター―ン『ガガがガーァ・レディーガガーァ』
　と石化光線を最高にあげるハカター―ン
ルビー「このままではもたない」
　『デヨーぉ』
　　『ビビビビビィー』
　　その時、何処からか念波が送られてくる
　ビルの陰に潜むジャンバーを着た女性の姿
N「沢乃エリカは1分間だけスーパー念力が使えるのだ」
ヘビ姫「これはスーパー念力・・何処だー」
　ハブの目で　周囲を探すヘビ姫星人
　ヘビ姫星人「見つけたぞぉ」
　『タァッ』とビルに飛び移るヘビ姫星人
○SKBビル屋上
ヘビ姫「かかれっ、ハブ戦闘員」
戦闘員「ハブー、ハブブブー」
エリカ「見つかっちゃったか、なら仕方ないかかってらっしゃい」
　『ハッーヤッ、トーオ』
　　腰をくねらせながらハブ軍団と対決するエリカ
エリカ「あっちー向いてェホイッ」
　と　腰をくねらせながら言うエリカ
　ハブ戦闘員『ハブブブー（まけたー）　《そんなんで、いいのか？》
ヘビ姫「おまえは変態か」
エリカ「その言葉そっくりお返しするわ」
　『トアー』
　　ドロップキックを決めるエリカ

『ギェー』と吹っ飛ぶヘビ姫とハブ戦闘員
エリカ「エリカ大回転」
片足を垂直にして何度も回転
エリカ「ぢやあああああ」
『＊ハブハブゥ（もうたまりません（＊＾―＾＊）」
エリカ「いくぞ　さば折り」
『ボーキ・ボキ・ボキ』
ヘビ姫星人『ぎえええええええ』
エリカ「まいったかぁ、こっちにはプロレスファン（優子）だって　いるんだからぁ」
ルビー「今のうちに何とかしないと・・・うーんモー怒ったぞー」
ルビーの体が怒りの赤に変わる
ヘビ姫「なっ、なにぃ、赤牛だと?」
『シュンシュンシュン』
高速で攻撃を仕掛けるルビー
ハブ軍団と戦っていた沢乃、ニヤリと笑う
ルビー「ルビー真拳　アタタタタタタタタタ、アチャー」
高速で張り手を連打
『グォー』っと倒れる　ハカターン
ルビー「いまだ　行くよユリシーズ」
石化したユリシーズのまっすぐ伸ばした右手に自分の手を横にクロスさせるルビー」
ルビー「優子と私の悪を引き裂く　正義の力、飛んでケー」
『ビービビビーィ』
ハートのマークの光線がハカター―ンにさく裂する
ハカター―ン『ギャーオン』
全身から泡が吹き出しやがて消えていく

?????　コスプレ仮面絶体絶命２（後書き）

ヘビ姫星人にユリシーズ（優子）の怒りがさく裂する。

＊エリカ様は基本ノーパン・ノーブラなのです

（ただし、国際的な会議とかイベントは別）

？？？？？？　ヘビ姫星人の末路！（前書き）

作戦に失敗したヘビ姫星人には、気の毒な末路が待っていた。

?.?.?.?.?　ヘビ姫星人の末路！

ヘビ姫「おのれーェ、きっ　今日はこの位で勘弁してやる　（新喜劇かよ？）」
　と　棄て台詞を残し　ビルの屋上から退散するヘビ姫
ユリシーズ「まてー逃げられると思ってやがるのかぁ」
　復活したユリシーズは怒りがおさまらない
　『ヒュン』
　上空へ逃げるヘビ姫星人の前に一瞬で移動したユリシーズ
　（このときは等身大）
ユリシーズ「優子　怒りのビンタ」
　『バシバシバシバシバシッ』
　と、高速で往復ビンタを浴びせるユリシーズ
ヘビ姫星人「・あわわわわ！！」
ユリシーズ「さらに3倍速」
『バシバシバシバシバシッ』
ヘビ姫星人『ギョエー！！』
　緑色の液体が下半身から吹き出る（おもらしでは）
ユリシーズ「さらに8倍速」
『バシバシバシバシバシッ』
ヘビ姫「フェーン、エン　エーン、覚えていろよ、メディナさまに言いつけてやるから」
　『おまえの母ちゃん　でべそ』と、負惜しみを言って去っていくヘビ姫星人
　（子供かよ？）
コスプレ仮面U&M「ばーか、二度と来るなーぁ＞、〜，＜」
N「こうしてまたまたコスプレ仮面の活躍によってヘビ女は退散し　町は何時も通りの風景を取り戻したのだった」
ルビー「それじゃー今回は新しい勝利のポーズいくよ」

ユリシーズ「そうだね」
ルビー、ユリシーズ「ルビーとユリシーズの正義の確認」
　くるっと振り返り　互いのお尻を『パンパンパン』と3回叩く
ルビー、ユリシーズ「ヤッタネー」といつものサムズアップを決める
○SKBビル屋上
エリカ「ご苦労さんみなみ、優子」
　ほほ笑む沢乃
マサヒコ「やっぱりこうでなくちゃね」
　沢乃を探しに来たマサヒコが屋上の扉の前でそう頷くんだった。
○ゴルゴダ星
　かつてコスプレ七勇士によってユダが封印された場所にヒミコらしき影
その後ろに跪くヘビ姫星人
「失敗しましたねヘビ姫さん」とヒミコナンバー3
「あそこまでコスプレ仮面を追い詰めながら　敗れるとは」とヒミコ？2
「やはり、彼方には　少々荷が重すぎましたね」とヒミコ？4
ヘビ姫「まっ待ってください、今回は油断していたので　次の『チャンスの順番』
をいただければ・・必ず」
「その次があればいいんですがね？」とヒミコナンバー5
ヘビ姫「しっ処刑だけは　お許しを・・」
「いいえ　もう決まった事なのです」とヒミコナンバー2
ヘビ姫「おまえたち全員　コピーの分際で・・やッ止めてくれェ」
　『ババババババー』
4体のコピーヒミコの目から分解光線がヘビ姫に向って放たれる
ヘビ姫「・・・あらまっ・・」
　その体が良い具合にこんがりと焼ける
それを素早く包丁で『トン・トン・トン』っと切るコピー・ヒミ

コ達
「マスターヒミコ、ハブ料理を御持ちしました」
と料理を持ってやってくる　コピーナンバー2
紅井小春「んー美味ちぃ、やっぱこれが最高だねェ」
と　テーブルで待っていた小春が、ハブの刺身を　美味しそうに
食べる
小春　「ちゃはっ　おーいしかった～おーいしかった～
おーいしかったー　君(ヘビ)がー♪」
お腹が膨れた小春が歌いだす（迷惑では？）
「・・おっ御上手で・・」
と　耳をふさぎながら言うコピー・ヒミコたち
小春『ふっふっふっふ、アッハッハっハッハッハ』
「ト・ホホホ・ホホーォ」と刺身

?.?.?.?.?　ヘビ姫星人の末路！（後書き）

紅井小春は山口県出身で『カワイコ・リンゴ星』からきたプッツン系タレントとして売り出したのだが
その正体は依然として謎である
ただ　道重さゆみ並みに歌が　下手らしい。

??『海底王国の王女！』（前書き）

ムーよりもずっと以前から　海底にある王国の若き王女
シーノ・麻里子　アスガルド（海底人齢２１）には
幼き時生き別れになった双子の妹のフラッシュバックがあった。

??『海底王国の王女！』

プロローグ
そこは広い草原で一人の少女が、もう一人のそっくりな女の子を追いかけていた。
麻里子「待ってったら、マリア、マリアたら」
麻里亜　「ふーんだ、お姉ちゃんが足遅くなったんじゃないの、ははは」
と言ってまた駆けだす　だが突如雷鳴とともに現れた騎士が　もう一人の
少女を連れ去った
麻里子「だめー連れて行かないでー」
麻里亜「お姉ちゃーん、お姉ちゃーん」
　夢は何時もそこで覚めるのだった。
プパンロン「どうしました、マリコさま、魘されてるみたいだったドモ」
麻里子「なんでもないわ、いつもの夢よ」
　そこは高度な文明をもった海底都市のようだった。
（1）演習機消失
○神奈川上空
　訓練生が東京湾での演習を終えて、九州支部に帰還するところだった。
五代「おやっさん、今神奈川上空を飛んでいます、間もなくそちらに着くので
　温かいコーヒーでも入れて待っていてくれればありがたいんですけど」
立花「雄介か、そう来ると思って　アミーゴから　特別の豆を持ってきた所さ」
　五代「さっすがおやっさん、わかってるぅ」

立花「翔一も巧も、みんな待ってるから、気をつけて帰ってこいよ」
　五代「了解！」
と、親指を立てる
その機体には『クウガ２０００』と言うロゴが入っていた
（みーちゃんのステッカーもあったようだけど）
　『パーン』『ビビビビビーィ』
その時　突然メーターがめちゃくちゃに乱れはじめた
五代「うっ、うわーあ　突然なんだーァ、駄目だ操縦かんが・・効かない」
立花「雄介、今の音はなんだ　雄介応答しろ　雄介　雄介・・・・」
　それっきり消息をたったのだった。
○ＡＳＫ本部
　『ビビビビビビ』
と連絡が入る
ローラ「隊長神奈川県沖で演習機が行方不明になったそうです
と、言って舌をペロッと出す　ローラ（出しすぎと言う噂も？）
実はカナダ支部に技術指導に行ったともみと交換で
研修にやってきた　ニューヨーク支部に籍を置くローラ（国籍と舌出しは不明？）
　エリカ「それじゃーさっそく御２人さん（みなみ＆優子）に行ってもらいましょう」
みなみ「やったっ、新兵器の試運転だ　行くよ優子」
優子「しゃーないなあ、じゃーいくか」
　二人は完成したばかりの新兵器、気球メカ　アッカンベ猫に乗り込んだ
同・格納庫
みなみ「エネルギー充電」
優子「エネルギー充電ＯＫ」
みなみ「アッカンベ猫発信、ゴー（宮内洋のイメージで）

軌道スイッチを入れると　バルーンについてる猫のマークが
『アッカンベー』をして上昇するのである
山寺「なるほど、バッチシだ」
と　満足そうに　アッカンベ猫を見上げる山寺
N「整備主任の山寺チーフの発案によって完成したばかりの気球メカ
アッカンベ猫ではりきって出撃した2人であったが・・・
彼女たちもそれきり行方をたったのであった。

??『海底王国の王女！』（後書き）

全ての海を守る者『コスプレ・マリン』の伝説の始まりです。

番外編『エンドラのカードの謎』（前書き）

セブン（まいまい）が持ってきた
エンドラのカードの伝説です。

番外編『エンドラのカードの謎』

その昔　宇宙は荒れ果てていた、そこでゴルゴーラ星人達は　他の星から
よその星々から自分たちの星を守るために、最強の魔獣ゴルドン（ユダ）を作り上げた（・・どっかで聞いた話だぞ）
しかしユダは暴走しゴルゴーラ星を不毛の地に変えて行った
このままでは宇宙全体が滅びてしまう
危機感を抱いたゴルゴーラ星の祖先ソフィードは勇者とコスプレの星ＲＺ４８星人にその危機をゆだねた
ＲＺ星人たちの母　美香さまは　青の戦士キング　紫の戦士ルビー　赤の戦士ユリシーズ　海の戦士　マリン　七色の戦士　セブン　黒き戦士　ガンてつ
そして大地の戦士　アルテミラスの７人を選び封印の術を授けた
その結果　ユダはゴルゴーラ星の地中深くに封印された　だが同時に封印したキングを除く
６人もユダの呪いによってカードに封印され　宇宙風にのって何処かへ飛んで行った
（アクマイザー？だな、懐かしいぞ？）
らしいのである（＊何故まいまいがカードを持っていたのかはまだ秘密）
そして封印を免れたキングは変身能力を失い行方をたった
その後　大鳥麻衣やみなみたちに力をかす事になるのはご存じのとおり

番外編『エンドラのカードの謎』（後書き）

＊大鳥麻衣ことコスプレセブンの物語＝もちろんウルトラセブンに位置する
は　何れ描きたいと思う。

???:海底都市アトランジェ（前書き）

みなみと優子の二人が目覚めた海底都市には《ＣＭ》でお馴染みのＡＫＢメンバーに似た女性がいた。

???海底都市アトランジェ

○アトランジェ　中央の間
　2人の少女がベット（と言うか　カプセル）の中で怪訝そうに目覚ます
　（カプセルは自動で開いた）
みなみ「うっ、うーん　ここ　何処」
優子　「あっ　おはよ～う、みなみ」
　と言った後、慌ててお尻の下を確かめる優子
優子　「よっよかった、してない」
みなみ「何を　してないのかなあ？」
優子　「べっ別に大したことじゃーないよアハハ」
　と誤魔化し　辺りをキョロキョロし
優子　「ＡＳＫの寝室って　こんなんだっけ？」
　と尋ねた、だが聞かれたみなみも　ここが何処なのかさっぱり見当がつかなかった。
　その時ＡＫＢの誰かに似通った　美少女が現れる
麻里子「ここは海底都市　みなさんたちの言葉で言うと、アトランジェです
でも　私たちは　Ωオメガと呼んでいます。
優子　「アトランジェってまさか」みなみ「あなたは」
同時に質問した2人に麻里子は笑って
麻里子「私はこのΩの王女、シーノ・麻里子　アスガルドです　そしてここは
　あなた方が想像するアトランティスではありません」
　トッコロ・テン「さよう、この国の歴史はもっと古い　それに私どもは
最初から海底に住んでおりました」
　とサングラスをした　コバンザメのおじいさんが口をはさんだ

この方は、とみなみたち尋ねると
五代「この国の親衛隊長だよ」
とローマ騎士のかっこをした少年が言う
みなみ「あんた　その顔は　確か行方不明になった　クウガじゃなかった
五代雄介さんでは」
五代「そうなんすよ、気が付いたらここにいて、何故かこんなかっこさせられたっすよ」
（って、弥樹さんかよ）
と優子がつぶやく
みなみ「でもなんで、こんなかっこを」
優子「それによくよく見れば、なんだが騒がしいような」
トッコロ・テン「無論、戦の為ですじゃ」
みなみ「戦というと」
麻里子「ガジミアン帝国とのです」
そう語った王女は何時になく、険しい表情をしていた。
同・外
そとではクラゲのゲーラ達が、誰かに信号を送っていた
ゲーラ「ピッ・ピッ・ピッ・・強・い・光・を・持・っ・た・何・者・か・が・Ω・に・入・っ・た
ザザーラ・様・に・通・信・せ・よ・・・・」
（なつかしーい、海のトリトンみたい）

???謎の宇宙船（前書き）

海底牧場で遊んでいたみなみたちが発見したのは
昔沈んだと言う飛行船　ノアーマだった。
ちなみにタケル少年のの本名は
『タケルド・アルファデータ・マモル』なので
時にはマモルとも呼ばれる。

???謎の宇宙船

○マトンの海底牧場
タケル「こっちだ　こっちだ、ママル　お姉ちゃんたち」
みなみ「まってよーお　タケルく～ん」
優子「優子　もうついていけないよ」
みなみたち3人は、召使いのプパンロンにお弁当を用意してもらって海底牧場で遊んでいたのだが「もう少し向こうのほうに行ってみない」と言う
　タケルの案内で　アクア・バギーで遊んでいたのだった
タケル「ちょうどこのあたりだよ」
　と、バギーを止めて話し出すタケル
ママル「そうまる、タケルとおいらがこの辺でお散歩してた時に　みなみさんたちを発見したんだマル」
みなみ、優子「ふーん、そうなんだァ」
ママルの言葉に　2人　あの瞬間を思い出す
回想
○神奈川上空
優子「ここらあたりじゃない、演習機が消えたのは?」
みなみ「そうだね、じゃーとりあえず旋回しようか」
優子「そ・だね」
その時突然気球が揺れ、メーターが滅茶苦茶に動き始めた
　『ビビビビビ、ガガガガガガ、ババババーン』
みなみ「何よ、突然?」
優子「キャーおっ、落ちるー　なんとかしてよーゥみなみィ」
みなみ「そっそんな事言われても、機械が言うこと利かないし」
ローラ「・・もしもぉしィーせんぱーい、どうかしました　かぁー」
　と言うのんきな声と『ペロ』っと言う舌の音が聞こえてきた
そして無線は途中で切れる、そして「時空には大きな穴が

みなみ「なによーあれ？」
優子「ウワっ、吸い込まれるゥ」
『ドバーン』
戻る
ママル「そして　この場所を漂っていた2人を、おいらが見つけたという
訳まるよ　そうだったよね、タケル　タケルってばー」
タケルは向こうの海底で何かを見つけ　驚いていた
タケル「ちょっと、ママルーそれにお姉ちゃんたち　その入り口から入ってこっち
来てみてよ」
そこは小柄な大人がやっと入れる大きさだった
（あれっ、ママルはどっから入るのかな？まいいか）
みなみ「この穴　優子には通れないんじゃない？」
優子「そんなことないよ、みなみより　まだ余裕があるよ
（しかしどっかのお寺でこんなのあったな？通りぬけられたらあんパンが貰えるんだっけ）」
（違うぞ？）
ママル「なにかある　マルか」
穴を通ったそこには、古い船が沈んでいた
ママル「これは、海賊船　マルか」
タケル「いや違うよ、見なよ」
そう言ってタケルが指指した先にはローマ字で
『宇宙船ノ・アーマ号』って記されていた

？？？謎の宇宙船（後書き）

ノアーマは『マォの旅立ち1』の冒頭に出てきます。

？？？　とらわれたタケル（前書き）

ガジミアン帝国を牛耳る　地獄聖子登場！

???　とらわれたタケル

優子「へーえ、よく発見したわね」
　タケル「へへーん、この前はお姉ちゃんたち助けるので精一杯でこっちのほうはよく見なかったんだ」
　優子「でも、すごい発見だよ」
みなみ「・・そんなもんじゃないよ、優子あんたどっかの国が
　宇宙遊覧船を開発したって話　聞いたことある
　これだけの科学力ＡＳＫを持ってしても無理だよ、それにこの古さからいって
　五百年以後ってことはないわね」
優子「そッそうなんだ、でもディバーがあるじゃない」
みなみ「このメカや見たこともない燃料、それにおとぎの国を思わせるようなデザインと言い
絶対、銀河系の物じゃあないよ（解説・デルクラルだよ）
優子「???では未来の・・・」
　３人は宇宙船の中を探険していた、だが外では巨大な
　ナマズが　迫っていたのだった。
巨乳獣王・地獄聖子「フフフ、マリズ様の命により　お前たち捕虜になってもらう」
　大ナマズの上で言い放つのだった。
○マトン牧場
同・船内
　タケルたちは船内を探索していたが　周りがうす暗くなり始めたので
　帰ろうと言う事になった
タケル「それじゃーママル、お姉ちゃん達ぃ　そろそろ帰るよ」
みなみ「うん今行くよ」とコックピットの方から返事するみなみ
優子　「こっちも今行くから待ってて」

と　後ろの客席だった所から出ようとして　ふと外のを見た
優子
　大きなナマズと目が合う
優子「ウワッ、みんな大きな魚だよォ、気を付けて
全員「えっ、魚」
　タケル達は　優子目撃した　大きな魚を探した、だが　なかなか
見つからなかった
タケル「優子お姉ちゃん、そんな大きな魚何処にもいないよ」
みなみ「そうだよ　きっと見間違いだよ」
　と　誰も信じてくれなかった
優子　「・・ホントに見たんだよ」
　みなみ「ハイハイ」
　3人は帰り支度を始めた
タケル「おっと、小さな穴があいてる、どおりで何時もより
遅いと思った」
みなみ、優子「・あれで～」
　穴を修理するタケル　その時　ママルが『危ないタケル逃げる
マル」
　と叫んだ
体長２００メートルはあるだろうか、巨大なナマズに乗った
赤い髪を剣山のように突き立てた、胸の大きな怪物がタケルの背
後から忍び寄ると
口に『グアッ』と挿み　泳ぐ始めた
タケル「ウワアー、助けてえ、ママルーお姉ちゃん達ぃ」
タケル「待てえ，タケルを離すマル」
　とタケルを追いかけるママルは怪物の　毒ガス攻撃にやられ
海底深く沈んで行った

????2人の麻里子（前書き）

タケルは海底要塞フロネアに連れてこられた、そして
そこで待っていたのは　麻里子であった？

???2人の麻里子

タケル「ママルー大丈夫か」
　その時2人のコスプレリングが『ピッカー』っと輝いた
みなみ「よおし、ここが私に任せて、優子はママルを頼むわ」
優子　「わかった、まかせて」
　と言ってスクーターでママルを追う優子
みなみ「ルビー、変身」
　コスプレエナジーが漲り、みなみを戦士に変える
みなみ「トァー」と怪物を追っていくルビー
怪物「ナ二奴か知らぬが、聖子の巨乳ミサイルを食らえ」
　と両胸からミサイルを放つ　巨乳怪物
　それを交わしながら進むみなみ、だがナマズの全身から
黄色い霧が出て、怪物は姿を消すのであった。
N「そして　何処かの海底基地の入り口が『バーッ」と開き
　タケルを口に加えた　怪物が入って行ったのだった」
　後ろの鰭にルビーがしがみ付いていたの
N「タケルは　チーマと言う海底魚人たちに
海底エレベーターを通って最上界に連れてこられた」
○海底基地・フロネア
チーマA「ポイポイポイポピィー」（しっかり歩け）
チーマB『ピッ・ピッ・ピィー」（よそ見をするな）　＝サッカーの終了じゃぁないぞ
タケル「わかってよ　歩きゃいいんだろ、何言ってんのか解んないけど?さ」
その部屋は広い会議場のようであり、その奥には鷲と蛇（ゲル・ショッカーかな?）
の模様が入れられた銀色の椅子があり　女性が座っていた
地獄聖子「こちらが我がガジミアン帝国の王女マリズ様だ」

タケル「っその姿・・まさか麻里子おねえちゃんだろ、何でこんなところにいるんだァ（・・？」

？？？2人の麻里子（後書き）

チーマは怪魚人を　地獄聖子が改造した下級兵士です

？？？　２人の麻里子？（前書き）

アトランジェが誇る　海底マシンカチューラは　ｍｏｓｉｄｏｒａ
エンジンで作動する
海の悪戯者と呼ばれる万能マシンである
また麻里子の頭の中央にある球体（コスプレリングと思われる）
と連動し
海底龍騎　マリン・ダイザーと言う機械生命体）に変形する。

？？？　2人の麻里子？

マリズ「聖子その少年はなんじゃ・・麻里子とな、何処かで聞いたような
　・・ぁッ頭が痛い・・何故じゃぁ・」
地獄聖子「マリズ様、この少年にアトランジェの様子を聞き出し
　一気に肩をつけようと思ったのですが、気分がすぐれぬ様子
　今日のところは少しおやすみくださいませ」
　（まずい、洗脳が解けかけている）
マリズ「そうさせてもらう　では聖子、後は任せたぞ」
　聖子「ハハ―」
タケル「待って　麻里子お姉ちゃん」
ルビー「サプライズ・ウェーヴ」
　『ガガガガガガ・レディーガガ』
　『ポイポピィー・ポイポピィー』（・・なんだ・・この音波は・・）
何処からか音波が流れてきてチーマ達　魚人はみんな『バタバタッ』と倒れる
地獄聖子「ふっ、やはり現れたか　コスプレ仮面」
　『ヤア―』と、言う声と共に現れるルビー
タケル「あっ　おねえちゃん」
ルビー「宇宙の彼方からやってきた、正義の戦士ルビー」
　空手をイメージしたポーズを決めるみなみ
地獄聖子「ハッハッハッハッハッ、ここまで来た事はほめてやろう
　しかし、これでは手が出まい」
タケルに右腕の鎌を突き付ける聖子
ルビー「・まっマサヒコくん、これじゃー手が出せない」
地獄聖子『レクトィダ・モヤン・コカヤサー』
と謎の呪文を唱えると辺りが凍り始めた（要するに冷凍光線ね逆さ

ま呪文は関係ないよ）
ルビー「これは、辺りが凍り始めちゃったみたい」
タケル「さッ寒いよ」
地獄聖子「ハッハッハッハッハッハッ、お前たちはここで死ぬのだぁ」
その時フロネアが大きく『ドッドッドッド』と揺れた
地獄聖子「こんどは何事だぁ」
マリズ「聖子、この揺れは何事ですか？」
　部屋で休んでいたマリズも現れる
『ガガーン』
アトランジェが誇る　海底マシン・カチューラが基地に大穴をあける
ユリシーズ「待たせたねみなみぃ」
地獄聖子「貴様は」
ユリシーズ「変幻自在に悪を切る、太陽の使者ユリシーズ」
『トーオ』とジャンプしルビーの隣に並ぶ
ルビー、ユリシーズ「我らコスプレ仮面シスターズ、あなたのハートを
メロりんこしっちゃうぞ」
　尻を振り振りし、振り返ってピストルを撃つまねをするポーズがまたまた決まる、ちなみに今回は河童の着ぐるみだった（海だから？）
五代「へーえ、かっこいいっすねーえ　仮面ライダー、みたい」
　とカチューラから鎧騎士のかっこをした雄介が現れる（・・それは　おめーえだよ？）
だがマリズの眼はその後ろから現れた自分とそっくりの女性にそそがれる
ルビー、ユリシーズ「ギェっ～ェ！！麻里子さんが・・」
タケル「・・二人？」
それがアトランジェの王女、シーノ・麻里子　アスガルドとガジミアン帝国の指導者マリズ・クノーソスとの出会いであった。

????　2人の麻里子？（後書き）

みなみたちがいなくなった日本（東京）では数千万年前に滅んだと言う海底文明の遺跡が　アメリカの考古学者マーク・ザナパー博士（魔獣じゃないよ）によって発掘されていたのだった。

？？？　捜索（前書き）

地上では　ＡＳＫと自衛隊が誇る軍用機『ブロッケンＤＲ』との合同捜査が行われていた。
『ブロッケンＤＲ』は　日本海沖のある　地獄城（と呼ばれる無人島）から
発射される　飛行要塞で　キャプテンは　天道兜と言う２３の少年らしい。

???　捜索

N「みなみたちがガジミアン帝国と戦っている頃
　地上世界（東京）では　ＡＳＫと自衛隊による　行方不明者の捜索が続いていた」
○神奈川上空・朝１０時
阿修羅「どうだ隆匡ぁ、何か見つかったか」
須賀「・・いえっ・・・何も見つかっておりません」
阿修羅「何口ごもっている、何か発見したんなら何でも言えっ」
須賀「はいっすいません元帥閣下、実はさっきそこで　大量のキバスナックが
放置されているの発見しまして　そこであっちゃんのカードを拾ったもんで
もーう　ラッキーっなんて思っちゃって（＊＾―＾＊）」
阿修羅「バッバッカモーン　、廊下にたっとれェ」
と　怒鳴る　元、陣画（じんが）高校の教頭だった　阿修羅坂内元帥（５１）
　そうなのだ今　スーパーアイドル集団　ＡＫＢクラブが提携したスナック菓子　キバ・スナックに付いてるカードほしさにカードを抜いて　スナックを放置すると言う社会問題が　起こっていた
（こう言う事件　むかし会ったな？）
　そこに　本能と風見がやってくる
本能「どうですが板さん、何か新しい情報はありましたか？」
阿修羅「ああ　あったよ　と言いたいとこだが　まるっきり　手掛かりがつかめんので
　困っているところだよ」
風見「要塞『ブロッケンＤＲ』を投入しても　でっか？」
（ほんま何処行ってもうたんやろなぁ、まああの２人の事や堺ひょっこり顔を出すと思うが…）

本能「舌を出す奴ならいるんだがな」
風見「まったくや」
　「ふうっ」
と　ため息をつく　本能と一文字
○ＡＳＫ本部　夜９時
　野球帽を被った少年が椅子に腰かけていた
マサヒコ「ねえ、みなみおねえちゃんたちまだ見つからないの？」
ローラ「まだみたいだよ　でも　今夜は遅いから　お母さんたちが心配するから
　君は帰ったほうがいいよ（と言って　下を『ペロ』っとっ出すローラ
マサヒコ「大丈夫だよ　今日はここに止まるって言ってきたから」
ローラ「あっ　そう　あたしは　どうでも　良いんだけどさ」
　と言って　また舌を『ペロ』っと出す
マサヒコ「さっきからそればっかり、どうせなら　他のしたも出してくんないかな」
ローラ「それはーまあぁ、そのうちにね！」
　そこに沢乃がやってくる
エリカ「ローラ　今日は　この位にして　今夜はマサヒコくんと
　一緒に寝てくれる？」
マサヒコ「わーィ　ヤッター、ともみおねえさんの　変わりにはならないけど
まっ　勘弁してやるか」
ローラー「こいつー、言うねー　じゃあ一緒にローラの部屋に行こう
マサヒコ「わーィワーイ、じゃーお休みエリカ姉ちゃん」
　と　すれ違いざま　お尻を『ペロ―ン』とめくるマサヒコ
マサヒコ「わー　今日もやっぱりノーパンだぁ」
エリカ「この　マセガキィ、とっとと寝なさい＞、〜，＜」
マサヒコ「はーい　お休みなさい」
　と　ローラの部屋に向うマサヒコ

同ローラの部屋
　部屋は5畳くらいで　ピンクと豹柄が入り乱れている以外は純日本製の部屋だった。
マサヒコ「ローラ姉ちゃん　何処もこの事件バッカやってるよ」
　と　テレビのチャンネルに　タッチしながら言うマサヒコ
ローラ「あっと、ここは別の番組やっているよ　ほら」
マサヒコ「あっつ　ほんとだ」
　そのテレビはザナパー博士の発掘チームが7千万年前に滅んだと言う
　Ω文明の一部が発見させたと言うニュースだった
同テレビ
ザナパー「これでわしの説の一部が証明された訳じゃはっはっは」
　聞きて「博士の説によると　7千年前アトランジェと　ガジミアンとの
　聖戦があったのでしたね」
ザナパー「そうじゃ　すでに広大な力を手にしていたΩはガジミアンと
　戦う事で強大なって行ったんじゃ、だが　最後の戦いによって
　永久に姿を消したのじゃ（少し　いやかなり違うぞ?）
ローラ「ふーんΩぶんめいねーェ」
マサヒコ「そう言う事、そう言うこと」
　と言いつつ　ローラの胸を枕に　眠りに着いたのだった
ローラ「こらぁあたしの胸で寝てェ　まぁ良いか」
　と　舌を『ペロッ』と出すローラ
『みなみおねえちゃん　ムニャムニャ・・優子・・ちゃん』
と寝言を言うマサヒコに布団をかけてあげるローラだった

？？？　捜索（後書き）

キバ・スナックは　ケルビーから２００？年より発売されている
スナック菓子だが　一つに１枚ずつ　ＡＫＢカードが入っている
しかし　カード集めが目的となり　カードを抜いて
中身を放置すると言う事件が頻発していた。。

??　導かれる魂（前書き）

麻里子とマリズ（麻里亜）は互いに　反応しあった。

??　導かれる魂

○海底都市フロネア
（7）導かれる
トッコロ・テン「ヤーヤー我こそは　軍師（自称）トッコロテン、地獄聖子
覚悟ぉ」
地獄聖子「何を猪口才な、これでも喰らいやがれ」
『バッ』と巨乳光線を浴びせる、たちまち胸が『ブクブクブク』と膨れ上がるトッコロ・テン
トッコロ・テン「おおっと、びっくり（@＿@）　笑ってこらえて！」
プパンロン「なるほど、その手で自分の胸を大きくしたダスな？」
地獄聖子「どうして分かった・・って　ほっとけや（＿＿）」
N「一方　ルビーとユリシーズはチーマと戦っていた
ルビー「ダイヤモンド・ソードー、いくよ必殺、アホウドリ」
『ビビビビビィ』
と　剣先から　光線がチーマに向って放たれる
チーマ『ギョエーえ』
それを受けたチーマ達はさらに激しく『ポイポイポイポピィー』と踊り続ける
五代「それはもういいから、さっさとくたばれや」
と持っていた木魚（どっから持ってきたの？）でチーマ達の頭をたたくと
『レレレのリー』と言って順番に倒れて行った
ユリシーズはチーマ達の上司キューピー鈴木とプロレス戦っていた
キューピー「喰らえ、キューピーラリアート」
それを交わした優子が　バック（はいご）をとる
ユリシーズ「いくよー優子スペシャル（スリッパーホールド」

キューピー「ウワ―ぁおおお」
ルビー　「ゲゲッ！！・・あの技は苦しいんだよね（（＋―＋））」
と　むかし　失神させられた　経験のみなみ
　マリズと麻里子は　水星の間で戦っていた
マリズ「これは驚いたな　これほどわらわにそっくりな者がいたとは？」
麻里子「・それはこっちのセリフよ、地獄聖子の上に指導者がいたとは
　それが私　そっくりなんてね？」
マリズ　「いくぞー血走りの術」
　額のエメダラルドから虹色の光線を放つ
麻里子「そんな　渡り廊下走り隊　みたいな術にかかんないよ」
　とかわす、しかし光線は次から次に襲ってくる
マリズ「どうした　逃げるだけでは　わらわに勝てぬぞ、ほれほれっつ」
麻里子「ゼルダナスの剣、タアー」
　麻里子はアトランジェに伝わるゼルダナスの剣で血走りの術を防いだ
　マリズ「あああ、何だこの感じは・・ぁああ」
その時　マリズの　額のエメダラルドと麻里子の剣に付いてるタイマーが
激しく反応しあった

???ガジミアンの総攻撃！（前書き）

記憶を取り戻した麻里亜　だがそれは姉妹の別れの時でもあった。

???ガジミアンの総攻撃！

（８）海魔獣ザン・パパ
麻里子「まさか、あんたは　麻里亜なの」
トッコロ・テン「いかんみんなぁ、脱出じゃあカチューラに乗り込め」
ルビー「優子、タケルくん逃げるわよ」
ユリシーズ「わかったわ」
と　キューピーを占め落とす優子（こっ　怖い？）
タケル「うん今行くよ」
聖子「そうはさせるか、チ―マども何をしている　追えっ」
チ―マ『ポイポイポイ・ピイィ』
ルビー「行くよ必殺アホウドリ」
　『ビビビビビィ』
N「アホウドリとはルビーのダイヤモンド・ソードから放たれる光線で、それを受けると妙な踊りをするのである（戦闘員並みの者は死にいたると言う）
地獄聖子「何じゃこれはー　あーお尻振り振りお胸モミモミアカンベ―って　わたしゃ何やっとるんじゃ？」
と聖子、チ―マたちも『ポイポイぽいポィピィ』意味不明の行動をとり機能を停止して行った
トッコロテン「全員乗り込んだな、ほいじゃー一発」
　黒と緑の煙幕を噴出してその中に
消えるカチューラ
地獄聖子「おのれぃ麻里子王女め、あー
お尻りペンペンお尻ペンペン・・
ハコイセ・トカヤサにゃんにゃんにゃん　とっ止まんない」
○アトランジュ王の間

麻里子「しっかりして麻里亜やっと会えたんじゃない、これからまた2人で暮らしましょう」
麻里亜「・お姉ちゃん、私ずっと悪い夢を見ていた気がするのこんな穏やかな気分になれるなんて　最後にお姉ちゃんの事思いだせるなんて
　私ってツイテルのかなアハハ・」
麻里子「麻里亜ぁ　麻里亜ぁー、死なないで
　わたしたちは　2人で一人だったじゃないの?」
麻里亜「たった今思い出したよ、姉さんと駆けたアトランジェの草原
　あの時はお母様がいて・・お父様も、もう一度2人に・・会いたかったぁ・・」
　そう言って双子の妹麻里亜は息を引き取ったのだった
麻里子「・・まりあああああ」
悲しみにくれるアトランジェの人々
　『ガガガガー・ドシーン』
五代「地震っすか?」
全員外を見る、そこには　伝説の海魔獣ザン・パパと無数のチーマ達を従えた蟹の化け物の姿があった。

???ガジミアンの総攻撃！（後書き）

かつ7つの大陸をことごとく沈めた海魔獣ザン・パパに　みなみたちは　勝目はあるのか

???コスプレマリンの伝説！（前書き）

アトランジェとガジミアン帝国との最後の戦いが　今始まろうとしていた
しかし戦いは　過去の事では？

???コスプレマリンの伝説！

トッコロテン「あれは、海魔獣ザン・パパ」
麻里子「トッコロ、知ってるのですが」
トッコロ・テン「いえわたしも見るのは初めてですじゃ
ただこの国に伝わる古い伝説によると
かつて海底にあった7つの王国をことごとく滅ぼしたとあります」
五代「よしっ、こんな時こそ俺の出番だっ変身・・」
　と　ポーズをとりかけたところで
上からタライが落ちてきて頭に直撃した
『ゴーン』
五代『ホヨ・ホヨ・リン』
と　倒れる雄介
（ドリフだな？）
みなみ「何でタライが？」
と　ツッコム
優子「で　その対処方は？」
トッコロ・テン「いい伝えでは再び魔獣ザン・パパがこの国を襲う時
　伝説の戦士マリン・ダムが現れ全ての海を平和に導くと云われています」
麻里子「マリン・ダム？それは一体何ですか」
トッコロ・テン「これは麻里子さまの母上から預かっていた者です、お受け取りください」
と　懐からカードをとりだす
　それは暗黒の海に光をもたらす騎士マリン・ダムが書かれたカードだった」
麻里子「・・これトレーディング・カードですか？秋葉原から持ってきたの？」
一同コケル

みなみ「ん　な訳ないでしょうがそれは多分これだよ」
　と　みなみは勇者を意味するルビーのカードを、優子は太陽を意味するユリシーズのカードを　それぞれ見せた
麻里子「あなたたちは地上人ではなかったのですか？」
みなみ「もちろん地球人だよ、でも私も優子も半分はコスプレ星人なんだよ」
麻里子「コスプレ星人って？」
トッコロ・テン「その名は亡くなったマリアンヌ（麻里子の母）様に様に聞いた事があります
遠い彼方にある故郷だと」
トッコロ・テンは（ふーり帰れば　ひーとりー、ふーるさと　はなれ～♪）と歌うのだった
（あれっ、それは　スティーブン・フォスターでは？）
『ガガーン・ドドドド』
ザザーラ星人「さっきから一体何をはなしてるんじゃあ、とっとと
　『出てこいやぁー』
海魔獣　ザン・パパ　の背中に乗った、蟹の化け物が挑発する
　その兵力は７０万といったところだろうか（もっとも　チーマ下級兵士や
　モゲル（通信クラゲ）達も含めてだけど）
優子「何よ　あのカニさんは！」
みなみ「あれが　地獄聖子の正体みたいね」
トッコロ・テン「あっ、ガジミアンの奴らが攻めて来てたんだっけすっかり忘れてた？笑ってこらえて！」（所さんかよ？）
麻里子「私は戦います、トッコロ支度を」
トッコロ・テン「その言葉、待っておりました」
タケル「ところでこのお兄ちゃんは」
トッコロ・テン「その辺に適当に寝かせておけ・そしてタケルもママルとどっか避難していろ」
タケル「それは断るよ、おいらもこの国の一員だからね」とウイン

クするタケル
トッコロ・テン「そう来ると思うとったぞい」
麻里子「では参りましょう（麻里亜、見守っててね）
と　呟く
優子「私たちも行こう、いくよみなみ」
みなみ「待ってよォ優子・・って逆じゃん」
ドーム状の天井が開き、海底マシンカチューラをはじめ
アトランジェの戦闘艇マック・ネイヴィーが次々に出陣して行った
今海底都市Ωとガジミアン帝国との戦いが始まろうとしていた

？？？コスプレマリンの伝説！（後書き）

アトランっジェの兵力はせいぜい７千（１０分の一）はたして勝てるのだろうか」

????　コスプレマリンの伝説2（前書き）

ザザーラが　世界支配を企んだ事情が明かされる

???　コスプレマリンの伝説2

N「全ての海の支配を企むガジミアン帝国の地獄聖子は
蟹の怪物ザザーラとなって７０万のチーマ（魚人）やゴーズ（鮫ロボット）
そして　かつて７つの海を滅ぼした海魔獣ザン・パパ等を率いて
Ω（アトランジェ）に総攻撃を仕掛けてきた、だがそれを迎え撃つΩの
兵力はガジミアンの１０分の１であった。」
ザザーラ星人「麻里子王女よ、この程度の人数で我が大群と戦おうとは
　身の程知らずとしか言いようが無いな」
麻里子「ザザーラよ今一度問う、アトランジェと共存出来ぬのか？」
ザザーラ星人「出来ぬ　われらの目的は他にある」
麻里子「と言うと？」
ザザーラ「昔　海と自然に囲まれた平和な星があった
だが　その星は『マーケード』と言うその星の人間たちが自然破壊行った末に
海に住み者たちは滅亡に至った
自然と共存してきた我ら一族もまた　多くは死滅し、生き残ったわずかの者は
祖国と同じ自然に育まれた緑の星地球の深海に逃れるしかなかった」
麻里子「なるほど・・事情は分かった　それには同情する（同情するなら金をくれぃ）
　ならば何故自然を滅ぼそうとする」
ザザーラ星人「我らは自然を滅ぼしたい訳ではない、総ての世界を人間以外の者によって
制圧したいだけだ、力ある者が　全の世界を１つの意志の元に統合する　そうすることによって

無用な争いは無くなり　世界は人間だけの者ではない事に気ずくじゃろう
　そうなった時　初めて真の平和が訪れるのではないのかと言う結論に至ったからだ」
麻里子「でもあなた　やっぱり間違っている、その世界には　その世界　なりの良さがある筈
　それを　1つの意志、存在が支配すべきではないのです」
ザザーラ「その為に人間以外の生物が滅んでもか？」
麻里子「・・・・・・」
ザザーラ「どうやら話し合っても無駄なようだな」
麻里子「止むおえませんね」
　魔獣ザン・パパの背に乗った　ザザーラは強力なハサミで向ってきた
　麻里子は王国に伝わる『ブレイドの剣』（つるぎ）で迎え撃った
『カキーン・カキィーン』
　っと　剣とハサミがぶつかり合う音
一方　トッコロ・テンはマシン　カチューラを操り　鮫のロボットと戦っていた
「ボボボボー・ボボブラジル」（古っ？）
と黒い泡を吐きかける、周囲の戦闘艇は『トロトロ・トコロ』
と　溶けはじめる
○カチューラ内
トッコロ・テン「おおっと、溶けちゃった　笑ってこらえて」
とふざけつつ、レーザー光線を『ビビビビーィ』とお見舞する
カチューラ
　『ドバーン』『ババーン』
と爆発する、鮫ロボット
タケルはピンク鯨のママル共に　チーマ達を蹴散らしていた
タケル「ほらっ、プレゼントをやるよ　それー」
と電磁モリをチーマに向って撃つタケル

『ガガガ・ガガガ・レディー・ガガガ』
と痺れるチーマ達
みなみと優子はマリン・スーツに身を包み、アクアバギーで
エビやタコのサイボーグと戦っていた
みなみ「いくよ　メイヴィー・ビュート」
エビの首に巻きつく
エビ『ギェェエエ』
優子「こっちはお馴染み　会いたかった―ブーメランだよ、それいけェ」
『ブシュブシュブシュ』
タコやクラゲのサイボーグにさく裂する
だがタコやイカさんたちは　やられてもすぐにさいせいするのだった
みなみ「ああーん、これじゃーきりがないよ」
優子「弱音は叶いのっ・・てこれも逆じゃん?」
しかし　１０倍とも言える圧倒的な数の前に　アトランジェの戦士たちは
徐々に後退していった。
『グアーン』
と　ザン・パパが　７つの腕で麻里子を引き裂いた
麻里子「ウワ―ああ」
トッコロ・テン「あっ王女」
みなみ、優子「麻里子さん」
タケル「くそーこいつらしつこいぜ」
ザザーラ星人「それではそろそろおしまいにしてやろう」
魔獣ザン・パパの全身が光り輝いた
『おわーっ」『うわーあ』
一気にその数は　アトランジェの兵力は3分の1に減ったのであった。

？？？時空を超えた戦い？（前書き）

7千年前の戦いが今始まる

？？？時空を超えた戦い？

みなみ「凄い風」
優子　「駄目だ、飛ばされる」
　　『アレー』
　みなみと優子はバギーごと岩に吹き飛ばされた」
　　『バーン』
みなみ、優子「痛ててて」
ザザ―ラ「もう一度行くぞ、それぃ」
ザン・パパ『グアー―』
〇カチューラ内
トッコロ・テン「オワアアァ」
タケル「飛ばさせるぅ」
ママル「タケル、しっかり使っているマル」
タケル、ママル
　　『アレー』
　カチューラやママルそれに加勢してくれていた魚さんたちも
海岩に
　『バーン』と、叩きつけられる。
トッコロ・テン「オノレィ、ザザ―ラめ―・やりたい放題しやがって・・何時まで乗っかってるの？プパンロン、おまえは重いんだよ、笑ってこらえて」
　仰向けになったカチューラの中で言うトッコロ
Ωの戦力はさらに3分の2以上減ったのであった
ザザ―ラ「フッハッハッハッハッ、我らの力思い知ったか、そろそろ　お終いにしてやろう」
タケル「ちっ、畜生」
麻里子「いけないこのままではやられてしまう　なんとかしなければ」

その時麻里子の心の中に誰かが語りかけてきた
・・麻里子ねえちゃん負けちゃダメ・私たちの王国を・・海を守って・・
麻里子「その声は　麻里亜なの」
その瞬間麻里亜の形見のペンダントと麻里子のティアラについている宝珠が反応し合った
『ピカ・ピカッ』
みなみ「あっ　あれは」
優子　「コスプレリング？」
麻里子は目を閉じた、その時父や母や妹と暮らした平和な日々が次々に浮かんできた
ザザ――ラ「あの輝きは昔　何処かで見たような（最近だよ？）
麻里子「この平和を壊してはいけない
今こそ　変身の時」
しっかりと目を開けそう呟く
麻里子『まりーん』
海の守護神マリン・ダムのカードをかざし
そう叫んだ
５つの風が巻き起こり人魚のコスプレをまとった戦士が現れるコスプレ・マリン「海と自然を守るために使わされた戦士　コスプレ・マリン　」
N「麻里子がコスプレ・マリンと名乗った時、それが海の自然を守る戦いの始まりであった」
ザザ―ラ「やはりあの伝説は本当であったのか？だがここで死ねば同じ事だァ」
『グワァー』
と　７つの首から樹解無と言う黒い霧を吐きだす魔獣ザン・パパ
コスプレマリン「マリン・スパーク」
『ハァッー』

『ドバーン・ババババ』
　光と闇が激突し、大爆発が起こる
トッコロ・テン「麻里子王女ぉ」
みなみ、優子「オワ―ッ」
　そしてみなみと優子は何処かの海岸で目を覚ます
○神奈川県　後ろ髪・海岸
みなみ「あれっ、ここは」
優子　「どこ？」
　そこに2つの影が近づいてくる
マサヒコ「あーあ、やっぱりお姉ちゃん達だ
　そこに2つの影が近づいてきたやっぱり　居ただろぉ」
ローラ「マサヒコくんの感も、大したものだね（と言って舌をペロッと出すローラ）
マサヒコ「感じゃないよ　夢を見たって言ってるだろ」
ローラ「ふーん夢のお告げね―、マァー
　ローラはそう言うの好きだけどね」（と言ってまた舌を出す）
N「結局みなみたちは事件の3日後にこの世界へ　戻されたのだった。
　そしてアトランジェジェでの戦いが
7千年前に起こった事　戦いに勝利したΩが
　平和王国を再建する事を知ったのだった」

○後ろ髪・海岸　一週間後
みなみ「でもぉ未だに信じられないなぁ、あの戦い七千年前の出来事なんてさ」
優子　「それがよく解かんないんだよね、優子は自分で考えて行動したよ
　・・どゆこと？」
みなみ「わたしに聞かれても困るけど、つまり私たちが行った事が既に

歴史だったんじゃないかな　よく解からないけどさ」
優子「・・そだね」
　海岸を見つめながら話す二人
その時
～ありがとうみなみ・優子　いつかまた　一緒に戦おうね～
と言う麻里子の声が聞こえてきたのだった
なお　五代雄介と名乗ったあの少年は
「ガジミアンのような未確認生命体がいるからな」とアトランジェに残った
そうである　（なるほど　そこでクウガの伝説と繋がるのか？）

???時空を超えた戦い？（後書き）

みなみと優子はある日下宿先（ＡＳＫが借りてる）のアパートで不思議な夢を見る　そのころ宇宙では　星が消滅すると言う事件が起こっていた。そしてそれは地球滅亡の始まりであった。

最終話『ノアの方舟』（前書き）

みなみと優子が見た　不思議な夢　そして　星を破壊しながら迫ってくる
怪物　今人類は　最大の危機が訪れようとしていた。

最終話『ノアの方舟』

○夢

　　『カタッカタッカタッ』
　　コースターはレールを上がって行く下からはマサヒコ
が手を振っていた
マサヒコ「お姉ちゃんたち」
みなみ「うわー、凄いねえ優子」
優子　「きゃーあ、いま話しかけないでよぉ」
　　ジェット・コースターはひと回りして
　　スタート地点に帰ってくる
みなみ「面白かったねえ優子」
優子　「こっちはまだ膝がガクガクしているよ」
マサヒコ「どう2人とも、面白かったでしょう」
　みなみ「そうだね、今度はマサヒコくんも
　一緒に乗ろうよ・ん・・マサヒコくん」
　　と目を擦る
　　周辺の景色がボヤケル
マサヒコ「どうしたの・・オネ・エチャン・ダチ」
その顔が突然、蜘蛛に変わり、髪の
毛は蛇に変わった
みなみ、優子「ギャーぁ」
　　雷が落ちたような悲鳴を上げる、みなみと優子
○深夜
同・蜥蜴荘４８号室
玉子　「こりゃー、お前たち　この夜中に
　何騒いどる　とっとと寝るがや」
　　下宿している大家の珠野玉子（６３）ブツクサと独り言を言
いながら部屋を出て行く

『そうだ、そうだ』
『どうせまた、芋虫でも出たんじゃないか』
と下宿人達の声
みなみ、優子「しー（すい）ません」
とひたすら謝る
優子「それにしても、今の夢はなんだったんだろう」
みなみ「そっ、そだね」
同じ夢を見たことに気づかずに、汗を拭う2人
○衛星ＲＩＶＥＲ
宇宙図を見ていた敦子、何かを発見する
敦子「チーフ、あれは何でしょう」
真夏「何だ　敦子、今度はタマネギでも飛んでいるのか」
と、茶化す
真夏「むっ、これは」
表情を変える真夏
山里「チーフどうかしましたか」
真夏「これは、俺の推測どうりだとすればユダに違いない」
敦子、山里「はっ、ユダって」
同時に叫ぶ山里と敦子
真夏「昔、アトランティスを滅ぼしたといわれる伝説の破壊神だ」
敦子「アトランティスって、そんな化け物が存在するとはとても信じられません」
真夏「だがこの航跡はユダ以外には考えられない、デルクラル神話によると、かつての金星文明さえも滅んだという」
と、真夏は昔、宇宙飛行士だった恩師、立花玄史朗から聞いた悪魔の話をする
敦子「ならば、どうしたら良いのでしょう」
真夏「どうにもならんさ、2人ともこれを見ろ」
山里「こっ、これは」

敦子　「星が消えている」
真夏　「そのとおりだ、やつが羽を羽ばたかせただけで　あるいは咆哮しただけで
周囲の星々が消えている　やつが銀河系に
近づくにしたがって　被害は拡大するだろう　やがてここも影響を受けることになる」
山里　「そんなあ」
真夏　「みんな、聞いてくれ今日限りＲＩＶＥＲは解散する　それぞれ地球に帰るように
死ぬときは家族と一緒に死にたいだろ　みんな元気でなって言うのも変かな
　何せ地球その物が無くなろうとしているのだからな」
山里　「僕は、あっちゃんと一緒にいる」
敦子　「ありがとう良太、でもとても結婚式は挙げられそうもないわね」
　全員黙りこむ
山里　「真夏チーフ　自分は今までチーフと仕事することが出来て幸せでした、今まで
　本当にありがとうございました」
敦子　「私も今までやってこれたのはチーフのおかげです」
真夏　「おいおい、二人ともそんなにおだてても結婚祝いはやらんぞ」
と、最後に満面の笑みを見せる真夏
山里　「そっ、そんなんじゃーないですよ」
真夏　「俺は今までお前らと仕事が出来たことを誇りに思う　もし生まれ変わること
　が出来たとしても再び諸君らと仕事がしたいと思っている　この事をＡＳＫに緊
急連絡　それをもってＲＩＶＥＲは終了する以上だ」
全員　「真夏参謀、今までありがとうございました」

山里　「全員、真夏チーフに敬礼」
長い沈黙が流れる
真夏　「解散」
ＲＩＶＥＲの職員一同拍手

最終話『ノアの方舟』（後書き）

ユダのもたらした災害によりかつての東京は機能を失った
未来に絶望し　殺人や強盗に走る人間たち　彼らによって
かつてのシンガーもまた・・

????　悲しみの天使（前書き）

無法となった東京にも　天使がいた
それは　傷つき　裏切られながらも　夢を叶えようとする
少女だった。

????　悲しみの天使

N「数年後、北アイルランドが地震のため消失した　それをきっかけとして
各地に天変地異が巻き起こった　またユダの襲来は多くの流星雨を生んだ
それらが一早く地球に衝突すれば　放射能などの影響により人類はその3分の2が失われる
　仮に生き残ったとしてもユダの到来により地球そのものが砕け散るのである
　地球は今猛烈な勢いで滅亡に向かっていたのだった」
○西暦２００?年旧東京エリア
紅井小春「あっハッハッハッハッハ、地球が滅びるよ　みんなみんな死んじゃえばいいんだ」
　ボロっちい着物を羽織って人々を先導して歩く小春、人々は泥水をすすり
　食料等を求めて殺人や強奪を繰り返していた
○旧公園通り（廃墟）
七海「誰か・たっ助けてください」
男性Ａ「ほれほれ　早く逃げないと追いついちまうぞ」

　昔公園通りと呼ばれた　瓦礫の道を少女が駆け抜けていく
　それを追う5，６人の男性達
七海「お姉ちゃん助けてよーぅ」
　七海は手探りで古い倉庫に逃げ込む、しかし　男たちが直ぐに発見する
　５－６分が経過する
同・倉庫内
男性　「ヒッヒッヒィ、なかなか良かったぜ・ねえちゃん」

と言って　七海のお尻を『ポンポン』とたたくと男性は立ち去って行った

　他の男たちもその男性の後を追う

地面にはいかにも男性達に乱暴をうけたであろう少女が顔を覆いながら倒れていた、かつて盲目のシンガーと騒がれた七海だった。

七海　「浅海ねえちゃん、もうだめだよ　こんなになっちゃー世の中おしまいだよ」

　乱暴した男性の一人は　いつか

「がんばれよ」って声をかけてくれたあのおじさんだった

しかし七海はギターを手探りで探し始めた　そして唄いだす

七海「何もかも・・忘れたくて逃げ出した事もある・・」

　その時　突然　弦が『プッッン』と切れる

七海　「こんなギターなんか・・ギターなんか、何の役にも立たないじゃない・・」

　涙ながらにギターを振り上げた七海

　地面に『バーン』と叩きつけた

残りの弦も『パチーン』と切れる

でもその時「お姉ちゃんの果たせなかった夢は　七海が叶えるんだよ

いい　この先　どんなに意地悪されても　お姉ちゃんは守ってあげられないの

でも七海なら　どんな事でも乗り越えられるって信じている

だって七海は　お姉ちゃんの　じ・ま・んだもの」

　と言う　姉、浅海の最後の言葉が浮かんできた

七海は　思い直し　手探りでギターを探した、そして呟く

七海　（浅海姉ちゃん　私負けないよ　諦めないよ、歌手の夢も世の中の事も・・）

　そして七海は　弦が切れたギターで唄いはじめた

「たとえ世の中が　終わる事があっても　未来（じぶん）を信じ

唄うー希望の歌を・・♪」

ボロボロの服で唄う七海の唄は、失いかけた自信へのエールでもあった。

N「ユダが引き起こした災害によって地球の人口はわずか三分の二にまで落ち込んでいた

政府は災害で家を失った人たちのために残ったＡＳＫ本部や支部などを

国民たちのために開放していたのだが　それでもその数は圧倒的に足りなかった」

????　地下に逃れた人達（前書き）

食料不足により　人々はネズミやゴキブリ（もちろん毒を抜いた）を食べていたのだった。

???　地下に逃れた人達

○世田谷区希望の家
　首都東京も相次ぐ震災によってかつての活気を失っていた
同・中
エリカ「ともみ、各エリアに割り当てられている食糧は限られている　節約しないと」
ともみ「困ったねえ、まあ当分あれで我慢してもらうか」
エリカ「あれねえ、私たちは良いけどみんな　特に、市民たちがね」
　と相談する沢乃と、ともみ
同・家の前
　そこにたくさんの豆腐をリヤカに積んでマサヒコ親子がやってくる
マサヒコ「こんな時の為に備蓄して置いた豆腐でもたんとくっておくれ」
藤兵衛「備蓄っておまえ、単に売れ残っただけじゃーねーか」
リツ「おまえさんそれはいいっこなし」
　ともう一台のリヤカを引いて母もやってくる
ともみ「わあ、マサヒコくんいつも助かるわぁ」
浜崎聖子「けっ、そんなに毎日豆腐ばっかり食えないわよ　私はセレブだったんだから」
ともみ「えーやわらかい豆腐はお年寄りに率先して上げてください」
浜崎聖子「んじゃー、あたいたちは何に食べるのよ　ひょっとしてまた
ゴキブリの蒸したの　食べろって言うんじゃー」
真理子「正解、でも今回は意外と行けるよ
でもいらないんならあんたの分は他の子供たちにやるよ」
浜崎聖子「それは、尺だから頂くわ」
　とプライドを捨て、渋々食べる

浜崎聖子「あらっ、意外とイケルじゃない」
みなみ「でしょう」
優子　「優子なんかもう3つ目だよ」
風見　「調理法に工夫がありまんのや、でも
優子はん　一回一つを守ってもらわなあ」
　注意をする風見
優子　「あーい」
　『ケッ』ネズミやゴキブリを食ってりゃー世話ねーや
　と、ふてくされる人たち
みなみ「まあまあまあ」
　と昔、夜店で買ったヒョットコのお面でおどけるみなみ
　『ハハハハハ』
　と笑う大人たち
N「それは東京がこんな状況になって以来
人々が見せた初めての笑い声だった　環境の変化は人々から笑いを
奪っていった」
エリカ「えーみなさん聞いてください、今日から電力節減のために
目を少しずつ
暗闇に慣らしていきますので　ご協力お願いします」
浜崎聖子「ちっ、こんなんだったら、私も地下に非難するんだった」
と、聖子
　真理子「残念だけど　地下に非難した人たちは、限られた食料を
求めて殺人や暴動など
凄い事になっているの　将来を悲観しての自殺者もかなりの数に上
っているって
本能さんや一文字さんが苦悶の表情でそう語っていたの
これでも地上のほうがずっと安全なんだよ」
　真理子の演説に『チビチビー』と亀
N「地球が滅びるかもしれないと言う人々の不安が世界中で最悪の
結果をもたらしていた

おそらく死亡者だけで、ゆうに天文学的な数字になるに違いない
今や世界中で絶望と言う名の悪魔が蔓延していた」

????　地下に逃れた人達（後書き）

天才プログラマー真理子を支えていたのは
チビチビ（亀）をくれた人　自分に勇気を教えてくれた
女性の言葉だった。

？？？　真理子の決意！（前書き）

「世の中もうおしまいだよ」元セレブの少女の投げやりな言葉をほぐしたのは　真理子の　自分に生きる意味を教えてくれた人の　言葉だった。

？？？　真理子の決意！

『なんとかならないのかよ』
と再び人々
ともみ「何とかなるわよ、みんなが力をあわせればきっと何とかなるよ、私はそう信じている」
浜崎聖子「それはあなた達、ＡＳＫの勝手な妄想でしょ、こうなったら
もうどうしようもないじゃない　親や友達や親友だって死んじゃったんだよ
　もうウンザリなんだよあんた達ＡＳＫの奇麗事にはさ」

真理子「聖子さんあなたの気持ちは痛いほど分かる　だって私たちみんな同じ立場なんだよ
今力合わせないでいつ合わせるんだよ『たとえ、どんな世界になっても
　夢を持ち続けるのと諦めるのとでは違うんやで』
って亡くなった親友が、裕ちゃんがいつもそう言ってくれていたんだ
だから私も　何があっても　絶対諦めない事にした　裕ちゃんや浜の仲間達にそう誓ったんだ」
　自分に言い聞かせるようにか語る真理子
マサヒコ「真理子お姉ちゃん」
　熱の入った真理子の演説に拍手するＡＳＫの仲間たち
外は相変わらず薄黒い雲に覆われていた
○夕方５時
同・樹木の下
　『終わりだぁ、もう人類はおしまいだあ』
玲子　「大の大人が情けないこと言うもんじゃない、私がここに来た時は

この辺はまだ何も無い焼け野原じゃった
それを無くなった主人や仲間たちとがここまでにしていったんじゃ
それを　この位の事で負けてたまるもんかぁ、人類の歴史はまだ終わっとらんぞ」
数々の災害を逃れた樹木の下で話す老婆叶玲子（７１）

？？？　真理子の決意！（後書き）

地球が滅びるかもしれないと言う不安におびえる人間たち
だが　少女の言葉が人々に希望を取り戻させるのだった。

??「希望の唄」（前書き）

ノアの方舟と言うと言うタイトルの由来がわかります。

??「希望の唄」

「ふん、なんだかんだ言っても　俺たちにはもう　未来なんてないのさハハハ」
　と笑う人々
ノア　「ううん、終わりじゃあないよ
まだ唄があるじゃない歌は楽しいときだけ
歌うんじゃなくて　悲しい今こそ歌うもんだよ」
　と、沢乃と弥樹の子ノア（5）　大人たちの前で歌いだす
ノア　＊「何もかも忘れたくて逃げ出した事もある、自分と言う存在を否定して
親や世間に　反発して生きてきた　自由ってやつに　少し憧れていた
暗い瞳をして　部屋に閉じこもっていた
少女の夢を見たの　それが　今の私だったの　ノリル人は誰も弱虫なんだよ
でも何かと　戦いながら　みんな必死で生きてる　もし君がこの世界に安らぎを
求めるなら　君の心は愛情で満たされるだろ」
みなみ、優子、真理子の3人が
　手でリズムを取りながら木影から出てくる
真理子「ねえ、ノアちゃんと一緒に皆で歌わない　また明日が来ることを願ってさ」
みなみ「そうだよ、みんなで歌おうよ」
優子　「いくよ、それっ3・2・1ハイ
＊最初から繰り返す
ノア　「怒り、悲しみ、裏切り、憎しみ　出会い、別れ、希望、絶望、生き詰まった
この世界はまるで孤独なピエロの様だね
　もしも世の中が終わることがあっても

未来を信じ、唄う希望の歌を
途中から七海もギターで加わる、その顔は希望に満ち溢れていた。
＊ルルルーールル　ルーールルルルルー　ルルルルルルー
ルルルルー　ルル―ルルルルルルルー
全員肩を組み唄いつづける
＊繰り返し
ノア「世界が平和でありますように、人々が安心して暮らせますように！」
『パチパチパチ』
と人々の拍手
男性「いい歌だな、昔まだ希望を持っていた頃のことを思い出したよ」
と六十位のおじいさんが涙する
女性「そうよ、こんな事くらいで挫けちゃーいけないんだって
改めてこの小さいお嬢さんから教えられた気がするよ」
五十代のおばさん、ノアちゃんを抱きしめながら　しみじみと言う
N「最初はためらっていた人たちも
いつしか少女の歌に合わせて唄っていたのだった
少女の歌は　絶望し全てを諦めていた者達にとっては　文字通りノアの箱舟になったのだった」

？？？　エピローグ『明日への戦い』（前書き）

ユダの出現により宇宙は　滅亡の危機を迎えていた
みなみと優子は　かけがえない人達の為に
勝ち目のない戦いを決意していた。

？？？　エピローグ『明日への戦い』

エピローグ『明日への戦い』
○翌朝
同・防波堤跡
　防波堤に立ち尽くすマサヒコを、探しにきたみなみと優子が声をかける
みなみ「マサヒコくん、見つけた」
マサヒコ「あっお姉ちゃんたち」
　振り返って少しだけ微笑む
優子　「こんなところで何していたの」
マサヒコ「人類はもう終しまいなの、僕たち誰も生き残れないの」
　真剣な目で訴えるマサヒコ
みなみ「そんなこと無いと思うよ、私はもう一度みんなの笑顔を見るのが夢だもの
『夢は諦めなければきっと叶うって』　確か子供の頃に読んだ童話の本に
そう書いてあったから　私もそれを信じているんだ」
優子　「私たち、一番最初に友達になったんだよね」
マサヒコ「うん、そうだよ」
みなみ「ねえ、マサヒコくん　もしも夢が叶うとして　私たちがそれを叶えて
　あげられるとしたら　マサヒコくんは何を望む」
マサヒコ「決まってらぁ、もう一度みんなで
笑い会えるそんな当たり前の世界だよ」
優子「・・なら叶うよ」
みなみ　「ううん、叶えてみせる」
　言葉を噛み締めながら言う、みなみと優子
マサヒコ「お姉ちゃん・達」

と小さく呟くマサヒコ

みなみ「私きっと守ってみせる、この星を宇宙を悪の手から」

そう決意を新たにする2人

N「はたして世界は救われるのか、コスプレ仮面とＡＳＫは果たしてユダに勝てるのか

みなみと優子の2人は勝ち目の無い戦いを決意していた

かけがえの無い友達の夢を叶えるために、人々の笑顔を取り戻す為に」

???RIVERの人々（前書き）

地球滅亡を家族と迎えるため、真夏はＲＩＶＥＲの解散を命じた
だが　当の真夏以下　多くの人たちは、ＲＩＶＥＲに残ったのだった

???RIVERの人々

○洞穴

洞窟の中で女性が二人、作業を進めていた

『ピッ・ポッ・パッ・ポッ・パッ』

真理子「よし、やっと終わった」

エリカ「それで大丈夫なの」

真理子「多分ね、もともとビーナに一つの惑星を破壊するパワーを与えてあるの

もっとも、自爆スイッチだけど」

エリカ「それでユダを」

真理子「いいえ　それは無理、これまでRIVERから送られてきたデーター

を分析したけど　たとえユダを縛り付けてこの地球ごと破壊したとしても　ユダにはおそらく傷一つつかない」

N「結局敦子たちは、良太　等と共に　ギリギリまでユダの情報を地球に伝えたいとRIVERに残ったのだった」

真理子「敦子さんがRIVERに残った真意は分かっている」

エリカ「・ユダと対決するつもりね」

真理子「そう倒すためじゃなく、次の戦い、つまり私たちの戦いを少しでも有利にするために」

2人沈黙する

真理子「たとえ一つの恒星が死滅してもユダは生き残る　傷一つ無く、でもやり方によっては慌てさせる事位なら出来る

そう言った作戦は私より　軍事参謀だった真夏さんの方が心得ているビーナ　あなたを今から一時的に粒子に変えて　RIVERに転送

します
以後は真夏参謀の指示に従いなさい」
　いつになく厳しい眼差しで言う真理子
ビーナ「はい、マスター今までお世話になりました　他のみなさんにも
よろしく伝えてください」
　と別れの挨拶を言うビーナ
『チビチビー』
　と悲しい声を出す、亀のチビチビ
ビーナ「チビチビちゃんも元気でね」
　と亀の頭を撫でてやるビーナ
『ババババー』
　ビーナの体が輝き、程なくして消える
真理子「がんばってくるんだよ」
　と笑顔で見送る真理子と沢乃だった。

？？？　祈り！！（前書き）

希望の家では人々が祈りをささげていた。

？？？　祈り！！

○移動衛星ＲＩＶＥＲ
『ババババー』
　ビーナが転送機から現れる
敦子　「これはＡＳＫにいたヒューマノイド」
山里　「いったいどういう事です」
真夏　「はっはっは、どうやらエリ達はこっちの魂胆をお見通しらしいな」
　と豪快に笑う真夏
真夏　「敦子、ユダはおよそ９０日後にこの海域に現れる　われらはそれを迎え撃つ」
山里　「やった、そう　こなくっちゃー」
　とガッツポーズをする山里
真夏「勝つための戦いではないぞ、次の戦いを有利にする為の戦いだ」
ビーナ「あのう、私は何をすれば良いでしょう」
真夏　「ビーナは俺と一緒に戦う、そのための作戦を授けるから付いて来い」
　と作戦ルームに向かう真夏
ビーナ「はい、真夏参謀」
真夏　「ばか、ここではチーフと呼べ」
　と、振り向きざまにビーナに言う真夏の仕草が可笑しくて笑い合う敦子と山里
○翌朝７時
　激しい風が吹いていた
○希望の家
合同部屋
柏木雪「おばあさん、気分はどうですか　おじいさんも元気を出し

てください
きっと地球は救われますよ」
　避難所でお年寄り達のケアを行っている　ボランティア団体　ノーパン・スリーブ
に所属していて　ゆきりんの愛称で　お天気お姉さんとしても有名な　柏木雪が
　そう言って励ましていた。
エリカ「ノア、さみしくない」
ノア　「ううん、ノア寂しくないよママもいるし近くにパパだっているし
　それに真理子姉ちゃんだっているから」
真理子（裕ちゃん、私たち助かるんだよね）
　沈んだ声でポツンと呟く真理子
ともみ「どうしたの、昨日諦めないことにしたって自分で言ったくせに
　弱音吐くなんて真理子さんらしくないぞ」
真理子「そう言うともみだって泣いているくせに」
水木、山寺「そこの４人、まあまあまあ」
　と、みなみが置いていった　ヒョットコのお面を被っておどける水木と山寺
ともみ「ぷっハッハッハッハ、二人ともこんな時にふざけすぎだよ」
水木　「こんな時だからこそふざけるのさ
　みんな元気が無い見たいだったから」
　と赤いスカーフを『ピン』と立てて言う水木
山寺　「みなみちゃんが教えてくれたのさ
　笑顔さえ忘れなければ何とかなる、前向きに行こうよって」
真理子「笑顔かぁ・・そうだったね、諦めない事にしたって自分で言ったくせにね　みんなごめん」
　と笑顔を見せる
　チビチビーが真理子を舐めてあげる

ともみ「みなみちゃんと言えば、あの二人はどこ行ったのかしら」
と四方を見回す
真理子「そう言えばさっきからマサヒコくんもいないような」
風見「まぁ、夕方までには帰ってきますやろ」
と風見も入ってくる、その他の人達は皆　祈りを捧げていた
「また平和な明日が来ますように」と

？？？　祈り！！（後書き）

ノーパン・スリーブは　ＡＳＫ誕生と同時に１９９９年末に発足した　団体で
当時としては　ノーパンで　ケアをする　と言う画期的なボランティア団体だった。（そうかにゃ？）

？？？　終わり無き戦いの旅立ち！（前書き）

地球が　宇宙が　崩壊すると言う
物語の　ラストです。

？？？　終わり無き戦いの旅立ち！

T『一千年の時を自在に操り魔女メディーナが破壊神ユダと共に銀河系に現れる
　ユダが吠える度に周囲の星々は消えていった」
防波堤跡に立つみなみと優子、後ろからマサヒコが声をかける
マサヒコ『がんばれー、お姉ちゃんたちー　、負けるなーぁコスプレ仮面」
　力の限り叫ぶマサヒコ
　「うん」と頷く二人、空には稲妻が轟き、強風で黄色いスカーフが風に靡く
　手を握り合う二人　戦いの決意を固める
　『ピカピカッ』
　２人の意志感じ取った　コスプレリングが輝く
みなみ「いくよ、優子」
優子　「ＯＫ、みなみ」
みなみ「ルビーＭＡＸ変身」
優子　「ユリシーズＭＡＸへんしん」
　カードを天に翳して叫ぶ
　『エターナル・メモリーオン』
　とシステムの音が鳴り、２人を最強のエンジェル・フォームへと変える
W仮面「ヤー」
　天使の翼を羽ばたかせ、ユダの来る方角に向って飛び立つコスプレ仮面
　『フッハッハッハッハ』
　後ろの岩陰から紅井小春らしき影が見つめる
　『キェーキェー』
　と、彼方からユダの唸る声が響く

歌　銀の翼のノリル
真実を見つめながら僕らは生まれてきた
この世界という衣を纏って
いつかは大人になり　歩き出す時が来る
その日が訪れると誰もが信じていた
だけど世の中は災いと欲望ばかり
穢れ亡き者達は、どこへ消えてしまった
のでしょう　ノリル　その翼を銀色に染
め全ての者たちを　導いてほしい　たとえその翼が黒く染まること
があっても
いつかは世界を救うことが出来るはずさ
2番　何もかも忘れたくて逃げだした事もある　自分と言う存在否
定して
　白い鎖でしっかり結ばれていた　絆っていう奴をまだ信じていた
人の愛情に染まった天使たち地球と言う　この星にその答えがある
という
ノリルその翼を銀色に染め、次なる世界へ羽ばたいてほしい　君が
この世界に安らぎを
求めるなら、無限世界は一つの楽園となる
○セリフ
『今この星は危機を迎えています
人は人を襲い、裏切り　環境は破壊され続けています
それらを救うのは政治家でもなければもちろん科学者でもありませ
ん
それは穢れのない心だけです　誰もが信じあい　許しあい　譲り合
うことによってのみ
この世界は再生出来のではないでしょうか
その為に何が出来るのか　私たちは今試させているのです』

ノリル人は誰も弱虫なんだよ、でも何かと　戦いながら　みんな必
死で生きてる　アー
ノリルその翼を銀色に染め全ての者たちを導いてほしい　たとえつ
かの間でも
時を越えることが出来たなら全ての世界は一つに（融合）なるだろう

○ある宙

ルビーとユリシーズはユダに戦いを挑む為宇宙を航行する
その後方から二人を追うＲＩＶＥＲ

○ＲＩＶＥＲ内
敦子「ＲＩＶＥＲ発進」
山里「僕たちもう、生きて地球に帰れない　かもな」
敦子「良太」
互いに手を握りあう敦子と山里

○地球を背景に
ルビー、ユリシーズ「こいユダ、私たちコスプレ仮面シスターズ
あなたのハートをメロりんこしちゃうぞ」

Ｔ「その後、彼らの戦いを知る者はない・・・」

ＥＮＤ

????　終わり無き戦いの旅立ち！（後書き）

この　コスプレ仮面には　今回の　絶望的なラストとは別に
希望的な　ラストも　考えています
その物語の　背景は同じですが　前回は　死んで励ました　人が
（京都出身で犬っ鼻の？）今度は　生きて励まします
どちらの話もキーマンはやぐっちゃん？じゃなくて真理子なのですが

？？？『ラスト・エンドレス』（前書き）

これはもうひとつのラストです。

???『ラスト・エンドレス』

1「赤ちゃん誕生」
アッカンベ橋を渡ったところに阿寒部病院があった。
○アカンベ医院　朝7時
○48号室
ともみ「弥樹さん　赤ちゃん誕生おめでとうございます」
一文字　「ともちん，忙しいのにわざわざ来てくれなくてもよかったす　のに」
　と子供の横で眠る沢乃の世話をする弥樹
ともみ「どう、隊長の具合は、　難産だったんだってね」
一文字「そうなんすよ　30時間もかかったんすからそのかいあって生まれたノアが
もう半端無く可愛くて　もうたまんないっす　でもその後　エリが体調崩しちゃって」
ともみ「隊長だけに？」
一文字　「美味いこと　言うっすね」
ともみ「せっかく来たのだからそのかわいいノアちゃんを写メに撮らせてくれる」
一文字「どうぞ　どうぞ　もうバンバンとっちゃっていいっすからなんならASK本部に飾っても」
　沢乃のとなりで寝ている赤ん坊を中心に話題がつき無い2人だった
○　ASK本部
真理子　「ともみちゃんから代理頼まれたけど今日はヒマですねぇ」
本能　「いい事じゃ無いか、我々がヒマなのが一番」
風見　「でも　あまりヒマやったら給料泥棒言われるんやなあ、これが」
そこに各携帯にともみから写メが送られてくる
風見　「おっ、ついに来ましたぜ」

みなみ「へーえ、これが隊長2世か」
優子　「こんなこと言ったら　隊長や一文字さんに怒こられるだろうけどさ
　思ったよりかわいくないね」
本能　「そうか　俺は可愛いと思うけど」
みなみ「・・・優子は自分が一番だって言いたいのよね」
優子　「・・わかる」
みなみ「そりゃー付き合い長いから」
　と　言いつつ、本当は自分の方が　可愛いかも　と思っているみなみだった。
『ビービービー』
　久方ぶりに警報機（怪獣や未確認の事件のみ）が鳴った。
真理子「本能さん、神奈川方面に9つの首をもった竜が出現したとの報告が」
本能　「なんだって」
みなみ「神奈川って言えば真理子さんの出身地じゃあ」
真理子「そうなんだ、両親や友達がたくさんいるので心配　なんだ」
風見　「大丈夫やでわいが行って、ササッとかたずけて来るさかい真理ちゃんは安心して吉報を待ってなはれ」
本能　「そういう事だ、全員出撃」
全員　「ラジャー」
　岩の一部が開きＥＲＩＫＡ　1号、2号機が出撃、みなみと優子も
　おなじみのモグラン号で2機の後を追ったのだった。

????『ラスト・エンドレス』（後書き）

敵は絶対零度（ドラマじゃないよ）の怪物だった。

？？？　最強恐竜出現」！（前書き）

横浜ではＪＡＣ（ジャック・リーグ）《千葉真一かな？》が行われていた　そこに現れた　最強恐竜ユダによってスタジアムはたちまち凍りついた。

？？？　最強恐竜出現」！

２「絶対零度の怪物」
○　横浜
ここヨコハマスタジアムではラモズ監督率いる東京ヘルディーと
　キャプテンカズ率いるヨコスカＦｃとの熱戦が来る拡げられていた
特三　「さあここでコーナーキック　蹴るのはもちろんキャプテン
カズゥでしょう？」
鉢ら谷「僕もそう思います」
　徳三「さあボールをセットした　城茂と見せかけて　横からカズ
ゥだ
　　蹴った　ゴー・・・」
　観客『ワあああああ』
　　カズが蹴ったボールはカーブがかかり、ゴールに吸い込まれ
たように見えた
　　だがその瞬間　スタジアム全体が凍っていた。
『キエーキエー』
　　と吠える最強恐竜ユダ
メディナ「ユダよこの星をズタズタに破壊するのだ　我等　ゴルゴ
ン星人のユートピアを
建設するためになフハッハッ八ハッハ」
そこにＥＲＩＫＡ　１、２号機が駆けつける
真理子「猛さん、相手はオーラのような物に阻まれてＥＲＩＫＡネ
ットでも
　検索できない未知数の怪物みたいだから　油断しちゃーだめよ」
　と通信を送る真理子
本能　「そう心配し無くても分かってるってこれでも喰らいやがれ」
　『ババババー』
　と熱戦中を放射する１号機

風見　「こっちも負けてへんでぇ」
　『シュバシュバシュバーン』
　とこちらは小型ミサイルを発射する
みなみ「優子わたし達も攻撃に参加するわよ」
優子　「そうだね」
　とモグラン号で到着した2人
みなみ、優子「いくよっ、ブレスト・バズーカー発射あ」
　『ドビューン』
ユダ　『ギアー』
　と鳴き羽を羽ばたかせるとたちどころに凍結する機体
風見「ウワーッ、脱出・・だめだ　ワイもここお・る」
本能「操縦不能、あーあーあ」
　『バーン』
　岩に激突して粉々に大破する一，二号機
　みなみ『うっ、嘘　そんなー』
優子『・・うそだあああああああ』
　みなみと優子の悲鳴が凍りついたスタジアムに響く

？？？　コスプレ仮面死す。（前書き）

全ての武器を跳ね返す暗黒恐竜ユダにコスプレ仮面はなす術が無かった。

？？？　コスプレ仮面死す。

○ＡＳＫ本部
真理子「そっそんなー・・・」
　と絶句する真理子
それはユダが吐き出した超絶零度であった
○横浜
優子　「どうするみなみ」
みなみ「どうするって　決まってるじゃない」
　『ピカッピカッ』
　とコスプレリングが輝く
みなみ「ルビー変身」
優子　「ユリシーズへんしん」
　『メモリーオン』
メディーナ「フフフフフ、やっと現れたなコスプレ仮面」
ルビー　「宇宙の果てからやって来た自由の戦士ルビー」
ユリシーズ「変幻自在に悪を切る　太陽の使者ユリシーズ」
ルビー、ユリシーズ「我らコスプレ仮面シスターズあなたのハートをメロりんこしちゃうぞ」
Ｎ「尻をふりふりし　手でピストルを作り振り返って撃つ真似をすると言う
独特のポーズがまたまた決まる、ちなみに今日はメイドさんのコスプレである」
ルビー「いらっしゃいませ、何をご注文ですかあ」
メディナ「注文は任せる」
　とユダの肩に乗りそういい放つヒミコ
ユリシーズ　「なら最初は　会いたかったぁブーメランはいかが」
　『ブッシュブッシュブッシュ』
ユダ　『グアー』

ユダの吐く霧で一撃で砕け散る、カッターブーメラン
ユリシーズ「そんなっＡＫＢ合金製だよ」
Ｎ「コスプレ星人が開発したＡＫＢ合金はダイアモンドの数千倍の強度なのだ
ルビー「なら次はダイアモンド・ソード」
『バーン』と砕け散る剣
ルビー「あちゃー、ヤッパ駄目か」
メディナ「どうだ　そろそろ降参かな」
ルビー「冗談　は顔だけにしなさい」
ルビー、ユリシーズ「ダブル　メイビーム」
『ビイッービイッー』
光線を放つも、バリアに阻まれユダには通用せず
メディナー「ほっほっほっほ、ごめんなさいと誤れば　許してやらないでもないぞ」
ルビー、ユリシーズ「ダブルコスプレ３段キック」
ジャンプし空中でひねりを加える
ルビー、ユリシーズ「てやーァ」
ユダ　『グアーッ』
と息を吐き賭ける
たちまち右肩から凍結しながら落下する、ルビーとユリシーズ
ルビー「肩がう・ごか・な・い」
ユリシーズ「こ・っ・ち・も　」
『ピコンピコンピ・コ・・・』
そのまま氷結したのだった。
○　ＡＳＫ本部
真理子「ああ、コスプレ仮面まで」
マサヒコ「・・お姉ちゃん・・」
いつの間にか駆けつけたマサヒコ少年
とスクリーンの前で絶句する真理子
メディナー「ははははは、ではこれからおまえ達に面白い物を見せ

よう、絶対零度
で凍ったコスプレ仮面に少しでも振動を与えると　どうなるか」
同・ＡＳＫ本部
真理子「やっやめてーぇ」
マサヒコ「真理子姉ちゃん」
　マサヒコを抱きしめて絶叫する真理子

？？？　コスプレ仮面死す。（後書き）

ユダの吐きだす冷凍光線によって　絶対零度に凍った
コスプレ仮面の運命は　そして　真理子達ＡＳＫに秘策はあるのか
？。

??　ＡＳＫの意地（前書き）

コスプレ仮面亡き後、人類に対して無条件降伏を宣告するゴルゴン星人
ＡＳＫだけでは　ユダに勝てぬと言う　人々の言葉に
天才コンピュータープログラマー真理子の意地が爆発する

??　ＡＳＫの意地

○横浜
一文字「よくも本能さんと風見さんを　許せないっす」
ともみ「そうよＡＳＫにはまだわたし達がいるんだから」
　その時一人乗りのミニヘリコプターヘリカ1、2号機で一文字と
ともみが駆けつける
一文字「ともちん左右から攻撃するっす」
ともみ「了解」
　『ダダダダダー』とミニレーダーガ
　ンで攻撃する2人
だが　当然、力及ばずユダに弾かれあえなく爆発
　『ガガーン』
ともみ『ウワーア』
一文字『脱出ぅ」
　一文字とともみ　その前に脱出する
　ユダ　鋭い爪でコスプレ仮面に振動を与える
『ヤメロおおお』
と人々の声
　『ガラガラガラ』
　と崩れるルビーとユリシーズの像
メディナー『ハハハハハ、これで邪魔者は片付いた後はこの星を改
造するだけじゃハハハハハ』
真理子「そっそんな　ばかなっ、こんなことになるなんて・・」
マサヒコ「怪獣の　バカやろーう」
　とＡＳＫ本部で唖然とする真理子とマサヒコ、そして住民たちだ
った。
Ｎ「その夜メディナーから全地球人たちの脳に直接メッセージ映像
が届けられた

それはこの地球を　ゴルゴン星の植民地とすること　人間達は服従の首輪をつけ
奴隷として絶対服従すること、それらを無条件で受け入れること
そして2週間以内に返答することなど　恐怖の内容だった。

N「政府はさっそく富士山中にあるＡＳＫ支部での緊急会議が
何日にも渡って開かれたが
『命があるならいつか反撃のチャンスもある』と政治家たちによる
〔奴隷容認派〕の意見と
『叶わずともあくまで戦うべきだ』　と言う村雨参謀を始とする〔あくまで戦う派〕
とが対立しあって中々結論が出なかったのであった
一方、コスプレ仮面がいなくなった今となってはＡＳＫだけでは
怪獣には歯がたたないので、さっさと降伏を受け入れ刺激しないようとの
人々の意見に逆に火がついたＡＳＫのメンバーたちによる新兵器開発が
コンピュータープログラマーである真理子と
エンジニアである山寺を中心に進められていたのだった。」

???新兵器の開発（前書き）

ＡＳＫ本部では　真理子のよる対策会議が開かれていた。

???新兵器の開発

三「会議」
○ＡＳＫ本部　会議室
　いつもの萌え系の服から白い衣装に着替えた真理子が話し始める
真理子「えーわたしは普通のＳＦドラマのように、やれ量子力学がどうとか　不確定
　性原理がどうとか　そんな難しい事を言うつもりは毛頭ありません。
大体そんなこと書いても　書くほうも疲れるし読む方もサッパリわかんないと思うし
　とにかく私が言いたいことはただ一つ　あらゆる学説から見ても〔絶対０度〕は不可能だと言うことなの、もっともこれは計算上零度にはならない
　と言う事なんだけど　今度の敵は私たちの常識をはるかに超えた
　言わば　超絶対零度なの
本能「それは　どう言うものなの？」
真理子「ビーナ、スクリーンを」
ビーナ「ハイ、マスター」
　会議室の電子黒板が　３Ｄスクリーンへと変わる
一文字「真理子さん・・これは一体　何のデーターっすか」
ともみ「なんだか　よくわかんないわ」
　真理子「これは、エリカ１号機の　破片を分析しデーターにしたものです
　その結果　機体は瞬時にマイナス∞で凍った事が解りました」
一文字「無限ってまじっすか」
真理子「マジすか学園」
神「不可能だ、あり得ない」
と　繰り返す整備士助手　啓介

真理子「その不可能を　あいつはやってのけたのよね」
ともみ「ならどうやって　やっつけるの、やりようが無いじゃない」
『そうだ、そうだ』
と　会議に参加してる他のメンバーたち
マサヒコ「なら逆をやればいいんじゃ無い絶対零度の逆を？」
山寺　「ほう　マサヒコくんは鋭いねえ」
一文字「でも　具体的にはどうやるっすか」
ビーナ「マスターの指示に従い　ユダのデーターを分析した結果ユダは熱に弱いと思われます」
真理子「そう　それも　太陽の2，30倍の超高熱が必要　しかし　残念ながら
地球上には　そんなエネルギーも時間も無いのよね」
一文字「じゃーどうしようもないじゃないっすか？」
会議は振り出しに戻るのだった
その時青白い顔をした女性が会議室に入ってくる
沢乃　「・いや、法法はあるわ　たった一つ最後の手段が」
と　言ってふらつき倒れそうになった所を　一文字が受け止める
一文字「エッエリ」
ともみ「隊長、大丈夫なんですか　そんな　体で」
沢乃　「平気よ　こんな時におちおち寝ていられるもんですか」
と息を『ハアハア』させながら言う沢乃
山寺　「で　その最終手段とは」
沢乃　「それは秘密よ、それより真理子、ユダの動きを数分いや数秒でもいいから
止めることは出来ない」
真理子「さっきも言った通りユダは熱に弱いことは間違いはないと思う
ただ完全に封じるには桁違いの超高熱が必要　でもほんの数秒間だけなら
私と山ちゃんとで何とかできるかもしれない」

沢乃　「とにかく時間が無いから急いで作業にかかって、それから
ともみは
ＲＩＶＥＲの敦子さんに頼んでほしいことがあるの」
ともみ「わかったわ、後であっちゃんに連絡とって見る」
一文字「一体なんすか、エリの作戦って」
山寺　「まあ、なんか思いついたんやろなせいぜい期待しましょか」
マサヒコ「その言い方風見兄ちゃんみたい」
真理子「・・ホントだね」
　真理子と山寺はＡＳＫ基地の殆どのエネルギーを使って
ノヴァ・バズーカーの大規模な物を　残り１０日間で仕上げるため
職員やＡＳＫメンバー達と徹夜で作業を続けたのだった。
〇　数日後　地下実験場
真理子「出来た　試作品だけど　さっそくテストして見るね」
　真理子はスーパーノヴァランチャーで　怪獣に仮装した標的を
撃つ
　祈るような気持ちで見守る作業員たち
　『ズバーン』
　とランチャーは破裂し、真理子は数メートル吹っ飛ばされる
真理子「痛・た・たた」
ともみ「だっ、大丈夫真理子さん」
真理子「うーん　しっぱいかぁ」と防護服を着た真理子が頭をかく
山寺　「ランチャーの強度が足りなかったんだな」
一文字「しかしよく無事でしたね」
真理子「そりゃー１００分の一の威力なもんで、しかし思ったより
難しいな
　ホントに出来るのかな」
　と不安を口にする真理子
そのとき、鋭い目の女性が入ってくる
『チビチビー』と亀が興奮して鳴く

???新兵器の開発（後書き）

真理子を勇気づけたのは　暴走族時代の親友
そして　生きる意味を教えてくれた
関西弁で犬っ鼻のあの人だった?。

？？？　真理子の夢（前書き）

真理子と　裕ちゃんの友情の物語です

？？？　真理子の夢

裕子　「あんたやったら出来るで、自信持ちや」
真理子「その声はもしかして」
チビチビ～と亀も喜び彼女に飛びつく
裕子　「チビチビ―元気やったか　真理子の面倒みてるか」
真理子「裕ちゃん」
　それは真理子の親友で暴走族モーモーハリケーンズの会長でもある
阿賀澤裕子だった。
　N「真理子は飯田中学時代　先輩の勧めで　モーモーハリケーンズと言う暴走族に入った
　しかし実のところ　使い走り（いじめられっ子）だったのであるもっとも真理子自身は　先輩のバイクの背に乗り、警察との追いかけっこを
　楽しんでいたのだが　そんなある時　神奈川のある堤防を眺めていたら
　下に倒れている女性を見つけた　どうやらバイクが整備不足で暴走したらしい
　小さい時亡くなった母が看護師だったため、バックの中に一応の治療グッズを
　用意していた真理子は　その女性を手当てしてあげた　そしてその時の
お礼として亀のチビチビをくれたのだった。」
○回想
○堤防に座って
裕子「へーえ　あんたのお父さん発明家だったんだ」
真理子「まーね　でも亡くなった父さんが　これがまた、お人好しでさあ　いっつも

特許を先に申請されちゃうの？　まだ小さかったおいらも（未だに小さい？）
さすがに頭にきてさぁ「何で訴えないの」って聞いたんだよ　そしたら
「発明は誰の者でもいいんだよ　お父さんは皆が幸せになるために地球を救う為に　作ったのだから』そう言って　笑ったんだ」
裕子「ふーん、なるほどね」
真理子「そのときおいらメチャメチャ感動しちゃってさあ、いつかおいらも
父さんのような『地球を救える発明家』に成りたいって思ったんだ」
瞳を輝かせて　そう語る真理子
その女性は　全ての暴走族を影で仕切る存在だった
それ以後　ハリケーンの仲間たちは全員で真理子の夢を応援し続けたのだった。
〇戻る
沢乃「真理子さんを応援したいとさっきＡＳＫ本部を尋ねてきたの」
裕子「浜の仲間たち、飛鳥もサヤカもなちも　みんな〔いつか地球を救うりっぱな発明家になりたい〕ってあんたの夢応援して　るで
たとえ　どんな世界に成っても夢を持ち続けるのと諦めるのとでは違うもんな」
と優しい目で励ます
真理子「ありがと　祐ちゃん、わたしもう一度　がんばって見る」
ハグし合う裕子と真理子、心強い声援を得て真理子たちの作業は活気づく
そしてまもなく決戦を迎えようとしていたのである。

？？？　悲しみの勝利（前書き）

遂にＡＳＫと　ユダとの最終決戦がはじまる。

？？？　悲しみの勝利

四「悲しみの勝利」
○○横浜　港町　ナルト地区２１番地
○午後６時３０
　『キエー』
　ユダの肩に乗ってメディナー（ヒミコ）が姿を現す
メディナー「フッフッフッフ　ＡＳＫの諸君結論は出たかな」
Ｎ「そこにＡＳＫを代表して、真理子が進み出る」
真理子「ええ、出たわ　飛びきりの結論がね」
メディナー「それは、無論降伏だろうな」
　冷ややかな表情で言うメディナー
真理子「いえ、その逆よ　わたし達ＡＳＫはどこまでも戦う
　何者にもこの地球は渡さない」
マサヒコ「いっちゃったよ、今日の真理ねえちゃんカッコイイ」
　と人々となりゆきを見守るマサヒコ
メディナー「ハッハッハッハッハ、それは利口な判断ではないな
　ユダよこの者達を粉々にするのだ」
ユダ　「ギエー」
　と鳴き、冷凍光線を発射しようと口を開けたユダ
真理子「いまだ、必殺スーパーノヴァ弾発射」
　『ドビューン』
　とユダに向って放たれる
真理子、ともみ、一文字『うわあああああ」
同時に１、２メートル　飛ばさせる真理子とそれを支える一文字とともみ
　ノヴァーダンはユダを包んだ、その瞬間ユダは５秒くらい活動を止める
メディナー「なっ？」

『ＥＲＩＫＡＭＡＸゴー』
　そのとき何かがユダの体内に飛びこむ
一文字「そっ、そんな」
沢乃　「弥樹ちゃん　ノアを頼んだわよ」
一瞬、一文字を見てそう呟く沢乃
　ユダの体内に入った沢乃はスーパー念力で自らの体を超高熱に変えていった
沢乃「デョーオ」
『ビビビビビビィ』
沢乃　「・・まだ・・まだ・・熱が・た・りな・い」
　それとほぼ同時に移動衛星ＲＩＶＥＲからスーパーノヴァ砲がユダに口に向って
　放たれようとしていた
敦子　「ＲＩＶＥＲの９７パーセントのエネルギーをゼノン砲に充電いくわよＥＲＩＫＡさん受け取って、発射―」
『ババババババー』
ユダ　『ギエー』
ゼノン砲の熱エネルギーを得て太陽の数倍の熱エネルギーとなったエリカは
内側からユダを崩壊する。
　『ガガーン』『トロトロトロ』
メディナー『そんなばかなー』
　『オノレー』
　ユダの首はことごとく吹き飛び、全体はまるでバターのように溶ける
　後には静けさだけが残った
村雨　「かっ、勝ったのか、これが　勝ったと言うのか」
と吐き捨てる村雨

????　悲しみの勝利（後書き）

突然現れたシャボン玉によって
ユダに倒されたあの２人や　これまで怪獣の犠牲になった人々にも奇跡が起こる。

？？？　真理子の旅立ち！（前書き）

戦いは終わり　勝利に導いた真理子にも
別れの時がやってくる。

？？？　真理子の旅立ち！

五「コスプレキングの伝説」
○ナルト地区　午後７時３０
一文字「エリ、見ているだろ　俺達勝ったんすよ・・なのに・」
　大地を叩く一文字とそれを漠然と見守る仲間たち
そのとき宇宙から大きなシャボン玉が現れる
一文字「あっ、あれは？」
○球体内
みなみ「あれっ、ここは　なんか見覚えがあるよ」
優子　「ほら、ヒーローショーをやった後のあれじゃない」
セブン「ふふふ、２人とも相変わらずですね」
　と七色のコスプレ星人が話しかける
みなみ「その声は？」
セブン「２人には　人間の姿でお会いしましたね」
優子　「麻衣ちゃん　セブンね」
セブン「そのとおり、わたしは地球に２０２　の命を持ってきました」
みなみ「２０２のいのちぃ、私たちそんなにいらないよ」
セブン「話は　最後まで聞きなさい、その内の２つをみなみと優子に上げましょう
　今までよく地球を守りましたね」
みなみ「うん」
優子　「でも　最後はやられちゃったけんだけどさ」
セブン「安心しなさい、ユダはＡＳＫの仲間達が倒しましたよ、これからはどんなときも
自分達　地球人の手で乗り越えることでしょう」
みなみ、優子「そっか、そうだよね」
セブン「勇敢に戦ったあなた達２人を　是非コスプレファミリーに

迎えたいと
　コスプレキングが行って来ましたが　どうします」
みなみ「光栄ですと伝えてください」
優子　「でも、キングって誰だろう」
セブン「かつての戦いで変身能力を失ったキングは人間として
　いつもあなた方を側で見守っていたのです」
そのときみなみたちの脳裏にある人物の姿が浮かんできた
みなみ「わかった　沢乃隊長ね」
優子　「きっとそうだよ」
○ナルト地区２１番地
Ｎ「球体は突然破裂し、中からセブン、ルビーユリシーズらコスプレ仮面達が現れた」
マサヒコ「あっ、コスプレ仮面だ、やっぱり生きていたんだ」
　『ピコンピコンピコン』
セブン、ルビー、ユリシーズ大空に飛びたつ
「ショワッチ」
マサヒコ「さようならーコスプレ仮面、お姉ちゃん達　また遊びに来てねぇ」
と　手を振るマサヒコ
真理子「えっ、コスプレ仮面て　あの２人だったの」
マサヒコ「なんだ　知らなかったの、とっくに気づいていると思ったのに」
風見　「ほんまやで、まあ確かに駄洒落は宇宙人並みやったけどな」
ともみ「その声は　風見さん、なんで？」
　そこに霧の向こうから本能、風見、　沢乃の３人が現れる
一文字「えっ　エリ、こりゃーどうなってんの」
沢乃　「わたし達にもわからないけど　この宇宙には　奇跡もあるって事ね」
　とウインクするエリカ
Ｎ「その夜　２０２人の人たちが生き返ると言う奇妙な事件が起こ

った
それは怪獣が現れて以来犠牲になった人々の数と同じであった。
そして真理子はこの功績が認められ、ＡＳＫアメリカ技術庁長官として
　赴任して行ったのであった。」
○羽田空港外
みなみ「おーい真理子さーん」
優子「行ってらっしゃぁい」
ビーナ「マスターお元気で」
　間もなくニューヨークに出発する飛行機に向って手を振る仲間たち
同・機内
真理子　窓を見ながら（さよならみんな、いつかまた）
　と、呟く　その頭上で亀が『チビチビー』っと鳴く。

????　マザー・プラネット（前書き）

新宿郊外にある一文字家では　ノアの５歳の誕生会が開かれていた

???　マザー・プラネット

○東京２０ｘ５年
新宿郊外　一文字の家
マサヒコ「ノアちゃん、５歳の誕生日おめでとう　これプレゼント後で開けて見てね」
一文字「マサヒコくん、毎年いただいちゃって悪いっすねぇ」
マサヒコ「いいって事よ」
　と照れるマサヒコ
ともみ「ノアちゃん誕生日おめでとう、これわたしが一生懸命焼いたクッキー
　美味しいから　後で食べてね　そしてこっちが真理子さんから送られてきたハート型のポーチ」
　と言って　クッキーと　ポーチを渡すともみ
ハート型のポーチには「ノアちゃん５歳の誕生日おめでとう」と言う真理子のメッセージカードと　真理子と背の高い男性がチビチビを連れて写った
写真が添えられていたのだった。
ノア　「ありがとう、ともみお姉ちゃん」
風見「へーえ、真理子はん、結婚しなはったんか？」
本能「また　えらい身長差だな」
ともみ「でも私はてっきり山ちゃんと再婚すると思っていたんだけど」
エリカ「フフッ、実は私も」
山寺「あのね、前に行ったと思うけど　真理ちゃんは　亡くなった妹に
似ていたの」
一文字「またまたぁ、エッチ位はしたんでしょ？」
山寺「あほー、お前と違うは」

ともみ「同感　私も昔口説かれたし」
エリカ「あらっ　それは初耳　まさか　何もなかったんでしょうねーえ」
　と　一文字を締めあげながら言う沢乃
一文字「きっ　キスだけっす」
エリカ「ほんとにぃ」
ともみ「いきなりね　後　お尻もちょっぴり触られたかも」
一文字「うそだ、それは嘘だ　触ろう思ったらひっぱたかれたかれたんじゃないっすか」
ともみ「あらそうだったかしら　胸にかみつかれた跡がまだ残ってるのに」
一文字「嘘だ　嘘だ　裁判長　嘘です」
ともみ「でも　あわよくば　やろうと思ったんでしょ？」
一文字「もちろんっす　ともちんは美人っすから　エリとの二股も良いかなって・」
　『ギェー』
　沢乃の回し蹴りを受けて『ドテッ』と倒れる一文字
一文字「ふえーん、冗談っすのに」
　『あははは』
と笑う一同
エリカ「みんな今日はノアの誕生会にようこそいらっしゃいました　何も無いけど　うんと楽しんでいってね」
ノア　「今日はノアの誕生日に来てくれてありがとう」
と挨拶する
N「そのときラジオから地球保護キャンペーン曲として　世界中で1千万枚を売り上げ　レコード大賞？7を達成した、？
ｅｎｕｓの名曲
　マザープラネットが流れてくる」
〔マザープラネット～母なる大地地球♪」
最初宇宙には何も無かった

ただ黄昏だけが辺りを包んでいた
ある日、女神が時の扉を開いて
星の種を宇宙に　ばら撒いたの
風は雪と出会い自然が生まれた
人は愛と出会い命が生まれた
この世界が出来る　幾千年前のこと？
大切なこと　それはあなたに愛されること
遥か世界の彼方から　君の事守ることだけが
僕の願い
2番
昔、世界には孤独は無かった　ただ永遠の
闇が　辺りをとり巻いてた
ある日　少女が　絶望の中から
全ての者達に　希望を振り撒いたの
誰も彼もみんな、自由になった
だけど　それが　世界の　終わりを早めた
この世界が終る　幾千年　前のこと
大切なもの　それは地球　母なる故郷
グリーン・アースに包まれた　この星を
守るために　僕らは　生まれてきたんだ
□手話で
＊何かがあった　遠い世界で
果てしない時を越えて　輝き続ける
　熱い魂　大切なとき　いつも君が
側にいてくれた　もし僕等の声が届いたなら　伝えたい　この星は
　まだ生きているんだと
ルルールルルルルルルルルー・ルルルルルルー・ルルルルルルールルー
ルルールルルルー
（3回繰り返し）
地球という　この星に住む　誰かに

『パチパチパチ』と拍手が巻き起こる
ともみ「いい曲だね」
一同「ほんとにね」
誕生ケーキを囲んで聞き入る仲間たち

????　マザー・プラネット（後書き）

再び地球を襲うスーパーマグロ星人
その時　球体の中から彼女たちが帰ってくる。

？？？　戦いはエンドレスで？（前書き）

京都に現れた　スーパーマグロ星人
その時　少女たちが帰ってくる。

???　戦いはエンドレスで？

エピローグ『ラストエンドレス』
○数日後　京都
柏木雪「あっ　チンとンシャン　ハイハイハイ」
　と　扇子を持って　舞子姿で踊る　雪
浜崎聖子「ねえゆきりん　彼方　精神の　ボランティアでしょ何で舞子さんまでするの？」
　雪　「それがするんだよね、最近は若者もお年寄りも　心を病んでる人が多くてさ
　まあ　カラオケもあるから引き受けちゃたんだけどさ、でもあるのは昭和初期の唄ばかり
カチューシャやヘビロテ　歌えると思ったんだけどね」
　と　ため息をつく柏木
聖子「そりゃー大変だね　でも　ノーパンで舞妓姿なんて《芸者って元々
　パンティはかないんじゃーなかったっけ？》そりゃー確かに癒されるわ」
　雪「ねーえ聖子　あんた　バカにしてるでしょ」
　その時　何かが吠える声が聞こえる
　『ギェー』
雪「ギェーって、あの大きなマグロみたいなのは何？」
　上を指差して言うゆきりん
聖子「ん　マグロ　そうかさっすが京都だね、マグロの怪獣さんまで居るんだ？？」
雪「えっ、怪獣」
　『怪獣っだってさ』『えー怪獣かよ』
　たちまちパニックになる
マグロ怪獣が金閣寺を襲っていた

聖子　雪「きゃー」
Ｓマグロ「ホッホッホッホ、我が名はスーパーマグロ星人
　こんどこそ、この地球をいただきに来た」
○ＡＳＫ本部
ともみ「沢乃（旧名で呼んでいる）隊長、京都にスーパーマグロ星人が出現したと　の事」
風見「なんやて　」
本能「性懲りもなくまた出やがったか」
沢乃「よっし　グランドマザーで、久々に全員出動」
全員「ラジャー」
　その頃スーパーマグロ星人は世界遺産の数々を壊そうとしていた
このままではＡＳＫが到着する前に　京都中の遺産が壊されてしまうスーパーマグロ「ガッハハッハッハッハ、遺産な全部壊れてしまうがよい」
『ダーン』
　大仏を壊すスーパーマグロ星人
雪「あっそれ　修復が大変なのにぃ」
聖子「ばか　そんな事　心配してないで逃げるよ」
　柏木の手をとって逃げる浜崎聖子
『ガガガガ・レディガガ』
あちこちに　大仏の顔の破片が飛び散り、逃げ惑う人たち　そのとき
『ババババーン』
と空から　光の球体（しゃぼんだま）が　出現し
　それが『パーン』とはじけると　中からラッコのコスプレをした戦士が現れる。
ルビー「宇宙の果てから久々にやって来た自由の戦士ルビー」
ユリシーズ「変幻自在に悪を切る　太陽の使者ユリシーズ」
　腰を振るおなじみのポーズを決める
ルビー、ユリシーズ「我らコスプレ仮面シスターズ、あなたのハー

トを
メロりんこしちゃうぞ」
駆けつけたＡＳＫのメンバー笑顔
ＥＮＤ

？？？　戦いはエンドレスで？（後書き）

グランド・マザーは　エリカ1号、2号機を合体させたようなバトルシップである。

????　番外編『銀の瞳の戦士』（前書き）

ドームを開いた横浜スタジアムで行われているヒーローショーに宇宙から国籍不明の生命体が降ってくる。

???　番外編『銀の瞳の戦士』

?ヒーローショー○横浜　朝１１時
N「ここＳＫＢ横浜スタジアムではちびっ子に大人気のヒーロー
仮面ナイダーディードールのアトラクションショーが行われていた。
」
　１０の世界を旅するディードール　そのその美しい
お尻は何を見る　さあディードールの　登場だ　Ｚゼーット
　と水木かかしの力のこもったナレーションが入る
マサヒコ「始まるよ父ちゃん」
藤兵衛「麻衣ちゃーん」
　と黄色い声援を送る豆腐屋のオヤジ
しばらくして　客席の中から　ショーカスの幹部アポロチェン
　が現れる
アポロチェン「わがショーカスは　人間を一瞬で金魚に出来る
　画期的な兵器を開発した（金魚かよ？）
この装置を使って　世界を手に入れるのだぁ」
　と　好演する『杯棒』と言う刑事ドラマに出ている人
そこにバイクに乗って　主人公　司麻衣（つかさまい）
　役で元ＡＫＢクラブの犬島麻衣が登場する
『待ってました　まいまい』『たーまやー（花火かよ？）
　『ワーワー』『ワーワー』
　と会場の熱気は最高潮に達する
マサヒコ「凄い熱気だね父ちゃん」
藤兵衛「ああ、来てよかっただろ」
マサヒコ「うん」
　アポロチェン「現れたなディードールよ　私は
世界征服と言う目標を達成するまでは何度でも蘇る
大変迷惑な存在なのだぁ」

てを後ろに持っていくと　３Ｄのスクリーンが現れ
たくさんの怪人たちが登場するのであった
『タラコ女』『カミカミ・愛ちゃん』
『水すましのエル』『巨乳・聖子』
『そしてシャドー・ブーン』
そらまめさんが何役も演じる
そして物語はまいまいの変身と言う重要な場面を迎える
司麻衣「いくわよ、バイオへんし・・・」
『ピッカー』
麻衣「なっ　何よ　良いところなのに？」
突然空が光かと思うと、みた事もない飛行機らしき物が付近
の林に落下する
『ドカーン』と爆発音
マサヒコ「突然、なんだぁ」
『おい、事故らしいぜ』『大丈夫なのかよ』
とざわめく観客たち
『ウイーンウイーン』
遠くから救急車のサイレンの音が響く
○　ＡＳＫ本部
『ビビビビビビィ』
ともみ「はい、こちらＡＳＫ本部、はい分かりましたすぐにうかがいます」
エリカ「ともちゃん　なんだって」
ともみ「それが　どうも横浜スタジアム近くで飛行機事故があったようなの」
一文字「そりゃー大変じゃ無いっすか」
エリカ「さっそく例の凸凹コンビに行ってもらいましょう」
優子　「えーまたみなみとなのぉ」
みなみ「・なんかご不満でも」
優子　「別にぃそんなわけじゃないけどさぁ」

みなみ「なら勝手にすればー」
優子　「待ってよ優子も行くからそんな怒こらないでよぉ」
　と腹を立てて出て行くみなみを追う優子
同・整備室
みなみ「山ちゃん準備は出来てる」
山寺　「ああ、たった今終ったばかりだよ」
調整が終ったっぱかりの気球メカに乗り込む
優子　「今日は新兵器なんだよね」
みなみ「アッカンベ猫、発進・ゴー」
　軌道スイッチを入れると、バルーンに付いている猫の絵が
『アッカンベー』をして上昇する。
○神奈川県上空
マリンスタジアム周辺ではたくさんの人だかりが出来ていた
みなみ「こちらみなみー、まもなく事故現場に到着します」
相手・ともみ「みなみちゃんパイロットを発見したら
生死に関らず回収してとの事」
みなみ「わかったわ」
　海岸沿いに下りる2人
同・岸辺
マサヒコ「おーいお姉ちゃん達、こっちこっち」
　と、手を振り2人に近づいてくるマサヒコ
みなみ「マサヒコくん何でこんなところにいるの」
マサヒコ「それがね　仮面ナイダーのヒーローショーを見に来たんだけど
突然近くに飛行機が落っこちてきてもーう大変だったんだから」
藤兵衛「おかげで楽しみにしていた　ショーは
中止ですよ中止まったく」
と、愚痴をこぼす
マサヒコ「こう言っているけど　父ちゃんは　まいまいと握手したかっただけなんだ」

藤兵衛「こっこらっ　余計なこと言うんじゃない、　母ちゃんには内緒だぞ」
　と『ペロ』っと舌を出す藤兵衛（ローラかよ？）
優子　「あのマサヒコくん悪いけどお姉さん達、これから仕事なんだ」
マサヒコ「うん分かっているって、じゃー仕事頑張ってねぇ　帰るよ父ちゃん」
藤兵衛「では失礼します」
　土手を帰っていく藤兵衛とマサヒコ
　所属不明の戦闘機が大破し、その近くに倒れていたパイロットを発見する
天童隊員「北斗みなみ隊員と南優子隊員ですね」
みなみ「あなたは」
天童隊員「自分はＡＳＫ横浜支部所属の天童博也（１９）と申します」
　と、敬礼したままで話す天童隊員
みなみ「後はこっちでやりますので、あなた方は市民の誘導をお願いします」
天童隊員「分かりましたではお任せします」
　頭をちょこんと下げ駆け出す天童隊員
　焼け焦げたコックピットの中には銀の瞳をした生命体がいた
優子　「この人生きているんだろうか、何か言っているみたいだけど」
みなみ　「わかんない、とにかくアッカンベ号に運ぶから手伝って」
　と上半身をみなみ、下半身を優子が持って気球に運ぶ
みなみ「足元気をつけてね・トットット」
　と石につまずき転びそうになるみなみ
優子「もーう自分でころんじゃー世話ないチュウの」
みなみ「しー（すい）ません」
　アッカンベ猫に　生命体を収容する二人

みなみ「それでは再び発進ゴー」
『アッカンベー』
とシステムの音
（2）気球クラブ
優子　「それにしてもやっぱぁ気持ちいいなあ、気球に乗るのってＡＫＢ学園の卒業のとき以来なんだ」
みなみ「そういえばそんなのあったね気球クラブだったっけっ」
優子　「うん　そうだよ　懐かしいな」
回想
Ｎ「それは6年まえの日曜日だった　熱気球〔会いたかった号〕の完成式を行なうので
気球クラブのメンバーは朝5時までにアキバ公園前に集合せよと
　ボスことまゆみ先生からの指令の伝書鳩が届き、優子たちメンバーは
朝早く公園に出かけていったのであった」

??? 気球クラブ（前書き）

ＡＫＢ学園の親友　麻友（まゆゆ）と一緒に飛んだ
優子の　気球クラブでの思い出です

??　気球クラブ

○秋葉原公園のある四つ角
麻友「おはよう、優子（１５）遅刻だよ」
　と、埼玉出身の田辺麻友（１５）が走りながら声をかける
優子「そう言うまゆだって遅刻してんじゃん」
麻友「だってこんな朝っぱらから呼び出すなんてあんまりだよ、大体うちら　今
　受験勉強で　クラブどころじゃーないのに？」
優子「だよね　あの先生　人の都合も考えず突然呼び出すんだから参っちゃうよ」
　二人　文句を言いつつ、公園に向う
公園に着き他のメンバーを待つ優子と麻友、時計はとっくに６時をまわっていた
　しばらくして夏目まゆみ先生（３９）がお尻をかきながら
伝書鳩のケイちゃんと一緒にやってくる
同・公園内ＳＫＢ広場
まゆみ「なんだ　たった２人だけなの、仕方ないわねぇ　じゃー２人にはさっそく試
運転してもらいましょうか」
と、背負った組み立て式の熱気球を膨らませるまゆみ先生
優子「えー、試運転」
麻友「と言うと　つまりぃ、飛ぶかどうか分からないと言うことよねぇ」
　瞬間　優子と麻友青ざめる
麻友「あのぉまゆみ先生　どうしてもやるんですか」
優子「最初は無人でやってからと言うわけには」
まゆみ「もちろん　いきません私は人が乗っての実験が見たいのです」

麻友「じっ　実験て　ね・・」
優子「なら　まず先生が見本を」
麻友「そう　まゆゆたちはその後やるよ」
まゆみ「・・そうしたいのはやまやまなんだけど　私は高所恐怖症なのよ
　知ってるくせに」
気球クラブとダンス部の顧問であるまゆみ先生は高いとこは苦手だった
麻友「仕方ないなぁ　失敗したら恨むくらいじゃあすまないよ」
優子「やっぱやるのぉ」
　渋々気球に乗り込む2人
まゆみ「安心なさい　きっと大丈夫よ　理論的には成功するはずだから・多分」
　と、適当に励ますまゆみ
まゆみ「それじゃー行ってらっしゃい」
　と気球を繋ぎ止めていたロープを切る
　その時『ごー』と言う物凄い風が吹く
優子と麻友同時に『ヒエー』っと　悲鳴を上げる
　『ザーザー、ブーン』
　気球は風に乗り少しずつ上昇していった
「わーすごいや」
　と感激する、周辺の子供たち
優子「やった、浮いてるよ　まゆゆ」
麻友「ほんとだ、まさか成功するとは思わなかった」
　と興奮冷めやらぬ2人
　気球は地上からもう6メートルに達していた
　『ドバーン・ドカーン』
その時何処かから花火が上がる
優子「凄いねえ・まゆゆ花火だよ」
優子、麻友「たーまやー」

と興奮する2人
『ビューービュー』
と、突然の突風に揺れる気球
優子「きゃーだいぶ風が出てきたよぉまゆゆ・・・
まゆゆってばーなぜ黙ってるの　まゆゆぅ・・・」

??? 気球クラブ（後書き）

銀色の瞳をしたエイリアンの正体は？

？？？　未知の生命体（前書き）

みなみと優子は　静岡にある　ＡＳＫ研究所に
謎のエイリアンの分析を依頼した。

???　未知の生命体

□戻る
○神奈川県上空
みなみ「??優子　さっきから一人で何ブツクサ言ってんの
私は麻友じゃなくてみなみだよ　優子　頭大丈夫?」
優子　「・あれっ、いけないまたスリップしちゃった」
　と『ペロッ』と舌を出す優子
みなみ「こっ、これだもん先が思いやられるよ」
と、昔を懐かしむ2人だった。
N「その後最新の設備を持つＡＳＫ病院で細胞や血液型等いろんな
検査が行なわれた結果、
私我地球人とは異なる人種で　かすかに生きていることが分かった
　だがそのエイリアンは
未だに、活動を停止したままなのであった」
○　静岡県ＡＳＫ研究所００室）
エリカ「どうなの陽一くん、何か分かった」
陽子　「それがぁまだ眠ったままなんだよ」
エリカ「ふーん、いつ目を覚ますんだろうね
　とＡＳＫの若き所長　渡り廊下陽一（わたりろうか）（２４）と話す沢乃
２，３の触覚を持った銀の目をした生命体がたくさんの管に
つながれベットに横たわっていた
　時々『グァッグァッ』
　と　繰り返す
同・外
みなみ「ねえ優子あの銀の目の人宇宙人だよね」
優子　「多分ね」
みなみ「なら私たち　わかるんじゃない」
優子　「でもあの時はわかんなかったよ」

みなみ「それはそうなんだけどさ」
エリカ「2人ともここにいたの、例のエイリアンさんが目を覚ましたそうよ」
と、2人を呼びに来た沢乃と　病室に向う
中にはともみと真理子を除くＡＳＫのメンバー全員と医師の陽一がいた
院内（００室）
エリカ「ねえあなたは一体誰で、何の目的でここにきたのか　答えてくださいお願いします」
　とエイリアンの手を握った沢乃を中継して、彼女の意思がみんなの心に流れてくる

？？？　未知の生命体（後書き）

エイリアンが語った（伝えた）物語
それは　戦う道具として作られた悲しき戦士の物語でった。

？？？　機械獣軍団（前書き）

遠い宇宙のかなたで繰り広げられる
『銀河対戦』です。

？？？　機械獣軍団

ローザ「私が生まれた惑星デル・マイトはかつてはこの地球と同じく自然と美しさを兼ね備えた素晴らしい惑星でした、
しかし機械化を勧めようとする一部のおろか者たちによって、強固な軍事力を持った要塞に
一変していったのです。　それがやがて同じ民族同士の戦争を生み多くの血が流されました
それでも武器を売って儲けたい商人達は　永久に死なない兵士の開発していったのです
　そうそれが私たちドラゴン・ガード（機械戦士）なのです。
兵士として戦場から戦場へ借り出された私たちの戦いは故郷デル・マイトが消滅した後も
終ることはありませんでした　一つの星が壊れるとまた次の星へ行って戦争をする
私たちはそうして星から星へと渡り歩いてきたのです」
　と語るローザ　その瞳からは　青色の涙が滲んでいた。
エリカ「なっ、なんと言う過酷な運命・」
　手を握ったまま涙する沢乃
ローズ「そんな私たちにも新しい使命が与えられました
　金星都市アフロディナの王ゼロストは私たちドラゴンを護衛として抱えてくれたのです　その当時ゼロストはたくさんの政敵に命を狙われていたからです
しかし　同時に　王の護衛をする代わりに市民と同じ幸福も与えられたのです。
私たちはゼロスト王の恩に報いるために第2の故郷であるアフロディナの繁栄に力を注ぐ事にしました。」
みなみ「よかった」
ローザ「しかし運命は私たちを祝福してはくれませんでした、王の

側近だった　ザンカルド将軍が
無数の機械獣軍団を率いてアフロディナに攻めてきたからです」
エリカ「えっ、機械獣（マジンがZだな？）軍団」
ローザ「ザンカルドはドクターあゆ博士に極秘に　開発させた　機械獣軍団を使って
全宇宙を捻じ曲げようとしていました　私達はチーム・ドラゴンを結成し
代々の王達と力を合わせザンカルドに戦いを挑みました、　でもその戦いは数千年の年月を得て
アフロディナ文明が滅んでも　なおも終ることはなかったのです
そして長きの戦いで私たちの兵力は１０分の一にまで減少していきました
追い詰められた私たちは、最後の勝負（かけ）にでたのです。」

○宇宙暦？？年
N「そこは遥かなる宇宙、地球とは別の銀河だった。
全ての生命体の消滅を企むザンカルドが操る怪物軍団と、この世界（うちゅう）の秩序と安定を願うローザ率いるドラゴン・ガードの戦士たちが
宇宙の命運を賭けて激しく激突していた
ザンカルドは巨大な宇宙エイ　クラウメスやクラゲの姿をしたゲデーラなどの
機械獣たちを使って宇宙を掌握しようとしていた。
ローザはマシン・パンドラを操り　怪物軍団に戦いを挑んだが
数で勝る機械獣たちに苦戦をしいられていたのだった
そこで　ローザは他の怪物たちを同志『亀の軍団』達に任せ
デビット・ドラゴンと言う　最強の機械獣を操る、ザンカルドのみを倒すことに全力をあげた」

？？？　最後の旅（前書き）

再生する機械獣デビッド・ドラゴンの脅威を知らせるため
　遥か宇宙から　旅を続けてきた　戦士の　最後の
旅とは？

???　最後の旅

○　ある宇宙
○宇宙暦??年
同　ある宇宙
ザンカルド「ハッハッハッハッハッ、まもなくこの宇宙は終焉を迎える事になる
いまから我らが巻き起こす宇宙戦争によってな」
ローザ「ザンカルドよ、無くなったアフロディナの人々のため多くの友のため、この戦いは終らしてみせる」
ザンカルド「ならばその剣で見事我を倒してみろ」
ローザ「ブレスト・ビーム」
『ビビビーィ』
と剣先から熱線を出す
『ギアー』
とクラウメスの一体が吹っ飛ぶ
ドラゴン『ガーァッ』
胴体の口からヤモリ爆弾を発射する
『バーン』
とマシン・パンドラが砕ける
ローザ『ヤー』
ザンカルドが操るデビット・ドラゴンに飛び移るローザ
ローザ「ハッ・トウ・ヤー」
ブレスト・ソードで勝負を挑む
ザンカルド「フフフフフ」
頭の髪の蛇を自在に操りローザの体に巻つけるザンカルド
『ビーィン』
破壊音波をぶつける
ローザ「ウワーァ」

と苦しむローザ
ローラ「ねっ、　ネットボール」
両手から光の球体を出し、ザンカルドにぶつけるローザ
『バーン』と数メートル吹っ飛ぶ
ドラゴン『グァー』
と、胴体の口から吸収した光線を反すザンカルド
『ドッ・バーン』
ローザーはかわしたが背後にいた怪物と仲間達は爆発して消える
ローザ「あっ、みんなーよくも」
とザンカルドを睨みつける
ローザ「勝負だ、かくごー」
ザンカルド「望むところだァ」
再び激突するローザとデビッド・ドラゴンに乗ったザンカルド
ローザ「ハァーァ」
ザンカルド「タァーァ」
『ピッカー』
その瞬間宇宙全体が光に包まれる
ブレスト・ソードの剣でザンカルドの胴体を貫くローザ
ザンカルド「フフフ・・フ・みっ・見事だ・戦士ローザよ、だがデビッド・ドラゴンは
何時しか蘇る　自分自身でな　この宇宙（ほし）を死滅させるまで・
覚えておくがよいアッハッハッハッハッハ」
と笑い消えていくザンカルドとデビッド・ドラゴン
○院内（００室）
ローザ「これで私の話は終ります、いつしか最強の機械獣デビッド・ドラゴン
が蘇る日が来るかもしれません　、その時この地球が　いえこの宇宙全体が
砕け散る事があるかもしれません

その事を警告するために私は最後の旅を続けて来ました」
　そう云い終え消えていくローザ
みなみ「・死んだのこの人」
エリカ「いえ、仲間に会う最後の旅に出たのよ」
　そう言い、涙ぐむ沢乃
N「以上で銀の目の戦士の長い物語は終る、エリカをはじめ　ASKの人たちは
この話を直ちに政府首脳に進言したのだが
「地球が砕けるだって、夢物語だよ」と相手にされなかったのであった。

２００部記念『アンドロ・ネイダーＥＲＩＫＡ』序章（前書き）

終末の日を回避するために　繰り広げられる
２体のアンドロ・ネイダー、ＥＲＩＫＡとカブト

２００部記念『アンドロ・ネイダーＥＲＩＫＡ』序章

プロローグ
○近未来の秋葉原　深夜１時
同・ラングリアシティ郊外
人々が寝静まった深夜、女性のストリッパーが
警察に尋問されていた
人気歌手として一世を風靡した松田星子（４９）のようだった
高見刑事「こらっいい加減大人しくしろよ、娘さん泣いてるぞ」
星子「バキャーローなーにがＡＫＢだってんだー
あたしのほうが人気があったってーの」
　怪しいにおいを『プンプン』させながら取調室で失禁する星子
　『ジョバー』
高見刑事「まったく困ったもんだかつてのアイドルもこうなっちゃーあ
おしまいだな、俺ファンだったんだけどな　じゃー後は宜しく」
と交番の警官に引き渡すと止めてあったバイクに乗り帰ろうとする高見刑事
　その時　突然何もない空間に　閃光が走り裸の美女が現れる
高見「ちっ、また　かよ　今日は俺ツイテいるのかもな（ヘビロテでは？）
　と言いつつ　その女性のほうへ向かう高見
高見「おいおい、おまえ　そんな　セクシーなかっこで何処行くんだ」
ＥＲＩＫＡ『・・・・』
　電子スコープで検索する女性
高見「何があったか知らないけど、よかったら俺　相談に乗るぜ
ちょうど娘も結婚して一人だしさ（愛ちゃんだな？）」
裸の女性　刑事は無視する

高見「ちょっとぉ　ヌードマニアか何か知らないけど　無視ってのは
　ないんじゃないか　人に話しかけられたら答えろって　先生から
教わらなかったか？」
ＥＲＩＫＡ「・別に・・」
と一言うとその刑事を首を『ガ』ッと引き抜いた
高見「ウワ―ァ」
　『ドバ・ドバー』っと大量の血が吹き出す
そしてその女性は高見刑事のオートバイをを盗んで闘争したのだった
（１）肉体兵器☆エリカ
Ｎ『近未来では反乱を起こした人工知能ＡＫＢが指揮する機械軍に
より
人類は絶滅の危機を迎えていたが
抵抗軍の指導者であるタカミナの指揮下で反撃に転じるが
脅威を感じた　機械政府ＳＥＩＫＯネットは、未来から現代へ究極
の肉体美を持つ
悩殺アンドロイド〔ＥＲＩＫＡ〕を送りこんだのだった。
目的は未来の指導者タカミナを歴史から抹殺するため　彼の母親と
なる
ユッキーナを殺害することであった　同じ頃、人類側からも何者かが
　ユキナの護衛として送られたのだった』
○アキバ連邦局本部
アンリ「滝長官アキバ郊外３４地区に裸の女が現れ刑事を殺害し
オートバイを盗んで闘争を続けてると言う通報が入っています」
滝長官「よっし連邦警察隊出動っ、アンリは奴の闘争ルートをただ
ちに割り出せっ」
アンリ「ラジャー」
　オートバイで闘争を続けるＥＲＩＫＡはターゲットである
フッションモデルユッキーナが、深夜のクラブハウス　大蛇
　にいることをつきとめたのだった。
○クラブハウス大蛇

定員「いらっしゃい」
『おっおい見ろよあの女、裸だぜ』
『いくらアキバでも昼間から真っ裸とは
　少しイカレテルんじゃーねーのか？』
男性Ａ「でもスーゲー肉体美だぜっ尻なんかくいこんじゃってさあー」
男性Ｂ「よっねえちゃん、すこし俺達と言い事しないっ」
ＥＲＩＫＡ「・べつに」
そう言うとその見事な両胸から怪光線を乱射した
『パーン』『ドッスーン』
シャンデリアが落ちあちこちのワインなどがあちこちに散乱した
『きゃー』『人殺しー』
男性はたちまち蜂の巣となり、ダンスを楽しんでいた人たちは
大パニックとなったのだった。
ＥＲＩＫＡは内臓のキャッツアイでユキナを検索しクラブ内をうろつき遂にユッキーナを発見した
ＥＲＩＫＡ「おまえ・の・名は」
ユッキーナ「ゆっゆきな」
ＥＲＩＫＡ「その服気にいった、貰う」
　『ガバー』ッとジャケットを引っぺがす（わーいユッキーナのヌードだ）
ＥＲＩＫＡ「もうひとつ貰いたい物がある」
　首をつり上げて言うＥＲＩＫＡ
ユッキーナ「な・な・な・なっ、何でしょうか？」
ＥＲＩＫＡ「お前の・・命だ」
ユッキーナ「・・たすけてー（声が出ない）」
　そこに『ウイーンウイーン』とサイレンを鳴らして連邦警察が到着し女を捕らえようとする
ＥＲＩＫＡ「ちっ、邪魔がはいったか」
連邦警察Ａ「おいおまえっ現行犯で逮捕するぞ」

ＥＲＩＫＡ「・別に」
そう言うと右腕で男の胴体を『ザバー』っと貫く
警察Ａ「おわーっ」
ＥＲＩＫＡ「これ・貰う」
　と言うと　今度は警官の服を装着し再び、オートバイにのって闘争した
警察Ｂ「なっ　何をしている　追えーおうんだ」
　『はいっ』と返事し女性を近未来の白バイで追いかける警官たち
クラブハウスは大惨事となっていた。
～電光が走り白い服を来た青年が現れる～
○旧新宿港町
謎の男「ここか彼等がいった　アキバシティは？」
少年「なんだ　あの　白衣の男は」
少女「ねえあなただあれ」
謎の男「俺にむやみに近づくな　俺はこの世の中で一番強い」
そう言うとその男は人指し指で天を示した
Ｎ『はたしてＥＲＩＫＡさまの本当の目的は？
そして　天の道を行く　男の正体は？
いま人類の命運を分ける戦いが、
２０２０年のアキバシティではじまろうとしていた。』

プロローグ（序章）完

２００部記念『アンドロ・ネイダーＥＲＩＫＡ』序章（後書き）

アイドル好きの少女マオンが　異世界を冒険する
不思議界記伝　第４章『マオン時空を超えた少女伝説』登場！

第四部『マオン時空をかける少女伝説』」（前書き）

マオンと金魚の妖精　ナル　との
時空を超えた物語の始まりです。

第四部『マオン時空をかける少女伝説』」

「菜穂ちゃん卒業おめでとう」と私は正直な気持ちを口にした」
【蘇りし者達へ】
と言うコンサートツアーの最終日を見た帰り道で「遂にリーダーの菜穂ちゃんも卒業　かあ」と
私はため息をついた　そしてふいに「この子等１０年後どうなっているんだろう」と不安を口にした。
すると辺りが不思議な靄で包まれ「では行って見るかね」
と言う老人の声が聞こえ、その瞬間私の体は白い空間に引き込まれた
そこには見た事の無い別世界のような風景が広がっていたの
次に私は何処かの建物の中にいた、そこでは動物やら妖精やらのファッションに身を包んだ
若者達がプロレスショーに熱狂していたのですが、その一階の特当席には鞭を持った
ＳＭの女王（くいーん）のような人が黒人を引き連れて観戦していたのだった。
「これって一帯どうなっているの？」と考えていたとき
「君、誰？今時そんなダッセー服着ちゃってさあー」と　後ろでカッタルそうに答え
誰かが近寄って来たので　私は「余計なお世話よ　あんたこそ誰よ、それに渋谷にこんな所あったっけー」
と　尋ねた　すると瑠璃色の髪をしたその少年は
「渋谷、何それ　聞いたことねーナ」と言うとさっさと何処かへ行ってしまった
「待ってよ、もっと聞きたいことが」
と叫んだとき
「まお、どうしたの？大声出しちゃってさ」
と駆けつけたゆっかさんのその声に驚いてデスクの前で目を覚まし

たのだった。
私は『アレッ』と」周りを見回し「あのう　ゆっかさん、私何時帰って来たの」
と母親の真由香さんに尋ねた
ゆっかさんは「なに言ってるの、ついさっき帰って来たと思ったらものも言わずに部屋に入っちゃったんじゃない？」
と答えたので　私は心の中で（変だなあ、記憶に無い）と考え込んでいたのだった。

第一章【架空世界】

（1）空飛ぶ金魚？

○２００ｘｘ年東京　渋谷の自宅

最近、バーニング・ブロスはあんまりテレビでないなー」と
私はいつもの勉強部屋（あまりしてないけど）のテレビ（パソコン）の前でため息をついていた

みなさんはじめまして私朝倉マオン、聖魔穏学園に通う極々フツーの高校生なのだけど
ジャーナリストの肩書きを持つりっぱな両親と違って、私は何の夢も将来の目標も無くただ漠然と日々を過ごしているのだ　そんな私が唯一ハマッテいるのが

【バーニング・ブロス】って言うパンクを売りにしてる7人組のアイドルグループなんだ
中でもリーダーの本郷菜穂ちゃんの大ファンの私はもうすぐ夏休みなのにそれまでまってられず
「今日は熱がある」って偽って学校を休んで卒業コンサートを見に行ったと言う訳
でもあのときの事がどうしても頭から離れず「あれは本当に夢だったんだろうか？
それにあの少年の態度、あれも夢だって言うの」
私はテレビを兼ねたパソコンの　前で一人怒鳴っていた

すると「そんな怒ると、体に悪い・なるー」と何処からか声が聞こえてきたので
「なによ　ゆっかさん（あっ、ゆっかさんと言うのは母のことです）ミョーな声だしちゃって」と言ってから「そうかさっき、晩の買い物に行くって言っていたっけ?」
と気がついた。「じゃー今の声はいったい誰よ!」
と叫んだとき、「ハーイ僕、妖精界から来た金魚のナルと言うなる　よろしくたのむなるー」
と変な生き物がパソコンの中から顔を出したので　私は思わず
「きっ金魚さんが飛んでる?」と　素っ頓狂な声を上げたのだった。

第四部『マオン時空をかける少女伝説』」（後書き）

バー二ング・ブロスは　一九九八年に登場した
七人組（最盛期には一五人）のグループで
当時としてはパンクを売りにした？1グループだった
だが、転機（てんらく）が音連れたのは
最年少メンバー加剛愛奈（まな）のオムツで喫煙事件と
事務所との確執があったリーダー本郷菜穂の卒業だった
それに２００？年に立ちあがったＡＫＢクラブと言う
秋葉原を拠点とした女性グループが　世界中を巻き込みつつ
活動を活発化させた事も大きな要因だった。

？　謎のＳＭクイーン（前書き）

マオンが空飛ぶ不思議な金魚　ナルーに連れられてきた町は
ＡＫＩＢＡと呼ばれる異世界で、そこはブロッケン・ケイトが
支配する恐怖の世界だった
（ハカイダー、又はファイズ　パラダイス・ロストの世界が近い）

？　謎のＳＭクイーン

（２）マオン、架空世界へ

ナルーは

「そう驚く事ない　なる、金魚が空飛ぶおかしくない　なる、この世界は違う　なるか？」

と言った　私は「あんたの世界じゃー普通でもこっちの世界では金魚は飛ばない

大体あんた、何しに来た訳」と　私はその金魚に事情を尋ねたすると　ナルーは「マオンを架空世界へ連れて行くため来た　なる」と答え　超空間の扉を開いた

「ちょ、ちょっと待ってよ　何処つれて行く気　私　これでも勉強とか（してないけど）

結構忙しいんだよ」と抵抗したんだけど

ナルーは「構わないなる」と言って私をその中に無理やり引きずり込んだ

そこは　ドラえもんに出てくるような超空間だった

「何で私が　こんな目に会うのよ？」

「それが　マオンの宿命なる」

「どう言う意味？」

「それは旅を続けていれば　そのうち　解るなる」

でもその途中　後ろから

『・・警告する　時空犯罪者ＷＲＨ、怪盗まゆゆ　速やかに止まりなさい・・』

と言う未来的なパトカー（トブ―ン、と言うらしい）が秋葉原風の衣装を着て

ネズミを肩に乗せた女の子を追いかけて現れた

「へん、お前たちに捕まる　まーゆ様じゃないやい」

「まーゆの　言う通りだぜ、おまえらの様なへっぽこ警官に捕まる

あーちゃんじゃないぞな」
「警告を無視するなら射殺する」とそのパトカーは　レーザーらしき光線をこっちに打ちまくった
『ババババー・シュババババー』
「ひえー　危ないじゃない＞、〜，＜　なるーあんた何とかしなさいよ」
「そんなこと言われても、予想外なる」
「これでも喰らいいな　ほれっ　マジすか弾発射―あ！」
まゆゆと言う怪盗は　お尻から「赤い霧（えんまく）をトブ―ンに向けて発射した
『ブリリ』
「うっわァ　まっ前が見えない」
『ドカーン』
トブ―ンは混乱し　私たちに激突した
『アレーェ』
と、遠くへとばされた私たちは　その勢いで正常空間に弾きとばされたのだった。
「へへーんだ　おとといきやがれってんだ」
振り返りお尻を『パンパンパン・ぷうぅ？あっ失礼』と警官たちを挑発すると
まーゆとネズミの　あーちゃんは　別の空間へと消えたのだった
「畜生バカにしくさってェ　またしても逃げよったか、恐るべきは黄金のオムツ？の力だ」
と　トブ―ンのパイロットのパンダ（のコスプレを着たおじさん）は悔しがっていた
私たちは何処かの街角で気が付いた
「うーん、ここは　秋葉原だよね　スッゲー」
私とナルーを様々なコスプレをした異様な連中が『ジロジロ』と見つめている
事よりもＳＦ映画に出てくるような　未来都市に驚いていた
その時「どけどけ」と人込みをかき分けてセコムのＣＭ？見たいな

人たち
（制服はもっと未来っぽい感じの）がやってきた
「お前たち　見慣れない奴だ　所属と　認識番号を示せ」
とサングラスにポニーテールと言う奇妙なイデタチのリーダーらしき男が言った
「ハァッ　認識番号？　住民票の事かな　所属って何？」
「おいっ　ふざけるな　このアキバの住人ならば　誰でも割り当てられてるだろう」
「怪しい奴だ　清掃隊本部まで連行しろ」
ポニーテールのおにいさんは他の人たち（多分部下だろう）にそう指示した
「待ってよ　この前行った時（あきはばら）　そんなの無かったじゃない？」
「黙れ　抵抗すると　その小さき胸を打ち抜くぞ」
「ほっとけや＞、〜、＜」
必死の抵抗も空しく　私たちは　ポニーテール一味？に清掃隊本部と書かれたビルの
地下に連れて行かれたのだった
もっともナルーと名乗った金魚は　いつの間にかいなくなっていたけどね
（３）謎のＳＭクイーン？
〇２０５９年東京　アキバシティー地下
「お願い、ここから出してぇ、なんでこんなことするのよ　人権蹂躙で訴えてやるぞー」
と私は牢の中で騒いでいた
すると向こうから２人の黒人男を従えた、鞭をもったＳＭのクイーンのような女性が現れた
腰のベルトにはろうそくのアイテムまで付いていた
私は（このおばさん　マジすか？）と呟いた
「それが　マジすか学園なのだよ　このカッコがどうかしたのか」
（　この　危ない人、心が読めるの　なぜ？）

「なーにちょっとしたテレパシーさ　それに娘　、いったい誰に訴えるつもりだ」
「それは市長さんとか警察とか・・いろいろ・・・」
「ここはアキバシティーの地下にある清掃隊の本部、つまり我等が法律
死ぬも生きるも全てこの私がを決めるのだ、残念だったな」と笑った
「知らなかった　秋葉原の地下のお掃除やさん?って　そんなに権限があったなんて（無いぞ?）」
と　私が戸惑っていたら、
地下室のドアが開き　向こうから髭モジャのおじさんがやってきて
「いやーマオンちゃんここに居たのか、叔母さんから連絡を受けてずっと探してたんだから」
と言ってこちらに目配せしたので　私もとっさに
「遅いよおじさん道迷って大変だったんだからぁ」とノッタのだった
そのおじさんはあの夢の中にいたＳＭ女に身分証明書（カードだけど）を見せて事情を説明していたようだった
「娘、これからは迷子にならぬようになと　蛇の様な眼で私を睨むとその女は地下室を出て行ったのだった。

？　謎のＳＭクイーン（後書き）

怪盗まゆゆは　７つの次元をまたにかける美少女怪盗である
ファントラル次元より　全ての夢が叶うと言う　『黄金のオムツ』と『禁断のヨダレ掛け』を盗んで逃亡中だった　次はパラパラ次元に
ある　『虹色のタマタマ』が目当てらしい
なお相棒は　ネズミのあーちゃんである。

？　安住の地を求めて（前書き）

遥か昔　彗星の衝突で　故郷を追われた　モームディア人たちは
安住の地を求めて　自由の船『ラヴ・マージ』で　伝説の都
『ＴＵＲＵＫＵ』を目指した

？　安住の地を求めて

○喫茶店トルド
　私はモルドと言うおじさんが経営する喫茶店に入るなり
「一体全体どうなっているのよ、大体この世界は何、漫画じゃあるまいし
これじゃーまるで異世界じゃないの」と私が息せき切ってまくし立てたもんだから
周りにいた　変な着ぐるみを着たお客さん達は皆驚いていたのだったやがておじさんが「君達がいずれこの世界に現れるって事は分かっていた
だからカイルと2人で準備をしていたのさ」
と口を開いた　「カイルって誰？それに私達が来ることどうしてあんた達が知ってる訳」
て質問すると「それは僕が知らせた　　なる、どうやらさっきぶつかった拍子に
予定よりずっと先の時代についたみたいなる」
　とおじさんに代わって答えたのはいつの間にか居なくなっていたナルーだった
「あんた、どこ行ってたのよ」
　と私が尋ねると　今まで黙っていた少年が
「こいつか、そいつ（金魚）が言ってた過去から来た女ってのは？」
と皮肉っぽく答えたので
　私は思わず『カッ』と来て「悪かったわねー過去から来た女で」
と怒鳴り振り向いた
そしたら　その少年が「ヨォ」と挨拶したので　その顔をよく見たらあの夢に出てきた男性だった。
　「あれっ、あんた夢で会った時に、かったる　そう　に答えた人でしょ

白状しなさい」と私は迫ったが　少年は知らないみたいだった。
（4）モーム人とガルシァ帝国の出現！
「それではそろそろ本題に入ろうか？」
とモルドおじさんは皆をテーブルに座らせると、話をはじめた。
「この世界は元々何の変哲もない世界だった　しかし今より2千年前に
故郷ハロモアを　巨大な彗星の衝突によって失った魔女アガナーは
一族のモームディア人を引き連れて　自由の船『ラヴ・マージ』で
伝説の安住の地
『ＴＵＲＵＫＵ』を目指して旅立った
そして　それにそっくりなこの架空世界Ｌａｏｎを千の牛魔軍団をもって
侵略していった、彼らは　ガークと呼ばれる類人猿と交わりこの星の人間
になった　そして　アルマ・ルド（現在のラングリア・シティー）を築いたんじゃ
「なるほど　なる」とナルーは頷いた
私は「では今の人間達は皆モーム人って訳」って尋ねるとモルドおじさんは
「ところがそうでもないんだ、安住の地を求めた　彼らがきずいたこの世界は
しばらくは平和じゃった、ところがしかし１９９９の年の7の予言の月に
ガルシァ帝国を率いて　宇宙より美しき王女　シス・フィーナが東の空から舞い降り
圧倒的な力で彼等モーム人達を滅亡に追い込んで行ったんだ
魔女アガナァは一人娘。のナルモを初めとするモーム４天王を中心に戦った
最初は優勢だったものの　４天王の一人ブロッケン・ケイトの裏切りによって

形勢は一挙に逆転　モーム人達は次々に敗退していき
危機一髪難を逃れたナルモも　ブロッケン・ケイトにって惨殺されたそうだ
　と　モルドおじさんは悔しそうにかたった
そして女王シス・フィーナはその光の魔法でこの東京を自由とコスプレの町
アキバシティーとして生まれ変わらせたのさ」
「よかったじゃない　今は平和みたいだし（じゃかん　問題もあるけど？」
「ところがそうでもないんじゃ　一見この世界は平和なように見えるが
「違うんですか？」
「それは表向きだけだよ　現にこの世界の正当なる王女『たかみな』さまも
いまだ消息すら解らん　多分生きてはいないだろう」
とおじさんは長い話を終えた。
　喫茶店の座席で聞き入っていた私の脳裏には
　怪物たちを従えた蠍の魔女がの黒き翼を持った　天使たちに狩られる光景が写っていた
　私は「で、モーム人達はもう居ないの？」と尋ねた
「少なくともこの町にゃあ　居ないだろ、清掃隊に徹底的に排除されたからな
だがこの山の向こうにかつて魔王ラウドネスが創造の神オルディナスとの
戦いを決意したとされるガロストと言う山がある
そこに魔女アガナァと生き残ったモーム人達が集結し
　復讐の機会を狙っていると言う噂もあるんだ」とカイルが話してくれた。
　「どっちにしろ、恐ろしい所　なる　もう帰ろう　なる」と　ナルーは言ったが

「あのね、あんたが連れ出したんでしょうと怒鳴ったら
「まさかこんな世界になってるとは想像してなかった、なるよ」
と反省しているようだった

？　安住の地を求めて（後書き）

マオンは　ラングリアシティーで行われている
『バトル・マック』と言う格闘技を見に出かけた
そこではブロッケン・ケイトお抱えのアイドルグループ
『ＡＫＩＢＡ組』（４８～１００ともいわれる）のライヴが開かれていた
自らの意志を待たぬ彼女ら正体は一体？

？　踊る人形？（前書き）

煌びやかな衣装を身にまとい　踊り続ける彼女たち
それは人間としての意志を抜かれた　悲しき少女たちだった。

？　踊る人形？

（5）踊る人形たち

「まあ、そんな悪い方に考えないで
今夜はゆっくりと寝て　明日はカイルにこの町を案内してもらうと良い」

とモルドおじさんが言ったので、

「ほんじゃー今ラングリアにあるアキバドームでおこなわれているイベントでも見に行くとするか？　とカイルはそっけなく言った

その晩私とナルーはおじさんの喫茶店を兼ねた家に泊めてもらったふかふかのフランスベッドでナルーと2人で寝ていたら　おじさん達の話す声が聞こえて来た

「今、首領から連絡が入った例の件は6日後決行すると我等モーム人達の生き残りをかけた最後の戦いが始まるのだ」

と言うモルドおじさんの言葉に

カイルは「・・分かっているって　親父　それじゃー明日はせいぜい楽しむとするか？」

と答えてえていた。

私とナルーは　不安な気持ちで明日を向えた

○ラングリア・シティー

○朝8時

「じゃー行って来るね」と私は早口で言うとナルーとカイルと一緒にアキバットと言う像の耳のような翼を持った自動タクシーに乗りアキバドームへと向った

そこでは多くのアキバ人達がチッケットを手に並んでいたのちょっと見ただけでも2～3百人は並んでいた

「彼らはＡＫＩＢＡ組の握手権とチケットを求めて3日も前から並んでいるんだ」

「へーえ、そんなに人気あるんだ?でもどっかで似たような話を聞

いた様な（・・？」
　しばらくして私達は　ようやく、ドームの中にあるアキバホールに通された
そこではまもなく登場するセルディナス　と言うブロッケン・ケイトお抱えの
アイドルグループの登場を待っていた
「へっ、セルディナス？ＡＫＩＢＡ組じゃあないの」
「セルディナスは複数あるＡＫＩＢＡ組のトップチームなんだ、パンフレットみてないの」
カイルの言う通り入り口で渡されたパンフレッドには『ノーマ・スリープ』や『後ろ鏡壊したい』
など他にもたくさんのグループがあった（これも何処かで気いたような？）
でも　服装こそは幻想的なんだけど　みんな　般若や　おたふくのお面を被っているのが
なんとも不気味であった。
　やがて幕が開きあちこちから、『ケイト、ケイト』と言う声援が起こり
館内は大熱狂に包まれた、そしてイベントのオープニング
飾るセルディナスのライヴがはじまったのでした。
（６）熱狂アキバドーム

♪ＭＡＯの世界（ほし）

哀しい時はこの星に来て思い出の唄
口ずさむの
楽しいときは彼方と出会った日々を懐かしく想いだすの
イルギアの花畑で出会ったこと忘れません
よい戦士になれよと言ってくれた事今も忘れない・の
ここはＭＡＯの星、偽りや裏切りが集う世界（ばしょ）

ここはＭＡＯの星屑、ちりばめた世界（ばしょ）なの？
？あなたがくれた最後の手紙を
今でも心の内（なか）で、認めてます
果てしない風の中で歌った唄今も覚えています
あなた私を今でも　受け止めてくれますか？
＊ここはＭＡＯ夢、いつまでも消えない大切な世界（ばしょ）
あなた追いかけて走る遠い日の幻（きおく）

遥か昔、遠い世界で二人出会っていた気がする
時間も闇も切り裂いて再びあなたに巡り会い　たい
ここはＭＡＯ夢、いつまでも消えない大切な世界（ばしょ）
＊ここは願いが叶うと言う、ＭＡＯの不思議世界な・の

詩〔ＭＡＹＵＫＡ〕

曲は全体的にスペイン風の踊りやメロディーで、途中にはラップや手話なども
取り入れている斬新な者だった　私達は精一杯の拍手を送った
「素晴らしい曲だけど・・・なんか人形が踊っているような感じひょっとして皆ロボットとか」
「さあな　でも噂じゃあ　シスフィーナに逆らった　者たちらしい？」
「じゃあ　その中に　たかみな　とか言う　王女も」
「居るかもな　でも彼女らは意志を持たない人形にいすぎないっそ　死んじまったほうが幸せだったかもしれないぜ」
仮面を被っているので表情までは読み取れないけど　この機械的な動きから察して
　多分無表情だろう　だけど良い事も嫌なことも全部忘れて踊る彼女たちのほうが　この異様な世界を生きる者たちより　少しだけ幸せなのかもしれない
　と私は考えていたのだった。
同・監視塔

「異常は無〜い子猫ちゃんったち」
ピエロの格好をした男女の見分けがつかない人物が監守達に声をかける
「はい　デス・ドール様　今のところ問題はございません」
「いつ　ネズミが入り込むか分からないから、警戒だけはしといて頂戴」
監守に『ブっチュ』っと口づけをすると　腰を『ぽん』と叩いて出て行った
「いやはや　いつもながらドール様にはまいるよ」
と　監守長は汗をぬぐった
「・・フフフフ、ここがまーゆのお目当てのお宝がある所か」
「パラパラ次元に逃げたのは　目くらましだったとは　警察（ぽりこう）のみならず
このあーちゃんでさえも騙させましたぜ　まゆの姐御ぉ」
監視塔（らんぐるあしてぃ）の隣にあるエルフ塔の上で　ネズミをつれた人物が様子をうかがっていたのだった

？　踊る人形？（後書き）

ＡＫＩＢＡの人たちが　バトルマックと言う格闘技に熱狂する
裏で精霊の玉（ダイナ・ストーン）を巡って　事件が
起こっていた、そして　謎の怪盗まゆゆの目的とその正体とは
次回『ラングリアシティの美女戦士』

?ラングリアシティの戦士（前書き）

セクシーなスタイルで人々を魅了する女子レスラー彼女の隠された秘密とは！

?ラングリアシティの戦士

（7）ラングリアシティの戦士

ライヴの後はマジックショー、ゲームと続きステージはお昼の休憩
を挟んで
バトルマックスと言う武器を使用可能なプロレスショーから始まった
広いドームの中央から出現したのは
かつて天空をも襲ったと振れこみの、プロレスラー
ゴルムーだった彼が登場すると観客は「いいぞ」と言う声援やら悲
鳴やらが
あちこちから聞こえたのですが南の方からケイト所属で
キューティ・ドールと言うセクシーなメイド服を身に纏ったお色気
ムンムンの美女レスラーが
配下（黒装束の男達）４人を従えて出現すると観客はたちまち『ウ
ワっ』とどよめいたのだった
カイルも「よっ、綺麗なねえちゃんいいぞ」とナルーと一緒になっ
て応援していたので
私は「ふん、言いモンねどうせ私は可愛くないわよ」とふてくされ
ていたの
『ガルルー』とゴルムーは唸りをあげると美女に向って突進して行
った
だがキューティードールはその突撃をひらりとかわすと
振り向きざまにローリングソバットを『バシッ』と決めて
「うそっ、決まっちゃったあ　ごめんね」
とおどけた
ゴルムの巨体はその一撃で吹っ飛んだ、そして少女は腰をくねらせ
「ハーイ、ご主人様サービスだよ」
と言うと両胸でゴルムーの顔を挿んで

『ギュッギュッ』と搾った
これにはさすがの魔神も鼻からたちどころに血を『シュバー』と噴出した
そしてロープに振って帰ってきたところを
「ヒップアタック」と叫びお尻で顔面にキックした
そして　右手を前に翳し「マーキェリー」と呟き銀の弓を出現させると
「強くて、ごめんちゃい」と挨拶してから腰の剣を引き抜いて矢に仕立て
「そろそろ、トドメだよ、ご主人様」
と胸を『プルンプルン』させると
『ファィァー』と叫んで怪物に放ったんだ
矢は5色に輝き右胸を貫いたの
たまらずゴルムーは「ガルル・ガル・ガル」と震えるといろんな物を大量に
『ドドドッ』と噴出し、活動を停止したようだった
客席からは「いいぞ、色っぽいねえちゃん」と言う大声援が飛んでいた
「どもー失礼いたしました」
と腰を振りながら愛敬を振りまくキューティードール
「続きまして、メイン・イベントザンガー・マスクの登場です
マットの下から猛獣の檻が現れた　その中には手足を鎖で吊るされた野獣のような戦士がいたその顔には　銀の仮面で隠されていた
『わーいいぞー良いッぞー、そいつもやっつけちゃいな』
「次のもやっつけろーグラマーちゃん」
「カイル、それ私へのあてつけじゃないでしょうね？」
「素敵　なる　素敵　なる」
「こらーちゃんと聞かんかい、まいっか」
とため息をつくマオン
観客たちのボルテージも更の上がる

「少しは手ごたえが無いとつまんないんだけだなあ」
と腰を振りながらそのザンガーと言う戦士に近寄る　キューテーィ
だがその胸の　クック・ポーンとローマ字で掘られた『らっこ』の
ペンらんとに目がとまる
「こっこのペンダントの文字はもしかして」
○回想
「ミキ　明日早くここを抜け出そう」
ラングリアシティー2階にある　スナック『フレーロ』で
恋人藤村ミキ（キャンディズかな?）にそう告げる　明
「でも庄司さん　それは不可能だわ　現に逃亡した何人かは処刑さ
れているじゃない」
「それは　わかってる　だがこの町（くに）には自由が無いのさ
すべてブロッケン・ケイトの楽しみのためにあると言っても過言じ
ゃない
いずれ俺たちも殺させる　それを待つくらいならいっそのことぬけ
だそう」
「庄司」
「なあに　この遥か向こうにある　ガロス山まで逃げ延びれば、ナ
チ子様がいる
殺されたナルモ様の　娘さ　そして間もなく　あの方（目つきが鋭
い関西弁の人かな?）
の号令で全ての魔族たちが集結する（魔王ダンテみたい?）のさ
次の朝早く　庄司とミキは手をとり　シティーを抜け出した
○ラングリア　シティーコントロール室
「なにィおもちゃが二人逃げ出したって、どうってことないわ　い
つも通り
捕まえて頂戴」
「ハイ　ドールさま」
「ＡＫＩＢＡ組出動」
そこには萌え服を着た４８人もの少女たちがいた

彼女らは一斉に逃亡者狩りを始めた、その機械的な動きは
意志を持たない　ロボット人形のようだった
「2人で逃げていたら捕まる、ここは二手に分かれよう」
「庄司さん」
「いいか　ガロスと山の洞窟で落ち合おう　合言葉は『クック・ポーン』？だ　いいな」
その後　2人の消息は途絶えたのだった
○戻る
鎖を外された野獣戦士は　キューティーに襲いかかった
「聞いてザンガー　あなたはもしかしてしょうじさんなのでは？」
『ガガガガ・ギェー』
男はまるで野獣その物のようだった
「答えなさい　あなたは・・」
「ダ・マレええ！」
鋭い剣を振りまわり暴れるザンガー
それをかわしながら言うキューティー
○塔　管理室
「いいぞー、セクシーお姉ちゃん　そいつも『ズバ』っとやっつけてくれや」
と何人かの監守達は３Ｄテレビに見入っていた
同・外
『ウス・・モッコリ』
空間から黒い霧が発生し　ネズミのあーちゃんと　怪盗まゆゆが現れた
「ではみなさんグッスリお休みください」
と眠りのコンコロ・モチ（ホース状の機械）ドアの隙間
（どんなにびっしり締めても　わずかの隙間はある）
から音波睡眠ガスを流し込むまゆゆ
「何だこの軽快な音楽は　なんとなく程よい気分になってくる」
「ほんとだ　こんな気分になれるって　ぼくは付いているのかな、

ファーァ」
そして看守たち全員眠り込んだのだった。

?ラングリアシティの戦士（後書き）

キューティードールとザンガーは広大な広場で戦い続ける
一方　ＡＫＩＢＡ組らを交わしながら　逃げるまゆゆは
マオンと出会う　次回『たった一人の反乱』

？　たった一人の反乱（前書き）

７つの次元をまたにかける怪盗まゆゆ、その目的が徐々に明らかになる。

？　たった一人の反乱

8たった一人の反乱
○マック・ドーム
いつしかマッドが消え広大な競技場と化していた
『ウルル・ルルル』
ザンガーは鋼の様な腕でキューティーを持ち上げていた
「うッうッ、息ができない」
『クハ』ッと血を吐いた
「ねえ、あのままじゃあ　死んじゃうよあの人　ねえカイルったら―」
「アリなんだよ」
「へっ何が？」
「だから死ぬのもありなんだよ」
「だって殺人は犯罪だよ　違うの？」
「それは　お前の住んでいる世界だろ、ここでは　あいつが法律なのさ」
と　カイルは　黒人たちを従えたＳＭスタイルの女に指さした
「ゲッ　またあの女、そう言えばそんなこと言っていたっけ？」
マオンは『この国では私が法律、死ぬも生きるも　私が決めるのだ』
」
そう言って恐ろしい眼で睨んだ　時の事を思い出し　身震いした
「てやーあ」
右足で思いっきり　急所？を蹴り上げキューティはなんとかザンガから逃れた
『バキーン』
『ウォオオオオ』
「良いぞ―ねえちゃん」「俺のも蹴ってくれ―？」
と興奮した観客の声援が飛んだ

「もう一発　チンたま蹴りぃー」
『バコーン』
とザンガ―の急所に　再び炸裂し『ウォぉぉ』とあそこを押さえ悶絶するザンガ―
「あーら理性を失っていても　これは効くみたいね」
と腰を振りながら観客の声援にこたえるキューティー
「やっぱ色っぽいぜ　誰かさんと違ってさぁ」
「同感　なる　同感　なる」
「あんたたちねーえ・・男ってどうしてみんなこうなのかしら?」
と　考え込むマオン
「それじゃーキューティの得意技(おはこ)ドール・スペシャル（吊り天井）いくよー」
と　トップロープに乗り観客にアピール、だが後ろからザンガ―が
『バーン』
と放り投げ形成はいっきょに逆転する（ジャンボ鶴田かい?懐かしい）
『ウォぉぉ』
キューティーの体を一気に抱え上げるザンガ―　逆つり天井である
そのシュワちゃんの様な肉体でキューティー・ドールを
『グイグイ』と万力のように締め上げる
『ウォぉぉぉ、ハぁあああ』
と色っぴ声を出すキューティー
『ワぁぁあああ』
とスタジアムは興奮のるつぼと化す
そのころ管理室ではスヤスヤ眠る　監視員　たちをしり目に
怪盗まゆゆが　室内の奥のガラスケースに入れられた精霊の玉を盗もうとしていた
「なるほど　電撃(でんき)線が張ってあるのね
と　トンボの眼鏡で見ながらそう言うまゆゆ
「どうします　まゆのあねご　映画みたいに　かいくぐって行き

ますか」
「それは普通の怪盗のする事だよ　一流はそんなことしないの」
と言って　右のポケットから何かを出す
「こんなのがあるんだよねーえ」
「さすがあねご　でもその風呂敷　どう使うんで？」
「えっ風呂敷き　しまった間違えた　左って　こっちだっけ？？？
（おいおい）」
と言って　慌てて左のポケットを探った
それはまゆゆが『バケラッタ次元』で盗んだ　姿を隠すマントだった
『種も仕掛けもありません』
と言ってマントで体を包むと　たちまち姿が　消えた
そして　ガラスケースの前で　姿を現す（瞬間移動も出来るらしい）
『お見事　お見事』
と頭の上で　おだてる　ネズミのあーちゃん
「でも　ケースの暗証番号は　触れると警報機が鳴るんでは」
「それも抜かりはないわ」
今度は　マジック次元で魔道士キキに貰った　トウガラシのルージュを口ぬ塗り『イイワカ　ユユマ・アッカンベ―エ」
と　呪文を唱えあかんべーをすると
ケースの中の玉がまゆゆの手のひらに移動した
「さすが　あねご　いつもながら御見それしいました」
『ウゥゥ、辛ああい』
「これが　たまに傷なんだよねぇ」
精霊の玉を盗むまでにわずか1分と言う早業だった
「さてと　退散しますが」
「そうですね」
まゆゆは『オ―ジロウのマント』（やっぱりそう言う名だったのね？）
で再び姿を隠そうとした時、何処からか『パチパチパチ』と拍手が起こった

「だっ誰？」
「いやあ　お手並み拝見させてもらったわよお嬢ちゃん」
「そんな・・」
「眠ってるって　言いたいっわけね　確かに　監視員や警備員たちはスヤスヤおネンネしてるわ、でも残念ながら　あたいには効かなかったみたいね」
と怪しい腰つきで言うデス・ドール
○マック・ドーム
『ハあああああ嗚呼！』
必死って体重をずらし　なんとか吊り天井から逃れたキューティー
下半身からは滴が滴り落ちていた
『ジョっバー』
『いいぞ　キューティー　』『おしめおくってやるぞー』
などの声援が飛んだ
「ねえカイルわたしこんなの見たくないよ、それに話したい事が」
「ちぇっ、これからがいい所なのにさ　まあ　勝負は見えているからマオンの話とやらを聞いてやるか」
「もちろん怪物の圧勝なるね」
「ばーか、ぎゃくだよ」
カイルはマオンを連れて　シティ内にある　遊園地に向かった
それと同時に中央で踏ん反り返って観戦していた　ブロッケン・ケイトに
デス・ドールから連絡が入った
「何事だ　いま観戦中だぞ」
「ケイト様　ネズミが一匹、いや2匹かな　迷い込んだ模様」
「フン、いつものように蹴りをつけておけ」
「わかりましたケイト様」
○ＡＫＩＢＡ組待機室
「ドール様から連絡が入った、ネズミを2匹排除せよと」
『了解しました、シスター・たかみな』

メイド服を着た４８モノ女性が一斉に腕を上げて叫ぶ
「ハイル・ブロッケン、ハイル・ブロッケン」
扉が自動的に開き　一斉に監視室に向かう
○監視室
「あーたには残念ながら　ここで死んでもらうわよ」
と投げキッスを飛ばすデス・ドール
「ゲッ、クリスよりキモイ、付き合ってられないよ」
マントで身を包み　ドアの前に移動したまゆゆだったが
そこにはＡＫＩＢＡ組が大群で押し寄せてきた
「ヒエ―、あ―ッちゃん逃げるわよ」
「待て　侵入者　はむかうと射殺するど」
と一本調子の声で機械的に話すたかなみ
（・・おねえちゃん）
「あねご　あれはもうなみ様じゃない　抜け殻です　気を確かに」
「・・分っているって　これでも喰らいなマジすかガス噴射あ」
振り向きお尻を『パンパン』とはたくと
『ドバ―』っと赤い霧が発生し辺りは真っ赤に染まる
「オノレィ小娘　逃がすな」
とデス・ドールの指示が飛ぶ
マオンはドーム内にある　アチッチ公園の観覧車の中にいた
「あのーわたしあなたが何者なのか良く知らない、でも近々始まる
と言う
戦いに参加しようとしている事は知っているの、出来れば私は彼方
に戦争なんかに
参加してほしくないの、だってあなたは私と似てる　って聞いてる
カイル」
「なーんだ、寝てる　じゃん」と呟き
「亡くなったお祖母ちゃん（真由香の母）からだよ」と言って
ゆっかさんが私にくれたわしと鷹が施されたペンダントを首にかけ
たのだった

しかしカイルは（バーロー、起きてるさ、でも世の中どうしようもない事もあるのさ）
と呟いていた　しばらくして観覧車を降りた2人は　公園中をを散歩して歩いた
「ドーム内にこんな場所があるなんて素敵ねぇ」
「人工だけどな」
「そっそうなの」
「ところで　あのなんとかって言う金魚は」
「その辺にいるんじゃない、気を利かしたつもりなんでしょ」
「なるほど　あなたがマオンだったのね」
と木の上から声がしたのでマオンとカイルが見上げると
青いネズミ（ウサギなら聞いた事あるけど？）を肩に乗せた女の子が木の上にちょこんと坐っていた
『タァ』
と　飛び降りたその女性は怪盗まゆゆだった
「あーあんたあの時私たちにぶつかった人、あんたのおかげでひどい目に会あうとこだったんだから
「でもあわなかったんだからよかったじゃない」
「で天下の怪盗さんが俺たちに何のようだ」
「そうよ　そうよ」
「なあに簡単な事だよ、あたしの秘密基地に2人を招待しようと思ってさ
「秘密基地ねえ、嫌だと言ったら」
「こんなものがあるんだけど」
そこには小さな瓶に入った　金魚が　気持ちよさそうに眠っていた
「なっナルー　いつの間に」
「さっきその辺をうろついったところを捕まえたのさ」
その時「あんなところにいたぞー」っと闇のピエロ　デス・ドールと複数のＡＫＩＢＡ組の少女たちが『うじゃうじゃ』とやってきた
「おっと　もう　追ってがきたみたいね、悪いけど二人には一緒に

来てもらうよ　この町の
自由を取り戻すの為に　反乱を成功させるために」
『ドカーン』マジすか弾をお見舞するとまゆゆはマオン達と共に姿
を消したのだった

？　たった一人の反乱（後書き）

自分の意志を持たぬからくり人形　ＡＫＩＢＡ組は　本来なら
『ワタシハ』など　カタカナで表現するのがベストなのですが
カタカナは　書くほうも書きにくいし
読むほうも　読みづらいので　例外的に普通に明記しています。

？　たった一人の反乱２（前書き）

マック・ドームで行われている　野獣ザンガーとキューティー・ドールの
プロレス戦、そしてラングリアシティーから遠く離れた　残され島の一つにある
旧首都レシア・タウンに案内されたマオンとカイル　今、怪盗真ま
ゆゆと名乗る
少女の正体が明かされる。

？　たった一人の反乱2

○マック・ドーム
　その頃　競技場では　必死で　吊天井から逃れたキューティードールに
野獣ザンガーが迫っていた
「ウォー」
ザンガーのギロチン（めが）・ドロップが倒れたキューティーの首に決まる
『あーあぁぁ！』
「ウォー」
『ぎゃーあ』
2度目のギロチンで　完全に失神するキューティー、しかしザンガーはなおも攻撃を続ける
『ああ・・・』
『オォりゃーあ』
鋭いザンガーの蹴りがキューティーのドテっ腹に決まり　向こうの壁に『ズバーン』と激突するキューティー
まわりの壁（こうてつ）に大きな亀裂が入る
持っていた剣を思わず『ポト』っと落とすキューティー
『ウォオオ』
猛烈な勢いで　壁に激突するザンガー
『ドバーン』
壁が穴があき　ザンガー事倒れる
『いいぞ　怪物　そのまま腰をへし折っちゃいな』
『おねえちゃも色っぽいぜー』
と　ますます興奮する　観客
『ハァーハァーハァー』
今度は　キューティーを起こして空高くほおり投げると

帰ってきた所に　アルゼンチン・バックブリーカー（ヘル・サンダーと言うらしい）
で　『グイグイ』締め上げるザンガー
『あああああ』
そして再び空中に放り投げ　再びヘル・サンダー
しかし素早く身を反転させた　キューティの　マックスースペシャル
（原爆固めー今　この名で良いのか？？？）
が見事に決まる
『ガルルル』
「ハァハァハァ・・　悪いけどいい加減始末させてもらうよ、体力が持たないもんでね」
（彼にとってもそのほうが良いと思う、多分　亡くなった妹もそれを望んでる筈）
自らジャーマンを外すと　キューティ・ドールの秘儀　マックエロス（地獄道　直行隊）
が『ズバーン』っと決まり　頭の半分が砕ける不気味な音がする
（・・ここは何処だろう・・俺は今まで何してたんだっけ・・・ぉお前は・美貴・てぃ・
・生きてやがったのか、清々しいぜ　こんな気分になれるって　俺はツイテル・・カナ・・）
それが人間としての理性を失ったザンガーの　最後だった
（しょうじさんさようなら・・）
そう語った　キューティーは多くは語らなかった
「いやーァ、どうもどうも」
と重傷を負いながらも腰を振りながら　愛相を振りまくキューティードール
その衣服は千切れ　生まれたまんまの　姿を見せていた、体中のあちこちからは
大量の血が噴き出し右肩からは骨が露呈していた　それでも笑顔を振りまく

彼女の目的は　多分・・・
　一方ＡＫＡＢＩ組やデス・ドールから逃れた　まゆゆたちは　今は使われていない
地下通路をマジック・ホイホイ（ホウキ型　オートバイ）で駆け抜け
　ラングリアシティーから２～３０キロも離れた廃墟の島（らな）に移動していた
『カタッ』とマンホールの蓋が開き　マオン　ナルー　カイル　まゆゆの４人が
出てきた
「ここは確か　そうだ思い出したぜ　かつての首都レシア・タウンだ」
「レシア」
「タウンなるか？」
キョトンとするマオンとナルーにまゆゆは　話し始めた
「この町は　レシアと言って　王であった亡き父　ハンスが築きました
しかし　ブロッケン・ケイトはこのレシアを機械魔達を使って滅ぼしました
レシアの民たちは殺され　父と母も　ブロッケン・ケイトの意を受けた闇の道化デス・ドールよって惨殺されました。
私は姉のたかみなと共に　地下に逃れたのですが　その途中追っ手に見つかってしまったのです
〇回想
同・地下通路
「フフフ追い詰めたわよ、お譲ちゃん達」
「デス・ドール、いや賢治　いままで私（ナミ）を騙していたの？」
「全てはブロッケン・ケイト様の指示なの、許して頂戴ね」
「ふざけるな、婚約も嘘だったのか」
「あーら今頃築いたの、でも　良い物あげたから良いでしょ」
「・・っばかー」

「おおっと、無駄口はここまでよ、王家の者は殺せって命じられてるのでね　そろそろ覚悟して頂戴それっ」
デス・ドールが指示す得ると　アンパイヤのような者達がまゆゆとたかみな王女を取り囲んだ
「良い事麻友、お姉ちゃんが死んでも悲しまないでね約束したよ」
「待ってお姉ちゃんそれどういう意味」
だが返事を聞くまでもなく　たかみな王女は麻友に向って球体を投げた
「ドロドロ・ドロンパ」
するとその球が弾け麻友を別の場所に移動させたのだった
「くそー逃がすな」
と怒る　デス・ドールの肩を　赤い風車が刺さる（弥七親分かな?）
「悪いけど　後は追わせないよ」
そう言って　王家の守り刀、ノースリーブの剣を構えるたかなみ
○戻る
「なるほど事情は分かったけど、お前いろいろ持っているなあ（ドラえもんかな?）
「違うよ　みんな先生の発明品だよ」
「先生って、学校の先生なるか」
「次元科学者、ライラック・レオ博士だよ」

？　たった一人の反乱２（後書き）

残され島の一つＬＡｎａに住む　ハンス王家の科学者
次元学の第一人者　ライラック　レオ博士は残った数名の者たちと
マシン（ＡＧＩＴＯ）を完成させ　政府転覆を企んでいた
だが夢半ばで倒れ　まゆゆがその意思を継いだのだった
次回　謎の少年ゼノン

？　たった一人の反乱3（前書き）

怪盗まゆゆの願いは美しきレシアの復活だった

？　たった一人の反乱3

○　レシア・タウン
マオン達は　次元エレベーターで、地下数十メートルの所にある
秘密基地「エンドラ」に移動していた、そこは一見ガラクタだらけ
の部屋だった
「ここは先生　いえ、レオ博士と仲間達が　その時の為に作った隠
れ家です
「その時の為って　言うと」
「それは　カイル　あなたと同じです」
「政府転覆だな」
「あなたたちにとってはそうでしょう、でも私たちにとっては少し
事情が違います
　この惑星ＬｅＯＮは元々森におおわれただけの世界でした
それを切り開き首都レシアをはじめとする　国の骨格を作ったのは
我が祖先　ナチルコ・エルダ　でした
そうここはあたしたちの国　あたしとお姉さまの国なのです
「そうだったのか　あんたが　ナチ子さまの　子孫だったのか？」
「その通りです　ここはわたしたちの星　私たちのかけがえのない
故郷なのです
それを一族の裏切り者ブロッケン・ケイトから取り戻すため
　レシアの守護神象『ＡＧＩＴＯ』をレオ博士に復元させ、アジトに
レシア語で『希望』を意味する『エンドラ』と名づけたのです
「なるほど　そう言う事情だったなるか」
「ナルー　あんた解ったの？」
「全然　解んないなる」
「・・やっぱり」
「で　その　アグ何とかって言うのは　一体どこにあるんだ
「マシンＡＧＩＴＯはレオ博士が作った最高の鎧なのです」

「ヨロイ、なるか？」
「私も詳しい事は知りません　しかし　レシアに伝わる伝承によるとこの国がまだ　ダ・マンド（レシア語で雲）と呼ばれていた昔ゲルルと言う人間たちを　グロン・ギルスという髑髏の怪物が襲いました
その時戦いの神　ラーマォダが白き翼を広げて現れ　地上に光を放ったと言います
その光　神の力ダーク・ストーン（精霊の玉）を偶然？浴びた　トシキと言う若者が
神の鎧ＡＧＩＴＯを身に纏い、グロン・ギルス達と戦ったそうです
「それで精霊の玉を狙っていた訳か？」
「でも　残念ながら　ラングリア・シティーに　あったのは真っ赤な偽者だったの
・・こんなガラクタ掴ませやがってぇ、ちくしょう＞、〜，＜」
「王女　言葉　元に戻ってますぜ？」
「あら　失礼しました　ホホホホホ」
「姐御　何か無理してない　がすか」
「だって、つい自が出ちゃうんだもん、あたいにはやっぱお姉ちゃんの変わりは無理だよ」
と　まゆゆはため息をついた、そして　博士が開発した次元転移のベルト（まっく　すとーん）
のスイッチを入れた
『ウイィィーン』
と言う機械音が聞こえまゆゆの周りに龍の鎧が作られていった
「変身完了」
「すッ凄いぜ、感動したぜ　これなら　奴らにかてかも」
興奮するカイルの言葉をまゆゆが否定した
「確かに　戦いの神ラーマォダの鎧の力を借りれば　シスフィーナと言えども倒せるかもしれません
しかし　博士が作ったのは　王家の伝説に基づいて　神の鎧を　人

工的に作った
あくまでイミテーションにすぎません　せめて　堕天使シス・フィーナが持つ
ダークストーンがあればと思ったのですが・・」
『マユオウジョ・・・チジョウガ・・ナニモノカニホウイサレレル・・モヨウ』
その時戦略コンピューターアカンベーが緊急を告げた
「アカンベーただちに地上を映しやがれ」
「王女また言葉がまぁいいかぁ！」
レシアタウンの周辺にはアンパイアのような清掃隊（男性）とＡＫＩＢＡ組（女性）
ら数百名と　闇の道化デス・ドールがいたのだった」
「どうする　また地下通路を脱げるか？」
「父ハンスはもしもの事を考えて７つの出口を作りました、でもデス・ドールはかつて
たかみな姉さんの恋人だった人　当然抜け道は　知ってると思わなければなりません」
「ならば　また別の次元へ逃げるか　そのベルト使って？」
「いいえマオンさん　そのどちらでも無いよ」
とまゆゆは、テクマク次元で盗んだ『トンデモ・コンパクト』をポーチから出して開くと
『フエル・フエール』と呪文を唱え中央のボタンを押した
（呪文は関係ないのでは？）
すると鏡に映ったまゆゆがダブり２人になり、現実にももう一人のまゆゆが現れた
「まゆさんが二人いるなる」
「ざっとこんなもんよ、続いて　これよ」
まゆゆはタヌキのポーチカラ『黒金のキー』と『錠』を取り出した
２りのまゆは　それぞれ『キー』と『錠』を持ち
「タコサン、イカサン、子ネコさん『マジン・コワシタイ』出てこ

いやーあ』
と叫び鍵を合わせた（タイムボカンシリーズだな　懐かしいぞ）
すると『わてをお呼びでっかあー』と足元のコンクリートが２つに
ひらき
ロボットの顔が出てきた
「ウワっつ、何だ地面が開いた」
とっさによけるカイル
「ここは任せたよ　分身」
と言って　マック・ストーンを作動させ　ネズミのあーちゃんと共
に消える本物のまゆゆ
「あいよまかさせた」
と言うと　こちらもマックストーンを作動させた
すると赤と白のオートバイが格納庫から出てきた
「ＡＧＩＴＯ変身」
『ウイーン・ウイーン』
と　機械音が鳴りＡＧＩＴＯの鎧を装着する分身
『マシン　渡り廊下　イーン』
マシン『コワシタイ』の東部に乗り込む
『まじ～ん　コワシタイ　ゴー』
『ダバーン・ドバーン』
と崩れる地下基地
「あのぉわたしたちはぁどうなるの」
「アハッ、マオンさん達は適当に逃げておくれ」
「適当にたって・・」
『ドカーン・ドドドドド』
『ヒエーなる・ヒエーなる』
『ババーン』
『アレーェ』
建物全体が崩れ、巨大なロボット　コワシタイが現れる
○外

たくさんいたデス・ドールや　部下たちも一挙に半分二以下に減った
マオン達も爆風で遠くへ飛ばさせた様だが
「オノレーィ、そんなのがあったのか」
「どうだデス・ドール　この事は　お前にも秘密だったのさ驚いたか」
『ズシーン・ズシーンと清掃隊を踏みつぶす　ハカイタイ
「いくぞ　ネット・ファイアー」
『ビィー』
胸の装甲板から網の目のような火を放つ
『ウワー』
「続いた　唐辛子ビーム」
目から異常なまでに赤い　光線を清掃隊達に浴びせる
「うっ　何だこりゃあ辛あああああい」
とのたうちまわる清掃隊とデス・ドール
「やってくれたわね　おお辛っ」
「続きましては」
「そうはさせないわよ」
頭部に現れたデス・ドールは　電撃の矢を分身のまゆゆに放った
『うぎゃーこりゃあタマランぜよーぉ（あれっ、ハカイタイは関西弁では？）
「うわーあ　痺れるーゥ　でもちょっとだけ　快感かも」
ハカイタイのメーターが『ドバーン』と火を噴いた
「アレーェ」
地面に落ちる分身まゆ　そこに迫る　デス・ドールと　残りの部下達
「ホッホッホッホ　麻友王女　それとも怪盗まゆゆの呼んだほうがいいかしら」
その時何故かまゆは『フッ』と笑った（デス・ドールは分身と知らない）
分身のまゆゆは剣を構えデス・ドールに向って『ダーッ』っとダッシュした

「たかみな姉ちゃんの敵　唸れ　ノー・ス・リー・ブ～～」（トリトンだな懐かし）
まゆは　ノースリーブの剣で　デス・ドールを貫いた
「クハッ」
と　血を吐く　デス・ドール
「そんな　貴様は・・」
『ピカッ』
分身のまゆの体内の　原子炉のスイッチが入った
『ドカーン・ドバーン』
『ドドドド』
『ウォーぉ』
と混乱する清掃隊達
山は崩れ　建物はことごとく崩れ去り、　残され島（らな）は全体が海に沈んでいったのだった。
『ゴゴゴゴゴゴーォ』
○ラングリア・シティー
その少し前　バトル・マックの観戦を終えたブロッケン・ケイトは3階にある　クイーンの間で一人くつろいでいた
「フッ」
とため息をつき豹柄のソファーに座ったケイトの首筋にナイフが当たる
「貴様、はネズミか？」
「ぬかったねェケイトさん　部屋にいるとき裸だって調べはついてるんだから」
「この部屋には強力な鍵がかかっているはず？」
「あらっ、ルパンのテレビ見た事無いの？怪盗には　鍵なんて付けても意味無いんだよ
どうしてここにいるかって　聞きたいんでしょう　でも　残念ながらそれは企業秘密
おっと　心を覗いて見たって無駄だよ　サプライズ・ガードしてる

ので覗けないよ」
「ネズミ、何が望だ」
「まずはこの国の実権と国民たちの真の解放ってとこかな」
「フフフ　開放だと　みんな自由じゃないか？」
「あんたの部下達がこっそり住民を洗脳したり、意志を奪ったりしてる事くらい知ってるよ」
「だったらどうだって言うんだ、子ネズミちゃん」
ケイトの眼光から怪光線がまゆに向かって放たれる
「うわーっ」
『ドバーン』
鋼鉄の壁に激突し向こうの部屋に吹っ飛ぶまゆゆ
「残念だったな子ネズミ、私とやるつもりなら　せめてもう少し踏ん張りる事だな」
両手から　スターウォーズの皇帝の様に光線を出すケイト
『ビビビビビビーィ』
「ウワ―ァ・・たすけて・・ねえちゃーん（皇帝との戦いを思い出すぞ？）

フードを被った少年が裸体の女性をかかえ亜空間を移動していた
その背中には４枚の天使の翼があり　両腕は　柏原芳恵に似た女性の胸を抱えていた

？　たった一人の反乱3（後書き）

爆風に飛ばされラングリア・シティーに戻ったマオンとカイルの前にブロッケン・ケイトの魔手が迫る、だがその時　ゼノンと名乗る少年が現れ　2人を時空の旅へと誘う

？　たった一人の反乱４（前書き）

レシアからラングリアに飛ばされた　マオン達の前に
現れたゼノンは敵か味方か？
たった一人の反乱終章

？　たった一人の反乱４

○ラングリアシティ
同・渡り廊下（つうろ）
トンデモ・コンパクトで作った分身に　レシアを任せ、自らは
ブロッケン・ケイトを
襲うまゆゆ　だがケイトが　両手から出す電撃光線によって　大ピンチに陥っていた
『ビビビビィィィー』
「うわあああ、このままでは・・持たない」
「死ね、身の程知らずの怪盗よ」
「チューチュー」
「あたたたた離せネズミ」
あーちゃんが　ケイトの○そこに思いっきり噛みついた
（あーちゃん・・よしっ、この隙に）
コンパクトを取り出す
「ふえるフエール」とスイッチを押すまゆゆ
「いい加減にしろこのスケベネズミめが」
『ダーッ』
と電撃玉（えれきれる）をネズミに浴びせる　ケイト
『ドバーン』と向こうの壁に激突するあーちゃん
「ふえーん」
「あーちゃん大丈夫」
同時にケイトの電撃弾（ですらんちゃあ）がまゆゆの胴体を貫いた
『どぁっ・・』
大量の血が風穴から噴き出す
「うっつ・・」
「あっ姐御！」
「どうやら人の心配してる場合じゃ無かったようだな、とどめだネ

ズミども」
「てやーあ」「タアーぁ」
その時　ブロッケン・ケイトの後方から2人のまゆがノースリーブの剣で斬りかかった
「オノレィ、影がいたか?」
「うっ・・うっ・・・」
「姐御　しっかりするでガス（分身のほうを見て）ここは任せたぜガスよ」
『ウイィィーン』
と　ベルトのマック・ストーンを　作動させるあーちゃん」
『シュン』
と何処かへ消える
「ネズミィ、逃がすかぁ〉、〜、〈」
「行かせないよ」
「そう言う事」
前後から同時に攻撃する　分身たち
その頃　レシア・タウンから飛ばさせたカイル達は　ラングリアの横にある
ドーム型の建物のガラクタの上に落下した
『アレー』
『バアーン・バーン、ドテッ』
最初にカイルが落ち　そのあとナルーが　続き、最後にマオンがカイルに重なるように落ちてきた
「・・ここは何処だろう?」
「何処っでもいいけど　早くどいてくれない　重いんだけど」
「そうマオンは　重いなる」
「アーンた　達ねェそんなこと言うの大体　私はクラスでも・アララララ」
カイルが身を起こしたので　下に転げ落ちるマオン
「いきなり　起き上がらないでよ〉、〜、〈」

「どうやら　漫才してる間も、無いみたいだぜ？」
そこには　ＳＭ服に着替えたブロッケン・ケイトと　男女の清掃隊がずらりと囲んでいた
「ここがお前たちの墓場だ」
「その月並みなセルフ、ざけんな　ＳＭ狂いのおばはんよぉ」
と　マジックボールを投げるカイル
『モンモンモン』
ボールが割れ　異様な臭いが辺りに立ち込める
「この隙に退散しようぜ」
「くっ臭い　なる」
カイルの言葉にマオンとなる？は鼻をつまみながらドームから脱出する
「おのれぃ逃がすな（ブロッケンさん、そのセリフ何度目？）
マオン達はラングリアの出口まで逃げて来た時、空間から火花が散り　ネズミを肩に乗せた血まみれの少女が現れた
「おまえは麻友王女じゃないか、どうしてこんなところへ？」
「亜空間基地に向かったでガスが、どうやらここまでが限界だったようでガス」
王女の代わりにあーちゃんが答えた
『ビビビ・ガガガ・レディー・ガガガ』
マックストーンのメカが唸り、システムが解除された
『カチャ』
とまゆゆの腰から外れたベルトが機能を停止する
「まゆゆさん、カイル何とか助けてあげて？」
「俺もそうしたいところだが　どうも無理みたいだぜ」
その眼の前にはブロッケン・ケイトを中心とした２０人ほどの清掃隊のメンバーがいた
「ケイトよ、いつまでグズグズしているのじゃ」
堕天使シスフィーナの声と共に光が　ケイトと清掃隊達に当たる
すると全員がピラニアの様な怪物に変身した

『ガガーガガー』
「お前たちは一体何なんだぁ」
その時　北の空から黒いフードを被った少年が美女を抱えて飛んできた
その白き翼は天使のようだった
少年はマオンとカイルを見つめていた
「何者だヤツハア？」
怪物となった　ケイトが囁いた
その瞬間マオンとカイルの姿が『シュン』っと消えた
「どっ何処に言ったぁ」
吠える魔獣ブロッケン
「あーちゃん、お別れだよ」
「姐御、それはどう言う意味で？？」
「地上に溢れる精霊たちよ、わが手に集いて形となせ、チキチータ・マルチーナ」
まゆゆはあーちゃんの質問には答えず　レイア次元で
魔道士リナに教わった呪文を唱えた、するとシャボン玉があーちゃんを包んだ
「姐御ォなにをするんでガス」
それを彼方へと飛ばした
「さてと・・あなたたちを・・死での旅に招待してあげる・・・・なあに費用はこっち持ちだから・・遠慮はい・ら・な・いよ・・」
　そう言うとまゆゆは『二ッ』と謎の笑みを浮かべた
その瞬間まゆゆの体中が光りだす
「いっいかん全員離れろ」
「姐御っ、アネゴー　まゆゆーゥ死ぬなぁー！！！」
あーちゃんの抵抗も虚しくシャボン玉はラングリア空間を離れた
○亜空間
「ここは　亜空間か」

「そのとおりだ」
「あなたは誰ですか？」
「我が名はゼノン　闇からの使者とでも名乗っておこう」
「ゼノンなるか」
「　その使者様が俺たちに何の用があるんだ」
「今この世界は破壊に満ちている、人は人を襲い自らを裏切り　自然は崩壊の道を歩んでいる
このままではいずれ滅亡の道を歩むだろう　そこでおまえ達はこれから
あらゆる時空間を旅するのだ　全ての世界を破滅から救う為に・・・」
その時ＬｅＯＮのあった方向(あたり)が
『ピカ』っと大きく輝いた
「いっ、今の光はまさか？」
だがマオン達はその結末を見る間もなく、亜空間を飛んでいたのだった。

？　たった一人の反乱４（後書き）

マオン達は　真の完結編である　アキバシティーの聖戦までしばらくは異世界を旅します。

？　地下牢獄デスト（前書き）

神（しすふぃーな）によって　与えられた戦争と言うゲームによって
魔空都市クララは　機械対機械の戦争世界となった
そして役目を終えた古いアンドロイド兵士たちは
デストと言う地下牢で　死（はかい）を待つだけの運命にあった

？　地下牢獄デスト

それは凄まじい光景だった
数千万の青いアンドロイド兵士たちが銀色の機械戦士達と戦っていた
勝った兵士達は　負けた方の力を奪い合い、負けた兵士達は宇宙の残骸となって消えていった
その星ではそれが永久に続けられていた。
一帯、誰が何のために戦うのかその理由などどうでもよかった
両軍ともただ敵を倒す為だけに戦っていたのある。
〇　地下牢獄デスト　００時間
そこは地面に埋められたコップの様な世界　中は蜘蛛糸（でんじもう）が
天井まで張り巡らされた、筒状の部屋が無数にあり
一箇所に一体のアンドロイドかサイボーグが収容させていた
「気がついたかねお二人さん」とある老兵士が声をかけた
「２人チガウなる、３人なる」と服の中から
顔を出したナルーが抗議した
「これは失礼、妖精殿もおられたとは」
「なぜナルーが妖精だと知っている？」
「知っておるとも、昔はこの世界にたくさんいたのでな」
そう語ると老兵士はゆっくりと話しはじめた
「クララと呼ばれるこの世界は元々我らアスダルド人たちの理想郷であったのじゃ
皆女神ヴィシュモーレ（オルディナスに相当する神）を崇め自然とも　共存し
国は繁栄していったと言う
だがある時、彼方より洞窟と暗闇の神ギルヤ（シスフィナの配下）が
数千の堕天使軍を従えて舞い下りアスダルド人たちに戦争と言うゲームを与えたのじゃ

やがて彼等アスダルド人たちは永遠に戦争を楽しみために
わしのようなサイボーグやアンロドイド兵士を競って作るようにな
っっていった
「なるほどな」
　そこから先はあなた方に見ていただいたとおりのあり様じゃよ」
と老兵士は話終えた
「でも何でこんな所にいる　なるか」
「わし等のような使い物にならないサイボーグや
アンドロイド達をこの地下牢デストで廃棄処分にするためじゃよ」
「地下牢ってか」
「廃棄処分、どうやってよ」とマオンは質問に
老兵士は「なあに、じきにわかるさ」と言葉を濁しただけだった。
その時『ギャウーォ、ギャウーォ』と言う唸り声が何処からか聞こ
えてきた
「なんだ、あの声は？」
「ここを管理（監視）をしているギルヤの手先スピーダが飼いなら
している
デス・ピーダと言う怪魚さ」
「逃げないように監視している　なるか」
「もちろんそれもあるが真の目的はわし等を食らう事なのじゃ」
老兵士は「あれをごらん」と処刑場を指差した
見ると　青い兵士がたくさんの蜘蛛糸に絡められて　身動きがとれ
ぬまま　大声で叫んでいた
「たったすけてくれー」　しかしスピーダと名のる女郎蜘蛛のよう
な女は
「だまれっ、今や敗残兵のおまえ達に生きる価値はないのだ
ありがたくデスピーダの餌になれる事を誇りに思うが良い」と告げ
ていた
　それはアンドロイド兵士が大きな怪魚に食われている　なんとも
おぞましい風景であった

それを目の当たりにしたマオンは「いぁーあ」と言う叫びを上げて気絶した
『・・・おいマオン大丈夫か・・』
「やっぱ熱があるな」と額に手を当ててカイルが言った
「無理もないですじゃ、あの光景はわし等でも思わず目を伏せたくなる　」
「なら、どうして脱出しない　ここで殺されるのを、ただ待っていると言うのか?」
とカイルは怒りにまかせて怒鳴った
しかし老兵士は目を閉じ静かに語った
「ココは脱出不可能なのじゃ、それにわし等はみんな作られたときから
埋め込まれたチップによって何処に逃げても直ぐに見つかる、それに無事にここを逃げ果せたとしても　古いアンドロイド達は宇宙商人たちに『ちり紙』か『握手権』
かに交換され　売りさばかれるだけじゃよ、携帯電話の資源も採れるでな」
「レイアーズ?だね（少し違うぞ!）
「それでも逃げようって気はない　なるか」
「わし等は活動できるぎりぎりの燃料しか　与えられては居らん、皆やつに食われる
為にのみ生かされておる」と言うと目を開き「何故だかわかるか
生きてさえいればやつ等に一泡吹かせることも出来るからじゃ」と語り老兵士は　唄いはじめた
「・・いつか世の中が終わる事があっても未来（じぶん）を信じぃ、唄う・・希望の唄をぉ・・・♪」
それはいつの頃からか　戦い疲れた兵士たちの間で、歌い継がれてきた『希望の唄』だった
○翌日（時間が無いから、人間の感覚で）

「ふう、なんとか熱も治まった　なるよ」
とナルーが言うと「おはようナルーカイル心配かけたね」とマオンが目を覚ました
この世界では時間が無い（サイレンとか）みたいだけど、どうやら次ぎの朝をむかえたらしい、目を覚ましたマオンはあのおじいさんの姿を探した
「さっきから何探してるなるか」
「言っとくけど　あのじいさんなら居ないぜ　今日は順番だそうだから
　そうそう、クシナ姫（私の事らしい？）に宜しくってさ」
とカイルはマオンにウインクした
「くっクシナ姫って　日本神話の？」
「だろうな、俺はその神話は知らないけどさ」
「えっ　あの有名な日本神話も知らないのぉ？」
「マオンは・・知ってるなるか（疑いの眼で見るなるー）
「あたりまえじゃないクシナ姫って言うのはね・確か泡から生まれたんじゃない、それくらい子供だって知ってるわよ（違うぞ？）
その時牢獄の中から処刑場が見えた
空からはいつもの様に怪魚デス・ピーダに乗った管理人スピーダが現れた
「英雄ルビアナ・サーク、とうとうおまえの番が来たな、この日をどんなに待ったことか」
とスピーダは笑った　そこに怪魚デスピーダが『ギャウーォ」
と言う雄たけびを上げて老兵士に迫った
「さらば選ばれし者たちよ」サークは　そう叫ぶと懇親の力を込めてデスピーダに突進した、そしてスピーダの腕を掴むとデスピーダの口の中に突入していった
　「やめろー何をするハナセー、はなしてー」
その瞬間サークの体内に蓄積された膨大な不発弾が『ピッカッ』と

大爆発を起こした
『ガガガガ・ゴゴゴゴゴ・レディゴゴ』
クララ全体が大きいく揺れた、青と赤の　兵士たちは　お互いを罵り地割れに落ちて言った
『アッチャン・バンザイ・・』と叫んだ兵士もいたようだが??
でも私達は再び、ゼノンの声に導かれ再び　次元を超えた
・・ワタシハスピーダ、デストノシッコゥニン・・と言う壊れた端末機の声を聞きながら・

？　地下牢獄デスト（後書き）

デストに　放り込まれた古いアンドロイド達は
ＡＫＢのＣＤ一枚にも値しないらしい。
宇宙のダブヤ達は　兵士をさばくのに、ＡＫＢの握手権やブロマイドなどを付けてさばいているらしい
（同情するぜ）

??【本能寺が変?】（前書き）

ゼノンに導かれて　マオン達が　来たのは　１５８２（天正１０年）
の日本だった
だがそこは　教科書とはかけ離れた世界であった

？？【本能寺が変？】

（1）囚われた3人
私達3人は亜空間を飛んでいた
「おいゼノンとやらこんどは一帯、何処に行くつもりだ」
「室町時代の日本だ」
「むろまちなるか」
〇1582（天正10年）本能寺
私達は城のような場所で降ろされた
「ここは戦国時代ね」
「何で知っている　なるか？全然勉強していない　なるに」
「しっ　失礼ねーこれでも勉強は少しはやっているわよ
中でも歴史は得意中の得意なんだからー」
と　胸を張るマオン
「へーえ、そんな事聞いたことないなる」
「まあまあ、お2人さんそれくらいにしておけよ、ノブナガ妖魔大戦だろ」
「それは何なるか」
「50年以上前から全次元で発売されている超ロングセラーの3Dゲームさ
俺も実は大ファン　なんだ」
「なあんだ　知ってたか」
マオンは舌を『ペロッ』とだした（ローラかい？）。
「それにしてもこの城は何？まるで要塞じゃない」
「まったくだ、ゲームならともかく大昔の日本にこんな技術、あったとは驚きだな？」
　城は鋼鉄の壁で覆われ、軍色の壁が周りを囲んでいた
「これはいくらなんでも　変なる」
と私達が話していると、城の中からローマの騎士（と言うより　ロ

ボットのような）
カッコをした人たちが「おまえたちは見かけぬ顔だがここで何をしている？」
と質問した
　マオン達が返答に詰まっているとアマ竜と言うおヒゲの隊長さんが
「かまわん　連れて行け」と縄で縛り城の中に連れて行った
　瓶に入れられたナルーが「何処へ連れて行く　なるか、ノブナガさんに会わせてくれる
　なるか？」と質問したら
「ノブナガ皇帝におまえ達を？冗談を言うな地下にあるドクロ牢に収容するのだ」
と　軽蔑した目でおじいさんは答えた
「えーまた地下牢かよー」
（２）謎の影
○本能寺地下　ドクロ牢
マオン達３人は要塞と言っても過言ではない本能寺城の地下に連れていかれた
（しかもエレベーターで）「ここに入っていろ」とヒゲのおじさんは３人を乱暴に放り込んだ
その牢はどれだけ科学的なんだと思っていたら、時代劇で見るような牢屋だったので　私たちは「意外とフツーじゃん、つまんないの」
とため息をついた
「えー１つ言い忘れたがくれぐれも鉄格子には触れぬようにな
３億ボルトの電流を流してあるので触れれば　たちまち黒こげじゃぞおっほっほ」
おじいさんはさりげなく呟くと出て行った
「それを先に言えよ」
○夜
「ねーえカイルなんか話してよー」
「じゃーとっておきの怖い話でも聞くか？」

「聞くか―あ〉、〜、〈」
「ナルーは聞きたい　なる」
「あたしは聞きたくないの」
「分かった、夜怖い話聞くと　またおねしょするからなるね」
「そんなもん　怖い話聞かなくても　するっ・・て・何言わせるんじゃあ」
「漫才も良いけど　おまえらいい加減寝ろよ」
「子守唄歌うなるか？」
「モーうバカにして子供じゃあるまいし、大体あんたは子守唄知らないでしょ」
「子守唄くらい知ってるなる　母さんが良く歌ってくれたなる」
「へーえあんた母さん居るんだ」
「あたりまえなる」
「どーでも良いけど、その話　まだ続くのか？」
「しい（すい）ません」
マオンははしかたなく　一人脱出方法を考えているうちが、いつの間にか
『スヤスヤ』と眠っていたのだった
その時牢に　黒い影が牢屋に近づいてきた

？？【本能寺が変？】（後書き）

やがて　歴史通り本能寺の変が起こる
だがそれは戦闘機とロボット達が
戦いあう科学の戦いであった。

??終わりの無き戦（いくさ）の世界（前書き）

マオン達が訪れた世界、それは　戦乱を楽しむ魔女の世界であった

??終わりの無き戦（いくさ）の世界

私は寝ている間に何処かへ運ばれたようだった、そしてそれは突然起こったのです
無数の戦機獣軍団デヴィラスを率いて　秀吉の救援に向かったはずのミツヒデが
「我等の敵は本能寺にあり」と本能寺に兵を引き返したのであったそして本能寺要塞は奇怪な戦闘機たちに囲まれていたのである
○本能寺　魔王の間
「乱丸　辺りが騒がしいぞ、どうした事じゃ」
「それがっ信長様、デヴィラス（せんとうきじゅう）が攻めてきました
「何者の、企てぞ?」
「ラッキョの紋章、明智ミツヒデかと思われます（そうだったかにゃ?）
信長は寝室を出て、外を見た　そこには無数のデヴィラスと機械兵士達が戦っていたのだった
「オノレィミツヒデ・・是非に問わず」
「へんしん」
信長は右腕を半分回す　独特のポーズをとり黄金の鎧をまとった戦士となった
ベルトの風車でエネルギーを取り込むと赤いスカーフが風に揺れた（おんな太閤記では?）
「信長ァ、ここがお前の墓場だ」
黒いデヴィラス（リーダー艇）で、陣頭指揮を執る光秀は　昨日の事を思い出していた
○回想　朝9時
マムシと呼ばれた斎藤道三の娘濃姫は、当時　駿河にあった
ミツヒデの移動要塞「ハゲ・ネズミ」を尋ねた

同・要塞内
「ミツヒデどのっ、ミツヒデどのはいらっしゃいますでしょうか」
柏原芳恵似のグラマーな女性が入ってくる
しばらくして　入り井口の扉が『ガッ』と開きミツヒデが現れた
「これはこれは、誰かと思いや濃姫殿ではございませんか？」
「あれからすでに一週間が経過しました、なのにそなたは
未だに実行しようとはしない、彼さえいなくなれば私たちはまた
恋人同士
に戻れる　それなのになぜ？」
「濃姫殿の気持ちはよくわかります　それに私は信長様に恨みがあ
るのも事実です
しかしそれでもこの世界を変えられるのは信長様だけなのです」
「そうですか　仕方ありませんね　無理にとは言えませんから」
そう言うと濃姫はミツヒデを誘った
ハゲ・ネズミの中で抱き合う　濃姫とミツヒデ、その時美女の瞳が
怪しく光った　それに連動して　ミツヒデの目も光った
「明日　本能寺にてノブナガを撃て、それがお前の使命だ」
「・・はいっ、濃姫様・そのようにいたします」
○濃姫の居城　蝮城　濃の間　夜８時
「ふふっふこれでこの世界にまた戦争が起こるわ、ホッホッホッホ
ッホ」
「濃姫よ、作戦は順調にいっているかえ？」
「これはザビアさま、いらっしゃっていたのですか」
３つの顔を持った髪の長い魔女が、８本の腕で濃姫を後ろから抱い
ていた
でも鏡の中には、濃姫の胸に手をまわした、松田聖子似の
女性が写っているだけだった。
「ザビア様ァ、濃の心はザビア様の物」
そう言ってタコの抱かれる姫だった
○洞穴の中

『ズバーン、ババババ』外ではレーザー光線が飛び交っていた
マオン達はそれを本能寺のッ近くにある洞窟で見ていた
「すっ　凄い、時代劇でやってた本能寺の変ってこんな凄かったんだ」
「そんな訳ない　なる、この時代は日本も他の国もこれほどの武器は持ってない筈なる」
「ここは、ジラス次元は　そんな甘い世界じゃないでガス」
「ねっ、ネズミがいる？」
「そりゃそうだろ、この繭太郎さんが牢から助け出してくれたんだからな」
その洞窟には青いネズミを連れた忍者姿の少年が言った
「そうだったね、御免なさい」
「この世界はあーもんど（ネズミの名前らしい）が言う通りあなた方の世界と
ちょっとだけ繋がった　パラレル世界なの」
「と言うと？」
「ザビアと言う魔女が戦争（いくさ）を楽しむための世界なの」
「ど・ゆこと　なる」
繭太郎はこの世界が『ジラス』である事　戦国武将たちに均等に兵器が分け与えられた事
そして　本能寺の変で一旦リセットされ、それが永久に繰り返させる事などを
カイル達に伝えた
「と　言う事はつまり永久に戦いは終わらないって事じゃない、そんなのないよ」
「お前が怒っても仕方ないだろ」
「それもそうだけどさあ、でも　それじゃあ　戦い（いくさ）が終わると信じて
戦ってる人達が報われないよ」
「そう　なる　そうなる」

外では相変わらず　ミツヒデのデヴィラス軍と信長の機械兵たちが
　文字通り火花を散らしていた
『がルルーゥ・ガルルゥ」
洞窟の周りには　スタコの形態をした無数の怪物（たこあし）たちがいた
「何だ狼か何かか？」
「いや、君達は早くここを脱出したほうが良いわ」
繭太郎と名乗る女性はそう言って十文字の剣を構えた
「残念ながら　そのヒマはなさそうだぜお譲さん？」
カイルは　そう言ッて、繭太郎にウインクし　ラングリアから持ってきた
電磁ナイフを出した
「姐御、いや繭太郎の旦那　ここは派手にやりまっか？」
「そうだね、マオンさんはその金魚にでも守ってもらいな」
「ばっバカにして　私だっていざって時は」
「いざって時は？どうする　なる」
「もちろん逃げるわよ　今までもそうしてきたし、厄介事にはかかわらないのが一番だよ」
「だなっしかし　向こうが仕掛けてきたときは別差」
と頷くとカイルは向こうの世界から持ってきた電磁ナイフをポケットから取り出した
「それでは種も仕掛けもございません」
　繭太郎と名乗る黒装束の忍者は、重箱の様な物を何処からか取り出した
「これは　先日ウラシマ次元を尋ねた時お土産に頂いた『時間の封印箱』（たまてぼっくす）
なんだけど、まゆは　いや繭太郎はこんなの要らなーい」
と言って　タコアシたちがいる、洞窟の向こうに投げた
すると封印箱が開き中から白い煙が噴き出した
『フガッフガッ・フガ』
何前万年も経過したかのように　ヨボヨボになるタコたち

「どうやらこれ（ナイフ）要らないみたいだな」
「そう　ナルかんたんなる」
とヨボヨボのタコ達に次々と体当たりをするナルー
「なるほどこりゃー楽だわ」
とパンいやキックをお見舞するマオン
『ギェー』
『ガラガラガラ』
と崩れる老体のたこあしたち
「ちっ、あんな武器があったとは驚きね」
とゼノンの一部と思われる女性が茂みの向こうから見つめていたのだった

??終わりの無き戦（いくさ）の世界（後書き）

まおんは　この世界の時間を進めるため魔女ザビアが住むタコ壺城に乗り込んだ　はたしてこの世界の時間は進むのか
そして繭太郎の正体は　彼（かのじょ）もコピーなのか？

??　時代のエンド・ロール（前書き）

本能寺の変は機械対機械の科学の戦いで終わったはずっだった、しかし　本能寺炎上によって時間は　桶狭間まで戻ってしまった・

??　時代のエンド・ロール

○本能寺城
ノブナガは獣機軍と戦いながらこれまでのことを思い出していた
○回想
○天文二十一年（１５５２年）那古野城
尾張（名古屋西部）の守護職だったノブナガの父ノブヒデは心無し半ばにして病に倒れたました
その後を継いだノブナガは尾張統一に頭を痛めている時
体内からもう一人の自分が現れ囁いた
「今この世界は乱れておる　それを救うのは巨大な力しかあるまいノブナガよおまえにその力を授けよう、我が同士となってこの世界を粛清　するのだフハハハハハー」
「待て、お前は何者だ　何故俺と同じ顔をしているんだ」
「ノブナガよ　私はお前の心だ、お前自身のな」
そう言うとその分神は消えていった
そして　その翌日彼の元へ数千の機械兵士軍団と魔空要塞本能寺が与えられたらしい
○戻る
『バーン、バチバチッツ』
まるで翼竜のようなミツヒデの機獣軍団の猛攻で
無敵と思われた要塞本能寺も遂に火を吹き、その勢いは要塞全体を包んでいった
「おのれえミツヒデ、これまでか」
「ノブナガ様、お逃げ　くださいこの要塞はもうもちません」
「乱丸か、おまえこそ脱出しろわしはこの城と共にまいる」
「ノブナガ様、乱はおともいたします」
「ミツヒデよ　天下を統一するのはこのわし、ノブナガなのだノブナガこそこの世界の神となるのだハハハハハ、フッハハハハー」

「・・人間５０年、下天のうちをくらぶればーァ・・♪」
最後にノブナガはシューズを履いてフィギュアで敦盛を舞った（そうだったかにゃ？）
その瞳はなおも未来を見つめていたと言う
『ズバーン、ババババー』
要塞ハゲ・ネズミのミサイル攻撃で遂に本能寺は大爆発を上げて消えて行った
そして時間は戻ったのだった
○永禄３年（１５６０年）５月
駿河、遠江（静岡）の大々名である　名門今川義元は
領地拡大の為　２万５千もの機械馬（たいぐん）を率いて
ついに尾張（名古屋　西部）への進撃を開始した
同・馬の上
「ホッホッホッホ、これだけの大軍を見れば　尾張の小せがれはさぞ　腰を抜かすであろう」
義元侵攻にノブナガの家臣たちは『籠城』か『戦うか』で大いに揉めていた
○清州城　夜中
「勝ち目が無くとも、精一杯戦うべきだ」
「たかが２千３千でどう戦うと言うのだ」
しかし、肝心のノブナガは　いつも通りに　カチューシャ　じゃなくて
敦盛を待っていた
「このトリプル・アクセルと言うのが難しいのじゃ」
「若様（のぶなが）、そんな事よりも　どちらかの判断を？」
「乱丸　そう急かすな、今日は疲れたので俺はもう寝る」
「そっそんなァー、若様」
「いつもの耳当て（へっどふぉん）とヘビロテの音楽板（しーでぃ）を頼む
「はっハイ承知しました」
同・寝室

ノブナガは西洋から伝わった音楽箱(れこーだー)で
ヘビーローテーションを聞きながら寝ていた
(時折、ヘヴィーローテーションの振りを真似しながら(何で知ってんの?))
その時　何者かの気配を感じて飛び起きた
「ここは江戸時代か　いやもっと昔のようだ・・」
「何者じゃ先ほどから我が寝室で騒いでおるやつは」
「きさまは何者かしらんがこの時代に来た私の最初の生贄となるのだ」
その3つ目の女性はノブナガに精神波をぶつけたようだったが
ノブナガには何も感じなかった
「ばかなこの時代に私の精神波を撥ね返すやつが」
「間者　問答無用」
ノブナガは魔王の剣でその女性を一刀両断に切り捨てた
『うぎゃーあ』
「まるでラウドネスさまのようなあの眼差し　やつは・・」
そう呟くと女性は消えていった
「怪しき女じゃ?」
騒ぎを聞きつけて、乱丸が飛んできた
「若さまどうかなさいましたか?」
「乱丸か?なんでもない寝る前(ただ)の準備運動じゃ」
そう言ってノブナガは豪快に笑った　そして
「乱丸よ　敵は桶狭間ダ、今から出陣する皆にそう伝えよ」
と言い放った。
　一方時間が戻った　マオンとカイル達は　繭太郎の家
『渡り長屋』に身を寄せていたのであった

??? 時代のエンド・ロール（後書き）

第２１部の話もちょこっと登場します。

??渡り長屋の人々（前書き）

尾張の国の一角にある信秀が作らせた（考案はノブナガらしい？）
水害と敵を防御を兼ねた　ヘビのように長い　長屋があった
そこに暮らす人々は　戦（いくさ）の微塵もない　愉快な人たちだった

??渡り長屋の人々

マオンとカイルとナルーの3人は、繭太郎の案内で尾張の片隅にある『渡り長屋』に案内された

○渡り長屋

そこは名前の通りにヘビのように長い長屋が続いていた

「なげーな、この長屋何処まで続くんだよ」

「私、もう歩けない」

「2人とも案外だらしない　なるね」

「あんたは飛んでるから楽でしょうが、このひきょう者」

「ナルーだって　歩いてる　なる」っと言って飛びながら小さい足を動かす

「・・・一生やってなさい」

とため息をつくマオン

「えー水は要りませんか」、新鮮な水はいかがですか」

その時17～20くらいの女の子が水桶を天秤棒で担いで通りかかった

「らぶたんはいつも早いね」

「母が病気なもんで、薬代稼がないとね」

言うとその女の子はマオン達に会釈して　通り過ぎて行った

「へーあの子　水売りやってんだ?」

「他にも占いとか　食料品とかオムツショーとか?　いろいろやってるらしいんだ」

と繭太郎が説明する

「オムツショーか、それ物凄く興味あるな」

「ここにいれば　そのうち見られるよ?」

「えーとぉ、45、47と次だ」

繭太郎は48番長屋の前で止まった

「付いたでガスよ」

と青ネズミのアーモンドが言った
「やっと着いたか？」
「でも何でこの長屋こんなに長いの？」
「そりゃあ　な・が・やだからじゃないか」
「でもいくらなんでも、これじゃあ　長すぎだよ」
「この村は　昔津波で莫大な被害を受けたの、その防護策として信秀さまが
この長屋を作らせたらしいの」
「なるほど　防波堤を兼ねているって訳か」
「考えたわねえ？」
「なんや騒がしい思うたら繭太郎帰ってたんか」
と髪にお花を付けた女の子が長屋から出てきた
「これがこの次元　じゃなくて　ここで一緒に暮らしてる
足軽頭　倉餅相場さんの娘の明日那」
「倉餅明日那です、もっちぃと呼んでくださいね」
「こちらそ宜しく」
互いに挨拶を交わす
「ウィッ、ヒック　人生生きてるだけで丸儲けやどー」
向こうから出っ歯の職人風の男がほろ酔い気分で千鳥足でやってきた
その反対側から来た女の子に『バーン』とぶつある
「おっとっと、ぶつかってもうた？」
「出っ歯の兄ちゃん気を付けな、御免よっ」
と言ってその女の子は通り過ぎて行った
それを見ていた繭太郎が
「あーみん　またやったね　いい加減その商売辞（すり）めたら？」
「いけなーい、またやっちゃったあ　でも癖だから許してちょ」
屈託のない笑顔を見せる　その女の子は繭太郎のもう一人の
同居人で　亡くなった前多組の組長彰の一人娘　あーみんこと前多亜美だった
４０番長屋からは　乙女紋土と言う変な名の浪人が出てきて、井戸

で顔を洗っていた
裏の稼業で生計を立てているらしい
「よっもんどの旦那っ早いっすねえ」
「巧またおまえか、いい加減　女房(まり)の世話になって無いで
真面目に働いたらどうだ」
「それは　まっそのうちね　そんな事より旦那　少し　金(これ)なんとか
なりませんか
今日中に返さないと　あれ（ふぁいずぎあ?）借金で持ってかれちゃうもんで）
「自業自得　諦めるんだな」
２０番　長屋では　戦火で顔の半分を失った女の子達が
身を寄せ合って暮らしていた
「こんな顔になっちゃったけど　それでも優子、みなみのこと　好きでいてくれる?」
「あたりまえじゃないの」
「みなみ」
「ゆうこぉ」
ぐっしょり濡れ合う2人だった
また　４０番長屋では　名川と言う障子家の男が入り口の前で
「どうか丈夫な子が生まれますように」
と祈っていた
しばらくして戸が『バーン』と開くと　姐御と言う産婆さんが
「生まれたで　美貴てぃに似て　元気な女の子やで」
と言った
『オギャアオギャー』
明るい声が　渡り長屋中に響き
あちこちから「おめでとさん、遂に生まれたか」
と言う祝福の声が聞こえていた　戦を忘れた平和なひと時であった。

??:渡り長屋の人々（後書き）

マオンとザビア支配するタコ壺城に乗り込む。

？？桶狭間の戦い（前書き）

桶狭間の戦いと、その陰に隠された　伊賀忍者『敦子組』の活躍とは？

??桶狭間の戦い

今川義元は尾張攻略がうまくいっている事に気を良くし
わずかの共と、桶狭間山で休息をとっていた
○桶狭間
「主なところは我が軍がことごとく抑えておる
ノブナガのうつけめ今頃館で震えあがっている事じゃろうハッハッハッハッハ」
そこに村人が祝いの酒や魚を持ってやってきた
いつの間にか『ポツリ、ポツリ』と雨も降り出していた。
「お前達は誰じゃ」
「ハイ私どもは地元の者ですが　今　村にちょうど『アキバ組』と言う
舞踊団が見えられているので義元さまに献上をと思い　やってきました
「それは良い心がけじゃな、しかしわしはまだ戦の最中でな　のんびりしてはおれぬ」
「そう言わずにご覧になってください」
穴栗鼠（あなり）と言う村の長　カミジは　両手を『パンパン』とたたいたすると　敦子太夫をはじめとする色とりどりの衣装を着た少女達が現れた
「私どもの国で流行っている踊りをご覧に入れます・・・1・2・1234
～こんな気分になれるって、僕は付いているねーェ♪」
音楽に合わせて少女たちは踊り、後ろでは男たちがピーヒャラ・ピーヒャラ・パッパ　パラパ♪と笛や太鼓をエアーで演奏していた
（エアーかよ?）
「いい音楽じゃ　これは何処の国の唄かな?」

「はい　西洋から伝わった歌にございます（うそつけ？）
義元の部下たちも「へじぃ～ろーてーぅそんっ」っとすっかり村娘
たちの酌で酔っぱらっていた
「あいらぶゆーってか？アッいかんいかん　わしもちいと飲みすぎ
たな」
と　ふらつき倒れた義元を敦子太夫が支えた、手にはナイフが光っ
ていた
『くっクハっ』
義元が血を吐いた、そのお腹には刃が刺さっていた
それと同時に男たちが『チーチーパァッパ』と合図を送る
その合図をきっかけに四方からノブナガ軍が『ドット』押し寄せた
「オノレィ娘、貴様は　舞踊団ではあるまい」
「ハッハッハッハッハ、今頃築いても遅い」
そう言うと敦子大夫はパット煌びやかな衣装を脱ぎ捨てた
「ノブナガ様配下　花の敦子組、棟梁　霧隠れ敦子　けんざーん
（ゆめ　に止まれ～ェ懐かしいぞ）
「騙しおったなぁ」
「深手を負いながらも機械馬に乗り込もうとする義元だったが
木の枝につまずき顔から『ダーン』と倒れこんだ
「みなの者よく聞け狙うは義元の首じゃ、後はほおっておけ」
勝利を確信したノブナガが力強く言い放った
「オノレー名門のわしが　こんなことで・・ヨヨヨ」
こうして　桶狭間の戦いはノブナガの策略と　敦子組の
活躍であっけなく幕を下ろした
尾張・タコ壺峠
その頃　マオン達はザビアが支配するタコ壺城目指して歩いていた
「そこの兄ちゃん達よぉそんなに急いで何処行きなさる」
とカゴを担いだ　人相の悪い2人が声をかけた
「タコ壺城を目指してるなる」
「おーおー金魚が　タコ屋敷をねーえ」

「なにか　おかしいなるか?」
「別にいいけどよー、タコ屋敷はずーっと先なもんで、女の足じゃーきついぜ
いいから　カゴに乗って行けよ」
「結構です」
「そんなかわいい顔して　断るこたァねーだろ、ねーお譲ちゃんよォ」
そう言って男たちは　本性を現したのだった

??お猿の加護（かご）屋（前書き）

山賊に絡まれたマオン達だったが
その山賊は変な　だけだった。

??お猿の加護（かご）屋

○タコ壺峠
マオン達は厳つい顔をした駕籠（かご）かきに絡まれっていた
「どうしてもおいらたちのカゴに乗れねーって言うのか」
しつこいわねーェおじさん達はメッチャ怪しいから、遠慮するって
言ってるでしょ」
「言ったな女、おじさん達を怖がらせると怪我するぜ」
そう言うと　男性の一人が『ピーィッ』と笛を吹くと
山の向こうから『じんじゃらげ　あそこのけ』と　変な男達が現れた
『東山の金八』『丹下ご飯』『死神Q太郎』
『そしてわしが　鳩山主禅』『同じく小沢一老太』
『われら5人そろって山賊血車隊』
とそれぞれ変なポーズを決めた
「・・あそう　がんばってね」
通り過ぎようとしたマオン達に
「おいっ無視する気かぁ」
と　かしらの小沢がかかってきた所を
持ってきた電磁ナイフで刺したもんだから
その山賊頭は『ビリビリビリィ』
と痺れてしまった
「お頭がやられた・・退散」
連中は頭を残して一目散に逃げ出した
「まて　俺を置いてくなぁ」
その頭の慌てっぷりにマオンとカイルとナルーは久しぶりに笑った
タコ壺城を目指してマオン達が歩いていると　今度は後ろから
『エッサ・エッサ　すんエンサー』
とお猿の加護屋がやってきたので、マオン達は今度は乗せてもらう
事にいした

村空と言う　そのお猿さんは「ようこそ　我が天宿タクシーへ」
とあいさつした
相方の五条さんは「何かリクエストがあるんやったら、この西洋箱(れこーだー)
で行きながらかけやすが？何か無いやすか」
と言ったので　まおんは「じゃあフライングゲットある？」
と聞いた
「バカだなお前　そんな何百年も後の唄　ある訳ねーだろ？」
「そうなる　マオンは　おかしいなる」
「もーう二人して私の事バカにしてー、だってさっき誰かがヘビロ
テ歌ってたから
もしかしたらと思っただけだよ」
「それはきっとおまえの　間違い・・」
「ありますよ」
「へっ、今何て言った？」
「だから　そのフライなんたらって言うの　ありますよ」
「えーあるの　（言ってみて驚いた）
「でも　なんでこの時代にそんな曲があるなる」
「それがあっし達もよう知らないんですが　噂では
天使の様な羽を付けた女性が　高い塔の上で唄っていたところを誰
かが見たと？」
「ふーん不思議ね（多分、天使のミーナでしょ？）
「それでは譲ちゃんと金魚は　あっちに、こっちのカゴには　そち
らの兄さんが
お乗りください」
「本日は天宿タクシーご利用ありがとうございます　それでは出発
進行」
「よーソロ（舟かよ？）
『エッホ　エッホッ』
そしてタクシーは音楽を鳴らしながら　快適に山道を下って行った

『♪ＮａＮａＮａＮａ・・・　ＮａＮａＮａＮａ・・・
ギラギラ容赦ない太陽が　強日で照りつける
ｏｎ　ｔｈｅ　ｂｅａｃｈ　自惚れ温度は急上昇
落ち着かないのは　真夏の性だね
二人　目が合えば　なぜか逸らすのに
僕をまたすぐに見る
君って…
もしかして、もしかして…
フライングゲット　僕は一足先に
君の気持ち今すぐ　手に入れようか
フライングゲット　何か言われる前に
心の内ビビッと　感じるままに♪』
「良い曲なるねーェ　不思議界を思い出す　なる」
「そうだね」
さっきまでの雨が嘘のような、上天気だった。

キャラクター名鑑？美少女怪盗まゆゆ（前書き）

あらゆる次元をまたにかける　怪盗まゆゆ
そのプロフールが明らかに？

キャラクター名鑑？美少女怪盗まゆゆ

本名：　麻友・エルダ＝ナターシャ
身分：モームディア王国を築いた　ハンスの第2王女
出身地：惑星ＬｅＯＮの首都レシア（埼玉県に似ている？）
身長：　身長１５４　ｃｍ　バスト：秘密らしい
夢：　全ての世界の安定（へいわ）とお宝収集
職業：美少女怪盗　手配？コードネームＷＲＨ（わたろうか）（走ろうぜ）
目的：　亡き両親や姉に代わって、堕天使シスフィーナが企む
全次元征服を阻止する事。
趣味：王国の科学者だったレオ博士が開発した、次元転移ベルト（マックストーン）
を使ってのお宝収集　しかし本当の目的は　シスフィーナに対抗するため
各次元に橋をかける事である。
部下、友人：青ネズミの　アーモンド（通称　あーちゃん）がいる
『怪盗まゆゆ、７つのアイテム』
？『黄金のオムツ』パンドラ次元から盗んだ物で、お尻を『パンパン』とたたくと
煙幕や　マジすか弾と言った小型ミサイルを出す　布制と紙制の物とがある
？『トンデモ・コンパクト』バケラッタ次元で盗んだ　分身機能を持つ
なおラングリアで死んだように見えるが　何人も分身（かげ）がいるらしい
？『トウガラシのルージュ』マジック次元で魔道士キキに貰った、塗ると　物体を移動
させられるが　激辛である
？『オ―ジロウのマント』同じくバケラッタ次元で盗んだもので、包むと姿が消える。

？『マジック・ホイホイ』レイア次元で魔道士リナに貰った、ホウキ型オートバイ
？『ＡＧＩＴＯ・ガード』レオ博士がレシアに伝わる　神の鎧をヒントに作った護り盾
　マック・ストーンに組み込まれていて、無敵の機神　ＡＧＩＴＯを呼ぶ事が出来る
？『マック・テクター』残され島（ラナ）の深海にある　後ろ髪海溝に隠してある
　ＡＫＢ合金で出来ていて　マックエネルギーで　マッハ４８で走る万能マシン
　まゆゆの脳波と通じていて　何処からでも呼び出す事が出来る
（ＢＬＡＣＫのロード・セクター見たい）なお最悪の場合は　ハンバーガー３つで
　でも起動する？
なお　本来は姉（たかみな）が使う筈だった　ノースリーブの剣を
　苦心の末扱えるようになった。

??　闇の支配者？（前書き）

タコ壺城では、闇の支配者　大沢とザビアの　黒い対談が行われていた。

??　闇の支配者?

○タコ壺城

美濃（岐阜県南部）にあるタコ壺城では、美濃のマムシと呼ばれた斎藤道三の懐刀　大沢一郎が　魔女ザビアのご意見伺いに来ていた。

８つの足を動かしながらタコの魔女がタコ壺から現れる

『あら　エッサッサー♪』

「これは　これはザビア様」

「誰かと思うたらマムシの使いか、今日はまた何の用かえ?」

「それが　家臣からの知らせによりますと　尾張のうつけが、駿河の大名を打ち取ったとか　もう大変な評判でして」

「なるほど、天下人を影で牛耳りたい　道三としては気が気でないと言う訳か?」

「いえっ　尾張のうつけなど　それほどの事は、ただ　越後の上杉　甲斐の武田

そして尾張のノブナガ　誰を天下人に　担いだら良いかと　ご相談を賜りたく

馳せ参じました　しだいでございます」

「しっておるぞ　そなたの支持を求めて　各大名が『大沢詣で』に明け暮れている事を

状況によっては　主君（ぞうさん）さえも切りすてる腹つもりであろう」

「足利幕府の重心　『管なすび』の　居直りのおかげで　次の天下人は

相当の覚悟を持った者でなければなりません」

「そして　それを　操つるのが　お主と言う訳か?大沢殿　おぬしも悪よのお」

「そう言うタコ様こそ」

「フッフッフッフッフ」

『おっホッホッホッホ』
　先の震災で家や家族を失った人たち　を尻目に　影の支配者たちは　そう言って笑っていた
「災害で大変なこの時期に、こいつらあたいらの事　何も考えてないじゃない？」
「またネズミが　迷い込んだようですな」
と言って槍で天井を突く大沢
　『ブスッ』
「痛・てて・・」
槍に付いた血を紙で拭きとる繭太郎、同時にネズミのアーモンドが『チューチュウ』と天井裏を走り回る
「どうやら本物のネズミだったようですな」
と天井裏を『チラッ』と見て言う大沢
○天井裏
「あたしとした事がまずった、あーちゃん退散だよ」
マントで身を包むとその姿が『パッ』と消えた
　天井裏には赤い風車が刺さっていた（弥七親ぶんか？）
～～～～～
　きゅうりの様な顔をした　怪物（きゅうじん）が入ってくる
「何事じゃ、今　大沢どのと戦略を立てておる所じゃ」
「はっ　それは分かっておりますが　今　デルク国と言う国の王女がタコ様に会見したいと　供を連れて巻いておりますが、いかがいたしましょう」
「構わん、通せ」
「ははーァ」
しばらくすると　海と言う家臣を連れて　竜宮城の乙姫様の様な衣装を着た
マオンが入ってきた
「海とやらっ、お主は何者だ」
と大沢は尋ねた

「私どもは　南蛮にある　デルクと言う小国から参った『ラーマォン』と言う者でございますが
この国を支配している　タコ様に是非　支援をお願いしたいと
国を代表して　姫と共に　やって参りました」
「南蛮から参られたとはそれは　大変だったであろう　のう　姫よ？」
「はい　私どもの国では早娘組（モーニング）と言う政党が長い間
首都　合弗（あいどる）を支配してきました
　ところが　政権も長く続けば　何処かに歪が出るのが人の常
最近はろくな政策（ひっと）もなく政権を支えてきた中心メンバーのほとんどは脱退し
実行力（ぱふぉーまんす）は低下（かこう）の一途をたどり　国民からの支持の多くは
　野党　亜鬼馬（あきば）組に流れ　国は混とんを極めているのです
　それでも一たび　政権を引き渡せば　太刀打ち出来ない事を知っている者（かんぶ）たちは
　国民そっちのけで　くだらぬ　論争を続けているのです
そこで　公明なるタコ様の噂を聞きつけた私は家臣の海を連れて
　支援に伺ったしだいでございます」
○回想
マオンとカイルは　お猿の加護屋に乗って
○タコ壺城前
「へいっ、付いたでガス、ではみなさん　ごきげんよう（ポワトリンかい？）」
『お猿の加護屋はエッサッサーの　すんエンサー♪』
と歌いながら村空と五条の2人は去って行った
「へーえここが噂のタコ壺城なの」
「さて　付いた良いけど　どうやって中に入る　しのぶ込むか」
「まゆゆさんじゃー無いんだからは無理だよ」
　その時向こう側から衣装屋（ふくや）がやってきた
「えー洋服はいかがですか？安くて丈夫な服はいかがですか」

「あのーマオン」
「何よ　なるー　あんたならどっかの隙間からは入れるでしょぉ？」
「そうじゃー無くて、２人ともお芝居やって見ない？」
「お芝居」
ナルーの意見に驚くカイルとマオンだった。」

??　闇の支配者？（後書き）

現在の絶望的な　政治の状況を『アイドルの政権交代』になぞって　作りました。
ナルーが立てた芝居に出てきた　ラーマォンと　マオンの関係は秘密

??.対決　まゆゆ対ザビア（前書き）

タコ壺城の外では　魔女ザビアと　美少女怪盗まゆゆの戦いがはじまる。

??対決　まゆゆ対ザビア

○タコ壺城
「それではマォン姫、ゆっくりくつろぐがよかろう」
『バーン』
そう言ってザビアは飾ってある黄金像の頭を回した
するととこが『バッ』と開きマオンとカイルは地下の穴に落っこちてしまった
『ウワ―ア』
『ザビア卿どうしてだぁ』
「どうしてかだと?、お前たちのへたくそな芝居は　あちこちに放ったスパイ蚊によって（蚊もスパイかよ?）とっくにばれておったのだよはっはっはっはっは」
「くそーばれていたのかァ」
「なーにが良い芝居な訳」
「いててて　痛いなる　うまくいくと思った　なるが」
「身内争いは　醜いものだなアッハッハ　大沢どの、今宵は人間（やつら）の刺身と言うのもまた一興かな」
「はっ、さようで」
とザビアと大沢は笑った
○夜9じ
「カイル、まだ壊せないの?」
「だめだ、電磁ナイフ位じゃーこの壁はびくともしないらしい」
「なるー、そっちは」
「こっちもだめなる、僕の霊力（パワー）じゃあ　通じないし空間移動も　何かにガードさせていて無理なる」
「モーう　じゃーどうするのよ私は、こんなとこで死ぬなんて御免だからね」

「うるせえなぁ　さっきから『ギャーギャア』喚いてないで
だったらお前が何とかしろよ」
「出来るものならやっているわよ」
「モーう、2人とも喧嘩している場合じゃないなる」
「ナルー、あんたのせいでしょうが？」
「あー　またそれを言う」
「相変わらず仲がよろしい　ガスね」
「その声は　アーモンド」
『ババババー』
と言う閃光と共に　マントをはおった　黒服の忍者が現れた
「あなたは繭太郎さん助かったぁ　でもどうしてここへ」
「目的は　あんたたちと同じだよ」
「マオン、私のマントに包まって、カイルは　後ね」
『シュン』
マオンと繭太郎は姿を消した
しばらくしてまた現れた繭太郎は　カイルとナルーを包むと
同じ事を繰り返した
カイル達はタコ壺城の外に出た、そこで待っていたマオンと合流した
「さてと、これからどうする」
「おそらく？」
繭太郎はカイルと目配せをした
「戦いだな」
そこにはザビアときゅうり軍団が迫っていた
「やはり現れたかぞネズミよ？」
「あらっ　待っててくれなんて　頼んだ覚え無いんだけど」
「ふっ、まずは　ご褒美としてこれをやろう」
『テヤー』
とタコの魔女は　波の様な物を後ろの足から『バッ』と出した
「これは　魔空玉（じくーな）なるね」
「ほーう　さすが妖精のはしくれ　知っていたか？」

「ナルーははしくれじゃないなる」
「そんなことどうでもいいからこれは何」
「ぶよぶよしている割には　壊れないぜ」
「魔空玉は魔人達を閉じ込めるための　ものなる、脱出は不可能なる」
「そう言う事だ」
『うわあああああ』
魔空玉の中は3億ボルトもの電流が流れていた
『ウォおおお　姐御ォもうダメでがす』
「あーちゃん、マオンさん　カイル　あきらめないで（CM風に）
そう言った　繭太郎の黒服が電圧で溶け、素顔が露呈した
「あっ、あなたは」
「生きていた　なるか？」
「こんな気分になれるって、僕はツイテいるねーってへへ、まゆゆだよ」
「やっぱりそうだったのかァああ・・だがどうして脱出するつもりだ、自慢の
マントも溶けちゃったじゃないか？」
「分かってる　救援を呼ぶのよ」
『マック・テクター　マック・テクター』
まゆゆの目が輝いた
○レシア
ブロッケン・ケイトによって深海に沈んだ残され島（らな）にある格納庫から
『バルーン・バルーン』と言うエンジン音が聞こえた　そして時空を超えたのだった
（ブラックのBGMで）
同タコ壺城　外
『ババババババ』
AKBのステッカーが貼られた　オートバイが時空から現れた
「なんだあのマシンは？」

『スパークリング・リング・アタック・エ―ケービーィ』
と言う電子音が聞こえ　高速でジクーナを打ち砕いた
『バーン・ズバーン』
後部座席から　ノースリーブの剣を出したまゆゆ
　マックテクター触れると　腰のマック・ストーンが反応し
一瞬で鎧(あぎと)を纏った姿に代わる
「マック・テクター、ゴー」
と　怪人たちに突進するまゆゆ
「オノレー様ザビア　此処は私がァ『ギアー』
魔人・カズノチカラに変化した大沢がマシンに向って行った
「数は力なりィ」
ドス黒い炎を全身から出す
「ファイナル・アタック・カチューシャーア」
マシンは銀色に輝いた　そして魔人・カズノチカラの黒い炎の壁を
次々にぶち抜いた
『アレーェ』
魔人・カズノチカラは　肥だめに落ち『ブクブクブク』と醜い醜態
をさらしながら沈んで行った
「自称正義の　美少女怪盗まゆゆ参上!彼方のハートをトロりんこ
しちゃうぞ」
オートバイを降り　お尻を『キュ』っと突き出すポーズをとるまゆ
ゆ、黄色いスカーフが風に靡く
「・・派手な怪盗」
「ホーンと?」
「行くよ　ノースリーブの剣　秘儀アカンベ切り」
トンデモ・コンパクトで増やしたダブルの剣でゼビアに切りつける
「覚悟ーォ、ハーアああ」
『ダーン』
だがザビアは　その剣を8つの足で防いだ
「くっ」

「フフッフッフ、お前たちを暗黒世界に案内してやろう?アンゴールドーォ」
呪文を唱えると　辺りは　真っ暗になった
「バカだね、トンボ・のメガネがあるから丸見えだよ」
『テヤー』
ジャンプ　空中でピースとウインクをし、お尻から突っ込む
「マジすかキイーィック―」
黄金のオムツが『青く』輝く
「ふっ」
ザビアがほくそ笑む
『ダーン』
「やったか」
「さあ、前が見えないし」
心配するカイルとマオンとナルーであった。

??? マオンの覚醒（前書き）

ザビアとまゆゆとの戦いの中　遂にマオンが覚醒する。

??　マオンの覚醒

同タコ壺城・外
暗闇が辺りを包む中　まゆゆは魔女ザビアに対して　マジすかキック（空中ヒップ・キック）を繰り出した
『ババババー』
ザビアの暗黒のエネルギーが行く手を阻む
だがそれを次々とお尻でぶち破るまゆゆ
『バーン・バーン・ズバーン』
「オノレーこ・む　すゥめええええ」
『ドカーン』
と　大爆発が起こり、アカンベーのポーズを決めるまゆゆとネズミのあーちゃん
「やったか？」
しばらくして闇は晴れ、　一瞬沈黙が走る
「どうやら終わった　みたいだな」
「ふーう　手ごわい相手だったなるー」
「って　ねえっ、あんた何もしてないじゃない？」
「そっそうだったなるね」
「ハハハハハハハ」と笑う一同
「さてとこれから・・・」
『ビーィィイイ』
上空から暗黒球（デス・サンダー）が皆を襲う
「うわあああああ」
「体中が・・壊れそうだよ」
「マオンさ・・ん　がんばってって・・」
そこにアメーバーの様な怪物が現れる
「ふはッはッはッはっは、まゆゆとやらお前が砕いたのは私の入れ物にすぎぬ」

「それがてめえの正体か？」
「本体に気ずかなかったのは、ちょっとだけまずっっちゃったかな
　それぃ」
たくさんのカードをゼビアの本体にぶつけるまゆゆ
「おっ手裏剣なるねさすが忍者」
「アハっ　違うの、持ち合わせが無かったんで　ＡＫＢのトレ―ディングカードだよ」
「ふざけるな―ぁ」
蛸（ざびぁ）の本体は巨大になり、その電撃パワーはますますアップした
「ウッワ―ぁ」
「これまでかーあ」
『ドバーン』
タコ壺通り一帯が一瞬で吹き飛んだ　後には重傷を負った
まゆゆ　カイル　ナル　アーモン　そして私がいた
「ふふふふふ、我が力はシスフィーナ様から頂いた　神の力だ
　あがなうは不可能、安心して死ぬがよい？」
「そんな訳・・には・・・行かないんだよね、私の両親は共にジャーナリストとして
いろんな者と戦っている　でも私は全く関心が無かった　何でそんなに一生懸命なのかが
分からなかったんだ　このままアイドル好きで適当に
暮らしていけば良いやって思っていた、友達も皆そうだし　私たちの時代は
それが普通だと思ってた　でもっ　違うんっだよね　思いっきり
生きたいって　こう言う
事なんだよね　死に直面して　真剣に生きるのも良いかなって・
　・・はじめて　そう思ったんだ？」
そう呟きながら『ヨロヨロ』っとマオンは立ちあがった　その眼は
白く輝き
　額には龍の紋章（せいれい）が現れた

「あれは・・まさか　精霊のあかし、マオンとやらお前は何者だっ」
「私は生きたいって願ってるものさ、カイルもまゆゆさんや　ナルーを
守りたいって思って言る、人間だーよ」
その時マオンの背中から　天使の翼が　出現した
「マオンお前・・は？」
「カイルさん」
カイルの目も光り、鷹の紋章が現れていた
「覚醒が始まった、やはり父さん　が言った通りなる」
「何者か知らぬが　ここでまとめて死ねー」
『会いたカッタァー』
『ダーン』
ノースリーブの剣先を飛ばすまゆゆ
『あはーん』
右目に刺さり、悶えるザビア
「・・あたしも戦うよマオン、カイルゥ」
肩がほとんど上がらないまゆゆが　必死に立ち上がるその　右胸はむきだしになって
血が滴り落ちていた
「まゆゆさん」
「あの禁断の呪文を使うしかない」
「よっし、みんなで戦おう」
「こざかしい事を　タコタコウェーブ」
タコスミがマオン達を襲う
『電光ノースリーブ』
刃先から7色の光を立つ
「ンオリミ・デチ二ョシ＝イッチャッタァー」
まゆゆは　レイア次元で魔道士リナに教わった呪文を唱えた
その時天空から　ＡＫＩＢＡ（アキバ）ドラゴンが現れ　光来となって剣に
吸収される

『うわあああああ』（マック・ストーン）に亀裂が入る
「行けェ最強技（みらくるあいどる）　フライーング・ゲェーストー」
『グゴーおおおおお』
7つの光が渦を巻き、それがザビアの黒い霧（かべ）を吹き飛ばした
『ドドドド・ズバーァァン』
「オノレーえ、小娘ども」
「今だよーお、カイル、マオン？」
「カイル」
「マオン」
とっさに抱き合う二人、その時　巨大な光がマオンとカイルを包み
その光がタコスミパワーを　押し返す
『オーノーレーィ、貴様達　この力は・・ラマォダの・・
「タコサン、イカサン　トッコロさん　バンザーィ」
と叫びゼビアは四散した
『ドバーン・ズバーン』
その爆発はタコ壺空間全体を包んだ
「うわーこりゃァ　大変でガス」
『ドドドドド』
「マオン、俺の手をはなすなァああ」
「そっそんな事言ったってェ」
『ドバーン・ズバーンドドドドー』
物凄い爆風で町や建物は　ことごとく吹き飛んだ
そして　まゆゆが気が付いた時　カイルとナルーとマオンの
姿は消えていたのだった
「　これで　ここも解放されたか　マオン　カイルいつかまた
どっかの次元で・・あお・うね」
そう言って　まゆゆは、生まれたまんまの姿で気を失った
「姐御・・まゆの姐御ォしっかりするでガス」
～～～～～～～～
○菜ノ国（ナスビ国）

私は遠い世界の何処か山奥に倒れていた
「あれ、私どうしてここにいるんだろう、ここは何処?」
そこへ2人の老人が通りかかる
「娘さんこんなところでどうしただね」
「それが分からないんです、何故ここにいるのか、名前さえも思い出せないの」
「それじゃーお困りじゃろお、私等は魁と言う小さな部落を開発に行く所
じゃが　よかったら一緒に来るかや」
親切そうなその言葉に、私は二人と一緒に行く事にした
「わしは妻のテツナ、こちらは夫のアシナゆうだ、お譲さん・はええっと
亡くなったわし等の娘にそっくりやでここではクシナ姫と名乗るがエエ」
おばあさんは笑ってそう言った
「えっクシナ?どっかで聞いたような」
私は　必死で考えていたのだった

??　マオンの覚醒（後書き）

クシナ姫伝説の始まりです。
『フライーング・ゲェーストー』は
真の戦士（ほんとうあいどる）のみが　使える
　最強技で　過去にこの技に成功したのは
女神、百恵（ももえる）とマドンナ聖子の２人のみ
早娘。（モー二一）たちは失敗し
『イナレウ・キゲ』空間に引き込まれ苦戦（ついらく）を
続けていると言う

キャラクター名鑑？ＡＫＩＢＩ（アキバ）ドラゴン（前書き）

今から数千年前にあった理想郷『ゼペット』
と　麗戦士（あいどる）界を救った
者達（あきばどーる）の物語。

キャラクター名鑑？ＡＫＩＢＩ（アキバ）ドラゴン

今をさかのぼる事　数千年も昔　現在の東京（にほん）に『ゼペット』と言う
理想郷があった、そこに住む人間たちは　男性は野戦士（だんすと）
女性は　麗戦士（あいどる）と呼ばれていた。
彼らは色とりどりの奇抜なファッションに身を固め、アギ・レスト
（後の秋葉原）に
首都ＴａＩａｎを築き優雅に暮らしていたと言う　しかしアギ・レ
スト歴０１年に
天空から１０の顔と獣のキバそして鷲の翼を持った　ダクブァーア
と言う強魔が操る
『デス・クライ』と言う異界人達が首都ゼペットを襲った、狩りで
生計を立てていた彼らの長（だんすと）　ベルクは『猫耳』『馬乗り』『野大子』と言った　６０
の部族を率いて
果敢戦ったのだが　鋼鉄の要塞『ゴ―ゴンのキバ』の前には　力及
ばず敗北していった
ベルクは　最後の頼みを　ゼペット人の神『ピノ・キオス』に委ねた
ピノ・キオス　は奇跡を現し　アキバルドと言う鉱山のふもとに眠
る３つの首に蝙蝠の翼を持った
伝説の龍『ＡＫＩＢＩドラゴン』の力を得（う）る事が出来れば
平和は訪れるだろうと言う神託を下した　さっそく屈強な野戦士（だんすと）達は
　龍の力を得ようと奮闘した　しかしその強大な精神エネルギーを
使える者など
居なかったのであった
ところが「そんな野戦士達には任せておけぬ」と女神ナモルと類人
アモの間に生まれた
モモエルと言う麗戦士（あいどる）がＡＫＩＢＩ（アキバ）ドラゴンの力を得ることに
成功し　その力を使ってダクブァーアを地下（だいおな）に追いやったのであった

以後　度々ダクブァーアの一部が復活する度に『キャンディす』『レピンク・れーり』
等と言った麗戦士達が不死の生命体であるダクブァーアを封印してきた
だがアギ・レスト歴２００３年再びデス・クライ人がダクブァーアの一部を復活させ
首都ＴａＩａｎに大攻勢をかけてきた、麗戦士達の王女聖子は
当時最強と歌われた『モーニング・ナイト』と言う複数人で構成される麗戦士達を送った
龍の力を使えるものは彼女以外はいないと思われていたからだ
しかしモーニングの戦士たちは龍の力に呑まれ
『イナレウ・キゲ』と言う空間を超高速で転げ落ちて行った
「このままではゼペットが滅びてしまう」そう言って王国の危機に立ちあがったのは
ＡＫＢドールと言う４８人で構成された
最下級の麗戦士達だった
「ダメだ　モーニングでも　扱えなかったのだから　お前たちでは龍の力はとうてい使えまい」
だがＡＫＢドール達の長たかみなは
こっそりとアキバルド鉱山に出かけた　そして見事にＡＫＩＢＩドラゴンの力を
使ってデス・クライと戦ったと言う、決して死ぬ事は無い不死の生命体ダクブァーアは
７つに引き裂かれた肉体（どっかで聞いたような？）を再構成し
完全体となって復活を遂げた
それに対してＡＫＢドール達は『あっちゃんの弓矢』『みーちゃんの怪しい香り』
『まゆゆのちゃんポコ蹴り』などの個人技で対抗した
そして『ヘビロテ』『カチューシャ』『フライングゲット』等の数々の必殺技

の連発し、ついに女神の盾の称号を手に入れ
ダクブァーアを倒したのである。
以後　彼女らは下級　麗戦士から超神麗戦士に
昇格し、麗戦士界の記録を塗り替えて行ったのだと言う
なお戦いに敗れた　モーニング・ナイト達はその位を最強から
転落の烙印に落とされ　上昇する事は無かったと言う？

キャラクター名鑑？ＡＫＩＢＩ（アキバ）ドラゴン（後書き）

トップだと思っていたら　そうでもなかった
また「とるにたらない」と　注目してなかったら者達が
意外とそうでもなかった　戦国時代もそうでしたが
人間（ぼくたち）は昔から『下剋上（じょうげのぎゃくてん）』
が　好きみたいである　今や？１歌手（あいどる）となった
　ＡＫＢ４８や　下降（てんらく）アイドルの象徴（だいひょう）
となったモーニング娘。を見ても　それは明らかであるようだ。
モー娘。達にはもう一度　頑張って（うれて）ほしいが
絶対（やっぱり）　駄目（うれない）だろうな。

??　2人の供（前書き）

遥か遠い世界で　クシナとなった
マオンは奇妙な二人と出会う。」

??　2人の供

（1）世界の始まり
「そこには何もなかった　ただ霞みのような物が辺りを漂っておった
その状態がしばらく続いた後　美創生の女神オルディナスが何もない空間から
光を放ちながら現れた　女神は懐から何かの実を取り出すと宇宙に振り撒いた
するとその実がだんだん大きくなってやがてたくさんの星が生まれた
そのたくさんの星の一つがこの菜ノ国（ナスビ国）となった
「その後　神々はトウモロコシとナスビの実を捏ねてわし等黒い種族を作った
（この時妖精も作ったらしい）その最初の世代の人間がわしらと言う訳じゃよ」
おばあさんはマオンに菜の国の創世神話を語った
「だがなこの世界にはまだ国の骨格は出来とらん、だからオイとおばあとで住み所さ作ろう
言うことになったんじゃ」とこれはおじいさんです。
私は魁と言う未開の地を目指して歩きながら
「私もお2人の村づくりを是非手伝わせてください、だって娘なんですもん」
と言ったら2人は「うん」と頷いただけでしたがその顔は微笑んでいたのだった
（2）なげきのやっさん
私達が歩いているといかにもみずぼらしいかっこをした2つ顔があるカエルが
「皆様方聞いてオクレましゃ、わすは伊代の沼から来た〔なげきのやっさん〕でましゃ
生まれてこの方良い事が無いでましゃ、

それを哀れと思ったらどうぞオメグミが欲しいでましゃ」
と赤緑のいかにも、みずぼらしいナゲクので　わたしは
「一帯何がどうついてない訳、それを説明してよ」と問うた
「それが分からないから嘆いている　でましゃ」やっさんはあいかわらず嘆いていた
「それじゃあなたも私達と一緒に魁の国に行って一緒に村を作らない？」
「それはメンドウで　ましゃ　が、手伝ってやらない事もないでましゃ」
「そう、じゃー来たければ勝手について来れば？」
私はそっけなくあしらって　先(たび)を急いだ
なげきのやっさんは私達の後をついて来ているみたいだったが、私たちは放っておいた

（3）悪戯鬼のン・ゴロロ
私たちは　まゆゆ川と言う　川のほとりを歩いていると向こうの山の方から
「おーいたすけてやるドー」と言う声がした
テツナおばあさんは「なんじゃあのへんてこりんの声は」と尋ねたので
私は「3人共ここで待っていて、様子を見てくるから」と言い残して山の方に向った
　すると目の前にはオカカ山と言う大きな山が見えてきたので少し近づいて見ると
中から「たすけてやるドーたすけてやるドー」と声がだんだん近くなった
私はこの辺に違いないと見当をつけ周りを探していたら入口のような物が見えた
　恐る恐る中に入って行ったら、そこには頭に角が一本しかない3メートル位の子鬼?が

岩の中から顔を出して「そこのおねえちゃんタスケテやるドー」と吠えていた
「うるさいわね　それ逆でしょ」そう言った私は　その鬼に事情を尋ねた
「オイラは西鬼殿と言う鬼御殿をに住んでいたン・ゴロロ言うらが「、あまり悪戯がすぎたもんやからオババ（ララヴェラヴィ）様にこのおカカ山に閉じ込められた　のら」
「それは自業自得ね、もう少し反省してなさい」
「それこまるら、もう3百年も　閉じ込められてる　のら、もう反省してる　らで助けて欲しいのら」
鬼っ子は『ペコリ』と頭を下げた
「そんなこと言ったって私にはどうしてよいのかからないわよ、鍵か呪文かないの」
「そんな物があったらとっくに脱出してるら」
「ごめん、じゃーいったいどうすればよいの」と聞くと　ン・ゴロロはクリクリの目を
「それ簡単らおねえちゃんがおいらに手を翳しそれがお目当ての人だったら自然と出られるら」
クリクリの目をますますクリクリさせてン・ゴロロ言った
「じゃーもし出られなかっても恨まないでね」
そう言って　ン・ゴロロに手を翳した瞬間、お互いの手と手が光り周りの岩が『ガガーン』と崩れた
悪戯鬼のン・ゴロロ君が「お姉ちゃんありがとうら」と出てきた
「良かったわね、もう悪戯しちゃーだめだよ」
私はン・ゴロロに手を振ると　おばあさん達の所へ帰って事情を話した
「鬼の子か？わしもあってみたかったのう」
「でも　変な鬼だったよ？」

私たちは笑った
ン・ゴロロは後を追いかけて来てた　みたいだったけど
「私はまっいっかっ」て先を急いだのだった。

??　2人の供（後書き）

ン・ゴロロの数々の悪戯
?子鬼（女）のお尻や胸タッチなど（うらやましい）
?禁断の園で　女神（せいこ）を強姦
《女神は妊娠中はお腹ではなく胸が大きくなる）
?コリン島に住む女神（ゆうこりん）が持つ　女神の盾（ゆりしーずのたて）を
神殿から盗み出し人間（だもーら）に与えた
　その為にアトラントは未曽有の災害に見舞われた
等など　多数の犯罪歴がある

キャラクター名鑑？北斗みなみ&南優子（前書き）

歌って踊れるアイドルを目指していた少女達は
怪獣の出現（まぐろせいじん）によって　戦う宿命を負う
みなみと優子のプロフィール。

キャラクター名鑑？北斗みなみ＆南優子

○北斗みなみのプロフィール
本名：北斗みなみ
あだ名：たかみな
趣味・ダジャレ《仲間（めんばー）には不評と言う声も》
特技：フェンシング全国大会優勝の腕前を持つ
《ラマォダの子孫は剣が得意なのだ》
なお双子の妹が『高橋トマト』と言う芸名で
ＡＫＢクラブと言うアイドルグループに存在する
出身：東京
基本の姿ウサギ（こすぷれ）　他にペンギンなどいろいろな着ぐるみを使い分ける
『秋葉原にあるＡＫＢ学園（後に大阪のＳＫＢ学園と統合）を首席で卒業
扇と言う子供プロダクションに属していて、歌って踊れる歌手を目指し
その資金を稼ぐためヒーローショー（オーディションの）に参加していた
正義を意味するルビーのカードを纏い　コスプレ仮面・ルビーとなって戦った
ダイヤモンド・ソードを操る』

○南優子のプロフィール
本名：南優子
あだ名：ゆうこ
趣味：不思議グッズ集め《　女神のおへそ、天使のオムツなどがある》
出身：栃木県
基本の姿：タヌキ《タヌキに似ていると言う説もある》
特技：プロレス
《父が家族を巻き込んでのプロレス好きだったため、本人も大抵の

プロレス技を使える
様になった、一番の必殺技は　ギュードーン2号にも放った『チャンタマ蹴り』である
同じく子役プロダクション大二田に属し歌手を目指していたところをコスプレ星人として生まれ変わる》
『太陽を意味するユリシーズのカードを纏い、コスプレ仮面・ユリシーズとなって戦った
判断が早いみなみに比べてワンテンポ遅れているが　いざとなれば
　みなみ以上の
行動力を見せる、ユリシーズの盾を操る」
また　太陽と頬笑みの女神ゆうこりんの生まれ変わりらしい。
共に
水陸常用で　頭部から　ドリルを出し地中も潜れる　ＥＲＩＫＡモグラン号や
気球メカ　アッカンベ猫を操縦する。
なおＡＳＫ（あーすきーぱー）は自衛隊や政府の上に位置するがメンバーは
エリカ隊長（位は大元帥？）を除いて位（ちい）は警察（警部以下）や自衛隊より少し上くらい

キャラクター名鑑？北斗みなみ&南優子（後書き）

警視総監や首相の権限を超えて命令を行使できるのは
沢乃エリカ様のみ（さすがエリカ様？）

????　クシナ村の誕生（前書き）

マオン達は遂にクシナ村を完成させた。

？？？　クシナ村の誕生

（４）食物の種
その晩私達は魁ノ国の手前にあるコケ洞窟で一夜を過ごすことにした
私はアシナおじいさんやテツナおばあさんやその他(ごめん)に
「じゃーみなさんおやすみささい」と声をかけて眠りについた
それからどれ位たったのか私の目の前に美しい女神様が現れて
「ついにここまで来ましたねマオン」
　「どうして私のこと知っているの？」
「ここにあるのは植物の種です、魁の村についたら彼方が撒きなさい
　そしてたくさんの木々を実らせ村を繁栄させなさい」
と言ってその実を袋ごと渡した
翌朝そのことをテツナおばあさんに話したら
「それはきっと、ラホメル・モァーラ様に違いない」
　私は「ああ、例の神話に出てくる大地と作物の神様ね」と頷いた
目指す魁ノ国まで後一歩だった。
（５）クシナ村の誕生
長い旅を終えたクシナ姫(マオン)一向は
遂に魁と言う未開の地についた
彼等は設計士だったと言うアシナおじいさんの指導の元で理想の村作りを始めた
クシナは女神から貰った種を撒きそれは見る見る成長し美しい木や花々となった
雷神族のン・ゴロロは得意のイナリ太鼓を叩き雨を呼んだ、最初は５人だった村作りも
やがて６人７人と増えいつの間にか２０人にもなっていた
こうして村作りを初めて７年目にようやく
私達の小さな村は完成したの、テツナおばあさんは皆が力をあわせて作ったその村を

【クシナ村】
と名づけその証として石職人だった【なげきのやっさん】
にクシナ姫（私？）の像を作らせました。
無口なアシナおじいさんの代わりにおばあさんのテツナが初代村長
に選ばれ
クシナ村は何事もなく繁栄していった
でもその平和はまもなく起こる大事件の前ぶれでしかなかったのです

？？？　クシナ村の誕生（後書き）

クシナ村に『スギタ』と言う美しい女性がやってきた
ある日彼女は　浜辺で子供たちに虐められているタコを助けた
次回『こうして闇は広がった』

キャラクター名鑑？ＡＫＢクラブ４８（前書き）

カバナイの世界にはパラレルの人物が良く登場する
中でもＡＫＢクラブはその頂点に立つグループである

キャラクター名鑑？ＡＫＢクラブ４８

コスプレ仮面に　高橋トマトの所属するグループとして語られる、
このユニットは
元々歌舞伎役者秋元安清（性別・年齢不明）が２００５年に
『会いに行けるアイドル』として作った
アイドルグループで　チームはＡ　Ｋ　Ｂ　と別れ　総勢６０名に
もなる
メンバーたちはそれぞれ別のプロダクションに属していてＡチーム
のリーダ　である
トマトの『お尻パンパン』の合図で、何処からっともなく
『エーイ、ケーィ・ビーィ』とホラ貝を吹きあい（ホラ貝かよ？）
集まってくる。
長年　バーニング・ブロス（旧モーニング少女隊）をライバル視し
てきたが
恋愛問題、オムツで喫煙など　事務所との確執があったリーダーの
　本郷菜穂の卒業や加号愛菜（かごうまな）の脱退（事実上の解雇）等をを機に
失墜（ついらく）し始めたバーニングを尻目に『ヘビロコ・テンション』『僕チ
ューシャ』
『フライアング・ネッド』等ミリオンを連発し
アリさん・コンピューター社が　実施したランキング誌『アリコン』
で
シングル通産１位獲得数　シングル連続１位獲得数　シングル総売
り上げ等で
バーニング・ブロスを抜き女性グループの頂点に立つ　また『上を
向いてアッカンベェ』
が全米（びるぼーど）で１位に輝きＣＭ契約数は数えようがない
ＡＫＢ毎年放送が実施するトッコロテンの音楽番組『歌ってこらえ
て』で見事

『レコード大賞』に輝く　現在　有線大賞との　連続記録を更新中である。

なお『バーニング・ブロス』はＪＡＵ（じゃぱんちなのくらぶ）通称（じゃっく）ＪＡＣ放送が年末に放映している　『紅白歌って踊ってチンカラ・ポン』に3年連続で『売れない歌手枠』で出演中である

また所属の『トップ・フロント』は　スーパー・エースの安倍千夏が安倍おむつの芸名でＡ？出演すると発表した。

キャラクター名鑑？ＡＫＢクラブ４８（後書き）

売れない歌手枠は『オネえシスターズ』のエア演奏とあややジャパンの『ポイポイポイポイピィ』と言う訳えのわかんない演奏に合わせて『人気をください』と言う襷が掛けられ
おもちゃのマイクとパンパース姿で　歌うと言う屈辱（ぺなるてぃ）が与えられると言う（復活を促すためらしいのだけど？）
まったく同情するぜ（@＿@）

番外編　ＲＩＶＥＲ計画（前書き）

コスプレ仮面に登場した
ＲＩＶＥＲにまつわる事実

番外編　ＲＩＶＥＲ計画

ＲＩＶＥＲ計画　は１９６１年にカリフォルニアの　科学者ハーディスト・シュワルツ・ネッガー博士が
ＳＦ雑誌『ジンルイ・ドゥメイ』の中で
「この先　人類には異星人の襲来に備え「宇宙船の機能を持ったの監視衛星」が必要だ」と語った
１９７０年に入ると　ＮＡＳＡ（あめりか）と主な同盟国が参加し正式に計画がスタートした
そして　数々の失敗を繰り返した後西暦１９９０年に
日本（まち）の発明家として知られていた　山口井立５０（いたち）が基本設計図を作った
　もっとも彼は病気で志半ばで亡くなったため
一番弟子の山寺と真夏　それに井立の遺児真理子を中心に
沢乃エリカとアンジェイラ敦子らと言った　若きエンジニアたちも加わり
遂に１９９９年に完成を見る
ＡＫＢエンジンで活動しロシアの『ロー丸社』と日本の『超神（げきどる）』社が共同開発した
　ヘビロテ合金『ダイアモンドの４８億倍』で装甲を固め　マッハ４８次元キロで宇宙を飛ぶ
事が出来る　頭部には『小惑星』を粉みじんにする　ゼノン砲を２門装備している
また敦子（あっちゃん）が乗る　宇宙を光のスピードで突っ走るバイク
　『デビッド・ネッガー』を搭載している
　チーフは作戦参謀だった真夏達也が務める
　大きさは東京ドームの１０分の一程度　そして乗り組員は敦子以下２０数名であるらしい
なお巡業員はみな　敦子考案の　朝の　尻振り体操

『お尻ふりふり　おならブリブリ　お胸モミモミ　よっこらんど
ホイっ』を踊のが決まりだと言う
みな万能オムツ『パンパラン』を履いて作業しているらしい。

？？？こうして闇は広がった（前書き）

クシナ村にスギタと言う　美しい女性がやってきた
だがそれは　人間界に『欲望』が放たれる
前兆であったのです。

？？？こうして闇は広がった

ある日クシナ村にスギタと言う大変美しい
女性がやってきた　最初村の皆はその怪しげな魅力を警戒しているようでしたが
その優しい心根を知ってからは　村の者たちは全員うちとけるようになっていった
ある朝スギタは海草を採りに浜辺へ行った時ちょうど子供達がタコをいじめている所に出くわした
「そんなことしちゃーかわいそうよ」と言って注意すると
子供達は『ダッー』と逃げて行った
「タコさん、もう大丈夫よお家にお帰り」
すると　そのタコは
「お嬢様わたくしをお助けいただいて感謝いたします」
「タコさんあなた喋れるの？」
「申し送れました　わたくしは　北の海からやってきた
　タコのネコ吉ともうします」
「えっ、タコのネコさん？」
「つきましては、お助けいただいたお礼にお嬢様を
【海底都市マリン・ゾーラ】に招待いたします】
ネコ吉はそう告げると、体を巨大化し　スギタを頭に乗せ海の中に入って行った。
〇海底都市マリン・ゾーラ
タコの頭は意外と乗り心地が良かった　スギタとネコ吉はオルデナ湖をさらにおく深く潜って行った、そしたらしばらくして目の前の立派な御殿が目に写った
「あれはわたし達の故郷マリン・ゾーラです」とネコ吉は説明したみんなが知っている竜宮城は中国風だけど、そこはイメージどおりだった

そこでは、バッタのお姫様がたくさんの侍女（鯛やヒラメ）を従えて待っていた
「ネコ吉を助けていただいて感謝します、わたしはイナゴと言って海飛蝗（あくあほっぱー）
族の女王で　この海底都市マリン・ゾーラをマイト神様よりお預かりしている者でございます
その日　マリン・ゾーラ　の首都『パンパース』ではスギタの歓迎会が盛大に行われた
「えーワテは　タツノオトシゴの　チママ　申しやす、そして隣にいるのが？」
「ハーイ　アルバイトで相棒をしてる　美しき　人魚（おとめ）
　レターナでおます　ではスギタ様の感激代わりに歌を一曲」
『勉強しまっせ　引越しの人魚♪』
レターナの歌と　チママが弾く口（くち）三味線に合わせ、色とりどりのお魚が
『ポイ・ポイ・ポイ・ポイ・ポ　ポイ・ポイ・ポイ・ポ　ピィー』と踊り
『ほんまかでっか・あんた出っ歯、あっちゃん・ホーイ♪』とレターナが続ける
（懐かしいぞ？）
その後もマリン・ゾーラ内では五基現用（ごきげんよう）の歌謡ショーや鯛やヒラメの舞踊り等などが延々と一年も続いたので、スギタはとうとう
「あのうイナゴ姫さま、そろそろお家に帰りたいのですが？」と切りだした
「帰る　とんでもない　私のお礼こんな物じゃー物足りない
　もっとたくさんお礼っをさせてください」
「お姫様ここまでしていただいてありがたく思います　ですが私には帰りを待ってくださっている仲間がいるのでございます、どうか私を帰していただきたいのです」
「それじゃー仕方ありません、名残惜しいのですが・・」

スギタの熱心さにイナゴ姫も　渋々帰国を認めるしかなかった。
そして帰国する時イナゴ姫が小さい瓶を持って現れた
「これはこの国に来た証の品です　棚にでも飾っておいてください
でも決して中を開けてはいけません、良いですね約束しましたよ」
と言って小瓶を渡した
〇クシナ村
スギタは再びタコの頭に乗ってクシナ村に戻ってきた
「それではネコ吉さんお元気で」
「お嬢さんもいつまでも御達者で」
タコのネコ吉は名残惜しそうに深海へ帰って行った　スギタは最初は
イナゴ姫の言いつけを守り　箱を棚に飾っておいた
しかし「開けてはいけません」と言われれば　開けたくなるのが
人間の常
中に何が入っているのが何なのか　どうしても知りたくなり
「ちょっこっとのぞくだけなら　良いでしょ？」
と、棚から卸してそっと中を開いた　そしたらその中から黒い霧
が吹き出て
『言い訳』『開き直り』『誤魔化し』『あっちゃんの香り』『みー
ちゃんの写真』
等　ありとあらゆる『欲望？』が噴き出した《みーちゃんの写真は
ほしいぞ（●＾o＾●）》
それがクシナ村を初め菜ノ国全てに散らばって行ったのです
スギタが急いで蓋を閉じた　瓶の中には　唯一『希望の唄（だれかのために）』が残
った
そして　スギタの前に女神オルディナスが現れて
「スギタよおまえが今開いたのは欲望の瓶（はこ）だ　おまえが言いつけど
おり
箱を開けなければ　欲望は下界に放たれることはなかった、
これからはどんな誘惑や困難にもおまえたち　人間の知恵と勇気で
立ち向かいなさい」

女神はそう告げると消えていった
そのとき　スギタは誘惑に負け、瓶を開けた事を後悔し
「どうか人間界に災いが起こりませんように」
（そうなった時、私に何が出来るのだろうか？）
と　呟き　願いを込めて希望の唄(だれかのために)を歌った

『神様は人々のその背中　いつでも見てると聞かされた
そう　どこの誰にでも平等に　愛を与える
私が生まれた日から　今日まで
日差しのような　そのぬくもり
やさしく　包まれてた
誰かのために　人は生きてる
私に何が　できるのでしょう？・・・♪』

こうして人間界には　今も様々や欲望が　渦巻いていると言うお話しでした。

????こうして闇は広がった（後書き）

ギリシア神話の『パンドラの箱』がモチーフです
そして　誰かのためには　この作品にピッタリの曲なので
掲載させてもらいました。

？？？　現れた二人（修正・完全版）（前書き）

ある宇宙では　魔女ザザーラが率いるマリバロス軍団と
アストロ・サーク率いる正規軍とが　戦いを繰り広げていた

？？？　現れた二人（修正・完全版）

○ある宇宙空間
『バチ、バチバチッ』激しく火花が飛び散った、ここはかつての海（ら）洋惑星（んだりま）
のあった所　現在はガウト神の要塞となったデス・ブライ星だった。
今ガウトの命（めい）をうけた魔女ザザーラの魔女軍（まりばろす）団率いる
黄金要塞『ザブングル』と、ジルブライの英雄アストロ・サーク率
いる正規軍との
凄まじい戦いが続いていた
「我が名はアポロチェン、世界征服と言う野望を達成するまでは何
度でも蘇る
　迷惑なそんだいなのだ」
「いくよ、くいーん」
「オーケイ、エリザペス」
「へん・しん」
『くいーん、エリザペス・ローテーション』
「変身完了　さあ　アポロチェンよ　てめえの罪を数えな」
ジル・ブライの女戦士（にゅーだぶる）NWの桃色のパンティが風に靡く
「何をちょこざいな　これでも喰らえーぃ」
アポロ・ブーメランを飛ばす
向こうでは　渡り廊下電撃隊が　カルガモ怪人と子ガモ軍と戦って
いた
「スペードのM（まゆゆ）ダイヤのH（はるごん）　ハートのL（らぶたん）
クローバーのA（あやりん）、われら渡り廊下・電撃隊
「なんのォ　かかれぃ子ガモたちぃ」
『ブーゥ、ブゥブゥ』（仔豚の間違いでは？）
「真っ赤に燃える正義の血潮、悪人を裁く鉄の鞭　まゆゆビュート
『パチン・パシン・パシーン』

『おおおまゆゆさま、もっとぶってブゥゥ』
「赤いパンテぃが唸りを上げりゃはるごんの怒りが渦を巻くメイヴィー・ソード渡り切り」
『ブブブブブ―ぅ』
「天が呼ぶ手が呼ぶ人が呼ぶ、悪を倒せとあやりんを呼ぶクローバー・エレキ・ファイアー」
『うわーこりゃあ堪らんブゥゥ』
「愛いある限り戦いましょう、らぶたんがある限りらぶたんのおならぁ」
『プップク・ぷゥゥ』
『うおおおおには感動したあ、もっとくださいブーゥ」（あんたらあほか？）」
「オノレィカルガモスパークを喰らえ」」
『ダーン』
落雷が　矢になって　電撃隊の４人を襲う
「うわあああ、こうなったら　アッカンベ・ボンバーよ」
「アッカンベェボンバー」
全員で叫ぶ
「セットワンあやりん行きます」
「セットツウはるごんいくよ」
「そしてセットスリー、まゆ行きます」
「なっちゃーん」
「アッカンベーえ」
と　アカンベェをしてＮのマークの付いた犬のコスプレをしてビックＮこと　なっちゃんが現れた
アッカンベ・ボンバーとは　メンバーが速攻で大砲を作り上げそれを電撃隊の行動隊長
なっちゃんがセットすると言う必殺武器であった
「いくぞ、サプライズ　セットフォー　渡り廊下必殺武器」
「アッカンベ・ボンバー」

声を合わせて叫ぶ渡り廊下の４人（あれっ、今はもっといたっけ？）
だが　ボンバーはカルガモ　バリアの前には通じなかった
「アカンベ・ボンバーが聞かない」
「フはッはッはは、どうやらネタが尽きたようだな」
「みんなぁ待たせたね」
らぶたんが新メンバーを連れてきた
「ローズのＷ（わさみん）ルビーのＫ（こもりん）
「よっし、みんなで渡り廊下・ハリケーンよ」
なっちゃんが言った
「渡り廊下ハリケーン　いいわね行くわよはるごん」
「まかせよ、あやりーん」
「オーライ　こもりん」
「わさみ～ん」
らぶたんは」それぞれ風船ボールを7人で回しあった
「ダーッ、なっちゃん　渡り廊下トライだ」
「おっケイ　らぶたん　渡り廊下ハリケーン　ウシロガミ　フライングゲえっド！」
風船ボールは『眼と眼で通じあう　確かに色っぽい』
と歌いながらカルガモ怪人に直撃した
『ズバババババー』
『うおおお、こうなればお前たちも道連れじゃぁ』
カルガモは臭いガスを撒き散らし　電撃隊を道連れに自爆した
『ドバーン』
付近の星『シータ』ではＡチームのリーダー
　たかなみと戦士ケントが　サターン性の怪物イカデ・コーラと戦っていた
「たかみなっ、これを使え」
電子人間への変身を可能にする薄赤いメダルをみなに渡す
「これは　タラコのメダルだ、よっし、　行くよ　メダル　イーン」
スリブ人が作り上げた　ベルトのＡＫＢリングにメダルをチャージ

させる
『タ・ラ・コ・タ・ラ・コ・タ・ラ・コ』（オーズの感じで♪）
だがそこにはマリバロス軍団の４幹部の一人尻神博士が待ち受けていた
「電子人間タック登場、尻神博士　イカデ・コーラは？」
「お前の眼の前じゃ」
博士か　するめイカと　コーラを出して叫ぶ
「イカデ・コーラーァ」
イカの怪物に変身した
「するめイカ　攻撃」
怪物は　高速でたかみなの胸やお尻を集中的に攻撃した
『バーン・バーン』
「くそーこれでもくれえ、昭和オタク弾　発射ァ」
『ビビビビビビィー』
「邪魔だァ」
『バリバリバリぃ』
凄まじい電撥がケントを貫き　右腕のみを残して吹き飛んだ
「うわーあ」
「ケントー」
「娘、嘆いている暇はないぞ」
『バーン、バーン』
攻撃するたびに　セクハラを繰り返す怪物
「まずい　このままではやられる（別の意味でも）
今の私が　やつを倒す方法は・・」
その時、ケントの　右腕が　現れた
「みなっ、これを使え」
そう言って３つのメダルを投げた
それは　スリブ人最高の　帝王（メイビィーのメダルだった）
「メイビィーメダル　チャージ」
『エー・ケィ・ービィー』（劇場の雰囲気で）

「スーパータック、ケンザーン」
たかみなは両胸の　サプライズ・ブラを揉み始めた
『ウイーンウイーン』
と機械音が聞こえ、『イカサンタコサン　ヨットイデ』音波を流す
その音波に誘われるいか怪人
「だめだァ抵抗できないで　イーカ」
「いまだ　言い訳・サイクローン』
たかみなはイカデ・コーラに電磁エネルギーを注入した
それは体内の全エネルギーを放出する危険な技だった
『ドカーン』
大爆発をするイカ怪人
「やったよ、ケント・・」
だがエネルギーを使い果たした　たかみなも　力尽きて倒れる
それを　同僚の戦士ケントが右腕が受け止める
「ばか　何故こんな事をしたんだ、何ももろ刃の剣を使わなくても？」
　ケントには内緒だったが　たかみなは「可愛い子病に侵されていたのだった」
「巧　いつか平和になったら旅に　連れてってくれるって　言ってたね
でも・・　お別れだよ　真理さんに　よ・ろ・し・・くね・・」
それが　電子人間タックこと　たかみなの最後の言葉だった
「みなーぁ　ウォーおおおお、変身」
巧はみなの体を取り込み　狼（うるふ）オルフェックに変身した
「行くぞ、たかみな・・旅に出ような？」
　そして、敵の要塞　『ザブングル』に体当たりしていった
『ドカーン・ピカッ』
大爆発が起こった
一方　NWはアポロチェンのブーメランを必死でかわしていた
「アポロ・ブーメラン」

『ヒュルヒュルヒュル』
どうした避けているだけでは　わたしに勝てぬぞ」
「よっし　こうなったら」
ベルトの　ＡＫＢリングをエネルギーを集める
「ダブル・ともちーん　ヘビロテ・キッーク」
摩擦で２人のパンティーが赤く光る
『ピカー』
アポロチェンは両手を後ろに回し、異次元の壁で防ぐ
それをぶち抜きながら　ＮＷのキックが決まる
『ズバ・ズバ・ズバーン』
「オノレー　ＮＷ　死なば　もろともよ　納谷さんバンザーィ」
『ドカーン・ドバーン』
「ウワ―ァ」
「くいーん」
「エリザペスーゥ」
最後に２人のともみは互いに抱擁しあった
　正規軍のほとんどを道連れにして　アポロチェンは消滅した
　後には　桃色のパンティーとプロテクトの一部と　握手権が数枚
漂っていた
「アストロサークよ、ここまで戦った事ほめてやろう
だがわらわと戦う前にこの者たちと戦ってもらおう」
そこにはザザーラがさまざまな世界から連れてきた　怪物がいた
秘密結社　ショーカスの幹部ゾルゲ大佐、ゲルショーカスの指導者
ヒル・レーザー
フローレス星の魔女巨乳聖子、魔人星団デルドの王ザ・シャドー
ナンノ雲の怪物スケ番のエル　ゴッド星系の巨人　キング・オタク
ハッチの国から連れて来た　蜜蜂女
そして　究極の闇星団からの使者　ザ・バル・モア
「ハッハッハッハッハ、サークヨ　お前の運もこれまでだな　ヤレ
―」

『ババババババー』
アストロ・サークに　一斉にビームを浴びせる怪物たち
「ウォおおおお!、オノレィ　魔女ザザーラよ、たしかにお前は
我らスリブ人を打ち負かした
しかし我らはまだ　敗れたわけではない　この宇宙に正義がある限り必ずや
　奇跡が起こり　お前たちを打ち負かすだろう」（あれっ、どっかで聞いたようなセリフだぞ?）
「サークよ、今一度問う　ガウト様に降伏し王女カディナ・ブライの居所を教えるのだ」
さすれば　貴様の命は　保証しよう」
「言うな　魔女よ　私一人残ったとて　しかたがない」
攻撃を受けながらも　サークは戦いをやめなかった　いや辞められなかったのだ
　死んでいった多くの同士達の為に・・
「者ども辞めい、とどめはわらわがさしてやろう」
『ゴルゴ～ダ・アンゴーラ・ウラウラ・ベッカンコォー（懐かしいな?）
『ダバッ』
聖剣セルマーダが次々と魔女達を粉砕して行く、しかしさしものサークも
ザザーラの暗黒ガスを喰らい　サークは　地上に落下して行ったのだった。
『ガガーン・ゴロゴロ。ピカピカッ』
『あああああ』
○魁ノ国オカカ村
「どうやらここも静かなようだな」
とナルーを肩に乗せたカイルが言った
「さっきからーマオンどころか誰にもあってない　なる、もう疲れた　なる」

2人はマオンとは違う時間にとばされていたのだが、それを知るすべはなかった
その時「ウオー」と言う声と共に頭上から戦士が降って来た
「なんだァ」「どうした　なる」
2人は同時に声を上げた
見ると銀の鎧を着た戦士が倒れていた
カイルが「こいつ、どっかで会ったことねーか？」
「牢獄であったおじいさんに少し似ている　なる」
「そっか、どおりで」
カイルは戦士に事情を聞こうとした　しかし
「・・もう無理　なる、死んだ　なる」
ナルーは哀しげに告げた
2人はその戦士を埋葬すると
「この剣、スッゲーカッコイイじゃねーか　貰っとこう」
「それは泥棒　なる　それにこの剣は神の国で見た剣にそっくりなるよ」
「じゃーおまえはこいつは神か　何かだって言うのか？俺にはとてもそうは見えねーな」
「それはきっと事情がある　なるよ」
「とにかくひとっこひとり居ないこの世界は　なんかミョーだとにかくこいつは貰っとくぜ」
とカイルは戦士の剣を引き抜いた
その時剣に青い宝珠が現れカイル自身と共鳴した
「やはりこの少年は　父さんが言っていた　勇者の血を引く者　なるか」
ナルーは小声で呟いたが、カイルは気づかなかった。
その時　「もし　セルゲイアの剣を持つ戦士様、　彼方が本当の勇者であるなら
どうか娘のクシナをお助けください」
とあるお婆さんが2人に近寄ってきた

「へっ、セルゲイアの剣？これがか　あ」
と2人は唖然としていたのだった。

？？？　現れた二人（修正・完全版）（後書き）

『渡り廊下電撃隊』の戦いの部分を修正しました。

キャラクター名鑑？アストロ・サークとジルブライ正規軍（修正版）（前書き）

アストロ・サークが率いる　正規軍　の戦士達（はいどら）を紹介

キャラクター名鑑?アストロ・サークとジルブライ正規軍（修正版）

４８宇宙次元にある星『ランダリマ』太陽ハーネストを中心に
第一惑星『シータ』第２惑星『ヘルス』第３惑星「アリス」と
３つの星を活用しながら平和が保たれていた　宇宙創世暦８年
ガロスを傀儡にして暗黒の魔女ザザーラーが魔女軍団（マリバロス）
軍団を率いて異世界から現れた
以後　ヘルスの戦闘民族だったスリブ人の酋長アストロ・サーク
（デストのルビアナ・サークの祖先）率いる正規軍《スリブ語でハイドラ》
達との数百年にわたる戦いが始まったのである。

○ケント・ルーク王
『第一惑星シータに「アルディーナ・愛の女神」と言う王宮に住んでいる
　ランダリマの王で不死の生物オルフェク人の真理との間に巧を設ける』
○ユリア・真理
『第３惑星アリスに住む不死の生物　オルフェック人の王妃だったが　自らの運命を変えるため
家来だったワタルと駆け落ち　だが追っ手によって　ワタルは殺害され、自らも重傷を負い
ヘルス川を漂っているところをルーク王に助けられた』
○アストロ・サーク
『第２惑星ヘルスの戦闘民族　ハイドラの酋長　この４８太陽系が
　魔女軍団（マリバロス）
に　侵略を受けた事を知って９２の部族率いて　ルーク王の元に駆け付けた（にゅうだぶる）』
○戦士ＮＷ

『スリブ人の祖先ウシロガミ人たちが作りだした　ＡＫＢリングと言うベルトを
使って戦う　兄弟の戦士　エリザペスと、くいーんの２人が《ともみの怪しい噂》
《ともちんのアヒル口の謎》をそれぞれ記録（ふういん）したメモリーを差し込み変身する
必殺技は一瞬パンティーが消える？必殺技ヘビロテ　キックである』
○電子人間タック
『第３惑星アリス出身のたかみなが《アリス人は頭に大きなリボン・女性は赤　男性は青
のリボンを付けている》が　赤いタラコのメダルをＡＫＢリングチャージさせて
変身する、得意技は電子エネルギーで投げる『ハイパースピン・バキューム投げ』
（通称電磁なげ）だが、全エネルギーを放出するもろ刃の剣
言い訳サイクロンを使う事が出来る、なお巧が好きなようである」
○渡り廊下電撃隊（７）
元々は　可愛星（かわいせい）出身の　まゆゆ・スペードのＭ、らぶたん・ハーとのＬ
　はるごん・ダイヤＨ　あやりんクローバーＡ
の４人で構成され行動隊長として　なっちゃん・ビッグＮが存在するだけだったが
最近はこもりん　ルビーのＫ　わさみんローズのＷを加えて７人で活動している
その為　当初は　アカンベボンバーを使用していたが　７人で風船ボールをつなぐ
渡り廊下・ハリケーンと言う　必殺技を編み出した
○巧ケント
『シータ人とオルフェックのハーフで正体は狼（うるふ）オルフェックだ』
○アッカンベ猫

『ヘルスの沼に住んでいる　黄色の猫』（未登場）
○レイナ様
『第３惑星　アリスのミルダ城に住んでいる　気まぐれな王女
ＡＫＢリングに『変身』の意志を知らせるポーズを取ると
戦士レイズナーに変身するジルブライの８戦士（ゆうし）の一人（未登場）
○レリュフ・ブライ
『数百年後に完全に要塞化されたランダリマ星の正当なる王女
星になった猫に登場した。

キャラクター名鑑?アストロ・サークとジルブライ正規軍（修正版）（後書き）

いつかこの物語を　『ＡＫＢ伝説!時空大戦』として描こうと思う。

????南からやってきたクジラ（前書き）

ピンク　鯨のママルの登場です

???南からやってきたクジラ

○クシナ村
小さな部落だった村も今では色々なルールや
藁葺き屋根の家などがあちこちに見られるようになりました。
そして村長であるテツナとアシナは　クシナ姫と3人で暮らしていた
おじいさんはいつものように　山に芝刈りに、そしておばあさんは
自称釣り名人である
五郎太をお供にオシメ川に魚を釣りに（さかなかい？）この辺りで
はヤマタケと言う
今で言うお雑煮のような物を主食にしていた
「それではおじいさん、おばあさん　いただきます」と挨拶すると
ヤマタケを
『ズズッ』と啜って「あぁ、なんて美味しいのまるで　ゆっかさん
の味噌汁のような」
「・・ゆっかさん　って誰だっけ」
「クシナ、そうあせること無いでそのうち思いだす時もあるでよぉ」
とテツナおばあさんは慰めてくれた
その時戸が『バーン』と開いて
五郎太と言う漁師が「テツナさん大変だ」と叫んで家に飛びこんで
きた
「どうした五郎太、お前まだ釣っとったんか　そんな息切らせて、
いってえどうしただ」
「おらはこの近くのクシナ湖（オルデナ湖）まで距離を伸ばして魚
さとってたども
ここらじゃー見た事もねえでっけぇ魚?が　南の方から現れたもん
で　もうビックリして
飛んできただよ」と五郎太は身ぶり手ぶりで一気に話した
おばあさんは「んじゃー　とりあえず見てみよう」と言ったのでク

シナはおばあさんと
一緒にオルデナ瑚に出かけた。
〇クシナ湖（オルデナ湖の一部）
そこには全長３０メートルくらいの桃色の生き物が全身に傷を負って浜にうちあげられていた（これは後で分かったことですがどうやらこの世界の生き物は虫も動物も皆喋るのだ）
クシナは弱ったその生き物を治療しながら事情を尋ねた
「おいらは亜都蘭にある、マンモォランドから来た桃色クジラのママルと言うまる」
「えっマンモォランド？」
「ここから南の方角にあるマイキュア様（海神マイトの子で後の虹の女神アスタヴィスの従兄弟にあたる）が作られた海と陸に住む全ての動物達の楽園でまる」
「そない　良いところなら何故ここさ　きたんじゃ」とテツナおばあさんが尋ねると
ママルは哀しそうに「できればおいらだって国を出たくはなかったまる、でも皆
『ピンクピンクっていじめるまる」と答えた
「なーる　ほど、珍しいもんね」
と２人は納得した。
テツナおばあさんは
「事情は分かったで、これからはこのクシナ村で暮らすがええ
みんな気の良いやつばっか　だぜ　にゃあ」とママルをなでてあげたので「おいら嬉しいでまる、これからよろしくで　まる」
と水しぶきを上げて喜んだのでした。

???クシナ村の怪（前書き）

クシナ村では　体のあちこちに瘤が出来ると言う怪事件が怒っていた。

???クシナ村の怪

テツナと言うおばあさんの案内でやってきた
クシナ村はまるで廃墟だった　あちこちの家や
建物が嵐にでもあったかのように粉々に散らばっていた
「これはひどいナー」とカイルは呟いた
「なんでこうなった　なるか」
壊れた建物を見まわしたナルーおばあさんに尋ねた、しかしほとんど崩れたクシナ（マオン）
の像には気づかなかった
「この村は今から１５年ほど前わしとおじいさんや仲間たちとで７年の歳月をかけて
作り上げたんじゃ、娘にちなんでクシナ村と名づけられたこの村は
最初は平和じゃた
のじゃがある時村に突然『コブトリ』と言う伝染病が流行ってのう」
「コブトリねーえ」
「それはなんなるか？」
「体のあちこちに　大きな瘤が出来るんじゃ　それをほおっておくと　最後に死に至るのじゃ」
「恐ろしい　病気だな？」
「そして村の者は一人また一人と死んでいき　わしらはどうする事も出来ずに
死を待つだけじゃッた、そんな時　アキモト　と言う不気味な老人が現れての
「もしわしがこの村を救ったらなんでもするかえ」と聞いてきたので
「わしは　考える間もなく即座に、なんでもすると答えた
それからその老人は病人の体に『あっちゃんの護符』『優子の変な汗』『ゆきりんの謎の滴』
などを塗り三日三晩祈祷を行った、するとどう言う訳か　体中から

瘤が消え
皆すっかり元気になり伝染病はどこぞに飛んで行ってしもうたんじゃ」（そうかにゃ？？）
「それは良かった　なる」と」
「ちっともよくなーいわい」
ナルーの感想に腹を立てたテツナ大声で怒鳴ると話しを続けた
「ところがその老人（アキモト）の正体は９つも頭があるクイダラゲと言う蛇の化け物だったんじゃ（そうだったのか？）
わしらは又が８つあることから勝手にヤマタケのオロチと呼んどったがの？」
「で、その化け物はなんといったなる」
「村を救ったお礼にこの村の娘を毎年一人ずつ頂く、良いな　約束したぞ　そう一方的に
言うて消えていったんじゃ、そしてやつが帰った後はごらんのとおりのありさまじゃよ」
「で今年はばあさんの娘と言う訳なるね」
「なるほど　事情は分かったが　一つ質問がある、この村の人たちは一帯何処にいるんだ」
「ああ、それなら村は使い物にならんで普段は　ン・ゴロロが住んどった？
オカカやまで暮らしとる」
「そうか　で　ン・ゴロロッて」と質問すると、おばあさんに代わって
「それは天にある鬼御殿の番人だったと　お師匠（とおさん）様から聞いたことある　なる
　あったことない　なるが」と　ナルーが答えた
「ナルー　おまえひょっとしてこの世界知ってんじゃーねーのか？」
「何万年か後の良く似た世界を知っているだけ　なる」
テツナはもう一度「勇者様どうか娘クシナをお助けください」と懇願した

「おっし、ではとにかくそのオカカ山とやらに向う（正確には戻る）とするか」
「そんな化け物どうするつもり　なる、神話のように酔わせて首ちょん切る　なるか」
「よっしゃっ、それいただき」と指を『パチン』とならすとカイルは作戦を立てるため
オカカ山に向って行ったのだった。
でもその時ふもとでは『フハハハハハアストロ・サークよ、我が闇の化身
ガロスの力を得て蘇れる　のだァ』
ゼノンの呼びかけに先ほど死んでいた男がふらりと立ち上がった
『フハハハハハハ、この物の体を得て　我は数千年ぶりに　蘇ったぞぉ！」
不思議な事件が起こり始めていた　しかし　カイルとナルーにはそれを知るよしもなかったのだった。

？？？クシナ村の怪（後書き）

コブトリ爺さんが　ちょっと入ってます。

????　スサノオのオロチ退治！（前書き）

スサノオ伝説　最終章です。

？？？　スサノオのオロチ退治！

○オカカ山
「アシナ今帰ったぞ」とテツナおばあさんは言った
洞穴の中からは「お帰りなさい」と皆が一世に顔を出した　その中にどこかで会ったようなセクシーなおばさんがいたので
カイルは「おまえひょっとしてと言うとナルーもほとんど同時に
「わーいマオンなる」と叫んでマオンに近づき顔を舐めまくった
「もうくすぐったいじゃない、やめなさいよ　やめてってば～ナルー、ん　ナルーって？
　あのナルーよね？」と問うと
「そうあの　ナルー　なる」と言って3人は喜び会った
「クシナいやマオンと言うのかい、記憶が戻ってよかったの」
「うん、お母さん」と喜びをかみしめていた
　「せっかくの所わりいけど今から手分けしておっきな瓶と酒を用意してくれねーか」
「そんな物どうするのよ」
「怪物退治　なるね」
　皆はカイルの指示に従って作業を進めた
「これはワシが石と木で作った槍でましゃ、化け物退治に使うでましゃ」と言って
〔なげきのやっさん〕は石槍をたくさん置いて行った
　「おいナルー、おまえはマオンに変身」できねーか？」
「そんな高等の魔法まだ無理　なる友達の、モーモなら出来るなるが」
「チッ、けっこう使えねーなぁ」
と　カイルは頭をかいていた
そして数日後　山の頂上で見張りをしていた、ゴロロが
「おーい来た　のら、来た　のらー」と大声を張り上げた

クイダラゲは大きな体を唸らせると『ノッシ「、ノッシ』と近づいてきたのだった。
山の中央の祭壇には女の子(マオン)が括られていて
その周りにはクイダラゲの好物だと言うお酒が大きな9つの瓶に入れられていた
「テツナよ約束どおり今年も来たぞ」と言うと女の子をチラッと見た、そして
「ふん、どうせ痺れ薬でも　は入っとるやろがぁ　そんな見え透いた手に乗るかや＞、〜、＜」
と言うと怒り出した、しかし　その瓶には　あっちゃん、ゆうこ、さやか等
ＡＫＢのステッカーが貼ってあり《どうぞお飲みくださいい》とメッセージが書かれていた
　怪物はたちまち怒りが収まり
「それではいただきまーす」と9つの顔を瓶に突っ込むと酒を
【ゴクゴクっ】と飲みはじめた（おめえも　あほだったか？）
ナルー達は隠れて様子を見守っていたが
怪物が一向に酔う様子は見られないので
作戦失敗か？と思われた
「バーロー何が総理大臣だってんだちくちょうめえええ」
だがますます大暴れする怪物を見て「こいつひょっとして酒癖悪いんじゃーない　なるか」
ナルーが呟いたので別のところで見ていた
カイルも「ああ、そうみてえだな」と作戦変更のあいずを送った
怪物は祭壇のマオンを口にくわえてますます酔って大暴れしているようだったが
向こうから
「バーカ、それは〔なげきのやっさん〕が作った偽者だよ」
「そーら龍さんこちらー、手のなる方へ　あっかんべーえ」
と言って怪物を頂上に誘導した、怒った怪物は顔を赤くさせて

（たぶん）カイルの後をおって山をゆっくりと登ってきた
でもやはり睡眠薬入りのお酒が効いているのか?だんだんふらつきが大きくなっていった
そして　アッカンベ橋を渡ろうとした時
『ドッボーン』
とそこが抜けた
「ちくしょおぉ、そんなころもらましワスには効かんぞ」と強がる
怪物にヤッさんと村人達が四方から一世に石槍を浴びせた
『ヤーヤーヤー　矢ー矢ぁ』
これにはさしものクイダラゲもとうとう途中で
『バッターン』と倒れた、カイルはつかさず、セルゲイアの剣で9つの頭を全部切断した
『トントントントン』
するとその瞬間クイラダゲはたくさんの娘を体内の口から吐き出し始めた、その中には
一匹のカエルも交じっていた
「おまえはまさか?家出をした娘の〔くじけのみっさん〕でないでましゃか?」
〔なげきのやっさん〕はその蛙に近づいた
〔くじけのみっさん〕は「おっとうでねえか?
会いたかったでましゃ」と言ってやっさんと抱き合った　どうらや
妻は病気で亡くなったらしい
やっさんは一言「そっか、苦労かけたでましゃね」とため息をついた
「どうやらこの世界での用事も住んだようだな」とカイルは剣を掲げて言った
「残念ながらソウハナッテイナイノダ」
「だれだっ」
空間から突然　カイル前に現れた男はそう言って、拳での腹を『ズブッ』と貫いた
瞬間赤い血が『ドバッ』と周りに飛び散り

「あんた・・死んだはずじゃー・・」
カイルは呟いた　それはガロス（闇の魔神）の血を受けて蘇ったアストロ・サークとたくさんのイリアズ（ピラニアの形態をしたガロスの部下）達だったマオンは「カイルー」と叫び　怒りのままに力を解放したするとマオンの背中から天使の翼が現れ、額には精霊の証である紋章が浮き出ていた
そしてその全身が『ピッカー』っと異様な　輝き無数の光が放ち
　イリアズたちを一瞬で消し去った（出番少なくてごめんね）
「うーオノレィ　さすがは我が積年の敵　ラマォダの血を継ぐ者だけの事はある」
ガロスはそう言うと「アスタヴィア・カミナラス・ホーホケキョ」と呪文を唱えた　するとガロスの体がみるみる大きくなっていったそして、出血したカイルを『グッ』と握った
「ウワアーア、ヤメロ化け物」
「カイルー」とマオンが叫んだ時その時大空から「パオー」と言う雄たけびが聞こえた
「あれは何？」とまマオンが呟くとナルーが
「先生（ジルドーラ）だ　なる」と答えた
龍は「ラマォダの子（子孫）ラーマォンよおまえ達2人の力をあわせるのじゃ」と告げた
『タァー』
マオンはカイルに向ってジャンプした、その時2人の体が空中で同化した
「そっその姿は　絶空神スサノオ、そうか　この者たちの血（なか）に封印されておったか」
『バォー』
龍の雷（いかずち）がセルゲィアの剣に力を与えた
「いくぞ（いくわよ）俺と（マオンの）スーパー大切ザーン（アマ

ゾンか？）
「ぎえええええ、貴様はヴィーナスの・・」と叫んで別空間に逃げていった
同化した2人はそれを追って次元の穴に突入した
「あっ待ってナルーも一緒　なる」と言ってナルー次元空間に飛びこんだ
～さよならおじいさん、おばあさん、さようならかけがえない仲間達～
「クシナ姫様・・」
クシナ村の人々は　それをただ茫然と見送っていた
〇ラングリアドーム地下『ゴルゴダ牢』
『うあああああ、許してください』
そこでは　シスフィーナの反逆者たちが　手足を四方の鎖で縛られ丘に放置される　エロエロガンモと言うナメクジに似た生き物が体を舐めながら這いまわり
ヒヒドリと言う　猿顔をした鳥が目ん玉をつっつきやがて全身が腐り死に至る
そして死んだ肉体は　何度でも蘇り　それが永久に続くのであったたいていの者たちは根を上げ　シスフィーナに　完全服従を誓うのだが　ただ一人だけ　抵抗を
続けている者がいた　かつての　美少女レスラー　キューティードールだった
「ふぉふぉふぉふぉふぉふぉ、ドールよ貴様の魂胆など　とう分かっていたのだ
そろそろ　我が　もとに戻る気になったか？」
しかし　キューティーはブロッケン・ケイトに　『ぺっ』と唾を吐きかけた
『オノレーまだ逆らうかぁ』
『パァシーンパシーンパシーン』
電磁鞭で異常に打ち付けるケイト

「あああーあああああ・・・おゆる・・ああああ・・」
「チッ、また失神したか」
ブロッケン・ケイトはそう軽蔑して　牢を出て行った
「だいぶヤラレタでガスねえ　あねさん?」
「あんたは??」
「時が機やした、間もなくあの方が復活知る」
そう言うと青いネズミは銀の歯で鎖を噛み砕いた
「・・助けて・・く・れ・・るのか?無理だ　脱走は不可能だ」
「どんな強固なところでも必ず盲点(よわいところ)があるもんでガス
って　これは姐御の受け売りでガスが?」
「無駄だ、それに姐御って誰だ(・・?」
「それは会ったときの楽しみにしておくでガス」
そう言ってネズミは地下の穴にキューティーを引きこんだのだった

????　スサノオのオロチ退治！（後書き）

全次元征服を企む堕天使シスフィーナとそれに排除されてきたモームディア人たちの戦いが遂に始まる

次回『アキバシティーの聖戦！』

キャラクター名鑑？絶空神スサノオとノー・スリーブ神話（前書き）

インドの寺院の僧侶玄奘の娘　由紀の手記に
記された物によると　絶空神スサノオは
なつみとカドウヤの孫とされる

キャラクター名鑑?絶空神スサノオとノー・スリーブ神話

ノー・スリーブ　神話　全十章

○第一章《世界の始まり》

『この宇宙は大いなる闇と静けさに包まれていた、そこに
モーゼットと言う仙人が現れ3つの神を生みだした
天を司るノーア（タカノーア）　大地を司るス・マ―ラ（コジマーハ）
そして海を司るブ・ジルド（ミータ）の3神であった
彼ら神々たちはアトランタス《タカミガハラ》と言う天空の城に住み
アッカンベと言う橋をかけ天空と下界とを繋いでいたと言う。』

○第2章《人間の誕生》

『モーゼットは天海から大きなクジラを呼び寄せ　その上に
地上世界を作った　ノ―アは木の実とこの葉を混合し動物たちを作った
ス・マ―ラは大地と風とを合成し自然を作った
最後にブ・ジルドが土人形と飴を練り合わせて　クライアン（人間）を作って行ったのだった。
そして三華（みか）　国世那（よな）　雷亜魔（らあま）　出母須（でもす）等4つの国を作り
その中心に天空まで聳える樹『アスガルド』（木になる木）を作った
　こうして出来上がった地上世界は鷹魅那（たかみな）と名付けられ、毎年　生誕祭には
皆　自らを　裸体と狂乱の神　精魂（せいこ）に見立てて朝まで裸で踊るのだと言う』

○第三章《アキバラ文明》

『最初の世代の人間達は黄色い種族と呼ばれ『アビタス』と言う若

者がリーダーとなった
彼は次に生まれた黒い種族の女性イグナとの間に
沢山の子を儲け、そして彼らによって　アキハラ文明が生まれた
彼らは　三華国や世那国と行った国を発展させるため
総選挙によってリーダーを決める制度を作った、しかし投票権を不正に
使う者達が横行したため　仕方なく監視委員会を設け監視を強化した
彼らは一夫多妻制で妻は申請すれば　無限に持つ事が出来た
（強制ではないが・うらやましいかな？）
ヨナ国では同性同士の結婚もＯＫだったので、そう言う人達はヨナ国に集まった
また彼らは高度な文明をもっていた、我々人間が存在しなかった超古代に
彼らクライアンたちは　メイビィラスと言う火の鳥（戦闘機？）やディバーと言う
鉄の船を使用していたと言う　またミカの国では大地と繁栄の神
『アッカンベ神』を信仰しており　アッカンベェの像やタカノア神殿（鷹と鷲がエンブレムが入っている）
コジルハ神殿（黄金で出来ている）ミータ神殿（古代ローマ風）等がある
また　戦いの神　ラーマォンの像も存在する（肩に相棒のナルールゥ、が乗っている）
しかし怒りの神『アッチポッチ』の神を信仰するヨナの国や、美の女神『マリナス』（シノーダ）
を信仰する雷亜魔の国　雷神　サタン・モールを信仰する出母須の国等　４国が対立し
数十年にわたって　宗教戦争が続いた　のだが　そのうち彼らは戦う事だけが目的になってしまい
　国はだんだん衰退していったと言う』

○第四章《世界の崩壊》

『科学の急激な発展の裏返しとして　人々の慢心は神々さえも遠避けるようになっていった

三華の国の巫女なつみは　世那国の王カドウヤの預言をしていた時ある啓示を受けた

それは　黒い衣服を着たなつみが三華（じるべすた）の草原で

火の鳥　メイ・ヴィラスや鉄の船ディーバ等を駆使したクライアンたちが

赤き魔神ディーゲールと戦うと言う『魔神大戦』の夢を見た

それが世界のアキバラ崩壊の預言であると信じたなつみはカドウヤ王に

「今すぐ争いをやめ　神々の信仰を復活しなければ世界は滅びます」と言う預言を伝えた

しかし　カドウヤ王は

「不気味な事を言う巫女め、さては世の国を乗っ取ろうとしているな」と

怒り　なつみを地下牢に幽閉してしまった　やがて　王の精神は日に日に　異常を来していき

遂に　その精神から赤き魔神ディケールが王の精神から誕生したと言う　そして

なつみの夢に通りに『魔神大戦』が起こった　さらにディーゲールの邪悪な精神は

クガの世界から　『ギリ』　アンノの世界から『アギ』　ミラスの世界から『リュキ』

オルフィの世界から『ケント』　ブレの世界から『レード』　魔化の世界から『ヒギ』

天道の世界からヒロ　イマジの世界からタケル　紅の世界からキバるそしてGの世界から『ゴロ』など？（とう）の世界から仲間を呼び寄せ

その邪悪な力は空間をも歪め世界の収縮と崩壊を加速させていった』

〇第五章《巨神たちの出現》

『ディーゲールの邪悪な力に引き寄せられたのは彼らだけではない
かつて　アトラントの神々達が　地の底『コエダメ』に閉じ込めた
ローデン・ハイムの巨神たちまでも引き寄せた
彼らは２つの顔を持つ双生の魔女ゾン・ビールと共に戦いに加わった
そしてアキバラは　人間たちと悪しき魔人に加え巨神たちも参戦す
る異様な境(せかい)となった
ディーゲールは異世界から来た１０の魔人の力をベルトのマックス・
ストーンで
一つに集めると　それをローデン・ハイムの巨神達に開放した
『マック・シンドローム』によって　巨神達は　アキバラと共に消
え去った
そして後には静けさだけが残った』

〇第六章《世界の再生》

『ディーゲールの闇の力の前に無にきした　宇宙に何故かなつみが
一人立ちつくしていた
そこに現れたゼノンと言う謎の青年は『邪悪なエネルギーが満ち溢
れた　このアキバラは
一旦　無にきさねばならなかった　世界を再生するためにね　創造
は破壊からしか
生まれないですから』と告げ　去って行った
すると間もなく大地が　海が　山が　生まれて行った　そして蘇っ
たアキバラの草原に
カドウヤと　なつみがいた　そして技神ノアルが作った方舟によっ
て何人かの人間と、数種類の動物たちが
助けられた　ナツミとカドウヤの２人は彼ら共に　鳥無須(どりむ)と言う国
を築き平和に暮らしたと言う』

○第七章《タカミガハラの追放》
『なつみは　カドウヤとの間に　モナと言う少女を生んだ　モナは
　風弩（ぶうど）
と言う世界の若者　章太郎　との間に四人の女の子を儲けた、その
一人　ルカは
天の神　イクナオ（ノ―アの子）に見初められ天で暮らした　そし
て生まれたのが　スサノオだった
イクナオには他にトリトと言う女性に産ませた　セリル（女性）
パンストと言う2人の子がいた
長女セシルには天を長男パンストには地（やみよ）を分け与えた　そしてスサ
ノオ
には海を与えようとしたのだが　気まぐれなスサノオは「母のいる
国で暮らしたい」と拒絶した
為　タカミ・ガハラを追放させてしまったのであった。』

○第八章《スサノオのオロチ退治》
『天の国を追われたスサノオは彼方此方を放浪していた
だがディケールの強大な精神は兄パンストの肉体に宿っていた
ある日　スサノオが怪の国を通りかかった時　美しい娘と老婆が
ゴルドーン（ユダ）と言う
１０の顔を持った怪物に襲われているところに通りかかった
スサノオは「僕はイクオナの子スサノオと言う者だが　もし僕がオ
ロチを退治したら
娘『クシナ』と結婚させてほしい」と願い出た　そしてセルゲイア
の剣で１０の顔を
切り裂いたスサノオは　クシナと結婚し　幸せに暮らしたと言う』

○第九章《美女比べ》
『天上界では美の祭典が行われていた、Ｎｏ．１に選ばれた女神は
全ての神たちの尊敬を得るのである

しかし予選を勝ち抜いた、月の神ヨシナ、美と裸体の神セイコ　そして欲望の神ア・ニータの
3神は甲乙付けられなかったのであった。
そこで女神ミータは第3者である人間(きもとさやか)に判断をゆだれることにしたのだった。
　審議の合間にキモト・サヤカを呼び出した、3神はそれぞれその少年?に言った
まず月の女神ヨシナは
『自分を選べばお前にはこの地上世界の王にしてやろう」と約束した
次にった戦いの神セイクォは「私を選べはお前に最強の力を授けよう」と迫った
だが欲望の神ア・ニータは「わらわを選んでくれたらこの肉体をやろう」と誘惑し
その場で強引にエッチをしたのだった。
結果は思惑通りア・ニータが選ばれ　タカミガハラ〔天上界〕の尊敬を集めた
後には女神ノ―アをも虜にし全ての神々の能力を奪い、全神々を奴隷同然に扱い
一時期は天上界の大マスター（超大神）に君臨したと言うが、その野望は尽きることなく終には
欲望のまま宇宙のエネルギーを吸収し続け自己破壊していった。』

〇第十章《死について》
『クライアン人たちにとって当初　死とは神の国(たまみがはら)に行き神々つ使える事だと信じていた
だが出母須の国のカリストと言う宗教家が「死とは魂が無くなる事だ」と論じた
彼は「その後魂は何かに生まれ変わる」と説いたのだが　その部分は伝わらず
最初の「無くなる」と言う部分だけが強調させたため　それに怒っ

た暴徒達によって弾圧された
しかし神話では『ディゲールの謎』と『スサノオとクシナ』のその後については
何も書かれてはいないのである』

キャラクター名鑑？絶空神スサノオとノー・スリーブ神話（後書き）

学者たちとの間では、アトランタス（タカミガハラ）とアトラントは　同じではないかと言う説もあります。ちょうどギリシア神話とそれが元になって生まれた北欧神話の関係と同じです。

？？？　アキバシティの聖戦（前書き）

遂に最終決戦が始まった。

????　アキバシティの聖戦

プロローグ
「ハッ・ヤアー　トゥ、いい加減くたばりやがれ」
「スサノオよ、我が力は　こんな者ではない」
怪(かい)の国からガロスと化したアストロ・サークをおった
スサノオは様々な世界で戦いを繰り広げた
『強わ者たちが激戦を繰り広げる戦国時代』
『伊賀と甲賀が凌ぎを削る江戸時代』
『核戦争によって荒廃した世界』
『科学の発展によって人間たちの繋がりが気薄になった未来世界』
『オタク達が奇妙なダンスを踊り　犬や猿の着ぐるみを着た少女たちが
《ポイ・ポイ・ポイ・ポ・ポイ・ポイ・ポイ・ポ　ピィ》と踊るオタク世界』
『鎖で縛られた男女が「もっと虐めてください」と美香様に服従する世界』
　『バチバチバチッ』空間に火花が飛び交った
亜空間でスサノオとなったガロスの戦いが繰り広げられていた
「ウォおおお絶空剣」
『ザバーッ』
「何の　高視力(こうしりょく)ビームー」（マジンガーね？）
『ビビビィー』
「うわー・サークさん、あんたも道連れだー　セルゲイアー・ランッ？」
　剣に光が集まり、それがガロスにさく裂する」
『ウガァー』
そして2人は　ラングリア空間に落ちて行った
○アキバ通り（旧公園通り）

そしてどれ位たったのか空間に避け目が出来その中から小さくなったガロスといつの間にか分離していたカイルとマオンそれにナルーが現れた
「おっ終った　なるか」とナルーが言った時傷ついたガロスが出現した
私達は息を飲んだが、アストロ・サークの体に戻ったガロスは
「ありがとうクシナ姫」と
お礼を言うと消滅したのであった
「今度こそ本当に終ったな」
と言ったカイルの傷跡は何故かなくなっていた
「おっ　終わったね」
と言ってマオンは意識を失った
「マオン　しっかりするなる」
「大丈夫だよ　力を使いきって眠っているだけだから、俺んちで2、3日やすみゃあ
気が付くだろ　じゃーな」
「カイル、何処行くなるか」
しかし　ナルーの質問には答えずに　カイルはアキバ街に消えていったのだった。
（1）地下はテンヤワンヤ
一方ネズミのアーモンドに助けられたキューティ・ドールは
地面に隠してあった　ホウキ型バイク、マジック・ホイホイを操り
地下空間を走っていた
「いやっほーォ、こりゃー気持ちいいぜー」
「そりゃーようごザンしたね（まるで姐御見たい）
「ネズミィ何か言ったぁ？」
「いえッ、別に」
するとアルテックの様な服装をした男性が二人が制止した
「待ったァここはブロッケン・様の許可証が無くては通れんぞ」
「あらっ、許可証なら持ってるわよ」

しかたなくバイクを降りたキューティーは厳ついおじさん2人に許可証を渡した
「最初から　これを出せばだなあ、何握手権　ＡＫＢって！」
「うはっ　こっちはあっちゃんの写真だ・・って　違うだろ　まァこれはこれで
ありがたく頂いとくが　愛らびゅーって　あの歌が良いんだよな」
「じゃあ　そう言う事で　バイビィー」
とハートマークを残しキューティーとあーもんは去って行った
「あっ、まて」
「先輩　その写真　譲ってください、先輩には可愛い奥さんが入るじゃないですか」
「バカ者　この写真（あっちゃん）は女房よりも大切なのだ」
「そんなこと言わずに　譲ってくれてもいいじゃないですか」
「いやだね」
二人はあっちゃんの写真を巡って取っ組み合いのけんかを始めた
それを見ていた他の警備員たちも「俺によこせ」「娘と交換しても良い」
等喧嘩の輪に加わり収集が付かなくなった
「ふふふ、作戦成功だね、行こ　あーもん」
行ったと見せかけて様子を見ていたキューティが？サインであーもんに言った
（こんな作戦で良いのか？警備員さん　真面目に仕事やろうよ）
（2）魔獣軍団の集結
その夜、ガロン山の麓にあるモーム洞窟にはあちこちから数千の怪物達が集結していた
まず地の国からかつて天の国を揺るがしたと言うギガンデスやアルマンデイヨと言った巨人達、東の空からエンリル（天牛たち）さらには西の方からクラウメスと言うエイやクラゲの姿をした怪物達が
次々と集まってきた　そしてその中に　モルドと言うおじさんや

カイルと言う
青年の姿もあった。
「ここはガロン山脈じゃあないの」
バイクで到着したキューテーが行った
「みなさん、よく集まってくれました　まもなく我等モームディア人（暗闇一族）と
アキバ人（光一族）との最終決戦が始まリのです　我らにあるのは勝利のみです」
集まった怪物たちの前に美しき少女の声が響き渡った
「まゆの姐御」
あーもんどが呟いた
そしてまゆゆは声を限りに叫んだ
『アガナァ・アガナァ・アガナァ・アガナァ♪』
すると怪物たちも
『アガナァ・アガナァ・アガナァ・アガナァ♪』
と合掌した　すると東の空から　鋭い目と犬っ鼻のあの方が巨人のごとく現れた
「ふっはっはっはっはっは、ついにわれ復活せしこの世界を再び我らモームディアにとり戻してくれる」
それがモームディア人の神　アガナァだった
『マチルト、オチリコ　ホッチンポー　アカンベーェ』
まゆゆはデルタ次元で魔術師ヨーダに貰った　ジュダイの宝珠に祈った
すると青ネズミのアーモンドが巨大化し背中から蝙蝠の翼が現れた
「魔獣アーモン復活」
「渡りろうかーァ」
まゆゆの腰にベルトのマックストーンが現れた
「ハァーヤァータァー（賀集利樹風のポーズで）
「ＡＧＩＴＯマックスへんしーんトーオ」

アーモンの背中に飛び乗る
「おばあさま、まゆゆも戦います」
「おおーまゆ　そなたがナチの子か皆良く聞くがよい今こそ決戦の時ゾ
　魔っすぃはおるか（ハイここに）あやっぱは（こちらに居るで河童）そして
八苦血（ここにいるでチビーィ）みなの者　決戦じゃーァ」
『おおおおおぉ』
『アガナァ・アガナァ・アガナァ・アガナァ♪』
と　怪物達の歓声は上がった

一方アキバシティーの地下にある前線基地　ゲルマドーラでは
「女王、ただいまガロス山周辺では次々と魔獣達が不気味な集まりをしております」

「そうですか、いよいよ　ですね、ブロッケン・ケイト
直ちに最終兵器を出動を命じます　準備を急ぎなさい」
「ハハー、シスフィーナ　光の王」
ブロッケン・ケイトは跪き　服従の証しとして　尻を舐めていた？？。

「今宵は我等が全てのパラレル世界を支配する、大一歩となるであろう」
『おーシスフィーナさま　バンザーィバンザーィ』
とこちらも歓声が上がっていた、もっとも間違えて「あっちゃんバンザーイ」
と叫んだ者もいたようだが？
（３）カイルからの手紙
○おじさんの喫茶店
「ここは、どこ」
長い時空間の旅を終えたマオンは向こうで１５年はいたはずなのに

こっちでは旅立ってからたった４日しかたってはおらずそれが例のあの日だった
　マオンは不安のままで朝をむかえた、ナルーはまだオヤスミ中だったので
「よかったやっぱり夢だったんだ」
と呟き、その可愛い寝顔を見たら少し安心した
しかし肝心のおじさんもカイルもいないので
少し不安になり　あちこち探しているとベットの側に置いてある手紙が目に留まった、カイルからだったその手紙には
【マオンがこの手紙を呼んでいる頃は　戦いが始まっているかもしれない
もう気づいているかも知れないけど、僕たちは純潔のモームディア人だ
　僕は争い事は嫌いだまして戦争なんか　だからこれまではただ自由気ままに生きてきた　でもいままでに多くの仲間達が清掃隊のやつ等に
殺されているんだ　それを思うと　やはり戦いに参加するべきだともう会えないとは思うけど、君にあえてよかった
　一緒にいろんな世界を旅できたこと忘れないよ
マオンの幸せを親父と2人で祈ってる
　カイル・フローネス
と書いてあった、私はその手紙を握ったままいつまでも泣いていたのです。
（４）激突！モームディア対ガルシァ
それは何の前触れもなく起こった
東の空から数千の怪物と妖怪カオンの『ディアー』と言うリズムに乗って
魔空神ラヴ・まーじを従えて魔女アガナァが出現した
それを西の空からガルシァ族と無敵戦艦ゲルメライを率いた
女王シス・フィーナが迎え撃った

「シス・フィーナ、そして我が同士ケイトよ　おまえ達の裏切りおかげで
我等は滅亡の危機にある　だがまだ負けぬこの我がいるかぎり
モームディア王国は不滅と知るがよい」
アガナァーはシスフィーナを激しく睨んだ
だがシス・フィーナは
「愚かなる魔女よ
まだ気付かぬか？モーム王国の時代は終った、いまさらガルシァの宇宙支配を
止める事は誰にも出来ぬわ」と笑った
「お姉さまの敵　祖国の裏切り者ブロッケン・ケイト　あなただけはを許さない」
「フエル、フエ―ル」
まゆゆは　テクマク・コンパクトで魔獣アーモンと　複数の分身を出し
ブロッケン・ケイトを取り囲んだ
『行くよ　ファイナル・アタック』
四方から分身のアーモンとまゆゆ軍団がケイトに激突した
『ドカーン』
『うわーあぁ』
そして逃げようとした頭部をまゆゆの　ノースリーブの剣が貫いた
「お姉さまとまゆの怒りの電撃ーィ」
『ギョエーェ』
ケイトの頭は　吹っ飛び　コエダメに沈んで行った
『ブクブクブクッ』
「こーいシスフィーナー」
「望むところだ　アガナァ覚悟ぉ」
両雄は巨大な光となって宇宙空間で激しく激突した　両雄の激突によって
アキバシティーの大半は失われた　だがマオンとナルーは

その結末を見ないまま　爆風で元の世界へと飛ばされたのである
飛ばされるとき　何処からか
・さようならマオン・・と言うカイルの声を聞いたような気がした
のだが
ナルーは「聞こえなかった」と言うので
それは気のせいだったのかもしれない

？？？　アキバシティの聖戦（後書き）

時空を巡るマオンの物語は
まだまだ続きます。

？？？ペンダントの秘密（前書き）

マオンとカイルの不思議な関係

???ペンダントの秘密

（1）トップアイドルの逆転劇

○２００１１年

東京自宅

「まお、そんなに急いで食事をかきこまないの」と

母親のゆっかさんが注意した

あっ、ゆっかさんと言うのは私の呼び方で

本名は（朝倉真由香）って言うのです

私は手を止め「あーい」と返事をした

「まったくマオンははしたない　なる、

まるでマォみたい　なる」

「マォって誰よ」と

「誰でもいい　なる　早く昼食済ませる　なる」

早いものであれからもう3ヶ月向も経っていたのだが、

何故かゆっかさんはそのことに何も触れなかった。

後でヒーローさんに聞いたらゆっかさんも昔

行方不明になって別の世界を旅した事があったそうなのだ

○勉強？部屋

だがその3ヶ月間にいろんなことが激変した

まずトップアイドルだったバーニング・ブロスが

ここの所急激に勢いを増して来ていたアキバッ子クラブに

完全に抜かれていたのだ、それと言うのも１０年前　１１で加入し

たメンバーだった加号愛菜（まな）が

おむつで喫煙写真を週刊『嘘８百』にフォーカスされてしまったのだ

それぱかりではなく先日卒業を発表した本郷菜穂ちゃんも

実は事務所との確執があったらしい　その後も安倍那智樹（なっきぃ）の

ストリップ事件や　何やらとしばらくスキャンダルが続いた様だ

そんな訳で人気は激減、それに代わる形でトップアイドルにのし上

がったのは
秋元安清と言うかぶきやく歌舞伎役者が『会いに行ける　アイドル』として２００５年に立ち上げた高橋トマト（１８）をリーダーとするアイドルグループ［アキバっ子クラブ・４８］にCD売り上げでトップの座をおわれたのだ
（現にこの３ヶ月間、一度もテレビでは見ていないのだ）
思えば菜穂ちゃんが卒業を発表した２年前に
新リーダーとなった一文字麗が「絶対負けたくない」と挑発したのが裏目に出た感じ
最近は　ミリオンの連発で、負けなしって感じ
「ふーん、やっぱり菜穂ちゃんを追い出すからだよ」
と一人怒鳴っていた私に　ゆっかさんが入ってきて
「今晩は弘（父）さんが半年ぶりに取材から帰ってくるので夕食楽しみにしててね」
と言って買い物に出かけていった。
（２）ヒーローさんの帰国
「マオンって父親居た　なるか？」と
「もちろんいるわよ　ただ特派員って仕事上、年中世界中で取材をしてるんだ
まあそこが特派員の辛いところよ、分かる」
「分かんない　なる」
「やっぱし　お父さんかー、ひさしぶりだわ」
父も母もジャーナリストとして今までいろんな事件を追い続けてきた私はそんな２人を心から尊敬している
いつか２人のようになれたらと、思っている。
私は何気なく　パソコンの横に立ててある写真を手にとった、
その写真は去年の夏父の実家の愛媛に遊びに行ったとき２人で撮った物だった
でも私は胸に架けてるペンダントにふと目に留まった
「あれっこのペンダント、カイルにあげたのにそっくりだ」

私はヒーロさんが帰ったら事情を聞いてみよう」と考えていた。
もう日も暮れてきたのに
まだ、ゆっかさんは帰ってこない
「どうしたのだろう」と心配していると
「まお、いま帰ったわよ」
と　お待ちかねのゆっかさんの声がしたので
ドアを開け「遅いぞ」と文句を言おうとした私に
「ただいま」と言って誰かが抱きついたの
よく見るとそれは私が大好きなヒーローさん（父さん）こと　朝倉弘だった
「しばらく見ない間におおきくなったなマオン」
ヒーローさんに私は改めて抱きついた　その時
「これが年中行方不明の人　なるね」
と　ナルーが言ったので、私は「違―う、行方不明じゃなぁいまいっか」
とヒーローさんとゆっかさんと3人で笑ったのだった
（それにしても　なんでナルーに驚かないんだろ、空飛ぶ金魚って外国じゃー珍しくないのかな？）
（3）ペンダントの秘密
その晩、私は久しぶりにヒーローさんとお風呂に入った、何？
18にもなってまだ父親とお風呂には入っているのかですって？
ほっといて、それは、人それぞれでしょう
その時私は思いきって　例のペンダントの事を聞いて見たの、ヒーローさんは
「あのペンダントは僕の父つまりマオンのおじいちゃんがくれた物なんだと語った
私は頭の中が？と　なりながらも
「ふーん、そうなんだ」と聞いていた
ヒーローさんはさらに話を続け
「僕の父、つまりマオンのおじいちゃんは大切な人から

貰ったと言っていた」と話しを閉じた。
私は「それ、未来のこと?」と
変なことを聞いたので
「ばかだな、マオンが生まれるずっと前のことに
決まっているだろ」とヒーローさんは笑った
(これってどう言う事になってるんだろう)
と小声で呟いた、そのとき
「この世界は偶然に満ちている　なるって、先生が言っていた　なる」
と　ナルーが言ったので、私は深く考えないようにしていた
夜は静かに更けていった

キャラクター名鑑？山本アニーター（前書き）

新潟県出身の大日本帝国海軍の軍人
２６、２７代連合艦隊司令長官だった軍人
山本五十六のぶっ飛んだ孫のプロフィル

キャラクター名鑑？山本アニーター

本名：山本　バッコンダ・ショウコ　アニータ
出身：東京
生年月日１９８５・５．５
特技：ヌンチャクと鞭を振り回す
特徴：アニメとオタクである
性格：ムチャクチャ・ハチャメチャな性格
操縦する船：無敵戦艦『マリン・ダム０６』
全長：２２・００Ｍ　全幅３０・１３Ｍ　速力３０～無限
『オタクエンジンで動き・超合金（だぶるぜっと）ＺＺで装甲を固め
惑星をも粉みじんに出来る、バッコン砲を装備している
また粒子を帆で受けた粒子をエネルギー転換し　宇宙も航行出来る
資格　柔道初段　空手３段　剣道２段　合気道初段　紙おむつ免許
皆伝
アニメ学　達人
乗組員
ウサぴょん４７士
『アニーターを補佐する４７人の少女たち、チームワークを必要
とするため
常に一緒にいる』
オタク・ダンサーズ
１２人で構成された　オタク集団　常にアニータのそばにいる
メイン・コンピューター　ＡＮＩＫＩ（あにき）
『マリンダムのメインコンピューター、《出発だ　Ｚ（ぜえっと）の
の掛け声でエンジンが始動する
　必殺武器『バッコン・ビーム』
《西から昇ったお日様が、東に沈む時　聖なる　モッコリが　顔を
出す》

と　アニータが呪文を唱える間中、ウサぴょん隊は「ポイポイポイピィ」
とよく分からないおどりを踊り、男子たちはオタクダンスを続ける
と言う謎の儀式で　アニメ界の覇者『オタク・ドラゴン』を呼び出す事が出来る
《闇を切り裂く大いなる力　アニメ界の覇者オタク龍よ
我が手に宿りて　刃となせ》と言う聞いた呪文で
アニータの両手が輝きだす、そしてその手を　頭の上でロケットのポーズをとり
「バッコン・コーン」と叫ぶと
両手から7色の光線が出る

キャラクター名鑑？山本アニーター（後書き）

しょうこたんとの関係は不明です。

？？？『星を担ぐ女神』（前書き）

時空を巡る旅から帰った　マオンは
親友の野田麻美（１９）と３Ｄ映画を見に行くのだった。

？？？『星を担ぐ女神』

（１）古本屋とエッサ・ホイサ
○　渋谷　ふしぎ堂
「ああーなんて熱いんだろ」
「ほんとねー」
と私はサミーとため息をついていた
＊戻る
長かった夏休みもまもなく終る、でもそうなると将来の進路やら何やらで
そう　そう遊んでもいられないので（いつも遊んでるって？大正解）
私は親友のサミーこと野田麻美（１９）を誘って公園通りで行なわれている
【ぱんぱぁーマン】と言うイベントを見に行った
なに、今日は一人かですって
私だってたまにはナルーと離れて一人で
行動したい時もあるのさ
（コンビと思われているみたいだけど）
○　渋谷駅
「おそいなあ？」と私は呟いた、約束の９時は
とっくに過ぎている　私は金魚のストラップが付いたケイタイで、
今週のアリコンチャート
と言う　アリさんコンピューター社が発行しているランキング誌
をチェックしながらサミーを待っていた
（私は必要以外にはケイタイは使わないのだ
（ＣＤランキングはアイドルファンの私にとって不可欠なの）
ちなみに１位獲得記録はバーニングブロス
が１１作とトップで　キャンプレディーが９作
デスピートとＭ＆Ｙが共に６作と続いていた

ちなみに単体の女性歌手部門では　巨乳聖子さんの２６作がトップなのだ
だけど　この前の〔いいわけ無用のコンコン吉〕で
１２作連続１位を獲得し、アキバッ子（通称）達が・
バーニングブロスに歴代１位を獲得したのだった。
並んだのだ　「あ～ぁ、これで連続トップテン記録は途切れちゃったか
　私もそっちに乗りかえようかな、だって菜穂ちゃんもいないし最近今ひとつサッパリしないし」
（それと言うのも毎回楽しみにしていた
〔踊れっバーブロス！〕が視聴率低迷の末終了し、代わりに〔エッサ・ホイサ〕と言う
アキバっ子達の公認番組がはじまったからだ
『エッサ・ホイサはＡＫＢクラブの皆が国民のいろいろな疑問を求めて全国を走り回り
解決する番組なのだが　頭に黒い大きなリボンを付けた司会の高橋トマトちゃんが
『エッサ・ホイサ　こらさよっこらさ』とお尻を振りながら回り
最後に
『ハイ解決』とポーズをとる所が話題となっている　ちなみに決めポーズは毎回違うらしい
と一人話していた時
「ごめん、待った　あ？と」サミーが向こうから駆けて来て
「家出る時ジュリ（猫）がなかなか離してくれなくてさぁ」と
息を『ハアハア』させながら言った
「ううん　私も今来た所だから気にしなくていいよ」
っと　２人して笑った後　私達は午前１０時と午後３時に公園通りで
特殊な映写機を使って立体投影されると言う１９分の
短編映画を見る予定であった、でもその前にコンビニで何か買おうと通りかかった路地裏で、

ふしぎ堂と言う古本屋の神秘的な雰囲気に引かれわず中に入って行ったと言う訳よ
（2）女神イザーナャーグァ
＊再び戻る
でもあいにくそこは冷房は無かった
「アッツーイ?何でいまどき冷房無いのよ?」と怒鳴ってる　私にサミーは
「ねえマオン、この本なんか面白くない?」
と言って一冊の古びた本を手渡した
敦子夫人が訳したその本の表紙には【星を担ぐ女神】と書かれてあったの
それはサミーが好きな神々の物語だった
「かつて人間が存在しなかったと言う遥かなる昔イズァーギアと言う創造神がいたらしい、
彼はイザーナャーグァと言う女神と交わり三つ子を産んだ、長女はウッシュモーレと言い
天を二女ガーナダは海をそして三女のラモーラは大地をそれぞれ分け与えられ
その世界は〔デリフーバ〕と呼ばれた　しかし本当は天を支配したかった二女ガーナダは
母なる大地イザーナャーグァと交わり　アル・ラモンと言う巨人族を生み出し
彼等によって天と地を襲わせたという　大地の子である彼等巨人族はその無限なる力で
神の国デリフーバを震撼させたのである。
「このままではこの世界は滅びてしまう」と懸念した父イズァーギアは
雷の神ラウレモーラと交わり聖戦の神ラカーイルまたはディゲルを生み出し
その力を借りて巨人族を滅ぼした　そして首謀者のガーナダは追放

され
女神イザーナャーグァは罰として重い　重い天と地を中央で永久に
支えてると言う」
とサミーは長い話しを終えた
私達の意識がもう少しで、その世界に行きかけた時
「フーン大変なるねー」とナルーを肩に乗せて
ふしぎ堂の老主人が「やあ」と言って入ってきた
「ゲッ　ナルー、あんたたち知り合いだったの?」と
驚いて尋ねると
「今　知り合った　なる、ナルーを追いて
映画に行こうたってそうは行かない　なる」と
頬を脹らせ怒っていたので
私とサミーは「あーら、かわいい」と笑った
（3）3D映画
私達は何処かで適当に昼食をとる予定だったが、竜吉という老主人が
「ここには他所には無い珍しい本がおいてあるからいつでもおいで」
と言って手作りのうどんを用意してくれたのでありがたくいただく
ことにしたの
それは私が大好きな讃岐うどんだった
丁度その時古いラジカセから良い感じの曲が流れてきたので、思わず
「おおっ、これが国民的アイドルグループ〔ミリオン連発〕で話題
になっている
アキバっ子達の新曲『ブライアング・ゲッド」ねと言ってガッツポ
ーズした
「あれっ、マオンは確かバーニング・ブロスのファンだったんじゃ
ーなかったっけ?」
「こないだまでね?だって事務所との確執で2年前に決まっていた
本郷菜穂ちゃんの卒業ライブが見たかっただけだもん」
（それに最近は秋葉原を中心に活躍している〔アキバっ子〕たちに
大きく負けてるし）

「あっそう」
老主人のうどんは去年食べた物よりずば抜けおいしかったの
「あーあ、おいしーい　でも留守番も出来ない誰かさんにはアゲナーイ」と意地悪したら
「いい　なる、ほしくない　なる」
「大丈夫よ　ナルーちゃんにはサミーのあげるから」
とサミーは自分のを少しお皿にいれてあげた
「さすがサミーさんはマオンと違って　優しい　なる」
「その子甘やかすとつけあがる・・まいっか」
そんなみんなとのやりとりが楽しかった、平和なんだって実感してさあ
私達は午後2時頃に古本屋を出て公園通りに向かった
ゆっかさんによればここは昔区役所通りと呼ばれていたらしい
そこでは【ぱんぱぁーマン】と言う１９分くらいの異色立体映画が限定上映されていた
ぱんぱぁと言う小学2年くらいの男の子がぱんぱぁ頭巾を被り
〔かっぱーらい〕や〔ただのーり〕等の悪を退治すると言う道徳的な作品だった
最近はゆうこ　と言う女の子がぱんぱぁおむつを履いて　2号として登場し、コンビで活躍している
アキバっ子のリーダーの高橋トマトちゃんが所属しているユニット
　ノースリーピーズ
のイベントキャンペーン曲〔マーメイドサンシャイ〕や両Ａ面の
〔毎日がぱんぱぁ記念日〕を一人で歌ったの（サプライズね）
道をゆく人たちも、立ち止まってはこの立体映画を体験していた
「驚いた、こりゃーまるでマジックだぜ！」
とイベントの進行役を勤めるラッコのかっこをした国塩さゆさ（？）と言う
元　こにゃん子クラブのお姉さんが大げさなデスチャーで４、５０人はいる人達の気を引いていた

私達はさゆさ姉さんやその他の着ぐるみさん達の演技に惜しみない拍手を送った
蛙のコスプレをした嘆木矢三郎（なげきや）と言うおじさんが
「このファンタジーグラスと言うめがねをかけると飛び出して見えるで　ましゃ」
と説明してくれた
「なるほど　こうなってる　なるか」
と言って、グラスを覗き込んだナルーがコンビニで買った私のポップコーンをほうばった
「ちょっとナルー、あんた子分の分際で人のポップコーン食べすぎ」
「ナルーは子分違う　なる、マオンの教育係りなる」
「だーれが　教育係よ、ただの金魚のフンじゃない　フン」
そんな2人のやり取りを聞いていたサミーは
「うらやましいな仲が良くって」と苦笑していた
そして映画が終った後私達は
【ごきげんさん】と言う食堂に寄ってラーメンを食べたの
雲語路朗（うんごろう）と言うおやじさんが
「はい味噌ラーメン2つ、できたのら」と言って渡したので
「一つたりない　なる」
「あんたは私と一緒なの」
「なら良いなる」
私はナルーと、仲良くラーメンをすすった。
その後はサミーと3人でパルコでしばらく買い物を楽しんだ　時間はまだ午後6時をだったので
「これ終わったらアキバっ子のD？Dでも見て、今夜は留まってかない」
とサミーを誘っが　「勉強があるから」と言って彼女とは渋谷駅で別れた。
サミーは母親と同じ看護士を目指しているのだ
（4）天使長リブヴェル

○渋谷自宅
「ただいま」「いま帰った　なる」
と私達は同時に喋った
ゆかっさん　とヒーローさんは「お帰り」と優しく出迎えてくれた
その晩は9時から3人と一匹で【ノブナガ戦国伝】と言う長瀬丈二
と言う俳優が主演している
2時間のドラマを母屋のテレビで見ていた（普段は母屋で見る）
「アレッ、確か飛行船みたいなの出てこなかった?け」
と私が変な質問をしたのでさすがのヒーローさんも
「あのな　マオン、僕も真由香さんも口うるさく勉強　勉強って言
わないけど少しくらいは
教養を身につけてほしいな」とあきれ　られ
ゆっかさんからも「どうせゲームの話でしょ、戦国時代に飛行船な
んてねあるわけないじゃない」
「マオンは真由香さんに似て想像力が豊かなんだな」
と　二人して笑われた
私は「あはは冗談　冗談に決まってるじゃない」
と　慌てて誤魔化した
その後ベットに入った私はナルーと今日古本屋で借りてきた【ふし
ぎ戦記】と言う
ｋａｂａｎａｉと言うＳＦ作家が、異次元神話集に出てくる伝説の
都市デルクラルと
女神ラーマォンを題材に書いたというファンタジー小説を読んでい
た。
「かつて　蒼き瞳の天使と呼ばれた　精霊王リブヴェルが千の堕天
使軍を率いて
妖精の国デルクラルで反乱を起こした、しかし創造の神ノ―ア（タ
カノア・オルディーヌス）
の命を受けたの精霊の子、ラーマォンによって地の底（アナン）深くに氷漬け
にさせるものなり」

と言う最初の部分と
「いつしか戦士の子ラー〔マオン〕が舞い下り
全て精霊世界を救うことだろう」と言う部分が印象的　だっだの
私は夢中で読んでいる内にいつの間にか
眠っていた、その夢の中で私は重い天を担いでいた
「おっ重い、こらナルー　笑ってないで手伝いなさいよ」
「夢まで責任持てない　なるー」

???『星を担ぐ女神』（後書き）

スウェーデンの名門ルーク・スカイウェル家に嫁ぎ
公費を使った『ヌード結婚式』が物議を呼んだ
敦子夫人の著書『星を担ぐ女神』
はカイザークの　不思議界記伝に
ノースリーブ神話の要素を加えて書いたと思われる

特別編『オルディーナスと7つの世界』（前書き）

はるか昔　この宇宙には何も無かった　ただ果てしない百空とカオスのみが辺りを包んでおった、あるとき3面の顔に6枚の翼を持った創世の神オルディナスが次元の扉を裂いて現れ宇宙に星の種を撒いたという

そしてさまざまな世界が生まれたと言う。

特別編『オルディーナスと7つの世界』

？デルクラル（旧不思議界）
『人間界の隣にある美と創造の神オルディナスが作った神と妖精の国
魁ノ国（怪）をはじめ琵琶国　伊奈国　雪見国などの国がある
後に魔神ガロスによって荒廃したが、？ｅｎｕｓ達の活躍によって
蘇る
？デリ・フーバ（菜の国）
『妖精神達によって再生された不思議界　南は砂漠の国エルフ　東
は貿易の国ライオマ
　西は舞踊の国ミレーネ　北は春と夏が無い国ルイクス　と言う国
が四方を取り囲んでおり
　その中心に首都エンドラがある
？架空惑星Ｌａｏｎ
『異世界にあるだけで　元々は故郷を失ったモームディア人たちが
猿人と交わり築いた
秋葉原を中心に発展した世界しかし、堕天使シスフィーナ（女性体）
によって死と恐怖が
渦巻く異様な世界となってしまい　首都レシアの王女まゆゆとの間
で戦いが起こる』
？惑星ランダリマ
『４８太陽系にあり　太陽ハーネストを中心に　シ―タ　ヘルス
アリスの
３つの惑星（えいせい）から成る星ルーク王によって平和が築かれていたが
　鋼鉄の要塞ザブングルを率いて魔女軍団（まりばろす）軍団が侵略
以後ヘルスの戦闘民族だった　アストロ・サークと銀河中から集ま
った８勇士による戦い『時空大戦』が
王女カディナ・ブライの元で、数十年にわたって続けられていたが
　レデュフ・ブライの代に戦いは終わり

遂に要塞化させる。』

?アトランタス（たかみがはら）

『ノースリーブ神話に出てくる天の神タカノア　地の神コジマ・―ハ　海の神ミータが住む

ベーゴマのような世界で人間界（たかみな）とは　アッカンベと言う橋でつながっている

魔神ディゲールによって一旦消滅したが　謎の存在ゼノンによって復活する

しかし蘇った魔神たちを永久に封じるため神々の一人キモト・サヤの命（みこと）が

人柱となって地下世界に縛り付けている。

?地獄（ですくろすと）

冥府の王デス・マーニ（ナムディア）が支配する世界で3つの渓（そう）に分かれていて

　サンズス川が繋いでいる最下層にはかつて神に反逆した2面性を持った堕天使シスフィ―ナ

（ここにいるのは男性体と思われる）が凍り漬けにされている

魔神5つ星によって全ての世界を牛耳ろうとしたが　裏切り者

魔獣アモンのオタク技『バッカル・コーン』によって露と消える

?地球

『西暦２００?年、地球は異星人による侵略により危機に瀕していた、そこで政府は全国の自衛隊の上に

新組織を設立したのだった　それが地球の守護神を意味するアース・キーパー（ＡＳＫ）であった

コスプレ星人のクロノスに力を分け与えられた『みなみ』と『優子』がコスプレ仮面となって戦う世界

だが宇宙からは絶対の破壊神ユダが星々を破壊しながら地球に接近しつつあった。』

特別編『オルディーナスと7つの世界』（後書き）

不思議界は『オズの国』がベース　Ｌａｏｎは『パラダイス・ロスト』
たかみがはらは『北欧神話とディケイド』地獄は『ダンテの新曲』
ランダリマはジルーシア『宇宙からのメッセージ銀河大戦』
そしてコスプレ仮面の世界は『ウルトラマンシリーズとプリキュア』
等をそれぞれアレンジしたものです。

?X?:?放浪する黄金宮殿（前書き）

昨夜のテレビの夢から始まった　マオンは
親友の野田麻美と共に昨日の古本屋へ出かけた。

?X??放浪する黄金宮殿

（1）美少女大戦(あいどる)！

物語は昨日のテレビのから始まった　死と砂漠に覆われた異世界〔ハイドラ〕
果てしなく荒野が広がるその世界では〔アルティメス〕と呼ばれる
少女戦士
たちがいて　皆、アイドルシティの中心にあると云う栄光の力（A・K・G）を求めて
争いを続けていた龍機神(どらごんあーま)と呼ばれる龍を駆りた
黒き龍〔ブラック・デザイアー〕を操る孤独な戦士アッキーナ
　紫の龍〔デス・コメット〕を操る、魔法戦士クミコ
そして銀の龍〔ハローアリエス〕を操る巨乳戦士ヨシエ等少女達が
独特の髪型をした女王セイク率いる〔エンジェル・ウインク〕
と凄まじい戦いをくりひろげられていた
「死ね～セイクォー」っと〔エンジェル・ウインク〕に迫る黒き龍、
だがその向こうから
　凄まじい風（勢い）を巻き起こしながら
最強龍〔フォーT8〕と共に　美女戦士集団〔アキバ・ナイト〕達
が南の空から現れ
戦いに参戦した〔フライング・メイヴィー〕を駆って　紅の騎士
ミナミ・タカが
〔ミーとケイ〕を操るデイジーピンクを『ズバーババ』っと切り裂
いた
『ギエーッ』と雄たけびをあげて倒れる　双龍
それを猛牛娘。（むーにーむすめ）達が帝盟龍〔ラブリボ・ーション〕
を操り必死の抵抗（巻き返し）をみせていたそう　風陣の剣を操り
青の戦士麻衣がチビモ二戦士に迫る

『ヤアー』迫る麻衣の剣　それを地上で『セクスヴィー・ビーム』の体制で迎え撃つマリア
そうこの世界こそ〔美少女大戦〕の世界だったのです。
○マオンの勉強部屋
「はっ、ここは」と私はパソコンの前で目を覚ました
「また、パソコンしながら眠った　なるね」
と，ナルーが注意した
「あれっ、そうか？昨夜　エッサ・ホイサのコーナではじまったミニSFドラマ
〔美少女　大帝☆アキバ・ナイト〕を見ている途中で寝たんだっけ？」
と　私が考えていた時
「まおー　何してるのさっきからあさみちゃんが待ってるわよ」
とゆっかさんの呼ぶ声がした
「そうだった　サミーと出かけるんだっけ？」
とようやく思い出したのだった
「もーう、いっつもマオンはノンビリしている　なる早く支度するなる」
ナルーのお小言がはじまりそうなので
「私はこのかっこで言いよ」
と言うと、大急ぎで部屋を出ていった
「さみー、おまたせ」
「じゃ出かけよか」
　3人は昨夜の不思議な本屋に出かけた
○ふしぎ堂
「今日はどれから読もうか」
「この物語なんか面白いと思わない？」と言ってサミーが手にとったのは
【飛ぶ黄金都市】というRピーグマンと言うエジプトの作家が書いた本だった

「昔々・・」と読みはじめたときから私達はその世界の中に入って行ったのです
○　紀元前２０００年
（２）異世界マミュス
「熱っ　何でこんな砂漠にいるのナルーあんたまたなんかしたでしょ」
「ナルーは知らない　なる」
そこは見るからに砂漠、私達はどうやら何かの作業をしているようだった
「そこの２人変なのと遊んでないで働け」
と言ってスタンカーメンのようなマスクを被った肌の黒い男達が鞭を片手にそう言った」
「ナルーは変なの　違う　なる」
「あの私達女性だから、力ないんですけど」
と同時に言ったらその黒い人は
「つべこべ言わずに向こうを手伝え」と言っって怒鳴った
そこでは３百人を超える人たちが男も女も力を合われて大きなレンガ
（後で聞いたら金剛石らしい）を運んでいた　そこには２０メートルもある
ピラミッドが幾つもならんでいた
「これはもしかして、テレビでよくやっている　ピラミッド建設では（すこしデザインが誓うけど？）」
その時
『ウァー』と言う悲鳴が上がりピラミッドが『ドドッ』とピラミッド崩れ
逃げ遅れた２０人の男女が閉じ込められた
監督らしい例の黒人が
「第２０１マザーミッドが崩れた、助け出せ」
と号令をかけた　看護士志望のサミーはつかさず

「あのー私達じつは医療関係者です」
と手を上げたので私とナルーはその助手と言う事で辛い労働から免れた
そこには医療の責任者であるアリナィと言うアラビア風の衣装を着た女性が
「実は先日にも事故があってその時医師団長のQちゃんが亡くなったの
で助手だった私は新しい医師団の到着を待ってたんですが
それもクナイル川の反乱で遅れて困っていた所へあなた方が来たと言う訳なの」
と事情を説明してくれた
「私看護士目指してるので現場実習には丁度よかったです」とサミーは満面の笑みを見せた
私達がいる盟空堂（めくる）と言う建物の中には次々と怪我人が運びこまれてきた
ナルと私はサミーの見ようみまねで手当てをした（金魚が？）
そしてようやく怪我人の手当てが終った時さっきの怪しい黒人が
「いやあ、さっきは失礼しました」と言って黄金のマスクを外したそこにはクレオパトラを想わせるような美少女がいたのだった。
（3）アリカ・レイ
「私の名はアリカ・レイこの砂漠惑星マミュスの指導者（王女）です」
と語った　私（まおん）の「何故こんなにピラミッドを作るの？」
と言う質問には
「もちろんこの星を脱出するためです」と涙ながらに告げた、そしてマミュスの王女
アリカ・レイの不思議な話は始まった
「昔この世界には何もなかったの　あるのはただ広大な砂漠とメッシルアと
言う蟻だけでした　でもある時天から一筋の光（オルディナスの霊

光）が降り注ぎ私達を
急激に進化させたのです（わっアギトみたい？）
そうしてこの星の人間となった私たちは「この星を繁栄させなさい」
と
言う天の声に従って我等メッシルア人達はこの砂漠だけの星に独自
の文明を作りました」
「それがあのピラミッドなるね」
「そのとおりです、しかし私たちには予期せぬ出来事が待っていた
のです」
「予期せぬ」
「出来ごと　なるか」
私とナルーは顔を見合わせた
「王室の天文学者であったマモー博士が　まもなくマミュスを通過
する
遊星ラーメタス（どっかで聞いたような？）　によって
この星が粉々に砕け散ると発表したからです」

キャラクター名鑑？シスフィーナと魔神五つ星（前書き）

２つの性（姿を持つ）初代天使長（現在3代目はＡＫＢオタクのミーナ）
シスフィーナはオルディナスの支配するアトラントを支配しようと天界で反乱を起こした　パラレル世界を支配しようとしたのが女性体で
５つ星によって反乱を起こした方が男性体である。

キャラクター名鑑？シスフィーナと魔神五つ星

暁の天使と呼ばれ神最も愛された天使、それが４枚の翼を持ったシスフィーナである　戦い敗れた彼は地の底深く閉じ込められた後年　地獄を旅したダンテが最下層に凍り漬けにされた悪魔について「巨大なる蝙蝠の翼と３つの顔を持った悪魔神セスフィヌス」と書いている

ダンテは他に『ピースサインの天使』と写った絵も残されているのだが・・・

〇魔神５つ星

シスフィーナが天界を支配するために様々な世界から集めた魔神

？異次元都市クライズの魔女【マリン・バロス】

クライズ人たちを妖怪に変えた　異世界の魔女　不思議界ではザザーラ

人間界では巨乳聖子と言う元アイドルの実業家を名乗っている。後にガウトによって　第４８太陽系の支配に乗り出す

？暗黒界デルドの指導者【ザ・シャドー】

７つの宇宙を渡る歩いてきた悪魔集団のリーダー

？未確認惑星ダクバァの使者　【ザ・バルバゼ】

後にランダリマ制圧に力を貸したバル・モアの妹　姉よりも残酷である

？サターン星の怪物【イカデ・コーラ】

元々は天本博士がイカとコーラを合成して作った生物だったが邪悪なエネルギーを吸収しサターン星を消滅させてしまった

？魔獣アモン

アモン彗星で生まれた魔神だが　妖怪と人間とのハーフである美貴ティを

恋したため　裏切り者の名を受けて　全てを賭けて魔王と戦った

悪魔耳は２０年先も聞こえる猫の耳、触角から放つアモンアローは

怪光線
アモンウイングと言う鷲の翼で空を飛び　両目から出すアモン・アローは雷光線
そして究極の最強技『バッカル・コーン』を放つ
なお両方とも同じだが　男性体と女性体は『オザワとセンゴク』のように
ことなった考え、知識を持っている（女性体のほうが知性があるようだ）
魔犬シルクウェル
シスフィーナが飼っている犬、なお魔界の王デス・マーニーの所にいるのは違う種類であるらしい。

？？？？放浪する黄金宮殿２（前書き）

放浪する黄金宮殿の続きです。

?????放浪する黄金宮殿2

（4）突然の異変

「それはどういう事」「どういう事　なるか」

私達は同時に叫んだ　アリカ王女は落ち着いて

続きを話してくれた

「我が王家に仕える天文学者がまもなく

遊星アロロがこの星域に現れる、そのときこの異世界マミュスは砕け散るだろう

と計算したのです」

「うっそー」「それはたいへん　なる」

私達は同時に悲鳴をあげた

「では時々地殻変動とかあるのですか」

と尋ねたサミーに

「いえ、それは大丈夫です地震で壊れる訳ではないので」

と　王女は笑顔で答えてくれた。

その晩はアリカ王女の宮殿エスメドーズで歓迎を受けた

「このお肉とっても美味しいけど　一帯何ですか？」

「あらゲメラ・ゴモラですけど、マオンさん達は食べた事無かったですか」

「それ　新しい怪獣か何かなるか（・・？」

そこへ馬の顔をしたコゲ爺と言う執事さんが

「このマミュラ地域に住む大ネズミですよ」

「ウゲーネズミ！！」

「食っちゃったなる」

「でもマオンが作るパイよりも断然美味しいと思うけど」

「同感　なる　同感　なる」

「あんたたちねーェ　二人して私を　コケにしなくても良いじゃない」

必死で抗議する私に大爆笑の一同だった
そして豪華な食事会の後はダンスショーが続いた
皆マルチバナ＝告白と言う曲にあわせて
マレーランと言う腰を激しく振る踊りを踊るのだ
「こう?美味く踊れない」
と私とサミーはお手上げだったがナルーは
「こういう風にやる　なるよ」
と　ナルーは腰を?くねくねさせて上手に踊ったので
「あんたなんでそんな上手なのよ」と尋ねると
「それは秘密　なる」と教えてくれなかった
皆はナルーの踊りに惜しみない拍手を送ったの
でもその時『ケイコク・ケイコク巨大な彗星が間もなく激突する』
と言うコンピューターの声が聞こえた
すると賑やかだった会場はは静まり返った
「そんな、予定よりも5年も早いなんて
全員マザーミッドで脱出してください、あなた方も早く」
ありか王女が叫んだ
その瞬間宮殿が大きく揺れ建物が『ガガーン』と崩れ
その破片が『ザッザッ』と降って来た
「キャー」「はやく」「ついて来る　なる」
私たちはそれぞれパニくりながらも脱出を急いだ
そして外へ出た時地割れに落ちてしまった
『アレーェ?』
（5）旅する人々
○ふしぎ堂
「コーヒー出来たけど飲むかい」と竜吉じいさんが入ってきたので
私たち3人は同時に『ハッ』っと書店の机の前で目を覚ました
「ここはたしか?」
「ココアじゃなくってコーヒー　なる」
「いやっそう言う事じゃなくて」と2人のやり取りに

「相変らずね、それより私達夢でも見てたのかな?」
とサミーが言葉に3人は見た夢を語った　そしたら皆同じ夢を見たようだった
「つまりぃ皆で同じ夢みたって事よね?」と
竜吉じいさんに尋ねたら
「この世界は偶然に満ちているホッホッホッ」と笑った
「まさか、このおじいさんは　まさか　なる?」
と　ナルーは小声で呟いた　竜吉じいさんはナルーにウインクして
「それより続きを開いてごらん」
と言って【飛ぶ黄金都市】の最後のページを開いた
そこにはマミュス星が遊星アロロの激突によって
砕ける場面とたくさんのマザーミッドで宇宙を放浪する
メッシルア人達が描かれてあった
「無事だったんだ」と喜ぶサミーに
私は「早く安住の地を見つけられると良いね」と笑って答えた。
その晩私とナルーは新天地でアリカさんたちと再開する夢を見ていたのだった。
「マオン　夢の中でおしっこすると（また）おねしょする　なるよ」
「そうなのよねーって、ちがーう最後にしたのは幼稚園（ナルーが覗きこむ）じゃー
無くて　小学校1年の時　いや高校2年だったかな?（おいっおいっ）
とにかくずーと　づーと前でしょーが」
と夢の中で何故か焦っている私であった。

（6）ゲーム〔アイドル大戦〕発売

その後大好評を博したアキバっ子たちのミニドラマは玩具メーカーのオナミと
エッサ・ホイサ政策委員会とでゲームとしても企画された

その内容はゆっかさんの〔ツテ〕でクリエイターさんに聞き出した所によると
「彼女等はそれぞれのアイドル世界を統一させようと争っているんだけど、
それが実現するとハイドラ世界は消滅するのだと言う
だから　そうしないために、何者かが使者としてアキバナイト達を送った」
と言う事らしい
そう言えば昨日の予告編でも存在と言うのが現れてそんな様な事言ってたっけ?」
しかしそれぞれの夢をかけてそれぞれのアイドル達が戦ってるけど
それが実現すればその世界は終る?それって矛盾してない　大体
その世界を
作った存在って誰よ、予告編の声は元バーニング・ブロスのマキティーと結婚した
ショージキさんの声に似てたけどさ?
とにかくバーニングさんたちのコントより面白そうな番組だと思おう。
またポップの神様マイケル・ホーガンが作ったゲームのアイドル大戦のイメージ曲
〔命がけのサプライズ〕も発表されたのだった

?????放浪する黄金宮殿2（後書き）

砂漠と荒野が支配する『異世界アルド』
レベカ（べっき）アッキー　みなみと言った美少女たちは
それぞれの夢を賭けて戦いを繰り広げる
そこは『アイドル大戦！』の世界だった

？？？？アイドル大戦の世界（前書き）

叶えたい夢を求めて全ての少女たちが戦う
そこは魔空都市アルド

?????アイドル大戦の世界

○渋谷　マオンの部屋
（1）将来への不安?
「このままで大丈夫?だろうか」
と真剣に考えていた。
私　朝倉マオン（１８）は様々な架空世界の旅を得て久しぶりに渋谷の町に帰ってきた
でも現在の状況が改善されてるといはあまり思えなかった
と言っても今度はアイドルの話しじゃ無くてこの地球　特に日本の事だから
勘違いしないでね。
そりゃー主民党のアリャ・カン　カン首相が打ち出した　高校の無償化や子供手当てそれと
実現が疑わしい高速道路の無償化は　一部の人たちには大変ありがたい政策なんだろうけど
財源はどうするんだろう?私達が将来払うのならとんでもない誤魔化しのように思えるのだけど
私は勉強部屋のデスクに座って珍しく将来の事を考えていた
「ならまた行って見る　なるか?」
と朝の散歩から帰ってきたナルーが　軽く言った
「だってこの前の時は散々だったじゃーないのさ」
「あれは事故なる　今度こそ正常な未来　なる」
そう言うと　ナルーはいつもの呪文を唱えた、すると突然
何も無い空間が『バーン』
と開き　マオンと亜空間に突入したのだった
（2）魔空都市アルド
『ゴー』と言う亜空風が吹きすさぶ中　私とナルーは一直線に突き進んだ

「確かこの前は　この辺りで何かにぶつかったんだよね」
「シー、そんなこと言わないほうが良いなる」
ナルーが言うのとほぼ同時に
「警告する　亜空間犯罪者まゆゆ　速やかに空間警察の指示に従え」
「やなこったぁ、ここまでおいで」
とお尻を『パンパン』するまゆゆ
「あれれ　これはこの前と同じ場面では??嫌なッ予感」
と　考えていると、再びパトカーが『ドバーン』と弾き飛ばした
『ヒエー』
「やっやっぱり来ると思ったー」
「なんでいつも　こうなる　なるかー」
マオン達は何処かの荒野に弾きとばされていた
○ガロリアンの荒野
「イタタ、ナルーいったいここは何処よ」
「さあ　見たとこ一面砂漠で父さんの生まれ故郷のエルフに似ている
なるが　何か感じが違う　なる」
そこは果てしない砂漠と荒野が何処までも続き、ウーちゃん　モーちゃんと言う蜘蛛の様な
生き物が歩いているだけだった
「ここは架空世界の一つ〔魔空都市アルドじゃ」
と　後ろで声がしたので振り返った　そこには
目と鼻が三つもある奇妙な老婆がいたのだった。
（3）アイドルたちの戦い！
『ガガーン』
大地が大きく揺れた　そして砂煙の向こうにある魔王城フロ―レラから女帝神セイコーが
カラスの顔をした戦国武者風の兵士ドルバーをしたがえて出現した
赤いリーダーらしき者が青いドルバ達に号令をかけていた
そんな彼らに　何人かの少女たちが戦いを挑んでいた

天龍『ハローアリエス』を駆って戦う巨乳戦士ヨシエ
その向こうからは黒龍ブラック・デザイアーを操り美少女が舞い降りた
「うっそー、あれ確か　ヘサクゴンのアッキーじゃない」
「それに『イッテQ太郎』のレベカ（べっき）もいるなる」
大空からは怪光線をかわしながらラルマシーン（雲の乗り物）を操りチビモニの
マリリが現れた　それを追って　戦闘龍フォーティース・エイトと共に
暁の騎士タカみなが舞い下りた　タカみなの繰り出す〔ダイアモンド・ソード〕
をマリリが俊敏な動きでかわすと腕に折りたたんである鋭い電磁（なちみ）カッターで
タカみなの頭部を狙って『ヤアーッ』と切りつけた
だが、みなはそれを肩に付けている〔サプライズガード〕で『ダバーン』と弾いた
「ファイナル・ソード」空中から襲いかかるたかみな
すっ飛ばされたマリリは地上で受身をとると『セクスィービーム』の体制で
迎え撃とうとしたところで一瞬動きが止まった
岩陰からそれを見ていた私たちは
「みんな何で戦って　るんだろう？」
と質問した、すると老婆は無い口で？
「ここはアイドルの世界、全ての女性達が最高の力　キングアイドルの座を求めて戦う
【アイドル大戦】の世界なのじゃ」と語ったのである。

キャラクター名鑑？マオンとアイドル大戦の世界（前書き）

アイドル大戦の世界の構図です。

キャラクター名鑑？マオンとアイドル大戦の世界

現在の参加者

□ラ―マォン（マオン）
『亜空間で再びパトカーに激突しアルドへ』
本名　朝倉マオン（１８）　得意科目　なし　好きな者　パソコンと女性アイドル
ナルー　本名　ナルネリア・フレ―ロ　精霊の力はほとんど使えないマオンは剣道部だったので剣が使える（既に退部してるけど・・）

□アキバ・ナイト　現役アイドル
『核戦争で母校ＡＫＧ学園に生き埋めになった姉、竹島麻衣や仲間を生き返らせるため戦いに参戦する』
たかなみ（１９）　本名　竹島波　　麻衣の妹
麻友理母（りも）（１９）知能知数２００の天才エンジニア
武器　　戦闘龍フォーティース・エイト
ダイアモンド・ソード

□チビ・モニ　元アイドル
マリア（２７）　本名マリア・チビチ―タ
『地震で故郷ハローランが滅び親友裕子との約束を果たすために戦いに参戦した』
ノンノ　マリアが飼っている、真っ赤なウサギ
武器　ラルマシーンと言う雲の乗り物を操る
腕についている電磁（なちみ）カッター
セクシー・ビーム

□セクサ・ドール　元タレント
ヨシエ（３１）　本名　神原芳恵

『目的は不明』
武器　巨乳龍ハローアリエスとアリエスの矢

□ツインズ・ハート　タレントのトレジャーハンター
『何でも夢が叶うと言う、お宝を求めてアルドにやってきた』
レベカ（２４）　レベット・ベッカ
アッキー（２４）　亜紀（性は不明）
武器　ヘクサ・ドラゴンを操る

□ケント（２６）
恋人　花園真理（２４）を　生き返らせるため　カノウ御前に力を貸す
アストラルギアで　ブラック・ドルバに変身する

□　カノウ御前（闇の皇帝）
『ミカ　キョウコの双首（そうとう）の魔女
ラス・ボスの雰囲気だがはたして？』

□クイーン聖子
　本名　加町聖子（３２）　元アイドル界の女王（とっぷ）
ＣＤが低迷しても給料で補っていた
『再びアイドルとしての栄光を取り戻すため魔王の宝珠（きんぐ）を使用したが逆に宝珠が放つ欲望に呑まれ魔人と化す（ダース・ベイダー見たい）
帝王龍　エンジェル・ウイングで戦う
武器　魔王の剣（らうどねす　つるぎ）
要塞城フロ―レストに住む

□亜陀魔（わだるま）
フロ―レス城にいる　スパイ蝙蝠　態度がでかい
聖子のスパイと思いきや実は・・

□ディジーピンク　元。アイドル
『同じく欲望に呑まれた元アイドルの2人』
聖子が暗黒より生みだした双子の戦士　ミーとケイ（37）
双竜　カメレオン・アーミーを操る

□ドルバ軍団
『赤い色をした　レッド・ドルバ率いる　カラスの形態をした魔族リーダー以外青い色をしている

□ウシババ（？）
『耳と目が3つずつあり、口が無い代わりに触覚で話す
中立国ナーダの府場（ふば）の洞窟で『カナル』と言う喫茶をやっているがその正体は謎」
ネオ少年（7）
『ウシババの孫と名乗っているがその詳細は不明』

？？？？もう一つの歴史（前書き）

外の世界へ脱出を試みた者たちが
築いた魔空世界アルド　そこは
もうひとつの地球だった。

？？？？もう一つの歴史

（４）異次元からの逃亡者

○ナーダの洞窟

私達はお婆さんの案内でナーダが作ったと言う

洞窟につれてこられたのだった。

中からは

「ウシババ　いま帰ったんか？」と、肩に蛭を乗せた７歳くらいの男の子が

元気良く飛び出して来た

「お婆さん」

「ウシババじゃよ」

「ではウシババさん　この世界は何故こうなっているのかを　まず説明してくれる？

出来れば分かりやすくネ」

「マオンは物分り悪い　なるからね」

「そう　悪いのよ・・って何言わせるの」

「フフフ　それじゃーこの世界の成り立ちから話そうかのう」

ウシババはそう言うと静に語り始めた

「遠い昔　わし等の祖先はマクヴェルと言う

氷河世界に住んでおった、だがその世界はそうさなぁ　お譲さんの世界で言うなら

ちょうど北海道位の広さじゃろうか、平和で退屈なところだったのじゃた」

「それは良い事だと思うけど？」

「嬢ちゃん　本当にそう思うかね、何一つやることが無い世界じゃぞしかも周りを厚い氷の壁で囲まれていて外に出る事も出来ん」

「・・・」

「とにかく我等の祖先はその世界から新世界へ　脱出を試みた　じ

ゃが
マクガーク（芸術の神）が支配するその世界の掟では脱走は即ち犯罪じゃったんじゃ
故に脱出を試みた先祖達は皆逃亡犯として〔邪＝ダクト〕と言う牢獄に
幽閉されたんじゃよ」
「へーそれは厳しい掟　なるね」
「彼等マクヴェル人たちはダクトの中で子を産み　その子等がまた子を産み　といった
具合に長い間　何故自分達が暗い牢獄で産まれたのかを疑問に思う物などいなかった
しかし　アストラ・バーンと言う若者がついにダクトからの逃亡に成功した
最初の世代から数えて実に数百年後のことじゃったと言う」
「うわー凄―い」
「マオンうるさい　なる」
「フフフ・・科学者であった彼は　マグネクラーと言う氷河竜機を操りマクヴェルの壁を壊す
事に成功した　そして伝説の理想の地『たかみな』を目指して出立した
　そして長い放浪の末　やっとたどり着いたのが　もう一つの地球とも言える
この星アルドだっのじゃ」
（5）ノブナガのテンカ統一完了？
「もう一つの地球　なるか？」
「それってどう言うことよ」
混乱する私とナルーの質問に答えたのは
ウシババばあさんの孫のネオ少年だった
「ばーばに聞いた話しによるとね　この星は
驚くほど地球の歴史といっちするんだよね

・・ただしある一点を除いてはだけどさ」
「そっ、その一点とは？」
「それはおねえちゃん達の世界で起こったことがこっちではおきていないのさ
「・・・」
「だからあっちで起こっていることがこちらでは無かったり　するんだよ」
「？？もっと分かるように説明してほしい　なる」
せっかくのネオ少年の演説ではあったがちっとも要領を得ないので、再びウシババが説明する事になった。
「この地に降り立ったアストラ・バーンは類人猿のホモ・サピと結婚し　たくさんの子孫を残した　その一人が？暦１５３４年に南の国応和（おうわ）で生まれた　ノブナガ・バーンだったそのころ　このアルドはテンカルドと呼ばれる戦国時代じゃった誰もがテンカ統一をめざして争そう群雄割拠の時代だったのさ」
「うん分かる　なる」
「一口にテンカ統一と言ってもそうたやすい物ではない　なぜなら　西の国魁人からはアマゼノン・信玄　東の治護平（ちごだいら）からはウエノアシ・謙信そして北の帝魔からはイルカリア・義元などが次々とテンカをを狙っておったんじゃ
「その一番手が最大の戦国武将イルカリア・義元と言う訳ね？」
「ほーう、マオンにしては察しが良い　なるね」
「うるさい　金魚のフンは黙ってて」
「あっまた言った　ナルは金魚のフン違うマオンの教育係なる」
「どーこが教育係よ？あんたなんかただのフン　じゃない　ふん」
「ひどーいまた言った　なるー」
ナルーはふてくされていたけど、これはもはやあたし達２人のコミ

ニュケーションになっているのだ
「ノブナガは？暦１５５８年に身内の反乱を押さえ　ようやく応和の国を統一した
だが　義元の方はその２年後　ついにテンカルド統一を旗印に２万５千の大軍を率いて
龍馬タコノ足を操り　都テンカルを目指していち早く兵をあげたんじゃ
「そして狭間森近くで休憩をとっていた義元の軍勢をわずかの人数で打ち破った
ノブナガによって３百年に渡る平和国家が築かれていったと言う訳じゃよ、時に
ノブナガ・バーンが５０歳の事じゃったと云う」
（６）アイドル大戦の始まり
「なるほど、少し違うわね？」
「だが男性を中心とした国家は向こうの世界も　こっちの世界もかわりは無なった
あの日までわ　な」
「あの日って　何なるか？」
「もちろんおねえちゃん達の世界では起こらなかった
ノースト・ラムズの大予言だよ」
「・やっぱり？」
「あれは忘れもしない　？暦１９９９年出来事じゃった　宇宙から巨大な牛丼彗星が
このアルドに降り注ぎ　その影響で大気は乱れ津波や台風が巻き起こり
９０パーセントの都市は消滅した　そして連鎖的に起こった地震によって
　残り１０パーセントの都市も壊滅していったんじゃ
放射能の影響によりこの世界は永遠の砂漠が支配する死の星となった
もちろん人口の９７パーセントは失われた

のじゃが無論生き残った者達もおった
だが　生き残ったものの中から復興に動いたのは地震前威張り散らしていた男性ではなく
女性達だったんじゃ、彼女等によって都市の再生は続けられていった　しかし生き残った者達は
全てタレントやアイドル達であった困り果てた彼女たちの元にゼノンと名のる
不気味な男が現れ
「この世界アルドを再生したいなら皆　武器を取り戦うのだ」
と告げた
そのとき人々の脳裏に黄金に光る巨大な塔が浮んだ
ゼノンは「今　諸君らの心の中に見えているのが黄金魔殿フローレストだ
諸君等はその場所を探し　その中にある最高の力　キング・アイドルの称号を得るのだ
さすれば全ての願いは叶い　世界は再生に向うだろう」　と　告げたんじゃ」
「そして最初にそれを手に入れたのが
アマゼノン・信玄の末裔である　セイコ・フローネアだったと言う訳さ、もっとも今は
そのありかは不明らしいんだけどさ　おねえちゃん」
私達は　予想以上のウシババ達の話に完全にのまれていたのだった。

?.?.?.?.もう一つの歴史（後書き）

ＡＫＧ学園の竹島波（たかみな）のクラスは縄文人が作ったと言う
地下空洞を写生していた
ドリーム・スターと言うアイドルグループは地元ハローランの
イベントで『ＫｅＭｅＫＯ号』の処女航海にあった
それぞれが　精一杯　青春横臥（まんきつ）していた
そんな時　大災害がアルドを襲う。

?????それぞれの時間（前書き）

トゲトゲ・バッターと言うマイクロバスで縄文人が作った地下空洞を見学に言ったＡＫＧ学園の生徒たち
そして故郷ハローランでＫｅＭｅＫＯ号の処女航海のイベントに参加する
ドリーム・スターと言うアイドル達
だが宇宙では異変が起こっていた

？？？？それぞれの時間

○バスの中
ＡＫＧ学園の生徒たちは縄文人が築いたと言う地下空洞を見に
マイクロバスで空我山（くうがざん）に向っていた
「えー　みんなバスは間もなく地下空洞に到着するので
そろそろ降りる準備やで　分かってるなあ」
「そうそう　こないだの写真　なみ（竹島波１７）の顔ったら無かったよ」
「そう言う　さやき（秋元　彩希）だって　変な顔してたじゃない」
「そっそうかなあ」
「あなたたち、さっきからずーと喋りっぱなしじゃない　少しは静かに出来ないの？」
向こうの席で　厳つい目の女性が波達を睨む
「そうだよ　はる（小嶋春菜）様の言う通りだよ」
「ゆうこなん（大島　夕凪）も　そう思う　なん」
「みーさ（峰岸　岬）　あんたまた　こじはなの腰ぎんちゃくやってる」
（小さい時はなみ　なみーてあたしの後バッカ付いてきた癖にぃ）
みーさの豹変ぶりにたかみなはため息をついた
「ところでなみ　らぶたんは？居ないみたいだけど」
辺りをキョロキョロしながら波とそっくりな女性が尋ねる
「ああらぶたんねえ　らぶたんなら、今日は妖精さんと　ピクニック何だってさ
まい姉ちゃん（竹島麻衣）１８」
「こらあ＞、〜´＜　みんなぁ俺の話を聞いとるのかァ」（俺の話を聞けーィ）
「誰かあモッキー（木ノ元ユキナ）の尻に敷かれているやつが何か言ってるけどかまってやったら」

とたかみなの前の席に座っているクラス一の突っ張りで今時モヒカンカットの
あーさ（前野敦子）が行った
全員　先生の喋りを無視して何気ない会話に夢中であった
『バッタンコ・ギッタンコ』
トゲトゲ・バッタは　その名の通りバッタの形態をした　機械生命体だった
車輪の代わりに両足が付いていて　それで飛び跳ねて走行する
（何故か中は揺れないしくみになっている）
『ツイタノダ―』♪
トゲトゲ・バッタは空我山に到着するとそう言った
「チッ、もうツイタのか　もっと喋っていたかったのにぃ？」
麻衣たちは「ぼくはぁツイテいるねーえ♪」と歌いながらバスを降りたのだった
その時ちょうど向こうからは2人の男女が山から降りてきた
『ドテっ』
「ああーん痛ーい　すりむいちゃった」
「ひより大丈夫か　油断しているからそうなるんだ、　おばあちゃんが言っていた
たとえどんな時でも油断は禁物だと」
そう言ってその青年は指で天を指す仕草をしたのだった
時空にカーテンが現れ　赤いカメラをぶら下げた青年と少女が現れた
「ここが大ショッカーのアジトか？」
「・・司　なんだか違うみたいだよ」
「しまった　間違えた　行くぞ　夏ミカン」
「待ってよぉ　つかさぁ」
再び時空に消える二人
○ハローラン
同・ＫｅＭｅＫｏ号内
「えー本日はＫｅＭｅＫｏの処女航海を迎えるに言ったって　地元

が生んだアイドル
ドリーム・スターが来てくださいましたので進水式の号令をお願いします」
と司会のタレント黒ノ（ぶらっく）てつをが言った
「えーチビモ二のマリア・チビチ―タ（２４）です　今日は処女航海に呼んでいただいて
ありがとうございます・・・それでは出発進行だ　ぜえーっと（アニキかい？）
船はマリモ湾を出立していった
港では　オネェ楽団が『ポイポイポイポ・ポイポイポイポピィ』
と言う変なダンスに見送っていた・・・
しかし　宇宙の彼方からは　巨大な牛丼彗星がアルドに接近しつつあった。

?????それぞれの時間（後書き）

彗星の激突によって都市の機能は８０パーセントは停止した
そして　放射能の影響によって　アルドは　砂漠と荒野が渦巻く
死の世界となった。

?????それぞれの時間2（前書き）

突如宇宙のかなたに現れた牛丼彗星は
全ての電力を無効にしていった。

？？？？それぞれの時間２

数年ほど前　『お宝探偵団』の突撃レポーターとして有名になったイギリス人とのハーフ　レベカとアッキーのコンビ　ツインズ・ハートの２人は
今度始まる新番組「お宝あるある探険隊」のリハーサルを
『アクア・ランド』で収録していた
「それではいよいよ始まりましたよ　あっきーちゃん」
「そうですねえ　レベカちゃん」
２人は声をそろえて「お宝あるある探検隊、あるある探検隊　始まりまーす」
とポーズをとって番組をスタートさせた
「それではレベカちゃん、最初のゲストはあの超大物ですよ」
「大物と言うとゴジラかなんかかな？」
「そんなことないでしょ、では登場してもらいましょう　本日のゲスト
出てこいやーぁ」
そして幕が開くと放映が晩方とあって、浴衣姿のセイコ・フローネア（３２）が現れた
彼女は２人の向いの窓辺の席に座らされた
お互いがじゅうたんに腰をおろして気楽な感じで話すと言うシチュエーションであった
レベカはゲストの位置を確かめ
「それではまずは海についての聖子さんの思い出か何かを頂ければ・」
「そうですねー海の思い出と言いますとねーえええええ？」
『きゃー』
突然窓枠が外れ　聖子は立ちまち滑り台を転がりながらプールへ
『ドッボーン』

と落ちた　落ちる瞬間　お尻が丸見えになっていた
「何よこれはぁ」
とたちあがったとき上半身がバッチシ見えた
ツインズハートの2人は　プラカードを掲げて　「大成功」
と雄たけびを上げた　そのドッキリは成功であったが
楽屋裏でスタッフたちが
「彼女が大スターだったのは今は昔、ポロッとでもなけりゃあ　使えないちゅうの」
と話し　全裸（ぬーど）シーンを何度もチェックしていた
それをドア越しに聞いた　聖子は
「・・くっ悔しい・・今に見てらっしゃい、ＡＫＧなんて飛び越えてアイドルとして復活してやるんだから」
と異常な闘志を燃やしていたのだった。
○半田病院　朝６時
　２０位の青年がベットに横たわる少女を見つめていた
「あら、巧さん今日は早いわね」
と　お尻がキュートな看護婦の真魚が言う
「風谷さん、今からフランスに旅立つので、こいつの事宜しくお願いします」
ケントは真理と共に画家になるために友人の勧めでフランスに留学する予定であった
だがその矢先　真理が突然の心筋梗塞で倒れ、以後植物状態が続いていたのだった
「フランスかぁ　あたしもいつか翔一君と2人で行ってみたいけど
　無理かな
でも　巧さんは頑張って画家（ふたり）の夢叶えてね」
「ええ・・それじゃあ行ってきます」
そう言って寝たままの真理にキスをした、その時彼女は笑っているように見えた
　ケントの脳裏には彼女がベルトを持って現れた　あの日の光景が

走馬燈のように浮かんだ
○空我山　地下施設
「うわっ、すっごいね」
と竹島麻衣は歓喜の声を上げた
「遅いぞみんな、もーうこないかと思ったんだからぁ」
セ―ラムーンのウサギちゃんのような髪形をした黒髪の女の子が携帯をイジリながら言った
波の親友の麻友　理母（りも）だった
「りも　あんた　いないと思ったら　何してたんだよ」
「悪い（わり）　わりい、出かけに「ジェット・ブーツ」が暴走しちゃってさあ
　修理してたら　バスが行っちゃった後だったもんでブーツで追い越して待ってたんだ」
と笑って説明した、その時担任の藤門先生がターザンの様な人を連れてきた
「え―みんな聞いてくれ、こちらが　縄文文化に詳しいアマゾン先生こと
山本官介（４１）先生だ　分からない事は先生に聞くように」
「アマゾン　トモダチ　よろしくな」
「私は学級委員の竹島麻衣です　そして以下愉快な仲間達です」
『ドテ・ドテ・ドテッ』
とみんなは一世に倒れた（吉本新喜劇か？）
「こらこらお姉ちゃん、ちゃんと説明してなさい」
と　なみの真剣な抗議にみんなは『わはっは』と大声で笑った
しばらくしてアマゾン先生が
「この洞窟を写生してみないか、縄文人の生活を想像してさ」
「なるほどそれは　面白いなあ　縄文人はモッキーの姿にしてやろ」
藤門先生は携帯に入っている奥さんの写真を取り出そうとした
「あれっ無いぞっ？いかん車の中に忘れてもうた　ナミお前取ってこい」

外は俄かに黒雲がかかっていた
「えーバッタ君に来てもらえば？」
「あほー、こないな狭いとこ　バッタ君入れんやろ　」
「だって　藤門先生　マイクロまで１０キロはあるよ」
「お前はマラソンの選手やから、走れば直ぐやろが」
「それは普通の道ならね　こんな狭くて凸凹道　あたしゃ忍者か（・・？」
「まあまあナミ　私も行ってあげるから」
と　りもがジェット・ブーツを２（組）つ用意した
「チッしゃーないなあ　先生がこれ以上尻に敷かれたら困るので行ってやるか」
「悪いなっ、今度埋め合わせるルデョ」
りもとナミはブーツをはくと『ダッ』と駆けて行った
○スルメ湾
ＫｅＭｅＫＯ号はスルメ湾の近くを通りかかった
「見て　マーァちゃん　桃色のいるかよ」
「違うよ　あれは小さい鯨だよ」
と窓から外を見た親子が会話していた、空は少し黒ずんでいた
船内ではドリーム・スターの歌謡ショーが行われていた
『唇見つめないで　青春はウォゥウォゥウォゥウォウ♪』
『いいぞ―フクちゃん』『ナチ子可愛い』『裕子はいつ結婚するんだ』
とまちまちのコールが飛んでいた
『ビィビィビィビィ』
そのとき　突然警報が船内に響いた　そして雨が降りだしたかと思うと
大波が『ドドッ』と押し寄せてきた
「船長　沖田船長　どういたしましょう」
「バカ者　突然来られてもどうにも出来んわボケェ」
「乗客の皆さま津波が押し寄せていますが、どうか落ち着いてくだ

さい」
「あのお船長」
「なんだ古代」
「誠に言いにくいんですが・・電力が停止しました　マイクも入っていません」
「何だとォ　どーしてだ」
　同時にいくつかのエンジンが爆発した
『ドバーン・ヅバーン』
「イーィ」
と吹き飛ぶ船員（戦闘員では）
船が揺れた勢いで　ドリーム・スターの5人は折り重なるように倒れた
『ドドドド』
『痛い』
ナチ子が叫んだ
『よッし擦り剥いちゃった』
『福ちゃん大丈夫だった』
とマリア
『みんな怪我無かったか?』
と　アリアと重なった裕子が唇を奪いながら言った
「うっうん　良かった（何が?）いや　無かった」
と目をトロンとさせてマリアが言った
宇宙に発生した　巨大な牛丼彗星は磁場を乱し、地球上のあらゆる電力を無効にしていた
「これは大変なことになった」
ＫｅＭｅＫＯ号の人たちは全員死を覚悟していたのだった。

?????それぞれの時間2（後書き）

武器を持って戦う少女たちの前に『ブラック・ドルバ』と言う戦士が現れた　そしてノブナガをも操ったと言う叶御前（おのう）とは一体？

キャラクター名鑑？敵のキャラクター（前書き）

カバナイの世界に登場した（あるいは登場する）悪人たち。

キャラクター名鑑?敵のキャラクター

?ガウト
原初の宇宙に存在した混沌(かおす)から生まれた雷獣神
魔女ザザーラを操り第４８太陽系の侵略を企む。
?ラウドネス
５つの国で構成させる　不思議界の東に位置する貿易の国ライオマ出身で
かつて暁の獅子と恐れられた軍神「巨大な力を持った者が全宇宙を統合すれば
それが真の平和につながる」と信じて女神オルディナスに対して反乱をおこす
ラマォダの想い人である。
?魔女ザザーラ
デス・フローラ―と言う巨乳星の王女だったが　ゴルゴーン（ユダ）のエネルギーを
受け魔獣　巨乳神となったコブラの顔に蛇の髪の毛を持つ　人間命は巨乳聖子である。
?メディーナー
ユダの分身で蜘蛛の顔にハブの髪の毛　蝙蝠の羽を持つ
?ヒミコ
かつて邪馬台国を支配した怪人物で　その正体はヒミコ星人である
失ったヒミコ星の代わりに地球にユートピアを築こうとした
無数のトカゲたちを操る
人間の時は紅井小春と言うプッツンタレントを名乗るが、メディナーとの関係は不明?
?マグロ星人
メディナ４天王の一人　マグロ星雲の出身でギュードーン１，２号を操り

地球を襲った。
?ブロッケン・ケイト
突然消滅したモームディアの出身だが　堕天使シスフィーナに寝返り
架空世界ＬｅＯＮを襲う　上下ＳＭクイーンのスタイルをしている
?シスフィーナ
女神オルディナスに最も愛された天使の長だったが、精霊たちを唆し
反乱を企てる　男性体　と女性体の２つの体を持つ。
?邪王・空（くう）
一点から発生し全ての物体を飲み込む謎の存在、人間や宇宙に溢れる
憎悪や憎しみなどの邪念の集合体ではないかと云われている
?ユダ（ゴルゴーン）
金星文明やアトランティスを死滅させた絶対の破壊神
９つの頭に牛の顔と鷲の翼を付けた姿で描かれており
その羽は　羽ばたいただけで時空を歪める力を持つ。
?魔獣アモン
デビル魔星系出身の魔族でシスフィーナの魔神５つ星のリーダー格
だったが
裏切り者の名を受けて　シスフィーナと戦った
触角から繰り出す「アモンアロー」両目ら出す「アモンビーム」
「アモン・ウイング」で空を飛び　「アモン・イヤー」は２０年先
の声も聞こえる（そりゃー大変?）
そして自らの命をかけた必殺技「バッカル・コーン」を放つ（しょ
うこたんとの関係は不明）
?ゼノン
フードを被り天使の羽を持っていて　マオン等を時空の旅に連れ出
した
敵なのか、味方なのか　人なのか（違うでしょ?）怪物なのか　一
切不明の謎の存在
?クイーン・聖子
本名は加町星子と言い　１９８０年代を代表するアイドルだったが

最近は　ポロっと出しの企画で呼ばれると言う屈辱を受けていた
震災後生き延びた彼女はフローレスト城を探し出し　キングアイドルを手にする事に成功する、しかしデイジーピンク同様
宝珠が放つ　邪悪な力に呑まれる、しかし完全に欲望の虜になったデイジーピンクとは違い　邪悪なエネルギーを操り魔人と化す（ダース・ベイダー見たい）
？叶御前（未登場）
かつてノブナガや道三といった輩を影で操ったと言う人物
人間界では　お能姉妹として　美香様、狂子様と呼ばれており
美香様は　たくさんの裸の男性たちを奴隷として扱い
狂子様は男たちを自分の排せつ物で支配している
お能御殿に住んでいるがその正体は不明である　アイドル大戦のラスボス的な存在。
？レイナ様（未登場）
『第３惑星　アリスのチバ・ル草原にある広大な　ミルダ城に住んでいる　気まぐれな王女
ＡＫＢリングに『変身』の意志を知らせるポーズを取り
機械神を操り、戦士レイズナーに変身して
アストロ・サーク率いる　正規軍に戦いを挑む
ザザーラは『ガウトの娘』と呼ぶが　その真意は不明　藤江れいなとの関係も不明

??　ひとすじの希望（前書き）

空我山の地下洞窟に閉じ込められた　ＡＫＧ（旧ＡＫＢ）学園の皆は
電力もない酸素も不足している状況下にあっても
「生きたい」と言う希望を棄てなかった。

??　ひとすじの希望

１９９９年７の月
ここアメリカ航空宇宙局ＮＡＳＵでは世紀の実験が行われようとしていた
○ＮＡＳＵ
「ではオナ子・・・行ってらっしゃい」
「ヨシヨシ」
「オナオナ」
抱擁しあう二人
一分後～まだ抱擁しあう　２分後～唇を吸いあう～３分後～お互いの胸を吸いあう
「あっああ・・オナ子さまぁ絶対服従いたしますあああ」
「・・あっ　あのぉ神原さん　そろそろ時間ですので　宜しいでしょうか」
と　宇宙飛行士の　山崎明美（２１）が注意を促す
実は千年後の未来で目覚めると言う世紀の実験に　宇宙飛行士でタレントの
河合オナ子（２４）が選ばれたのだった、彼女はカプセルの中でコールド・スリープに
入り　千年後に目覚めるのである　神原とは昔「飛び出せにゃん子りん」と言う番組で
『巨乳アイドルセクサ・ドール』として　共演して以来の親友であった
そのため一週間前から特別　オブザーバーとして参加していた
「わっ　わかったよ　じゃー　オナ子・・またね」
神原は　ＮＡＳＵのホテルで　別れをしのんで３日間　シッポリ濡れたはずなのに
まだ　踏ん切りがつかないでいたのだった。

○叶御殿（おのう）
2，３００人の裸の男女が金、銀、パール（プレゼント　懐かしいぞ？）
が輝く広大な屋敷に正座していた、やがて
『カッポン・カッポン・カッポン』
と笛や太鼓の演奏に乗って二人の美女が巨大な胸を揺らしながら
『イョーォ、イョーォ』
と見栄を切りながら現れた（歌舞伎かよ？）
「諸君　間もなく大王さまが降ってくる、この世界を変えるために」
と妹の美香が挨拶した
「みなには一層　忠誠を頼むぞ」
姉の狂子がそう告げると　みな一斉に彼女のお尻から排せつ物を貰うのだった
そして　その儀式が終わると　人間たちはみな野獣のように『ドルーブァー』と吠えるのだった
「ホッホッホッホッホ　服従の鉱物はあらゆる者の理性を奪うのさホッホッホ」
そう言ってし姉妹は不気味に笑った　その時大きな立体テレビでは
「フランス行きの旅客機が墜落したと言うニュースをやっていた」
○監視衛星・アダルト
「沖長官」
「なんだ良太郎　イマジンでも現れたか？」
「それが信じられない事ですが、宇宙に大きな牛丼が現れました」
「おいおい　何を言うかと思えば、さては　牛丼が食いたくなったな
電ライナーで　送ってもらうか」
「いや・・・そうじゃ無くて　マジで現れたんです」
良太郎が　あまりに真剣に言うので一也は　３Ｄスクリーンを見た
そこには　巨大な牛丼が　あった
「・・なんだこりゃあ　こんなの一分前には無かったぞ」
一也は地球に　緊急通信を送った

「巨大な牛丼が地球に接近注意せよ」と
地球からは
「マジすか」
「マジすか学園」
と言うパニックの様子が聞こえてきた、だが　牛丼が起こした大きな波を地球を包んだ
瞬間　全ての電力が停止した
「てっ　停電です　由紀先輩」
「そんなばかな、アダルトの自家発電は3百年は持つはず　それが何故？」
（地球のみんなはだいじょうぶかな）
暗闇の中でＮＡＳＵの気象予報士柏木（２３）はそう呟いたのだった
○空我山　転がり廊下
『だーン・バシーン』
藤門先生がバスの中に置き忘れた　カメラを取り　戻ろうと　ジェットブーツで
山道を駆けあがっていた時　昼間なのに突然辺りが真っ暗になり
ジェットエンジンが停止　その勢いで　麻友と波は
木に激突し谷間へ落ちて行った
「ヒエー！！！　りも　安全だって言ったじゃない？」
「バッテリー交換したばっかなんだけどな？　りもも解かんなーい？」
○地下洞窟
「なっ何だ　停電だ　みんな懐中電灯をつけろ」
「・・るせーなーさっきからやってる中の尻敷かれせんせい様」
と突っ張りの敦子が言う
「何でよ　こんなに電池持ってきたのに　みんな役に立たないじゃない」
学級委員の麻衣があきらめ顔で言う
そんな時　アマゾン先生が

「ついたぞ　俺の自家発電だ」
と火打ち石で火をおこしてくれた、しかし　辺りを見た皆が目にしたのは
大きな岩石が入り口をフサイデいる光景だった
「あんたたち何とかしなさいよ　はなは　こんなところで死ぬの嫌だからね」
「みーさ　だってまだやりたい事とあるしぃ」
「ゆうこなんたち　大丈夫なんだよねえ　先生」
「ここはアマゾンに任せろ　行くぞ大切ざーん」
と鎌を持って飛び上がったアマゾン先生は岩にはじかれて向こうの鍾乳洞に
『バシーン』とぶち当たった
「オノレィ今度はライダーキック」
ジャンプして岩石にキックだが
「ウおおおおお　足をくじいたぁ、オヤジさんごめんなさい」
そう言って気を失った
「バカはほっといて　とにかく全員で力合わせようよ」
「まいまいの言う通りだよ、ガタガタ文句バッカ言ってないでさみんなで押してみようよ」
さやきの一言でみんなは　入り口をふさいでる　大きな岩を押した」
「せーのォそれっ」
麻衣は　向こうの隅のほうでしゃがんでいる者たちにも声をかけた
「ほらほら　そこの5人、わさみも　らぶたん　はーこもみんな手伝った手伝った」
麻衣は手を『パンパン』と叩いて参加を促した
「もういちどー、それっ」
しかし　岩石はびくともしなかったのである
「やっぱ無理だよ　みーさたちの力では」
「そうだよ　あーみんは　助けが来るまで待った方がいいと思うな？」

「助け　そんなの当てにならないよ、それに外の様子は解かんないけど
もしかしたら　とんでもない事になってるかも知れないじゃない」
「とにかくはなは　もう嫌だからね」
「はな・・」
状況はみんなの気持ちから明るさを奪って行った
「ねえ　先生　もしも　もしもよ　このままの状況が続けば　私たちどうなるの？」
答えがわかっていながら麻衣は先生に聞いた
「・・電気は使えない　出入り口は封鎖されているとなれば、そのうち酸素が無くなる　そのあとは・・」
「みーさ　そんなのいやだよー　まだ死にたくないよォ」
みんなは口々に叫んだ　しかし　一番動揺していたのは意外にも突っ張りの　敦子だった
「いやだよー　あつこ　ちにたく　ないよーぉ」
実は彼女は　小さい時はいじめられっこだった、その対策として突っ張りを装っていたのだ
しかし　彼女の精神も　もはや限界であった
『いやーあ』『誰か助けてよ―』
みんなは常気を逸していた
「敦子落ち着きなさい」そう言って
『パシーン』『パシーン』
とみんなを張り手で活を入れたのは隅っこで泣いている藤門先生ではなくて　やはり学級委員長の麻衣だった
「みんな　歌おうよ　歌って　元気出せば　何とかなるよ」
「クスン・・こんな時にうたうの」
「歌うんだよみーさ　みんなで歌えば元気も出るよ　どんな時でも
たとえ明日が見えなくても
生きるために　精一杯努力をするそれが私たちＡＫＢ魂って　やつだろう？違うみんな」

そう言って右腕を・・右腕を・・
・・掻いた（外すのかと思った？）
「麻衣の言う通りだよ、私たちは　「誰も（みんな）旅の途中」何だよ」
「さやき」
「麻衣さん　最後になるかもしれないけど今までごめんね」
「さやきぃ」
「まいまい」
唇を重ねあう秋元と麻衣
「分かったよ　あたしたち最後まであきらめないよ」
アヒル口のともちんが言った
それはみんなの気持ちが一つになった瞬間だった
「敦子、みーさ　こじはな　ゆうこなん　そして　クイーンもエリザベスも　みんなで唄おうよ」
「うん歌おうぜ」
麻衣たちは酸素が無くなると分かっていても　歌わずにはいられなかった
生きる事を諦めないために　たったひとすじの希望のために・・
（麻友波（りも）、二人だけでも生きてね）
麻衣は小声で呟いた

前へ進め！　（Ｇｏｔ　ｉｔ！）立ち止まるな！　（Ｇｏｔ　ｉｔ！）
目指すは陽が昇る場所　希望の道を歩け！
行く手　阻む　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！
横たわる　Ｒｉｖｅｒ！　命の　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！
試される　ＲＩＶＥＲ！　迷いを捨てるんだ！
根性見せろよ！　ためらうな　今すぐ　一歩　踏み出せよ！
Ｂｅｌｉｅｖｅ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ！　前へ！　前へ！

まっすぐ進め川を渡れ！　Ｈｏ！　Ｈｏ！　Ｈｏ！　Ｈｏ！
いつだって夢は　遠くに見える　届かないくらい距離感じる
足下の石を　ひとつ拾って　がむしゃらになって　投げてみろ！
君の目の前に　川が流れる　広く　大きな川だ
暗く深くても　流れ速くても
怯えなくていい　離れていても　そうだ　向こう岸はある
もっと　自分を信じろよ　闇の中を　ひたすら泳げ！
振り返るな！　ｈｏ！　ｈｏ！　ｈｏ！　ｈｏ！

それはみんなの生きたいと言う希望の歌だった

宇宙のかなたに突如出現した牛丼彗星は、無数の流星雨を生んだ
それら一斉にアルドにが降り注ぎ　環境を変えていった
かつて豊かな自然と文明に育まれた星アルドは、砂漠と荒野が支配する無法の惑星と化していた
○ジラス砂漠
ここはかつてアルドシティーのあった　場所　そこに一人の青年が現れる
『きさま　何処へ行く」』
「何処へ行こうと俺の勝手だ？」
「何っ、ウガーァ」
そこにいた男達は皆、青いカラス（ドルバ）に変わった（オルフェノクか？）
『死ね　ターグ・ミー』
青年に群がる無数の怪人　だがその青年はにやりと笑う　腰にベルト（ギア）らしきものが見える
『ピッピッピ』
携帯を取り出して　叫ぶ
「へんしん」
黒い鎧を纏った魔人が出現する

そしてその　青年が通り過ぎた後　後には怪人達の死体が残されていた

「やつが現れた、一応　聖子に報告してやるか？」

スパイ蝙蝠の亜陀魔（わだるま）がフロ―レスト城に飛んで行った。

??　ひとすじの希望（後書き）

タグミ　と呼ばれた青年は誰？
そして叶御前（おのう）の目的は何

???　蘇る死体（前書き）

真魚の務める半田病院で１５年ぶりに目を覚ます　真理
そして霊安室から次々と蘇る死体。

??　蘇る死体

宇宙に出現した牛丼彗星は一時的に機械機能を乱し　流星雨をも引き寄せていた
○空我山ふもと
『これはアキマへん、助けにいいいいい・・・』
と言ったきりマイクロバス・バス　トゲトゲ・バッターは機能を停止
その直後　小隕石が落下しバスを真っ二つに破壊した
『ドーン』
地下洞窟に入る小道の間には　女性が二人が倒れていた
「ううーん麻友（りも）もう食べられない」
「うふんたかなみったら、そんなとこ触っちゃーいやーだ」
なんだか楽しそうな夢を見ているようだった
○少し前　半田病院　深夜
夜１１時３０
「今頃　巧くん　飛行機の中かな　それともまだ　空港に向う車のなかかな」
夜勤のだった真魚は　真理の病室５５５室のドアをたたいた
「真理さん　シーツの取り換えでーす　入りますよ」
そう断ると　真魚は植物状態の真理のシーツを手慣れた手つきで交換した
「では失礼しまーす」
真魚が部屋を出ようとした時
『ヒッヒッヒッヒッヒ』と何かの笑う声が聞こえた
可笑しいなと思い振り返った真魚が見たのは　半身を起して笑う不気味な真理の姿だった
「真理さん・・気が付いたの、よかった　でももう少し早ければ巧君に会えたのにね」
「・・たくみ　それは　だれだ?」

「覚えてないの」
「我が目的はただ一つ」
そう言った真理の姿は赤いカラスのようであった
「あなた・・真理さん・・じゃないわね」
一方ＡＫＢ学園の卒業生だった篠麻里子（２４）は
霊安室の遺体を確認していた
「仕事とはいえ　さすがにここは気持ち悪いな」
その時棺桶の中から次々と死体が立ち上がった
（オルフェノク、いやアンノウンかな？）
「きゃーあ」
真魚と麻里子の声が同時に病院中に響き渡った
○ＮＡＳＵ本部
「滝長官　停電です　本部の機能がすべて停止しました」
「アンリくん　君はいつも慌てすぎなんだよ、ＮＡＳＵは電力が停止しても
自主電源で　数年間は大丈夫だろう　直ぐに切り替えなさい」
「あの　それが　オフです」
「だから何がオフなんだアンリエッタ・バーキン（２１）くん」
「そのォ機械系統が電池も含めて全てオフ何です」
「ばかっ　それを早くいえ」
滝長官はうす暗い中でコンピューターのいじっていたが
「駄目だ　すべて作動しない　お手上げだ」
その直後流星群の激突によってＮＡＳＵ本部は倒壊したのであった
○スルメ湾沖
ＫｅＭｅＫｏ号は津波にって転覆していた、そればかりではなく
隕石群の雨あられによって周辺は地獄絵図とかしていた　当然乗組
員は全滅だった
『ザバー・ザバー』
波が押し寄せていた　そこには一人の女性が横たわっていた、チビ
モ二で活躍したアリアである

「・・うっうう・ん　ここはどこ　裕ちゃん?」
「マリ気ぃついたか」
そう言ってもう一人の女性が懐からジュースを出した
「後でのもう思うて買っといたんやけど、良かったら飲むか」
アリアは裕子からジュースを受け取ると一気に『グビグビグビ』と飲み干した
「うん美味しかったけど　裕ちゃんみんなは??」
「いいかマリア良く聞くんやで、今このアルドに何かが起ころうとしとるんや
だけど　あたしはもうマリの事守れへんけど　強く生きるんやで」
「裕ちゃん、何入ってるの?」
そう言った裕子の胸には大きな金属が突き刺さっていた」
「裕ちゃーん　みんなは　みんなは何処ォ（・・?　こたえて・・」
マリアは絶叫する
しかし裕子はそれッきり倒れた
「裕ちゃん死なないでーえ、死なないでよー」
「大丈夫・・まだ生きてるで・・」
裕子は『ハア・ハア』と息を切らしながら言った
「いいかマリ、どんな事があっても生きるんやで　マリが生き続ければ
うちら　ドリームの血は残る　あすな　も　なち子も　よっしもみんな
あんたの事、見守っ・・て・・る・で・」
そう言って裕子はマリアの腕の中で死んでいった
「分かったよ裕ちゃん　約束するよ、この先どんな事があっても生きるって」
とマリアは決意した　その時『ノンノー』とちっちゃいウサギが
何処からか現れた　それは　ナチ子が可愛がっていた　蒼いウサギだった
（あおい　ウサギー　懐かしいぞ?）

「ノンノ、あんた　無事だったの」
マリアは思わずノンノを思い切り抱きしめた
「クルシイ、ノンノ」
その後も地震や津波は一年以上にわたって続いた
放射能の影響によって黒く変色した雪が気候をも変なさせた
〇旧ＡＫＢ通り
「寒いよ　寒いよ　誰か　助けてよ」
裸の女性が力なく体を抱え歩いていた、かつてのトップスター聖子フォローレア（自称）であった
「待ちナ娘さん、こいつを分けてやるから　いい事とさせろ」
2，3人のおじさんが声をかけた
震災後　夢も希望も名誉も失った男達は　半ば理性をなくしていた
「いやーあああああ」
たちまち聖子に群がる男達
しばらくして彼らは立ち去り　仰向けで涙する聖子だけが残った
「クスン・悔しい・・力がほしい・・あいつらを見返す力が・・」
そこに髪の長い美しい女性が現れた、半田病院で見た芳賀真理（はがの）に似ていた
「力がほしければ私についてこい」
彼女はそう言って聖子にベルトを渡した（またですか？）
聖子はそのベルトを受け取った
地震　雷　火事　オヤジ　ともちんのアヒル口　などありとあやゆる災害がアルドを襲い
人口の８０パーセントを失わせていった
わずかに残った者たちにも極端な寒波と猛烈な暑さが交互に襲い
生きる意欲を失わせた
しかしそんな環境の中で生き抜いたのは　災害前あんなに威張り散らしていた男性ではなく
女性たち　それもアイドルやタレントと呼ばれた者たちであった
「我が名はゼノン、アルドヲ再生したいなら　みな武器を持って戦

え、この世界の何処かにある
王者の宝珠(きんぐ あいどる)を手にした者こそ　全ての願いが叶えられるのだ」
上空に現れた　フードを被った天使のごとし少年は少女たちにそう言った
「武器を持って」
「戦えですって」
アッキーとレベカが同時に言った
その時　少女たちの腰に　ダーク・ストーンと言うベルトが現れたのだった。

２５０部記念　武器　兵器、大百科（前書き）

不思議界記伝に出てきた　武器や兵器の主な物

２５０部記念　武器　兵器、大百科

？『宇宙飛行船ノアーマ』ＲＸ・５５５型
機械化惑星パンジェットで作られた高速飛行船　艦の長さ　３０２ｍ　最大幅　３４１．３ｍ
最高　４０．７Ｍ　２７ノットで海も航行できる、マッハ３２次元キロで宇宙を飛ぶ
ワープ機能や　バリアなども標準装備　パンジェット合金（ダイヤモンドの１２倍の強度を持つ
宇宙の墓場と呼ばれる　スイルソ海域を航行中３万人の乗客と共に行方不明となった。
？『くじら飛行船夢ちゃん号』
かつて自然と科学が共存していたパンジェットは　科学はを推進する者たちの
反乱で　動物たちが住めない　機械惑星と化した
市長であり　科学者でもあった　パンフォーストはたくさんの子供たちを連れ　安住の地を目指して
夢ちゃん号で旅立った　途中家族を失った子供たちを引き取り　パンフォースト一座を立ち上げ
西銀河一帯で興行している自らが設計した　ノアーマと同等の性能だが大きさは
７倍はある　一座の花形はパフォーと言う　４０種類以上の芸を持った桃色の像である
また　空位だった副座長はランダリマの王女　レディフ・ブライと黄金人のミドナが務めている
？『ＲＩＶＥＲ』（移動型監視衛星　ＳＫＢ　４８型
計画　は１９６１年にカリフォルニアの　科学者ハーディスト・シュワルツ・ネッガー博士が
ＳＦ雑誌『ジンルイ・ドゥメイ』の中で「この先　人類には異星人

の襲来に備え
宇宙船の機能を持ったの監視衛星」が必要だ」と語った事に始まる
そして１９７０年に　ＮＡＳＡ（あめりか）と主な同盟国が参加し正式に計画がスタートし
　数々の失敗を繰り返した後西暦１９９０年に遂に完成を見る
ＡＫＢエンジンで活動し、ヘビロテ合金『ダイアモンドの４８億倍』で装甲を固め
　マッハ４８次元キロで宇宙を飛ぶ事が出来　頭部には『小惑星』を粉砕する
　ゼノン砲を２門装備している　宇宙飛行士　アンジェラ敦子がリーダーを務める
？『ＥＲＩＫＡ』１、２号機
エンジニアであった沢乃エリカが　官僚秘書時代に作った基本コンピューターＥＲＩＫＡネット
を基本として作られたＡＳＫ（あーすきーぱー）の戦闘機
レーダー砲や小型ミサイルを標準装備している。
？ＥＲＩＫＡ・モグラン号
ＡＳＫが乗る自動じゃで　水陸をマッハ１．１で走れる　また頭部からドルリを出して
地中も潜れる　なお　どちらも操縦するには免許は必要だが　みなみと優子は
免許は持ってなかったようだ（＊無免許だったの？）
？『デヴィラス』
　ノースリブ神話では　クライアン人達が作った鉄の船　詳細は不明だが
飛ぶときに『エ―ケービーィ』唸るらしい（劇場風に？）
また　ザビアが支配するノブナガの世界にも　出てくるが同じものかどうかは不明
？『会いたカッタぁブーメラン』
コスプレ仮面で　ユリシーズが使用した武器　腕のコスブレッドを

ユリシーズの盾に変え
その回りからたくさんの刃（かったー）が飛び出して　あやゆる物を切断する
？『ダイヤモンド・ソード』
コスプレ仮面で　ルビーが　使用する勇者の剣　必殺技は剣を時計回りでまわし
４８度の位置から斬りおろす　唐竹切りである
？『トンデモ・コンパクト』
数々のアイテムを持っている　科学怪盗まゆゆの７つのアイテム（実際はもっとある）の一つで
バケラッタ次元で盗んだ　分身機能を持ったコンパクト　まゆゆはこれを使って
幾つもの分身（かげ）を使い攪乱している他にレイア次元で魔道士リナに貰った
ホウイ型オートバイマジック・ホイホイやテレポート機能を持ったオージロウのマント
ミサイルや煙幕を出す　黄金のオムツ（布製と紙制がある）等がある
？『セルゲイアの剣』
神々の王　オルディナスが　勇者（ラマォ）に与えた精霊の剣　とってには赤と青宝珠が付いている
剣の所有者はラマォの血縁のみ
？『ＥＲＩＫＡ・マックス』（万能型オートバイ）
沢乃エリカが中古で買った　スズキのオートバイを　エンジニアの山寺が改造した
万能バイク　時速２５０～９００走り、装着型の武器　ノヴァ・バズーカーを
使用できる
？『ラ・マオンＸＧ』
千葉千一（６２）が１６の時設立したコンピューター会社
Ｊ（日本）ＡＣ（アクヨヨピューター・クラブ）が作ったパソコン
初代のラマオン零に始まり?、Ｚ、ｊ　ＲＣ　ＲＸと来て現在７代

目のバージョン
マオンが使っているのは１２．１インチのノート型で？アンテナが標準で装備されていて
いつでもジャック通信が出来る
メールソフト？『あっちゃんの風鈴』や？オフィスソフト　『ジャック・マック』
やゲームメーカーの王手『タカミ』と提携したゲームソフト？『オルディナの伝説』
テレビ機能？『ＸＧスタジオ』画像編集機能が付いた　はがきソフト作成ソフト？『筆おむつ』
そして更新料無料のウイルス対策ソフト？『影の軍団？Ｇ』などが標準で装備させている
マオンの最強の武器だ　なお価格は４万８千円からだが機能が制限された者なら
２万円前後で買えるらしい。
？叶（おのう）ロボ　ベッカンコ（未登場）
普段は普段は　出胸草原（いでむね）の叶御殿だが　戦闘時には
自由の女神のごとき石像の巨人となり、背中から大きな鷲の翼を出し　空も滑空する
叶（おのう）姉妹の要塞である

２５０部記念　武器　兵器、大百科（後書き）

＊操縦訓練も受けてるし　マシンを使用するとき（免許があない物には）　使用許可証が出るので免許を持ってなくても大丈夫である
なお許可証の期限は基本的に１日である。

??:魔皇帝ルギフェル（前書き）

少女戦士達の戦いに
魔皇帝ルギフェルと名乗る魔人が参戦した
（あいどる）

??魔皇帝ルギフェル

戻る
〇ナーダの洞窟（喫茶カナル）
その時　不意に洞窟の扉が開き麻友（りも）が
負傷した　たかなみを抱えて入ってきた
「おばあさん、ネオ　湿布かなんか持ってきて
「あなたは？」
「ミナねえちゃん無事だったんだ」
「一体どうしたと言うんじゃ」
「それが・とんでもない敵が、現れたんじゃ」
「魔皇帝じゃろう　やはり　この先は進めぬのかのお？」
「それは、どう言う事なる？」
マオン達の質問にウシババさんは笑って
「このへんでいつもやつが現れるのじゃよ」
ウシババはそう告げると、たかみなたちにあの後の事を話させた
〇アルド　虚空砂漠（ゲルト）
不気味な黒雲が世界全体を蓋っていた
女王セイコが両手から放った怪光線より現れたドルバ族の戦士ミィ、ケィの2人が
レベカとアッキーに迫った、2人が操る変身龍カメレオン・アーミーが
アッキーが操る奇龍ヘクサ・ドラゴンと
ミィ、ケィが操る変身龍カメレオン・アーミィーが空中で激突した
マリアは戦士たかみなに追い詰められていた
「悪いけど死んでくれる」
たかみなのメイヴィラスの剣がマリアを襲う
「させるか」
「痛ってえ」

その手てに蒼ウサギのノンノが思い切り噛みついた
向こうの河原では　鈍龍ハロー・アリエスを従えた　巨乳戦士ヨシエと
ドラゴン・エンサーを従えたデ・スピードの四姉妹が激突していたが
次々と出現する無数のドルバ（烏獣魔）たちに一時休戦を余儀なくされていた
「くっ、仕方ないヨシエ　ここはひとつ休戦と行こうじゃないか」
肩に矢を受けたデ・スピードのタカコが言う
「仕方ないね一時休戦と行くか」
ヨシエはデス・ピードの４人と一緒にドルバ達に向って行った
『ドバーン』
その時　それから光が少女たちを襲った
『ウワ―ぁ』
そして数時間が経過した後生き残った物達はノブナガ・バーンの末裔のセイコ、と
ウエノアシ・謙信の末裔のみなとマリア　イルカリア・義元の子孫であるアッキー
アマゼノン・信玄の末裔であるレベカ、そしてヨシエのわずか7人であった
そして〔ブラック・モンスーン〕と言う巨大な繭の乗り物が降り立った
「なんだ・・あれ・・は・・エリコ　　タカコ・・どこ・・」
そう言ってデ・スピードのヒトエが息を引き取った
繭の中からは飛蝗にトンボの羽をつけた異様な形態の生命体が降り立った
「また変なのがきた?」
たかみなは叫んだ
「我が名は魔皇帝ルギフェル、訳あってこの戦いに参戦させてもらう」
「ルギフェルとやら　あいにくだが　ここは私の支配地だ　貴様の

勝手にはさせん」
クイーンの目が光ると周囲からたくさんの烏人間たちが現れた、だが
魔皇帝と名乗る　黄金の生命体の2つの触覚からサンダー・モンスーンと言う電流が放つと
その場にいたクイーンの配下（どるば）たちは跡形もなく消え去ったのだった
「おのれールギファー」
赤いドルバは唸った
「アリエース」
『ギャーオー』
魔皇帝とクイーンが会話してる間に　ヨシエは鈍龍を呼び
龍に飛び乗りルギフェルに立ち向かって行った
「待て　ヨシエさん一人じゃ駄目だあたいも行く」
「ダメノンノ」
だがマリアをノンノは止めた
「ルギフェルこれが私の必殺武器だ、ハロー　ハリケーン」
ヨシエの両胸が輝き　アリエスを包むと　龍はきりもみをしながら
魔皇帝に突っ込んだ
「ふっはっはっはっは、そのような技では　世に勝てぬぞ」
そう言うと人差し指から細長い光線が龍に向かって放たれた
『グアーア』
その光線は　ヨシエの体をプロテクト事貫いた
「うあああああ」
『ドシーン』
『ヒエー』
龍は少女たちのすぐそばに落ちた　その背中からヨシエが『ポトッ』
と落ちた
「おっ　オナ子、きっと戻してあげるからね・・」
そして龍とヨシエは消えて行った
「こっこれは少しやばいかも」
たかみなは呟いた、その時セーラムーンのような髪形をした女の子が

ジェット・サーフィンを操リながら現れた
「麻友遅いよ」
「おくれてごめん、みな退散だよ　他の人も適当に逃げてちょ」
りもは魔皇帝に向かって　7色の霧をスモップと言ドライアーから出した
・・モクモクモクモク・・・
霧が晴れた時には少女達はいなくなっていた
「オノレィ、逃げおったか　まあ良いわフッハッハッハッハッハッハッハ」

？？？ドルバ三兄弟（前書き）

異世界を追われた　ドルバ三兄弟とは

???ドルバ三兄弟

〇再び洞窟　晩
「うーん、ついにやつ等まで現れ追ったか」
「やつ等ってルギフェルの事なるか」
「おばあさんの知ってる人なの」
私とナルーの質問にウシババは笑って答えてくれた
「魔皇帝こと　ゴールデン・ドルバは、叶御前が使うドルバ３兄弟の長男じゃよ」
「３兄弟なるか」
「でもクイーンの配下の赤いのとは敵同士見たいだったけど」
と　麻友が口をはさんだ
「兄弟だからと言って仲が良いとは限らんぞ」
ウシババは彼ら兄弟についての話してくれた
「言い伝えによれば　バッタの形態をしたゴールデン・ドルバ
カラスの形態をしたレッド・ドルバ、そして蜂の形態をしたイエロー・ドルバの３兄弟は
覇権を争いあった末　不死界　オルフェルドを追われこのアルドにやって来たらしいんじゃが
もともと仲が悪い３人は　震災後　無法となったこの世界の支配を巡り
クイーン（聖子）側と叶姉妹側に分かれて再び争いをはじめおってのこのままではこのアルドは再生どころか　オルフェルド　同様　腐敗した世界になりかねない」
「でもー聖子さんは何故　この世界を元に戻さないんだろ、彼女の目的が
あたしたちと同じ平和ならその為にフローレスト城で　黄金の宝珠を手に入れたのなら　出来るんじゃない？」
「そうなる　マオンと　同感なる」

「聖子って人がほんとに平和を望んでるならね」
「ネオくんそれどういう事」
マオンの質問には　ウシババがネオに代わって答えた
「やつが塔を支配してもう数年が経過しておるが未だにこの世界は死と砂漠に
覆われたままじゃと言う事は2つの事が考えられる」
「2つなるか」？
「そう2つじゃ　1つはクイーン目的が平和ではないと言う事
そしてもう一つは、キング・アイドルその物が最初から無かったかじゃ
つまり他の場所か　あるいは　皆を戦わせるための方便かのどちらかじゃよ」
「そっそんなぁ　りもたちはその為に戦ってきたんだよ」
「まあ　真意はわからんがな」
「ごめんください」
「ウシババさん腹減ったブゥ」
そこにマッチ売りで生計を立てている仔豚のマージと　スザンネが喫茶カナルにやってきた
「おばあさん　マッチ買ってくれだブゥ」
「買ってくれないと　今夜は　食事代がないブゥ」
「ちっ、そんなこと言ってまたただで夕飯食べる気ね」
「あらわかった」
と　震災前『お馬鹿でごめん、クイズ　ヘクサゴン』でも活躍していた
元タレのスザンネだった　彼女はこう見えても　お馬鹿拳法の達人なのだ
「わかった分かった　2人ともどうせ今夜も止まって行くんじゃろう」
「あれっ　わかっちゃった」
スザンネは亡くなったライバルのローラ見たいに

『ペロッ』と舌を出したのだった
○獄門島
そこは角川映画に出てくるような不気味な　島だった　その中に
５０人の男女が
足にお守を付け閉じ込められていた
「お前たち喜べ姫様は諸君らの解放をお命じになった」
蒼いドルバはそう告げた
「本当だ　我々は嘘は言わん」
生年達はそれぞれ鎖が外され　牢から出られた
「やったぞーとうとうここから出られるぞ、約束は守れよ　後で取り消しなんてダメだからな」
リーダー格の管直人がそう告げた（お前が言うか？）
捕らわれていた男女は裸で広大な島を逃げ出した
だがそれを骨だらけのオートバイに乗ったイカの怪人たちが追う
『ウワーぁなんだ　お前たちは？」
『ヒーィ　ヒーィ』
怪人たちは『骨骨・サイクロン』で人間たちを追い回した
そして男性たちは食料になり、女子たちは暴行の後やはり食いつくされた
それが　イカ・ドルバとイカ・戦闘員部隊だった

???ドルバ三兄弟（後書き）

各地に怪人たちが現れ　少女狩り（あいどる）が行われた
糸つかさ　天井真理　笹森あきな　きゅーす　イルマスジーレ
ＳＫＢヘチマエイト等が次々と倒されていく

??アイドル狩り（前書き）

アルドの各地ではアイドル狩りが行われていた

??アイドル狩り

震災後　アルドは　虚空（ゲルト）　空魔（そま）　睦奈（むな）
怪魔（かいま）　魔時須華（ますか）　等の５つの砂漠で覆われていた。
○空魔砂漠
人形の様な少女が　馬の怪物に追われていた
「お前は何者」
「我が名はオルフェ最強の戦士　ホース・ドルバ　蜂姫（れでぃ）さまの命により
少女狩（あいどる）りを実行する
「そう簡単にはいかなくてよ」
つかさは愛用の鞭を撓らせてホース・ドルバに放つ
『パチーン、パシーン』
『うおおおお　これは堪らん』
「どう　昔を思い出した　ならもう一度　それっ」
つかさは再度鞭を振るったが　今度は　右の蹄で受け止められた
「そう何度も同じ目は効かんぞ　娘」
大きな口から『キャンディキャンでェ』と言うガスを
『プッペーェ』と噴出するホース・ドルバ
「うわっ」
たちまち　つかさは『少女人形』とかした（懐かしいぞ?）
「チっ、外れか」
と怪人は呟いた
○睦奈　汚血女
ここは　蛸橋愛　石垣りさ　須仲レイネ　金井えりらかつての国民的アイドル
御魍娘。（おむつむすめ）たちが身を寄せている汚血女（おちめ）の川の上にある住居　加護の鳥（いえ）である
『ディアー』

と　かつてのヒット曲が部屋中に響き　『どどどどど』と少女たちが2階から
降りていた
「あややゃ　今朝の食事は何かな」と愛が尋ねた
「今朝は珍しく岩マグロが連れたデ　みんなで食べよう」
と松谷家あやが笑ってそう言った
「では頂きまーす」
みんなはちゃぶ台を囲んで岩マグロをほうばった（がんこさんはいないのかな？）
そこに『バーン』と壁を壊して牛の怪人が現れた
「あんた　らんなの」
とあいちゃんは『カミカミ』で聞いた
「我は　叶様(おのう)配下の最強の怪人　バッファロー・ドルバだ
お前たちの命を頂く
「必殺角エグリ」（あれっ？3の時に聞いたような　まいいか？」
『ドーン』
「きゃー」
「たっ助けてェ」
逃げる娘。達を　バッファロー・ドルバの戦闘員　あやまん隊が
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
と変な踊りをしながら追い詰めていた
水牛の角でエグられた娘たちは　次々に『紙オムツ』になって行った
「チッこいつらも外れか」
その後も怪魔(かいま)や空魔(そま)でも　クイーン聖子率いる　キャット・ドルバによって
きゅーす　イルマスジーレ　ベリーズ工紋(こうもん)元白雪姫の天井真理
タラコのコスプレをしたＳＫＢヘチマエイト等のアイドルたちが
次々とドルバに駆られていったのだった
〇虚空(ゲルト)カナル
『ドーン』

と入り口のドアが開いた
「ばーばお客さんだよ　ウゲッツ」
ネオ少年が驚くのも無理は無かった　そこには　コウモリ　イワシ
　キノコ
イノシシなどの怪人を従えたドクロの面を被った女性がいたからで
ある
「はて　ここは中立区の筈じゃが」
「そんな決まりはもははや通用しない」
『ウッガアー』
と唸り　大暴れをする怪人たち
「パーン・パーン」
とパチンコ銃を撃ちながら麻友（りも）が現れた
「人が寝ているのにうるさいよあんたたち」
「そう言う事よ」
と波とマオンもやってきた
「誰？ナルーの友達」
「そんなわけないなる」
「味方じゃない事だけは確かね」
「タ―ァ」
　タカナミのダイヤモンド・ソードがイワシ・ドルバを真っ二つにする
「死ねー小娘たち」
キノコ怪人の胞子から白い粉が噴き出す
「なっ何よ―これは」
「これは　眠りんボウじゃあ、みんな口をふ・・」
胞子を受けた喫茶店（かなる）の人達は『すやすや』と眠った
ドクロの女性はイノシシの怪人に囁くと
リーダー格のイノシシ・ドルバは
「いのッし　こっちの娘だブラック・モンスーンに　連れてけ　のっし」

とコウモリ・ドルバに命じた
アルドの森
『ギアーアア、この娘が御前様が探しておられた　少女だったとは」
その時　笛（おんぱ）がコウモリに放たれる
『ババババババ』
「なんだこの音波は」
「ウワ―ァ」
思わず少女を落っことす　コウモリ・ドルバ
『バーン』
木にしこたま頭をぶつけて　気が付くたかみな
「痛てて　ここは・・」
だが考える間もなく、コウモリ・ドルバが　空中から迫っていた
『ギアー』
鋭い爪で襲いかかるコウモリ怪人は　たかみなを片手で持ちあげた
「遂に見つけたぞ竹島波　お前だったとはなあ」
「何ぃ　どう言うことだ？」
「　今この世界では　ゴル・バ（ゴールデン・ドルバ）レド・ナ（レッド・ドルバ）
イエー・ナ（イエロー・ドルバ）の3兄弟に別れての少女狩（あいどる）りが行われている
何故だかわかるか？」
「さっさあ　どうしてかな」
「とぼけるな波　栄光の力　キングアイドルは何処かの塔に隠されてる訳ではない
最強のアイドル団体　『ＡＫＢ学園』の内の誰かがなかにあったのだ」
そう言うとコウモリ・ドルバは波を遠くへ放った
『バーン』
「ウワァ、落ちるゥ」
だが落ちる瞬間コウモリ・ドルバの両腕が波を受け止めていた

「お前をルギファル様の元へ連れて行く　その中にある　キングアイドルを取り出すために
そしてお前は真のクイーンとなるのだ」
『バーバーバー』
何処からか光線がコウモリ・ドルバを襲ったため波を地面に落してしまった
「しまった　誰だ俺の邪魔をするのは」
そこにはいつかの青年が怪人を見つめていた
「貴様か　邪魔をするなァ　タ・グ・ミィー」
生年めがけて突っ込む　怪人
『ピッ・ピッ・ピッ（７５３　しちごさん）　（７５３かよ?）
「変身」
生年は黒いバッタの怪人『ブラック・ドルバ』に変わった
『ギアー』
口から炎を吐き　迫る怪人　それを交わすブラック・ドルバ
一方　地上に落下した瞬間　波の体が光り輝いた
そしてその姿が一瞬バッタに変わったように見えた（これも　どっかで見たぞお?）
「吹けよ嵐　野大子　鼻ちょうちん　テやー」
その時波の全身をパンダのコスプレが包んだ
暁の戦士たかみなの誕生であった
そのベルトの強力な光を受けたコウモリ・ドルバは跡形もなく溶けブラック・ドルバも　ケントの姿に戻り意識を失った　たかなみと共に倒れていた
〇叶御殿（おのう）
「２人ともゴル・ドの配下が　遂に　キング・アイドルの力が目覚めさせたぞどうするつもりだ」
そう言うと亜陀魔（わだるま）は　美香の肩に止まった
「フフフ、面白くなってきましたね姉上」
「そう言う事じゃ、ホッホッホッホっホッホ」

と姉妹は笑うのだった

??アイドル狩り（後書き）

フロ―レストの中で「絶望（めっ）」を目覚めさせる
儀式が始まった、仲違いをしていた3兄弟の秘密とは
そしてマオン達は　アルドを『絶望』から救えるのか
次回マオンと7人の戦士たち

??マオンと7人の戦士たち（前書き）

ゴル・バ（ゴールデン・ドルバ）レド・ナ（レッド・ドルバ）
イエー・ナ（イエロー・ドルバ）の3兄弟達によって
少女戦士狩り(あいどる)が行われていた
そして遂に叶(おのう)御前の目的が発覚する

??マオンと7人の戦士たち

○虚空(ゲルト)カナル
「ばあば　波姉ちゃんあいつらにさらわれちゃったよ、一帯どうするんだよう」
心配はいらんよ、総ての力はあの塔にある　やつらはそこに集結する筈じゃ」
「それは、どう言う事」
マオンは尋ねた
「フロ―レス城には確かに黄金の力　キングアイドルがある　じゃがそれは
もうひとつの力と結び付く事によって初めて開放されるのじゃ」
ウシババは　そう答えた
「すると、波姉ちゃんだけをさらって行ったという事は」
「そのとおり　波の魂の中にもう一つの宝珠が隠されておると　考えた方が
自然じゃな」
「なら、どうするなる　塔に乗り込むなるか？」
「それぃいねえ、あたしたちも仲間に入れてくれない」
そう言って入ってきたのは　アッキーとレベカだった
○ブラック・モンスーン
「フフフフ、遂にもうひとつの宝珠を持つ者を手に入れたぞ
姉上(いえー・な)さっそくクイーン城にいる弟(れど・な)に連絡を取れ
儀式の準備だ」
『イーィ』
ブラック・モンスーンはフロ―レストに向っていた
○カナル
「それじゃー気を付けて行けよ」
「うんおばあさん」

マオン達は　現在はアルドの西に移動していたクイーンの要塞フロ―レストに
乗り込もうとしていた。
そのメンバーはまず　精霊騎士ラーマォンを名乗るマオンとナルーの凸凹コンビ
渡り戦士麻友　チビモ二戦士マリア　そしてツインズ・ハートのアッキーとレベカであった　彼らは　りもが作ったバギー『渡り廊下』で
クイーンの要塞を目指していた、すると　さいの河原で　クイーン聖子と
たくさんのドルバ怪人と　あやまん隊たちが待ち受けていた
「サイ・ドルバー」「イノシシ・ドルバー」「キノコ・ドルバ」「狼・ドルバ」「イカ・ドルバ」「タコ・ドルバ」
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
「ここが　貴様たちの最後だァ」
クイーン聖子が言い放った
「みんな勝負だよGO」
マオン達はマリアの合図でドルバ&

「やはりこんな事だと思ったぜ」
「貴様は　た・く・み　巧　ケント、オルフェの血が目覚めたか」
「その娘さんは　返してもらう」
巧は携帯を取り出し　ベルトのダーク・ストーンに挿入した
『ピッ・ピッ・ピッ（７５３　しちごさん）』
「変身」
赤いスカーフをした　ブラック・ドルバに変身した
「ブット・バジン」
巧は　エンジニアだった立花のおやっさんが作ったオートバイを呼んだ
○蒼の草原
マオンはイカ・ドルバと　ポイポイ軍団に囲まれていた
「ひえーっ　どうすればいいナルー」
（マオンはまだ完全に目覚めてはいないなる、とすれば手段は一つ）
「こうするなるよ」
「うわあっ」
なるーはマオンの頭の中に入った　すると　その額に精霊の証である龍の紋章が
浮かび上がり、天使のような翼も生えた」
「どひゃー　何よこれ」
「イメージなる　いいからセルゲイアと言って　戦うなる」
「そんなこと言われても解かんないよ」
「・・それじゃー暴れん坊将軍のつもりで戦うなる」
「分かった　まつけんだね　セールゲィアー」
とマオンは叫んだすると手に刀が現れた
「何を　かかれぃあやまんたち」
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
あやまん隊は妙な振りをしながら　マオンの周りをぐるぐると回った
「ええーいもう　こうなったらやけくそよ　テアーあ」
『ギェーポイポイピィィ』

マオンのがむしゃらな攻撃が　あやまん隊に『ズバッ』と決まった
「よっしゃー、一つ人の世　生き血を啜りーィ」
（血を啜ってどうするなる、それにそれは　もも太郎なる？）
「そっそうだっけ」
そこに唸りを上げて　無人のオートバイが走ってきた
舞い上がった砂煙を受けてあやまん隊は倒れて行った
『ポイポイピィィ』
その向こうではイノシシ・ドルバとチビモ二戦士マリアが戦っていた
「頭突き攻撃だイーノ」
『バーン』
「アレー」
「参ったか、もう一度だイーノ」
『バシーン・バチ―ン』
『アレー』
『ドーン』
今度は向こうの肥だめに吹っ飛んだ
「ウゲッ飲んじゃったよォ、ペッペッ」
「さらにもう一度だイーノ」
マリアは右腕を力を集めた
「セクシー・ビーム」
『ババババババ』
ビームはイノシシの角を破壊した
「何度もその手は食わない中の　必殺裕子のほほ笑み」
マリアは『ダッ』と中座裕子のカードを投げた
イノシシ・ドルバは体に刺さったカードを引き抜き
「こーんな子供だまして勝てると思ってるのかイーノ」
と言って裕子のカードを引き抜き『チラッ』と見た
「うぎゃー　これは　何と恐ろしい恐ろしいイーノ」
イノシシ・ドルバは一目散で退却したのだった（さすが裕ちゃん？）
アッキーとレベカは　イカ・タコ連合と戦っていた

「まずはイカスミだ　イカ―ァ」
『ブシューウ』
アッキーの顔が真っ黒に染まる
「ウゲッ　前が見えないよ」
「続いて　タコ吸盤」
８つの腕でレベカの体中を吸いつける
「あっあーぁん、何位となくいい気分」
「ではもっと良い気分にさせてやろう　タコイカ電流」
『ウワあああああ痺れるうううう』
「パワーあっぷだぁ」
『ギョェえええええっていつまでも付き合ってられないちゅうの
　必殺ヘルニア・ランッ』
レベカは　怒りの鞭をタコに放った
『うおおおお、これはどうした事だぁ腰が腰が』
レベカの鞭が放つ『ヘルニア・ランッ』を受けると
必ずヘルニアになるのである
『うおお腰が腰が』
イカ
ドルバは堪らず仰向けになった　そこを　ベッキーの剣で斬り刻んだ
『トン・トン・トン・トン・トン』
「あれー・トホホホホ」
「スルメの剣を喰らえぃ」
『ドバッ・ヅバッ』
アッキーのプロテクトの一部が切れた
「苦っ、前が見えない」
サイ・ドルバは麻友（りも）に馬乗りになって体中を舐めまわられていた
『ペロペロペロペロペロペロペロ』
「ああーんこのサイさん　くさーい」
なおもサイ・ドルバは長い下で舐めまわす」
『ペロペロペロペロペロペロペロ』

プロテクトが徐々に溶けはじめていた
「いやーん　どうしよう」
『ゴーン』
『ギャーア』
蒼ウサギのノンノがフライパンで　サイ・ドルバを思い切りしばいた
「たっ助かったよノンノ」
「必殺　チャンタマ落とし」
サイ・ドルバの急所　めがけて思い切り蹴りまくる麻友（りも）
『それっバンバンバンバンバンバンバンバン・バンバンバンバンバンバンバン」
「ヒエー勘弁・・・・」
サイ・ドルバは力なく抵抗した
「せーの―」
『ズバーン』
麻友（りも）のスーパー　ちゃんたま蹴りがサイ・ドルバに
『ズバーン』と決まり
サイ・ドルバのあそこを貫いた
「ヒエ―」
それを見たあやまん軍団は『ポイポイポイポイポイポイ』と退散した
フロ―レスト城天守閣
『ズバーン』
鋼鉄の壁を貫きブット・バジンは現れた、その衝撃でたかみなが目を覚ました
「あれっ　ケントさん　おもいっきり　以来だね」
「目覚めたか娘よ」
「ゴールデン・ドルバ、その子を返してもらうぞ」
「おっホッホッホッホ　われらと戦う前に　この者と戦うがよい」
「何だと」
ケントの前に姿を現したのは恋人だった芳賀ノ真理だった
「まっ　真理・・」

??マオンと7人の戦士たち（後書き）

欲望に見せられたクイーン聖子の正体は
真理の霊体と戦う　ケントに勝目はあるのか

??クイーンの正体（前書き）

フロ―レスト城に乗り込んだ　ケントを待っていたのはかつての恋人の真理だった、そしてキングアイドルによって欲望の魔人となったクイーン聖子の恐怖の正体とは

??クイーンの正体

ケントの前に姿を現したのは恋人だった芳賀ノ真理だった
「まっ　真理・・」
「御前さまの命により、ブラック・ドルバ　お前を殺す」
そう言うと真理は　ファイズの剣でケントに向かっていた
「いやーあ」
『カキーン』
それを異濡(いぬい)射の剣で受け止める巧
「目を覚ますんだ　真理　俺たちは　いつも一緒だったじゃないか」
「無駄な事だ　その者は魂の抜け殻にすぎんわ」
「はっはっはっはこのフローレストはお前たちをおびき寄せるおとりだったのさ」
「そう言う事じゃ、レド　イエ・ナ　今のうちに御殿に移るぞ」
「いやーだ　ケントさん　助けてェ」
ゴールデン・ドルバはたかみなを連れて　兄たちと消え去った
「てやーえい　それえ」
真理の執拗もない攻撃にブラック・ドルバは攻撃できないでいた
（真理の体を傷つける訳にはいかない、どうすればいい）
「考えている暇はないぞ」
『テヤー』
両手から緑色の光線を放つ真理　戦ってる間に　周りは風景はぼやけ始めていた
「ウワーっ」
真理の怪光線を体に受けて　吹っ飛んだブラック・ドルバ
その腰からベルトが『ポトッ』と落ちる、その時巧が見た風景は
何処かの古い倉庫のようであった
「ここは　確か何処かで」
〇睦(むな)奈蒼の草原

スミに目をやられて　前が見えない　アッキーは、イカドルバに苦戦していた
「イカリングを喰らえ」
イカの足をつないでアッキーのほうに投げた
輪はアッキーの　頭にッはまり、イカ・ドルバの呪文で『グイグイ』締め付けた
「うおおお痛い、わたしゃ孫悟空か？」
「あっアッキー」
レベカは声をかけた
「人の心配している場合か」
キノコドルバが「キノコ棒」と言うこん棒でレベカを攻撃する
「大丈夫・・コイツあたしが倒すよ」
『ドールヴァー』
あやまん軍団は退却したがクイーンは次々に蒼い下級ドルバを体内からを誕生させていった
ドルバ隊がマオンと麻友（りも）の周りを
『アホイ・アホイ　ドンジャラ・ポン』
とカンカンガール風に片足を上げながらを回った
「りもさん　こいつらふざけてんの？」
「いやあ　マジみたいだよ　マオンさん」
「マジすか」
「マジすか学園」
マオンと麻友（りも）は背中越しで会話をしていた
『我らの踊りを堪能しながら　永遠の眠りに就くのだ
『眼―の前に『死神』と言う文字が躍る・・こんな地獄（ところ）に行けるって僕はツイテいるねェ♪』
ドルバ隊は　死の『カンカン・ダンス』を舞った
「なっ何だが　眠たくなってきましたよ麻友（りも）さん
「まおんさん　眠っちゃあ駄・・・」
二人とも地面に『ペタッ』と座り込んだ

一方アッキーは　イカリングを　頭に受けて　締め付ける輪に意識を失いかけていた
「あーぁ駄目だよ　べっきぃたん」
「アッキー今助ける　からね」
「そうはさせんキノ―コ」
『ブシュシュ』
背中からたくさんの触手が出ていて　レベカの体を縛りつけた
「う動けない」
その一つが　レベカの口とお尻に入った
「ああっ、いやーンスケベ」
「スケベ違う　お前は　キノコ人となるのだ」
『ブシューウ』
職種から『キノコ毒』が注入させた
「フッフフフッフ　どうやらワラワが出るまでもなかったな」
（くっこのままじゃぁみんなやられる・・レベカ　サヨナラだよ）
アッキーはそう呟くと大声で叫んだ
『ドラゴン・ボンバー』
アッキーが叫ぶと　東の空からヘクサ・ドラゴンが姿を現した
『ファイナル・アーンサー』
「アッキー　だめだ　それを使っちゃぁ」
『ウギャーア・ギヤーア』
アッキーの全身が異様な輝きを放った　それに電動して龍も
「いかん　一旦退却だ」
『ドカーン・ズバーン』
だがクイーンの号令も空しく辺りの怪人たちは大爆発と共に消え去った
そして後には　アッキーを除いたマオンと勇者たちが残った
「おっ　オノレー　戦士どもよくもワラワの顔を傷つけおったな」
そこには怪人たちと吹き飛んだはずの聖子がいた
「げっ　その顔は」

マリアが驚くのも無理は無かった　顔の半分が黒い豚になったいたからだった」
「クイーン聖子その正体は」
そう言うと聖子は鞭を『パシーン』と叩いた（地獄大使みたい？）
『豚・ドルバーァ、ブブブブブブブブ』
「それがあんたの正体だったのね」
○元スマイル・ブレイン社の倉庫
「ふっふっふっふっふ、これで最後だな」
「その声は叶イエロー・ドルバか？」
「どうかな巧ケント　恋人に殺される気分は」
「黙れ蜂姫、真理の体を返してもらおう」
「返してやろう」
「何ぃ」
「ただし私に勝てればの話だが」
真理の体を借りたイエロー・ドルバは右腕でケントを抱え上げた
「蜂電流」
『ババババーン』
「ウワーァ　止めろくそ女」
「その言葉は勲章として頂いとおこう、あの世で真理とやらが待っておるぞ」
そう言うとイエー・バは電流を高めた
「うわあああああ」
・・巧・まだこちらへ来てはいけません
薄れるケントの意識の中にあの頃の真理がいた
・・真理・・・
その時画家を目指して　2人で頑張っていた　風景が次々と浮かんできた
巧・・二人の夢・・叶えてね・・
「おーウォーぉこれは　どうした事だ」
・・この体は私の者　返してもらいます

「・何故だぁ　お前の魂は存在しない筈なのにぃ」
・・彼方に　巧は・・殺させない・私の体と一緒にヨミをさまよいなさい・・
「ううううう嫌だ―ぁいやーだ・・」
そして真理の体はイエロー・ドルバと共に消えて行った
・・さようなら巧・・
「ありがとう真理　お前もやはり　オルフェの戦士だ」
『真理ーぃ』
巧は大声で叫んだ、辺りの風景はいつの間にか元に戻っていた
○睦奈(むな)蒼の草原
「マリアの「ロケット・パンティ」を喰らえ
くまさんのパンティーがッジェット噴射で飛んでい行き　豚・ドルバの顔をふさいだ
「これじゃー前が見えないでブ―ゥ」
「続いて麻友(りも)のスーパーカンチョ―ォ」
『ズバーン』
と豚・ドルバのお尻にさく裂
『ギェえええええ』
続いてレベカの「百の鞭」
『ぱーんパシーンパシーンパチーン』
「おおおお　御助けください」
最後はマオンの「百叩き」
と言って剣山でブタ・ドルバのお尻を「パンパン」した
「ひえーえええ」
こうしてクイーンは　全員に「フルボッコ」にされた
「ハレ・ホレ・ハレ」
「最後に全員でカンチョ―だ」
麻友(りも)は叫んだ
『ズバーン』『バコ―ン』『ズッコン』『ズボズボ』
「ヒ―ィイ、　さやかのせっかんより厳しいブゥ」

聖子の姿に戻った　豚・ドルバはお尻からいろんな排せつ物を噴出していった
そして　かつてのアイドルは恥ずかしさのあまり、泡となって消えて行った

??クイーンの正体（後書き）

出胸草原（いでむね）にある広大な　オノウ御殿では
叶御前（おのう）が『絶望（めっ）』の力を目覚めさせる
儀式を行おうとしていた
マリア　レベカ　ラーマォン　麻友（りも）　の４人の
運命は？」

キャラクター名鑑？ドルバ軍団（前書き）

アイドル大戦に出てくる怪人全集

キャラクター名鑑?ドルバ軍団

オルフェルドから現れた・ドルバ軍団のメンバー

○首領

ゲルベロ・ドルバ

叶御前（双頭の魔女）

『ノブナガや道三といった輩を影で操ったと言う人物

お能姉妹として　美香様、狂子様と呼ばれておりオノウ御殿に住んでいる

絶望の力を使い全宇宙を粛正しようとする』

○亜陀魔（わだるま

『フロ―レス城にいる　スパイ蝙蝠　態度がでかいがその正体は謎』

ドクロの仮面の女（ドクロ・ドルバと言うらしい）

「言葉も発しないため　正体は全くの謎である」

○幹部

魔皇帝　ルギフェル（ゴールデン・ドルバ）

『3兄弟の長男でバッタの生命体でブラックモンスーンと言う大きな繭の乗り物を持つ』

蜂姫

『蜂の生命体で真理の肉体を操っていた』

レッド・ドルバ

『目的があってクイーン聖子に仕えていた、3体とも両目から『魔解光線』

『しっぽからは生きものを溶かす　液体を出す』

○ドルバ獣（魔人・生命体）

?ホース・ドルバ　（馬の生命体）

『口からガスを発射する』

?バッファロー・ドルバ（水牛の生命体）

『角エグリ』を受けると　紙おむつになる』

？キャット・ドルバ　（猫の生命体）
『血を吸うらしい』
？コウモリ・ドルバ　（蝙蝠の生命体）
『口から赤い霧を噴出する』
？イワシ・ドルバ　（鰯の生命体）
『不明』
？キノコ・ドルバ　（キノコの生命体）
『体中の触手から胞子を吐く、またキノコ棒と言う棍棒を持っている』
？イノシシ・ドルバ　（イノシシの生命体）
『白い霧は人々を眠りに誘う』
？イカ・ドルバ　（イカの生命体）
『金属を溶かす、イカスミを吐く』
？タコ・ドルバ　（タコの生命体）
『タコ吸盤で体中を舐めまわす』
？サイ・ドルバー　（サイの生命体）
『地獄の突進力を持つ』
？狼・ドルバ　（狼の生命体）
『不明』
？アンコウ・ドルバ　（アンコウの生命体）
『叶御前（おのう）の親衛隊長　怪力である』
『戦闘中不明？』
？豚・ドルバ　（豚の生命体）
『クイーン聖子の正体だが全員にフルボッコにされた揚句麻友（りも）のカンちょ―攻撃を合図にカンチョー地獄を味わい聖子の姿に戻り　お尻から排せつ物を噴出し続け、はずかしさのあまり泡となって消えて行く』
ブラック・ドルバ　（イナゴの生命体）
『巧ケントがダーク・ストーンの力で変身した姿
ブット・バジンと言うオートバイと濡射（いぬい）の剣を操る』

○芳賀ノ真理

『（植物状態だった　巧の恋人、イエロー・ドルバに操られていた』

あやまん隊＆amp;ブルー・ドルバ達

『下級兵士、あやまん隊は

ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィーと妙な振りを踊る

また『眼―の前に『死神』と言う文字が躍る・こんな地獄ところに行けるって僕はツイテいるねェ♪』

と言う歌を歌いながら死の眠りへと誘う『踊り組』のメンバーもいる

??　たかみなの思い（前書き）

御殿では「絶望（めっ）」を迎える儀式が始まろうとしていた
「平凡でもいいんだよ」
その時たかみなの正義の怒りが爆発する。

??　たかみなの思い

マオン達の活躍でクィーン聖子率いる怪人たちは全滅した
しかしアッキーと言う大切な仲間を失ってしまった
（・アッキーィ何で死んじゃたんだよ）
レベカが呟いた
その時フロ―レスト城が『シュン』と消えた
「アッ塔が消えたなる」
マオンの額から頭を出して　ナルーが言った
《美少女戦士（あいどる）の諸君、やつらはこのアッカンベ山の向こうにある
広大な出胸草原（いでむね）の中央に存在する、オノウ御殿に向かった
阻止してほしい・・》
それはケントの声のようであった
○出胸草原　オノウ御殿
「間もなく儀式が始まる、誰も最上階（さんがい）に近づけるな
との　御前の強い指示だ、警戒を怠るなよ」
一つ目のおじいさんは　部下達に指示をしていた
同・茂みの中
「ああ言ってるけど　どうする麻友（りも）さん」
「時間をかけてるヒマは無いので　当たって砕けろでやりますか
まおんさん」
りもはそう言うと、屋敷の中に催涙弾を投げた
「これはうっ　ガスだゴホッゴホッ」
下級ドルバや　ドルバあやまん隊の者たちはみな『イ―ィ』と発し
倒れて行った
「いやあ　いつもながら派手ですねぇ　麻友（りも）さん」
「へへっ、あの催涙弾は　人間には効かないんだ（スカイライダー
最終回、懐かしいぞ）
「みんな　行くなるよ」

マオンの額から頭を出した　ナルーが　反対側の茂みに控えている
　レベカとマリアに向かってそう言った
「・・おのれぃ　残りの者たち　この娘たちを迎え撃て
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
とあやまん『踊り組』が現れた
「あーまた出た」
マオンはため息をついた
「ここは　あたしたちに任せてマオンと麻友(りも)は上(にかい)に行きなよ」
マリアとレベカはそう叫んだ
同・三階　黄泉の間
頭に黒い大きなリボンをした少女が邪神の間の祭壇に骨だらけの杭に括りつけられていた
「はなせー、離しなさいよぉ虐待で訴えるぞ　こらぁ」
「ふふふ、まったく元気な娘だ、それでこそ絶望(めっ)様のいけにえにはちょうど良いわ」
そう言うと　カラスの生命体レッド・ドルバは　ゴールデンドルバと　融合した
『ピカッ』
強烈な光が放たれ、思わずたかみなは目を覆った
『ガっシーン・ドシーン』
そこには体の半分が赤と金に分かれた　合体ドルバがいたのだった
その横で控える謎のドクロの仮面
「フッハッハッハ、間もなく　母上が見えられる　そうすれば我らドルバ一族が
　絶望(めっ)の力を使い　全宇宙を粛正するのだ」
「全宇宙を　粛正だって、あんたらそんな　バカなこと　考えてたの？」
「バカなことだと　娘ェ、お前はこの世界が　宇宙が平和だと思うのか主な世界では
　政治家や官僚たちが不正に走り、国境線を『越えた　越えない』

で暴動がおこり
今も戦争の真っただ中の国もある　そう言った世界を正常化するには
全ての宇宙を一つに纏める　大きな力が　必要なのだ」
　合体ドルバは語った
「・・あたしは　平凡でいいよ　そりゃー人間は完全じゃない　むしろ綻(ほころ)び
のほうが多いかもしれない　あたしだって　いつか　本格的な歌手になろうか
なんて気楽に考えていたしね　でも　それで結構幸せだったんだよ」
たかみなは　そう言いながら　姉との思い出を思い出していた
○回想　震災の1年前（波17）
同・亜樹(あきば)場瑠通り
竹島波は双子の姉麻衣と　水木と言うアクセサリー・ショップに向かっていた
もっとも　双子と言っても2卵生だからあまり似てないのだが
「麻衣ねえちゃん早くはやくぅ」
　のんびりとアキバ街を見学しながら歩く姉の手を取って急かした
「もーう　波ったらぁお姉ちゃんは　あちこち見ながら歩くのが好きなのにぃ」
同・アクセサリー・ショップ水木
店の中には　携帯や防災などありとあらゆるグッズが並んでいた
「いらっしゃいませ、何をお探でしょうかぜえっと」
と赤いスカーフを固めた　厄介そうな定員さんが出てきた
波は「あの竹島波ですが・」
「皆まで言わずとも堀江（定員）にうかがっているでぜえっと」
と言って水木店長は鷹のデザインが入った銀色のペンダントを2つ持ってきた
「これが最後の二つだ、ぜえっと」
「わっ私にもあるの？」
「もちろんだよ　お姉ちゃんとお揃いにしたかったんだもん、で

も限定２０個だったもんで」
「なるほどォそれで慌てていたわけね」
「そう言う事あははは」
波と麻衣は笑った　２人はすっかり　ぜえっとの店長さんと意気投合し
一緒に並んで、記念写真を撮ったのだった
○戻る
「そりゃあ世の中　いろいろあるよ　でもあたしは平凡でいいんだよ
麻衣姉ちゃんや　麻友（りも）や学校のみんなと　バカやってた
《平凡でいいんだよーォ》」
その時　波の体の中央が光った　それはショップで買った鷹のペンダントであった
『ピカッ』
光の中から　波が桃色のプロテクターを纏って現れた
「目覚めたかぁ暁の戦士よ、だがどっち道　お前はここで死ぬのだ
『グアー』
合体ドルバは『地獄の香り』と言う球体をたかなみに放った
「危ない　波」
「今の声は？もしかして」
波の前に現れたドクロの仮面は　エンドラスの剣で球体を払いのけた
「貴様　裏切る気が　ドクロ・ドルバ」
「ん・・ドクロ・どるば？、生憎あたしは　そんな変な名じゃあないわ」

???　たかみなの思い（後書き）

死のダンスを舞うあやまん踊り組に
レベカは　オヤジさんさんから教わった
『美少女大車輪（あいどる）』を仕掛けるのであった
はたしてアッキー以外のコンビは成功するのか？

???絶望（めつ）の力（前書き）

たかみなと麻衣の魂は　絶望（めつ）の力を導いた

???絶望（めつ）の力

オノウ御殿　三階　黄泉の間
「ん・・ドクロどるば？あいにく私はそんな名じゃあないわ」
「貴様は　何者だぁ？」
ドクロの怪人はその仮面をとったそこにいたのは波に似かよったの
少女だった
「やっぱり　麻衣姉ちゃんだったんだね、でもどうして？」
姉はあの時　学園の皆と生き埋めになった筈だ
「それがお姉ちゃんにもよく分からないんだよね、ただ気が付いた時
草原にいて誰かが「お前の使命を果たせ」と言う声が聞こえて来た
んだ
「よく分からぬ話だが　そんな事はどうでもよい　お前たちの肉体
は絶望（めつ）様を
目覚めさせる生贄となるのだぁ」
合体ドルバは　お腹の口から『鋼鉄龍』と言う光線を2人に放った
「きゃあー」
「大丈夫よ波、お姉ちゃんが付いているから」
「お姉ちゃん」
波と麻衣は手を握り合った　その時2人の体が反応しあった
『ウワ―ぁこの輝きはーぁ　ナ・ン・・ダァ・・』
合体ドルバの体は光の力に負け　溶けて行った
「これは　あの時波が買った、ペンダントの力なの？」
《違う・・ペンダントではない、お前たちの魂の輝きだ》
「何っ？心がこの凍るような声は」
麻衣の質問にその声は答えた、それは世界を変えた絶望（めつ）の力の歴史
だった
《私は名乗るべき名は無い　ただお前たち　人間たちは私を絶望（めつ）と
呼ぶ

遥かなる昔私は『アースカルド』と言う神々の楽園を作った　その楽園は最初は
喜びと希望に満ちた　素晴らしい世界であった、しかし神々が実験の為に作った
人間と言う生き物たちが自由勝手にふるまい　世界を混沌の渦に巻き込んでいった
ゆえに私は　アースカルドを滅ぼさねばならなかった
その後　神々はたくさんの星々（せかい）を誕生させていった
その代表格が第3太陽系に作った地球だった　４５億年以上も昔の事だ・・・》
いつしか麻衣とたかみなの2人は　原始の宇宙の誕生からの歴史を目の前で見ていたのだった
〇二階
マオンと麻友（りも）は2階のゴーストの間にいた
「なんとなく不気味な雰囲気ね」
「お化けでも出てきたら面白そうね」
「やっやめてよ麻友（りもさん）私そう言うのダメなんだから―」
「そうなる　こないだも　怖い夢見ておねしょしたなる」
「あんたそんな情報は入らないの」
「ふふふふふ」
うす暗い中から不気味な笑い声が聞こえた、そしてマオンの目の前に赤いカエルが
「よっごきげんよう」
と顔を出した
「二人特にマオンは「ギョエー」っと凄まじい声を上げた
すると突然部屋が明るくなり　カンフー・ドルバが姿を現した
「ワタシハドルバ親衛隊のチャンフー・キッドアルネ」
そう言って蛇のヌンチャクを鬼のように振った
「ハッヤッ・タァ　衣服を払ってチャイナ服に着替えた麻友（りも）が
「まおんちゃんは波を助けに3階に行って　アタタタ・お茶ァー」

とブルースリーのまねをしながらいった
同・一階
レベカとマリアと　あやまん踊り組に周りを取り囲まれていた
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー
　ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
「苦っこの人たちふざけているわりには　隙がないじゃない　レバッカちゃん」
「本当にね」
（どうしよう　ここはやっぱり　アッキーとあみ出した　あの技を使うしか　ないか）
レベカはアッキーの育ての親の鷲（とーべ）と猛特訓したあの日を思い出していた
○奇岩公園
「アッキー、お前たちはここで一人前のお馬鹿タレントになるために鷲と猛特訓をしたワシな」
「はい親父さん」
「あの時の苦労をもう一度しようでワシ」（懐かしいな小林昭二さん？」
「よろしくお願いします」と二人
「今日は特別な訓練をするでワシ　ワシを中心に「カッポレ　カッポレ」と踊りながら走れ
美少女大車輪（あいどる）の訓練だ」
「はい親父さん」
「カッポレ　カッポレ渋茶でカッポレ、ほれっ　ヨットっト、コリャトットット」
レベカとアッキーは　徹夜で特訓をした、それを見ていた公園の子供たちは
「ねーママ、あのお姉さんたち何しているの？」
「さっ　さあね、分かんないけど　坊やはああいう大人になっちゃーいけませんよ」

「はーい」
とシラケタた顔で通り過ぎて行った
○戻る
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
「でも　マリアさんとの初コンビで上手くいくだろうか」
「レベカちゃん　オイラ　だんだん頭がくらくらしてきたよ」
「どうする　迷っている暇はない、ええーいままよ、マリアちゃん大車輪行くわよ」
「ぇっ　でもオイラやったことないぜ」
「大丈夫　適当に合わせてくれれば」
マリアとレベカは　マック・ストーンの力を　最高にあげた
「行くよ　マリアっ」
「ＯＫだよ　べっきたん？」
『美少女大車輪（あいどる）』
レベカとマリアは
『カッポレ　カッポレ』と踊りだした、それにつられて踊り組の者たちも
２人を追って円を描いて走り始めた。
『カッポレ　カッポレ渋茶でカッポレ』
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
『ほれっヨットっト、コリャトット』
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポ・ポイポイピィー』
それはまるで、あやまん・ダンスに対抗した阿波踊り風ダンスの共演であった
両軍とも時折お尻を『パンパン』するしぐさを入れていた
それを遠くから眺めていた一つ目のおじいさんは
「・・・つっついていけん・・」
と口を『ぽかーん』と開けたままであった

???絶望（めつ）の力（後書き）

恐竜時代、戦国時代　絶望（めつ）によって語られる
繁栄と死の物語
そしてぶっつけ本番で『美少女大車輪（あいどる）を仕掛けた
レベカ、はたして成功するのか？

？？？世界を破滅させる力（前書き）

麻衣と波（たかみな）は宇宙誕生からの
歴史を見ていた。

？？？世界を破滅させる力

〇原初の宇宙
麻衣とたかみなは誕生したばかりの宇宙を見ていた
混沌（かおす）から始まった白い宇宙の一点に裂け目が出来　そこから３つの
顔を持った
女神が現れた　彼女はその懐から生命の実を取り出すと
「星よ生まれなさい」と言ってその種を宇宙にばら撒いた、そして
誕生した多くの
星の中の一つがアルドだった。
《このアルドは地球の兄弟星として同じ位置に作られた　そしてとも
に同じような文化を
たどって行った》
２人は　２億３千万年の昔の大恐竜時代に降り立った、三畳紀後期
辺りから白亜紀の終わりまで
約１億６５００万年の間地球を支配してきた恐竜たち　やがて原始
人の時代を得て
天下統一を旗印に武将たちが戦った戦国時代、各地で続く民族戦争
と時代は瞬く間に
変わって行った
「歴史の　勉強よりも、凄い」
と麻衣とたかみなは４５億年以上の歴史に圧倒させられていた
『お前たちに見てもらったのは　２つの地球の歩みだ、特に人間が
生まれて以後
この世界は争いの歴史だった　ある者は　宗教の違いを理由に戦い
　またある者は
領土拡大のために戦う　所詮人間は争う事しか出来ない　生き物な
のだ」
絶望（めっ）の鋭い指摘に２人は反論が出来なかった

《当初ワシは　争いの歴史に終止符を打つべく　あやゆる者達に
争いを反転する力を与えた
そしてその力を有効に使い争いの歴史に終止符を撃たんとしたのが
信長であった
その試みはある程度成功した　しかし奴の精神はいつしか巨大な魔
王と結びついてしまった
このままにしておけば　信長の巨大な精神は　全ての世界が崩壊し
かねない
ゆえにワシは彼の存在をこの世界から消し去った
そう　それが　お前たちが　　半分ずつ持つ　反転の力じゃ》
「世界を反転させる力」
麻衣とたかみなは動揺を隠せなかった
そこへ　忠臣蔵の様な長い裾の衣装を纏った　胸の大きな女性が二人
鼓笛隊の演奏に合わせやってきた
『イヨーォ・カッポン・カッポン、イヨーォ　カッポン・カッポン』
「あなたたちは叶姉妹？」
「麻衣　そして　たかみなとやら　お前たちではその力を有効に使
う事は出来ぬ
私と　お姉さまが使わせてもらう」
美香はそう言うと姉の狂子と合体した　双頭の魔女『ゲルベロ・ド
ルバ』である
『うわあああ』
魔女の目が光ると　麻衣とたかみなの体から『キング・アイドル』
の力が
放出し始めた
「ウワあああああ麻衣姉ちゃあん」
「なみいいいい」
２人はしっかり手を握り合った
○叶御殿２階
マオンと麻友は最上階に向かう為　２階の　亀の間にいた

「なんか　薄暗い部屋だねえりもちゃん」
「そうね　化け物でも出そうな雰囲気だね、マオンちゃん」
「よしてよ　りもちゃん　私そう言うのダメなんだから」
マオンは怪奇映画が好きなわりには、会談は苦手であった
「バぁああ」
その時薄暗かった部屋がとつぜん明るくなり　アンコウの顔がマオンの目の前に
『ニュ』っと現れた
「ギェえええええ」
たちまち仰天し　その場にへたり込むマオン
「こっこっこっこ、驚いたか　俺様は叶御前の親衛隊長を務めるアンコウ・ドルバでこっこぉ」
「出たわね　化け物」
麻友は衣服を脱ぎ棄てた　するとチャイナ服を纏ったりもが現れた
「ここは　りもにまかして、マオンちゃんは　波を助けに3階に行って早く」
『ワッチョ―ォ・ワたたたたた・お茶ア』
とニンジン型のヌンチャクを振り廻して　りもが行った」
「・うっうん、じゃーここ　頼んだよ」
マオンは3階への階段を上って行った
同・一階
一方1階では壮絶な戦いが続いていた（ほんまかいな?）
『カッポレ　カッポレ渋茶でカッポレ、お尻ペンペンお尻パンパン」
』
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー、お尻パンペンお胸モミモミ』
『ほれっヨットっト、コリャトットお尻ペンペンお尻パンパン　』
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィーお尻パンペンお胸モミモミ』
この攻防戦は炎天下の中10分間も続いた

『カッポレ　カッポレ渋茶でカッポレ、お胸モミモミお尻つるりん」
『ポイポイポイポ・ポイポ・ポイポイピィー・お尻パンペン　投げキッス『ブチュッ』
そして15分が経過　両軍とも　疲れてきた所で　レベカが
「いまだジャンプ」
と声をかけた　マリアとレベカは一斉にジャンプ　少し遅れて　あやまん隊が
『ポイポイポイピィー』
とジャンプ　レベカとアリアは　お尻を『ペロッ』とめくって空中で反転　だがあやまん隊は　そのまま激突
『ポイポ・ポイポイピィー』と爆発した
「やった成功だよマリアちゃん」
レベカはあくしゅを求めた」
求められたマリアは右手差し出した時、握手しようとしたレベカがそのまま倒れる（サンドーバックに～い　ジョー　懐かしいじょ？）
「アッキー今行くからね・・」
「レベカーあ！」
それはツインズ・ハートの戦士レベカの壮絶な最期であった
（と　言うより　単純に　熱中症では？）」
その戦いを眺めていた　一つ目の　おじいさんは
「おそれいりました・・おっ　俺の　負けた・・」
と跪くのだった　（　ZXスペシャルの　中屋敷さんの感じで？）

特別版　挿入歌について！（前書き）

カバナイの作品に登場する　挿入歌は（自身の作詞は除く）はピッタリの物をチョイスして、乗せております
（主にＡＫＢ４８の曲ですが）

特別版　挿入歌について！

？【ヘビーローテーション☆ダンテの不思議な旅】　ＡＫＢ４８

《これは作品内では　天使見習いのミーナのお気に入りとして出てきますが
ミーナではなく　カバナイのお気に入りの曲なのです》

１．２３．４Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！
Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！頭の中，ガンガン鳴ってるＭＵＳＩＣ　ヘビーローテーション
ポップコーンが　弾けるように好きという文字が躍る　顔や声を
想うだけで　居ても立ってもいられない，こんな気持ちになれるって
僕はついているね　Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！
君に会えて　ドンドン近づくその距離に　ＭＡＸ　ハイテンション
Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！ハートの奥
ジャンジャン溢れる愛しさは　ヘビーローテーション♪

？【言い訳Ｍａｙｂｅ】

《同じくダンテの不思議な旅のエンディングに入れてあるこの曲は
ミーナの心に秘めた気持に　ピッタシだったので　使わせて貰いました》

いつもの道を　走る自転車　立ちこぎの汗が揺れる　９月のそよ風
休みの間　会えずに居たら　君の事が気になってきたんだ
ただの友達と　思っていたのに　今すぐにでも　君に君に　会いたい

Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅすきなのかもしれない
青い空には雲はひとつもない
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅすきなのかもしれない
それが恋だとわかっているけど　言い訳Ｍａｙｂｅ

愛しくて　切なくて　どうにもできなくて
愛しくて　切なくて　僕は苦しい　好きだ　好きだ　好きだ
君の事が　Ａｈ　本当は好きだ
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅ　そんな勇気はない
Ｐｒｏｂａｂｌｙに近い　もっと確かなもの
Ｍａｙｂｅ　Ｍａｙｂｅそんな勇気はない
ずっとこのまま片思いでいい　言い訳Ｍａｙｂｅ】

？【Ｊｏｕｒｎｅｙ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ｔｈｅ　Ｄｅｃａｄｅ☆理想郷・たかみな】ガクト

《この作品はディケイドの物語がベースにあるのでやはりこの曲が挿入歌としてはベストだと思いました》

見上げる星　それぞれの歴史が輝いて、星座のよう　線で結ぶ瞬間
始まるＬｅｇｅｎｄ　オーロラ　揺らめく時空超えて　飛び込む
迷走するＰａｒａｌｌｅｌ　Ｗｏｒｌｄ
Ｏｎ　ｔｈｅ　ｒｏａｄ　誰も旅の途中　本当の自分自身　出会うため
新しい夜明けへと続く　道に変わるのだろう
目撃せよ　Ｊｏｕｒｎｅｙ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ｔｈｅ　Ｄｅｃａｄｅ】♪

？【ＲＩＶＥＲ！☆　アイドル大戦】　ＡＫＢ４８
《この曲は　死に直面した少女たちが　唄う　希望の歌に

ピッタリなので、使わさせて　いただきました》

前へ進め！　（Ｇｏｔ　ｉｔ！）立ち止まるな！　（Ｇｏｔ　ｉｔ！）

目指すは陽が昇る場所　希望の道を歩け！

行く手　阻む　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！

横たわる　Ｒｉｖｅｒ！　命の　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！　Ｒｉｖｅｒ！

試される　ＲＩＶＥＲ！　迷いを捨てるんだ！

根性見せろよ！　ためらうな　今すぐ　一歩　踏み出せよ！

Ｂｅｌｉｅｖｅ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ！　前へ！　前へ！

まっすぐ進め川を渡れ！　Ｈｏ！　Ｈｏ！　Ｈｏ！　Ｈｏ！

いつだって夢は　遠くに見える　届かないくらい距離感じる

足下の石を　ひとつ拾って　がむしゃらになって　投げてみろ！

君の目の前に　川が流れる　広く　大きな川だ

暗く深くても　流れ速くても

怯えなくていい　離れていても　そうだ　向こう岸はある

もっと　自分を信じろよ　闇の中を　ひたすら泳げ！

振り返るな！　ｈｏ！　ｈｏ！　ｈｏ！

????　集え戦士たち！（前書き）

黄泉の間では、ゲルベロ・ドルバとなった　叶姉妹（おのう）が
麻衣と波が持つ　キング・アイドルの力を奪っていた。

???　集え戦士たち！

○黄泉の間
「あああああああ」
「フフフフフ、信長とは違い　お前たちがその力を使うには、入れ物が小さすぎる
我らが使うふさわしい」
「ハアアア嗚呼」
麻衣と波の体内から球体が抜け出した
「フッフッフッフ、今一息だそれー」
球体はゲルベロ・ドルバの体内に入ろうとしていた
「セルゲィアー・ブリザード」
猛烈な風が渦を巻いて　ゲルベロ・ドルバを貫いた
「ウワーァ」
球体は怪物の体から離れた
「何奴だ」
「マオン　おっとここでは精霊騎士ラーマォンだったかな」
セルゲイアの剣を構えてマオンが現れた
「お前は何者だ　この世界の者ではあるまい、その精神も人間の者ではない」
「確かに人間じゃない物が言ってるけどね」
と　マオンの額からナルーがちょこんと顔を出した
「いやっ、そのようなちっぽけな者ではない　それにその剣は人間が扱える者ではない」
「へっ　そうなんだ？」
「ふざけるな娘、貴様ただものではあるまい？」
「ふざけているのはどっちだよ、それにあたしは波ちゃんと同じく
　平凡でも言い
と思っているただの人間だよ　だけどその力が　あんたたち怪物の

持ってる力より
ずっと強いんだって信じてる」
「たかが人間が我らより優れているだと、　そのような戯言は地獄でもいいな」
そう言うとゲルベロ・ドルバは2つの口から『滅亡(し)の炎』と言う光線をぶつけた
『ドドッ』
「タァー」
それを一陣の風が吹き飛ばした、そこには　マリアと彼女に肩を貸した麻友(りも)がいたのだった
「ここにもいるぜぇ」とマリアが言った（ここにいるぜぇ　懐かしいぞ）
「フン　まだ生き残りがいたか?だが　たかが人間に我は　タ・ォ・セ・・ン」
『ギアーァ』
絶望(めっ)の力がゲルベロ・ドルバに入った　いつしか御殿は消え怪物は巨大な
機械怪物　となった
「見たか　これが絶望(めっ)の力を得た我の　最強の形態　オノウロボ『ベッカンコ』
だ、恐れ入ったか　ベッカンコォ」
と怪物はアカンベーをした
「ついに姿を現したか、なみ　りも　マリア　そしてマオンちゃん　行くよ」
「オッケイ　だよ」
5人はそれぞれガッツポーズをとった　そのときキング・アイドルの力が12に分裂し
それぞれの肉体に宿った
「私たちも戦うよ」
そこに現れたのは死んだはずのレベカとアッキーそしてヨシエとデ・

スピードの7人だった
「貴様たちは死んだはずでは（・・？」
「見たかァ、信じていれば　必ず奇跡は起こるは　（ぼいすらっがー？）
「よし今こそ　戦いのとき」
「麻衣　変身」（クウガ風に）
「ハッ・ヤッ・タッ　たかなみ変身」（賀集利樹風に）
「ピッピッピッ麻友（りも）変身　（ケントの携帯で巧くん風に）
「いくよ　レベッカ」
「オッケイ　アッキーたん」
「変身」
それぞれ　秘密のメモリーを　ダーク・ストーンに差し込む（W風に）
「行くよマリア」
『ガブッ』
蒼ウサギのノンノがマリアの腕に噛みついた（ノンノ　いたのね）
「変身」　（キバ風に）
「ヨシエー変身」　（藤岡弘風に）
「チンッ変身」　（それぞれ電撃棒をもって　ヒビキ、トロロキ　ザンキ　アマキ風に）
ダーク・ストーンが光り輝き、中央にある風車が回る
麻衣たちはベルトに風圧（えねるぎー）を受けると
美少女戦士（あいどる）に変身するのである（藤岡さーん　見てたぞォ？）
「大島からやってきた戦士　麻衣」
「暁の戦士たかみな」
「渡り戦士　麻友（りも）」
「セクサ・ドール　ヨシエ」
「チビモニ戦士マリア&ノンノ」
「高速戦士　デスピード」
「お馬鹿戦士アッキー」

「癒し戦士　レベカ」
「私たちツインズ・ハート、さあ　お前の罪を数えろ！」
そして　アイドル戦士に変身した１２人は声を合わせて呼んだ
「驚きウメのキ　サンショウウオ　、ラブマ・にヘビロテ　ハローグッバイ
飛んでこいこい　大巨人」（タイムボカンシリーズね懐かしいぞ）
すると魔神アイドル・ネイビーが何処からともなく飛んできた
「またせたなあ」　（コント赤信号か？）
「フライング・ゲえっと」
１２人は光となって魔神の中にはいって行った
「貴様は　守護魔神　アイドル・ネイビーか？」
２人の魔神は　アルド砂漠でにらみ合っていた

????　集え戦士たち！（後書き）

戦いは宇宙に　戦士たちは　天使の羽
マック・すくらんだ―を呼んだ。

キャラクター名鑑？守護魔神　アイドル・ネイビー（前書き）

戦士たちが呼び出した　守護魔神
アイドル・ネイビーのデーター

キャラクター名鑑?守護魔神　アイドル・ネイビー

?「大島の戦士　麻衣」
?「暁の戦士たかみな」
?「渡り戦士　麻友(りも)」
?「セクサ・ドール　ヨシエ」
?「チビモニ戦士マリア&ノンノ」
?「高速戦士　デスピード」
（タカコ、ヒトエ・エリコ、ヒロコの４人）
?「お馬鹿戦士アッキー」
?「癒し戦士　レベカ」
?「セクサ・ドール　ヨシエ」
『１２人のアイドル戦士が一つになったとき現れる魔神ロボ、それがアイドル・ネイビーである』
身長３０～無限　体重２５０トン武器　両目からは『メイビー・ビーム』
胸の装甲板からは「お馬鹿サンダー」肩からは「アリエスの矢」を放つ
腰のカバーを外し、「おむつブーメラン」を繰り出す
両足からは「ＡＫＢミサイル・キック」を繰り出す　またＲＴが操る「天使の羽」で
マッハ４８で大空を飛ぶことが出来る
また　必殺剣　サプライス・ソード（ひかりの剣を　フライング・ゲッドと繰り出す）
動力　アンパン３つ（そんなんでいいのか?）　装甲　ＡＫＢ合金ニューゼット
開発者　不明

????天使の羽（前書き）

ベッカンコ・ロボとの戦いは宇宙へ
麻友（りも）は衛星基地『渡り廊下』から
波のいとこ　高波レイ（１９）が操縦する
天使の羽（まっくすくらんだー）を呼んだ

???:天使の羽

ベッカンコ・ロボとアイドル・ネイビーはアルド砂漠でにらみ合っていた
「フッハッハッハッハッハッハ、少女戦士(あいどる)たちよ、貴様との勝負は宇宙で付けてやる　見事ついて来れるかな　ベッカンコ・ウイングッ」
『プゥゥ』
『キーン』
ベッカンコ・ロボは　ワシの様な翼を広げ　お尻からジェット噴射で大空に飛びたった
「飛んで行っちゃった　けど　どうする麻友(りも)
「まかしといてよ」
麻友(りも)は通信機になってるブラからアンテナを出して衛星『渡り廊下』に連絡した
「もしもし　こちら麻友(りも)例の物を送ってくれる」
「OKらぶたん了解しました」
○衛星『渡り廊下』
「レイ、こちら管制室の　らぶたん　アルド５５５地点に天使の羽を送って(まっくすくらんだー)？」
「高波レイ了解しました」
「変身」
壁を通りぬけると　ラッコの戦闘服(こすぷれ)が装着させる
天使の羽に乗り込むレイ
「マック・すくらんだーゴーォ」
○アルド５５５地点
『ダンダンダンダン』
と走る魔神　そして大空から　高波レイが操縦する天使の羽が飛んでくる

「てってん　て　てんしのはーね　合体」
魔神がジャンプし　空中で　レイが操縦する天使の羽と合体する
「ザーン　こーくな　天使の　つーばーさ♪」
「マック・すくらんだー　クロース」
『ガシーン』
ドッキングした瞬間　魔神の体が光り、背筋が『ピーン』と張る
「アイドル・ネイビーＧＯ・ＧＯゴー（郷ひろみか？）
『ゴーおおお』
アイドル・ネイビーは　マック・すくらんだーで大空へ舞い上がった。

《大空羽ばたく　てってん　て　てんしのはーね
そーの―名は　マック　すくらんだー
アンパン３つで動く　アイドル・ネイビー
すくらんだー　クロースで　ドッキング♪』（空飛ぶ　マジンガーＺの節で）
「おのれー追ってきたか　死人ミサイルを喰らえ」
お尻から『ズ・ブリ、ズ・ブリ』
とミサイルを繰り出すベッカンコ・ロボ
『ドカーン　ドカーン』
「くそー」
それを交わしながらアイドル・ネイビーは胸の装甲板から稲妻光線を出す
「お馬鹿サンダー」
とアッキーが叫ぶ
「ウワーおおお」
お馬鹿サンダーとは　ばかばかしいほど強烈な電気技である
「続いて　オムツ・ブーメラン」
マリアの掛け声で　腰のカバーを外し　ブーメランにして投げる
「ズバーン」

ベッカンコロボの　右腕が吹っ飛ぶ
「オノレィお前たち　許さんぞー」
「ベッカンコロボ、怒りの　エネルギー停止ビーム　だベッカンコーォ」
『ババババババー』
「うっ　何これ動けないじゃない、麻衣姉ちゃん何とかして」
「そう言われてもおおおおお」
「フフフフフ　死ねアイドル戦士ども」
「うわあああああ　これ以上持たないなる」
「しっかりしてー　エ　みん・・なーあああああ」
ベッカンコ・ロボの反撃にマオン達は　ピンチを迎えていた

？？？集合する力（前書き）

１２人の美少女戦士（あいどる）の合体技がさく裂する

???集合する力

「今こそ君たちの力を一つにするのだ」
「その声は巧さん、よっしみんなぁ全員の力を一つに合わせるのよ」
「オ―ォ」
「まいまいのお色気」
「麻友（りも）のへたっぴウインク」
「ヨシエの巨乳」
「デ・スピードの大人の秘密」
「マリアのアンバランスな恋人」
「そしてマオンのセールゲィアー」
１２人の美少女戦士（あいどる）の力が一つになったとき
アイドルネイビーが１２に分裂した
『アイドル・ネイビー麻衣』『アイドル・ネイビー麻友（りも）』
『アイドル・ネイビーヨシエ』『アイドル・ネイビーアッキー』
『アイドル・ネイビーレベカ』『アイドル・ネイビー　ヒトエ』
『イドル・ネイビー　タカコ』『アイドル・ネイビー　エリコ』
『アイドル・ネイビー　ヒロコ『アイドル・ネイビーマリア
『アイドル・ネイビーマオン』そして『アイドル・ネイビーたかみな』
「ファイナル・アーンサー」
たかなみ以外のネイビーは皆　四角い握手権（かーど）となった
「必殺サプライズ・ソードー　ふらいんぐげえっど♪」
１１枚のカードをぶち抜いていくたかみな
「おのれー　ギガ・スパークだベッカンコ―ォ」
黒い霧でガードするベッカンコ・ロボ
『タ―ァ』
『ズバアーン・ズバアーンズバーン』
「サプライズ・アタック」

黒い霧を押しのけて　ベッカンコ・ロボにたかみなの剣が貫く
『きいいいいいーん』
「見事だ　たかみな　・・・バンザーィ」
叶姉妹（おのう）の姿に戻った　美香と　狂子は
抱き合って自爆したのだった
そして　再び一つに戻ったアイドル・ネイビーを
巧が見つめていた
「君たちのおかげで　このアルドは救われた・・ありがとう」
その傍らには　真理が寄り添っていた
「ふっふっふっふ、やはりこう言う結果になったかホホホホホホホ
戦士たちまた会おうホー」
と言ってコウモリの亜陀魔（わだるま）は飛んで行った
『ポイ・ポイ・ポイ・ポ、ポイ・ポポイ・ポイ・ピィ・・♪』

???集合する力（後書き）

戦いが終わりアルドの再生が始まった。

???アルドの復活（前書き）

マオン達の戦いによって　ドルバ一族は滅び去った

???アルドの復活

○アルド砂漠
美少女戦士たちの活躍で叶御前の野望は潰え
絶望の力は消えて行ったのだった。
《おめでとう美少女戦士たちよ》
彼方から声が聞こえ、辺りが眩い光に包まれた
《君たちは勝ったのだ、したがってこの世界を再生しよう》
それは　１２枚の色とりどりの翼を持った想像と気象の神ゼノン（ギ・ワシカ）
が舞い降り、地上に桃色の由紀を降らせた　すると砂漠におおわれていた
大地が緑に蘇っていった　次にゼノンは紙風船を膨らませ
それを『光の矢』と共に地上に投げた
すると今度は墓場から死者が『ウガ―ァ』と生き返った
だが彼らは裸だったので女神が放った紙風船を腰に巻いたのだった
いつの間にか地上に降り立っていた戦士たちを代表してマオンが尋ねた
「あのう女神さん」
《あなたは、ラーマォンですね》
「いえっ、それはこの世界の名でほんとはマオンと言います」
《ではマオンさん、彼方の質問したい事は　生き埋めになった人たちのことですね》
「はいっ」
《それは心配ありません、この世界はリセットされたのだがら》
「リセット?あのうそれともうひとつ・・いえっ・・いいです」
マオンはＡＫＢ（アキバッ子・クラブの　柏由紀に
似ていると　言おうとしたのだが　言わなかった
そして瞬く間にかつてのアルドシティーはゼノンによって再生させ

たのである。
「これでこの世界での役目も終わったね　ナルー」
「そう　なる　帰ろうなる」
「エッもう帰るつもり？これから麻衣姉ちゃんの自慢の料理、食べてもらおうと思ったのに」
「それは残念だけど、これ以上いると別れがつらくなるから帰るよ」
「残念だなーあ、麻友（りも）の秘密基地見せてあげようと思ったのにィ」
「アはは、それはまたの機会にするよ、じゃあ　ウシババさんによろしくぅ」
「ナルー」
亜空間の扉が開く
こうしてマオンとなる―は再び元の世界へと帰って行ったのだった。

《瑠璃色の地球》
『夜明けの来ない夜は無いさ　あなたがポツリ言う
燈台の立つ岬で　暗い海を見ていた
悩んだ日もある　哀しみに　くじけそうな時も
　あなたがそこにいたから生きて来られた
朝陽が水平線から　光の矢を放ち
二人を包んでゆくの瑠璃色の地球

泣き顔が微笑みに変わる　瞬間の涙を　世界中の人たちに
　そっとわけてあげたい
争って傷つけあったり　人は弱いものさ
　だけど愛する力も　きっとあるはず
ガラスの海の向こうには
広がりゆく銀河　地球という名の船の　誰もが旅人
ひとつしかない　私たちの星を守りたい
朝陽が水平線から　光の矢を放ち
二人を包んでゆくの　瑠璃色の地球♪・・』

？？？アルドの復活（後書き）

その後の戦士たちです。

？？？ラストはエンドレスで（前書き）

こんなラストはいかがでしょうか？

???ラストはエンドレスで

ここアメリカ航空宇宙局では世紀の実験が行われようとしていた
○ＮＡＳＵ朝７時
「この実験が我が国の未来に繋がると信じていますＩ' ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ」
アメリカ州大統領シュワトラ・ネーダーの宣言で冬眠カプセルのスイッチが入れられた
その中には宇宙飛行士でタレントの河合オナ子と神原ヨシエの２人が寄り添うようにして眠っていた。
・・ヨシヨシ・・オナオナ、ずっと一緒だよ
二人は百年後も二百年後も冬眠カプセルの中でシッポリと濡れあった
○半田病院
巧ケントは２人の夢だった画家になるために　フランヌに旅立つため５５５号室を訪れていた
「真理、当分会えないから会いに来たよ」
「あらっ巧さん　今日はもういらっしゃっていたの」
「風谷さん　今から出立するのでこいつの事よろしくお願いしますね」
「任せてよ、と言いたいけど　今度政府が開発した時空を走る電車に看護婦兼巡業員として移動する事になったんだ」
「それはおめでとう」
「でも真理さんの事は後輩によーく頼んどいたから安心して行ってらっしゃい」
「ありがとうございます」
最後に巧は寝ている真理に口づけをした
すると１５年間反応が無かった真理が
真理が　舌を絡ませてきた（そっそう?）

一分後まだ続いている3分後まだつづいている　そして１０分後まだやっていた
（おいおい？）
「あのねあんたたち、いい加減にしてよね」
と顔を赤らめた梨奈が言う
（私だって翔一くんとまだなんだから）（ほんとに？）
巧は真理と共に病室の外を見つめていた
「奇跡ってあるんだな」
とケントは言った
「ほんとにね」
と真理は呟いた
（フフフ巧　また敷いてあげるね）
その瞳はあやしく光っていた（さすがクイーン）
〇アルドの丘夜7時
ウシババとネオ少年はアルドの丘で行われる夏の恒例行事　花火大会にッ出席していた
「今頃、波お姉ちゃん達　出発したころかな」
「ネオも行けばよかったのに」
「でもそれじゃーおばあちゃんが一人になっちゃうから」
市長であるウシババはこの花火大会の主催者でもおあった
「ホンにネオはやさしい子じゃな」
ウシババは堤防に腰掛け夕陽を眺めながらポツリと言った
「平和じゃのお、まるで一週間前が嘘のようじゃ」
「みんなマオンねえちゃん達のおかげだね、今頃何しているかなナルーは元気でいるかな」
「もちろん元気でいるとも　今頃ここと同じ夕陽を眺めているに違いない」
ウシババはしみじみと言うのだった
〇カルガモ空港
電ランナー前

波たちは修学旅行で昭和を見に行くために開通したばかりの時空列車の前で
麻友（りも）が来るのを待っていた
「遅いぞ麻友（りも）遅かれし麻友（りも）
《間もなく電車は発車います、お見送るの方は白線まで下がってください》
「おーい波ぃ、そろそろ出発するから席に付けって藤門が」
「わかった今行く」
（しゃあないか、昭和の土産でも買って帰ってやるか）
その時猛烈な勢いで髪を2つに分けた少女がジェット・ブーツでやってきた
「どいてどいてどいてぇ」
『ドシーン』
見送りに来ていた山里と言うアイドルオタクとぶつかり　絡まった拍子に
麻友（りも）のお尻をそのおじさんが『ぎゅっ』と掴んでいた
「なーにするんじゃー、『必殺ちゃん玉蹴り』
『どばーん』
「ううう幸せ―ェ」
とおじさんは股間を押さえ悶絶した
「エへっ、またまたジェット・ブーツが暴走しちゃっってさぁ」
「麻友（りも）ちゃん、言い訳は良いから早く乗りなよ」
とマリアが急かした、彼女たちドリーム・スターの者達もイベントのため車両に乗り合わせていた、他にもセイコ・フロ―ネアが数億円ヌードで復活をかけていた
アルド政府が作った電ランナーは　1号～R？室まで計12列編成で一室に48人が搭乗できるが今回は試運転のため今回の搭乗者はAKG学園（Aクラス）やドリームスター・セイコ・やデ・スピードと言った
アイドル達の計百数名であった

電ランナーは亜空間に『亜空間呼びこむカムカム』と言う装置を使い亜空間に突入した
同・亜空間
「ＲＸ室にいる者たちは
『ワイワイ・ガヤガヤ』
とお祭り騒ぎであった
（様子はこれで終わり、簡単だなあ）
「ぇ―みなさんに報告があります、今回の時空ツアーに参加する予定であった
元メンバーのスタッフ藤元真樹ことマキてぃが夫信濃川庄司さんの出産の為??
参加できませんでした、それとマキてぃ自身も妊娠しているので
旦那さんとのW出産もあるかも」
『マキてぃおめでとう』『へ―エ男性妊娠ってマジすか?』『マジすか学園』
とファンたちは様々な言葉でエールを送った
「皆さま大変長らくお待たせしましたここが昭和の世界です」
お尻を『キュッ』とアピールした巡業員の梨奈が言った
○１９７１年
「ついたぜ　ついたぜぇ、ひさしびりにあばれてられるぜ」
「相変わらず下品ですねー」
「なにー俺様とやるかぁ」
「どうやらぼくに釣られたいようだけど、逃げるなら今のうちですよ
何　逃げない?答えは聞いてない』
「まあまあモモ太郎もウラ太郎もやめろよ」
「だって梨奈ちゃん、こいつ何時もむかつくんだよ」
「それはこっちのセリフです」
「まあ　二人はほっといて、とりあえずコーヒーでも買ってきますか」
梨奈は近くにあったアミ―ゴと言う売店には言った

「すいませんおじさん、このＡＧＩＴＯと言うコーヒーをくださいな」
「ハイハイ　今行くから待ってるポイポイポーピィー」
とおじさんは妙な踊りをしながらやってきた
「あのお、それはギャグですか」
「何をいっとる、わしは何時も真剣だポイポイピィ」
見ると銅とサンゴを持った安倍なちみと言う女性が
ガイコツファッションの少女たちを従え歩いていた
「ポイポイポイポ・ピィ」
「銅とサンゴで　ドーサンゴー」
なちみは七色の怪人ドーサンゴーに変身した、すると街の人たちは
「ポイポイポイポ・ピィ」
とひれ伏してしまった
街で大暴れする怪人たち
「うわーあ怪人だーぁ」
その時美少女戦士たちが再び現れた
「大島からやってきた戦士　麻衣」
「暁の戦士たかみな」
「セクサ・ドール　ヨシエ」
「チビモニ戦士マリア&ノンノ」
「高速戦士　デスピード」
「お馬鹿戦士アッキー」
「癒し戦士　レベカ」
「オノレーお前たちが噂のアイドル戦士か」
「おっと待ったぁ、こっちにもいるぜ」
「渡り戦士麻友」
「ハート戦士らぶたん」
「春を呼ぶ戦士　はるゴン」
「あやとり戦士　あやりん」
「引き籠り戦士　こもりん」

「ワサビ戦士　わさみん」
「そして水着戦士　なっちゃん」
「我ら渡り戦士セブン」
「おまえらいつの間にか増えてねえか？」
「ふふふ、悪がある限る　私たちアイドルは不滅なのよ」
「そのとおりだぜ　たかみなちゃん」
それは超アイドル　ス・モップのメンバーで　ホテル「ワイン」の支配人　稲ノ貫吾郎だった
「今　僕のヴァン・ケットが芳醇の時を迎える、変身」
「亀ノコライダーG」
今再び戦士たちの戦いが始まろうとしていた
１９７１年の世界それはあやまん・ショッカーの支配する世界であった

???ラストはエンドレスで（後書き）

アルドではときどき遺伝子と精子の異常で
まれにだんせい妊娠が起こる、人たび妊娠が起きれば
女性ホルモンが男性ホルモンと同等に発生し
胸も急激に膨らみ（個人差はある）
８０パーセントの割合でオネえになる。

？？？　アイドル大戦の真実（・・？　（前書き）

もうひとつのラストです。

？？？　アイドル大戦の真実（・・？

〇？？？部『天使の羽』に戻る
ベッカンコロボ、怒りの　エネルギー停止ビーム　だベッカンコーォ」
『ババババババー』
「うっ　何これ動けないじゃない、麻衣姉ちゃん何とかして」
「そう言われてもおおおおお」
「フフフフフ　死ねアイドル戦士ども」
「うわあああ　これ以上持たないなる」
「しっかりしてーエ　みん・・なーあああああ」
ベッカンコ・ロボの反撃にマオン達は　ピンチを迎えていた
『嗚呼あああああ！！』
眩いばかりの光りが目に差し込みマオンたちは思わず目をそらした
『ゲーム・オーバー・ゲーム・オーバー』と言う電子音が響く
『ピッカー』
マオンは未来的な都市の一室で気が付いた
「ここは一帯何処？」
「フフフようこそマオンさん待っておった」
「あなたはウシババさん？」
そこにはウシババと名のったあのお婆さんが椅子に腰掛けていた
目の前には
マオンと同タイプのパソコンと『アイドル大戦』と書かれたＣＤＲＯＭが置いてあった
「ウシババ博士今日のゲームはいかがでしたか？」
そう尋ねたヒューマノイドの紳士はあのネオと言う少年に似ていた
「一体ぜんたいどうなっている　なる？」
私とナルーはさっきとはうって変わった大都市に茫然としていた
魔空都市アルド（カナルシティー）

「驚いたかねマオンちゃん」
　ウシババはこの世界の真相を話してくれた
「わしはこのアルド・シティー　の片隅にある　このカナル地区で育った　両親は共に科学者で
早くから天変地異が起こるのを予想しておった　ここはあの大異変で唯一残った地下の町なんじゃ
そうマオンちゃん達に話した歴史の半分は事実なんじゃよ
とオフィス室の机の上に置かれた写真たてを指差した
そこには波と麻衣の姉妹が並んで写っていた、その壁には　ＡＫＧ学園の皆と一緒に撮った
修学旅行の写真もあった。
「このアルドは　マオンちゃんの世界と同じく、科学と自然とが調和した　素晴らしい惑星じゃった
ところが　１９９９の7月に当然現れた　牛丼彗星によって　事情は一変した
実業家をも目指す者　アイドルを夢見る者　はたまた代議士になりたい者など
彗星は　市民たち　それぞれの夢を打ち砕いてしまったんじゃ・・・
でもまさかゲームの中に2人が入り込んできたときは驚いたよ」
「えっゲームって？」
ウシババさんはそう言って〔アイドル大戦〕と言うタイトルのＣＤＲＯＭを渡してくれた
その扉絵には
～平和な都市アルドを襲った大異変を生き延びたアイドル達が、最高の力
キング・アイドルの宝珠を賭けて戦う３Ｄ空間を利用したアドベンチャーゲーム
そう書かれていた
「そーだったなるか、良く出来ているなる」
「それにしても静ね　私達は今まで色んな所行ったけど

どこも大体はにぎやかで活気があるものよ？」
「いないんじゃよ」
「へっ？」
「だからわしとアンドロイドのネオ以外は誰もいないんじゃよ」
「でもさっき確か　大異変を生き延びたといったなる」
「確かにな　しかし住民は放射能の影響で全員死んでいったんじゃ
市民も　国民たちもさえもな・・・
じゃが何ゆえか？このわしだけは平気だったんじゃよ」
「そっ・・そうだったの」
「だがな　わしたったひとり残ってもどうにもならん　ここではする事がないし
あれから数百年経つが未だに放射能の影響で地上に出る事は出来ん」
「でもおばあさんのその体は？」
「放射能は造り物であっても影響を受けるんじゃ」
「・なるほど・・なる」
「そこでわしは　娘たちがあこがれていたアイドル達を主人公にしたゲーム空間を作り上げたのじゃ」
「それがこのＣＤなるね？」
「そのとおりじゃ　わしの心を持ったおばあさんがゲームの案内人になっておる」
「あのォウシバババさん　最初に出てきたゼノンって何なの？」
「ああゼノンか　ゼノンとはアルド神話に出てくる気象の神「ギ・ワシカ」じゃ」
「ギ・ワシカなるか？」
「アルドの　古い言葉（アッカンベ語）でゼノンと言うのじゃ（美しい羽根と言う意味）
ハッハッハッハッハッ・・・」
そう言ってウシバババ博士は　いつまでも笑い続けるのだった
「帰ろうか？」
「うん　その方が良い見たいなる」

私達は助手のネオさんに挨拶し　アルド・シティー　を後にした

その晩は2人は　アルドシティーに　たった一人で暮らす
ウシババさんのことを考えて眠れなかったのであった。

？？？　アイドル大戦の真実（・・？　（後書き）

ギ・ワシカは不思議界記伝（デルクラル神話）
では　月の女神ヂーナにあたる女神

???『学校移転の界』（前書き）

アルドから帰ったマオンは　文化祭の準備のため
久々に学校に行った（行ってたの??）
（マオン達3年生は受験の為　普段はお休みなのだ）

???『学校移転の界』

○聖魔穏学園前
（1）謎の工事
『チリン、チリン、チリン』
「マオン、あさみぃー、おはよう」

「おはようあっちゃん（前竹敦子）」
『チリリーン』
「はーいお先に」
「みーたん（峰岸小猫）またあとでねー」

「マオンー、また数学の教科書忘れたなるー」

いつもの道でいつものメンバーが挨拶を交わし自転車で通り過ぎて行く
そしていつもの会話が始まる　そんな当たり前の風景がずっと続くと思っていた　このときまでは
同・校庭

『ガンーガガガガガーン』
「まおんー、何か工事やっているみたいだよ」
「そうだね　あれェー？」
麻美の言葉に　辺りを見たマオンが呟いた
なぜなら学園の隅に在った小さな銀杏の木が抜かれていたからだった。
「ホントだ、無くなってるなる」
マオンは工事をしていたおじさんに　銀杏の木の行方を聞いた

「何で木　抜いちゃたんですか？」
「あぁ　あれかっ　あれなら邪魔なもんで引っこ抜いて捨てちゃったよ？」
「酷いよおじさん、あの銀杏の木はマオンが、校長先生から貰って育てた物なんだよ」
「そ・なる、そう　なる」
「そんなこと言ったってここはどうせ移転するんだし？」
「へっ？移転何が」
「助三郎　いつまでも　そんだら娘っ子とペラペら喋ってねーで体動かさんかぃ」
頑固そうなおじいさんが私たちの会話を遮った
「へイっ、分かってやす、そーらみろ嬢ちゃん達のおかげで光江文（みつえもん）の親方に怒れたじゃねーか」
そう言ってその人は仕事の続きを始めただった
○マオンのクラス
「えー、みなさんはイフの歴史ってご存知ですか？答えがありませんので続けさせていただきます・・ねーえなんか喋りませんかー」
野々房蘭子ことノブタ先生の授業をみんなが無視するのはいつもの光景なのだが
生徒たちは最近　にわかに持ち上がった学校移転が気になってかゲームやメールする物も、テレビなどのお喋りをする物もなく　まるでお通夜のようであった
「えーみなさんなんか喋りましょうこらー喋らんかーいっ」
しかし　ノブタ先生の怒鳴り声も残念ながら今回だけは不発におわった

「やっやっぱり見に行こうっと」

「わさみもいくわ」

「みーたんも」

クラス委員である　石黒ケメ子が校長室で行なわれている文部省の役人と校長先生との話を聞こうと立ち上がったそれを合図にみんなもいっせいに校長室に向ったのだった

「ちょっとーみんなぁ、先生をおいてくきかぁ

？？？『学校移転の界』（後書き）

学校移転には　剛腕幹事長の存在があった。

??　カジノ構想

（2）みんなの思い

校長室では　何キャンの山ちゃん　そっくりの戸稀（とまれ）校長が
文部省の代議士たちに説明を求めていた」

「おっはようございまーす　じゃぁなかった、さいさん言っているように
この工事を止めていただきたい」
普段はのんびりしている戸稀校長は、いつになく役人たちに怒鳴っていた
しかし　石川と言う代議士は落ち着いた口調で語った

「戸稀校長もご存知のように　わが国の経済は　昨今の震災で危機を迎えています
そこでわが囚民党（しゅうみん）は復興財源捻出のためカジノ構想を秘密裏に進めています」

「はあ？　それで？」

「そこで渋谷と秋葉原が候補地にあがりましてな、で立地条件が良いこの
学園を移転させ　カジノを作ろうと言う案が国交省からあがってきたと言う次第です」
と石川は淡々と原稿を読み上げた

「それならば何故筋を通さないのですか？突然工事をはじめられて

も？」

「われわれといたしましても知事や市長たちの許可を得てやっていることでして」

「ちょっと待って下さい、この校舎の一部は少しですが私が所有しております

のでせめてもうしばらく工事を停止してほしいのです　お願いいたします」

「そう言われましても　まあ検討はしてみますが」

そう言って代議士と役人達は校長室のドアを開けた

すると聞き耳を立てていたマオン達は一世に

『ドッーッ』と倒れこんだ

「なっなんだね君達は？」

その人数の多さに驚いた代議士らが帰ろうとした時　福委員の　藤井れいな（１７）が

「あのー私たちの学園を壊さないでください」

と詰め寄った

「はな　はね、この学校好きなのよね　だから　壊さないでほしいのよね」

「みーたんは学校ってあまり好きじゃ無いからど～でもいいんだけど
　みんなと遊べるからやっぱり在った方が良いかな？」（遊ぶとこ
ろではないんだけど？）
しかし役人たちは「フンッ」と言う仕草で生徒たちを無視して立ち
去ろうとした
「どうかみんなの気持ちを受け取ってくださいお願いします」
マオンは代議士の袖を『グッ』と掴んで、全員の気持ちを伝えた

するとみんなも
『おねがいしまーす』『学校を壊さないでください』
と　全員が束になってお願いした　でも役人達は振り向きもせず
「検討しておこう」
とだけ言って帰っていった
（３）小さな力
○マオンのクラス
「えー皆さん今日はこれから臨時にＰＴＡ会議を開きますので
今日の授業は終わりにします、帰って下さって結構ですよ」
「だったら私達も出席するよ」
「そーよ、そーよ」
「ダメですよ朝倉さん　野田さん、あなた方には他にやることがあ
るでしょ？」
ノブタ先生はそう言ってパソコンの方をチラっとを見た
「やることって？そっそうか署名運動ね」
「みーたんはどうもいいけど～文章はマオンが書けいいと思うにゃん
だってルポライター志望だし」
「先生はその後にみんな一人一人がそれぞれの
思いを書き入れる箇所を設けた方が良いと思うの」
「よっしみんなでやろう　がんばろうよ」
『オーォゥ』
マオン達は円陣を組みそれぞれ分担して作業を続けたのだった　願

いが叶う事を信じて
□学校移転についてのお願い！
【いま　震災復興　経済活性化などを理由に　私たちの母校聖魔穏学園を渋谷から移転させ
（候補地未定）そこに巨大なカジノを作ると言う構想が政府　囚民党から上がっています。
私たちは財源が有効に使わせるならば、それもやむ負えません　しかしこの政権交替したこの2年間で
彼ら（しゅうみんとう）は何をしてくれたでしょうか、他国との摩擦や領土問題を
悪化させただけではなかったでしょうか　それに計画が実現すれば多くの者は引っ越さなければなりません
しかしいろいろな事情で引っ越せない人もいるのです　ゆえに私たちは学校の移転には断固反対なのです
そのためにはどうすれば良いのかどうか皆様方の意見〔思い〕と力〔署名〕を私達にお貸しください。

【意見～ここからおねがいします】

「　　」

聖魔穏学園一同

??　カジノ構想（後書き）

市民の説明会で激突するジャーナリストのゆっかさん（朝倉真由香）と剛腕幹事長大沢逸朗　はたして勝者はいかに。

？？？対決ゆっかさんＶＳ豪腕幹事長（前書き）

学校移転の裏には　とんでもないからくりがあった。

???対決ゆっかさんＶＳ豪腕幹事長

一週間後
○渋谷駅前

「よろしくおねがいしまーす」

「皆さんの意見を聞かせてくださーい」

みんなの努力のかいもあってたくさんの署名が
渋谷周辺からぞくぞく集まってきた

「やったねマオンもうこんなに集まったよ」

「統計では2万枚を超えたなるよ」

「ありがとう　これもサミーやみんなのおかげだよ」

「みーたんはどうでも良かったんだけどぉ～後は説明会だよねぇ？」

「豪腕幹事長はなかなか手ごわいと言う噂なる」

「大丈夫だよゆっかさんなら多分やってくれるよ　信じようよ」
マオン達はテレビ局を決して入れないと言う約束の元で行なわれる
市民説明会に一途の望を賭けていた

○体育館

聖魔穏学園の体育館は広い作りになっているので説明会には適していた

長いテーブルの中央に市民代表でメディア・アナリストでもあるゆっかさんが

その他を校長先生や町長さんなどが座り後の席に私達住民らが陣取っていたの

しばらくすると何人かの役人達と共に豪腕幹事長の大沢逸郎が現れた

しかし住民たちはそれを〔シカト〕で迎えたのだった

「えーではこれからカジノ構想による学校の移転問題についての説明会を行ないます」

役人Ａの司会ではじまった話し合いは冒頭から大荒れの様相を見せた

「みなさまは心配されているようにリーマン以後世界経済の落ち込みが大変著しく

このままでは我が日本も第二の夕張　いやギリシアになりかねない

そこで私ども主民が考案したのが渋谷を初めとした巨大なカジノ構想なのです」

（６）ジャーナルストの血

「おっしゃることは大体分かりました
確かに経済の落ち込みも深刻ですし去年の震災の復興もまだまだ不十分です
しかしながら私どもは学校を壊すのには断固反対します」
住民たちを代表したゆっかさんは力強く語った

『そうだーそうだっー』

「それは　あなた方の　認識不足です　私共はは　学校を　壊すとは　ひとことも
申しておりません　他の地域に　移転すると　丁寧に　申し上げているだけです」

「そうは言いますが　私は今の状況を作った原因の一つはあなた方政治家の
無能さにあるとわたしは思っています　官僚主導と言う偽りの言葉で
重要な問題を決められないリーダー　まとまりが無く　失言を繰り返す閣僚達

そこら辺の幼稚園児たちの方がよっぽどましです」

「それは　これまで　政権を担当してきた　前政権の問題、我が囚民党は
その後始末を　しているに　すぎない」

「あなた方は二言めには前政権、前政権とおっしゃいますが　彼方は

政権の中枢である竹ノ子派にいらっしゃったではありませんか？もうおわすれですか」

「きついな　そう言えば昔、我が師匠　田辺角栄先生が　無人列島改造論を立案した時

その不備を見事についた　ジャーナリストがおったな
　たしか如月重太郎とか言いおったが・・」

「・・父です」

「なるほど　我が師を　有罪に追いつめたやつの娘と言う訳かこりゃーいい」

「父も私もそれに弘さんだってジャーナリストとしての正義を

それなりに貫いてきました
（マオンの方をチラっと見る）
そして、多分娘も？」

「なるほど　ジャーナリストの血筋と言う訳か　だがな　世の中には裏も表もあるだぞ

我らと共にこの日本を救うつもりは無いか」

「詭弁です・・私は日本経済が再生するならこの計画（カジノ）に乗っても良いと思っていました　しかしながら私どもの調べたことによると、この計画にはとんでもない裏があるようですね
それもドス黒い物が」

「さ　て　何のことかな？」

「分かりませんか　白い粉ですよ
弘さんの調べではこの渋谷にカジノを作り白い粉をはじめ密輸などの拠点とする
と言うような　実に信じられない話があるとか無いとか」

「ねえマオン白い粉って　みーたんが好きなうどん粉か何かよね？」

「・・いやっ、、たぶん違う・と思う」

ゆっかさんの言葉に周りは
～おっおいっ白い粉だってさ　～麻薬か～
と　ざわめきを見せたのだった。

？？？黒猫の約束（前書き）

剛腕幹事長の死角に狙われた真由香
だがそれを御救ったのは黒猫の精霊だった。

???黒猫の約束

（7）ゆっかさん狙われる

結局　幹事長は　無言で退席し説明会は一方的に打ち切られたのだった

テレビ中継はなかったのだが、会場にはマスメディアの人たちもたくさんいて

この問題をワイドショーなどで大きく取り上げられマスコミから追及をうけた
しかし囚民党は記者会見場にいた三明議員が記者とのもみ合いのさい転倒させられたと主張し、車椅子姿で現れると言った　パフォーマンスでこの問題をうやむやにしたのであった。
○渋谷会館
翌日

ゆっかさんはマネージャーの秋場ともみ（２３）と

環境問題の打ち合わせを終え駐車場に向っていた、そして車に乗り込もうとしたとき

〔♪フライング・ゲット　君はイルカに乗ってぇ〕

っと携帯がかかってきた

「もしもし・・誰っ、弘さん　それとも　まおかなー？」
「ふっふっふっ」

「あなた誰、何が目的？」
そのとき突然一台の車が2人を狙って
『バーン』っと突っ込んできた
「ゆかっ車がこっちくるよっ」
「やばっ、ともみっ走るわよ」
最初ゆっかさんと　ともみさんは一緒に逃げていたんだけど
　途中から別々に逃げることにした
しかし車は　ゆっかさんの方だけを狙って
『ドドッツ』と突っ込んできた
そして『バーン』とぶち当たったのだ
瞬間ゆっかさんの体が宙に舞った
「きゃーあ」
「由香あーぁ！・・・・・・」
そんな事件が起きているとは夢にも思わない
私とナルーは、半年ぶりにタイの取材を終えて帰国したヒーローさんと共に
ゆっかさんの帰りを待っていたのだった
その時遠くで『ピーポーピーポー』
と言うサイレンの音が聞こえてきたにだった
（8）灰色の決着

1週間前に突然はじまった母校　聖魔穏学園の
移転問題は密売品に絡む大きな事件に発展したのだった。

ルポライターであるゆっかさんこと朝倉真由香は　闇の首相大沢逸
郎を追い詰めたのだが
その翌日何者かが操る車で引かれたのだった。
○渋谷　野田病院7号室

「それにしても　軽症で済んでよかったな」
弘（ひーろー）さんが青ざめた目で呟いた

「そうだよ　サミーのお母さんから電話もらった時には
生きた心地しなかったんだからあ！」

「ホントなるよ　マオンはさっきまで泣きべそ　かいてた　なる」

「みんな心配かけてごめんなさいね」
「いいよ真由香さんが無事なら？」

そう言ってヒーローさんはゆっかさんにくちづけを交わした（人前
でよーやるわこの夫婦）

「でも車にぶっ飛ばされたって聞いたけど、その割には元気そうじ
ゃん？」
「そうなのよね　そこのところが私共にも不に落ちないのよね」

っと　首をかしげながら看護師さんが入ってくる

「あっ、なつみー今回は世話になったわね」

「ふふっいいのよ私達親友だもんね、それより目撃者の話ではぶつかった車の方も

オシャカ（壊れる）になったらしいわよ　それと　ともみさんの話では由香に車が
衝突した時猫のような人間が見えたんだって」
「へっ、猫？」
「そうっ　黒い猫がまるで真由香を守るように現れたんだってさ
多分見間違いだと思うけど？」
とサミーの母野田なつみは首をかしげた
その言葉を聞いた途端ゆっかさんは両手で顔を覆った
「どうした真由香？どこか痛いのか」
「いやっなんでもないよ　ただ嬉しいの・・嬉しいの」
そう言った切り言葉を詰まらせたのだった
〇真由香５歳の時
ゆっかさんは小さいとき　別の世界へ迷い込んだことがあったらしい
その時　その世界で助けてくれたのが
キャット・ピーグルと言う黒猫の精霊であったの

「心配することないでやす　これからも　どんな時でも
あっしが守ってやるでやす　約束するでやす」

その後　警察は　壊れた車のルートから大沢と繋がりがあった
ある暴力団を突き止めた　しかし事件は元組員の今井が勝手にやった
犯行と言うことで決着した　もちろんヒーローさんらの訴えで
特捜部が懸命に捜査したのだが、

秘書の石川らの私文書偽造くらいしか暴けず　大沢の首までは届かなかったのである。

しかし学校の移転はもうひとつの候補地だった　ＡＫＢ学園が大阪のＳＫＢ学園と統合と言う形で取り壊されたのみでカジノ構想はひとまずは延期されたのだった

？？？黒猫の約束（後書き）

取り壊されたＡＫＢ学園後は今も　野ざらしのままである
そしてこれが　第一部『『？ｅｎｕｓ伝説となった少女たち～』
に繋がって行くのである

???『ゆっかさん脚本を書く』（前書き）

ジャーナリストの真由香ことゆっかさんは
子供番組のヒーロー物の脚本を書くことになった。

???『ゆっかさん脚本を書く』

（1）脚本の依頼

その日真由香さんは自分の部屋で熱心に真面目な顔でパソコンで原稿を書いていました

【脚本　劇場版・仮面ナイダーG】

原案　小ノ寺翔太郎　脚本　朝倉真由香

《西暦２００?年世界各国で勃発するテロに対し、日本政府が創設した対テロ組織のジエンドは

人間達を洗脳し、改造した強化サイボーグ兵士やクローン兵士達の大量生産を図っていた

だがGこと稲木吾郎の裏切りもあって組織は壊滅に追い込まれ実験の責任者

ゴースト博士は自殺し首謀者の徳川光秀も逮捕され　無事刑に処されたし

しかし、ある無人島で　ゴースト博士の意思を持つコンピューター（ビック・ましん）による壮大な計画が人すれず進められていたのだった

そしてそれがGを初めとする全ての　仮面ナイダー達を巻き込む魔空大戦の始まりであった。。

　マオンとナルーが部屋に入って来る

「ねえゆっかさん　そんなに熱心に何書いているの?」

「まおみたく　パソコンで遊んでいると思った　仕事に決まってるじゃ無い、それよりちゃんと

勉強はやっているの　いくら日曜でもちゃんとやんなきゃダメよ」

「大丈夫よ今日は宿題は無いから」

「そ　なる　そう　なる」

「あらそう　なら良いわ」
「ねえゆっかさん、何書いているかちょっとだけ教えてよう」
「仕方ないわねーまいっかどうせ分かるんだし　まおは私が時々子供番組の脚本書いているのは知ってるわよね？」
「うん私も大好きなうさぴょん仮面シリーズとか　そうだよね」
「それが好評みたいで今度は仮面ナイダーシリーズの脚本を書くことになったの」
「仮面ナイダーと言うとあのショーカスと戦うスーパーヒーローなるね」
「わあー凄いじゃない　やったねゆっかさん？」
私とナルーは手放しで喜んだのだった。

???　仮面ナイダーシリーズ（前書き）

1号に始まる仮面ナイダーの歴史

???　仮面ナイダーシリーズ

（2）仮面ナイダーの歴史
「今では日本を代表する特撮ヒーローとなった仮面ナイダーは
劇作家の小ノ寺翔太郎の原作で１９７１年４月３日にＡＫＢ毎年放送にてはじまった
等身大のスーパーヒーローなのだ　私が生まれる前なので良くわかんないけど
ここにある資料によれば　天才レーサー本郷武彦が世界征服を企む悪の秘密結社
ショーカスによって飛蝗の改造人間に改造させたのだけどなんとか脱走して人類の
自由と平和のために戦うスーパーヒーローになったの、悪の組織ショーカスは
日本近海のどっかの弧島に本拠を持ち　全国にも支部がある巨大組織であり
島はそれぞれ　『死神・地獄・魔女』が管理しているんだけど仮面ナイダーの活躍で
依然として計画が進まなかった訳、そこで業を煮やした『タコハチ首領』は
１２人のショーカス・ナイダーを作って本郷武彦の抹殺に乗り出したでも一文字集こと2号ナイダーのうらぎりにより組織は壊滅
首領は新たにアフリカのテロ集団ゲルモアとショーカスを融合された新組織デストロイを結成しブラック・ゲーを大幹部として招きいれたのね
ピンチに陥ったダブルナイダーは風見三郎を　ナイダー?3に改造し
　３人のナイダー達の連携によってヒル・レーザーの正体を現したブラック・ゲーを倒したのよ
しかし首領はこんどはヨロイ大帝率いるハーン軍団をモンゴルのゴ

ビ砂漠から呼びよせた
かつてスケベな上司ヨロイ大帝に右胸を揉みほぐされた甲賀忍者『ウシロガミ』の末裔
　結城　麻友（まゆ）はナイダーマンとなって『渡り廊下の術』を使い
ハーン軍団に立ち向かった、そして自ら犠牲になる形でデストロイを壊滅させたの

その後は7つの海を支配しようとしたアポロチェーン率いるゴッドシャーク一味と戦った
神良太郎　仮面ナイダー？　南米を拠点として超エネルギーによって世界を支配しようとした　3面女率いる　ゲノスと戦った山本官輔
　仮面ナイダーアマゾン

シャードー大佐率いる巨大組織デルドと戦った城嶋茂　仮面ナイダーストロンガー

魔神Vネッガー率いるネオショーカスに立ち向かった村上弘、スカイナイダー

理想郷を目指すテラーまぐろ率いるドギマと戦った　沖ノ島一也
仮面ナイダースーパー1

〔子供手当てをバラマキ〕　日本を壊滅させようとした　目暗魔（めくらまし）死大使率いる
ハタン（破綻）の野望と戦った仮面ナイダーZX

そして異次元からの侵略を企むマリン・バロン率いるクライシズと戦った
仮面ナイダーXXX（すり―えっくす）の登場となるの　怪人を使って文明の破壊を企む

秘密結社『ワ・ゴム』の世紀王　ブラック・サントに選ばれた南高橋はその体内に
神秘の力『フライアン・ゲート』を持つ世紀王　超生命体となったそして　幼い時から濡れあっていた義兄弟　秋月さやか『世紀王シャドー・サント』
との戦いを得て遂に　ワ・ゴムを倒すんだけど　創世魔王は異次元から
クライズを呼び　異世界軍団によって　遂に高橋は倒されてしまうんだけど
死んだはずのシャドー・サントが自らのフライアン・ゲートを彼女に投げたの
そして２つの力が合わさりブラック・？？？（すりーえっくす）に進化したの
最後は『ＡＫＢ』の力を解放してショーカスから　クライズまでの組織を動かしていた
　創世魔王を滅ぼしたのだ
そして１０人ライダーを追ってに世界各地へ旅立ったのでもね　小野寺翔太郎氏は病気を理由に、このＲＸをもってシリーズの終了を宣言したんだ？」

????　原案の完成（前書き）

映画『仮面ナイダーG　クローン・ナイダーズ』の原稿が完成する。

???　原案の完成

○ゆっかさんの部屋
（3）原稿完成
「でも続編を望む多くのファンの要望に応える形で新シリーズが作られることになった　なるね」
「そうなのよ　それがイケメンさんたちがたくさーん登場する
いわゆる　平成シリーズなのだよ明智くん？」
「ナルー　なるけど？」
「まいっじゃないの細かい事は　グロンギルと言う未知の生命体の復活によって
世界の崩壊が起こり　それを食い止めるために新しい仮面ナイダークウカ
五代伸介が誕生する所から新しいシリーズは開始されたんだ　そして最新シリーズでは
新たに大ショーカス軍団の大幹部として復活した『ミンシュー将軍』が
全人類・二枚舌作戦や擬装献金言い訳　作戦などを　次々と進めるが世界中から集まった
仮面ナイダー達によって暴かれ　ほとんど作戦（政策）は自滅？その野望は潰えたのだけど
依然　世界の温暖化・崩壊は収まれず　日本は崩壊（政策失敗）し
新たなる
新世界　ブードが誕生する　と言うのが現在までの展開なのね」
「ふーん　なるほど　なる」
「でも今回の作品はテレビシリーズとは別に人気グループ　スモープの稲ノ貫吾郎が
スモステのコーナーで主演した特番を原作として立ち上げたものら

しいのよね？」
「2人とも悪いけどそんなところで喋っているだけなら出来上がった原稿
　纏めといてくれると助かるんだけど」
「あっそれは気がつかなくて御免ねゆっかさん」
ゆっかさんはそう言いつつも　テキパキと作業を進めていたのだった
《何者かに無人島に呼ばれた月間ワインの記者稲木吾郎　そこに襲いかかる
クウガ～カブトまでのクローンナイダーたち
そしてその戦いを　アジトから見つめる2人の人物　戦いは熾烈を極め時代を超えて展開する
　だがクローン達は突然現れた　超生命体ガロスによって次々の倒させていく
Gもろとも倒すことこそが真のゴースト博士の目的だったのである
残るはカブトのクローン　右胸にバラの刺繍があることからローズカブトと呼ばれているものと
Gこと稲木吾郎のみ　そして物語はクローンとの共闘　大巨人との戦いへと流れていく
そして全ての怪人達を倒したクローン達は生みの親である博士の意思を持つコンピューターと
運命を共にするのであった・・・しかし怪人の一人レィディーガロスは生きており
その正体は死と滅亡の天使でシスフィーナであった　そこでエンディングが流れる
〇その後4分間の展開
数年後首都東京に現れた無数の怪物と空飛ぶ舟に乗って現れた堕天使シスフィーナ
稲木吾郎が現れ　生きていたローズこと天道玲子と共にナイダーに変身し怪物軍団に立ち向かう
街に溢れる魔物たち　そこに疾風の如く現れた1号ナイダーは

「まもなく神々と全仮面ナイダー達の全面戦争が始まる」と告げるのだった
その他の仮面ナイダーたちも顔を見せる～
「出来たー何とか完成したわ」
「わーぁやったねゆっかさん　おめでとう、ところで映画のみどころは何？
クローンって言っても今までの平成シリーズではオリジナル俳優は中々呼べないんだよね？」
「そうなのよイケメンと云われる俳優の事務所の人たちはデビュー作であっても
子供作品には出したくないようなの」
「じゃーどうする　なる？」
「クローンは昔テレビのシリーズやったショーカスナイダーのように変身後のキャラクターだけ
出そうと思っているの、ただしリーダーのローズカブトだけは人間体を出すんだけどね
後は場面場面によっては何人かのオリジナル俳優を出そうと思っているんだけど
まぁ詳しい事は明日からの会議で決めるつもりなの」
ゆっかさんは期待を込めて言った
「たのしみにしてるので　がんばってねーゆっかさん」

？？？　映画の完成（前書き）

生田スタジオでは　映画の打ち合わせが行われていた

???　映画の完成

（４）ゆっかさん語る

○生田スタジオ

翌日ゆっかさんは劇場版仮面ナイダーＧの打ち合わせのために愛車ＡＫＢ７０７で

生田スタジオに向った。

生田は仮面ナイダーシリーズなどを初め信長の末裔『織田猫耳』が化身の術を使って

『無神斎率いる御車党』から江戸の平和を守って戦う『変身忍者ネコ耳』や

異世界にあるロバット・ランドから家出して来た三流ロバット、ロバコンの活躍を描いた

『がんばれロバコン』はたまた　環境保全などを目的に作られた世界最大のコンピューター

『ブタメン』しかし数々のブタメンロボを操り人類に反旗をひるがえした

会いにいける防衛軍を目指して結成されたアキバ・シスターズたちが

巨大ロボ『４Ｔ８』を味方にしてブタメン軍団と戦うと言うＳＦ

『アキバ鉄人・大　４Ｔ８（ふぉーてぃえいと）など　など数々の

西映＆小ノ寺作品を生み出した場所であった

現在も　アキバっ子クラブの高橋トマトちゃんが主演するうさぴょん仮面Σや

斎藤健主演の井戸端戦隊ゴレン・レオ♪などが撮影されているのだ

スタジオに入ったゆっかさんは集まったスタッフたちに原稿の内容

と要望などを説明した
打ち合わせは平山当座（５１）と最近元アイドルのミキ吉（２３）と結婚を発表したばかりの
阿部庄司（４６）の両プロデューサー　小ノ寺プロのデザインを担当する早風マサト
ーパーバイザーの小ノ寺翔太さん
そして　監督のなつみかんさんととゆっかさんの６名だった
そして映画はゆっかさんの原案を元に進められていったの
闘技にかんしては今回　昭和の仮面ナイダーシリーズ以来ほとんどのアクションを勤めてきた
小野剣友会から〔戦え！アキバ戦艦・萌えレンジャー〕
〔オタク刑事・キャバン〕などの作品でアクションを勤めた

秋元真一が結成したＡＫＢアクションクラブ（ＡＡＣ＝アック）が担当することになった

会議は１日中続けられたのだが　メディア・アナリストでもあるゆっかさんは最後に
「今世界では環境破壊や経済悪化による慢性的な赤字と失業　意見の違いによる民族紛争
などの数々の問題を抱えています、我が日本においても外国人にも支給させる
子供手当てや実現が疑問視される高速道路の無料化など相変らずの能天気な政策が続いているのです　故に多くの国民達は将来に希望が持てないでいる　ですから私はせめて映画の中だけでも夢を与えてあげたいのです　この映画がそのきっかけになればと思っています」
と締めくくり拍手喝采を得たのだった
１２億もの予算を投じて始まった
映画仮面ナイダーＧクローン・ナイダーズは

新しく渋谷にオープンしたアニメシアターにて無事上映され　好評を博したようだった
詳しい内容は秘密だがまもなく全国にも届くと思う？

？？？　キャスト（前書き）

その後　小野寺プロから正式なキャストが発表された。

???　キャスト

□老人（６５歳）
『昔　核戦争によって８つに別れた無人島の一つ　残され島で暮らす　先生
と呼ばれる人物　考古学者だったらしい』
□羅奈（８才）
『先生の孫、無人島で暮らす少女、鳥のテッキーと友達である』
□アフロ・ディーナ（創造新）
『先生によればこの島を作ったのは　女神アフロ・ディーナ（オルディナ）であるらしい
□稲木吾郎＝仮面ナイダーＧ／稲野貫吾郎　月刊ワインに努める主人公
□がんがんネコ／桂三丸『スカイナイダーに出演した人気キャラ』
□ゴースト博士の声／納屋小五郎
□ジン＝ゴールデン・ガロス／香取さんご
□メヴィウス＝レディガロス／大島夕子（アキバっ子クラブ）
□スーパーアポロチーェンの声／てらまきモモ太郎
□天道玲子＝ローズカブト・神多さやか
□クローン龍騎＝キドシンスケ／姿・カマタ
□クローン５５５＝ヌイたくみ／半崎ケント
□仮面ナイダーカブト／水嶋ひろり
□１号ナイダー／藤岡弘（ひろしげ）重
他・再生怪人軍団
イカデ・コーラ　ムササビ・フランケン　デッドン・ライオン
鋼鉄金峰　サタンスネーバ　ザ・オーディーン
□声の出演
蜂蜜女／ハクガ・ユリア
ミズスマシのエル　セブン・アンテッドの声／諸星ダン

ネプ・チューン?／ミスター名倉
暗黒豚将軍／ＤＯ・ＭＩ・ＳＯ
『特別出演』
□アンリエッタ・ヴァーコーン／仲画翔子
□赤い尻の女・ブッリッ子ワーム／加町セイコ（尻をペロっとめくって変身する）
《再生怪人たちのリーダーだがナイダー?のライド・スティックを受けて爆発する前の数秒間の出演》
主題歌〔湘南爆走・ライダーズ〕唄アキバっ子クラブ４８
○造形・制作
秋葉原コスプレ委員会

？？？　キャスト（後書き）

G・クローンライダーズはマジで
考えている（この作品は半分ギャグですが）

????　『おばあちゃんとの約束』（前書き）

渋谷にオープンしたアニメシアターで『映画』を見た帰り道
マオン達は祖母のお墓参りをした。

???　『おばあちゃんとの約束』

（1）墓参り
「じゃあ　おばあちゃん、また来るからね」と私は墓前にそう呟いていた。
その墓には如月弥生って名が刻まれていた
マオン達は渋谷でゆっかさんが脚本を書いた『仮面ナイダーG』の映画を見た後
亡くなったおばあちゃんの7回忌なので　渋谷郊外にある不思議霊園に墓参りに来ていた

「まお、いつまで話しているの、そろそろ帰るんだからさっさと支度なさい」
「あーい　ゆっかさん」
私達は住職さんに挨拶してから　ヒーロさんが待つ車に乗り込んだ
「あのねー君達、一体いつまで待たせるの　どうせまたマオンがグズグズしてたんだろう?」
ヒーロさんの鋭い指摘に私は無言で頷いた、その時思い出せなかったあの日
思い出したくなかったあの日が　頭の中に蘇ってきた。

回想（マオン5才）
私が生まれたときゆっかさんとヒーロ――さんは丁度、Vアイドルと言う
雑誌社を立ち上げたばかりで超　忙しかったらしい　そこで隣町に住んでいた
弥生おばあちゃんが私の面倒を見てくれていたのだ　おばあちゃんは本が大好きでわたしに
いろいろな本を呼んで聞かせてくれた

「・・・こうしてノリルは神様に銀の翼を貰い　その力で世界を救ったと言うことじゃ
おしまい　マオンも大きくなったら世界を　救うりっぱな人間になるんじゃぞ　良いな約束だぞ？」
「うん　おばあちゃん　マーはね　大きくなったら世界を救うんだ」
そしていつか行ったお祭りの日に夜店で買ってくれたのが紫の目をした不思議な金魚だった
わたしは　その金魚を『なる』と名づけて可愛がった
大好きだったおばあちゃん　私の誇りでも在ったおばあちゃん　でも・・なくなったんだよね
あれは6歳の誕生日の前の日だった
親友のあさみの家から帰った私は台所で倒れているおばあちゃんを発見した
両親は2人とも留守だったし　どうしていいか分からない私は
「おばあちゃん　どうしたの」と喚いていた　その声を聞きつけた近所の人たちがゆっかさん　の雑誌社に連絡してくれたのだけど助からなかったの
心筋梗塞だった後で聞いた話では　お医者さんに
「お願いおばあちゃんを助けて？」としがみついて離さなかったらしい
そしておばあちゃんが亡くなったと同時に水槽の金魚もいなくなっていた

？？？　おばあちゃんの心（前書き）

ナルー―との不思議な思い出です。

？？？　おばあちゃんの心

（2）おばあちゃんの心
親戚中が集まった葬式場で私は大声で泣いた
ヒーローさんも　ゆっかさんも慰めてくれてたんだけど、その翌日から
　わたしは私とおばあちゃんの部屋から一歩も出られなくなっていたの？

「おばあちゃんどうして死んだの？　マー　独りぼっちになっちゃった

今度はいつ会えるの？マーもおばあちゃんとこ逝きたい」
私はヒーローさんのパソコンに見様見真似でそう打ち込んでいた
そのとき　金魚鉢が『ピッカー』と輝いた
「そんなこと言っちゃーいけない　なる」
その時　死んだはずの金魚のがそう呟き肩に止まった
「金魚さん　生きてたの？　何故喋れるの？どうしてお空がとべるの？」
「金魚が空飛ぶおかしくない　なる、この世界は違う　なるか」
「違うもん金魚は空飛べないっておばあちゃんが言ってたもん」
「そのおばあちゃんの魂に呼ばれてこの世界に来た
　あの日元気なおばあちゃんとマオンに出会ったのは偶然じゃない　なる」
「それ　どう言う事？」
「もーお　マオンがいつまでもそんなんだと　おばあちゃん　安心して天国へ旅立てないなるよ」
「おばあちゃんが天国に　いけない　の」
その言葉が呪文のようにマオンの心に響いた　わたしは自分から外

に出た
おばあちゃんが亡くなって以来１０ヶ月ぶりにみる夕日はすごく懐かしく思えた
「私もう引きこもりは止める、だって色んな人を救える人間になれっておばあちゃんと
約束したから・・・なるが居てくれるから」
「うん　それが　いい　なる」
〇戻る
お墓参りから帰った私達は久しぶりにおばあちゃんとの思い出の写真をみた
それは８年ほど前に実家（祖母）の愛媛のみかん畑で撮った　記念写真だった
「さすがに８年も前だと真由香さんも若いな」
「なによ？そう言う弘さんだってまるで子供みたいじゃないの？」
「あれーここに写っているのは　ナルー？だってこの時は確かいなかったような」
そう考えていたとき写真のおばあちゃんが
「マオンはやはり笑顔が良く似合うその笑顔をわすれぬ様に？」
と話しかけて来たようだったが
誰も見ていないようなので　多分気のせいかも　しれない
「そっかぁ　あんたどっかで見たことあると思ったら、あの時の金魚だったんだね
「・・少し違うなるが、まあ　そんなとこ　なる」
私はナルーを『ギュッ』と抱きしめ（苦しいなるが？）
　心の中で何度も「おばあちゃんありがとう」と呟いたのだった、
夜は静かに更けて行った。

??アキバッ子失踪事件？（前書き）

マオン達が墓参りをしていた頃
新たなる事件が　人知れず起こっていた。

??アキバッ子失踪事件?

（1）何の企画?
○秋葉原　ある倉庫
一台のタクシーが倉庫の前に止まる
中からは笑顔が『優』しい『子』が降りてきた
「いくらですか」
「ちょうど７００円になります」
しかしその女の子はポッケを探しては首をかしげていた
「そっかぁ　しまった、来る時玄関に財布置き忘れてきた」
「なにーただ乗りするつもりだったのかぁ」
頭が少し薄くなったタクシーの運転手は　厳しく少女に迫った
「そうだ　金は無いけど　ポッケに握手権が一枚あるんだけどこれでどう
やっぱだめかな」
「ラッキー、そンな者があるんなら早く言ってヨ　わしＡＫＢの大ファン　分かる?」
運転手は握手権を受け取ると上機嫌でタクシーで帰って行った
『う・れ・しい　出・来・事がありました♪』（あのぉ　歌が違うんですけど?）
（握手なら今してもらえよ?）
ＡＫＢクラブの優子こと犬島優子は　マネージャーを名のる人物から
木材とかを扱う倉（空）に携帯で呼び出されたのだった
「マネージャーさん何処にいるのよゥどーせ
ネ申（ねもうす）チャンネルか何かの企画でしょ」
「フフフっ」
「だっ誰?マネージャーさん」
そこにサングラスをした謎の青年が現れる

「お前たちに合わせたい人がいる、このへりに乗れ」
「いやーだ・品・ノ・川さ・ん　なーんだ?じゃーこれは
エッサ・ホイサなんだー脅かさないでよ」
(でも企画はネ申っぽいんだけど?)
「それは・・どうかな・・見ろっ」
サングラスをかけたもう一人の人物がアキバッ子の面々を引き連れて現れた
「あっちゃん(前田敦菜)も、たかまと(高橋トマト)もれいにゃん(藤見れいな)も
みんなどうしちゃったの?何で黙っているのかな?」
(ネ申かな　それともドッキリかな?」
「残念ながらそのどちらでもないのだよお譲さん」
サングラスを外した庄司さんの顔の下からトカゲの様な顔が見えた
「キャーアァ」
犬島優子はそのまま気を失ったのだった
翌日《人が入った切り出てこない》
と言う通報をうけた県警の船越警部がその場所を捜したのだけどそんな倉庫は初めから無かったのでだった。

??アキバッ子失踪事件？（後書き）

劇場にコンサートを見に訪れたマオンとナル―
しかし　いつまでたっても　アキバッ子たちが
現れる気配がなかった。

？？？劇場は大慌て！（前書き）

会いに行けるアイドルのコンサートを見に劇場を訪れたマオン、だが今日雰囲気が違っていた。

???劇場は大慌て！

○同　劇場
（2）アイドル登場せず
「さすがに会場ともなれば活気があるわねー」
「ほんとなるぅ」
ゆっかさんの事件もとりあえずは人心地ついたので
私たちは劇場に足を運んでいた
『ＡＫＢ～ＡＫＢ～Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ・Ａ・Ｋ・Ｂ』
『トマトちゃん♪』『はるにゃん愛してるぜー』
観客たちの拍手は最高潮にたっし、既にオタクダンスを踊る者たちまでいた
そして　しばらくすると軽快な音楽に乗ってアキバッ子達が登場？
・・「しないわねー」
・　・・・「おかしいな　いつもならこの辺りで出てくるはずなんだけど？」
そのとき
『パンポロ・リンコロ・パンパンパン♪』
と言う変なチャイムがなり
「えー本日はご来場ありがとうございます
しかしながら今日のライブは都合により、中止となりました　また今後のライブも
当面未定でございます　なおチケットの払い戻しは○○まで・・」
と言うアナウンスが聞こえてきた
観客達はいっせいに
「え～～～ぇ～～え！中止かよ」
と声を上げた　特等席では観客と警備員とがトラブルになっていた
「ふざけんなぁ　警備員さんよーぉ、俺がこの席を確保するのにいったい何枚の

CDを買ったと思っているんだー」
「そっそう言われましても　私はただの警備員ですか詳しいことは・・」
「そんなことは聞いてねぇ　じゃあ責任者を呼んでもらおうっ」
今　一部の熱狂的なファンの行為が　あちこちで問題になってはいたのだが
今日はそれとは事情が違っていたのだった。
『ＡＫＢ～ＡＫＢ×３０回』
「あちゃーだめだこりゃー」
「それは、ドリフターズなるか？」
私はうるさい会場を出てジャーナリストのゆっかさんに何か情報は無いかと
事情を聞こうとして携帯電話を取り出した
「いったいどうしたんだろう？せっかく学校抜け出してきたのにぃー」
（抜け出すなよっ？）
その時「・・それが　こちらへ向かったと言う　携帯（でんわ）が入ったっきり連絡が取れないんです・・」
と話しながら女性の人が通り過ぎて言った（マオンでも　スタッフ全員は知らないのだ）
「へっ　連絡が取れないって、ど・言う事なる？」
「さっ　さあね　事故じゃ無ければいいけど」
私はあんな事件があったばかりなので、思わずそう呟いた。

????劇場は大慌て！（後書き）

連絡は取れない　脅迫状も一切なし
マスコミは大混乱に陥っていた。

???ワイドショーは大騒ぎ（前書き）

翌日からテレビはどの局も
消えた少女達（あいどる）の特集を報じた。

???ワイドショーは大騒ぎ

（3）報道はアキバ色
○渋谷　マオンの家
ゆっかさんとヒーローさんはそれぞれのルートから情報の収集に動いていた
だが　私はナル―とサミーの3人で　ワイドショーに見入っていた
（ちなみに今日はがっこうは休みです）
同・画面内
「レポーターの梨餅です　昨日劇場に今をトキメク　国民的アイドルアキバッ子クラブ４８が現れないと言う大事件が起こりました」
劇場までの道をマイクを持って喋りながら歩くと言う　いつものパターンから
始まりスタッフ達に聞きこみや　仔にゃん子の国生さんら芸能人の反応など
こう言った番組がもう2日間も続いている　最近は２００５年の結成時から
まいまいや優子　あっちゃん等のオーディション風景や生い立ちまでも入った者まである
「フーゥどこ回してもこればっかしなる」
何かある度にワイドショーが一色に染まるのは今回に限った事ではない
今までだって　ホウム心理狂の地下鉄サリン事件、坂戒法子の逃亡事件
元バー二ングブロスの加号　愛菜（まな）のおむつで喫煙事件
トップアイドルだった　松ノ聖子の深夜ストリップ事件など
ワイドショーはその度にしばらく報道合戦を続けてきたのだ
「それは仕方ないと思うけど　アキバッ子一色のわりにはたいした情報は無いのよね」

サミーの指摘通り　場面は　警察の担当者が　倉庫に呼び出されたらしい事
その倉庫その物が実在しなかったこと　そして身代金はおろか　一切の連絡がないので
対策が立てられない事などを繰り返し報道するだけだった。
「みんな何処行っちゃったんだよう　これじゃあ勉強に身が入らないじゃないの」
「あの　マオンはいつ　勉強してたっけ?」
「そう　なる　してない　なる」
「もーう　ふたりして馬鹿にして、私は本番で『やる』タイプなの分かる?」
「あっそう　そりゃー失礼しました」
そうなのだ　勉強嫌いのマオンだが何故か成績は中の中から落ちないのだ
『フライング・ゲット　君はきゅうりに乗って?』
そこにゆっかさんから　電話(けいたい)がかかってきた
「もしもしゆっかさん」
「まお　こんやも徹夜になりそうだから　夕食は適当に済ましといて」
「解ったところで　ゆっかさん　何かわかった」
「それがね警視庁の桜井警部の話では、犬島優子がベッキちゃんとコンビニに言ったことまでは
つかんでいるそうなんだけどだけど、その同時刻に優子さんを確かに倉庫の前で
下ろしたって言うタクシーの証言もあっって・・」
「つまり　まだつかめてないんだ」
「平たく言えばね　あっでも　弘さんがつかんだ情報では
南米のオタク集団「ヴァッカル・コーン」が絡んでいるらしいの、
あっもう忙しいから
切るわよ今夜も麻美ちゃんに泊ってもらいなさいじゃーね」

そう言ってゆっかさんは携帯をきった
「ヴァッカル・コーン??て何　なる」
「さあ　新しいお菓子か何かの会社じゃないの」（違うと思うぞ?）

???ワイドショーは大騒ぎ（後書き）

秋葉県警は『アキバッ子失踪　対策本部』を立ち上げ事件の解決に動いていた。

????　対策会議（前書き）

警視庁では園田真理を本部長に迎えて対策会議が開かれていた。

？？？　対策会議

（４）クライム・ショッカーの暗躍
そのころG諸島に向う巨大な飛行船があった、突然消えうせたあの倉庫に良く似ていた
○G島内
そこは沖縄の自衛隊基地を思わせるような広大な要塞島だった
イヌ　パンダ　ネコ　ペンギン　等さまざまな着ぐるみをした男女が整列し誰かを待っていた　その中にやはり黒い服を着たアキバッ子達もいた
『ゾルゲ～、ゾルゲ～、ゾルゲ～ゾルゲ～』
全員『ゾルゲ～』と言う賛美とオタク・ダンスで彼を迎えた
「すっごい人数ね　まるでナチス見たい」
「こら　？1犬島お前も　だんすをやれっ」
「はっはィ」
「はいではない、イーィだ」
「解りましたイーィ」（ショッカー見たい）
『ブンジャカ・パッパー・ホイサッサー・あっちゃんホーイ』
やがてその声援に応えて品ノ川になりすましていたあのサングラスの男が
ヒットラー風の括弧をして現れた。
「我が名はキャプテン・ゾルゲ　この度我らクライム?は南米のオタク集団
『ヴァッカル・コーン』と手を握りクライム・ショッカーとなった
今こそ我が計画を実行に移すときが来たのだ」
『イーィ』
戦闘員達はいっせいに気勢をあげ　ますます　オタク・ダンスをパワーアップさせた
その計画とは国民的　超超超人気グループであるアキバッ子クラブ

４８を
洗脳し東京ドームで大規模なコンサートを開かせ、それを全世界で同時中継し
ラジオや携帯パソコンなどでも同時に流し　それを見た人達を全て感染し
感染した人に触れ合った人がさらに感染する
そういった芋蔓式に洗能していくと言う物でだった
その頃　アキバッ子が所属している各プロダクションから失踪届けが正式に出され
それを受けた警視庁が　アイドル失踪対策本部を設置したのであった。
○警視庁
「ではこれよりアイドル失踪事件の捜査会議を湾岸署と秋葉原署と連携しでやっていく」
と、警視庁の園田警視は針を語った
昨夜は乾（たっくん？）捜査員と『徹夜』だったようで疲れた表情をしていた（徹夜で何してたの？）
続いて管理官の小錦が
「まずは最初の事件が確認された湾岸署の見解を聞きたい」と述べた
「あっハイっ」
「桜井くん」
「え～事件はいまから約３週間ほど前湾岸署近くで起こりました
その日
『脱ぎ脱ぎクイズ』の収録を終えた　アイドル歌手の犬島優子とタレントのベッキの２人がふいに
コンビニに立ち寄ったのだが、ベッキがファッション詩を
立ち読みしてる間に犬島ユウコの方が居なくなったらしい
当然通報を受けた我が湾岸署の船越と番組のスタッフ達が隈なく探したのだが
残念ながら発見には至らなかった模様　無論　現在まで脅迫などの

電話も一切無し、以上」
「他に何か情報は無いか？」
「ハイっ」
「では秋葉原署の村井くん」
「えー私共は　その後怪しい飛行飛行体がG諸島に飛んで行くのが
　目撃者の
証言などで確認されていますがもっかのところ関連性について捜査
中」
「つまり　あなたがたは何も分かってないと言う事じゃーないです
か　まぁだから我々
（警視庁）が乗り出したんですけどね」
（最初から巧に頼んだ方が良かったかな？）
園田真理警視（２４）のこの発言に文句を言おうとした
村井刑事を桜井が必死で止めていたのだった。
（ぱらだいす・ろすと以後　警視になっていたの？）
『リリリリリーン』
その時警視庁の電話のベルが鳴った

？？？　対策会議（後書き）

『脱ぎ脱ぎクイズ』はコンドル・５５号の禁（きん）さん地牢（じろう）がさんが企画した《じゃんけん大会》で負けた方が脱ぐと言う単純だが面白いゲーム番組である。

？？？もうひとつの事件（前書き）

対策本部室に遂に犯人からの電話がかかる

？？？もうひとつの事件

（５）犯人からの電話

○対策本部

『りリリリーン』

その時電話のベルがけたたましくなった

「もしもし、警視庁対策本部室の小錦だが、あんたは」

「私は歩大田（おだ）プロダクションのマネージャーの栗夢亜美（くりーみあみ）

と申す者ですが　さきほど犯人らしき男から犬田優子は預かった

返してほしければ４８億円持って名古屋のＳＫＢ広場まで来いと」

「何っ分かった、後で事情をこちらからうかがいに行きますので待

っていてください」

「小錦管理官、今の電話は？」

「それがアキバッ子のメンバーの何人かが所属している

大田（おだ）プロダクションのマネージャーですか、犯人らしき男が

犬田優子預かった返してほしければ　４８億円よこせと、さっそく

村井と小田切の新旧コンビ

大田プロに言ってくれ」

「はい」

「行くぞ村井」

「ちょっと待て」

「なんだ湾岸署の桜井さん警視庁（われわれ）のやることに文句でも」

「いやっ　少し気になる事があったもので　何故『犬田優子』を誘

拐したと言ったのか

『アキバッ子たち』を誘拐したなら分かるが・」

「すると君は　犯人は別にいると？４８人以上も個々に誘拐された

とでも言いたいのか」

「いやっそこまでは」

「だったら　口出しは無用　にしてもらいたい」

「いやっ　小錦管理官　私も桜井さんの意見に賛成です　なぜ警察ではなく
プロダクション側にかかってきたのか　何故犬田優子の名前一人しか出さなかったのか
そこら辺の事情も含めて桜井警部も同行してください、後の者は3人が事情を聴いて戻るまでとりあえず待機」
「はいっ」
「ちっいくら昔　警視だからって、小娘がっ偉そうに」（偉いんですけど？）
と小錦管理官を机をはたいた
○東京都新宿区四谷３－１２大田プロ
桜井達は2階にある大田プロのオフィスを尋ねた
社長の幸田　紗見（しゃみ）は電話の応対をした様子を桜井達に話した
「つい1時間ほど前　犯人らしき男から『犬島優子』を誘拐したとかかってきまして
スタッフ一同びっくり仰天して　電話をしたとこう言う訳でして」
「『犬島優子』を預かったとだけいたんですね　ほかの名前は？」
「私どもには他に前張（まえばり）敦子も所属していまして
その事を何度も聞いたのですが・・またあとでかけなおすと言って切ってしまったのです」
「なるほど良く分かりました全ては　次の電話待ちと言う事だな」
桜井警部は苦々しく語った　それと言うのもアキバッ子の両親たちは心配がたたり
報道以来　寝込んでいたからだった。

？？？もうひとつの事件（後書き）

マオンとナルーは極秘に犯人を追った　その犯人は何者なのか
組織との関連は？

キャラクター名鑑？クライム・ショッカー（前書き）

かつて機械怪物を使って世界を震撼させた　クライムの名を使った秘密結社
南米を拠点に活動していたオタク集団
ヴァッカル・コーンと統合した自称巨大組織

キャラクター名鑑？クライム・ショッカー

□幹部　ゾルゲ大佐
クライム・ショッカーの総指揮官でヒットラーの風貌をまねており
登場する際　団員達にゾルゲ～ゾルゲと言う賛辞と
『ブンジャカ・パッパー・ホイサッサー・あっちゃんホーイ』
などの良く分からない　オタク・ダンスを踊らさせる
アキバッ子クラブを洗脳全国のドームでコンサートを開かせ
その模様をテレビやラジオで伝え聞いたものをまず洗脳し
その人たちと接触した者たちも感染させる　そう言った
芋づる式に　国民を洗脳していき　最終的には
オタク帝国を作ろうと言う野望を持っている
その正体は　オタク魔獣ギガ・ヴァークォンである
　誘拐した主なアイドル
□アキバッ子クラブ４８主なメンバー
チームＡ高橋（たかまど）トマト　多田愛菜（らぶたな）　篠田麻里（まりこんぐ）　前張敦子（あっちゃん）
チームＫ秋餅（さやか）サヤカ　藤井れいな（れいにゃん）　峰岸みるく（みーちゃん
チームＢ石田　春風（はるなす）　柏餅由紀（ゆきりん）　渡辺魔友（まあゆ）
その他大勢
アジト　Ｇ諸島にある広大な敷地に住んでおり、世界の軍隊と戦う
為に
　竹やりをもって藁人形を突く練習をしている（いつの時代や・・
マジッすか？）

？？？　作戦はコチョ・コチョ・コチョ（古っ？）（前書き）

マオンが思いついた作戦とは

???　作戦はコチョ・コチョ・コチョ（古っ？）

（6）マオンの作戦！
○聖魔穏学園朝９時（マオンのクラス）
みんなは英語の試験中であった
後のドアが開き、マオンが歩伏前進でゆっくりと進み席についた
「マオン遅かったじゃないっ」
と小声で言ったサミーに
「また寝坊しちゃって？」
マオンは笑って答えた答えた
『コホン』
「・・朝倉さん　それは自衛隊の練習ですか？」
「ゲッノブタっ、やっぱりバレテタ？」
「野ノ房です　安心しなさい　今日は寛大に給食抜きですっ」
「え～～～ぇ！、ひどいそれじゃー児童虐待だよォ」（実際には食事はあるけど？）
私は思わず大声を上げた、実は今日　ゆっかさんから
身代金の引き渡しが近々行われると言う　情報を得た　マオンは心配で眠れなかったのだ
「あちゃーしまった　カバン一式玄関に忘れた？」（あんた何しに来たの？）
生徒会長の意地の悪子は
「朝倉さんしずかにしてよ　まったくどんな教育受けたんだか」
と怒鳴った
ちょっとカチンと来たけれど、他の生徒の手前、悪子に
「しー（すい）ません」
と大人しく引き下がった。
そこへ窓からカバンが飛んできてマオンの席で止まった
「また　忘れ物なる　教科書一式忘れて何するつもりだったなる」

とナルーがカバンの隅から現れた
「ナルーいつも助かるよ、それでこそ私の子分」
「ナルーは子分違う　マオンの教育係りなる」
「どーこが教育係りよ、ただの金魚のフンじゃない　ふん」
「あーまたそれを言う　ナルー」
「エーイ朝倉とそこの金魚のおもちゃうるさーい」
私たちにとってはもはやコミニュケーションの一つとなっている
言い争いも
　ノブタには通じなかった、ちなみに現実主義の先生はナルーをおもちゃと言い張って譲らないのだ
「ナルーはおもちゃじゃないなるよ」
「えーい　うるさいわぁ　2人とも廊下にたっとれー」
「ヘイヘイ」
私はナルーと教室を出て言った
「まったく試験中だと言うのにうるさいったらありゃーせん」
「あのー朝倉さんよりも先生の声のほうがうるさいんですけど」
天道ひよりと言う大人しい生徒が　ノブタに抗議すると　他の生徒たちからも
『そうよ・そうよ』
と　国会中継の様なヤジが方々から飛んだ
「・・しーいません」
と　先生は顔を真っ赤にして引き下がった
同・渡り廊下
「・・いっいっ　い・ま・どきぃ両手にバケツ持たせて　廊下に立たせるなんて
何たる時代錯誤?」
「まあまあ・そんなに興奮しないなる」
「それより　さっきからずっと考えていたんだけどさあ、ナルーあんた
テレポート出来るわよねー」

「うん簡単なるが　どうしてなる？」
「受け渡したって警察の事だから　どーせ犯人にきりきり舞いさせられるんでしょォ
大抵のサスペンスではそう決まっている」
「それはテレビの話しなる、これは現実の事件なる」
「じゃーあんた上手くいくと思う」
「それはー分からないなる」
「だからちょっと耳貸し手よ」
『コチョ・コチョ・コチョ』
「なるほどそれは良い思いつきかも？」
「ナルーあんた解ったの」
「コチョ・コチョ・コチョでしょ　なる　」
「さっすが―分かってるじゃない」（なんとなく古っ）
○東京都新宿区四谷３－１２大田プロ２Ｆ
湾岸署の桜井警部を始め何人かの刑事がヘッドフォンを付けて待機する
刑事ドラマで良くある光景である
「リリリリリリーン♪」
「それじゃー出来るだけ、引き延ばしてください」
園田警視は　マネージャーの明菜に言った
「もしもし　私大田プロ　マネージャーの明菜ですが」
《いいか　一度しか言わんからよく聞け　昨日も言った通り名古屋のＳＫＢ広場に
４８億円を袋に入れて明日の朝７時までに持ってこい」
「あのそんな大金直ぐと言う訳には」
《ではとりあえず２億、それくらいなら用意出来るだろ》
「まって犬島は無事なんですか前張はいるんですか？」
《明日朝７時ＳＫＢ広場だ　後は追って伝える・・》
「あっもしもし、もしもし　犬島は無事なんですか　他の皆も一緒なんですか

もしもし・・・もしもし・・・」
電話はそれっきり切れたのだった
「逆探知は」
「ダメです　時間が足りません」
そう言って村井刑事は犯人の声を再生した　その声は案の定　変声機で変えた物だった
「ちっ、全ては明日が勝負と言う訳か」
そう言って桜井警部は壁をたたいたのだった。

????　作戦はコチョ・コチョ・コチョ（古っ？）（後書き）

マオンの心配した通り　犯人に振りまわされる警察
はたしてマオンの作戦は成功するのか？

？？？　真理さんの活躍（前書き）

遂に少女（ゆうこ）の監禁場所が発覚する。

???　真理さんの活躍

○ＳＫＢ広場朝7時
《翌日　大田プロの中森マネージャーは2億の現金を
袋に入れて犯人が来るのを待っていた
その周りには　浮浪者になりすました刑事　ゴミの回収人になりすました刑事
恋人同士を装った刑事　はたまたＡ？ビデオの撮影中を装った刑事
など
さまざまな角度から刑事が見張っていただが　犯人は栄え中を回らせた挙句
袋を海からヨットの上に落とさせた　しかし追跡していた湾岸署と
秋葉原署の刑事たちは
いずれも金で雇われた無関係の人物に妨害され、現金だけをとられてしまったのだった。》
（7）逃亡計画
同。とある港
港から着いた船から荷(ふくろ)を積み込んだ井の木と言う男は
白い車で　倒産した水産工場の倉庫に入って行った
「兄ーィどうでした」
モヒカン頭のジョ―と名乗る男が軽い口調で言った
「ほらっざっとこんなもんだ」
と井の木は現金が入った袋をバラまいた、その時紫色の何かが
飛び出したように見えたがそれには誰も気が付かなかった
「こんなところに　隠れ家があった　なるか」
「ひゃっほーコイツハすげーや」
と黒人の男が札束を浴びながら絶叫した
「これだけアリャーあ、当面は安泰なあ」
とケンジと言う長い髪の男が胸を揉みながら言った

「兄ーィこれから逃亡するんで」
「ふふふなーに急ぐことはねえ、それもあいつらに用意してもらうさ
今夜8時に自衛隊の軍用機で逃亡って寸法よなにせこちらには人質がいる事だしな」
「しかもちょうどの時期に誰かが　アキバッ子ごっそりさらう事件が起きよった」
「そう言う事だ　こちらは人質の人数は特定してねえしな　なっ子ネコちゃん」
そこには柱に括りつけられた犬島優子が　グッタリシテいた
「あのお・・そろそろ　家に帰してください」
「黙れっ　今時　《飴あげるから》と言う誘いにノコノコついてくるお前が悪い（えっそんなんで誘拐されたの・・??）
「だって　おかあさんがむやみに人を疑うんじゃあないって言うし」
（ゆうこ、時と場合があるんだよ?）
「兄ィ逃亡の前にこの子頂いちゃっていいすっか?」
「それ良いねえ　久々に『こいつ』にも活躍してもらわないとな」
と言ってモヒカン頭のジョーも『あそこ』を撓らせて優子の口元の近くに迫った
「きゃあああ」
「止めとけ　『外国に行けばなんでも出来る』?　女性などいくらでもくれてやる　いまは我慢しろ」
「へいっ分かりやした」
「ちっ　井の木さんの命令ならしゃーねーな
「ほっ　助かった」
そこに紫色の金魚が優子の肩に止まった
「あのーお　あなたは?」
「友達　なる　必ず助けるので　今しばらくの辛抱なる
「うん約束だよ　金魚さん」
「ナルー―と言うなる」
そう言ってナルーは再び消えたのだった

「な・るぅ」
優子は何度も繰り返していた
同・県警本部
小錦管理官はこの失態を追求していた
「そのだ刑事どの、犯人に逃げられる　現金は持っていかれる
この責任は　一帯どうやって、とるおつもりですか」
軽蔑した表情をして小錦管理官は言った
「フン、どうやら土俵に追い詰めたようだなフッハッハ」
そこに園田警視の携帯が鳴った
『フライングゲット・君はお馬に乗って・・・』
「もしもし誰　なーんだ　ゆっかじゃない　どうしたの今仕事中だから　プライベートは」
《真理情報があるんだけど　昔チキン・アンテッドと言う水産工場があったの知ってる》
「もちしってるよだってあそこは　小学校時代私たちが初めて出会った場所じゃないの」
《その５５５番倉庫に犯人のグループがいるらしい》
「ゆっかそのじょうほうはどっから」
《あらっ情報ソースを明かせない事くらい　真理だって知ってんじゃん》
「それはそうだけど」
《いいわねとにかく伝えたよ　それから桜井警備に　人質は気にしなくていいからって
伝えといて　じゃー切るわよ》
「待ってゆっか」
《なあに?》
「サンキュー」
「警視今の電話は」
「小錦さん　さっそく秋葉原署と湾岸署にこの事を伝えて」
「ハッはいっ分かった!」

そう言って真理は何処かへ出かけて言った
「あっ園田警視どちらへ　警視　またこれだ？」

？？？　真理さんの活躍（後書き）

真理達の活躍で一つの事件は解決を見た

？？？　真理の活躍２（前書き）

２つの事件が解決しようとしていた。

？？？　真理の活躍２

（８）

○Ｇ諸島　同時展開

その頃洗能されたアキバッ子たちは軍服の戦闘員（クライルと言うらしい）らと

戦闘訓練を行なっていた

「よいかこの訓練は世界の軍隊との戦いに備て行なう物である、それでは犬島優子前へ出ろ」

『イ～ィ』

「ここにあるわら人形を敵と想定してこの竹ヤリで突いてみろっ」

「・・・・」

「どうした？早くやれっ？」

「ゾルゲ大佐っあなたそーとうな年齢でしょう？」

「うるさいっそんな質問は関係ない

それより早くしろっ」

「・・いやよアホくさっ」

「どうしてだァ、命令には逆らえぬはずだが、おまえ犬島優子ではないな？」

「フッフッフやっと築いたの」

そう言って音波を弾くネックレスを見せた

「おまえはいったい？」

「私は警視庁所属の園田麻衣」

「なにーするとぉ」

「そうっこの本拠を暴くためにわざと捕まったの　どうだったぁー私の迫真の演技

真に迫っていたでしょう？さあ覚悟なさい」

「ふっふっふ、仲間どうしで争うのもまた一興だなっ

かかれぃＡＫＢ軍団よ」

『イ～ぃ』
　「ゾル・トマト」「地獄みーたん」「死神あっちゃん」「ブラックさやか」
「ドクトル・あやりん」「翼まゆゆ」「ヨロイなっちゃん」「アポロゆきりん」
「ＡＫＢ十面隊・・切りが無いので・このへんで・」
「あんたたちまさか？やめてよ　みーたん　トマトっ嘘でしょう？」
アキバッ子の仲間達に　麻衣は崖っぶちまで追いつめられた
「さあわが愛しのロボット達よ、そこから一挙に突き落とせぇ」
『イ～ぃ』
『落ちろ』『落ちろ』
『落ちろ』『落ちろー』
「ははははは、さっさとくたばるがよい」
そしてトマトらはニヤリと笑ったのだった。

黒いオートバイに乗ったライダーが高速道路を突っ走っていた
その後ろからサイレンを鳴らし　覆面パトカーが追ってくる
○チキン・アンテッド５５５番倉庫
「アニキぃやけに外が騒がしくなってきましたぜ」
「何っ」
　ジョーの指摘で外を見る井の木　そこへ黒いオートバイがやってくる
「ライダーブレイク」
『ドバーン』
倉庫の扉を貫いた
「あんたたち　覚悟なさい」
「げっつ馬鹿な女だっ　こっちには人質がいるのを忘れたか」
そこに再びナルーが現れた
「あっナルーちゃん」
「優子ちゃん一緒に帰ろうなる　なーるー」

と言うと金魚と共に少女が消えた
「おんなぁこの人質が・眼に・・」
「どの人質？」
そこには　丈夫に括られたロープはそのままに　中の少女だけが消えていたのだった
「ここに・・あっいない　おっおい　人質が逃げたぞー探せー」
「探せたって　誰も出て言った者はいませんぜぇ井の木さん」
「ほんとですぜ兄ぃ」
ケンジとモヒカン頭のジョーはそう言って桜井警部と銃撃戦を繰り広げていた
「くそっこうなったらやけくそだァ」
『バキューン・バキューン』
「とぁーぁ」
『うぎゃーあ』
オートバイ事　井の木に激突する真理
倒れた井の木の股間を思いっきりヒールで踏みつける
「テアーィ」
『フギャーン』
子供の様な悲鳴を上げて失神する井の木
一方モヒカンのジョーとケンジは桜井警部の　パンチの一撃（ライダーパンチ？）
でノック・アウトしていた　覆面パトカーが到着したときは粗方かたが付いていた

？？？　真理の活躍２（後書き）

『マシン・カルディナ』は時空パイポを通って麻衣に伝送される
麻衣は『カルディナ号』の中で『時空戦士☆ＭＡＩ』に変身するのである
（ましーんまん　懐かしいぞ）

??解決　ウサギ魔人（前書き）

ゾルゲ大佐の変態攻撃に
麻衣は大魔神を呼んだ

??解決　ウサギ魔人

（８）麻衣変身
麻衣は洗脳されたアキバッ子たちに崖の上に追い詰められていた
「行くよっマイマイ」
そう言ってトマトは突き落とすポーズをした　そして
「やーめたっと」と言って舌『ペロッ』を出した（ローラか？）
「やーい　やーい引っかかった、ばーかばかっ」
「そーよみーたんたちが大事なマイマイを突き落とすわけないじゃない？の」
と言ってゾルゲ大佐に向けて全員でお尻を『パンパン』した
「おのれーィ、おまえたちせっ洗能は」
「心配しなくてもとっくに解けております」
「くっくそー」
「かかれぃクライルどもよ」
オタク戦闘員達が　オタクダンスをしながら様ってきた
「イ～ぃ」
「どうしようれいにゃんたち囲まれちゃったよ」
「大丈夫よ」
そういうと麻衣はベルトのＡＫＢギアをみせた
「カルディーナー」
『マシン・カルディナ』は時空本部にある　『空間パイポ』を通って麻衣に転送される
麻衣はカルディナ号の中で　時空戦士ＭＡＩに変身するのである
（ましーんくうかん光に乗って♪）
『メイビ～オン』
と言う電子音が聞こえ麻衣の体が光り輝いた
「麻衣ちゃん？」
「おまえはっ？」

「時空刑事・ＭＡＩ」
昔　特撮物で流行った、電波人間タックルとセーラームーンの衣装をアレンジした
カッコで麻衣はそう叫んだのだった。
「ふはははははは」
「ゾルゲ大佐なにがおかしいのよ」
「そーれ　そーれ」
ゾルゲ大佐は生のお尻を『グルグル振り廻し　柏餅由紀に迫った
「きゃー　何よこの変なおじさんは」
高橋が変態を見る仕草をした
「そうよ　ゆきりんはこの変態おじさん　ついていけない？」
「うはっはっはっは、麻衣よおまえが変身するが如くこの私もまた変身するのだっ」
「すると麻衣どうよう　コスプレ好き？」
「そーの通り、Ｇ計画（勝手に名づけた）はこのゾルゲだけが実行できるのだっ」
にわかに霧が立ちこめそれが晴れると狼の形態（コスプレ）をに身を包んだゾルゲ大佐が現れた
「見たかこれが我が最強の力『オタク魔獣ギガ・ヴァークォン』さまだー」
「いくぞ時空刑事ＭＡＩ」
「狼超音波攻撃っ」
耳を劈くような音にアキバッ子達はいっせいに耳を押さえた
「ウアッ、なっ何なのこの音は」
「続いて高速お尻めくり」
『ザ―アア』
風が吹いたかと思うと　アキバッ子たちは全員　お尻を触られていた」
「こいつはとんでもない　変態に違いない」
だがその間にも　頭が割れるような音波が続いていた」

「麻衣ちゃん　まゆたちもう耐えられそうに無いア～ァ」
「続いてポコンチ・ミサイルを喰らえ」
『ドンバーン』
『ウワ―ぁ』
「ヒヒヒヒヒっさすがの時空刑事も　この攻撃には耐えられんじゃろう？」
「そうかしら　こんなのはいかがっ」
麻衣はポーチから鏡を取り出す
「音波返しぃー」
音波は鏡に反射しゾルゲ大佐を直撃した
「ギャーァ嗚呼ァ～こりゃ堪らん　おっおのれぃこうなったら巨大化だァっ」
ドルゲ大佐は体にメモリーを差し込み自らを巨大化されたのだった
「どっどうする麻衣ちゃん　今度は巨大化しちゃったよ　トマトたち全員やられちゃうよ」
「しかたないっこうなったら大魔人を呼ぶしかないわね」
「えっ大魔人？」
麻衣とトマトはそれぞれ蓮華草で作った鍵と芋で作った錠を持って叫んだ
「驚き　ウメの木　サンコンさん～ディバに会いたかったに
フライング・ゲット♪～やってこい来い大魔人♪」
「懐かしーわあっ、みーたんたちのお母さん世代が見てたんだよねっ」
○湾岸署　地下時空本部
「桜井隊長っ、麻衣隊員から大魔人の出動要請が届いています」
「よっしっ、ルリ子さん出動準備」
「ラジャー」
「ウサギ大魔人出撃っ」
「湾岸署の地下の格納庫からウサギ大魔人が現れた
そして『ゴーッ』と言う爆音を上げて飛び立っていたのだった。

??:解決　ウサギ魔人（後書き）

ゾルゲ大佐の本当の姿とは?

????　オタク博士の野望（前書き）

ゾルゲ博士の正体は　世紀の経済学者　もとい　大変態
オタク博士だった？

????　オタク博士の野望

（9）究極の変態？

オタク魔獣ギガ・ヴァークォンは地獄光線を武器に大暴れしていた

「なんだか、体がおかしいぞ？」

まいまいが呟いた　するとその場にいた者たちは　敵も味方も

『エンヤ―コォラヤッ・ホンジャカ・タッター　ホイサっサぁ

お尻パンパン　お胸モミモミ』

と今　話題の　どじょう　救いと　佐渡おけさにパラパラを加えた

妙な踊りを踊り始めた

「この恥ずかしい踊りは何？でっでもっ　止まらない　止められない」

「はっはっはっは麻衣よこの光線を受けた者は死ぬまで踊り続けるのだ」

「なっなんて恐ろしいの」

そう言いながらアキバッ子たちは全員生のお尻を突き出す仕草をしていた

「ああーん　このままではらぶたん達、可笑しくなっちゃうよォ」

「これ程の技を使えるギガ・ヴァークォン　お前は大変態　いや何者？」

「ふっはっはっはっはっは、アキバッ子の諸君わしの声に聞き覚えがあるのではないかっ」

「そっそう言えば？」

「ある時は」

「セーラー戦士のファン」

「またある時は」

「ガンダムシリーズの解説者」

「ときには」

「綾波レイの信望者」

「そしてまた」
「アイドル大好き人間」
「森永タコ朗いやっ・・オタク博士ね」
「フハハハハそのとおりかつて政府の経済担当者だったわしは
世界中のフィギュアや玩具それにアイドルグッズなどを集めるために公費を流用し
国家予算的な莫大な金を使った　だが一方で多額の負債も抱えてしまい
家族からも学会からも追われたのだ　驚いたか」
「それって・・単なる、バカじゃん」
「だまれっ、このままではニッチもサッチもいかん　そこでこのG諸島にわしのグッズを
収集するためのアジトを作り自らの体にも改造を施したのだ　このギガ・ヴァークォンこそ
わしの究極の姿なのだ」
「なっ　何と言うお馬鹿」
「誰とは言わないけど　メンバーの子も顔負けだよ?」
「フフフフ、同時におまえらアイドル達を利用（洗能）し世界中を支配すると言う
計画を立てたのだァどうだっ凄いだろう?」
「なんと愚かな人」
まいまいたちはお尻を振りながら答えた
「うるさいやいっそろそろ踊りも見飽きた　この石工ミサイルで」
ワシのコレクションに加えてやろう」
そう言ってギガ・ヴァークォンは右腕の石工ミサイル発射口を向けた
トマトたちは　オタク博士が　毎日石像を舐めまわす光景が浮かんだ
「ぎしょくわるー×3兆」
アキバッ子たちは青ざめ　全員吐いた
『オエ―　オエーぇ』
「どっどうしようっマイマイっ」

「トマトォ『諦めないで』（CM風に）
「もーうだめだよーらぶたん　たちここで死ぬんだね」
「みんなっ落ちついてよっ」
「そんなこと言ったってむりだよ」
「お前たちは　マネキンの様に関節が動くようにしてやろう、毎番おしめが交換できるようにな
ふっはっはっはっはっは」
『ひえええええ』
「ふふふっわしにたてつくからこうなるのだ」
『ドバ～ン』
遂にサイルが麻衣達を狙って遂に発射されたのだった。
「いやーあ　大魔神　早く来てぇ！」

？？？　オタク博士の野望（後書き）

G諸島は無人島ですが一応国（日本政府）が所有しています
もっとも　隣国との交渉は難航していますが？
オタク博士はそこを　クライムショッカー軍団によって
強制的に占拠しているのです　竹やりで突く訓練は
彼らと戦う為だったのです（時代錯誤）

？？？野望の潰えるとき（前書き）

麻衣たちは必殺『ＡＫＢストーム』を繰り出した。

???野望の潰えるとき

（１０）博士の最後？
石工ミサイルが麻衣達を狙って『シュバーン』ッと発射された
だが　そこに突然現れた現れた　赤いウサギ魔人が大きなバットで
『カッキーン』っと打ち返した
ミサイルはＵターンしギガ・ヴァークォンに跳ね返っていった
「ばっばかな～？」
オタク博士は　バレリーナーの衣装を纏った　タコ朗人形に変わった
「ヨシみんなとどめのＡＫＢストームだよ、良いわね　行くわよ
みーちゃん
「まかせて　らぶたん」　「オーライ　なっちゃん」～～
～～2分後　「さやかぁ」「がってんゆきりん」「オーケイはるごん」～～
～～5分後「トマトォ」「オッケイともちん、まいまい　ラウンディング・トライだよ」
ベルトのＡＫＢギアのレバーを反転させる「ハイパーチャンジ」
7色のコスプレに身を包んだ『ハイパーまいまい』が現れる
「時空戦士必殺武器ＡＫＢストーム【バレンタイン】フライング・ゲッド」
『バシーン』
ボールはカーブが　かかり途中で　国生の顔に変わった
『バレンタインデーキッス♪』
と歌いながらタコ人形に激突した
『せめて　まゆゆにしてほしかったぁ』と叫び宇宙の果てまで飛んで行った
（宇宙の果てまで　イッテQ太郎?、国生さん　ごめんなさい）
「どうやら間に合った見たいでウサッ」
「でも博士何処へ飛んでったんだろう」

「そうだねぇどこか遠い過去だよ」
トマトの言葉にマイマイは、笑ってそう答えたのだった
「真理姉さん、たっだ今任務完了しました」
○時空本部
「麻衣ご苦労さん」
そう言って真理笑った、となりにいた　巧もほほ笑んでいた
同・G諸島
「じゃーとりあえずいつものやついっとこうか？」
「うんっ」
□蟹股で、腕と腰を左右に振りながら
「時空戦士ヤッタでＭＡＩＭＡＩっ」
「ウサギー魔人っ」
最後に全員でヘビロテのポーズを決める
『わっはっはっはっはっはっは』
「これもなつかしいなぁ」（最初の放送は知らないはず？）
こうして2つの事件は時空戦士ＭＡＩの活躍で無事解決した
なお　事件を解決した湾岸署と秋葉原署は
それぞれ　警視総監章を受賞したのだけど、面目を失った
小錦以下警視庁のキャリアたちはことごとく
左遷させられたのだった（ざまぁ見ろっ）
そして麻衣たちの戦いが明るみに出る事は無かったのである。

????野望の潰えるとき（後書き）

なお　この作品は森永〇くろう及び　ヤッターマン　とは一切関係ありません。

？？？『地底人襲来の噂？』（前書き）

アキバッ子失踪事件から　はや1週間　マオン達は
平穏な日常を送っていたのだが　最近学校では　ある噂が

???『地底人襲来の噂?』

（1）地底人会議?
日曜朝9時
○原宿　竹下通り
同ともみの家（2階）
「北海道のっどっかで　また地底人の基地らしきものが見つかったんだってさ」
「最近　その噂　良く聞くなるね?」
「うちの野田医院でも地底人がせめて来るって話でもちきりだよ」
「へぇーえ、あさみん家も　そうなんだ?」
私達は最近　学校で話題の中心になっている地底人襲来の噂を求めて情報屋の　徳川友美
こと　ともちんの家に集まっていた
彼女の家は戦国時代から続く名家で彼の有名な徳川家康の血筋らしい
「フィギュアスケートやってる人なるね?」（違うぞ?）
そこに大きなリボンをつけたアヒル口の女の子が2階を駆け上がってきて話しに加わった
「おまたせー」
「やっと来たねともみ
じゃーさっそく説明してくれる?
なんで今頃地底人なのか」
「そう　なる　そう　なる」
「えへん　では話します、私が仕入れた情報では　なんでもアメリカの空軍がペルー沖で練習中に　大きな地下神殿を発見した　と言う体験談が　ある雑誌の記事で紹介されたらしいの　それを日本のドキュメンタリー番組が取り上げたことがきっかけとなってさ
その後にいろいろな芸能人が『謎の小人を見た』などと言う噂がブログとかで騒がれてはじめて　それがアメリカ誌の記事と結びつ

いたようなのよね？」
「ふーん、そうなんだ」
「そう言えばアキバっ子クラブのユウコちゃんも以前エッサ・ホイサでそんなこと言ってたしね？」
「しかし、この世界で地底人らしき物にあったこと無いなるが？」
「それは彼ら地底人がこの地球をとり戻す為極秘で任務にあたってるんだって、噂だけどね」
「そもそもお母さんが子供の頃にも『地球の内部は空洞で南極と北極に入口がある』
と言う本が話題になったらしいよ」
とサミーも話に加わった
「知ってる　ゆっかさんの部屋で見たことある　確か〔地球空洞説〕って言うんだよね」
「地球の内部は空洞じゃ　無いなるよ」
「そんなこと　今は分かっているわよ
でも当時としては　信じた者もいたんだってさ」
「とにかくともみの結論としてですねぇ世間の人たちは無責任な噂が好きだって事なんだよね」
そこに着物を着た貴婦人が『ぼた餅とチョコレートパフェ』を持って部屋に入ってきた
「あらっお邪魔だったかしら」
「ママっ入ってこないでって言ったでしょ、相変わらずアンバランスなんだから」
「まあっぼた餅も　チョコレートパフェも美味しい　ざますのに」
「それは個々に食べた時でしょ、もういいからあっち行ってよ」
「そうですか　では　みなさん　ゆっくりしてらしてねォホホホホ」
その日はナルーと麻美（さみー）の3人で竹下通りに出来た劇団『計世界』（（けいせいかい）
で「ミュージカルを見よう」と言う事になった。

？？？『ミュージカル　未来』（前書き）

ともみの家からの帰りマオン達は　ミュージカルを見たのだった。

???『ミュージカル　未来』

○劇団『計世界』午後2時
２０日間に渡って　劇場で公演され　賛否両論を呼んだ　そのミュージカルの内容は
世界経済が落ち込み同時不況のなかで周辺国との摩擦に奮闘する外交官
大和勝（３８）らノアちゃん一家を中心に描い物であった
世界中に緊張が走る中わが国日本ではバラマキなどの失敗も反省せず、
相変らず政治家達による人気取り政策が続いていたのだ
そんな時　隣国どうしの摩擦が起こり　日本もその渦中（戦争）に巻き込まれていく
そして恐れていた核戦争がついに現実のものとなるの
同盟関係の悪化により米軍が去った日本は孤立していて
唯一の軍隊である自衛隊がその任務にあたったのね　でも実戦経験の無い彼らは
アジア軍がくりだした核ミサイルの連射によって指令系統が混乱し
人々は皆　我先にと逃げ惑い東京中は完全なパニックに陥いった
そして日本政府は彼らアジア軍に無条件降伏し　後には廃墟の町だけが残ったの
戦争によって多くを失った人々は
「・・っもうだめだ?おしまいだ、誰かに守ってもらおうとか安易に考えていた
僕等の完敗だ」と呟くの
誰もが今までのことを思い出し
「いったい僕たち日本は　何をしてきたんだろう?」
と口々に反省の言葉を述べはじめる
そんな廃墟の中で大和の娘ノア（５）が

「ダメじゃ無いよ　まだ歌があるじゃない　唄は楽しいときだけ歌うんじゃなくて
悲しい、いまこそ唄うもんだよ？」
と叫び　大恐慌の中唯一ヒットを続けていた『希望の唄』を歌うの
「もしも世の中が終わる事があっても　未来（じぶん）を信じ　歌う希望の唄を・・」
ノアちゃんのその唄を合図に皆で合唱が始まるの　日本の復活、世界の復活を願ってね
《今私たちは戦争によって　自由に飛びたてる　翼を失ったのでも　本当の翼は　一人ひとりの心にあるのではないのでしょうか？
　どうかその事にきずいてくださいお願いします》
と語りかけるノアちゃんのセリフが感動を呼んだのだった
「サミー、素晴らしいミュージカルだったわね」
「ええっほんとに」
私たちは感動を胸に劇場を出た　そして家に帰った時　応募していたアイドル大運動会のチケットが届いていたのだった。

????『ミュージカル　未来』（後書き）

７０年代から現在までのアイドルが大集合する
大運動会が２５年ぶりに《大島ビーチ》で開かれる。

????『アイドルのスポーツフェスティバル』（前書き）

大島ビーチで　伝説のアイドル　スポーツ大会がはじまる。

???『アイドルのスポーツフェスティバル』

○　渋谷・大島ビーチ
（1）復活アイドル・スポーツ大会
「ゆっかさん、ヒーローさん　早くしないともうすぐ始まるよ」
私はさっきからイチャツイテイル両親を呼んだ、と言うのも今日は江戸放送でやっていた
人気番組　アイドル水泳大会がスポーツフェスティバルとして約２５年ぶりに　しかも
３Ｄ放送で復活するのだが、私は応募していたチケットに当選しただで大島ビーチにゆっかさん達と４人で来ていた
「わぁっヤッテルね懐かしいわ」
「真由香が妊娠したころに丁度終ったんだったな？」
「あっそう・・・あのヒーローさん・・計算逢わないんだけど・・」
「そっそうか　じゃー僕の記憶違いだなハハハ・・」
「そんなことより　会場に入れなかった人たちにも　３Ｄテレビで見られるんだって」
「なるほどー　飛び出して見えるなるね」
「えーみんなー久しぶりでーす　元気でしたかぁ」
『元気ーぃ』
「声が小さいですねえ、もう一度ォ、元気ですかぁ」
『うん元気ぃ』
フォーリーガルスの折鶴まさおと元バーニング・ブロスの右側梨香の軽快なトークからこの大会はじまったのだった
「それでは先週の入道です・・いや入場です」
「カミカミでやがな？」
まず最初は　化膿（かのう）姉妹を中心とした『セクシーチーム』
鳩中葉子、柏餅芳恵を中心とした『元アイドルチーム』
ＮＮＨＫ大河ドラマの出演や一億円ヌードの噂もある

松ノ聖子をはじめとする『中堅アイドルチーム』
そしてアキバッ子をはじめ　ＳＫＢ４８などの『現役アイドルチーム』
そしてバーニング・ブロス　ベリーズ工紋　キュウス　イスマ・レージ等
『バロプロチーム』の５チーム総勢二百名近いメンバーが参加していた
もっとも一班のテレビ中継では２時間と言う時間の都合上　アキバッ子以外は
オミット（つまり省略です）される公算が大きい
選手宣誓は　アキバッ子の高橋トマトちゃんと松ノ聖子さんが選手宣誓を行った
「宣誓　私たちアイドルは『法と証拠に基づいて』」
「正々堂々と戦う事を誓います」
「現役アイドル代表高橋トマト」
「同じくベテラン代表　松ノ聖子」
『わーあ、トマトちゃーん可愛いぞ』『聖子は体力持つのか？』
等の黄色い声援が飛んでいた
オープニングを飾るのはお馴染みの騎馬戦からだった
この競技に参加したのは岡目元なつき　大泉水今日子、鳩中葉子、お能姉妹
ら旧アイドルらが頭に巻いたハチマキを取り合い
冒頭から芳恵のバストが外れるなどの狙い通りのハプニングの連続だったの
続いて私が一番楽しみにしていた
アキバっ子４８とバロープロジェクトの４８対４８の一列に並んでの同時卓球大会
リーダーの蛸橋愛は「絶対負けたくにゃい」と気合を入れ『カミ』捲くったが
１５点勝負で　３回戦行った結果は、ＣＤの売り上げ同様３対０で

アキバッ子の圧勝に終わった
その間ベーニーズ工紋やキュウス、イスマ・レージなど
2、3流クラスの歌手の歌が流れるのも長年の伝統なのだそうです。
そして柏餅芳恵の　歌「紅茶の美味しい喫茶店♪」（いつの歌やねん？）
続いては棒高跳びこれには郷ひろしやケロッケなどのお笑いに人たちが出演し　会場を大いに我わせていた　でもなんと言っても注目は湖錦乃アキラと西城市ひできのスター対決に注目が集まったのだが、紙一重で湖錦乃アキラが西条市を『うっちった』
続くリレーではサぁブングルや乞食よしお等　芸人が多数参加　イチオシのトマトちゃんは
敦子　そして天井真理　松ノ聖子も出演　天井真理の息切れと聖子の尻振り走りが印象的だった

そして注目のトマトちゃんがいる　現役チームでは敦子がバトンを落とし大泣きする
ハプニングがあったが、トマトが最下位から4人をごぼう抜きして現役チームに優勝をもたらした（さすがトマトちゃん）
なお　崖っぷちアイドルの安倍おなつは当初　軽快な走りを披露したのだけど？
冒頭でパンティが破れお尻丸見えで走ると言う　芸人なら美味しい？ハプニングもあった
（本人は番組最後まで気づかず）

????『アイドルのスポーツフェスティバル』（後書き）

柏餅芳恵　松ノ聖子　８０年代を代表する2人がプロレス大会?で激突する。

？？？激突！聖子ＶＳよしえ（前書き）

キバ戦　卓球　マラソンと続いて４回戦は　プロレス個人戦だった。

???激突！聖子ＶＳよしえ

（２）

○大島スタジアム

続いて新たに取り入れられた競技は、アン・ビバリー・バオの司会で有名な所天

がレフェリーを務めた女子プロレスだった

８０年代対決では松風聖子と柏餅よしえが決勝戦で激突した

ロープの反動を利用したよしえのドロップキックが決まり倒れる聖子

そこをスリッパーホールドで締め上げるよしえ　観客からは　聖子さんに向って

落ちろ、落ちろ♪』の大合唱　悶絶する聖子さんの胸元が『ポロッ』とこぼれ

「おっとびっくり、笑ってこらえて」

「以外と豊満なんだ」と確認

でも歯を食いしばって何とか耐えた聖子さんのラリアートが決まり

よしえさんのブラが

吹っ飛ぶと言うハプニングも　でも　次ぎの瞬間客席から

「ちっ、ちっちぇい？」と驚きの声が

アナウンサーの古館二郎さんが

「これは劣勢だった信長が桶狭間で義元の軍勢を逆転したように

聖子体ヨシエの胸の対決もこの瞬間大逆転がきまったぁ」

と何度も絶叫していた。

観客の一人がそのブラを拾うと　なんと５センチも厚底があるのが発覚

瞬間青ざめたよしえさんに聖子さんのジャーマン・スープレックスが決まるがこれは　所天のカウントを２．７のぎりぎりで返したのね

ペチャパイが発覚したよしえさんは

「このやろう　死にやがれぃ」と完全にぶち切れ状態（ヤレヤレ）

怒りのロメロ・スペシャル（吊り天井）を決める
これにはさすがの聖子さんも周囲を気にせず「うぇーん」と喚き喚きギブ・アップを要求
しかし怒りが収まらないよしえさんはそうはさせじ　と自分で外しトップロープによじ昇りドロップキックを決める
が反転した聖子さんの逆転のバックドロップが決まったのであった
戦意が喪失したよしえは2回戦でまゆゆの『あっかんべ固め』に　僅か12秒で敗れ「うっうーん」とそのまま失神し放尿した
　ファンからは『良いぞー』と言う声援が乱れ飛び
その激戦を称えられ　スポンサーのパンパス・エイトからは哺乳瓶と紙おむつ1年分がよしえさんにプレゼントされたのだったなお個人戦で準優勝した杉田おかるに元女子プロレスラーだったキューティ鈴美が
わずか15秒で　絞め落とされると言う波乱もあったのだけど
そして　個人戦で優勝したのは　下馬評どおり連勝した杉友彩だった。
「なかなか見ごたえがあったな」
ヒーローさんは　ビデオを回しながらしみじみと言った。

？？？　仮装大会（前書き）

５回戦は仮装大会だった

???　仮装大会

（3）仮装大会
昼食の間は各チームの代表による応援合戦なの　今回はダンス対決で　久しぶりに再結成した
キャンプレディーのミイとケイがパッパー警部を踊ったのだが
途中ミイちゃんがぎっくり腰で運ばれると言うハプニングも
他はデス・ピードやバーニングそしてアキバッ子がそれぞれダンスで対決
十一人の仮面ナイダーたちも姿を見せＲＸ南高橋（倉田鉄タロウ）の唄う
〔仮面ナイダーブラック〕に合わせて全員が踊ると言う場面もあったまあ審査には関係ないのだけど　大いに楽しませてくれた
そして５回戦は仮装大会だった　高橋トマトと犬島優子は『コスプレ仮面』に扮して登場すると
『わーわー』
友の凄い声援と花吹雪が乱れ飛んだ
「宇宙の果てからよってきた　正義の戦士ルビー」
「変幻時代に悪を撃つ、太陽の使者ユリシーズ」
『私たちコスプレ仮面シスターズ　あなたのハートを　メロりんこしちょうぞ！』
可愛いお尻を振り　振り向きざまにピストルを撃つポーズが見事に決まった
『うわーあすげーや』『まるで本物見たい？』（そりゃそうでしょう？）
そしてＷともみによる　くいーん　とエリザ・ペすの仮装
「いくよくいーん」
「オーケーエリザ・ペす」
ベルトにメモリーを差し込む

『くいーん　エリザ・ペすローテーション』
と電子音が響き2人の周りから湯気が噴き出す（湯気かい？）
すると仮面ナイダーWに扮したWともみが現れる
『さあ　おめえらの罪を数えな』
そしてヨシエは豚のハッカイ　大泉今日子は河童
聖子は何故か天使のかっこをした三蔵法師の姿で現れ会場を沸かした
またＳＳＫＢ４８のメンバーは全員で忍者姿で登場したのだった
６回戦は女子による水泳の百メートル走
第一コースは磯野コキリらバラェティチーム
第二コースは聖子よしえら旧アイドルチーム
第三コースはバロプロチーム
第四コースはトマトちゃんらＡＫＢクラグチーム
そして第５コースは仮奈さんなどモデルチームだった
旧アイドルチームの戦陣はブヨブヨの天値真理さんであったが予想に反して
以外と早かったのだ　二番てはダイビングの資格をもつよしえさん
しかし準備運動不足で途中で　足が攣って
溺れると言う大失態　以後トラウマでカナヅチになったらしい？可愛そうに
しかし最終走者の聖子さんの活躍で何とか二位に、三位がモデルさんら
四位がバラェティチーム最下位がバロプロジェクトだったの
結局現在の勢いどおり、アキバチームが優勝し、リーダーの
高橋トマトちゃんがＭ？Ｐを獲得したのだった
そして　競技は最後のプロレスタッグ戦を残すのみとなったのである

？？？　仮装大会（後書き）

興奮したダンス松本が放ったイスがきっかけとなって
ゆっかさんが負傷する
その時　マオンの力（いかり）が爆発する
次回『暴走する力』

？？？　制御出来ない力？（前書き）

最終戦はプロレスの団体戦のみとなっていた。

？？？　制御出来ない力？

（４）

○大島スタジアム」

同・解説室

「さてここからは私古館二郎が司会を務めさせていただきます

解説はお馴染み猪木プロレスの山本こたつさんです、こたつさん

宜しく願いします」

「こちらこそ」

「それではオープニングの全員参加によるバトル・ロワイヤルを行い　２チームまで

絞らせていただきます。

【アキバッ子らアイドルチーム　仮奈らモデルチーム　杉本綾らセクシーチーム

イモとマヤらお笑いチーム　そしてバロプロチームら全員による共演は見ごたえがあった

まずは皆で　杉元　聖子　杉田ら強豪３人を全員で　フルボッコにした上で

リング下に落とされた　その光景を見た　キューティー　ダンプ井ノ上貴子

ら元　現役のレスラーたちは失禁し　退散した　そして結局　トマトら数名が生き残った

アキバッ子ＡＫＢクラブと最後まで逃げ回った道下さゆみが所属するバロプロの

２チームが優勝を賭けて争う事になったのだった】

「それでは優勝を賭けた最終戦　を始めます　選手入場」

青コーナーサイドからはウサギをモチーフにしたコスプレで前張敦子と

渡奈　麻友のアキバッコンビがミリオン曲『フライング・ゲット』

のテーマーに乗って現れ
あっちゃんはトップロープに飛び上がりピースサイン　まゆゆは飛び乗ろうとして
飛び越え尻もちをついてしまった
『まゆゆ　おちゃめ』『あっちゃん・かっこいい　カキーン』（懐かし？）
と　ファンたちの黄色い声援が飛んだ　そして赤コーナーサイドからは
『恋レボ２１』のファッションとリズムニ乗って崖っぷちアイドルの安倍おなつと蛸（たこ）橋愛のバロプロコンビが現れた
『それいつの曲やねん』
と言う中年の男性から突っ込むが入った
「さあ　いよいよ始まるわよ」
「両方とも頑張るなる」
「えーこれより最終対決を６０分３本勝負形式で行います　青コーナー　チーム　アキバッ子っす」
『まゆゆぅあっちゃん』
ファンたちは絶叫し　控えていたオタク隊は早くもオタク・ダンスでエールを送った
「続きまして　赤コーナー　チーム　モ―モ―エンジェル、頑張るッす」
と一文字焼と言うアナウンサーの司会で試合は始まった
『ゴ―ン』
４人は　まゆゆとおなつを残してそれぞれのコーナーに戻った
《さあまずはお互いに握手　オッと　おなつをロープに振ったまゆゆ　アッカンベェキックが
決まりおなつがばったりと倒れた　そこを司ず　４の字固めの体制にいるまゆゆ》
「あれっ４の字ってどうやるんだっけ？」

《オッと戸惑ってる間におなつがまゆゆの足を払った　そして逆に
４の字を仕掛けたぁ》
「いや―ぁ　苦しーよーぉ」
『まゆゆがんばれー』
『落ちろ―落ちろ―』
《オッと４の字を返した不屈の根性で返したまゆゆ、こうなるとお
なつのほうが有利ですね
山本さん」
「そうですねえ」
「ギヤ嗚呼ぁ」
『落とせぇ落とせぇ』
《自ら４の字を外したまゆゆ　お腹を思い切り蹴りつけた》
「ギェええ」
《そしてトップロールからフライングゲットいや　フライング・ヘ
ッドが決まった
ここであっちゃんにタッチだ　そして再びなつみを起こしてパイル・
ドライバーだ》
この展開に蛸橋が何度も出ようとするも　レフェリーに阻まれ救出
にいけない
《オッと敦子　トップロープからファンに向かって　コールを呼び
かけだぁ》
「エーィケーィ　ビーイ」
『敦子　敦子　敦子　敦子』
《早くも出るか敦子スペシャル、オッとしかしその隙に立ちあがっ
たおなつが
後ろから敦子を抱え落とす　そして倒れた敦子の　肩を思いっきり
踏みつける》
「このやろう　先輩に対する礼儀を知らねえなーぁ」
《おなつ完全に切れております　噂通り後番長　はっきか?》
『バシバシバシバシ』

「フギャーン」
《これは山本さん　金日本プロレスのジャンボ・鶴ぽんを思い出しますね》
「アピールしている間に逆転されると言う　あれですか？」
《そうです　ロープに振った　おなつのがけっぷち・らリあっとそれを交わした
敦子がジャーマンを仕掛ける　オッと逆にバックをとったおなつの『どさんこ・スペシャル』が決まった》
『ワン　・ツウ』
《オッと敦子が逆に回転して抑え込んだ》
『ワン　・ツウ』
《蛸橋のカットが入った》
同・中央の席
「いやーあ素晴らしい試合だねえ　ゆっかさん」
「でも何でここまでプロ顔負けの戦いが出来る　なる」
「それはねアキバッ子たちは　この日に為に　劇場の地下室『アッカンベの穴』で
佐山さとるさんに猛特訓を受けたそうだよ」（凄いけど　劇場にそんな場所あったっけ？）
「弘さん　バロプロの方では　奇岩山で立花のオヤジさんに特訓を受けたんだって？」
《オッとなつみ　敦子を抱え上げて　アルゼンチン・バックブリーカーの体制に入った
反転した敦子の　バック・ドロップが一瞬にして決まったぁ》
『ワーワー』
《物凄い試合ですねぇぇ山本さん》
「そうですねえ」
《さっきからそればっかりしかいいませんが？》
「そうですねえ」

中央の席
「なーんか　期待以上の素晴らしい試合だな、あっビールが切れた
売店で買ってくる」
「じゃー私たちもなんか適当に買ってきて頂戴」
「はーい人使いが荒い親子だ事」
と言いながら　ヒーローさんは売店にいった
「あっ　パパさん　僕も行くなる」
とナルーがヒーローさんの肩に乗って行った
【2回戦は再びおなつ対まゆゆの戦いから始まった】
「パチーン」
《オッとおなつがまゆゆにビンタをした　しかしまゆゆ　怒りのビンタ返しだ
「バシバシバシーン」
客席からは
『おオーオ』
と歓声が上がった　敦子と　蛸橋もビンタを始めた　それをきっかけに
アキバ系ファンとバロプロのファン同士も殴りあいや喧嘩を始めたそればかりか他のアイドルファンまで　殴り合いを始めていた
スタジアムの外　はるか上空からは謎の少年が見つめていた
『フッフッフッフッフ・マオンさん試させてもらいますよ』
それはマオンを時空への旅に誘った少年によく似ていた
『おめえらバロプロの時代は終わったんだよ』
『何よー、あんたたちも　いかがわしい商法止めろや』
《オッとこれは凄い事に・・・》
古館とこたつ　群衆に　フル・ボッコにされる
《ひえええええ》
中央の席
「あんたたち止めなさいよ」
だがみんな眼を光らせ、何かに操られているッようだった

「そうよまおの　いう通り　眼をさましなさいよ」
『るせえ　馬場(ばば)ぁはどいてなよ』
「ババア誰に向かって行ったんだよ」
客と言い争いになったダンプの椅子がきっかけとなり
ポーニテールの突っ張った男性?がおねえ言葉でダンプのそばにいた
ゆっかさんをぶっ飛ばした
『ダーン』
ゆっかさんは3メートルくらい向こうに吹き飛んだ
「ゆっかさーん・・止めなさい・・やめろおおおお」
『ドカーン』
マオンの額には精霊の証である梵天が浮き出た　眼が光る　しかし
白い天使の跳ねではなく
黒い悪魔の翼が生えていた
「まっマオン?」
売店から帰ったヒーローさんがビールを落っことして　そう言った
「こっこれは恐ろしい事になる　なる」

？？？　制御出来ない力？（後書き）

ナルーはマオンの怒りの暴走を制御することが出来るのか。

？？？　制御できない力２（前書き）

ゼノンによって群衆の憎悪が引き出され　それに巻き込まれる形で
真由香が負傷する
その時マオンの怒り（ちから）が解き放たれる

？？？　制御できない力２

マオンの額には精霊の証である梵天が浮き出た　眼が光る
しかしその翼は　正義を現す白ではなく、黒い悪魔の翼だった
「まっマオン？」
『ドバーン　ドドドド』
マオンの怒りによって　大地は割れ地震が巻き起こった
「これは恐ろしい事に　なったなる」
『なるーよ』
「お師匠様（じるどーら）の声が聞こえるなる」
『この力は悪しき怒リによる者　聖天使ラ―マォンではなく　暗黒の天使ミダルォダの力だ
お前が内に入りその力を制御押せよ』
「そう言われても　僕の力じゃぁ無理なる」
『わしも力を貸そう　だがそれでも　抑えきれるかどうか？》
「あたしも力を貸してあげるよ」
そう言って龍と金魚（なるー）との会話に入ってきたのは　峰岸小猫の義理の姉のみるくだった
『そうかお前たちも力を貸してくれるか』
「美奈　麗菜　そして？ｅｎｕｓのみんな　あたしに力を貸して」
みるくは仲間たちの力を中継（しゅうけつ）し、まおんの内に入ったナルーに送った
『あああああああ』
【ドバーン】
その瞬間大島ビーチを含むスタジアム全体が吹き飛んだ
「あっあっ」
力を放出したマオンは意識を失った頭の中から出た　ナル―も　みるくも眠るように倒れて言った
それからどれくらいたったのだろうか　たくさんの人達が瓦礫の中から蟻の如く

這い出してきた　その中には　アイドルの人たち　牽制しあっていたファンの人たち
そして　ゆっかさんや　ひーろーさんも　いた　大島スタジアム倒壊と言う大事故にも
かかわらず　死者やけが人はゼロであった
《これはまさに　奇跡ですね山本さん》
「そうですね」
主催者であるＡＫＢ毎年放送側は参加アイドル達による握手会でフィナーレとした
もっとも　盛り上がったのはアキバッ子たちＡＫＢグループが大半を占めていたのだが
結局　アイドル運動会はアキバッ子の総合優勝と言う事で　テレビではラスト部分を変更して
放映された　そして各ファン同士による交流も水面下で始まったようだった
「あのーバロプロファンの者ですけど　アキバの皆さま　これから仲良くやって行きましょう
その為にどうかご指導ご鞭撻お願いします」
「そう下手に出られたらこちらもいう事ないよ」
とファン代表は表向きは握手し合った
『ナルー　みるく　そして？ｅｎｕｓの戦士たちよ　よくやった』
ジルド―ラの声が　ナル―達の心に伝わってきた
ビルの陰には例の少年がいた
『フフフマオンさん　あなたの制御できない力は　使い方を誤ると全ての世界を崩壊しかねません　気を付ける事ですね」
そう言うと少年は消えて言った
○マオンの家
「まだ　眠り続けてるね」
心配してやってきたサミーが呟いた
「もう3日になるのに一向に目が覚めないの」

「大丈夫だよ脈拍も異常がないから　もうすぐ目を覚ますと思うよ」
ゆっかさんの言葉を受けたサミーが満面の笑顔でそう言った
「・・ナルー　もう食べられない・・」
周囲の心配をよそにごちそうを食べる夢を見ていたマオンであった。

？？？　制御できない力２（後書き）

マオンは【サマーランス】社が企画した
天樹園ツアーに参加することになった
そのツアーで懐かしい人達と再会する。

???『天樹園ツアー』（前書き）

マオン達は天樹園ツアーに参加することになった。

??『天樹園ツアー』

（1）天樹園ツアーに出発
『犯人達はどうやら政府高官を人質にセンタービル　2階に立てこもった模様です』
と　レポーターは伝えた
テレビはどれも【ぶらっく・ラビッツ】と言うカリフォルニアの革命軍の
立てこもり事件を伝えていた
ヒーローさんは急遽取材の為アメリカに向った
ゆっかさんも3日前に起こったこの事件の情報を
得るために10キロほど離れた雑誌社に泊まりこんでいたのだ
「2人とも大変だねぇ」と
ゆっかさん　の代わりに家に留まってる
サミーがそう言った
「もう馴れてるけどさあ」
「マオン、こんな物が来てた　なる」
一枚の手紙を持ってナルーがやってきた
「どれどれ」と中を開くと
「朝倉マオン様、この度は弊社【サマーランス】が
企画した天樹園ツアーに当選いたしました
つきましては明日8月3日朝8時にマオン様の
自宅にアスマフート行きのマイクロバスが到着しますので
家族全員で参加ください
　サマーランス支配人　ゼノン」と書いていて
手紙の下部分が招待券になっていた
「ぜっゼノンて　あのゼノン？なるか」
「マオン罠なんじゃない」
「そうかも　でも天樹園ツアーなんて素敵じゃない」

「それはそうなんだけどさ」
立てこもり事件ばっかり見ていてもしょうがないので
結局私達は3人でツアーに参加することにしたのだった。
次ぎの日私達はしっかりと戸締りをして部屋の前でバスを待った
やがて8時丁度に空から『デスト・ホース』と言う天馬を模った
マイクロバスが舞い下りてきて
「朝倉マオンさん自宅前でバッス」と犬の顔の車掌さんが扉を開けたので
私達はそのバスに乗り込んだ
中には5人くらいの風変わりな人たちがいた
まず「お久しぶりでましゃ、
マオンちゃんもこのツアーに参加するで　ましゃか?」
と親しげに話しかけてきたのは、山登りの格好をした嘆きの　やっさんと
くじけのみっさんの親子ガエルだった
「私は別の用事でこのバスに乗ったんですよ」と
声をかけたのはメッシルア人の医師団（放浪する黄金宮殿）にいたアリナィと言う女性だった
「皆元気だった　なるか」と挨拶するナルーに
「ヨッオ、おまえ等も元気だったか?」と
声をかけた瑠璃色髪の少年を見て私は
「・・カイル・・」と驚きの声を上げた、
後はマクモと言う牛蜘蛛族のおばあさんと黒いフードを被った物静かな女性がいた
どうやらバス自身が運転手のようだった　バックスと言う犬の車掌さんが
「それでは出発するでバッス」と
笛を鳴らすと私達を乗せたバスは
途中原宿の停留所でアキバッ子ＡＫＢクラブ４８が乗せて
天馬の翼で『バサバサッ』と風をきり（ホントは精霊の力）空に舞

い上っていた

『レコ大と有線の7連覇を達成し全米(びるぼーど)チャートでも一位記録を続ける彼女たちは今後全銀河でコンサートを開くのだと言う。』

全宇宙に握手権が溢れる日もそう遠くなさそうだ　（ほんまでっか？）

３００部記念『神話世界』（前書き）

神話好きのカバナイの世界にはモチーフ（もでる）が存在する

３００部記念『神話世界』

？デルクラル神話（不思議界記伝）
女神が種をまくという部分は『スラブ神話』の女神モコシがヒントです
ただしモコシが撒いたのは　混沌の宇宙ではなく畑ですが
（撒いた種が自分を守る聖獣になったと言うやつです）
オルディナスによる創世神話はそれに　マアの創世神話を合せました
天空の城アトラントとそこに住む神々たちは『ギリシア神話のオリンポスの神々がベースです
？ノースリーブ神話（ＡＫＢのグループともひっかけました）
名前は　スラブ神話を捩った者ですが　３神はインドのヒンドゥ教のシバー　プラズマーヴィシュヌです　天に掛けられた橋や　天空に聳える巨大な
樹になる木や、ローデン・ハイムの巨人などは『北欧神話』からです
人間界が大きな鯨の上に作られたと言う発想は『古代のギリシア人』の考えた世界
がヒントであります
そしてディゲールをはじめとする魔神大戦の話は　『仮面ライダーディケイド』
の話がヒントになっております。
？ダンテの不思議な旅
もちろん『ダンテの神曲』がヒントです
僕なりのユニークな地獄と天使見習いミーナとの淡い恋を中心にＡＫＢの曲を
物語の軸として考えました。
？魔王シスフィーナ
最後に出てくる　神話大戦は『聖書のヨハネの黙示録』がベースです
？スサノオのオロチ退治

クイダラゲと言う8つの顔を持った蛇の話は『日本神話』がベースです
勇者フデーロが大地の女神の娘を救出に行く話も『日本神話＊1』のデ・メテルの話がヒントです　なおフデーロ自体のモデルはネバーエンディング・ストーリーの＊2アトレーユです。

３００部記念『神話世界』（後書き）

＊1ギリシア神話にも似かよった話があるので　おそらくこっちの方が元ネタ
だと思う。
＊2　アトレーユは男性なのですが　元はギリシャ神話の正義の女神（天びん）
アトレーアがモデルだと思う。

？？？『歌は宇宙を救う』１（前書き）

アキバッ子たちは　アンドロメダ　ツアーの為
途中オルフェと言う星に宿泊した
そこは自由と平和の星と謳われていたのだが・・

???『歌は宇宙を救う』1

アキバッ子ＡＫＢクラブ４８は途中天の川停留所でアンドロメダ行きのバスに乗り換えた
そして最初に泊った星が『オルフェ』と言う星だった
トマトたちは〔オルフェ・ルックス〕と言うホテルに宿泊した
○ロビー午後２時
「わーあ凄い豪華なホテル　と言いたいとこだけどこれじゃー『さやかん家』のほうが立派だよ」
「でもこのパンフレットにある豪華さは一帯　ど　言う事？」
とミーちゃんはバスの中で貰ったパンフレットを眺めながら言った」
『そうだよこれじゃーサギだよ』『ブ―ブ―』
と　あちこちからブーイングが起こった
リーダーのトマトは
「それはなんか深い訳があるんだよ、取り合えず部屋に入って落ち着こうよ」
トマトはスタッフから渡されたキーをメンバーたちに渡した
○午後５時
「あのーすみません」
「どなたでしたっけ？」
今にも倒せそうなほどに痩せこけた三瓶と言う老人のホテルマンがトマトに尋ねた
「さきほど宿泊したアキバッ子クラブの　高橋トマトですけど」
「それは本名ですか？」
「そんなわけないでしょ　みんな　トマトとかタカマドとか呼んでるし、本名がみなみだから　たかみなとも呼ばれてるんだ」
「ではたかみな様、何のご用でしょうか」
「部屋に入ったのは良いけど　このホテルではテレビもやってない

しゲームは無いし
みんなでトランプとか　じゃんけん大会とか　やってたんだけど
　それも飽きちゃってさあ
どっか遊べるところは無いんですか」
「外出　とんでもない　明日の出立まで部屋に閉じこもってじっとしていて
ください　良いですね　そうじゃ無ければ責任を持ちませんよ」
三瓶とたかみなのやり取りを聞いていた　れいにゃんがホテルマンに噛みついた
「ちょっと　それ可笑しくないですか　このパンフレットによるとこの星は　自由と豊かな星ではなかったのですか？」
「そのパンフレットにあるのは　この星が平和だった3千年も事ですよ」
「へっ　3千年　どゆ　事？」
「とっとにかく夕食はさんまですからそれまで部屋で大人しくしていてください　良いですね」
「と　言われても　ご飯も無くて　サンマ一匹だけじゃーあ　いくらなんでも7？」
たかみなは食い下がったが、三瓶は何故かそれ以上話してくれないので
その場は仕方なく引き下がった、だが　たかみな　みーちゃん　あっちゃん　れいにゃん
まゆゆの5人だけはスタッフの隙をついて　こっそりホテルを抜け出したのだった
〇ウードの森深夜1時
「娯楽は無い　部屋はオンボロ　あーあ　宇宙にまで来てなんかそんした感じ」
「落ち着いてよ　れいにゃん　それにしても腹減った」
敦子が言う通り　バスを降りて以来　みんなが口にしたのはアンパン1つだけだった

「この星は貧乏なのかな」
まゆゆがそう呟いた時　蛙と豚を混ぜこぜにしたような大きな生き物
その名も『カエル・豚』（そのままやん？）を連れて　輝く槍を持った者たちが
たかみな　れいにゃん　敦子　まゆゆ　みるく　の5人を取り囲んだ
『グェローンヴァ・グェローンヴァ』
その大きな口からヨダレが落ち　そこの地面が溶けた
『ひえーえええ！』
「なっ何よあなたたちは　まゆゆたち　あんまり美味しくないよォ」
『ウゲモ　ヤゲモ　アカンベェ』（こいつらを洞窟に閉じ込めておけ」
『アゲモ　サゲモ　アカンベェ』（ヘイ分かりました　アモシさま）
「???この人たち何入っているの」
「まゆゆにも分かんないんじゃあ　敦子に分かるわけないじゃない」
「・・いやみーたんは・・　何故だか　分かるよ？」
「・・へっ（・・？　」
『マモシ　キゲモ　アカンベェ』（何をしておる　さっさと縛っちまえ）
『パンパス　モー二ーズ　アカンベェ』（分かりやした）
「マウス　チッチ　アカンベェ』（みーたんたちは銀河系から来た・・）
『ガメス　ゲメコ　サウマンド　アカンベェ』
（おまえは何ゆえ我らの言葉が分かる、人間はすべて敵じゃぞ）
「そっそんな？」
『コッコン　トット　アカンベェ』（大人しくしろ）
「るせいやい　分かるようにいえ？」
＊れいにゃんの指摘通り　これじゃー書く方も　読む方も疲れるので
今後の会話は通販（じゃぱねっと）で買った翻訳口紅＊で（そんなん売っていたっけ？）

みーちゃんたち　アキバッ子の5人は、原住民と思われる彼らにナワでグルグル巻きにされ
『ウドの穴』と言う洞窟に連れて行かれたのだった
「畜生きょうは厄日だな？」
「そんな事言わずに歌でも歌おうよ」
「そうだなお腹ぺこぺこだし　モ―オやけくそだぜ」
まゆゆとれいにゃんは洞窟までの道を歌いながら歩いた
それに合わせるように他の3人も歌い始めた

《Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！
頭の中，ガンガン鳴ってるＭＵＳＩＣ　ヘビーローテーション
ポップコーンが　弾けるように好きという文字が躍る　顔や声を
想うだけで　居ても立ってもいられない，こんな気持ちになれるって
僕はついているね　Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！
君に会えて　ドンドン近づくその距離に　ＭＡＸ　ハイテンション
Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！ハートの奥
ジャンジャン溢れる愛しさは　ヘビーローテーション♪》

すると周りの牛の顔をした猿『デンガル・バック』やオルフェッグの住民たちが一斉に
「それはなんだ？」
と聞いてきた
たかみなは　地球で流行っている歌だと説明すると
彼らは「何　歌っそれは新しい食べ物か？」
だがアモシは戦闘民族であるオルフェッグ族の穏やかな表情を見るのは初めての事だった
「一帯全体　どう言う事じゃ　戦いに明け暮れていたこの者たちが

全員　感動の涙を流しておる
わしも　こんな　穏やかな『気分になれるって』　初めての事じゃ
ゲルペス（一族のチーフ）この方たちのナワをほどいてやれ」
「分かりましたアモシさま」
そしてたかみなたち5人は正式にオルフェの谷に招待させたのだった。

????『歌は宇宙を救う』１（後書き）

人間（マイカル）とオルフェッグ（不死生物）との民族闘争により
荒廃した星オルフェ
だがアキバッ子たちは　その世界には無かった
『歌』と言う武器を彼らに与える
その力が何千年も続いた　紛争を終わらせるきっかけとなって行く

???歌は宇宙を救う2（前書き）

たかみなたちは　オルフェック一族の聖地
オルフェの谷に案内された

???歌は宇宙を救う2

○オルフェの谷
そこは切立った断崖の上のさらに上にあった
たかみなたちはそこをアモシ達の後を追ってついていくのがやっとであった
１０分後
「ハァハァハァ　あのー上はまだですかぁ」
「まゆゆとやら　油断すると　下の肥だめに真っ逆さまじゃぞ」
『ヒエエエエエ！』
３０分後
「ハァハァハァもうまゆゆ体力の限界だよォ」
「まあそう言うなって　ネ申（ねもう）すのロケと思えばいいじゃんか」
とれいにゃんはまゆゆを励ました
「もう一息じゃがんばりなはれ」
「そう言う事　だあああああああ」
リーダーとして引っ張ってきたたかみなは岩を踏み外し　下に真逆さまに
落ちて言った
『うわあああああ　たすけてー』
「仕方ないなあ～風の様に舞い　全てを司どる天空の翼、こーい天空風」
みるくの呼ぶかけに答えた風の精霊が落下するたかみなの全身を包み　途中３人を乗せて４８０メートル上空まで押し上げた（みーちゃん初めから使えよ？）
「ハァハァハァ・ゼイゼイゼイゼイ・あんたたちまさか　この高さまで
素手で昇らせようと思ってたんじゃぁ無いだろうなぁ」
「あらっ行けなかったかのォ、ワシらオルフェックには簡単なんだ

が？」
「ヒィヒィヒィあのねゼイゼイゼイ　れいなたちはこれでも人間なの・・・」
「おーいまゆゆがさっきから　意識がないんだけど」
「しばらく休ませれば大丈夫じゃよ、しかし　みるくさんとやら
他者とは違いあんたは
何者じゃ、わしらオルフックとも違うようじゃが？」
「みーちゃんは人間だよ　ただときどき呪文が　頭に浮かぶだけだよ」
体力を使い果たしたアキバッ子たち5人はオルフェックに抱えられて　谷まで運んでもらった
そして目が解けるほど眠った後オルフェ族の長老アモシはオルフェックの歴史を語った
○魏神戦争の始まり
《アモシが語った　事によると　彼らオルフェックの先祖は元々『バーン・ゲルド』と言う
地下に住んでいたらしい　ママンゾと言う国を作り平和であったらしいのだが
王ランギゥスは亡き父王ランヒルと人間族（まいかる）の王ユリアとの提携を破り
地上世界の征服に乗り出した　その為友好だった人間族（まいかる）との間に亀裂が
入り　それが　現在も続く『魏神戦争』のきっかけとなった
その為に国は乱れ　領民たちは少ない食料をとりあって自滅　していったと言う》
「誰も　止めようとは努力しなかったんですか？」
「もちろん人間族（まいかる）の王ユリア（優里亜）と我がオルフェ族の王ケントは
何とか和解させようと頑張った　しかし　戦争は一度始まってしまえば
どちらが正しいとか　正しくないとか　そんな理由など　関係無か

ったんじゃ
彼らはお互い殺しあう事が目的となって行ったんじゃ
そんな人間たちやオルフェックたちに失望した　ケント王とユリアは別の世界へと
逃亡した　そしてこの世界は　未だに戦争が続いていると言うッ訳じゃ」
「・・・・・」
たかみなたちはアモシの話に圧倒させていた　しかし同時に3千年も続く戦いを
終わせる事は出来ないだろうか　とも考えていた
「お婆（ばば）　化けの子（イソギンチャクによう似た生き物）が　人間共（まいかる）がゲッシィーの草原に集結すると言う情報を伝えてきましたが、いかがいたしましょう」
「オノレィ人間（まいかる）ども　目に物見せてやる、ゲルペス一族をゲッシィーの地帯に
集めよ　打ち砕くのじゃ　」
『オ―ォ　ォ』
みんなは勝ちどきを上げた
アモシ達が言った後　たかみなはれいなに向って言った
「ねえ　私たちの力でこの戦いを終わらせないかしら?」
「3千年も続く戦争をたった5人でか?」
「この世界には　歌と言う文化がないって言っていたじゃあないかみーちゃんに　他のメンバーを呼んできてもらってさ」
「そんなんでうまくいくのか」
「さあ分からないけど　何とかしてあげたいと思う、その為にここに来たような気がするんだ」
「みなみの気持ちはわかったよ、じゃあまゆゆたち起こしてくる」
そう言うとれいなは洞穴の奥へ入って行った
《はたしてみなみたちの思いは届くのだろうか》?

???歌は宇宙を救う2（後書き）

人間対オルフェックの3千年にも及ぶ戦いは終わるのか（まいかる）
戦争を終わらせたいと願う
みなみたちの思いは彼らの心に届くのか？

???歌は宇宙を救う3（前書き）

3千年にわたって繰り返されてきた　人間族（まいかる）と
オルフェックの戦争に、たかみなたちは　歌と言う武器で
立ち向かう。

???歌は宇宙を救う3

〇ゲッシィーの地帯
人間達は雷神王と呼ばれるマチルトン王を中心に
３０万の軍勢でやってきた　そこを茂みの中で待ち構えていた
オルフェックの者たちが４０万の軍勢で迎え撃った
両軍は入り乱れ互いに
「お前の母ちゃんでべそ」
『なにをお前の頭は空っぽじゃないか』
などと罵りあった（子供か？）
人間族は銅で作った空飛ぶ船「ミネルバ―」
オルフェ族は龍神　ドラグ・オルフェを　それぞれ操り戦った
「今日こそ決着を付けてくれる」
ゲルペスは最終兵器『サラマンドラ』を解き放った
「こちらもあれを使うぞ」
人間達は未完成の核兵器　地雷球を使うように命じた
この２つの兵器が混ざり合えば　このオルフェその物が消滅しかねない
「オルフェッグどもこれが最後だ」
両者は最終兵器を使おうとした　その時　何処からか楽しい　何かが風に乗って
流れてきた　それは　この世界に無い『歌』と言う文化だった

『Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ
Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ
Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ
Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ　Ｎａ
ギラギラッ　容赦ない太陽が　強火で照りつけるｏｎ　ｔｈｅ　ｂｅａｃｈ

自惚れ温度は急上昇　落ち着かないのは真夏の性(さが)だね
2人　目が合えば　なぜか逸らすのに　僕を　またすぐ見る
君って　もしかしてもしかして
フライングゲット　僕は一足先に　君の気持ち　今すぐ手に入れようか
フライングゲット　何か言われる前に　心の内　ビビッと　感じるままに
誰といても（誰といても）　微笑み方で（微笑み方で）
君が僕に恋を恋をしてるのは鉄板
フライングゲット　だから　誰より早く　君のハートのすべて　僕のもの
好きだからラブ・フラゲ！♪』

「なんだこれは」
『良く分からんがなんだか楽しくなってきたぞ』
みると　みるくの呼びかけで　ゲッシ―の草原の向こうに集まった
アキバッ子たちが
奇妙な振り付けと共に　大声で歌っていたのだった
「これが　歌と言う者なのか？こんな幸せな気分になれるとは」
「俺たちは今まで何をしてきたんだ（・・？」
今まで　醜い殺し合いを続けていた　両者は　それを忘れて歌と言うこの世界には無い
文化に聞き入っていた
そのよ　アキバッ子ＡＫＢクラブ全員によるミニコンサートが　オルフェの谷で行われ
人間族(まいかる)とオルフェックの平和条約が結ばれた
3千年も間戦いを続けてきた負の歴史に『歌』と言う『武器』が打ち勝ったのだ
〇オルフェ・ルックス　ホテル翌々日朝7時
「それでは三瓶さんお元気で」

「たかみなさんたちも　お気を付けて」
みんなは歌が戦いの歴史を変える力がある事を悟った、そして全銀河が　歌と言う武器で
手を握り会う日が近い事を感じていたのだった
「また来るからね」
と　みーたんは言った　その時は　もっと素晴らしい星になっているに違いない
「それではみなさん、またのお越しをお待ちしております」
巡業員たちに見送られて　アキバッ子たちは　アンドロメダ行きのバスに乗ったのだった。

???歌は宇宙を救う3（後書き）

民族戦争や領土問題など　実際の世の中を
変えるのは大変難しいと思います、ですが　私は
《歌が何かを変える力》を持っていると信じています
全ての世の中の人たちが『歌』と言うキーワードで　繋がって
武器や憎しみなどを捨て　手を取り合う、そんな日が来る事を願って
僕はこの物語を描きました。

？？？カイルと少女？（前書き）

マオンとカイルの別れです

???カイルと少女?

宇宙に愛の種をまくためにアキバッ子がアンドロメダに旅立った頃
マオンにも一つの別れが近づいていた。
○Z空間
「あれからどうしたの？」と私はさっそく
カイルに尋ねた
「俺はあのとき親父と共に死ぬはずだった、
だが再びあの声に呼ばれて気が付いたらここにいた」
「私の方は友好国パンギアの優れた政治力、
特に医療を研修するために参加しました」と
医師であるアリナィさんが意見を挿んだ
話しの内容ではどうやら彼等メッシルア人達は３０年後、土星の一
部に新しい王国を
建設中との事だった　皆それぞれ異なる時間から来たようであった
「これってどう言う事になってるの」
とパニくるサミーと私に
「このバスは時間も場所も関係ないでバッス」と
車掌さんは行った
その時窓の外では光る虫の集団が飛んでいた
「あれが有名な電子蛍でましゃね」と
やっさんがいった時
「ただいまご覧になってるのがシー・マイダーと言う電子蛍でバッス
集団で移動することから次元海賊なんて恐ろしい名前が付いてるで
バッスが」と
車掌さんは説明してくれた
「きれい　なる」「ほんとね」
それはとても美しい小さな海賊たちだった
○衛星　虹の川

私達は空間ハイヴェイに飛び込んでいた
でもバスの中では次元テレビで【怪盗まゆゆの宇宙冒険】と言うテレビ映画を
やっていたので全員それを見ていた
その時「３０分の休憩が終ったら次ぎはいよいよ異空間アスマフートでバッス
自然と科学が融合した独楽のような世界でバッス」
と車掌さんのアナウンスが流れバスが空間シール（停車場）に止まった
『キラ　キラッ』と星が流れ
私達は外を見た　それは虹の馬車に乗った花嫁がお共を連れての嫁入りだった
「なんとも、美しい　わけーもんはよいのォ」と牛蜘蛛族のおばあさんが呟いた
「行って見ようか?」とカイルが私を誘ってくれたので、サミーとナルーの二人も誘って
花嫁の行列を追った。
アスマフートはベーゴマのようになっていて
軸の前後に付いている細長い糸が衛星や雲（龍雲と言う）になっているらしい
その一つ虹の川に降り立った花嫁一行はそこで狐の顔をした男性と挙式をあげると言う
虹の川は高い崖の上のような所にあり
たくさんの虹が滝のように沸いてきて2人はその下で結婚式をあげた
「なるほど狐の嫁いりね」と感動したサミーが行ったらそこで下車した
牛蜘蛛族のお婆さんが
「どうやらあれはアスタヴィスと言う虹の精霊族の娘とアニューラッタと言う
宇宙狐族の王子との婚礼のようじゃ」

と語った
　でもナルーとカイルの2人は式その物より地球から
持ってきたたこ焼きを
「こりゃーうまい」「美味しい　なる」って夢中で食べていたんだ
けどさ
崖の下にはたくさんの世界があり
「あれは無数に存在すると言う多重空間じゃよ」と
おばあさんは説明すると
「それじゃーマオンちゃんまたいつかな」と
言ってほうき星に乗って去って行ったのだった
サミーは一足先にバスに戻った
2人きりとなった私達は妙に照れまくっていたが
　その時
『ザッ』と心地よい風が虹の川にふきわたった
最高にロマンチックなムードの中で
カイルが私の肩に手をまわして
「マオン　俺ずっと考えていた、これからのことを」
ときり出した
「あの世界へ帰るの？」と聞いたら
「いやあの世界はもう無い、それに俺も帰るつもりは無い」
「じゃーこれからどうする　なる」
と私に代わって服の中から顔を出した
ナルーが尋ねた　そしたらいつもとは違う
輝いた目で「あの世界のどこかへ降ろしてもらって暮らすつもりだ、
どんなところでも生きて根付いてやる
それが〔みなし子〕だった俺を育ててくれた
親父への恩返しだと思う」
と輝く目でそう答えた
私達は無言で抱きあい、口づけを交わした
ナルーは「見てない　なる」と慌てて目をおさえたのだった

カイルは通りかかったほうき星に掴まり
「またなマオン、ナルーそいつの子守を頼んだぞ」と
叫ぶと何処かの世界で適当に降りたようだった
バスに乗っていたサミーが
「おーいもうすぐ出発するよぉ」と告げた
○帝都　大正１２年９月１日
カイルが降り立った世界はまるで震災後の
東京を想わせるような世界だった
「この世界には一体何が起こっているんだ」
その時銀色のペンダントを付けた６才くらいの女の子が瓦礫の中を
泣きながら歩いてきた
カイルは「君なんでないているんだ」と尋ねた
そこから先の出来事は私と関わりがあったの
「父ちゃんも母ちゃんも弟も皆死んじゃった」
「どうして」
「あのね、大きな地震が起こって
それからあっという間に火事も起こって、
あたいはお母ちゃんが守ってくれたので
たすかったけど・・あたい一人になっちゃった」
「泣かないで、よかったらこれから
お兄ちゃんと暮らすかい」
「うん」
「俺はカイルこの世界の事知らないので宜しくね」
「私は弥生、如月弥生って言うの」
その時
「おーい、そんなところにいると危ないぞ」
と軍人さんの叫び声が遠くから聞こえた
でも「これからは俺がいつも側にいてやるから」と言うカイルの言
葉に励まされた
弥生と言うその少女は笑顔を取り戻したのだ

その後の2人の行方は誰も知らないのだと言う。

？？？カイルと少女？（後書き）

アスマフートについたサミーとマオンたちは医療の先進星パンギアに向かった。

???アスマ・スイート星（前書き）

ベーゴマの様な惑星アスマ・スイートは昔は植物惑星であった。

???アスマ・スイート星

〇アスマ・スイート星
同サマーランスホテル前
「長らくのご乗車ありがとうでバッス
またのご利用をお待ちしてるバッス」
と言うと車掌さんは全員をバスから降ろした
バスはサマーランスホテルの格納庫に収容され
バックスさんは黒フードの人とホテルに入っていった
「あちらにいるのがこの園でただ一匹の恐竜である」
とカマキリの添乗員が説明した
「そのわりにはしずかねぇ寝てるのかな」と
アリナィさんが言った
「そのとおり、この恐竜は
１０年寝て３日起きるのである」と定員さんは説明した
「気の長い話でましゃ」
やっさんはぼそっと呟くと娘とお目当てのデウスト山脈と言う
標高３千メートルの山に登山に出かけていった
アリナイさんは別の用があると言うので
私　ナルー　サミーの３人は　後で合流することにして
『死神シアター』と言うあんまりうれしくない映画館で
アキバッ子たちが主演し全宇宙の映画館で放映させている
『あっちゃんの母を訪ねて３千万光年』と言う映画を見ていた
それは『タリア星』から『アルチノ』星に『マッチ売りの出稼ぎ』
に行った
母『コクショー』を尋ねて幼い猫の少女あっちゃんが３千万光年の
旅をすると言う物語だった
途中仔豚の『ゆうこ』山羊の『たかみな』と出会い『仔豚のマーチ』
と言う

歌や『腹芸』をしながら旅を続けるのだが、その異常な人気に
各星の歌手・アイドル達は『自分たちの地位を脅かされる』のではないかと感じた人達から
『嫉妬』『ヤッカミ』『サゲスミ』『意地悪』『変な噂』などの仕打ちを受けるが
それを持ち前の元気で乗り越えた猫のあっちゃんが
無事母と再会すると言う感動の物語であった
エンディングテーマーの『時空を超えた愛』と言うバラードが素晴らしかった
のだがナル―達は『ヤッタラ・シッタラ・あっちゃんホーイ』と言う掛け声が
気に入ったようだった。
アスマ・スイート星は元々植物惑星であったが　別の星から来た開拓者たちが
アルゼンチン　中国　など様々な星(くに)の文化を取り入れた結果　現在の姿になったらしい
〇レストラン『マリ・バロン』
私たちは見慣れた日本風食堂『マリ・バロン』に入った
「いらっしゃいませ」
牛の顔をしたメナと女性が　萌え風なメイド姿でやってきた
「へーえ秋葉原風ファッションなるね」
「私はこの『トマト・フープ』って言う料理に興味あるんだけどサミーはどうする？」
「わたしはどうせならアスマ・スイート星の名物が良いと思うけどな」
と言うサミーの一言で全員アスマ・スイート星の名物《ネズミ像》の姿焼き注文した
「お待ちしました萌え」
さきほどの定員さんと他の巡業員さん達が運んできたのはマンモスほどもある

大きな料理3つだった
「ウゲッツ、凄い量なる」
『いくらなんでもこんなに食べられないわよーォ』
そのあまりの大きさに私たちは絶叫した
その晩合流したアリナィさんは
「パンゲアで最先端の医療を学びたい」
と言うのでサミーに同行する形で私もに行く事にしたのだった。

???アスマ・スイート星（後書き）

かつてパンゲア星は　地球と同じく腐敗政治が進んでいたのだと言う
それをどうやって　立て直したのか
『マオンはウサギの市長に鋭い質問をぶつける。

???　ジャーナリスト・マオン（前書き）

特派員マオンと市長ママリンの
対談が実現

???　ジャーナリスト・マオン

マオン達はルー・スターと言うタクシーの中で
「パンギアがかつて悪人達の無法地帯」だったこと
「現在は医療、法律などの分野でめざましい発展を遂げた」事など
を聞かされた
「新しい国を作るに当たってアリカ王女はぜひその国を参考にしたい
と複臣の私に命じられました」
アリナィさんはそう語った。
○首都デ・ギア
タクシーを降りたマオン達3人はママリンと言う
ウサギの市長にデ・ギアホテルの2階の応接室に通された
そこではやはりジャーナリストの両親の血が騒いだのか?
首都デ・ギアの市長（事実上の大統領）のママリンさんに色々な質
問をぶつけて見た
＊対談（一部）
マオン「見たところ動物が喋ると言う一点を除けば　この星は私達
の地球と
あまり代わらないようですけど、政治の仕組みは」
市長「このパンギアには政治家はいないのですその代わりにこのデ・
ギアを初め全国
６５の市町村に５０人以上２００人以下の評議員と呼ばれる人たち
がいるのですよ
（数は地域の規模による）
彼等は一般の国民から投票で選ばれそのトップが議員達の投票によ
って
市長や村長になるのです、皆それぞれいろんな問題をその地域独自に
解決する権限が与えられています　もちろん予算も各地域で平等に
与えられ

一般国民である彼等は生活も平等なので特別な金持ちもいない　だから税金も自分達が
祓ったわけだから無用な物には使わないのです
また彼等は複数のグループに分けれれていてグループ事に成績（ランク）を競うので
皆高い質のランクを目指して医療や介護、教育などと言った分野に税を投入し
　その使い方にアイデアを出し合っていると言う訳です」
マオン「なるほどランキングですか私の国でもそう言うのがあります
（アリコンと言う会社が行っていて最近では2～3年前まで大人気だった
バーニングの娘達が〔売れない歌手部門〕で殿堂入りをはたした、たしか年末の
紅白カラオケ歌合戦にも売れない歌手粋で出場するらしい
アキバっ子達を意識しだしてからは特に売れないオーラが出まくっているらしく
　既にその部門の常連の噂も？）
マオン「では犯罪なんかは特にこの国は昔テロと
犯罪があふれていたとお聞きしましたが」
市長「確かに　この町は以前テロと犯罪の巣窟でした　代々の統治者は皆
彼等の話しも聞かずにただ武力で弾圧しようとしました
しかし私は武力では無く、対話こそが唯一の解決策だと説いたのです　最初は中々うまくいきませんでした　しかしかれらテロリストと同様
こちらも真剣だと言うことが彼等にも分かってからは　テロは少しずつ減少していきました
今ではパンギアには時効も無いが犯罪もあまり無いのです」
マオン「何処も同じと言う訳ですねハハハ、では次に公共工事についてですが

私達の国では恥ずかしながらハコモノと呼ばれる無駄な施設がたくさん
あるのですが、この国ではどうなっているのですか？」
市長「実は私達の国にも代議士やあなた方の世界で言う官僚と呼ばれる人たちがいた昔に作った
無用な施設が何十万とあったのです　このままではこの国は赤字から抜け出せない
と感じた私と私の仲間達の最初の仕事は　彼等官僚や代議士たちに代わるシステムの構築と
赤字を放出するだけの施設の有効活用にありました」
マオン「それはうまくいったのですか？」
市長「以前よりかなり改善出来ましたが、まだまだ完全にはでも評議員には任期が無く、選ばれれば何度でもやれるますので
長い時間をかけて取り組んで行く覚悟です」
マオン「あのー、長く評議員に付くと癒着とか無いんですか？」
市長「私達は国民の代行と言う位置づけであって特権などは一切ありません　評議員バッチ等より警察のほうがよっぽどえらいのですよ」
マオン「なるほど良く分かりました」
以上はママリン市長と私、特派員マオンとの会談の一部ですがそのほかにも少子化、
難民支援など話し合ったのだがいずれも〔税を使い放題〕の国に生まれた私と
サミーには頭の痛い問題だったので
私は「是非、見習いたいと思います」とだけ答え会談を終えたのだった。

???　ジャーナリスト・マオン（後書き）

国の抱える問題はそう簡単にはいかないと思いますが
少なくとも《前進》する努力が大切だと思う
しかし〇主党政権になってこの２年間は残念ながら
《あきらかに後退》したと思う。

???マオンの正体（前書き）

医療の研修の為パンギアに残った　サミー達と別れたマオンは
サマーランスホテルの一室で眠った
その時マオンの心に誰かが話しかけてきた
今　マオンを巡る　全ての謎が開かされる？

???マオンの正体

その後アリナィさんや医療を研修したいと言う
サミーとデ・ギアホテルで別れた
私とナルーは再びルースタに乗って
アスマフートに帰った　予定通りサマーランスホテルに泊まった私達を
カマキリの巡業員（カナキルと言うらしい）が
「朝倉マオンさまですね
ようこそ当ホテルにいらっしゃいましたお待ちしておりました」
と　マニュアルどおりの挨拶出迎えてくれた
手紙にはカードが入っていたのでそれを見せ
手続きを済ませた私は『ＡＫＢ４８号室』に案内された
　しばらくすると口が４つもある奇妙なおじいさんが
「夕食の支度が出来たで」と料理を運んで来た
それはこの地方（と言うか世界）で採れるバーバミオンと言うキノコ料理だった
私達は「モーモー丹」と言う温泉で、美味しく戴いた後旅の疲れからか
おじいさんが敷いてくれた雲ノレンと言う布団で眠った
その時
『良く来たマオン、今こそ矛盾への鍵を開くのだ』
と言う声が聞こえたようだったが、私は気にせずに眠りの中に落ちて行ったのだった。
○夢空間・矛盾
そこはまるで雲の中のようだった一面には霧が漂っていた
「ここは何処だろう?」
わたしはその中を進んで行った
すると目の前には　赤いドアがあったので

私はそのノブを廻し中に入ろうとした　だけど「アッ開かない」と困って入ると
「この中に入るには矛盾の鍵がいる」と声がした
「そういえばそんなこと言っていたような」と言ってポケットを探っていたら何故か鍵が入っていたのでその鍵で扉を開いた
「よう来られたカイザークの子（子孫）マオンよ」
と彼は語った
「その声はゼノン？ここは何処？」
「ここは夢空間にある始(し)の住居〔矛盾〕そなたには真実を知ってもらうためにここへ来てもらった」
それから始と名のった彼の長い物語ははじまった
『昔　総神(そうし)と言う一族がいた　おまえ達人間も神々達さえまだ存在しない
遥かなる遠い昔のことじゃ、彼等は『アナン』と言う楽園を作っただがやがて一つの過ちによりその世界は滅亡した
総神たちは再び自分達の手でアナンを築く為、それに適した場所を求めて、
母船アスダルドで旅を続けた　だが彼等の意見はバラバラであったのだ
故にわたしはアナンの再建を諦め、実験動物である人間たちに委ねることにした
そしてそのせかいの中心に作ったのが《ＭＡＯ》と言う実験世界だった
総神一族の中からはカイザーク・レオと言う若者がその管理にあたり
敦子姫(あつひめのみこと)がその補佐として残った　彼等一族は言ったこと語る事を現象化する力を持っていた、カイザークは人間たちに自分達が生まれた理由を
「神が創造した」と伝えた、

元々は母船の名だったのだが彼は人々にアスダルド神話として作り伝えた
彼が神話を話した時点でそれが現象化しオシメ（オルディナス）が生まれた
他の神々たちもその時誕生したのじゃ　敦子姫（あつひめのみこと）は自分たちが作った人間（だんせい）との間にたくさんの子孫を残した　子孫は皆総神の血を告ぐと言う訳ではない
一世代後だったり同じ兄弟でも一人だけだったりする、そうマオンおまえは我が
総神一族の血（力）を持って生まれた最後の一人なのじゃ』
始はそう話し終えると私（まおん）の頭の中に前世紀以前からのこの宇宙のイメージを伝えた
壮大な知識がマオンの頭の中に『バババーッ』と入ってきた
その時マオンは全てを知った　この世界のこと　あの世と呼ばれる世界の真相
夢とはＵＦＯとは、生きる理由とは　悲しみとは　怒りとは？
マオンはいつしか涙が溢れていた
『マオン、後は全ておまえに託してわしは眠る事にする　自分の成すべき使命を果せ
さらばだ我が子（子孫）よ』
その時『ピッカー』と言う眩いばかりの閃光が起こった　瞬間私は雲ノレンの中で目を覚ました
「いっ今のは」と言った私にナルーが
「総神（そうし）さまに会えた　なるか」
と笑顔で言ったので　私はナルーを抱いて
「うん会えたみたい」と答えたのだった

???マオンの正体（後書き）

総神（そうし）一族の一人、麗しき戦士と呼ばれた
敦子姫（あつひめのみこと）

はたくさんの子孫を残した　そのうちの一人が
総神（そうし）の血（ちから）を受け継いで生まれてきた
マオンなのであった。

？？？《マオン》（前書き）

天樹園ツアーを終えたマオン達は
地球に帰ってきた。

？？？《マオン》

『旅の終わり？』
○渋谷自宅前
私達は出発した時間の3分後に戻ってきた
ヤッさん親子は
「では、またいつかあうでましゃ」
と言い　アリナィさんは
「今度はぜひ私が新しい王国に案内します」
と手を振った　私達は「元気で」
「またねー」「さよなら　なる」
と　それぞれバスを見送った
こうして私達3人の奇妙な旅は終わりを遂げたのだった
なお　旅のきっかけとなったアメリカのテロは
シュワ・トラ＝ミネーターと言う、カリフォル二ア州知事の説得でわずかな
死傷者のみで5日後に解決したらしい、
リーダーである西洋人のバーバスト・ミカルは首領ではなく、真の首謀者と見らねる
『．Ｅ・沢しり』なる　日本人（噂では女優らしい）は（別に）と答え、逃亡したらしい　ヤレヤレ
○エピローグ２００×年
様々な冒険があった1年でありましたが
１２月も３１日を向え、私は　ナルーも加えた家族４人でＩＰＣテレビ恒例の
紅白カラオケ歌合戦を見ていた
バーニング・ブロスは？ＢＸ（バーニングブロス・マックス）と改名し
復活出場を図ったが　結局選ばれず、代わりに　希望の唄で出場した
盲目のシンガー七海のバックでダンサーとして　何とか出演が決ま

ったようだ
かつての国民的歌手の面目を失ったのか　その後彼女達の行方は依然不明だと言う
（週刊誌では事故とも重要な契約違反？があったとも云われて入るがファン達は
「逃げたんじゃない？」とか「全員首になったんちゃう？」
とか以外と冷静だったようだ
その代わりにトップアイドルに躍り出たアキバっ子達が　アンドルメダホールから
衛星中継で　銀河グランプリーに輝いた「戦え妖精騎士・ラーマォン」の主題歌
〔マザープラネット・豊（はは）なる大地～地球〕を歌った
世界環境大使に選ばれた　リーダーの高橋トマトちゃん（本名みなみ）がとってもかわいかった
M&Yと言うオムツでパンクを踊るユニットが『へそ曲がりロックンロール』
と言う曲での出場を果たした
他には〔うさぴょんダンス〕と言う久々の大ヒットでゆっかさんの友人でもある
〔柏葉芳江〕が3度目の出場を果たしたの
不安の内に始った新政権も厳しい国民の監視の元で、ユックリとではあるが
着実に前進しているようだ（希望だけど？）
思えば夏休み前から始まった私の不思議な冒険は予想していた以上の結末をむかえた　だけど　≪いままではただ漠然と生きていた私はこれからは何事にも一生懸命に取り組めそうな気がする。
将来の目標だって今なら迷わず「特派員」だって胸を張ってそう言える
いろんな人と出会い彼等と接する仕事こそが　この世界の監視を任された私の使命だと

思えるから　私がそれを決心した時　「ありがとう、マオン時を旅する者よ」と
言う声を聞いたような気がして振り返った　あれはいつかの老人の声だったと思うけど
何も聞こえないようだったので（勘違いかなー）と一人呟いていた
どうやら私の旅はまだまだ続くみたい
ではまた会うときまで　　バイバイ

？？？《マオン》（後書き）

次回からは　新マオン時空を駆ける少女伝説が、始まります。

?新マオン時空を駆ける少女伝説（前書き）

かつて宇宙では2つの戦いがあった
1つは宇宙の滅亡を願う暗黒の天使シスフィーナ
そしてもう一つは宇宙の平和を願う精霊騎士ラーマオン

?新マオン時空を駆ける少女伝説

プロローグ
〇惑星デルクラル上空
遥かなる昔この宇宙で2つの戦いがあった
一方はこの世界の滅亡を願う漆黒の天使シス・フィーナ
もう一方は平和を願う聖霊騎士ラーマオン
その戦いは周りの星々を巻き込みながら、数千年も続いた
シス・フィーナは蝙蝠の翼と9つの首を持つ暗黒獣パェトーンに変化し
〔破滅の盾〕の力で全ての世界を消滅させようとした
「ふふふふ、ラーマオンよ、これで最後だ」
そう言うと9つの口全てから
デス・ファイアー（死の炎）を吐いた
ラーマオンはその最後の力で〔エンドラの矢〕を
『ズバーン』っと、放った
矢は7色に輝き9つの首全部を撃ち抜いた
「ウギャー」と悲鳴を上げながら9つの首は地上へと落下していった。
『見事だ　ラーマオン、だが聞くが良い
この世界に欲望がある限りわたしは再び蘇るであろう』そう言い残して
ラーマオンも力尽きて倒れたのだが、その体から青い鷹が飛び去っていった
そして地上は巨大な光に包まれたと言う
〇　渋谷マオンの家
（1）マオン
「まお、そろそろ出かけるけどまだ終んないの？」
と母親がイライラしながら玄関の前で待っていた

「ゆっかさん、後ちょっとだからもう少し
待ってて」
と声をかけて大慌てで支度をはじめたの
みなさん初めまして　私は朝倉マオン聖魔穏学園高等部に通うまも
なく
１８歳を迎える女の子です　そこにいる変なのが、ナルーと言う親
友の金魚なの
何？金魚が友達なのがおかしいっですって　そりゃまあね、それに
はいろいろと事情が
ありまして　えっどんな事情かって？それはね実はー
「まおさっきから誰と話してんの？時間に遅れるから早くしなさい」
とまたゆっかさんのカミナリが落ちた
私は舌を『ペロッ』と出して
「うわっ、ヤバイヤバイ　と言うことで、その話はまた今度ねー」
と言って水玉模様のワンピースに着替えると
「おまたせしました」
と言って玄関に出たの
「遅いっどうやったら着替えに２時間もかかるのよ
まったく」
「マオンはいつもノンビリだなる」
２人は待ちくたびれてカンカンのようだったが
私は「まいっか」って気にしていなかった
車に乗り込むと
「みんな忘れ物無いわね？、では出発します」
と言ってゆっかさんは車を発進させたのだったぁ
○お台場江東区
同ホテルＭＥＺＡ
（２）パーティー
「なるほど、いろんな記事が載ってるわね」
と私は感心していた

実は今日はゆっかさんこと私の母朝倉真由香の親友、巨乳聖子と言う人が１９９９年に設立した
有限会社嘘八百の設立２０周年を祝ったパーティなのです
ゆっかさんはいろんな人に挨拶していたが
私は幼稚園からの腐れ縁のサミーこと野田麻美と週刊ブライディールと言う
ゴシップ雑誌の記事を見ていた
そこには１９７０年代に起こった８億円事件にはじまりイギリスのアニータ妃の結婚や謎の事故死、はたまた加町聖子代議士の巨乳疑惑から
１９９０年代後半に活躍したアイドルグループ　バーニング・マックスの謎の失踪事件
（当時はアキバっ子にＣＤ対決でボロ負けして解散したとも云われていた）
はたまたグラビアタレント胸梨芳恵の銀座での万引や
深夜のストリッパー事件等が書かれてあった
もっとも最近は改革政党ブラックラビッツの党首坂当法代容疑者の暴力団との黒い交際や
その後に起こった与党卍党の歴史的大敗と　加町聖子率いる野党アイドル党の大躍進等の
記事が中心だったのだが。
会場は約2千人位の出席者で溢れかえっていた
私達はその中からゆっかさんを見つけてると
「あのーゆっかさん」と声をかけた
ゆっかさんは誰かと親しそうに話していた
「あらっ誰かと思ったらマオンちゃんじゃない？」と
ワイングラスを持って私に声をかけて来た人物こそ
嘘八百の会長でアメリカでウーマン・シスターズと言う大企業やベックス・ネットと言う音楽会社、それに自由と冒険をうたった夢の王国

〔バルバルランド〕等などを次々と成功させた、実業家の巨乳聖子さんだった
（最近は秋葉原を拠点とした女性アイドルグループアキバっ子の運営プロダクションとも業務提携したらしい）
聖子さんは「もう半年ぶりになるかな？大きくなったじゃん」と不良っぽくそう言ったゆっかさんは
「デカちゃん（あだ名）ところの佐亜左（さあさ）ちゃんに比べたらまだまだ子供で、勉強嫌いで困っているのよ」と答えたので
私は『ほっといてよ』と心の中で呟いていた

?.謎の遺体（前書き）

グランド・セイコ号に乗り込む途中
ゆっかさん達は　事故に遭遇する。

?謎の遺体

（3）赤毛の美女
その後、主催者である彼女は真紅のドレスにマントを羽織った　ど派手な
衣装に着替え　2人の男性を従えて現れた、
周りの人たちは
「あれが噂の巨乳聖子よ」とか
「相変らず　綺麗ねーえ」等の声が聞こえた
パーティを取り仕切っている
秘書の胸梨芳恵さんがマイクを渡そうとして
落っことしてしまった
「相変らずトロイわねえド・ペチャさん?」
と聖子はたちまち不機嫌になった
それと言うのも昔二人は芸能界に　ほぼ同時期にデビューした間柄だった
しかしそのころ巨乳で知られていた芳恵は
「あら聖子ちゃんの胸とっても可愛いわ」と
褒めて上げたことがあった　もちろん悪議は無いのだが、当時胸が小さかった彼女はそれを
悪意と受け取ったようだった
それから時は流れ二人の胸は逆転していった
それ以来　ド・ペチャと呼ばれ　数々の屈辱を受けているらしい（お気の毒に）
「えーみなさま　本日は嘘八百の設立20周年の
記念パーティーにようこそいらっしゃいました、
日ごろの疲れを忘れて存分に
お楽しみください、つきましては　この会場にいらっしゃった人全員を

日本海沖に作った自由の島バルバル・シーにご招待いたします」
と　聖子氏は挨拶した
たちまち会場は「ウワーっ」と大歓声が上がり
思わず私も「ヤッター」ってナルーと2人して」
「ばんざーい」っと　喜んだのだった。
（4）謎の遺体
○東京湾
その数日後私達はゆっかさんの車で豪華客船
〔グランドセイコー号〕が待つ東京湾に向った。
でもそこでは何故かたくさんの人だかりが出来ていた
「この人たちは皆何やってるなるか?」
とナルーが質問したので
ゆっかさんは「どれどれ」と言って
人ごみを書き分けて覗き込もうとした
そのとき警察?らしい人が
「だめだ関係者以外は入っちゃーいかん」と制止したの
ゆっかさんは「・桜井警部?　わたし　わたし?真由香、えーっと
如月・真由香」と
旧姓をその刑事に示した
「んっ、如月　あ～ぁゆっかか大きくなってあの日以来だな?」
と懐かしそうに大声で警部は話した。
実は特派員だったゆっかさんの父如月重太郎
と警部は古い友人であったのだ
「最後にゆっかのおとうさんにあったのは　もう25年も前になる
かなあ、僕はあれから
アメリカに渡り、CIAの一員として　数々の犯罪者と戦ってきた
でも最近無性に故郷の日本が恋しくなってな　で　今は　立花のお
やっさんがいる
この港署で世話になっていると言う訳さ」
「それで警察の見解は、他殺それとも事故?」

と、根っからの記者であるゆっかさんは、よもやま話よりも取材が
一番であったの
「さあな、何者かに引き込まれそうになったのを
脱出したようだけど　力尽きて結局」
「ではやはり事故？」
「いや違うな・・見ろ」
と言って刑事は死体の方向に指を指した
そこには手足が引き裂かれ衣服がズタズタに
なった漁師らしき男性の死体があった
私とナルーは思わず「チモチわる～」っと目を伏せた
さしもの　ゆっかさんも「オェーっ」と吐いた
その遺体はどうみても人間業とは思えなかったのです。
そのとき若い刑事が２人の会話に割って入って
「あの桜井警部　身元が判明しました
九川（みつくに）三国と言って　どうやら
ヘチマ村の末裔のようです」と伝えた
「なにっヘチマ村だって？」と警部が大声を上げた
「たしか３００年前に突然光に包まれ
消えたと言う村よね？」
と、ゆかっさんも驚いたようだった

?おばあちゃんの死（前書き）

船に乗り込んだ私は　思い出したくなかった事を
思い浮かべていた。

?おばあちゃんの死

（５）パルパル湖に出発！
今から４０年以上前に〔夢と自由の王国〕を目指してイタリア人〔ウェールタ・カイザーク＝ラオ〕がアメリカに建設したのがバルバルランドだった
日本では２０年ほど前に実業家であった巨乳聖子が〔夢の島〕としてオープンさせ
話題になったがしかし最近出来たばかりのシーの方には行った事がなかったのだ
だから今回シーの方にもいけると聞いて　あのシーン（バンザイ）と言う訳なのです
そのとき船から軽快な音楽が流れてきた
「まおー　そろそろ船が出発するから乗り込むわよ」
ゆっかさんは「じゃー休日楽しんできますので、何か分かったら連絡くださいね」
と挨拶すると私達はその場を後にした
桜井と言う刑事は「ゆっか、今日は休日じゃーなかったっけ?事件のことは我々プロに任せて
楽しんできな」と見送っていたのだった
グランドセイコー号は大西洋横断を目指して技師であり冒険家だった
ルーシーカイダーク（カイザーク１７世の従兄弟）
が１９２０年に山賊社と共同開発した
当時としては最新鋭の豪華客船である
全長三百一メートル、総重量が４６，４トンで　１等室　２等室　３等室
合わせて約千人の乗客たちを乗せて２５ノットで走ると云われている
私達はアキバナイト達が歌うバルバルシーの

イメージソング〔Ｍａｙｂｅ☆夢冒険〕
の音楽を聞きながら乗船したのでした。
（６）ナルーとの出会い
○１等室（特等室）
船は出発まで４０分位かかるらしいので私達は親友と言うことで聖
子さんが用意してくれた
室内にある特等室で先に待っていた　サミーと昨夜録画しておいた
劇場で行なわれているアキバナイトのコンサートの
ＤＶＤを　持ってきた　ら・まおんで見ていたの
あっ、ら・まおんと言うのはね千葉千一さんが創設したＪｐＣ（ジ
ャパン・パーソナル
アクション・コンピューター）社が発売している　多機能型パソコン
〔ら・まおん〕シリーズのことなの２～３年おきに新しいＯＳが出
るんだけど
どっかのライバル社とは違って２０年以上前に出た初期の０１でも
シリーズであるなら永久に無料で　アップデートが受けられるのだ
（なんて良心的なの？ただし機能はもちろん限定されるけどさ）
ちなみに私は最新の機種ＺＰなのだ、ＤＶＤを見ながら私は
「あの日もこんな感じだったなあ」と
ナルーとの出会いを思い出していた
回想
（７）おばあちゃんの死
マオン７才の時
私は１９９２年の１２月２４に渋谷の町で生まれたのです
でもゆっかさんはその頃雑誌社を立ち上げた
ばかりで忙しかったし父親であるヒーローさんも
特派員記者として滅多に　日本にはいなかった　だけどその代わり
に同居していた
ゆっかさんの母、弥生が親代わりに私の面倒を見てくれていたのだ
「マオンはいつかこの世界を救うんだよ？」

と言うのがおばあちゃんの口癖だった
私は良く分からなかったけど　いっつも
「うんちぇかいをちゅくうの」と頷いていた
大好きだったおばあちゃん、私の誇りだったおばあちゃん
でも・・亡くなったんだよね
あれは忘れもしない7歳の誕生日のよるだった
学校から戻った私は台所で倒れている
おばあちゃんを発見した
老害だった、今朝まであんなに元気だったのに
親戚中が集まったお葬式で私は泣き明かしたのだった
それからしばらく自分の部屋に閉じこもった
おばあちゃんがいなくなったことが信じられなくて、信じたくなくてさ
ゆっかさんもヒーローさんも一生懸命
元気付けようとしてくれたけど
私はヒーローさんのパソコンを見様見真似で開くと
死って何だろう　どうやったら
天国に　おばあちゃんとこに　いけるのだろう
ってキーワードをやたら打ち込んでいた
そのとき「ダメなる　そんなこと考えちゃーいけないなる」
っとパソコンの仮想空間を通って金魚が飛び出した
「あなた　だあれ、金魚のくせに　何故喋れるの？」と尋ねた
するとその金魚は「ハーイ僕はナルーと言って
金魚族の妖精　なる、よろしくたのむなる」と告げた
でも私は「質問に答えて何故飛べるの？」
としつこく聞いた
「金魚が空飛ぶおかしくない　なるこの世界はちがう　なるか」
「違うもん　金魚は飛ばないもん、おばあちゃんがそう言ってたもん」

「そのおばあちゃんの魂に頼まれて　マオンをはげましに来たなる
いつまでもそんなんじゃーおばあちゃんだって
安心して天国にいけない　なるよ」とやさしく語った
その時から私とナルーの奇妙な友情が
はじまったのだった。

？　嵐の前の静けさ（前書き）

マオン達は船上でミュージカルを楽しんでいたのだが・・・

？　嵐の前の静けさ

「まおー、ナル、あさみちゃーん、もうすぐミュージカルがはじまるからいらっしゃい」
とゆっかさんの呼ぶ声が聞こえたので
私達は「あーい、今行くよ」と答えた
それはローマからきた劇団〔ヴィーナ〕のＳＦ歌劇〔戦え巨大戦士まゆゆ〕だった
（８）
主役を演じるのは劇団アキバッ子の高橋トマトと渡辺麻友２人だった。
第１党室の中央にある大きな劇場に現れた
犬猫船長が「皆さんようこそいらっしゃったデ・もる、
本日は劇団ヴィーナの傑作劇
〔戦え巨大戦士まゆゆ〕を存分にご覧くださいデ・もる」
と挨拶した
私とサミーは「わあー楽しみだー」とはしゃいだのだった。
内容は《２００５年　ある国の水爆実験によって目覚めた
怪獣ゴゴラとそれを退治しようとする地球防衛軍【ＡＫＢ・Ｚフォーティー】
の活躍を描くもので　後半にはゲソッ子星人ら宇宙連合による
地球征服計画も発覚する、彼等は地球を汚した地球人たちを処刑し
代わりにユートピアを建設しようと画策する首相である刃渡山は「トラスト・ミー」
と彼らの説得を試みるがコロコロ代わる発言に号を煮やし遂に計画が実行されるのである
一方かつては人気アイドルだったが　あまりの可愛さに　他のアイドル《コクショー》から嫉妬を受け
その妨害で　ＣＤがまったく売れずとうとう所属事務所を解雇され

たタレント麻友まゆゆ
はゲソッ子星人によって巨大化させられるのだが彼らを裏切りった
　あやとり星人と共に
渡り廊下・ビームやまゆゆ拳などを多様してゴゴラやゲソッコ星人
達と戦うのである
しかし巨大化して地球に住めなくなった　まゆゆはや家族に別れを
告げ
に泣く泣く故郷、地球を離れるの》と言うストーリーだった。
「なかなか面白かったなるね」
ほんとにね」
こうして船内の公演は大盛況の内に終った
フデーロ役のみなみさん、ロズマリナ役の
ともみさんら全員による
カーテンコールがまた素晴らしかったの
「ブラボー」「素晴らしい」「感動したー」
等の掛け声と『パチパチパチ』と
割れんばかりの拍手が巻き起こった
船内のミュージカルは大成功の内に終った
でもそのとき何処からとも無く
『ララーラララーラー』と言う歌声が
聞こえてきたであった。
（9）魔女の誘い
「何よ、この声は？」
「美しい声　なるね」
と言っている間に船はコントロールを
失い『ドドッ』と大きく揺れたので
その衝撃で乗客たちは
左右に飛ばされた
『キャー』『助けてー』
『アレーなる』「まお大丈夫」

私達はゆっかさんと四人で隅の方で
抱き合っていた
その頃もしもの時に備えて
船内に待機しているマリンレンジャー
（プロの救助隊）さんたちが
「どうか皆さん落ち着いて、出口の脱出用
ポットに向ってください」
と丁寧な言葉でみんなを誘導していた
あちこちからは何かの爆発音と
それを知らせるブザーが激しく鳴っていた
一方船長室では船員達が
「な何故だ、コントロール不能だ
あの声に引き寄せられていく」
「じゃーどうすればいいんです船長」
「通信も不能ではどうしようもできんよ、
お手上げデ・もる」
と完全にパニックにおちいっていたのでありました。

？　嵐の前の静けさ（後書き）

ミュージカルは比較的好評だった　しかし　船は突然何かの大きな力によって転覆する。

?時空を超えた村（前書き）

マオンは何故か、時空の中に閉じ込められた　村に移動していた。

?時空を超えた村

（１０）命がけの脱出
『ドバーン、ズバーン』
コントロールを失った船体は大きく揺れ完全にパニクった　観客たちは
「イヤぁー」「たすけて～」
と口々に叫んでいた
ら・まおん（ＰＣ）を抱えた私はナルーに
「あんた魔法使えるんなら　この船ごとどっかにテレポートしちゃいなさいよ」
と命じたのだけど
「・・無理なる　僕の魔法じゃーせいぜいマオン一人が精一杯なる」
っと抗議したナルーだったが
「ドバーン」（再び四方に飛ばされる４人）
「そんなこと言っている場合じゃーないでしょうがー
とっとと　やりなさい」
と命じると　渋々「やっぱり皆は無理なる　でも４人なら何とかなるかも　なる？」
と言ったので　サミーが
「じゃーとりあえず手　繋いで　皆で祈ろう」
と言う訳で私達はナルーを中心に手を繋いで
祈った「神様どうかお救いください」
って　その祈りを受けたナルーは　精一杯の力で「ナールー」と叫んだ
その直後船は真っ二つに割れ、その一つは海底に没したのだった。
２キロほど離れた小島にテレポートした
３人は寸での所で難を逃れた

力を使いすぎて白くなったナルーは
「ハラホレハレ　ナルー」と
グッタリしていたのだけどサミーが
「ありがとナルーちゃん」と
お礼のキッスをするとかすかに
喜んでいるように見えた
だけどそのうちゆっかさんが辺りを見回しながら
「まっ、まおがいない？皆ここにいるのに
どうしてー」と叫ぶとケイタイで《ら・まおん》に何度もアクセス
を試みたようだが
音信は不通になっていた
「いったいどうして・・」
と呟き気を失いかけたゆっかさんを
慌ててサミーが抱えたのだった。
これは後で知ったのだけどこの事故で生き残ったのは
わずか２０人ほどだったらしいのだ
（１１）時空を越えた村
夢
そのとき私は真っ白な空間にいた
「ここは何処？」
「ここは無空間にある始の住居じゃ」
「始って何？」
「総神一族の長の事じゃ」
「総神一族って？」
「いずれ時が来れば分かる」
○ヘチマ村（バラランング島付近にある）
宝永６年（１７０９）
「うーん、なんだか変な夢見ていたような」
と言って私は目を覚ました
そこは時代劇なんかで見かける漁師の家らしかった

「気が付いたか、オタンコナス」
と声がしたので振り向いたらそこには
１０歳くらいのちょんまげをした女の子がいた
「あのーお嬢ちゃんが助けてくれたのと尋ねたら　その子は
「おいらは海琉と言って　これでも立派な男だぜ
オタンコナス」と言ったので
「それは失礼しました、でもオタンコナスはひどいじゃない」
「ごめんごめん親父の口癖だったもんで」
私たちは2人して笑った
その晩は親代わりのベンダイさんが
この村に伝わるナマコ汁を作ってくれたので
わたしはそれを
『ウゲッ』っと言いながらも美味しく？
いただきながら
「あのここは何処ですか？
見たところ時代劇みたいだけどさ」
と尋ねたら
「ここは二イガタって言う国にあるヘチマ村
って言うちっちゃいけど平和な村さ、都じゃー
犬公方が死んだとかなんとかさわいでるけどさ」と
少年は答えた
私は「海琉くん、助けてくれてありがとうね」
と改めてお礼を言ったら
「いやオタンコナスを見つけたのは俺じゃないよ？」
と少年は言った
「では誰が私を」
と質問したら　海琉は「ついてきな」
と浜辺に誘った
そして『ピーピュー』
と口笛を鳴らし「ママルー？」

と呼んだ
海の向こうから『ダッバーン』と波を立てながら
桃色のクジラが
「カイルー」
と大声を発しながら近寄ってきた
「ピンクのくじらーなんてーカワイイの」
と私は感激していた

?時空を超えた村２（前書き）

そこはシスフィーナの爆発によって時空に閉じ込められた村だった。

?時空を超えた村2

（１２）ゆっかさんの心配

○キヤスメ村

そのころマリンレンジャー達に救出されたゆっかさんたちはバララン
グ海沖にある
子房村（いやな名前）にある古い体育間で休んでいたらしいのだけ
ど、ゆっかさんだけは
行方不明の私を探すと言って聞かなかったの
事件の捜査のためこの島へ来ていた桜井警部が
「マオンちゃんは我々が今全力で捜査している、
アクア・ウォール（国際的な水を守る組織）も動いている
　なあに　すぐに見つかるさ」
と言う言葉にも
「いいや自分で探します、私は今まで
あの子がしばらくいなくなっても少しも心配しませんでした
それはいつもナルーがあの子のそばに居てくれたからです
でも今回は違います、あの子は一人で何処かへ行ってしまった　あ
の子に何かあったら
私はいったいどうしたらいいのか・・・」
最後の方は涙で言葉にならなかった
でも警部の
「母親の君がしっかりしなくてどうするんだもうしばらくすればご
主人も到着する
とにかく落ち着いて無事帰ってくることを信じることだ　大丈夫
だってゆっかの子だろう?」
と言う言葉に少し落ちついたらしかった
「そのためにも少しは食べて元気をつけることだ」
と言うと警部はサミーたちにウインクし去って言ったと言う

□赤いスカーフが風になびく
（カッケーぇ）
隣にいたサミーも
「大丈夫、きっとどっかで生きてるよねマオン」とナルーを抱きしめて
力強く自分にそう言い聞かせた
でも遠くにいた私はそれを知るよしも無かったのでした。
（１３）謎の光
○ヘチマ村
桃色のクジラがいれば良いなあって思っていたのでこんなところで
（何処だかよくわかんないけど）会えて嬉しいワ」と私は少し興奮気味に喋った
「でもどこで見つけたの？」と海琉に尋ねたら
「それは俺に聞くより　ママルに聞いてくれ」
と答えた　そしてママルは自分の身に起こった事件を話をしはじめたの
○　亜都蘭湖
その日ママルは亜都蘭湖で遊んでいたらしい
「今日はもっと深く潜ってみるでまる」
と言って深海のそこのそこまで潜った
すると「あれは何でまる」
目の前に古い船が見えたので側まで近づくと
その船体の横にはローマ字で
〔グランド・セイコ号〕と書いてあったという
「こんな大きな船は亜都蘭でも見たことが無い　まる」
と呟いた　そのとき海底が輝きたと言う
「そして気が付いたら
この閉ざされた世界だったと言う訳だまる」
「そのときから俺とママルは戦友って訳さ」
と２人は説明を終えた

これは後で知ったことですが私達の世界でも
光を見た人が大勢いたらしいのだ
「なるほど事情は分かったけど
閉ざされたってどう言うことよ」
と私が問い返すと
「俺達が光を見て以来？この村一帯はなぜか周りから
何者かに閉じ込められているらしいのさ」
と海琉は衝撃の事実を口にしたのだった。
〇キヤスメ村
その頃ゆっかさんたちは眠れぬ夜を過ごしたらしい
捜査は当初いなくなったバラランク島
（新潟県沖）を中心におこなわれていたのだが、
私がいなくなって一週間のあいだ
レンジャーの人達はくまなく探したのだけど私らしき
女性を見たと言う人さえも発見出来なかったの
（そりゃーそうよね？なんせ3百年前の世界にいるんだから）
そこでアクアウォールとパレスティナの取材を中断し
急遽帰国したヒーローさんとで話し合った結果
捜索の範囲を日本中に広げることなったのだった
〇　マオン救出本部の中
絶望の表情で必死に祈っているゆっかさんに
ナルーは
「ママさん、元気出すなる　マオンは　きっと無事だなる」
と　声をかけた
「ナルー、何か感じたのね」と問いかけに
「いや残念ながらこの世界にはマオンの気配は無いなる」と次げた
そして「でもどこか遠くで生きてる　なる、
かすかな意識（私の）は感じる　なる」
と続けた
するとそれまで病人のような顔をしていた

ゆっかさんは少し微笑んだように見えたという
一方サミーの方はただ心配しているより良いと
怪我人や病人たちの治療を手伝っていた
私がいなくなった晩から天気は大荒れだった
普通なら救助は延期されるのだが
そこを
ゆっかさんやヒーローさんの必死の願いで
レンジャー隊やアクア・ウォールの人たちは
自らの危険も帰りみず２４時間体制で探してくれていた
そういったみんなの思いだけが
今のゆっかさんを支えていたらしい
（感謝、感謝）

?奇妙な祭り（前書き）

ヘチマ村で変った祭りが行われていた。

?奇妙な祭り

（１４）村祭り
向こうではそんなことが行なわれているとは
知らない私は海琉とヘチマ祭の話しで盛り上がっていたの
そりゃー私だって皆が心配しているだろうってことは分かってたわよ
でも連絡したくたってら・まおんは繋がらないし　落ち込んでいた
ってはじまらないから
いっそこっちの世界を楽しんじゃおうって考えた訳よ
ナルーが私が無事なのを感じとってくれる事を信じてさ
「で、なんて言う名前だっけ？」
と私は尋ねた
ベンダイさんは「クエトーン蔡じゃよ」
と言ってその成り立ちを話してくれた
「その昔この村は不場と呼ばれておったその頃この国には
ラ・マオンと言う妖怪が住みついておってな
コロロン・ボケと言う怪物を操り、この不場の国に破滅と欲望をば
ら撒いたのじゃ
だがそこに美の化身ノリルが現れ水竜の化身ゲイダラバ（クイダラ
ゲとも発音する）
の力を使いラ・マオンを倒したという
そしてそのことを祝って８月２４日に作られたのが
このクェトーン祭なのじゃよ」
私は「ふーん？私のパソコンとは関係ないのね」と答えながら
（・・違う私が知ってる話とは何かが違う
そんな気がする？ちょっと待って、何故私が知っているの、私って
誰？）
といつになく真剣に考えていたの
「ところでベンダイさん海琉は何処言ったの？」と尋ねたとき

「ああ、あの子なら向こうで飾り付けを
手伝っておるよ、最初はどうなることかと
心配しとったが？」とおじさんは言った。
私は「どういう意味？」って聞くと
「実はあの子は事故で亡くなったせがれの
子じゃー無いんじゃ」と語り、理由を話してくれた

「あれは１８年前わしとせがれが漁に出とる時じゃった
空が急にゴロゴロなりでしたもんで
　わし等は漁を切り上げて沖へ帰る支度を初めたとき
一筋の光が向こうさ浜に落ちたで
何事かと身に行ったんじゃ
するとそこに１７歳くらいの男の子が倒れておっての
「おまえは何処から来たんじゃ」
と聞いたところ　その子は
「なーんも覚えとらん」言うでわし等は
相談しせがれの子と言うことで育てることにしたんじゃ」
とベンダイさんは長い話を終えた
「では海琉とは？」
「何のつながりも無い、それどころか
正体も分からんのじゃ　だがそないなことは
どうでもよい、あの子はワシらの子じゃからな」
「おーいオタンコナスも手伝ってくれよー」
と向こうから声がしたので
ベンダイさんは「ほら　噂の当人が呼んでるぞ」と笑ったので
私は
「はーい、今行くよー」と答えたのだった
なお神話に出てくるその妖怪は何故か
私そっくりだったの・・アハハ
翌日

漁村のあちこちにはゲームや独楽といったお店がたくさん並んでいて子供達の
姿で溢れ帰っていた（と言っても2、３０人だけど）
そして大人達は水の守り神である龍神を模った御輿を
『ワッセーワッセー』
と　担ぐ、そういった光景は昔から変わらないようだった
「ねえちゃんも、一緒に担ぐ？」
と海琉が問いかけたので
「ううん、私力無いから遠慮しとくわ」
と答え、ら・まおんでもいじっていると
近くにいた７０位のお婆さんが
「そりゃー何じゃね？」と尋ねたので
「・文房具」と答えた
「それにしても嬢ちゃんは
あの妖怪にそっくりじゃなほっほっほっ」と不気味に笑ったので
私は心の中で（しっ、失礼ね）と呟いていた

夜になると祭りは最高潮に達し、人々は
皆御輿を中心にして男性は上半身裸で女性は逆に下半身が裸？で
腰布だけをつけ
『エンデケテ、オンデケテ、アッホイホーイ』
とお尻を振りふり踊っていた
中央の御輿の上には創世の神『たか・麻友（まゆ）の命（みこと）を飾っており
左の祭壇には神女（あつこ）と呼ばれる１７歳くらいの女性（毎年一人選ばれる
右の祭壇にはクエトーンの好物である葡萄酒が置かれ
神男（しんだん）と呼ばれる４０歳位の男性に交わりの儀式を行なっていた
女性の方は
『ハァー、アァー　』っと、声を上げる度に（昼間から、いいのか？）周りから
「あっちゃんホーイ・プンプンプン」

と言う可笑しな掛け声が掛けられる
それが3日3晩続き、村人たちは全員　儀式が終わるまで裸で腰と腕を
『ポイ・ポイ・ポイ・ポ・ポイ・ポ・ポイ・ポイ・ピィ』と振り続けるのだと言う
（つっ、ついていけない？）
やがて日が落ち明け方近くになると神女だけを残して全員で
『クェトゥーン、クェトゥーン』
と合掌した
すると海の向こうから『ララーラールル』
と聞き覚えがあるメロディと共に
巨大な怪物が『ザッバーン』っと
現れたのだった。

?奇妙な祭り（後書き）

ヘチマ村は敦子姫（あつこひめのみこと）の子孫
たか麻友（まゆ）の命（みこと）
が龍神アレーバーと交わり築いたと伝えられている。

キャラクター名鑑？敦子姫（あつこひめのみこと）（前書き）

かつて自らの意志を具象化出来る一族がいた
それが総神（そうし）と呼ばれる一族だった

キャラクター名鑑？敦子姫（あつこひめのみこと）

遥かなる昔　神さへも居ない世界に存在した総神（そうし）一族がいた
彼らはそのイマジネーションの力で理想の地アナンを築かんとしたが
失敗し　母船アースタルドで再び理想の地を目指した
その長　始（し）には　鬼元鞘（きもとさや）と敦子姫（あつこひめのみこと）』の姉妹がいた　姉の鬼元鞘（きもとさやのみこと）は
兄　信彦也（のぶひこやのみこと）と
共に雲に隠された世界に『たかみな』を築いた　しかし　月の王（やみよ）ツクヨミに
心を奪われた信彦也は　総神たちが獄界（こえだめ）に追放した
　ローデン・ハイムの魔神を復活させてしまった
その強大な力は赤き魔神ディーゲールをも呼ぶ寄せてしまう
仕方なく鬼元鞘（きもとさやのみこと）はその身を柱にして巨神と魔神たちを封印したのだった
一方妹の敦子姫（あつこひめのみこと）は大西洋に『ムーラ』と言う王国を作った
そこは太陽神　ラアゥドが支配する王国だった　彼女は意地悪な皇帝コクショナとの間に
４８億人の子をもうけた（どれだけ生きたんだよ？？（・・？）
その一人が　麗しき乙女と謳われた『麻友（まゆ）の命（みこと）』だった
彼女もまた母親の敦子姫（あつこひめのみこと）と同様、自由奔放に生きた
ある時アレーバーと言う蛇龍に王国が危機に陥った時
融和の為自らアレーバーに身をささげた　そして地底に、安住の地
蛇路帝士四瑠（へびろていしょなる）と言う龍門（りゅうかい）を作って住んだと言う
その子孫の一人ジルドーラによって『？ｅｎｕｓ』の伝説は作られることになる

?海の怪物（前書き）

謎の祭りそれは怪物クエトーンにささげる儀式だった。

？海の怪物

（１５）海琉ＶＳ海物

「あの怪物は何？」

と尋ねると先ほどのお婆さんが

「あれは２０年ほど前この村に現れあっという間にこのヘチマ村を支配しおった

今ではやつに命ぜられるままに若い娘たちを毎年生贄として差し出しとる中ありさまじゃ・・」

「では今までの儀式は」

「そもそもこの儀式はクェトーン様に生け贄を捧げるためにあるのじゃよ」

とお婆さんはぼそっと語った。

「・・させない　私がこんな変な儀式やめさせてやる」

と拳を握りながらそう叫んだとき

怪物に向って近づく小舟があった海琉（かいる）少年だった、その手には父親の形見である

鋭いモリを持っていた

「こいっ　化け物、親父のカタキだ今度こそ仕留めてやる」

と父ジロベエが設計した

〔ソーラン・トット号〕に乗って挑発する海琉だった

『ギャーオー、ショウネン　ソレホド　シニタイノカ　ヨッポドチチオヤ　ノモトガ　ヨイラシイナ』

「ふん、強がるのも今のうちだ」

と言うとこのために作っておいた弓にモリを装着すると

「親父のかたぎだ、死ね化け物」

と　モリを放った。

モリは大きく風を切り怪物の右肩を

『ズバーン』と打ち抜いた
「ちえっ、外れたか　残念」
と舌うちすると再び弓をかまえた
だがクエトーンは口から『ピュルルル』
と何かの音波を出すと舟はコントロールを失い海琉は
『ザバー』っと海に投げ出された
「くっくそー」と少年は呟いた
私は「いけないっ、助けなきゃ
（泳げないけどさ?）
と思った時海の向こうから
「海琉ー今行くで　まるー」
とママルが波をけって現れたの
そして投げ出された海琉を背中に乗たのを見て思わず
「よっしゃー」って叫んだの
『ウアー』『キャー』
人々はパニックに陥り当ても無く右に左に
逃げ回っていた
『フフフフ、コノワシにサカラッテモ　ムダナコトダ
ダガ　トリアエズ　ソノムスメヲ　イタダコウ』
と言うとクエトーンは御輿の上に括られた神女に迫ったの
『ギャー』と悲鳴を上げ神女は失神した
私は「クエトーンとやら聞きなさい
ここはあなたのいるべき世界ではないのよ
おとなしく帰ったらどう」
と強がって見せた
それにきずいた怪物は『オマエノ　ソノカオハ　ワスレハシナイ、
コンドハ　マケヌド
ラ・ムァオーン』
と鋭い声を上げた
その迫力にブルブル震えながらも

「何だか分かんないけど
そっ、そうよ　私はあなたを封印した
ラ・マオンよ（ハッタリ？だけど）あんたなんか怖くないんだから」
とへっぴり腰で強がった
（やばい、完全にもらしちゃった）
『ソノワリニハ　フルエテイル　ヨウダガ』
「むっ武者震いよ（嘘）
私は「かっかかって来なさいよ」と強がりつつ心の中では
（ナルー、ー助けてぇ）
と思いっきり叫んでいたのだった。
（１６）希望
〇キヤスメ村
そのころ向こうの世界ではこの一ヶ月の間
アクア・ウォールの人たちは全国くまなく探したのだけど
当然何の手がかりもつかめなかったの
隊長のジョージは「これだけ探して　何の情報も無いって事はもう
既に、捜索は続けますか？」
と最後通告を迫った
ゆっかさんは「そんなーあのこが死ぬなんてこと
絶対あってたまるもんですか」
と半狂乱で猛抗議し、ヒーローさんも
「そうさ、あの子は生きている　今も何処かで
助けを待っているかもしれない
お願いします、捜査の続行を？」
と必死のお願いをした
でも残念ながらその可能性はゼロに等しかったの
ゆっかさんはヒーローさんと抱き合って
泣いていた
そしてサミーも
「そんなの嘘よ、マオンが死んだなんて」

と激しく動揺していた
島全体が嫌なムードに包まれていたその時
・・・ナルータスケテ・・
と言う声をキャッチしたナルーが
「・・マオン、見つけたナル」
と呟くと「ナールー」と叫んで
その声のする方向へジャンプ（テレポート）した。
絶望の表情を見せていたゆっかさんは
その一瞬笑顔を見せたが
（でもナルーもあの子も何故か？
もう帰ってこない気がする）
とヒーローさんの胸でそう呟いていたのだった。

?帰ってきた?マオン《マオンの夢》（前書き）

怪物に吸い込まれたマオン達は
何故か　渋谷に帰ってきていた

?帰ってきた?マオン《マオンの夢》

~夢世界の章』~
（16）吸い込まれた4人
『ジネームスメ』
クエトーンはそう言って溶解液を『ビュっ』
と吐き出した
ママルの背中の上で海琉が
「あぶないオタンコナス」と叫んだ
私は『アーァワァー』と絶叫した
そのとき銀色に光りがそれを弾いた
そしてマオンを守るように一匹の金魚が
何処からか現れた
『ギ・ギサマハ・』
「ナルーだまる」
怪物とほぼ同時にママルが叫んだ
「マオン無事だったなるか、何でママルもいる　なるか」
とその金魚は質問した
私は「なんであんたがママルを知ってるのよ」と尋ねると
「それは秘密なる」
と教えてくれなかった
「よくきてくれたねえ、それでこそ私の子分」
と少しおどけると
「ナルーは子分違う、マオンのお目付け役だなる」
と猛抗議した
『オマエタチノ　クダラヌ　ソノマンザイハ
マダ　ツヅクノカ?」
とマオンに代わって怪物が答えた
「攻撃再会って、やつかな?」

と弓を撃つ体制で海琉が言った
私は「ナルーさっきのやつで海琉の援護を」と命じた
でも「ダメ　なる　お師匠様から授かった防御魔法
でも僕はさっきので精一杯なる」
と困惑気味に答えたの
「そっかまだ修行中だって言ってたもんね
ここまで来てくれただけで充分だよ」
「くたばりやがれー」
と叫んで弓海琉は弓を撃った
だがクエトーンは蛭のような口から
『ゴー』と言う風を放射し
その場にいた（ほとんど逃げてたけど）
全員を掃除機のように吸い込み始めた
私達は「アレー」と悲鳴を上げながら
クエトーンの体に吸い込まれて行ったのです。
〜ゴーォー〜
○マオンの部屋
「まっ眩しい」
と私はイスの上で目を覚ました
「あれっ、ゆっかさんいつ帰ってきたんだっけ？」
「ん？何　寝ぼけてるのまお　いっつも言ってるけどさあまたパソコンつけっ放しで
寝たのねまっいいけどさあ（いいんだ？）
と注意しつつ「よくイスで寝られるもんだわ」と感心していた
そして「あさみちゃんと遊園地行くんでしょ玄関で待ってるからすぐ支度しなさい」
と言うと部屋を出て行った
私は「あーい」と返事をするとお気に入りの
水玉模様のワンピースに着替えようとしたら
再び入ってきたゆっかさんが

「それからー言い忘れたけど濡れたパンティも着替えるのよ」
と言うと部屋を出た
私は「・なんで濡れてるのかな?」
と思いつつ舌を『ペロッ』とだした
そして着替えを済ませ、部屋ドアを開けると
　そこにはナルーを肩に乗せたサミーが
待っていた
「マオンは相変らずのろまなる」
「うるさいわね、子分の分際で」
「あっ、また子分と言ったなるー」
といつもの2人のコミュニュケーションが
サミーには大ウケだった
○公園通り
ここ公園通りには〔ギューもぉーランド〕
と言う牛の〔ギューもぉー〕の守護神をシンボルとした遊園地がある
の
１９８０年の後半に猛夢社の社長　大和牛緒（当時２３）が中心と
なって作られたこの遊園地は
当初は〔誰もが楽しめる空間〕をキャッチフレーズに大盛況だったの
〔牛娘（ぎゅーもぉ〕と言う5頭の牛をモチーフにしたアイドルキ
ャラクターも生まれ
次々と子供達を飽きさせない豊富なアイデアで、モー牛旋風を巻き
起こし
一時は千葉のパルパルランドに迫る勢いだったのだ
でも政府卍党（当時）の相次ぐ失策もあって　大不況のあおりを受
け苦戦していたらしい
そこに猛牛社のライバルラッコ社が渋谷や秋葉原を中心とした巨大
遊園地
『アキバる・らんど』　を１９８４年にオープンさせたのだ
当初は〔ギューもぉーランド〕を真似た手法で〔パロディ、偽者〕

と
マスコミから徹底的に批判された
彼等は一同に「偽者はいずれ時代と共に消える」
と言いはなった
ところがアニメとオタクの聖地を見事に表現した手法、握手権やじゃんけん大会など
が大きな話題を呼んだ　またメインキャラクターの『アキバらっこ』
と言う
ラッコのコスプレをした４８人の少女(ますこっと)たちが大衆の人気を攫い
猛牛社に迫った
一時は千葉のパルパルランドを上回る
客動員数を見せたギューもぉーランドだったが　ラッコ社の勢いに
段々と追いつめられていき
猛牛社の経営陣は一切のプライドをすて《ギューらっこ》《萌キャラ》など
アキバ・るの手法を取り入れた形で再建を図ったが
その後も失速する一方で、遂にはアイドルキャラ牛娘達もアキバ・ラッコ達に
３倍以上の差をつけられるかたちで大敗退したのだ
するとあれほど《モノマネ》と《批判》していた人たちも全員
アキバル《支持》にまわり、常連客の多くもアキバ・る　らんどに
流れたのだった
着ぐるみショーをしていたダンサー達も移籍したらしい　だが？
最強と謳われた《初期》のメンバーとは違って《後期》の《追加》
メンバー達は
《アキバ・る》　の激しいダンスについて行けずにリーダーの路子(みち)
をはじめ
とするギューモ―のダンサーたちは
「アキバ系のダンスってこんなに激しかったっけ？」
と息を切らせながら

「ここのダンスは私達に向いて無いわ？」
と強がりを言いつつ　一人　また一人辞めていったらしい
そしてギューもぉーランドは
だんだんとお客さん（ファン）が減っていき現在は一日わずかに２
～３人くらいだと言う
私達はコーヒーカップ（懐かしー）の中で
「ここ無くなっちゃったら少しさみしいな」
と目の前のサミーとナルーに話しかけていた
でもナルーは「ハラホレハレなるー、
このグルグルはどうも苦手なるー」
とグンなりしていた
その姿があんまり面白かったので
思わず私は「平和だねーまるであの事故も無かった見たい？んっ、
そう言えば
私いつ帰ったのだっけ？それによくよく考えて見ればここはうんと
小さいころ
たしか経営破綻したんじゃーなかったっけ？」
と気づいた
「ここは何処だよー？」と私は叫んだとき
〔♪Ｍａｙｅ－Ｍａｙｅ〕
と言う歌が何処かから聞こえてきたのだった

?ナルーと少女《ナルーの夢》（前書き）

ナルーの妖精界（不思議界）での修業時代のエピソードです。

?ナルーと少女《ナルーの夢》

（17）ナルーと天の国
○奈留の国（不思議界西部）
それはまだナルーがジルドーラ（龍神）
の元で魔法の修行をしていた時のことでした
ある日お師匠の龍が
「ナルーよどうもおまえは上達が遅いぞ
しばらく天へ行って召使でもするがよい」
と言った
ナルーは「もっとがんばる　なる、だからもう少しお師匠さまの元
で修行させてほしいなる」
とダダを捏ねた
しかし龍は「そうでは無い、おまえは誰も持ってない2つのものが
ある
それを磨くために命じておるのじゃ」
と行って翼で風を起こした
するとナルーが『ビュー』と
天高く舞い上がった
～では行ってくる　なるー～
○優雅の城
天には創生の女神オルディナスや神々達が暮らすアトラント城があ
った
中央がオルディナス（オルディス）が暮らすローマ風の城である
そしてとなりにある3つの建物のうち　真ん中の異世界風な城が三
女コジ・マハ
右が長女ギーナ（鷹菜菜たかのな）が暮らす中国風の城（デ・ギーナ）
そして左が二女ミータが暮らすエジプト風の城プット・ア＝ミーナ
であった

そのうちナルーが仕えることになったのは
一番わがままなミータのいる城だったのです
〇プット・ア＝ミーナ
「なるほどジルドーラの推薦状は本物らしいね、では初めるがよい」
と言って
ミータは脚を突き出した
「これは何のおまじない　なる」
「知らぬのか？愚か者め、この城の者達は皆服従の証としてみーちゃんの
体の一部を舐める事になっているのさ？国民たちは《たかみな》も《優子》も
みんな《みーちゃんの足は美味しい》って評判なんだぞ（そっそうかにゃ？）
おまえは気に入ったから特別に脚の裏で勘弁してやろう」と
鞭を片手にニヤッと笑った
「ウーゥ、そうだった　なるか（納得するんだ？）」
と呟くと　ナルーはミータの足首を
『ペロペロ』っと舐めはじめた
「あぁーなかなかやるじゃないついでにお尻もお舐めっ？」
（いったい何の小説なんだ　なる？）
　ナルーが天で修行を始めて早半年が経過していた
最初はどうなる事かとヒヤヒヤもんだったが使えて見るとミーターは以外と
やさしかった（言葉遣い以外は？）そしてあの舞踏会の日を迎えたのだった
不思議界は大きく四つの国によって別れていた
南は砂漠の国エルフ、東は貿易の国ライオマ
西は作物の国ミレーネ、北は秋と冬だけの国ルイクス
そしてその中心には妖精界の首都エンドラがあり、どの国にも自由に行くことが出来たのです。

ここでひとつことわっておきますが神と妖精の国だからと言って全
てがそうではありません
首都エンドラ以外は普通の人間（動物も含む）
の方が多いのです。
その一つ西に面するエルフ（奈留の国はその一部）は
師匠ジルドーラの子、海神マイトが治めていたのですが
この度アズ（砂漠の精霊）との間にめでたく娘、アスタヴィスが生
まれたらしい
それを祝って舞踏会が開かれるのだと言う
そこで女神達はそのお祝いに招待されたと言う訳である、だがナル
ーは当然留守番だった

「あー退屈なるー、どうしてこーんな広い
屋敷に僕ひとりなるか？」とため息をつきながら四角い窓から顔を
（と言うか体を）だした
するととなりのオルディス城にも同じように窓を開けてぼやいてい
る少女がいました
2人は顔を見舞わせると互いに
「あなたは誰　なる？」
と尋ねた
「その言葉遣い　は　まさか」
「あなたも　奈留の国生まれなの？」と同時に喋った
その子は小さいころに両親を亡くし奈留の国からここへ貰われて来
たのだと言う
でも田舎訛り（なまりだったの？）が抜けずに苦労したのだと言う
「今はまだ見習いだけどいつか立派な魔法使いになれたらって時々
思うの？
そのための参考として神々が集まる舞踏会に行きたかったのに
　おまえは作法も知らない田舎者だから留守番していなさいって言
われた　なる」

とその女の子は夢を語った
「そんなことない　なる、頑張れば夢は叶なる、僕だっていつかラマォダさま
（伝説の精霊騎士）」　のような戦士に仕えると言う夢を持ってるなる、そのためには強い心と信じる力さえあれば　いつか夢は叶う筈　なる」
と自分自身に言い聞かせるように語った
その言葉を聞いた少女は
「ありがと、ナルちゃん、私も夢を信じてもう一度がんばってみるなる」
と少女は最高の笑顔を見せた
「そうか、お師匠さまが言った2つとはやさしさと信じる心なる」
と呟いた
すると「ナルーやっときずいたようだなおまえの誰よりも優しい心とどんなときでも決してくじけず信じ続ける強い心とを持っておる
それが人として妖精として一番大切なことなのじゃ」
と龍の声が聞こえてきた
「ではここでの修行は？　なる」
「さようもう終了じゃ
ワシの元に戻って来い」と告げた
それから6日ほどして女神達はアトラント城に帰ってきましたでもナルーは故郷である
奈留の国に帰えることになっていた
ミーターは「フフフあんたにはもう少しいて貰おうと思ってたけど、龍の命令なら
仕方ない　諦めてやるか？まっまた追い出されたら来なよ、いつでも待っているからさフン」
と冷たそうにそう答えたが　それが彼女の言い方だってナルーにはもう分かっていた

「もう追い出されない　なるよー」
と言って2人して笑った
そこにあの少女がテンカリド（ユリのような）の花を持って駆けつけた
「なるちゃん、今度はお互いりっぱな妖精として会おうねぇ」
と言ってその花をわたしたそれは永遠の友情を意味していた
「僕もその時を楽しみにしている　なる」
と　ナルーは照れながらそう答えた　別れの時は刻々と近づいていた
「私ノリル、またねー」
少女はそういうと急いで駆けて行った
その目の涙を見られたくなかったからだ
「ノリルー」と大声で叫んだとき
突然何処からか
〔Ｍａｙｅ―Ｍａｙｅ〕と言うメロディが
響いたのだった。

?ナルーと少女《ナルーの夢》（後書き）

アトラントに住む　ヂーナ　コジ・マハ　ミータの3神がモデルとなって《ノースリブ神話》が生まれたらしい。

??レイドの世界《海琉の夢》（前書き）

海琉（かいる）の過去とは？

??レイドの世界《海琉の夢》

○首都デカ・プーラ
（１８）仮面の戦士レイド
同黒蜘蛛城
海琉（かいる）は飛行機と爆弾が飛びかうこの異様な世界で目を覚ました
「ここは何処だ？俺は誰だっけ」
と呟いた、すると隣にいた機械の老兵士が
「何を寝ぼけているんだレード、ここは惑星デカロマイトにある首都デカプーラ
我々は皇帝ザザルの命でそこに送り込まれたG（ぜが）の戦士じゃないか？」
とカザミと言う　老兵士は語った
見ると自分の体は鋼鉄と機械に包まれていた
「なっなんじゃーこりゃー？」と叫んだ後
「そっそうだった、今戦闘中だったな？」と思い出した
俺たちが生まれた星　アナマイトは『ブレ・ラスタ星団』
の衛星の一つであったのだが　いつのころからか『ウォン・テッド』
と呼ばれる
吸血生物が侵略してきたのだ　そのため機械政府『ゼクル』は対ウォン・テッド用に
霊度（れいど）システムを開発したのだが　そのシステムは誰でも使えるわけではない
適合した者のみが　その鋼鉄の鎧を纏う事が出来るのである
見事に合格した俺は仲間たちと共に　スパイダー・ウォン・テッドのアジト
《黒蜘蛛城（おーる・ぶらっくじょお）》に乗り込んだのだった
「レイド、健（たける）から合図が聞こえたら全員で乗り込むぞ」
「オッケイ　カザミさん」
G（ぜが）達は入口を固めていた　その時

『どばーん　ドカーン・ドーバント』
と爆発が起こり何人かの仲間が吹き飛ばされた
『うわあああ』
『ギッヒッヒッヒッヒッヒ』
「お前はクイーン・マリス」
そこには輝くような瞳をした女性がいたそれが　ウォン・テッドクイーン
マリスだった
『ゲジウム』と言うひょうたんを寝かしたような世界に住む彼らは１００年に一度　『総選挙やじゃんけん大会』によって一族の長を選ぶと言う
今回　長に選ばれたのは　マリスと言う女性であった。
『うわあああああ』
マリスはスパイダー・ウォンテッド、タイガー・ウォン・テッドの二体を
操りG達戦士を次々と倒していった
「何故おまえは　こんな事をするんだァ、共に共存すればいいじゃないか」
「黙れレード、３百年も昔協定を破って、一族を殺したのは貴様たちの王ザザルではないか」
「・・そっそれは　そのとおりだが・・」
「ええーい、人間など全て滅ぼしてくれるぅ」
そう言うと目が赤く輝き　蛸の怪人に変化する
「ワッはッはッは　これぞ私の真の姿　シノラー・ウォン・テッドじゃー」
「くそーォ、アタック・レード」
腕のメカが怪しく光る
「行くぞー―アタック」
「タコタコ・ポイポイ」
お腹の蛸口から　蛸ミサイルが　レイドに向かって発射される

「あああああ」
レイドは吹っ飛び　そのシステム（ブレスタ）が腰から外れ海琉の姿に戻る
「ふふふふふふ、レイドよこれで最後だ　死ねー」
触角を海琉に絡ませる
「電撃たこさん」
『うわあああああ』
そのとき巨大なアルテミスと言う機械の鳥が『ブゥーン』と両者の空をかすめていった
「ヤー」
その鳥（ひこうき）からアヒル口の女の子が海琉の前に降り立つ
「遅いぜ、トモチ」
「わりい　わりい　操縦に少し手間どっちゃってさあ」
「なんだと思えば　まだ生き残りがいたか、だがお前たちの作ったシステムでは
われらウォン・テッドに勝てぬわわはっはっはっは」
「そうかな」
トモチはアヒル口を『ピッカー』っと輝かせた
「貴様は？」
それはマリスと同じ姿、『アヒル・ウォン・テッド』だった

??レイドの世界《海琉の夢》（後書き）

次回、海琉（かいる）とトモチの出会いです。

キャラクター名鑑？魔獣クエトーン（前書き）

シスフィーナの首が世界に影響を及ぼそうとしていた。

キャラクター名鑑？魔獣クエトーン

２つの性（めん）を持つ堕天使シスフィーナの正体で
キングギドラの様な身体に９つの頭とコウモリの翼をもち
その顔は四国地方に伝わる牛鬼の顔をしており
その全長は百メートルとも三百メートルとも云わせている。。
ラーマオンによって切られた首の一つがヘチマ村に落ち
外の世界（７００キロ四方）とを隔絶させたのだが
その体内は呑みこんだ生物に過去や未来の夢を見せる
効果がある（夢を見ながら消化される＝何と恐ろしいんだ？）
《クエトーンの夢空間》
１マオンの夢『子供の頃の渋谷一帯』
「マオンは既に破たんした遊園地の夢を見る」
２ナルーの夢『不思議界での修業時代』
「ナルーは心にひっかっていた親友ノリルに出会ったときの事を夢見る」
３の夢『レイドの世界』
カイルはブレ・ラスタ星団の衛星の一つ『アナマイト』出身である
突如人間を攻撃し始めた《不死の吸血生物・ウォン・テッド』と戦う為
機械政府軍『ゼクル』が作った《強化装甲服・霊度システム》に志願し
Ｇ（せが）の？９『レイド』の称号を持つ戦士となった
なおパートナーの『アヒル口のトモチ』はウォン・テッドである。
海琉（れいど）はマシン《神風》トモチはマシン《アヒルグチ》を操る
ゲジウムと言う異空間に住む　ウォン・テッド達は百年に一度
長を決めるため総選挙を行うが　それでも決まらない場合はじゃんけん大会で雌雄を決する
しかし近年は長になりたくて　不正《握手権の乱用》が続いている

らしい。

キャラクター名鑑？魔獣クエトーン（後書き）

機械学を専攻していた海琉（かいる）は　教師の試験に受かった
そして初出勤のためバイク《ママゾン》でチルマ学園に出勤中に
何ものかに連れ刺される。

??怪奇　アヒル口（前書き）

記憶喪失の少年海琉は　教師の試験に合格し
チルマ学園に向かう途中　何者かに襲撃を受ける

??怪奇　アヒル口

トモチはアヒル口を『ピッカー』っと輝かせた
「貴様は？」
それはマリスと同じ姿、『アヒル・ウォン・テッド』だった
「うるわしの香り～ィ」
右腕のアヒル・ブレッド赤いガスを噴射する
「アルテミース」
アヒル型戦闘マシンが飛んでくる
「今のうちに逃げるよ海琉」
マシンは海琉とトモチを乗せると空高く舞いあがったのだった。
（１９）謎の組織
回想
○デカプ―ラ郊外にある海琉の家
「ではサナギ行ってくるよ」
海琉は玄関に置いてある両親と一緒に映った妹　大島サナギ（１２）の写真立てに手を振って玄関を出た
記憶喪失であった　海琉とサナギは宇宙工学の権威である大島優輔（５５）優風（ゆうか）（２４）
夫妻に引き取られた　サナギは父優輔と同じ科学者になるべくその助手をしていた
しかし兄の海琉は先生と言う職業を目指し　日夜勉強に励んでいたそんな時だった　突然の事故で父、母、妹を一気に失った海琉はそれでもめげることなく
勉強を続けて行った　そして今日天の川学園の姉妹校『チルマ学園』への採用通知が
届いたのだった。
「マシン　ママゾン出てコイヤ―ァ」
と　叫んで　ベルトの　マック・ストーン（生まれた時から細胞の

一部であるベルト）
のスイッチを入れた
『ブーン、ブルルーン。ブルブルーン』
「よっし　行くぜぇ」
海琉はアマゾンに乗り　チルマ学園を目指した
「ええーえらっきょ　らっきょはいかがですか」
向こうから　らっきょ屋（水産物）のトラックがやってきた
「おやっさん　チョっくら行ってきます」
「あああーがんばれや」
水産物や主人立花が　すれ違いざまに挨拶する
「ちっちゃなころから悪ガキで、ポイポイポイポピィー、ローテーション♪」
（どう言う歌だよ？）
○機械政府軍『ゼクル』本部
そこにはヒットラーの風貌をした男が　『豚とねずみ』のマークからの指令を受けていた
「ヨウガ団長　例の計画は進んでおるか」
「ハハーァ、ザザル皇帝陛下、遂に適合者を見つけました
間もなくここへやってくる手はずにございます」
「きゃつら（ウォン・テッド）の動くが活発になってきておる　急げよ　ヨウガ団長」
「ハハァ　ザザル皇帝陛下」（なんとなく懐かしいぞ～あーの星は父　あれは母♪）」
○山道
海琉は唄いながら国道を横ぎり　近道の為　山の道へ入った
すると向こうから顔にメイクをした女性のライダーたちが５，６人の列を作り向ってきた
「なんじゃあいつら俺に挑戦しようってか？」
迫る謎の女性ライダー　海琉はその頭上をマシン　アマゾンで飛びこした

「タ―ァ」
『ブルーン』
だが女性ライダーたちは何故か引き返して行った
「何故あんな真似をしたのか　突きとめてやる
（あっれっ、この展開はどっかで見たぞ？」
女性を追う海琉、地面に置かれた一本のバナナの皮で滑って大きく転倒する
「痛ってえ　誰だよ　こんなところにバナナの皮捨てたのは」
（少し・・違うぞ！！）
「海琉お前は　我がゼクルに選ばれたのだ」
『アヒル口の女』はそう告げると　他の女性達は
『ポイ・ポイ・ポイ・ポイ・ポイ・ポイ・ポイ・ピィ』
と妙なダンスで海琉を取り囲んでいたのだった

??怪奇　アヒル口（後書き）

不死生物ウォン・テッドと戦う為　強制的に『ゼクル』のメンバーとなった
海琉は『アヒル口の女』トモチと出会う。

??レイドシステム（前書き）

海琉は機械政府軍『ゼクル』本部に連れてこられた
ウォンテッドが支配する事になる世界
終末（せいせん）の日を避けるために為に・・

??レイドシステム

○機械政府軍『ゼクル』本部
　海琉は何処かの基地で目を覚ました　だがその手足は鉄の錠で縛られていた
「ここは一体どこだ、俺を自由にしやがれ」
「ふふふふふ　ここは　アナマイト海溝にあるゼクルの本部
大島海琉　君は選ばれた栄光の若者なのだ」
ヒットラー風の男はそう語った
「選ばれただと　誰にだ？」
「無論ザザル皇帝陛下だ」
「何のために？」
「海琉くん　君は今　この国が人知れず何者かに脅かされていることをご存知かな」
「ああ　噂の怪事件だろ　でも　どっかの狂人か　獣の仕業じゃあ無いの
政府がそう気にすることでは」
「海琉くん君はどうも　事情を把握してないと見える　この世界には我々人間とは違う
生物が存在するのだよ　それも決して死ぬことが無い不死生物が」
「そんな馬鹿な　そんな事　親父は何も言って無かったぞ」
部下の一人が何かのスイッチを入れる
『ババババババー』
とＡＫＧ４８億ボルトの電流が流させる
『うわあああああ』
「ならば何故　お前の父は殺させたのだ、何故４８億ボルトもの電流を受けて
生きていられる？　スポーツ万能　そして４８億ボルトの
　電気エネルギーに耐える強靭な肉体お前こそシステムの適合者な

のだ
（と　言うか　よく適合したな（・・??）
「システムとは何のことだ?親父は　あれは事故じゃなかったのか?」
「ふふふふ、トモチ説明してやれ」
輝くほどの怪しい魅力を持った『アヒル口の女』が現れた
「おッお前の　そのアヒル口　見覚えあるぞ」
「ハーイお兄さんまたあったわね」
そう言って女性は錠を外した（ぶち切ったんじゃなかったのね。）
「殺そうとして　おいて今度助けるとは　一体どういうつもりだ?」
「殺すつもりで捕えたわけではないわ　レイドシステムの実験に適合する者を探してたのよ」
「レイド・システム?」
「あなたの義父(ちち)大島優輔が　開発した　不死生物ウォン・テッドを封印できる
唯一の武器　レイドシステムの被験者を・・」
トモチは『ニヤッ』と笑い　そのアヒル口が『ピカ』っと輝いた

??レイドシステム（後書き）

政府のコンピューターが予想した未来を避けるために開発させたレイド・システム　一方システムを破壊する為　フランケン・ウォン　テッドが本部（ぜくる）を襲撃する。

??終末（せいせん）の日の預言（前書き）

トモチは　アヒル口パワーで
終末（せいせん）の日を見せた。

??終末（せいせん）の日の預言

「あなたの義父（ちち）大島優輔が　開発した　不死生物ウォン・テッドを封印できる
唯一の武器　レイドシステムの被験者を・・」
トモチは『ニヤッ』と笑い　そのアヒル口が『ピカ』っと輝いた
その時海琉は３０年後の未来を見たのだった
〇近未来のアナマイト
そこはかつての　ゼクル本部そこには　トモチと海琉が率いるG（ぜが）の戦士たちが、無数のウォン・テッドと戦い続けていた
彼らは邪悪の神シス・フィールを中心に光の船「ゴーエスト」で人間たちとG（ぜが）の戦士達を『強魔の炎』で焼き尽くしていた
戦いの結末は見えなかったが　海琉（じぶん）を抱え泣き叫ぶ　トモチの姿がみえた
『かいるゥゥ・・救世主なんだ　お前はこの世界の、だから　死なないで・・」
〇戻る
「はっ　今のは　夢か」
「いや　未来だ　お前が　見たのは」
「あれが未来だと　すると俺は　死ぬのか」
「お前がどんな未来を見たのか知らない、だけど　お前は死ぬわけはない」
「途中は見えなかったが　俺を抱えて泣いているお前の姿は　はっきり見えたゼ」
「そんなはずはない　確かに死んだのか？」
「それが　はっきりとしないんだ　ただ　世界は　そのウォン・テッドとやらに
支配されているのは確かなようだ」
「はあっ」

トモチはアヒルパワーを全開させたすると海琉の腰に　ベルトが浮き上がってきた
「うひょー、これはなんだ?」
「マック・ストーンだ　その中央にあるソケットに　これを差し込め」
とメモリーカードを渡した。
「これはメモリーカードか?何か書いてあるぞ　なになにっ、ともちんのおールヌードだって」
「しまった間違えた　こっちだ」（そのメモリー差し込んだらどうなるんだ?）
と言って　Ｚのメモリーを渡すトモチだった

??レイド変身（前書き）

ゼクル本部を襲う　蟹ウォン・テッド
そして海琉は赤い鷲の戦士に変身を遂げる

??レイド変身

○機械政府軍『ゼクル』本部　前
近未来の自衛隊のような格好をした兵士たちが3～4人
基地の裏と表を警備していた
「あーあ警備も退屈だなあ、良太郎」
「そう言うなってもも太郎　これも仕事のうちさ」
そこに一枚のカードが飛んでくる
「こっこれは確か　伝説の美女　まゆゆのトレ―ディングカードだぜ」
「何っ　本当か良太郎それは　本当か？」
それを聞きつけた他の警備員達も駆け付け、まゆゆのカードを巡って争いを始めた。
「そのカードは　隊長の俺が預かる」
「そんなこと言って秋元隊長が一人占めするつもりなんでしょう」
「そうだ　そうだ」
「奥さんがいるくせに」
本部の前は一枚のカードを巡って戦場と化していた
そのときカードの女性の目が蒼く輝いた
『ブクブクブクブク』
立ちどころに泡となって消える警備員たち
そこには『蟹・ウォン・テッド』が不気味にたっていた
「ふっふっふっふっふ」
『リンリンりリンリンリリンリりン』（懐かしいぞ？）
緊急を知らせるベルが鳴る
同　中
「なっなんだ、今のベルは？」
「よっよっ　ヨウガだんちょお、ウォン・テッドが」
隊員の一人が血まみれで　入ってきた　その後ろから

ザリガニの怪人と蟹戦闘員の姿が
「ちっ　こんな時に　厄介なのが現れたか」
ミッションを一旦　中止にして戦闘態勢に移るトモチ
「キィー」
「おっおい　俺はどうしたらいいんだ？」
向ってくる戦闘員を払いながら聞く海琉
「さっきのメモリーを　ベルトに差し込むのよ」
「メモリって　ああ　この　《ヌードなんたら》ってやつか」
「違う　もう一つの『烈風』って書いている方よ」
アヒル銃を撃ちながら答えるトモチ
「あっこっちか　よっし　行くぞ　変身」
《霊度システムオン》
『ピッカーッ』
ベルトのマック・ストーンが　メモリーに反応し
海琉は赤き鷲の鎧を纏った戦士に変身していた
『ギアーァ』
と迫るザリガニ怪人に海琉は一撃を加えた
『ギヤーァ』
と数メートル吹っ飛ぶ　ザリガニウォン・テッド
「この力は　なんじゃこりゃーあ」
アヒル口のトモチは『ニヤ』っと笑い
「それが　ゼクルの装甲服　レイドの姿だよ」
と語ったのだった。

???レイド変身2（前書き）

レイド対蟹ウォン・テッドの戦い

???レイド変身2

機械政府軍『ゼクル』本部　前
突如本部を襲ってきた蟹ウォン・テッドとレードの戦いは続いていた
「レード、装着」
「しまった既に完成していたのか　ならば仕方ない　かかれぃ　『ヤマンバ軍団』
『ポイポイポー・イポー』
ヤマンバ・メイクに　オムツ姿と言う異様な連中が集団で向ってきた
「なんだよこいつら　変態か？」
「さあね　こんな連中はトモチのカンチョー・銃でお仕置きしちゃうぞ」
と　アヒル口を光らせながらいった
『スポーン、スポーン』
カンチョー銃がヤマンバ軍団のお尻に命中し黒い物体を垂れ流しながら倒れる軍団の一部
「おのれーこれを喰らえ、カニカミ@（ぼ）？（う）（言えて無いぞ？）
何処から取り出した　棒から出る『カミカミ光線』を受けカミまくるトモチと海琉
「こりゃｘｘｘｘぞ』
「おま@@@@@@@（なにいってん）だ？
「もう一度くられ（え）」
「ｘ@＊＊＊ｘ
レイドは　左のＡのボタンを押した
『グエーえ』
東の空から　アック・ドラゴンが現れた
「またせたなあや」
「トアー」

大きくジャンプするレード
「アック・シールド」
空中でバッカル・コーンのポーズをとり　キック
アックドラゴンが　マック・シール（光の帯）をレードに浴びせる
「おのれーカニ　バリアー」
泡をふきだし全身をガードする蟹ウォン・テッド
泡がレードを襲う　それをぶち抜きながら迫るレード
「おりゃー」
「ウをおおお　来るな―　来るなぁ」
「ドカーン」
大爆発が起こる
一方トモチのアヒル口光線を受けて　全員アヒル口に変わり、ヤマンバ軍団は　一人残らず
『ギェエエ　こんなアヒル口信じられない』
叫び　消えて行った（確かにヤマンバ　メイクに　アヒル口は不気味かも？）
「やったぜぇ」
と叫んだところで　変身が解除され　倒れそうになったところをトモチが支える
「チッ襲撃失敗か　しかし　皇帝陛下の　言うとおりだった」
と不気味に笑う　ヨウガ団長であった

？？記憶の旅（前書き）

海琉の記憶は終末（せいせん）の日に戻る

??記憶の旅

「今のうちに逃げるよ海琉」
マシンは海琉とトモチを乗せると空高く舞いあがったのだった

??に戻る
○飛行船(ましん)アルテミスの中
「はっ　今には夢か？」
「どうしたのなんか変な夢見た」
アルテミスを操縦しながらトモチは　聞いた
「ああ、昔のな」
（あの後ゼクルは解散に追い込まれ　俺たちは多くの同志を失った
首謀者は　姿を消した　ヨウガ団長だった）
「海琉何考えている　海琉　カイル・・・」
《再び俺の意識は　あの終末（終末日へ　戻された》
（２０）終末(せいせん)の日の真実
○アナマイト鉱山
『ズバーン』
光の物体がトモチに向って　放たれた　それをかばった俺は重傷を
負ったのだった
『うわああ』
光は俺の体を貫いた
「こっここは？」
「こんな時に何入ってる・・・かいるゥゥ・・救世主なんだ
お前はこの世界でただ一人の、だから　死ぬなぁ・・死なないで・・
」
《そうだった　解散以後　散り々になっていた　俺たちはアナマイ
ト鉱山跡で秘かに
仲間を集めていた　しかしウォン・テッドは大軍団を持って攻撃を

仕掛けてきた
俺たちは科学者だった　立花（せんせい）が複製した　レイド・システムで
　ウォン・テッドは大軍団を迎え撃った　しかし　『魔王』のベルトで
キング・ウォン・テッドとなった　ヨウガ団長の妹　カオルが真の首謀者であった
そして　トモチを庇った　俺は　お腹を貫かれ　倒れたのだった》
「G（ぜが）の戦士トモチよ　お前がまさか　同族であったとはな、しかしそれもこれまでだ
二人仲良くあの世に行くがよい」
『グアー』
キング・ウォン・テッドは　3つの口から　『嫉妬』『嫌がらせ』『意地悪』
謎と言う『邪悪な炎』をトモチに向って放った
トモチは　アヒル・バトンで円を描いた
『アヒル口・ウォール』（官能バリア）
『ババババババァ』
海琉と自分を包む
「ふふふふ、そんな元　キングには通用しない、行けっ炎よ
目の前にいる全ての者を焼き尽くせ」
炎はバリや―を突き破り、二人は2、3メートル吹き飛ばされた
『ドカーン・ズバーン』
「うわーっ」
「ふっふっふっふっふっふ、残念だったなトモチ　これで最後だ」
2人は無数のウォン・テッドに囲まれていた
「・・トモ・・チ　お前は・・逃げろ」
ヨロヨロっと立ち上がった海琉
「・・フッ　それはごめんさ　《イモチク・アルチョン　イヒチカワウト》（解るかなぁ？）」
謎の呪文を唱えると　トモチの　アヒル口が『ピッカ』っと輝き

その姿を　『アヒル・ウォン・テッドに変えて行った
「トモチおまえ　何をするつもりだ」
「海琉僕の力　お前にやる　だからこの世界を守って・・・」
そう言うと桃色の光となって海琉の体内に入って行った　そしてウォン・テッドの
本体が離れたトモチは死んだように倒れた
『ビカーッ』
『うわあああ』
強烈な　マックストーンの光が輝き、鷲とアヒルが融合した戦士が現れた　そして
その光を受けた　ウォン・テッド達は　１０分の一にまで減った
「あれがパフェクト・レイドか？」
『ウルルルルル』
半身を失った　キングと　他のウォン・テッド達が吠える
「どけっ！！俺とトモチが通る道だっ」
トモチの体を抱えてそう言い放つ
ウォン・テッドたちは通路を開けて行った
・・・その時〔Ｍａｙｅ―Ｍａｙｅ〕と言うメロディが
聞こえてきたのだったいたのだった。

??　天から落ちた巨人（ママルの夢）（前書き）

ピンク鯨のママルは海の楽園と謳われた
マンモォランドを抜け出し一人旅に出た、。

??　天から落ちた巨人（ママルの夢）

（２１）ママルの冒険
○マンモォランド
不思議界の南と西の大陸の中央には、海神マイトが作った全ての動物達の楽園
マンモォランドがありました、そこには
マンモスを初めキリン、ライオン、オトッセイなどの
数千万匹の動物達が平和に暮らしていた
でも完全ではなく集団生活には神々の目の届かないところでイジメなども頻繁にあった
「おーい、みんなこいつピンク色のくせに、俺達と同じ棘クジラ族（普通青い）だってさ笑っちゃうね」
と大きな声で棘クジラ族のコクショーが、からかった
「・・でもおいら、生まれつきこの色だまる」
とママルは抗議したがイジメや悪戯は
一向に無くならなかったので
仕方なくママルは
北の海ルイザナ湖を目指して脱走することにしたのだった
○亜都蘭湖
翌日　海長のポセイドノンに
「ちょっと隣の島に遊びに行って来る　まる」
と嘘を言ってマンモォランドを出た
「この先にはどんな危険が待ちうけているか
分からない　でまる、おいらは７つの海を行く冒険者になる　でまる」
（海賊おうになるってか？）
と、ママルは大変な大冒険に出たような気分だった
確かにこの不思議界にはこれまで『三度』ほど大きな戦いがありま

した
しかし現在は平和そのものだったのでした
（小さな小競り合いはありますが）
ママルは亜都蘭湖（あとらんこ）を『ビュンビュン』
と泳ぎながら「つまんない　まる、海族も何も出ない　まる」
と愚痴っていた
するとそこにカモメの集団が飛んでいくのが見えた
その内の1羽が近づいてきて
「ヨーヨー、あんたはん、そんなに急いでどこ行くオマス」
と話しかけてきた
「何処だっていいだ　まる、あっちへいけだまる」
「そう邪慳にせずにおれっちの話を聞いて
そんはないでオマス」
「分かったまる、そんなに話したいならかってに話せば良いでまる」
と言うことでママルはこのカモメの話を聞く事にした
「申しおくれやしたが、おれっちはこの界隈じゃあ　ちっとは名の
知れたカモメのプーナ
言うオマス、何？知らない　あっそう　でもこの話は聞いてそんは
ないオマス
昔おれっちがエンドラの海を渡っていた頃の事、
母の故郷の『大島』に『マイマイ』と言う精霊族の女の子がいたで
オマス
ある時その子は一族だけに伝わる
不思議な話をしてくれたオマス、その一つに
『天から落ちた巨人たち』の伝説が在ったでオマス」
とプーナは続けざまにまくし立てたのだった
ママルは「その話、面白いマルか？」
と尋ねたのだった。

??ネット・ウーちゃん（前書き）

ママル達は海の美術館で　可笑しな館長に出会う。

??ネット・ウーちゃん

〇亜都蘭（ルピア海）湖
ママルとプーナの二人は口喧嘩しながらも
仲良くルイザナ湖に向って順調に進んでいた
すると目の前には真っ白な宮殿のような物が2つ見えてきました
一つはルピア学会でしたがもう一つの建物は、ママルには見覚えが在りませんでした
「プーナ　あれは何の建物だまる」
「あぁあれは昨年マントリウス（像の芸術家）によって作られたデモシー・ランドと言う美術館さ、ママルはしらなかたオマスか」
「うん、この前この辺に来た時にはあんなのは無かったでまるから　ぜひ見学したい　まる」
「なーるほど　じゃー入ろうぜ、相棒さん」
ママルとプーナはその白銀の建物の中に入って行きました。
その中にはオルディナスの像を初め、古い美術品がたくさん展示られており
目を奪われるような貴重な品ばかりだった、そしてママルのように海に住む人たちでも
見学出来るような作りが魅力的であったの
「うわーぁトーさん巨人だよスッゴイな」
と一組デコチン族（おでこが大きいコバンザメ）の親子の会話が耳に入ってきた
見ると多くの人たちがその巨人の周りに集まっていた
「あの人盛りは何だまる」
「さあな」
「プーナも知らないマルか？」
「そうじゃなくておれっちは美術館なんてのは興味なかったでオマス」

と言うと様子を見にいったのでした
しばらくするとプーナが
「今時アルマンデイヨの巨人とはまた珍しいこって？」
と言いながら戻ってきた
「へェー巨人がいるの？」
ママルがそう尋ねた時
「いやっあれは本物の巨人ではないダビ　何者かが作ったからくり人形ダビ」
と言って一人のコオロギの紳士が現れた
「へっ？でも本物だってアナウンスしてたでオマスよ」
「だから偽者が本物なんだダビ」
二人はこのコオロギの話しに不信を抱いたのだった
「彼方は？」
その時そのコオロギの紳士は
「これは申し送れたダビわしはネットウーちゃんと言ってここの館長をしているダビ」
と名のった
「　そもそもアルマンデイヨの巨人は実はロボットだったダビ」
「エッ、それっどういうことまる？」
「ギガンデスの巨人はたしかに存在するダス、でもアルマンデイヨと呼ばれる巨人達は皆作りものだダビ？」
とウーちゃんはそういった
「だっ誰のでオマス」
と二人はウーちゃんに聞き返すと
「多分ノーン・ボア博士が作ったアンドロ・ボーグ（人造人間）ダビさ」
と語ったのだった
「えっ、ノーン・ボアって数年前
ルピア学会を追放されたという超天才でまるか」
「でも確か巨人は7千年以上前のものと書いてなかったオマスか？」

「それは当然ダビ、博士が巨人（ロボット）を使って天の国を襲ったのは今から2千万年の大昔ダビ」
「それはどういう事だまる」
ママルの質問にネットウーちゃんは
「つまりタイムマシンで時を越えたでダビ、自分を追放した阿呆どもにわからせてやる
とか言ってダビ」と答えた
そして館長は「それが第一次魔空戦争のはじまりだったダビ」
と衝撃の事実を話してくれたのでした。

??ネット・ウーちゃん（後書き）

学会を追放させた　ノ―ン・ボア博士は『タイム・アーマーＡＫＢ』によって紀元前４千年の彼方に飛んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7039t/

不思議界記伝☆mao～デルクラル物語～

2011年10月12日11時55分発行